芳賀団地遺跡群 第4巻

芳賀西部団地遺跡

1991. 3

前橋市教育委員会

序

群馬県前橋市は北に名峰赤城山、西に坂東太郎と称される利根川を望む水と緑に恵まれた都市であります。赤城山の南麓に拓けた本市は、全国的に日照時間が長いことでも知られ、豊かな自然とあいまって２万年以上前の旧石器時代から人々が営々と歴史を刻んできた歴史豊かな街でもあります。

前橋市の地形は大きく三つに分けることができ、それぞれの地区に特有の歴史が刻まれております。南部に広がる前橋台地には主に古墳時代以降の遺跡が確認され、特に古墳時代から平安時代に至るまでの水田跡が広範囲にわたり分布されています。市の中央部には旧利根川河床である幅約４kmの広瀬川低地帯が北西部から南東部にかけて帯状に認められ、古代遺跡の比較的少ない地域となっております。しかし最近の調査から河床内の低台地には、古墳・奈良・平安時代の遺跡が分布していることもわかってきました。本市の三分の一以上の面積を占める赤城火山斜面は、植生、地形の複雑さから２万年以上も前の旧石器時代から縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代と連続的に人々が住んでいた地区として知られ、古代遺跡の宝庫と言われているところであります。芳賀団地遺跡群は、まさにその中央部に位置しており、昭和48年度から８年の歳月を要し明らかにされた遺跡群であります。芳賀北部・芳賀西部・芳賀東部の順で調査され、市の歴史を変えるほどの膨大な遺構と遺跡が発見されました。

緩やかな斜面に造られた住宅団地には現在次々と新しい家が建ち並び人々が新しい生活を始めております。千数百年前の人々の歴史遺産は新しい歴史を造るために失われてしまいましたが、発掘調査報告書という形で残されることになりました。発掘調査報告書の作成は昭和56年度より開始され、10年目を迎えた昨年度までに東部団地遺跡分３巻を刊行いたしました。

今回各方面の方々の御協力により刊行の運びとなりました第４巻は、現在芳賀西部工業団地となっている部分の発掘調査の成果をまとめたものです。整理報告書作成のための作業は、これからも続きますが、かくも長き年月にわたり間断なく続けてこられましたのも、ひとえに関係各方面の方々の御支援、御尽力のたまものと感謝いたしております。

本報告書が地城の歴史を解明する一助となり、考古学の発展に少しでも寄与できれば幸いと存じます。

平成３年３月31日

前橋市教育委員会

教育長　岡　本　信　正

例　　言

1．本書は、前橋工業団地造成組合による、工業及び住宅団地の造成に伴い事前調査された、前橋市嶺町・勝沢町・小坂子町・鳥取町・小神明町・五代町の計約40haに及ぶ、芳賀団地遺跡の発掘調査報告書第４巻である。
2．芳賀団地遺跡群は、北部団地遺跡（嶺・勝沢・小坂子。昭和48・49年度調査。約3.6ha。）、西部団地遺跡（鳥取・小神明・五代町。昭和50年度調査。約2.5ha。）、東部団地遺跡（鳥取・小坂子・五代町。昭和51～55年度調査。32.78ha）の３遺跡から成り立つ。
3．調査の実施は、前橋工業団地造成組合の委託を受けて、芳賀団地造成地内埋蔵文化財発掘調査団が行なった。
4．芳賀団地遺跡群の報告書は全５巻を予定しており、その内訳は、東部団地遺跡３巻（既刊）、西部団地遺跡１巻（本巻）、北部団地遺跡１巻で、記述の順に刊行を予定している。
5．芳賀西部団地遺跡は、藤沢川右岸で、西の小河川とで形成する谷地にはさまれた南北に長い台地の北端にあたる。位置・周辺の遺跡については別項参照。
6．調査の組織及び調査担当者、調査員については第１巻参照。
7．本書の作成に係る整理作業は、井野誠一（担当者）、綿貫綾子（調査員）が中心となって行なった。
8．本書に係る整理作業は平成元年度から実施している。
9．芳賀団地遺跡群の整理作業では、昭和58年度から発掘調査に直接携わった者を中心に作成委員会を組織し、報告書の整理・刊行のための組織化を計った。さらに芳賀西部団地遺跡の整理作業のはじまった平成元年度に作成委員会の改組を実施した。本書の編集・刊行は改組後の作成委員会・編集委員会によるものである。

〔平成元年度組織〕

作成委員会

委員長	二瓶益巳（教育委員会管理部長）	副委員長	福田紀雄（教育委員会文化財保護課長）
顧問	岡本信正（教育長）	顧問	小野塚智勇（教育委員会指導部長）
委員	松島栄治（県立前橋第二高等学校教諭）	委員	松本浩一（県埋蔵文化財調査センター所長）
委員	相澤貞順（前橋市立女子高等学校教諭）	委員	川合　功（利根教育事務所学校教育課指導主事）
委員	中村富夫（月夜野町立月夜野中学校教諭）	委員	石川克博（前橋市立箱田中学校教諭）
委員	富沢敏弘（北橘村教委文化財保護係長）	委員	飯塚　誠（県埋蔵文化財調査センター指導主事）
委員	田口正美（県埋蔵文化財調査センター指導主事）		
事務局長	福田紀雄（文化財保護課長）	事務局次長	浜田博一（埋蔵文化財係長）
事務局員	遠藤和夫（埋蔵文化財係）	事務局員	前原　豊（埋蔵文化財係）
事務局員	新保一美（埋蔵文化財係）	事務局員	井野誠一（埋蔵文化財係）（担当）

編集委員会（作成委員会のもとで作成実務を担当する）

委員長	松島栄治（前出）	委員	松本浩一（前出）
委員	相澤貞順（前出）	委員	川合　功（前出）
委員	中村富夫（前出）	委員	石川克博（前出）
委員	富沢敏弘（前出）	委員	飯塚　誠（前出）
委員	田口正美（前出）		

事務局（作成委員会事務局が兼ねる）

〔平成２年度組織〕（平成元年度末の人事移動により下記組織となった）

委員長	遠藤次也（教育委員会管理部長）	副委員長	福田紀雄（教育委員会文化財保護課長）
顧問	岡本信正（教育長）	顧問	竹　茂夫（教育委員会指導部長）
委員	松島栄治（県立前橋第二高等学校教諭）	委員	松本浩一（県埋蔵文化財調査センター所長）
委員	相澤貞順（前橋市立女子高等学校教諭）	委員	川合　功（利根教育事務所学校教育課指導主事）
委員	中村富夫（月夜野町立月夜野中学校教諭）	委員	石川克博（前橋市立勝山小学校教諭）
委員	浜田博一（前橋市立箱田中学校教諭）	委員	富沢敏弘（北橘村立北橘中学校教諭）
委員	飯塚　誠（県埋蔵文化財調査センター指導主事）		

委員　田口正美（県埋蔵文化財調査センター指導主事）

事務局長　福田紀雄（文化財保護課長）　事務局次長　遠藤和夫（埋蔵文化財係長）

事務局員　前原　豊（埋蔵文化財係）　事務局員　新保一美（埋蔵文化財係）

事務局員　井野誠一（埋蔵文化財係）（担当）

編集委員会

委員長　松島栄治（前出）　委員　松本浩一（前出）

委員　相澤貞順（前出）　委員　川合　功（前出）

委員　中村富夫（前出）　委員　石川克博（前出）

委員　浜田博一（前出）　委員　富沢敏弘（前出）

委員　飯塚　誠（前出）　委員　田口正美（前出）

事務局　（作成委員会事務局が兼ねる）

9．本書の編集は上記編集委員による。事務局側の編集は井野誠一（担当）が行なった。執筆は編集委員で分担した。執筆分担は以下の通り。

本文　遺構　井野　遺物（縄文）前原（土師器）田口（埴輪）飯塚（中近世）大西雅広（県埋蔵文化財調査事業団）

考察　遺構（縄文）井野（古墳）飯塚

遺物（縄文）前原（土師器）田口（埴輪）飯塚

遺跡の考察　相澤

石材鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会員）の手をわずらわせた

なお石材種名は「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材」中束耕志・飯島静男

群馬県立歴史博物館年報〔5号〕1984．11．1による。

10．本書を作成するにあたり、遺物・図面整理・図版作成等に対し、下記の方々の手をわずらわした。記して感謝の意を表するものである。

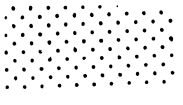
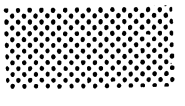
綿貫綾子(調査員)、粟岡エミ子、竹内敏江、大塚美智子、神保千代子、松田富美子、塚越則子、戸丸澄江、鬼塚成子、渡辺良子、須田陽子、阿藤孝子、飯島勝亥、柴崎まさ子、岩田年代、小林美香代、生形かほる、大沢まさ江、須田みずほ、大田一郎、住谷文彦、岸フクエ、岩木操、湯浅道子、湯浅たま江、落合高男、小島勝雄、石関秀男、石倉操、船津明美、岩田敏子、赤城美代子、佐野貴恵子、石倉武雄、品川弘美、長岡徳治、鈴木民江、茂木順、阿部シゲ子

11．関係図面及び出土遺物の整理、保管は、前橋市教育委員会文化財保護課で行なっている。

凡　　例

1．本書における遺構記号は次のように表わす。（　）は略称
　Ｊ……縄文土器を伴う遺構
　　例　Ｊ－１号住居跡（Ｊ－１）、Ｊ－１号土坑（ＪＰ－１）、ＪＳ－１号配石（ＪＳ－１）
　Ｍ……古墳　　例　Ｍ－１号古墳（Ｍ－１）
　Ａ……地下式土坑を主とする遺構群　　例　遺構１（Ａ－１）
　Ｗ……溝跡　　例　Ｗ－１号溝跡（Ｗ－１）
　Ｓ……集石　　例　Ｓ－１号集石跡（Ｓ－１）
　Ｉ……井戸跡　　例　Ｉ－１号井戸跡（Ｉ－１）
2．遺構挿図中のセクション・エレベーションの基準線標高は、基準線上の数値である。
3．本書における遺構の実測図は、墳丘平面図1/200、墳丘断面図1/100、竪穴住居跡1/60、土坑・配石遺構1/60、地下式土坑1/60、全体図1/800に統一した。
4．本書で使用している竪穴住居跡・古墳の部位名称は第１～３巻に準じる。
　スクリーントーン及び記号は、以下の内容を示している。

埴輪 ■　　土器 ●　　土器 ▲

礫床  　　焼土 

5．遺構の主軸は、座標北で表示した。
6．遺物の実測図は、埴輪で完成度の高いもの、あるいは遺存度の良好なものは1/5、その他は1/4で表示した。縄文土器は遺存度の高いものは1/4、その他及び坏、甕類は1/3、金環2/3、鉄製品1/2、鉄刀は1/5とし、例外にあたるものは縮尺スケールを附加した。
7．遺物番号は、各遺物別に表示し、出土遺物観察表にみる番号欄は通し番号とした。
8．遺構の記述は第３巻に準じる。用語・表記は事務局の責任で本書として統一をはかった。
9．ピット番号は原則として、北東隅をP_1として反時計回りに番号をつけている。
10．遺物の記述は、観察表にまとめてある。
11．遺物写真中の遺物番号は遺物挿図の番号と対応している。
12．遺構は、遺構番号順に掲載してあるが、重複している場合には若い遺構番号で扱っている。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
　本文目次
　挿図目次
　表　目　次
　図版目次
Ⅰ　調　査　の　経　過…… 1
Ⅱ　整　理　の　経　過…… 1
Ⅲ　遺跡の立地と環境…… 2
Ⅳ　基　本　層　序…… 3
Ⅴ　検出された遺構と遺物…… 3
Ⅵ　考　　察 ……261

挿 図 目 次

図— 1 遺跡の位置と周辺の遺跡…… 2
図— 2 地層柱状図…… 3
図— 3 M— 1 号古墳平・断面図…… 4
図— 4 M— 1 号古墳出土遺物実測図(1)…… 5
図— 5 M— 1 号古墳出土遺物実測図(2)…… 6
図— 6 M— 2 号古墳石室実測図…… 7
図— 7 M— 2 号古墳出土遺物実測図…… 7
図— 8 M— 3 号古墳平・断面図…… 8
図— 9 M— 3 号古墳出土遺物実測図…… 8
図— 10 M— 4 号古墳平・断面図…… 9
図— 11 M— 4 号古墳出土遺物実測図(1)……10
図— 12 M— 4 号古墳出土遺物実測図(2)……11
図— 13 M— 4 号古墳出土遺物実測図(3)……12
図— 14 M— 5 号古墳平・断面図……12
図— 15 M— 5 号古墳出土遺物実測図(1)……12
図— 16 M— 5 号古墳出土遺物実測図(2)……13
図— 17 M— 6 号古墳平・断面図……14
図— 18 M— 6 号古墳出土遺物実測図(1)……15
図— 19 M— 6 号古墳出土遺物実測図(2)……16
図— 20 M— 6 号古墳出土遺物実測図(3)……17
図— 21 M— 6 号古墳出土遺物実測図(4)……18
図— 22 M— 6 号古墳出土遺物実測図(5)……19
図— 23 M— 6 号古墳出土遺物実測図(6)……20
図— 24 M— 6 号古墳出土遺物実測図(7)……21
図— 25 M— 6 号古墳出土遺物実測図(8)……22
図— 26 M— 7 号古墳平・断面図……23
図— 27 M— 7 号古墳出土遺物実測図(1)……24
図— 28 M— 7 号古墳出土遺物実測図(2)……25
図— 29 M— 7 号古墳出土遺物実測図(3)……26
図— 30 M— 8 号古墳平・断面図……27
図— 31 M— 8 号古墳出土遺物実測図(1)……28
図— 32 M— 8 号古墳出土遺物実測図(2)……29
図— 33 M— 9 号古墳平・断面図……30
図— 34 M— 9 号古墳出土遺物実測図……31
図— 35 M—10号古墳平・断面図……32
図— 36 M—10号古墳出土遺物実測図(1)……33
図— 37 M—10号古墳出土遺物実測図(2)……34
図— 38 M—10号古墳出土遺物実測図(3)……35
図— 39 M—11号古墳平・断面図……36
図— 40 M—11号古墳出土遺物実測図……36
図— 41 M—12号古墳平・断面図……37
図— 42 M—12号古墳出土遺物実測図(1)……38
図— 43 M—12号古墳出土遺物実測図(2)……39
図— 44 M—12号古墳出土遺物実測図(3)……40
図— 45 M—12号古墳出土遺物実測図(4)……41
図— 46 M—13号古墳平・断面図……41
図— 47 M—13号古墳出土遺物実測図(1)……42
図— 48 M—13号古墳出土遺物実測図(2)……43
図— 49 M—14号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)……44
図— 50 M—14号古墳出土遺物実測図……45
図— 51 M—15号古墳平・断面図……46
図— 52 M—15号古墳出土遺物実測図(1)……47
図— 53 M—15号古墳出土遺物実測図(2)……48
図— 54 M—15号古墳出土遺物実測図(3)……49
図— 55 M—15号古墳出土遺物実測図(4)……50
図— 56 M—15号古墳出土遺物実測図(5)……51
図— 57 M—15号古墳出土遺物実測図(6)……52
図— 58 M—15号古墳出土遺物実測図(7)……53
図— 59 M—16号古墳平・断面図……54
図— 60 M—16号古墳出土遺物実測図……55
図— 61 M—17号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)……56
図— 62 M—17号古墳出土遺物実測図(2)……57
図— 63 M—18号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)……58
図— 64 M—18号古墳出土遺物実測図(2)……59
図— 65 M—19号古墳平・断面図……60
図— 66 M—19号古墳出土遺物実測図……61
図— 67 M—20号古墳平・断面図　出土遺物実測図……62
図— 68 M—20号古墳出土遺物実測図……63
図— 69 M—21号古墳平・断面図……64
図— 70 M—21号古墳出土遺物実測図(1)……65
図— 71 M—21号古墳出土遺物実測図(2)……66
図— 72 M—22号古墳平・断面図　埴輪棺出土状態実測図…67
図— 73 M—22号古墳出土遺物実測図……68
図— 74 M—23号古墳平・断面図……69
図— 75 M—23号古墳出土遺物実測図……78
図— 76 M—24号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)……71
図— 77 M—24号古墳出土遺物実測図(2)……72
図— 78 M—25号古墳平・断面図　出土遺物実測図……73
図— 79 M—26号古墳平・断面図……74
図— 80 M—26号古墳出土遺物実測図(1)……75
図— 81 M—26号古墳出土遺物実測図(2)……76
図— 82 M—27号古墳平・断面図……76
図— 83 M—27号古墳出土遺物実測図(1)……77
図— 84 M—27号古墳出土遺物実測図(2)……78
図— 85 M—27号古墳出土遺物実測図(3)……79
図— 86 M—28号古墳平・断面図……79
図— 87 M—28号古墳出土遺物実測図(1)……80
図— 88 M—28号古墳出土遺物実測図(2)……81
図— 89 M—29号古墳平・断面図……82
図— 90 M—29号古墳出土遺物実測図(1)……83
図— 91 M—29号古墳出土遺物実測図(2)……84
図— 92 M—29号古墳出土遺物実測図(3)……85
図— 93 M—30号古墳石室実測図……85
図— 94 A— 1 号遺構平・断面図……85
図— 95 A— 2 号遺構平・断面図……87
図— 96 A— 3 号遺構平・断面図……87
図— 97 A— 4 号遺構平・断面図……88
図— 98 A— 5 号遺構平・断面図……87
図— 99 A— 6 ・28号遺構平・断面図……90
図—100 A— 7 号遺構平・断面図……90

図－101　A－8号遺構平・断面図……91
図－102　A－9号遺構平・断面図……91
図－103　A－10号遺構平・断面図……91
図－104　A－11号遺構平・断面図……92
図－105　A－12号遺構平・断面図……92
図－106　A－13号遺構平・断面図……93
図－107　A－14号遺構平・断面図……93
図－108　A－15号遺構平・断面図……93
図－109　A－16号遺構平・断面図……94
図－110　A－17号遺構平・断面図……94
図－111　A－20号遺構平・断面図……94
図－112　A－21・22号遺構平・断面図……95
図－113　A－23号遺構平・断面図……96
図－114　A－24号遺構平・断面図……96
図－115　A－25号遺構平・断面図……96
図－116　A－26号遺構平・断面図……97
図－117　A－27号遺構平・断面図……97
図－118　MP－1号ピット平・断面図……97
図－119　A群遺構出土出土遺物実測図(1)……99
図－120　A群遺構出土遺物実測図(2)……100
図－121　A群遺構出土遺物実測図(3)……101
図－122　A群遺構出土遺物実測図(4)……102
図－123　J－1～6号井戸跡平・断面図……103
図－124　J－1号住居跡平・断面図……105
図－125　J－1号住居跡出土土器・石器……106
図－126　J－2号住居跡平・断面図……107
図－127　J－2号住居跡出土土器(1)……108
図－128　J－2号住居跡出土土器(2)……109
図－129　J－2号住居跡出土土器(3)……110
図－130　J－2号住居跡出土土器(4)……111
図－131　J－2号住居跡出土土器(5)……112
図－132　J－2号住居跡出土土器(6)……113
図－133　J－2号住居跡出土石器(1)……144
図－134　J－2号住居跡出土石器(2)……115
図－135　J－3号住居跡平・断面図……116
図－136　J－3号住居跡出土土器(1)……116
図－137　J－3号住居跡出土土器(2)……117
図－138　J－3号住居跡出土土器(3)……118
図－139　J－3号住居跡出土土器(4)……119
図－140　J－3号住居跡出土土器(5)……120
図－141　J－3号住居跡出土土器(6)……121
図－142　J－3号住居跡出土土器(7)……122
図－143　J－3号住居跡出土土器(8)……123
図－144　J－3号住居跡出土石器(1)……123
図－145　J－3号住居跡出土石器(2)……124
図－146　J－3号住居跡出土石器(3)……125
図－147　J－4号住居跡平・断面図……126
図－148　J－4号住居跡出土土器(1)……127
図－149　J－4号住居跡出土土器(2)……128
図－150　J－4号住居跡出土土器(3)……129
図－151　J－4号住居跡出土土器(4)……130
図－152　J－4号住居跡出土土器(5)……131
図－153　J－4号住居跡出土石器……132
図－154　J－5号住居跡平・断面図……133
図－155　J－5号住居跡出土土器・石器……134
図－156　J－6号住居跡平・断面図……135
図－157　J－6号住居跡出土土器(1)……136
図－158　J－6号住居跡出土土器(2)……137
図－159　J－6号住居跡出土石器(1)……137
図－160　J－6号住居跡出土石器(2)……138
図－161　J－7号住居跡平・断面図……139
図－162　J－7号住居跡出土土器……140
図－163　J－7号住居跡出土石器……141
図－164　S－1・2集石平・断面図……141
図－165　JP－1～8号土坑平・断面図……142
図－166　JP 土坑出土土器(1)……144
図－167　JP 土坑出土土器(2)……145
図－168　JP 土坑出土土器(3)……146
図－169　JP 土坑出土土器(4)・石器……147
図－170　グリッド出土土器(1)……149
図－171　グリッド出土土器(2)……150
図－172　グリッド出土土器(3)……151
図－173　グリッド出土土器(4)……152
図－174　グリッド出土土器(5)……153
図－175　グリッド出土土器(6)……154
図－176　グリッド出土石器(1)……154
図－177　グリッド出土石器(2)……155
図－178　グリッド出土石器(3)……156
図－179　グリッド出土石器(4)……157
図－180　グリッド出土石器(5)……158
図－181　グリッド出土石器(6)……159
図－182　グリッド出土石器(7)……160
図－183　グリッド出土石器(8)……161
図－184　グリッド出土石器(9)……162
図－185　グリッド出土石器(10)……163
図－186　グリッド出土石器(11)……164
図－187　グリッド出土石器(12)……165
図－188　グリッド出土石器(13)……166
図－189　グリッド出土石器(14)……167
図－190　グリッド出土石器(15)……168
図－191　円筒埴輪部位名称基準図……169

遺構図版目次

図版－ 1　Ｍ１号古墳（南西より）
同（南西より）
図版－ 2　Ｍ１号古墳（南西より）
同（土層断面）
図版－ 3　Ｍ１号古墳（遺物出土状態）
Ｍ２号古墳（石室・南東より）
図版－ 4　Ｍ２号古墳（石室・南西より）
同（遺物出土状態）
図版－ 5　Ｍ３号古墳（北より）
同（西より）
図版－ 6　Ｍ３号古墳（土層断面）
Ｍ２号古墳（南より）
図版－ 7　Ｍ４号古墳（南より）
同（土層断面）
図版－ 8　Ｍ４号古墳（遺物出土状態）
Ｍ６号古墳（西より）
図版－ 9　Ｍ６号古墳（西より）
同（石室）
図版－10　Ｍ７号古墳（東より）
同（石室）
図版－11　Ｍ８号古墳（東より）
同（土層断面）
図版－12　Ｍ９号古墳（北東より）
同（土層断面）
図版－13　Ｍ９・10号古墳（東より）
M10号古墳（東より）
図版－14　M11号古墳（Ｉ１号井戸跡　北より）
M12号古墳（南西より）
図版－15　M13号古墳（西より）
同（石室、北より）
図版－16　M13・14・15号古墳（北西より）
M15・16・17・18・19・20号古墳（西より）
図版－17　M13・14号古墳（東より）
M15号古墳（西より）
図版－18　M15号古墳（土層断面）
同（遺物出土状態）
図版－19　M16号古墳（北より）
同（東より）
図版－20　M17号古墳（北より）
M18号古墳（南西より）
図版－21　M18号古墳（土層断面）
同（遺物出土状態）
図版－22　M19号墳（南より）
M18・20号墳（Ｗ３号溝・西より）
図版－23　M20号墳（東より）
同（北より）
図版－24　M18・20号古墳（西より）
M21号古墳（西より）
図版－25　M21号古墳（遺物出土状態）
M22号古墳（西より）
図版－26　M22号古墳（遺物出土状態）
M23号古墳（西より）
図版－27　M21・24・26・29号古墳（西より）
M24号古墳（西より）
図版－28　M26号古墳（西より）
同（土層断面）
図版－29　M27号古墳（南より）
同（西より）
図版－30　M27号古墳（土層断面）
M23・25・27号古墳（西より）
図版－31　M28号古墳（南より）
M29号古墳
図版－32　M30号古墳（石室・南西より）
同（石室・根石列・北より）
図版－33　Ａ１　遺構（南より）
Ａ２　遺構（北より）
図版－34　Ａ４・１遺構（西より）
Ａ４遺構（西より）
図版－35　Ａ５遺構（南より）
Ａ６・28遺構（西より）
図版－36　Ａ７遺構（西より）
Ａ８遺構（南より）
図版－37　Ａ９遺構（西より）
A10遺構（北西より）
図版－38　A12遺構（東より）
A13遺構（南より）
図版－39　A14遺構（南西より）
A15遺構（東より）
図版－40　A16遺構（東より）
A21・22遺構（南より）
図版－41　A22遺構
A23遺構（南より）
図版－42　A27遺構（東より）
ＡＰ１土坑
図版－43　Ｉ４号井戸跡
Ｊ１号住居跡（南東より）
図版－44　Ｊ号住居跡（南より）
同（遺物出土状態・西より）
図版－45　Ｊ３号住居跡（南より）
Ｊ４号住居跡（東より）
図版－46　Ｊ５号住居跡（南より）
Ｊ６号住居跡（東より）
図版－47　Ｊ７号住居跡（南東より）
同（土層断面・東西より）
図版－48　ＪＰ１号土坑
ＪＰ２号土坑
図版－49　ＪＰ３号土坑
ＪＰ６号土坑
図版－50　ＭＰ１号土坑

遺物図版目次

図版—51　M４・６号古墳出土埴輪
図版—52　M６号古墳出土埴輪
図版—53　M６・10号古墳出土埴輪
図版—54　M10・12・15号古墳出土埴輪
図版—55　M15号古墳出土埴輪
図版—56　M15・17・18・21・22号古墳出土埴輪
図版—57　M６・23号古墳出土形象埴輪
図版—58　M１・８・10・17・21・22・24・25・27号古墳出土土器
図版—59　M１・10・15・21・28・29号古墳出土土器
図版—60　M４・10・15・17・21号古墳　A14号遺構出土土器
図版—61　Ｊ２号住居跡出土土器
図版—62　Ｊ１号住居跡出土土器
　　Ｊ２号住居跡出土土器
図版—63　Ｊ２号住居跡出土土器
図版—64　Ｊ２号住居跡出土土器
図版—65　Ｊ２・３号住居跡出土土器
図版—66　Ｊ３号住居跡出土土器
図版—67　Ｊ３号住居跡出土土器
図版—68　Ｊ３号住居跡出土土器
図版—69　Ｊ３号住居跡出土土器
図版—70　Ｊ４号住居跡出土土器
図版—71　Ｊ４号住居跡出土土器
図版—72　Ｊ４号住居跡出土土器
図版—73　Ｊ４号住居跡出土土器
　　Ｊ５号（上３列）・６号住居跡出土土器
図版—74　Ｊ６号住居跡・ＪＰ１・３号ＭＰ１号土坑出土土器
図版—75　Ｊ６号住居跡出土土器
　　Ｊ７号住居跡出土土器
図版—76　ＪＰ出土土器
図版—77　ＪＰ出土土器
　　グリッド出土土器
図版—78　グリッド出土土器
図版—79　グリッド出土土器
図版—80　グリッド出土土器
　　Ｊ２号住居跡出土石器
図版—81　Ｊ３号住居跡出土石器
　　Ｊ３・４号住居跡出土石器
図版—82　Ｊ１・６号住居跡出土石器
　　Ｊ１・５号住居跡出土石器
図版—83　グリッド出土石器
図版—84　グリッド出土石器
図版—85　グリッド出土石器
図版—86　グリッド出土石器
図版—87　グリッド出土石器
　　中近世遺物（陶器、板碑、煙管）

表　目　次

表—１　芳賀西部団地遺跡出土陶磁器一覧表……98
表—２　出土遺物観察表　埴輪……169
表—３　出土遺物観察表　土器……201
表—５　出土遺物観察表　銅・鉄製品・石製品……210
表—６　出土遺物観察表　縄文土器……212
表—７　出土遺物観察表　縄文石器……252

I 調査の経過 (昭和50年5月8日～昭和50年12月24日)

5月8日。作業開始。開始の挨拶に続き、注意・連絡を行う。発掘区の設定を行う。ソ2～3、ツ2～3。
5月中旬。試掘区での遺構確認、断面実測が続く。埴輪片、周堀らしき溝状の遺構が多数検出される。縄文土器片が検出される。(縄文前期)
下旬。古墳石室下部と考えられる礫が検出される。試掘が進み、遺構が東側に集中し、西側は少ないことが判明する。芳賀中生徒見学(郷土部員)。地質調査に群大新井氏来訪。尾崎団長来訪。
6月上旬。試掘が完了し、遺構該当区に拡張区を設定する。FA層下より土師器壺が検出される。
M－1より精査をはじめる。雨が多い。
中旬。井戸検出。深さ1m位でも水脈が良く、水が良く出る。旧地形の道路配置に規格性？がみられる。
下旬。調査区西側の試掘を行う。遺構はみられない。
7月上旬。芳賀薬師塚の調査を行う。金環が出土する。M－1～4、遺構1～4の調査が進む。
中旬。市文化財調査委員視察。遺構5～13の調査。J－1調査。J－2・3検出。
下旬。J－4、JP－1検出。毎日新聞記者来訪。30日で山王廃寺調査のため器材を撤収する。
9月8日。作業再開。
中旬。M－6調査。ヒスイ管玉出土。
下旬。M－7・8調査に入る。
10月上旬。M－9・10調査に入る。史跡見学会で来訪者。
中旬。M－11・12調査に入る。
下旬。M－13・14調査に入る。
11月上旬。雨多し中止の日続く。M－15調査に入る。
中旬。M－16・17調査に入る。測量会社による測量に入る。
下旬。M－19～22の調査に入る。
12月上旬。M－23～27の調査に入る。後半雨が多い。
中旬。M－28～30の調査に入る。群大新井教授来訪。群大歴史研究部学生見学。
下旬。実測と写真撮影におわれる。尾崎団長視察。24日。遺物運搬・撤収をする。調査終了。

II 整理の経過 (昭和55年12月～平成3年3月)

昭和55年12月　芳賀団地遺跡(北部・西部・東部)の調査が終了し整理作業に入る。
56年3月　調査報告書の整理・刊行計画が決定される。東部・西部・北部の順で5巻にわけて刊行されることとなる。図面の整理・遺物整理に入る。
57年　第1巻刊行に備え、土器復元・実測を進める。遺構の検討を進める。
58年5月　調査報告書の作成委員会・執筆委員会が発足する。委員に原稿執筆を依頼する。図版作りを進める。
11月　原稿完成。第2巻の遺物整理を進める。
59年3月　第1巻刊行。(芳賀東部団地遺跡－古墳・奈良・平安時代〔谷東〕－)
12月　第2巻の遺物整理を進める。
60年　第2巻の遺物の復元・実測を進める。
61年　第2巻に収録の遺構のデータ表を作成し執筆を依頼する。
62年　第2巻の図版作成を行う。第3巻の遺構の検討に入る。データ表作成。
63年3月　第2巻刊行。(芳賀東部団地遺跡－古墳・奈良・平安時代〔谷西〕－)
63年　第3巻の遺物の復元を進める。執筆を依頼する。
64年平成元年　第3巻の図版作成。考察の検討。第4巻以降の委員体制について検討、改組を行う。
第4巻の遺構整理・データ表作り、遺物復元を進める。
2年3月　編集委員会を開く。刊行計画の検討を行う。第3巻(芳賀東部団地遺跡－縄文・中近世編－)刊行。
5月　作成委員会を開く。刊行、編集計画決定。執筆を依頼する。遺物実測を進める。
7月　編集委員会を開く。考察について検討を行う。図版作成を進める。第5巻の遺構の検討に入る。
10月　原稿完成。発注。第5巻の遺物の復元・実測に入る。データ表作成。
3年3月　編集委員会を開く。第5巻の刊行計画の検討を行う。
第4巻(芳賀西部団地遺跡)刊行。

III　遺跡の立地環境

芳賀西部団地遺跡は、前橋市鳥取町、小神明町、五代町にまたがる遺跡である。昭和50年に工業団地造成に伴う事前の埋蔵文化財調査が実施された。造成面積は20.2haで、遺跡地として調査を行なったものが9.5haである。

遺跡地は赤城山南麓の河川による開析谷にはさまれた台地上に位置する。東は藤沢川で、西は通称「西川」ではさまれている。南北に細長く、南への傾斜地である。調査以前には、東と西の河川による谷地には水田が作られ、中央部は畑、桑園が形成されていた。古墳が多く検出された地区は原となっていた。標高は125～130m前後である。

小字名でみると、調査地は東が「前原」西が「下倉本」にあたり、東端は「下田」、西端の谷地は「薬師」である。調査地に接して北が「倉本」になる。「倉本」は調査以前にすでに畑地が方形に区切られているところで、その区切りで「下倉本」と「前原」が東西に分かれている。鳥取町への道は「前原」をななめに通過している。

この畑地の方形の区画については、最も残りが良い区画でみると、内側で南北109m、東西113mを測る。旧の地籍図でみると、その北に南北111m、東西110m、南に東西111mの区画が読みとれる。北は字「倉本」地内にも同様の区画がみられるが、形成時期については資料が得られなかった。(別添図版参照)

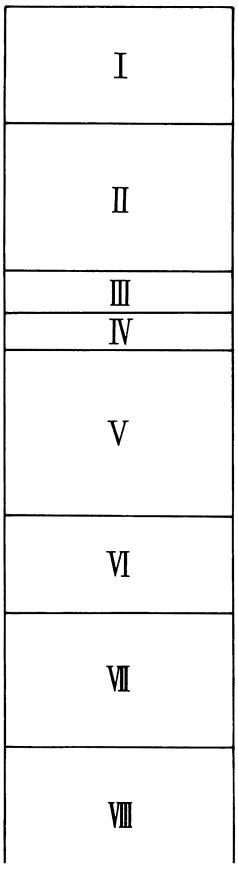
字名でみると、調査地南の善勝寺の一帯が「原」、その西が「上曲輪」、原の南が「中曲輪」「下曲輪」と続く。「中曲輪」の東は「大胡道下」となっており、善勝寺周辺の集落の形成が古いことがわかる。(別添図版参照)

芳賀西部団地遺跡周辺は、縄文時代からの多くの遺跡が存在する。(別表参照)芳賀東部団地遺跡、芳賀北部団地遺跡をあわせた芳賀団地遺跡群は県内でも有数の遺跡である。以上の三遺跡は団地造成に伴って台地のほとんどを調査した例であるが、その周辺の小神明・端気町においても土地改良等による調査が行われている。また、古墳綜覧（昭和10年調査)によれば芳賀地区には64基の古墳があるとされているが、その後の調査でも多数検出されており、100基以上の古墳が現在確認されている。最北は標高180mに近い芳賀北曲輪遺跡と古墳が検出されている。

時代別にみてゆくと、遺跡によっても盛衰がみられ、地域を知る良好な資料といえる。

図－1　遺跡の位置と周辺の遺跡

IV 基 本 層 序



基本層序

I　耕作土、砂質土。20～30cm
II　黒色土(I)20～40cm　浮石の混入が多く、ＦＰが点在する。
III　ＦＡ　10cm前後
IV　黒色土(II)　浮石の混入は少ない。10cm前後
V　黒褐色土　粒子は荒いがかたい。35～45cm
VI　黒灰色　漸移層　黒褐色粘性土と灰白色砂質土との混土。粒子は荒いがかたい。15～25cm
VII　灰白色砂質土　粒子は荒く、非常にかたい。20～35cm
VIII　茶色ローム質土　黄色浮石を混入し、粘性がある。
II′　黒色土　浮石が混入。
II″　黒褐色土　浮石混入。(浮石が中心)
II‴　IIに近く、やや褐色が強い。浮石がなくなる。
X　Ｂ軽石層（周堀内でみられる）　ＩとIIの間５～10cm

図－２　地層柱状図

V　検出された遺構と遺物

遺構と遺物

1　古墳時代

Ｍ－１号古墳

位置　調査区の東端，ツ・ネ－３・４区に位置する。東側は調査区外のため完掘ではない。西にＭ－26、Ｍ－19が位置するが、他の古墳相互よりも距離がある。

墳丘　本古墳中唯一の方形の墳丘をもつ。調査時にはすでに旧地表までの削平をうけていた。墳丘はやや東辺の長い正方形をしており、東西11.8m、南北11.7mを測る。周堀は削平をうけたところが多く、規模を明確につかみがたいが、比較的残りの良い西側、南側で計測すると、上巾が5.5～5.8m、下巾が3.1～4.7mを測り、地層断面図からの推定を含めると、総長は南北20.7m東西20.1mと考えられる。

主体部　墳丘中央部に南北4.7m、東西1.0mの土坑が残る。位置は墳丘ほぼ中央であるが、地層断面図でみると新しいものである。主体部は削平をうけた際に失なわれたものと考えられる。

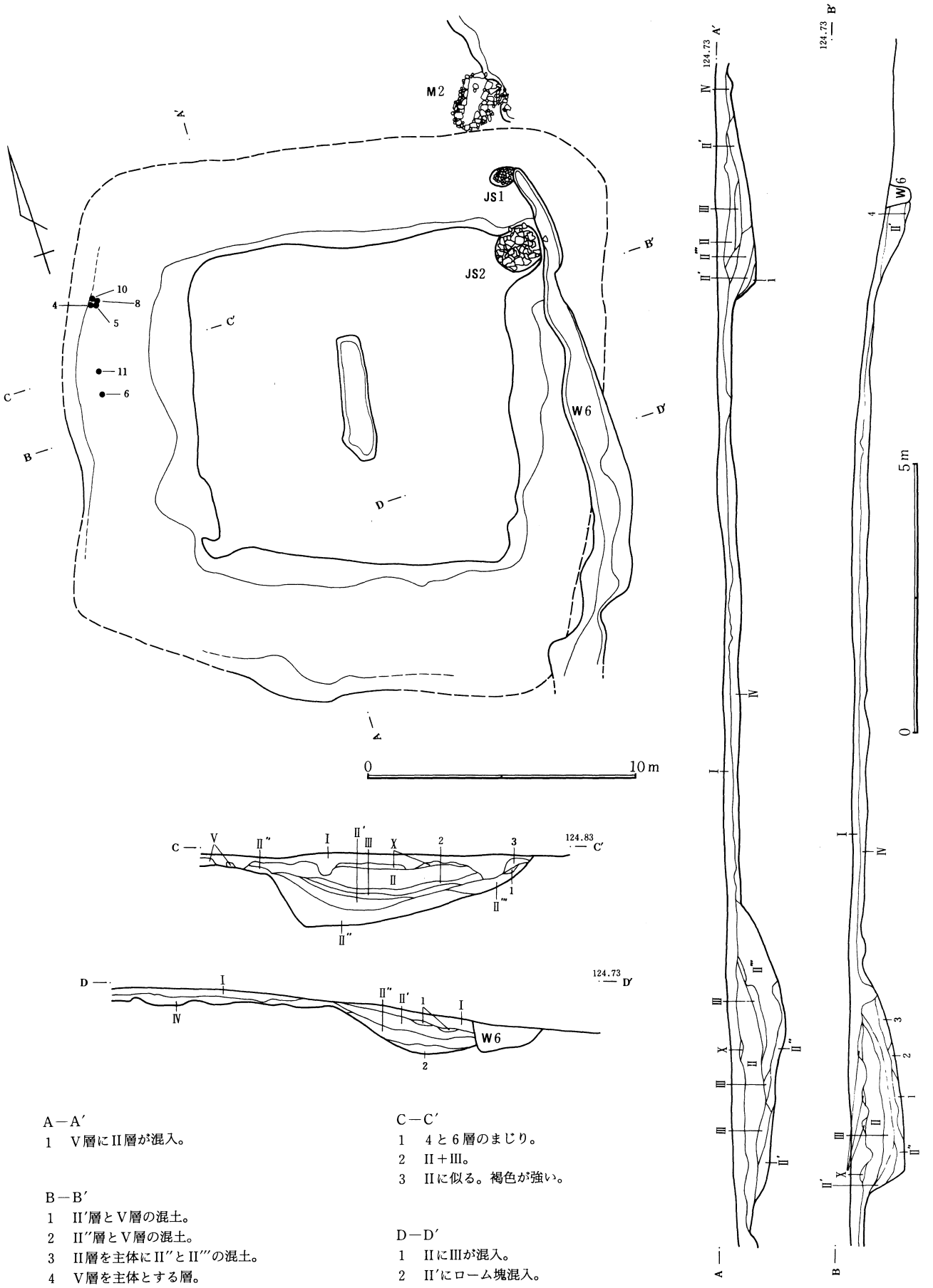
地層断面　周堀地層断面図によると、耕作土下にＢ軽石層が10cm、Ｂ灰層が７cmの厚さでみられる。また、その約50cm下層に６～14cmの厚さのＦＡ層がみられる。また、底部はＣ軽石を含む黒褐色土層が埋めている。

重複関係　墳丘北東隅とその北の周堀内に配石１・２が重複する。調査時にはＪＳ－１、ＪＳ－２としてあるが、遺構ののこり方からみて古墳削平後の集石と考えられる。

墳丘の東側を南北に通るＷ－６、墳丘中央の土坑、周堀西部の土坑ともに地層断面図でみると、耕作土で覆われていることから古墳削平後の形成と考えられる。Ｍ－２石槨が北東周堀外にのこる。

その他　本古墳群で唯一の方形の墳丘をもち、規模も大きい。

遺物　完形品に近い古式土師器がのこる。周堀北西部の土坑は、地断はないが、日誌に古墳以前の遺構との記述がみられる。北端より土師器出土。　（井野）



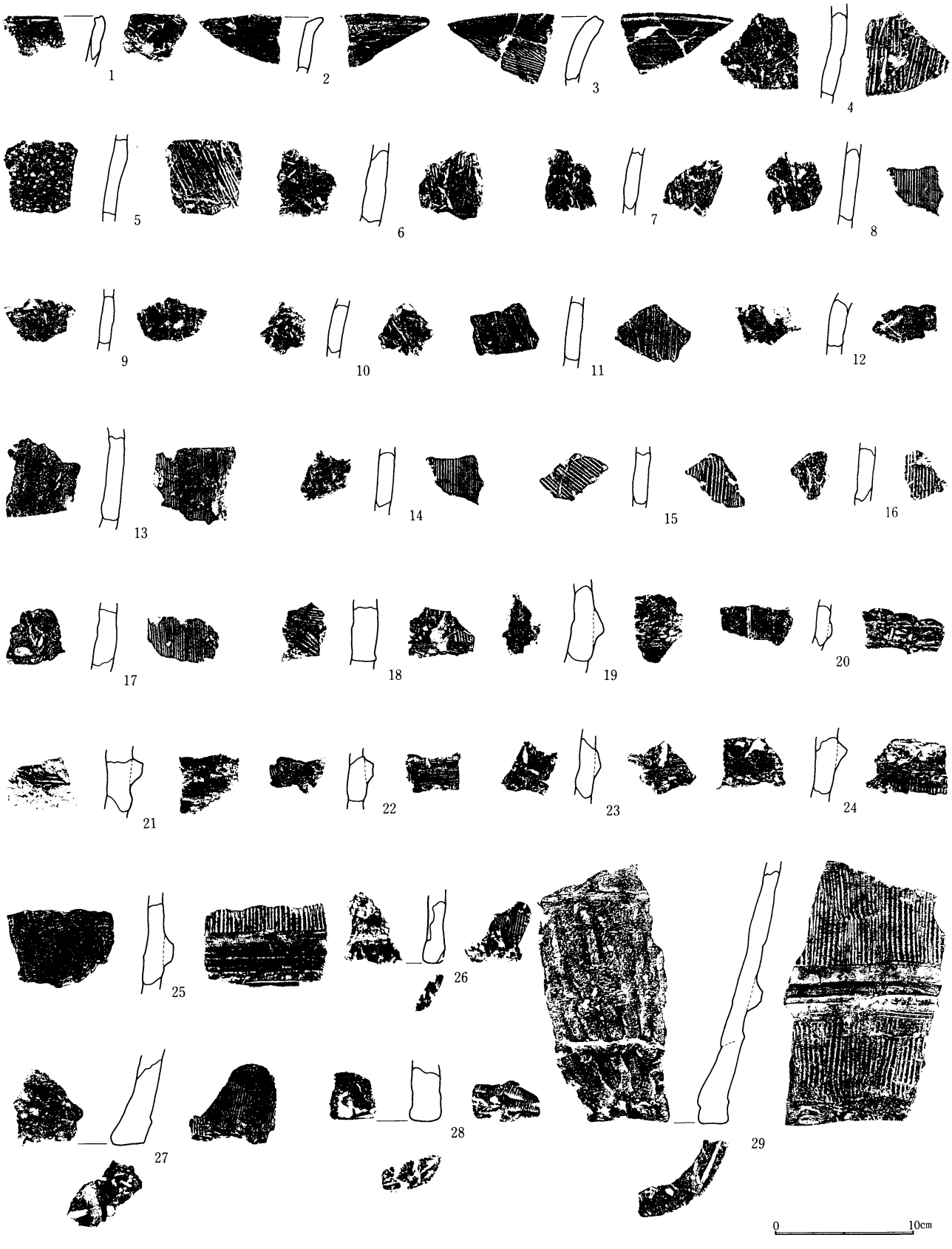
A－A′
1　V層にII層が混入。

B－B′
1　II′層とV層の混土。
2　II″層とV層の混土。
3　II層を主体にII″とII‴の混土。
4　V層を主体とする層。

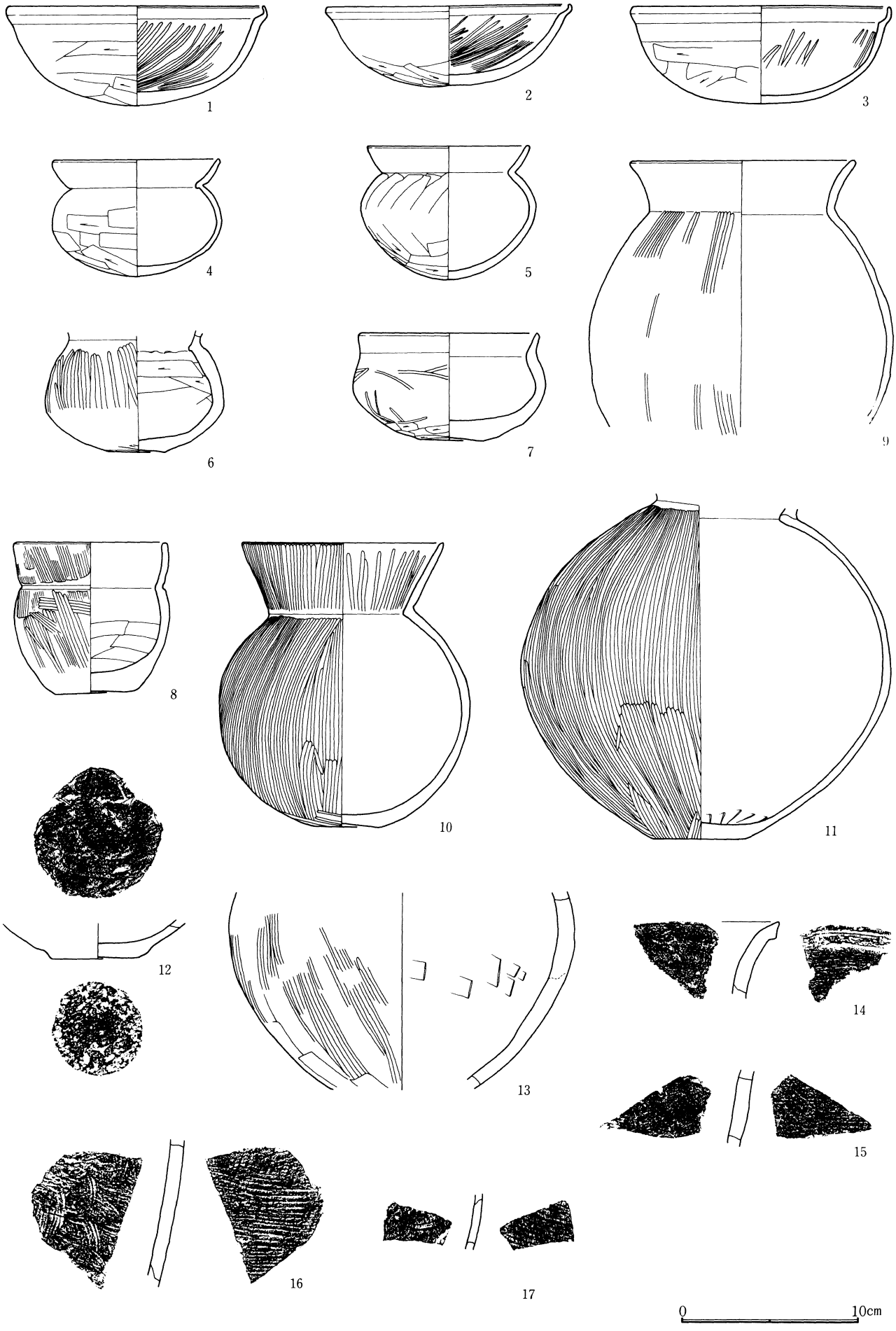
C－C′
1　4と6層のまじり。
2　II＋III。
3　IIに似る。褐色が強い。

D－D′
1　IIにIIIが混入。
2　II′にローム塊混入。

図－3　M－1号古墳平・断面図



図— 4　M— 1 号古墳出土遺物実測図(1)



図－5　M－1号古墳出土遺物実測図(2)

M－2号古墳

位置　調査区東端のネ－4区に位置する。M－1の北東にあたる。

墳丘　主体部のみ残り、墳丘は削平をうけ、周堀は確認されなかった。主体部の東側は調査区外であり未調査である。墳丘の形状については不明である。

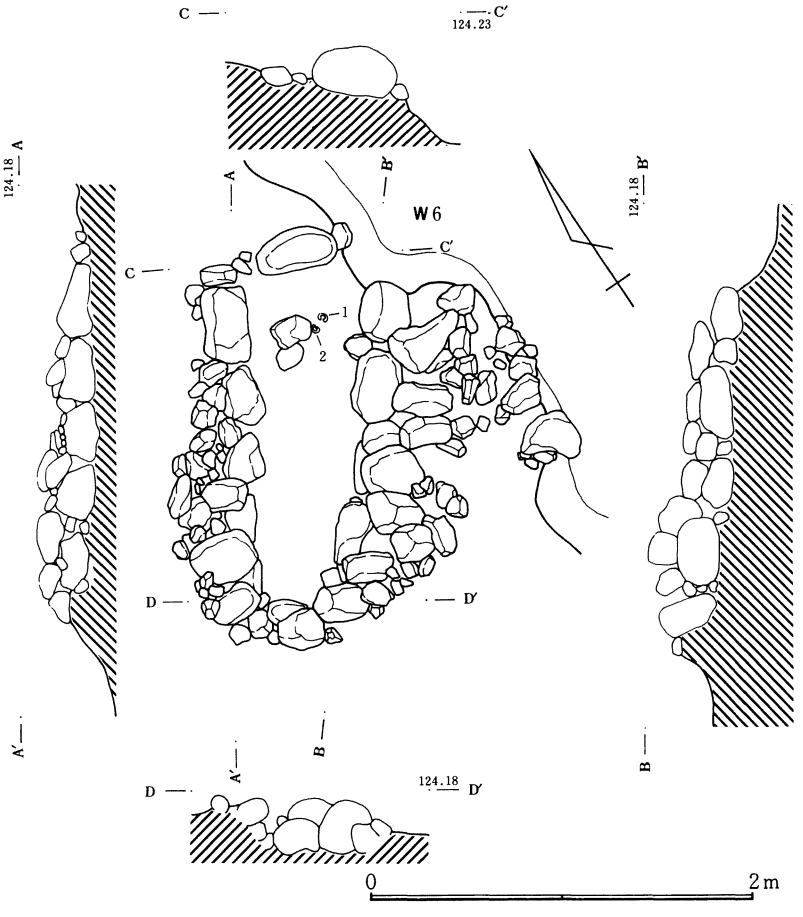
主体部　石室跡がのこる。乱石積みである。天井石と側壁の半ばは失なわれており、一部がW－5内に崩落していた。石室は地山を掘りこんだ「掘り形」の中に作られている。根石とその上に積まれた1段の石がのこっていた。また、根石、側壁の石と地山の間に裏ごめの石がつめられている。

石室全長は2.25m、巾は現状で1.2～1.5mを測る。全面に敷石が施されていた。

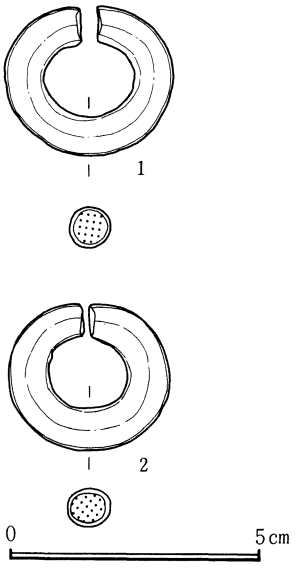
重複関係　M－1との前後関係は不明である。

出土遺物　石室内床面より金環が2個出土している。

（井野）



図－6　M－2号古墳石室実測図



図－7　M－2号古墳出土遺物実測図

M－3号古墳

位置　調査区北方のカ－9、ヨ－8・9区に位置する。位置からみると南側の古墳群に続くものと思われる。

墳丘　やや南側がひろがる不整形の円墳。周堀も南側ではM－4との係わりで円形ではなく直に近い形状をもつ。墳丘は南北10.96m、東西11.08m、周堀を含めた総長は南北13.44m、東西14.28mを測る。周堀は位置により巾が異なり、北は上巾1.6m、下巾1.0m、南東は上巾0.54m、下巾0.26m、南西は上巾1.9m、下巾1.32mを測る。周堀東側に巾1m、長さ2.5mの範囲で小石がみられる。

主体部　削平をうけたものと思われる。

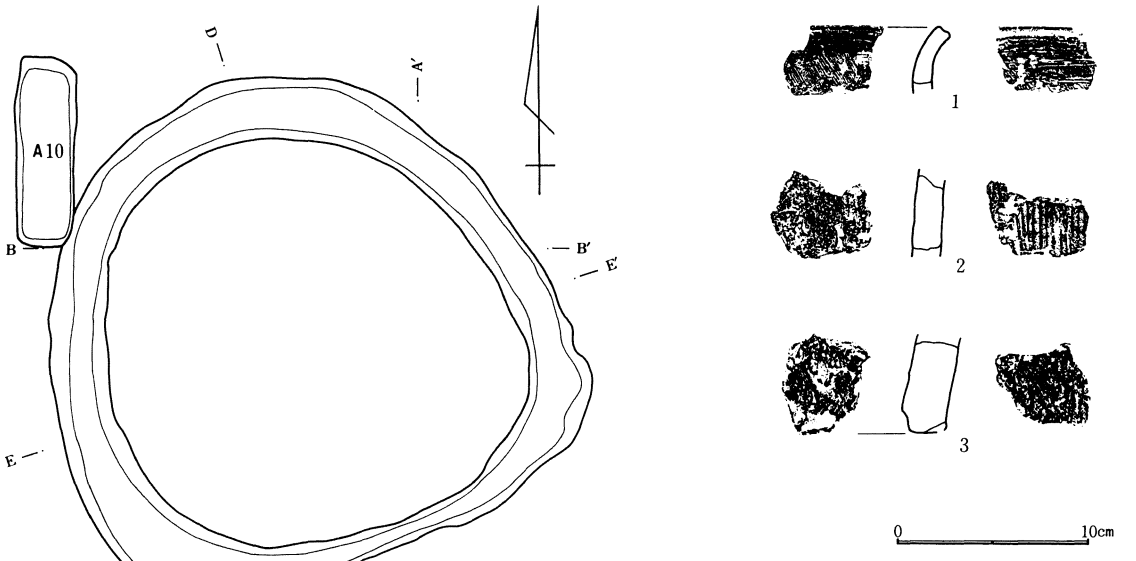
重複関係　M－4が南に接する。地層断面図からみると同じ面より周堀が切りこまれており、覆土も同様であるのでほぼ同時期とみられるが、M－4はほぼ円形の墳丘・周堀をもつのに対してM－3は周堀南側が変形しており、M－4を意識し、あえて重複するのを避けたようにみえるので、この点でみるとM－3が新しいと考えられる。

北西に位置する遺構10は、遺構10がM－3周堀を切っているので遺構10が新しい。遺構26（全体図参照）は地層断面図でみると、M－3周堀より上の層より切りこまれており、B軽石を含むことから遺構26が新しいと考えることができる。

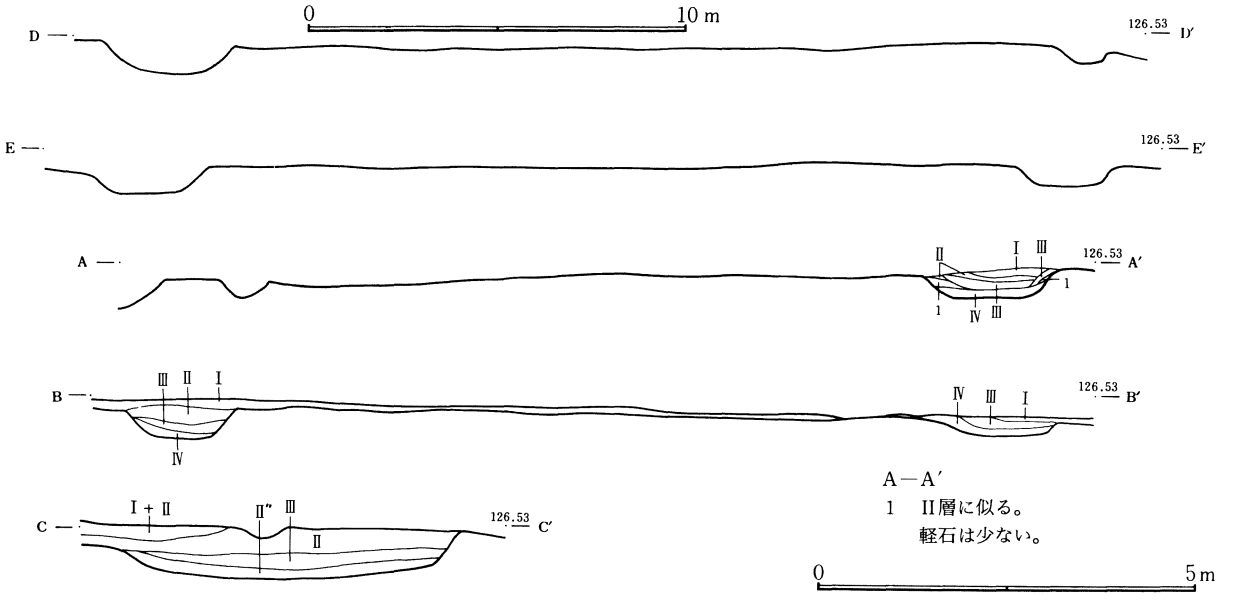
周堀覆土　周堀覆土の中～下層にはＦＡが含まれている。下層にはＦＡがやや少なく、その上にＦＡ層が20cmの厚さで堆積している。現状ではB軽石はみられない。

出土遺物　埴輪片が出土している。

（井野）



図－9　M－3号古墳出土遺物実測図



図－8　M－3号古墳平・断面図

M－4号古墳

位置　調査区北のカ－8、ヨ－7～9区に位置する。北側でM－3と接する。東側3分の1は調査区外であるため未掘である。

墳丘　円墳と推定される。現状で南北15.44m、東西9.35mを測る。周堀は現状で全周しており、南で上巾2.88m、下巾1.88mを測る。総長は南北が22.10m、東西が13.20m（現状）を測る。

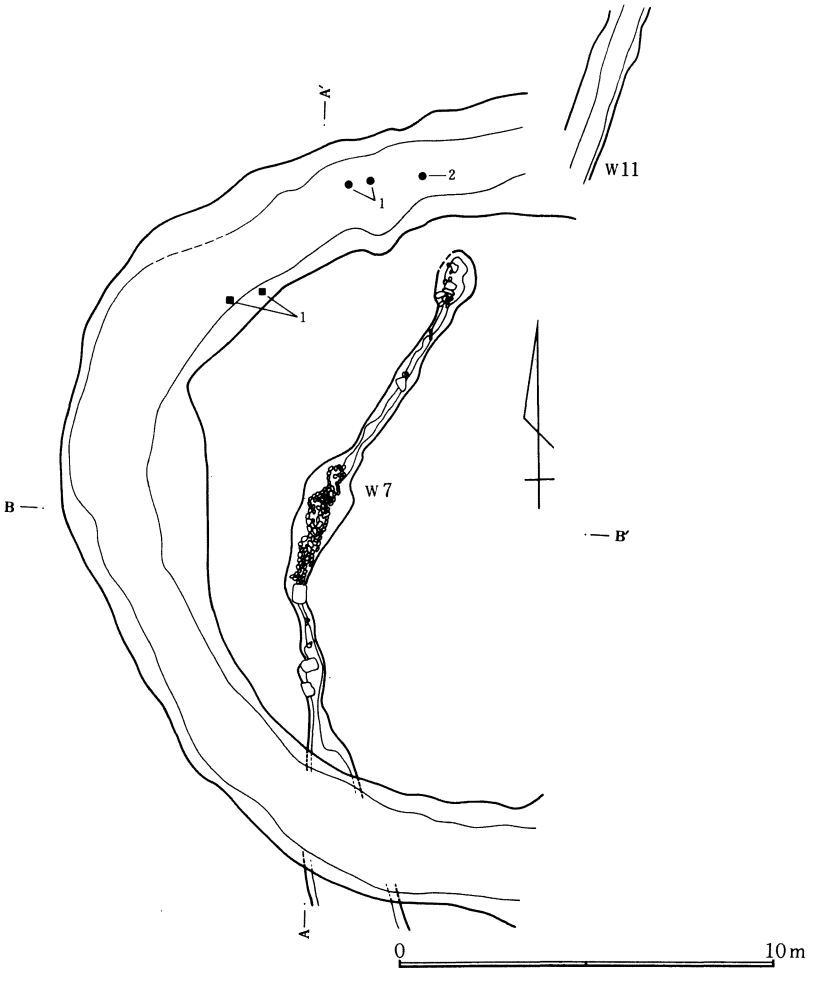
主体部　削平されたものと考えられる。

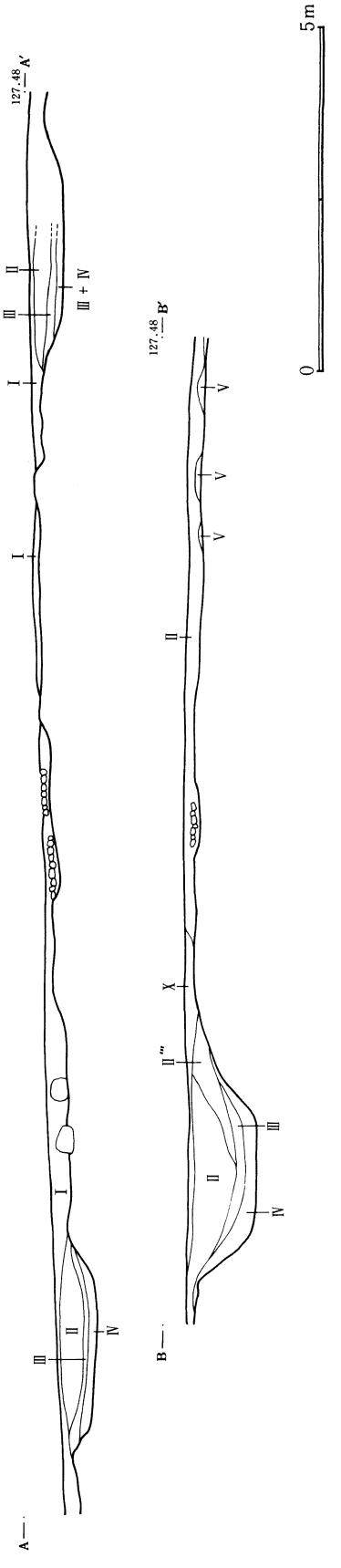
重複関係　W－7と重複する。W－7は耕作土を覆土とし、M－4を切っているのでW－7が新しい。このW－7は溝中に石が多く検出されている。特に墳丘中心部に近いところでは小石が多くみられ、主体部に使われた石の残存とも考えられる。北側周堀部ではW－7と若干軸を異にするW－11が南北方向に走行する。また、周堀内にはのちに作られた土坑と考えられるものが見られるが詳細は不明である。

周堀覆土　最下層はC軽石をわずかに含む黒色土で、その上にFA層が厚さ8～12cm堆積している。また、最上層にB軽石の純層がみられる。B軽石層、FA層との間にはFP・C軽石を含む黒色土が約60cm堆積している。

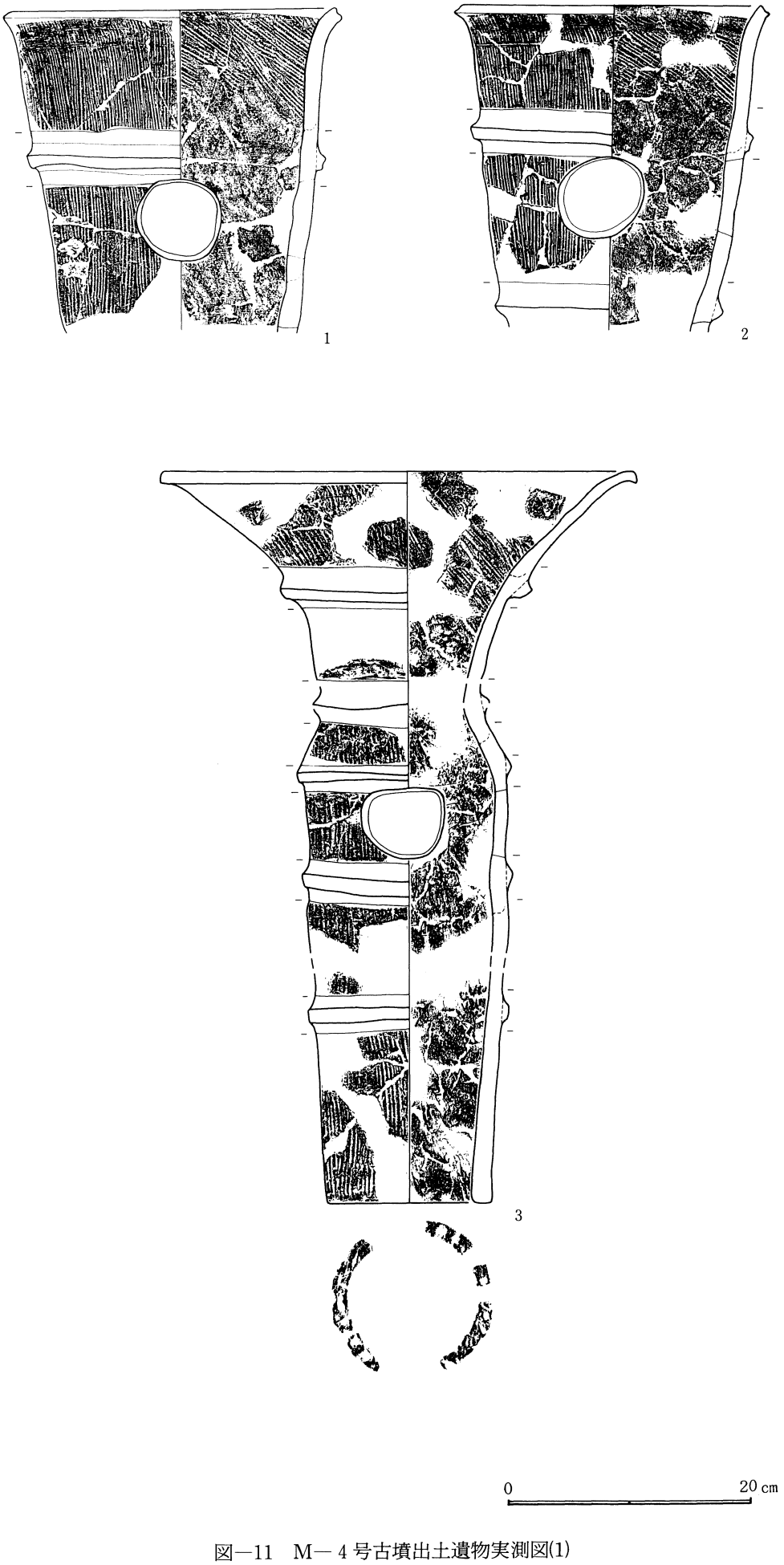
出土遺物　円筒埴輪、朝顔型埴輪、土師器が出土している。

（井野）

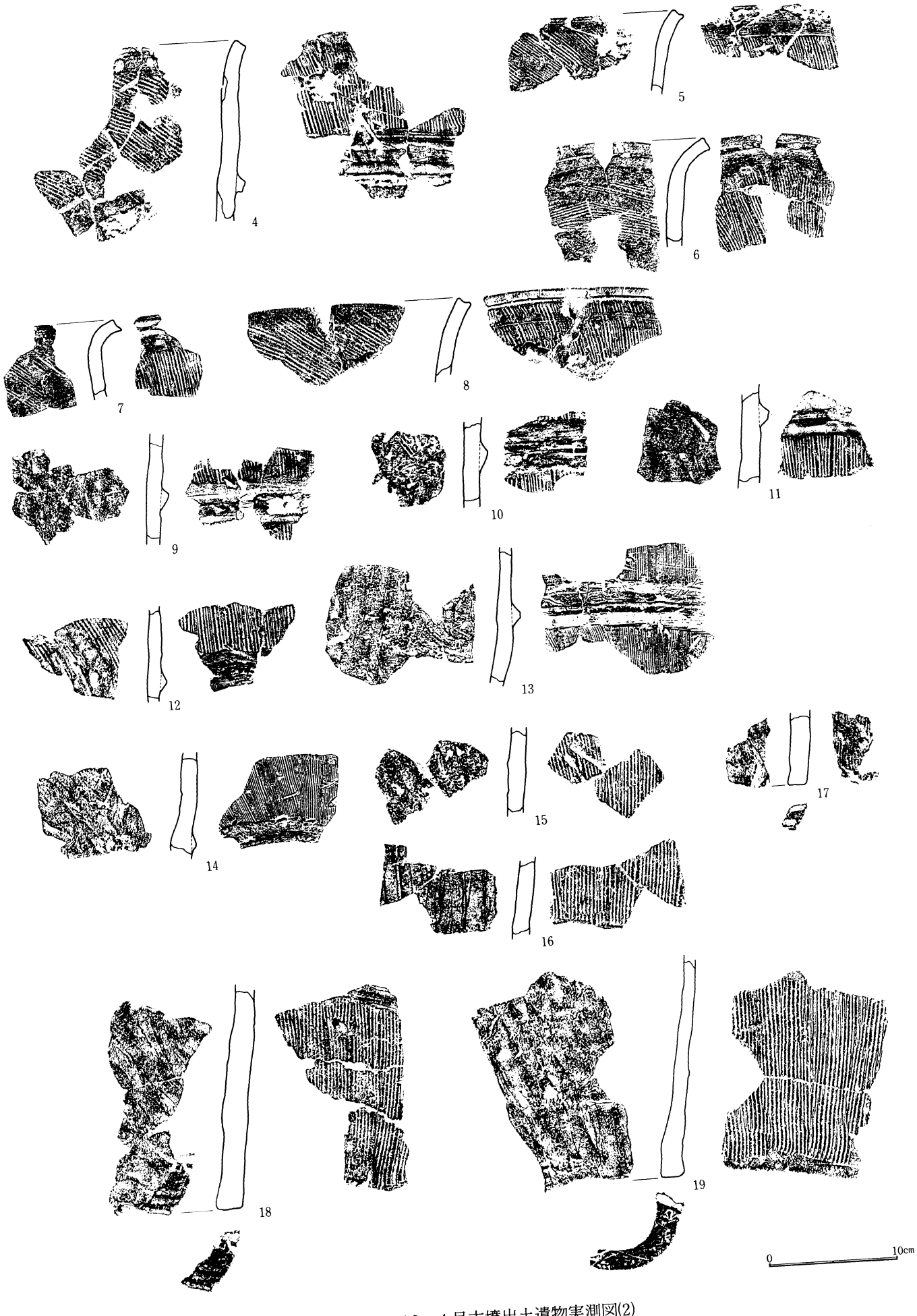




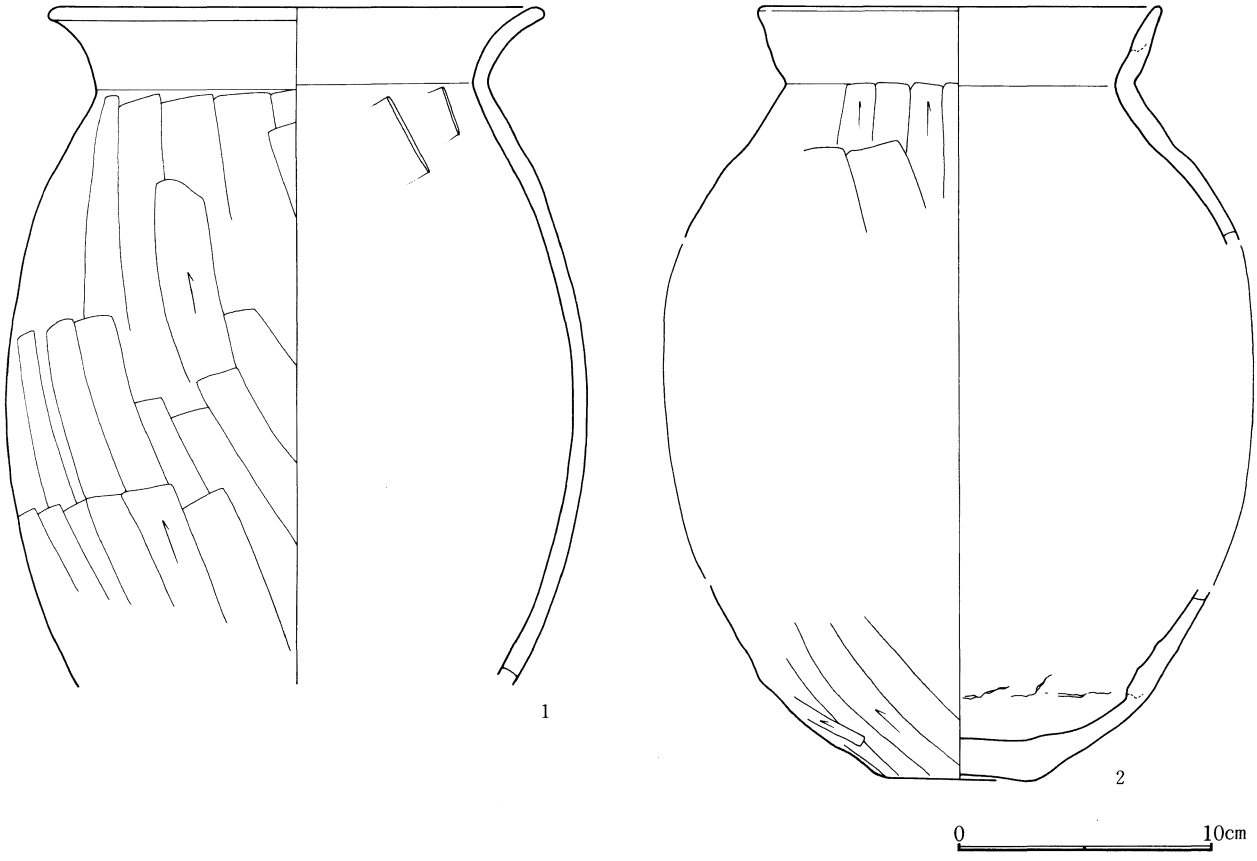
図－10　M－4号古墳平・断面図



図—11　M— 4 号古墳出土遺物実測図(1)

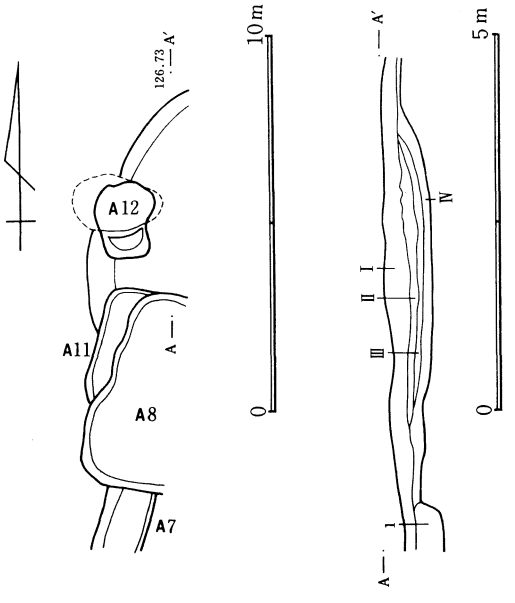


図—12　M—4号古墳出土遺物実測図(2)



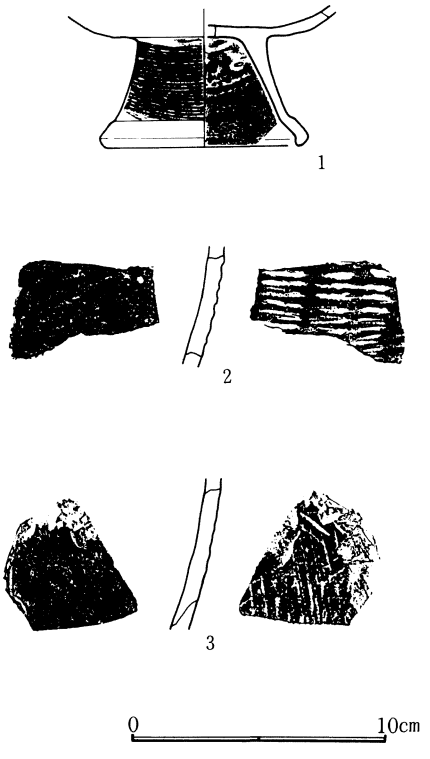
図—13　M—4号古墳出土遺物実測図(3)

M—5号古墳

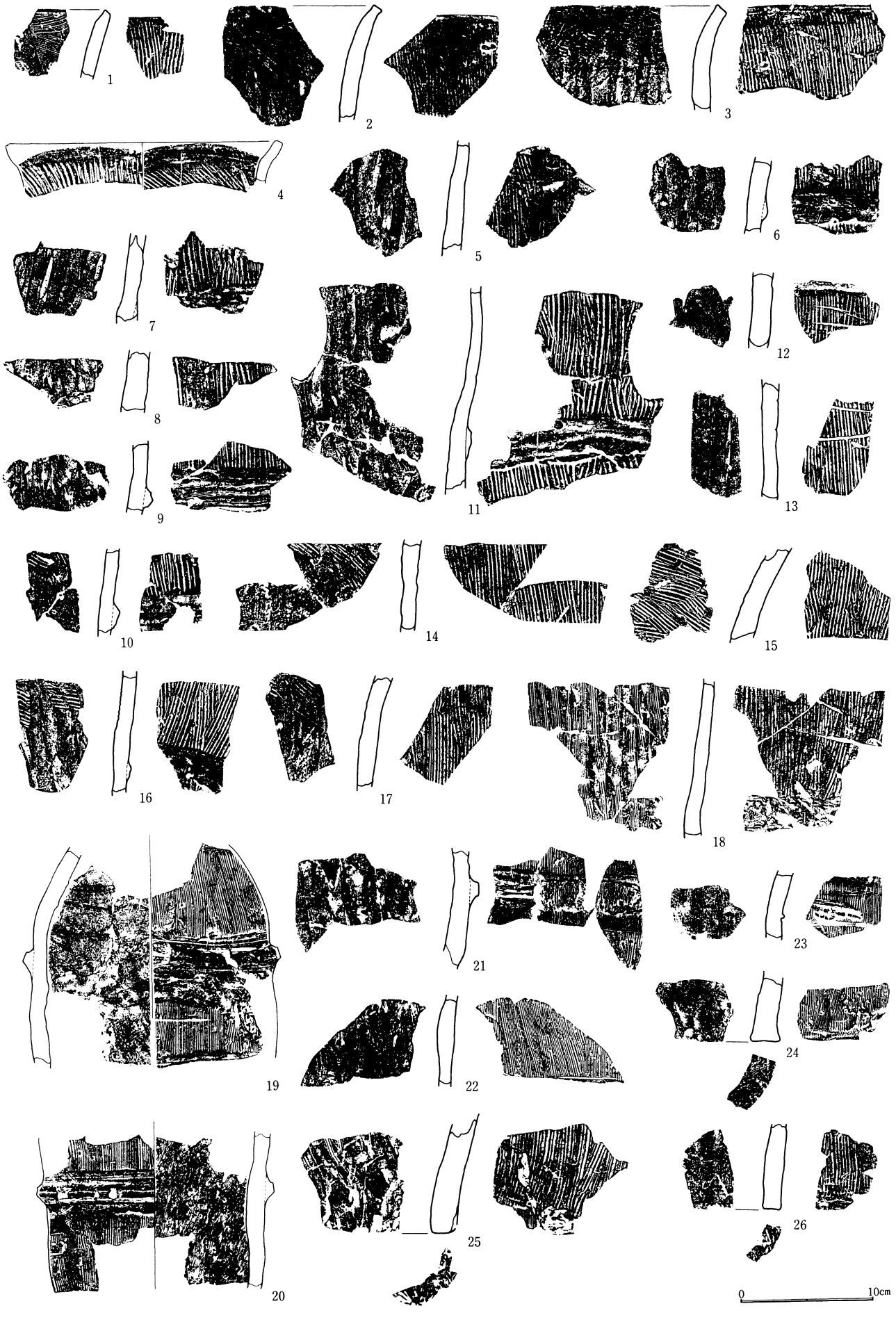


1　小砂礫を多く含む。
砂質層。

図—14　M—5号古墳平・断面図



図—15　M—5号古墳出土遺物実測図(1)



図—16　M—5号古墳出土遺物実測図(2)

位置　調査区北のヨ－９、タ－９・10区に位置する。M－３の北東にあたるが、ほとんどが調査区外であるほか、調査した部分にも中近世と考えられる遺構が多く重複しており不明な点が多い。

墳丘　ごく一部しか検出されておらず、また削平をうけており不明である。周堀の様子からみると円墳と考えられる。周堀は、地層断面図から計測すると上巾2.15m、下巾1.5m、広く平らな底をもつ。

主体部　調査区外のため不明。旧くより道路となっており削平をうけていると考えられる。

重複関係　遺構８、11、12と重複する。地層断面図によると、遺構８－11がM－５地山を切っており、遺構８・11が新しい。遺構12もM－５周堀を切っており遺構12が新しいと考えられる。

周堀覆土　最下層はIV層で、その上にＦＡ層が８～15cmレンズ状に堆積している。

出土遺物　円筒埴輪、朝顔型埴輪が出土している。

（井野）

M－６号古墳

位置　調査区南西のタ・レ－１・２区に位置する。北にM－17・16、南にM－７・８、西にM－13が位置するが、東からは古墳の検出がみられず、本古墳群の東縁にあたる。

墳丘　円墳と考えられるが削平をうけている。東西13.25m、南北12.9mを測る。周堀は北側がやや狭く、上巾1.6m、下巾1.2m、南が上巾2.14m、下巾1.52mを測る。総長は東西16.2m、南北16.85mである。

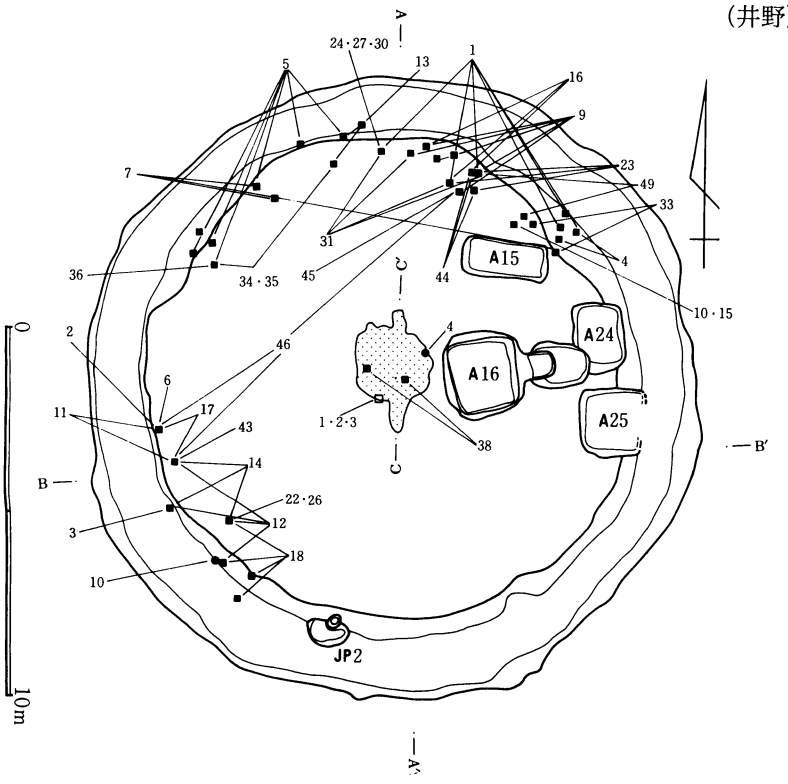
主体部　墳丘中央部に礫が２m×２mの範囲にみられる。遺物片が若干含まれており、石室の礫床の残存部と考えられる。礫部の断面図でみると、堀り形らしきものが北端にみえるが、平面では確認されなかった。

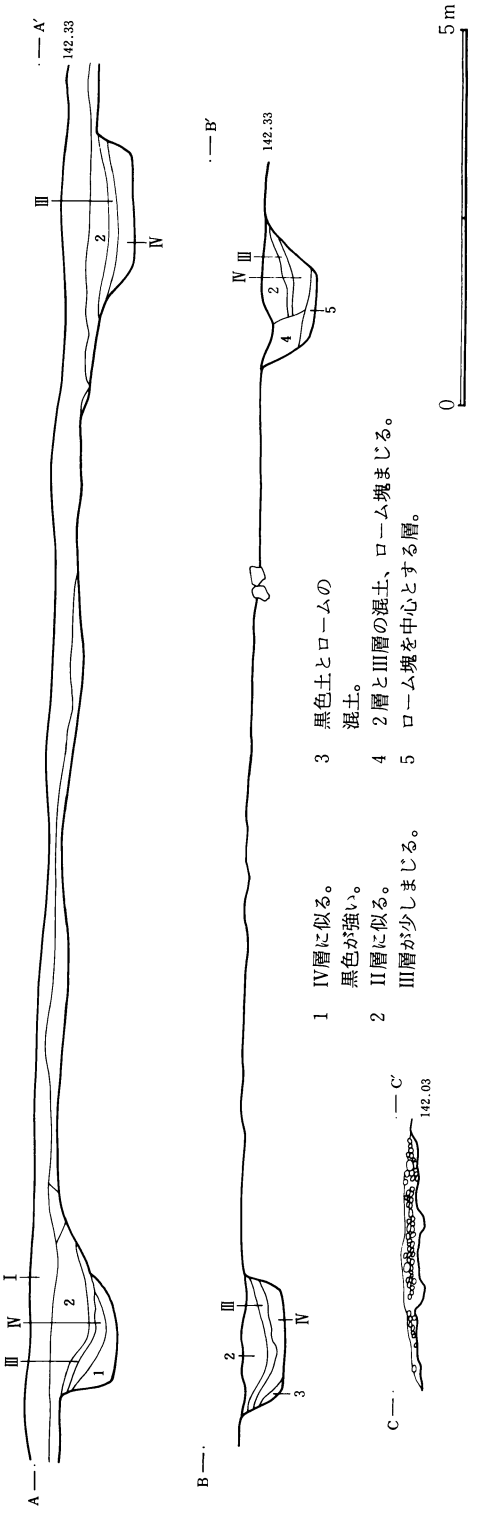
重複関係　周堀南側でＪＰ－２と重複する。他に遺構15・16・24・25と重複する。形態等からみるといずれも中近世の土坑であり新しいと考えられる。遺構16は東側に横穴状の入口部をもち、方形の主部をもつ地下式土坑状を呈している。

周堀覆土　最下層はロームブロックを多く含む層であり、堀りあげたローム層が早くに崩落したものと考えられる。その上はC軽石を含む黒色土で、ＦＡ層は現状で覆土の中位に厚さ８～12cmでレンズ状に堆積している。

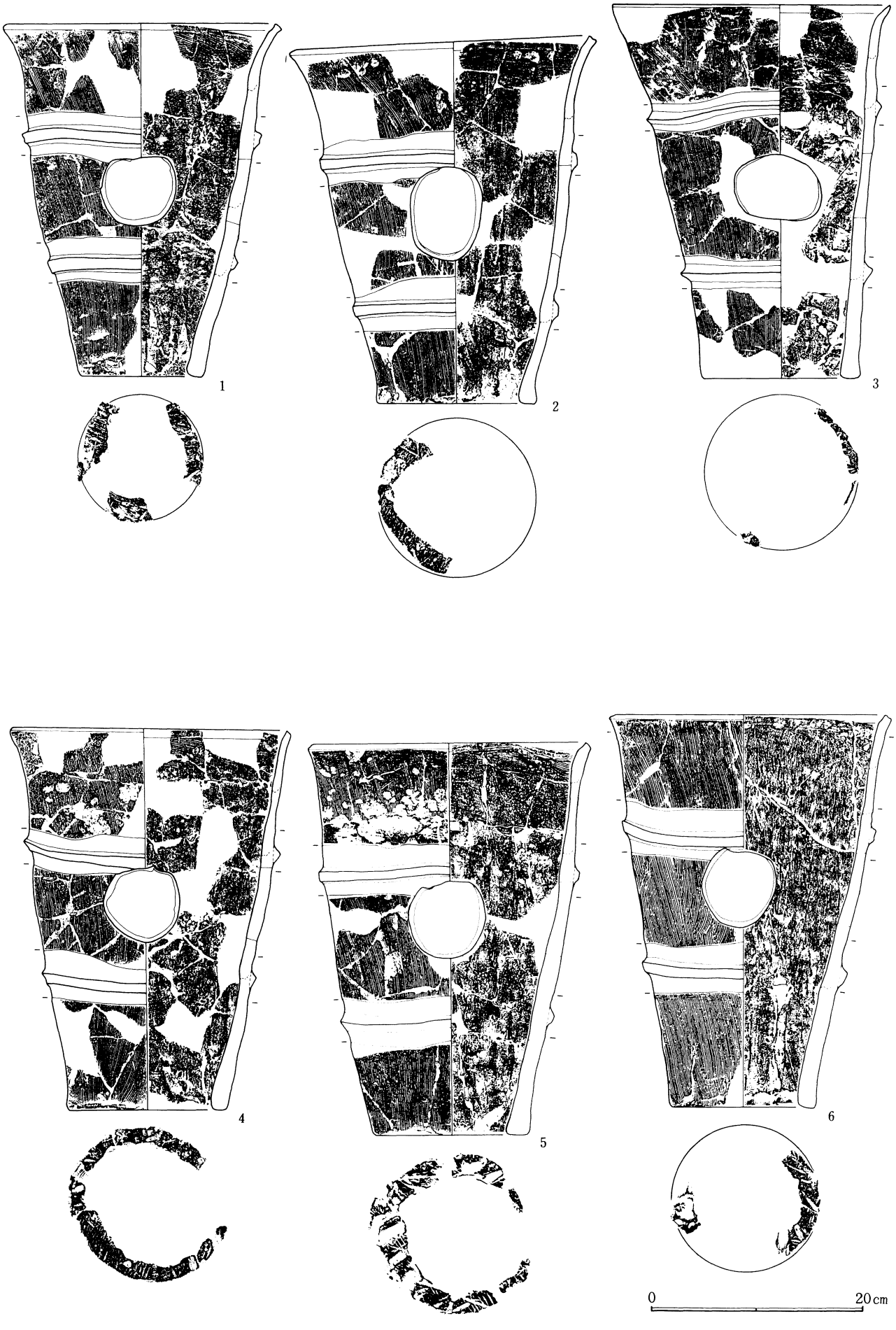
出土遺物　墳丘上より埴輪等の出土が多い。形象埴輪（動物）も含まれる。中央部より勾玉が出土している。

（井野）

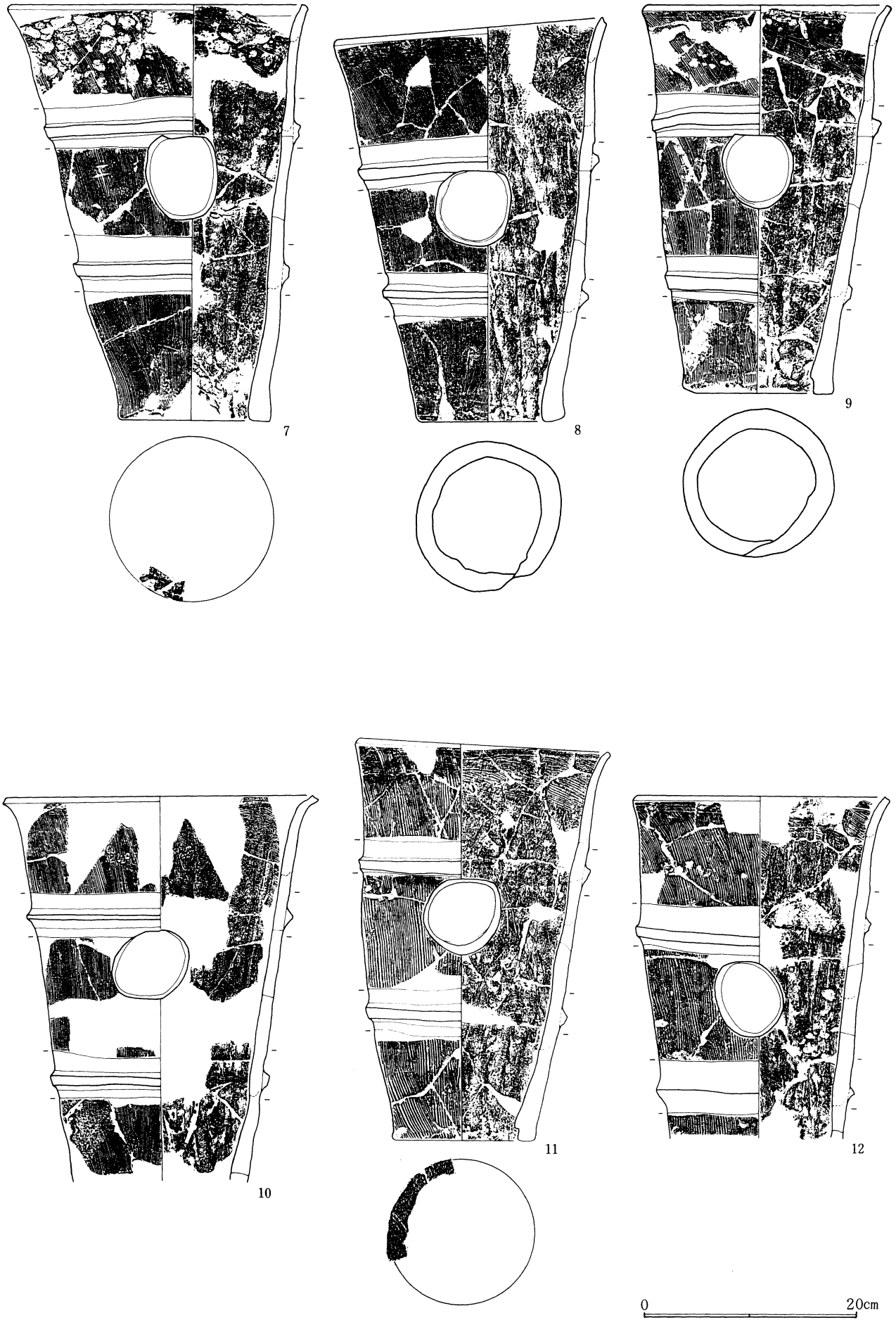




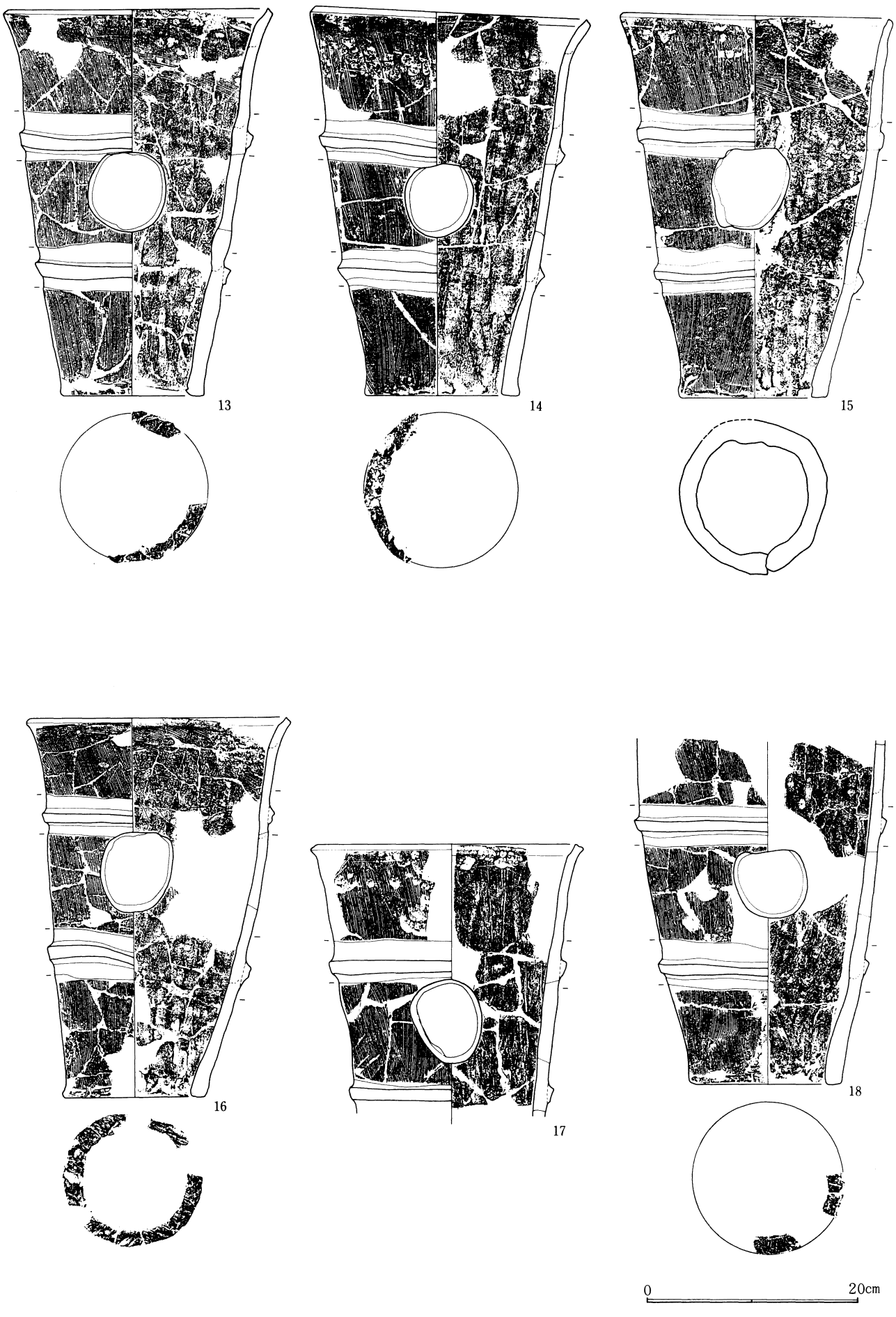
図－17　M－６号古墳平・断面図



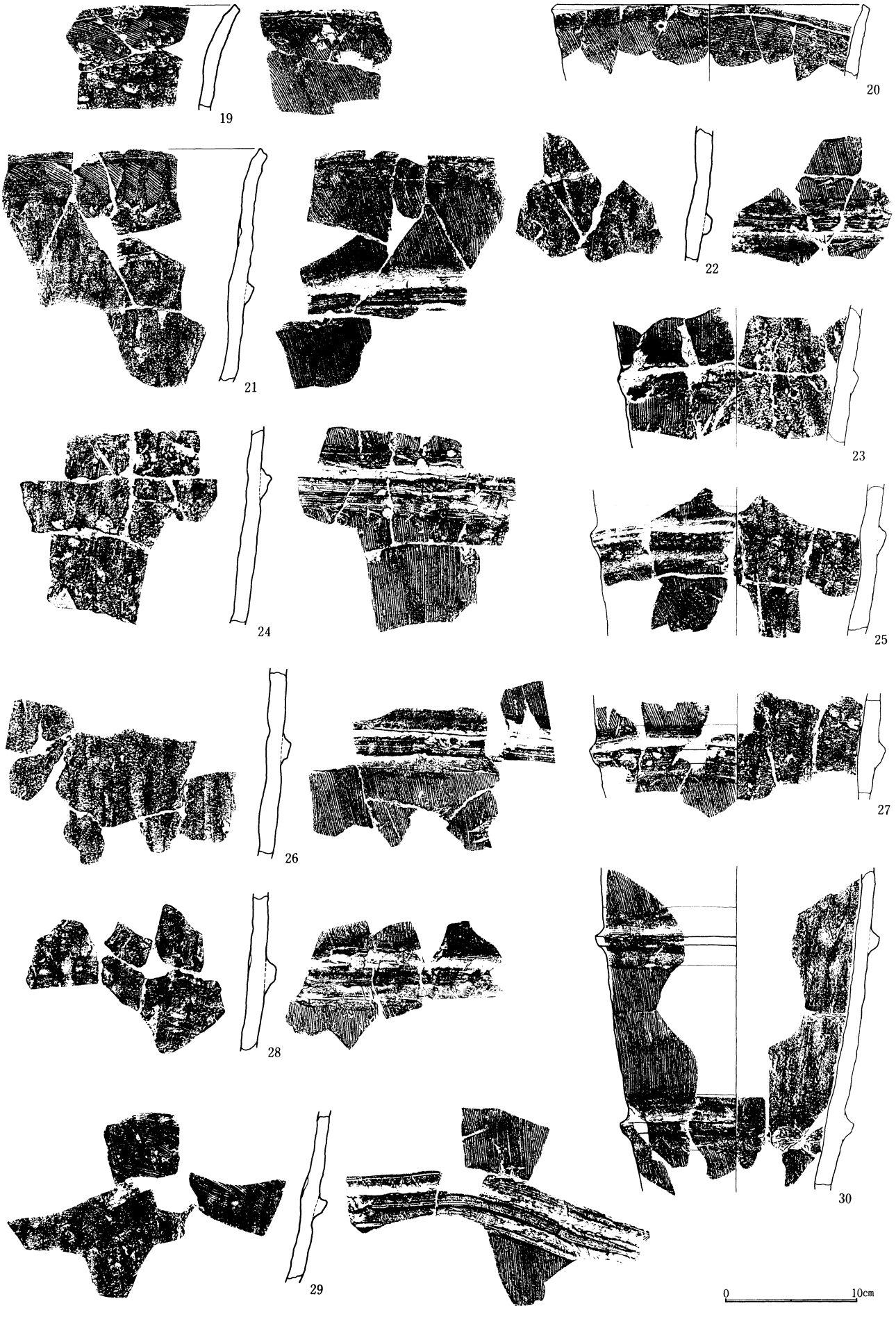
図—18　M—6号古墳出土遺物実測図(1)



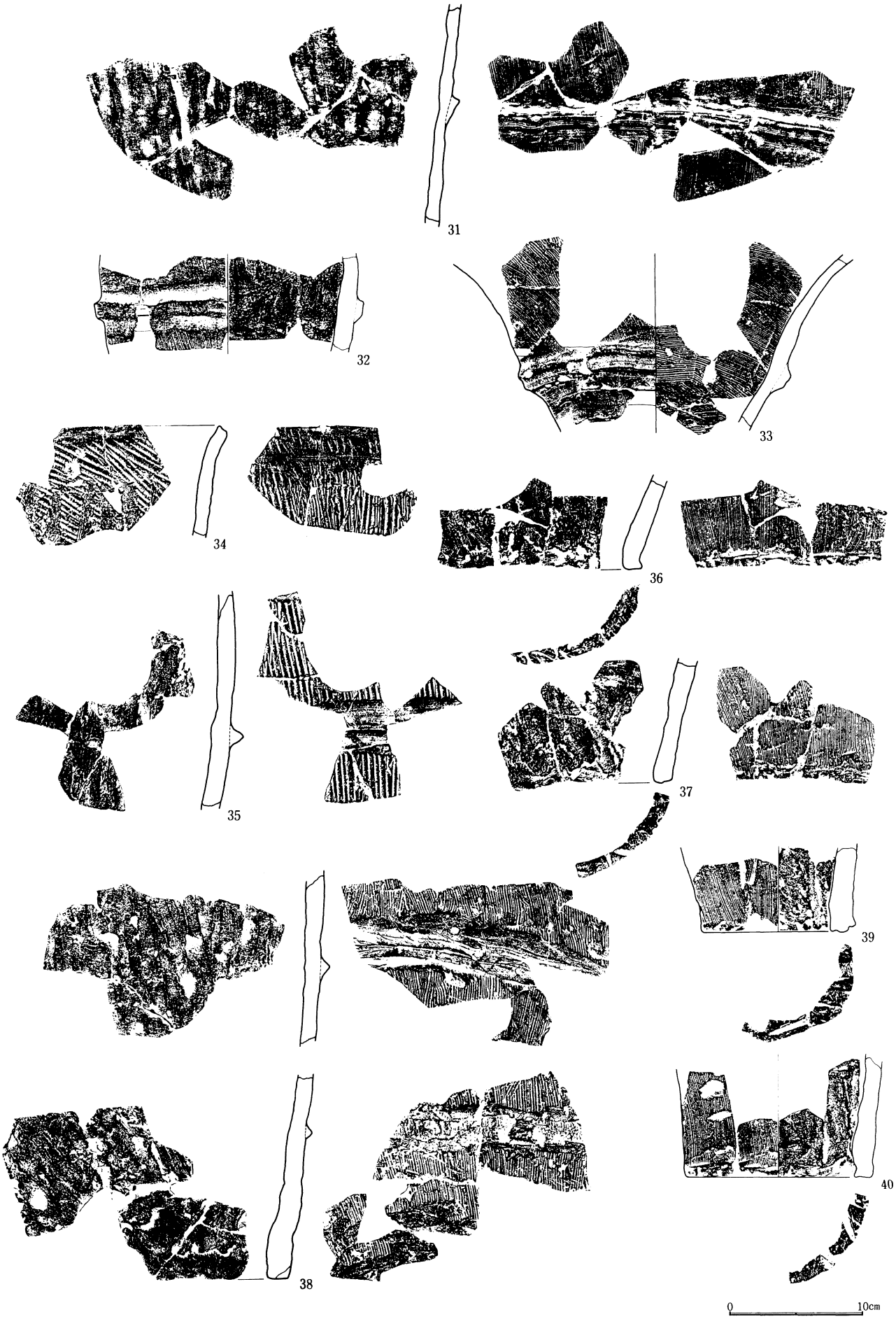
図—19　M—6号古墳出土遺物実測図(2)



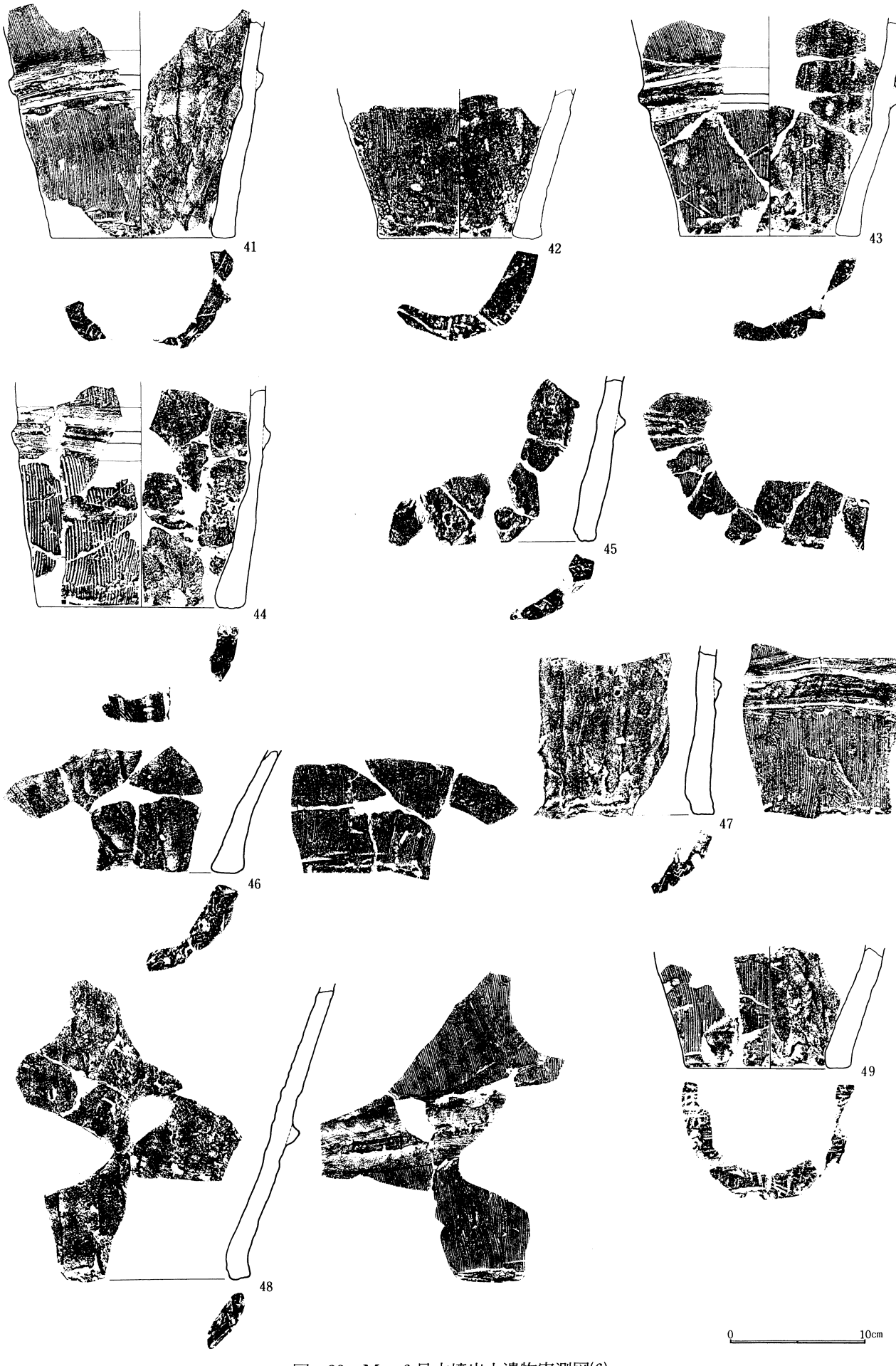
図—20　M—6号古墳出土遺物実測図(3)



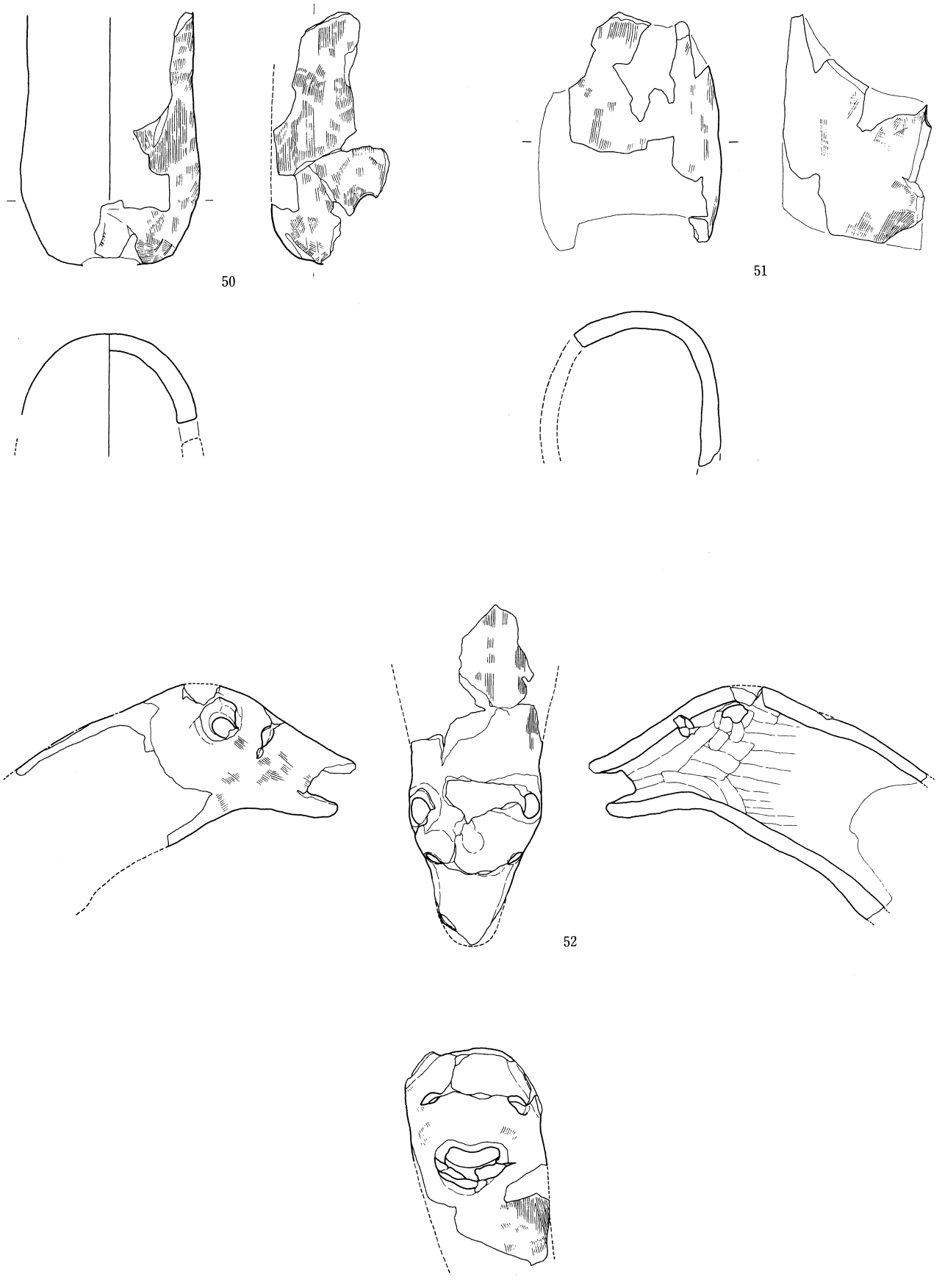
図—21　M— 6 号古墳出土遺物実測図(4)



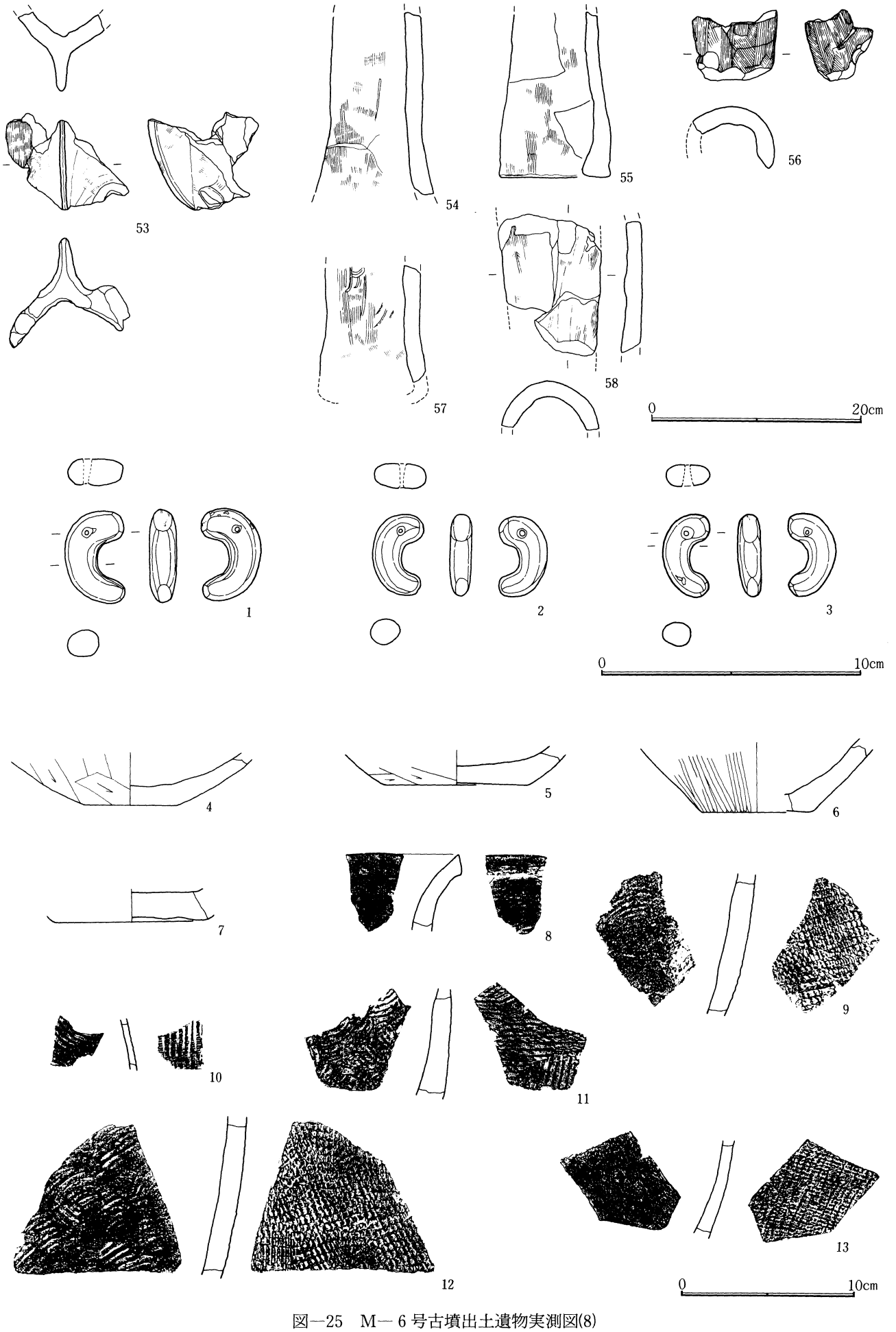
図—22　M— 6 号古墳出土遺物実測図(5)



図—23　M— 6 号古墳出土遺物実測図(6)



図—24　M—6号古墳出土遺物実測図(7)



図—25　M—6号古墳出土遺物実測図(8)

M－7号古墳

位置　調査区南東端のタ－0・1区に位置する。M－6・8・9に隣接する。

墳丘　墳丘・周堀ともに削平・カクランを多くうけているが、円墳と考えられる。南北12.30m、東西14.50mを測る。周堀は残存度が種々であるが、西側で上巾1.76m、下巾0.88mを測る。総長は東西17.2m、南北16.4m。

主体部　墳丘中央部に南北6.14m、東西3.14mの長方形の堀り形と礫床がみられ、ここが石室の位置と考えられる。この部分の精査を行なったところ、石室の根石の跡、裏ごめの石と考えられるものが検出された。

南西隅にカクランがあるため不明な点があるが、自然石積みの竪穴式石室と考えられる。石室の規模は東西が北側で1.14m、中央部で1.64m、南北約5mを測る。床面は径10～15cmの礫が一部にのこされていた。

根石は東側が長さ1～2mのもの、西側が長さ1～1.5mと推定される跡が検出されている。東側の裏ごめと考えられる石は径1.5～2cmの小さいものが詰められていた。

重複関係　地層断面に見える周堀北側の広い堀り込みは上層にB軽石層をもつが、これは周堀を切って作られており古墳期以降と考えられる。B軽石下であることから平安期のものと考えられるが性格は不明。

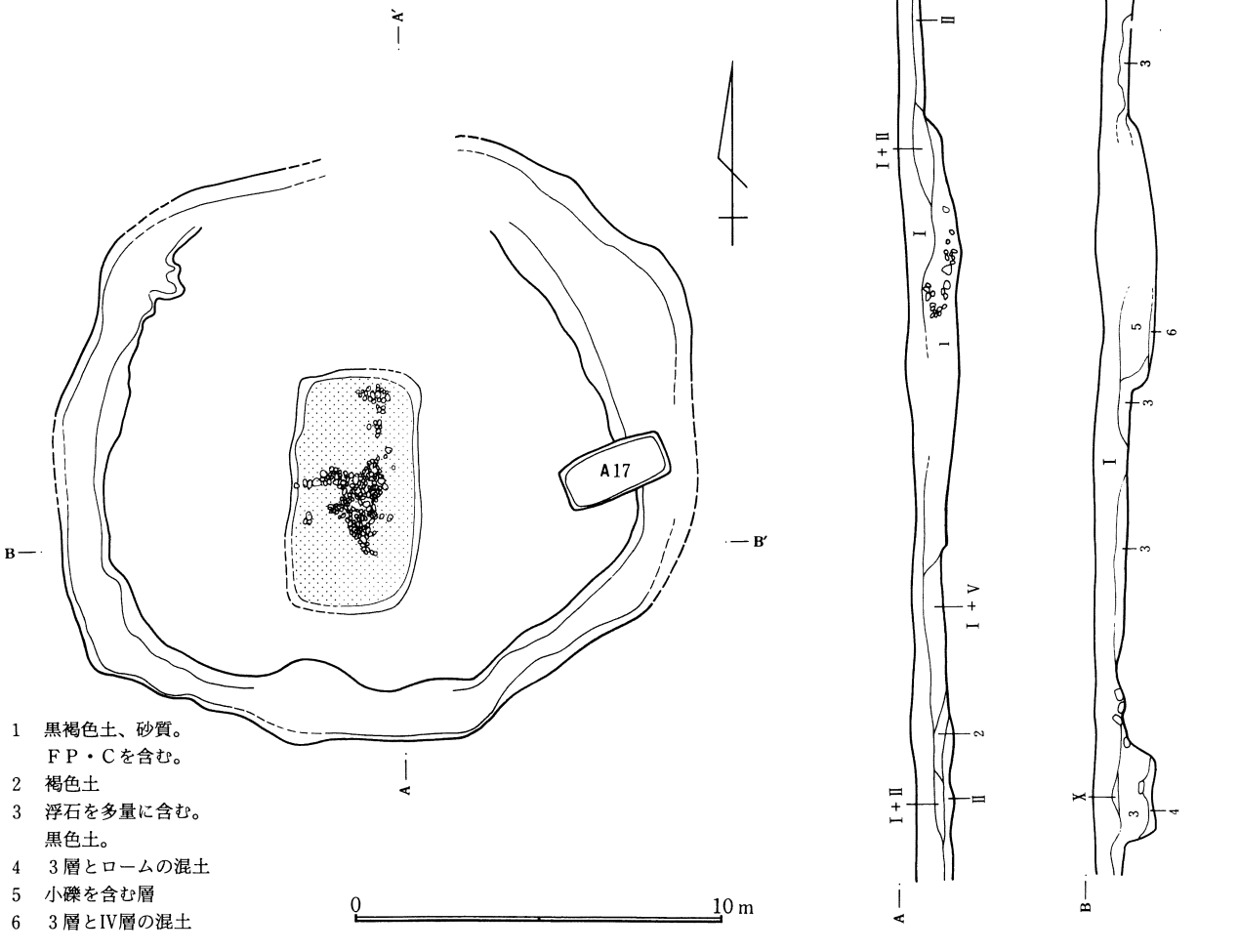
墳丘東側に重複する遺構17は、古墳を切っていることから中近世の土坑と考えられるものである。

周堀覆土　削平が多く残りが良くないが、耕作土下にＦＰ・Ｃ軽石を含む黒色土層が確認される。他に見られるようなＦＡ層は削平によるためか認められなかった。B軽石層が墳丘北側の古墳期後の土坑の覆土上にあること、周堀西側の覆土上にもB軽石層が認められることからみると、この古墳の削平は平安時代までには行なわれて考えられる。

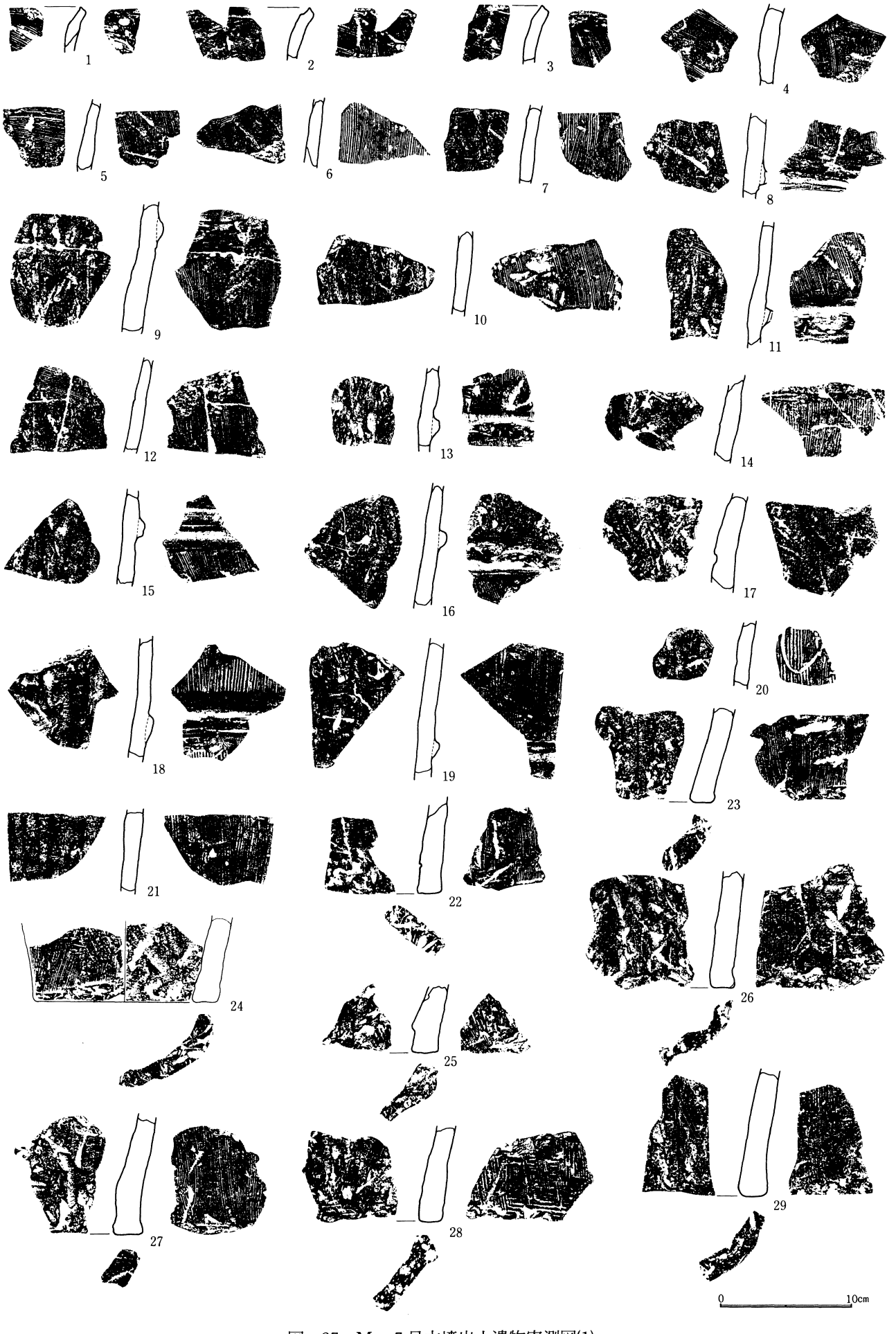
また、周堀内に多量の礫が検出されているが、この礫がB軽石層下の覆土中に含まれることから、周堀内に礫が投棄されたのも平安期以前と考えられる。この2点からみるとかなり早い時期に削平が行なわれたことが考えられる。

出土遺物　円筒埴輪、須恵器、鉄製品等が出土している。

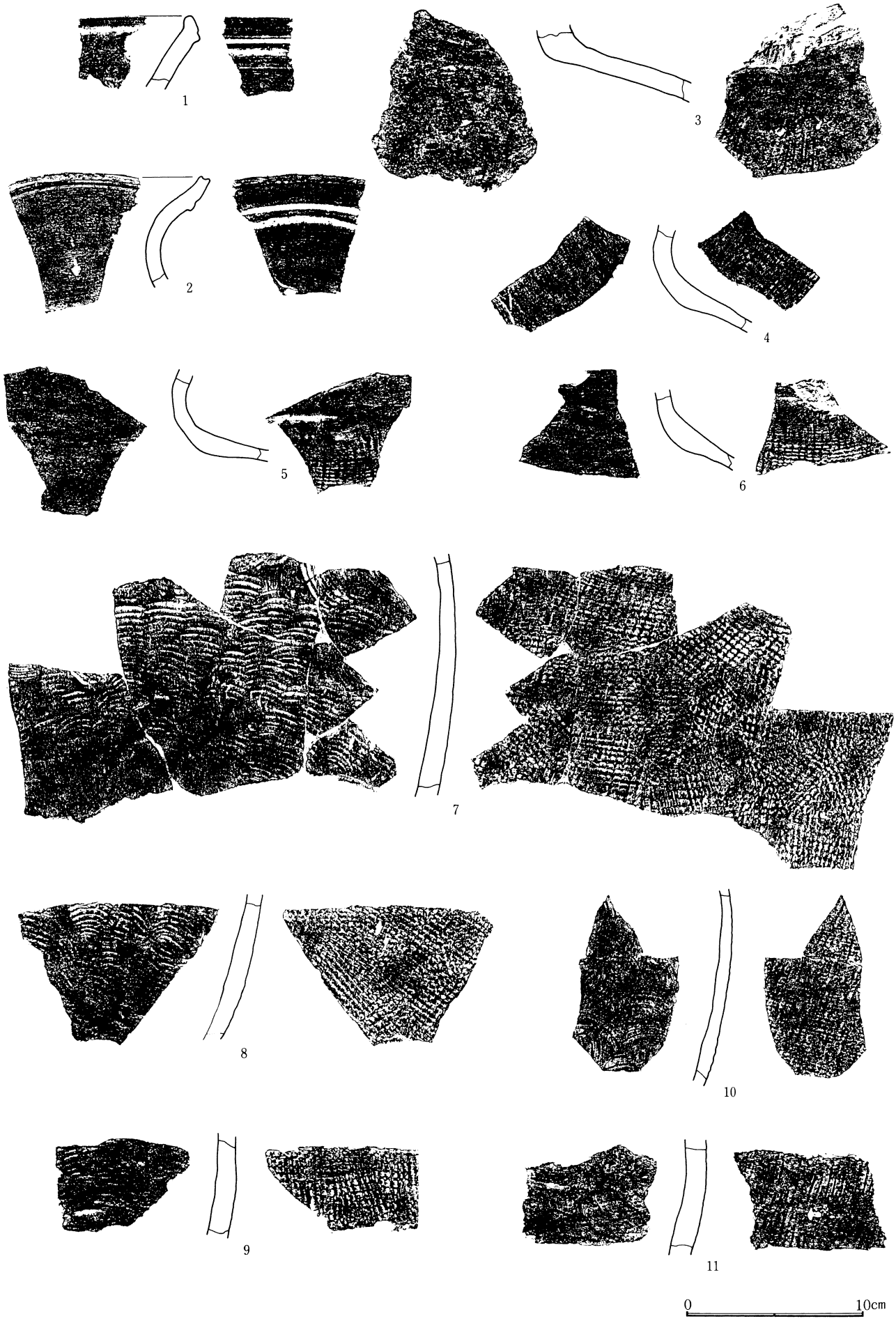
（井野）



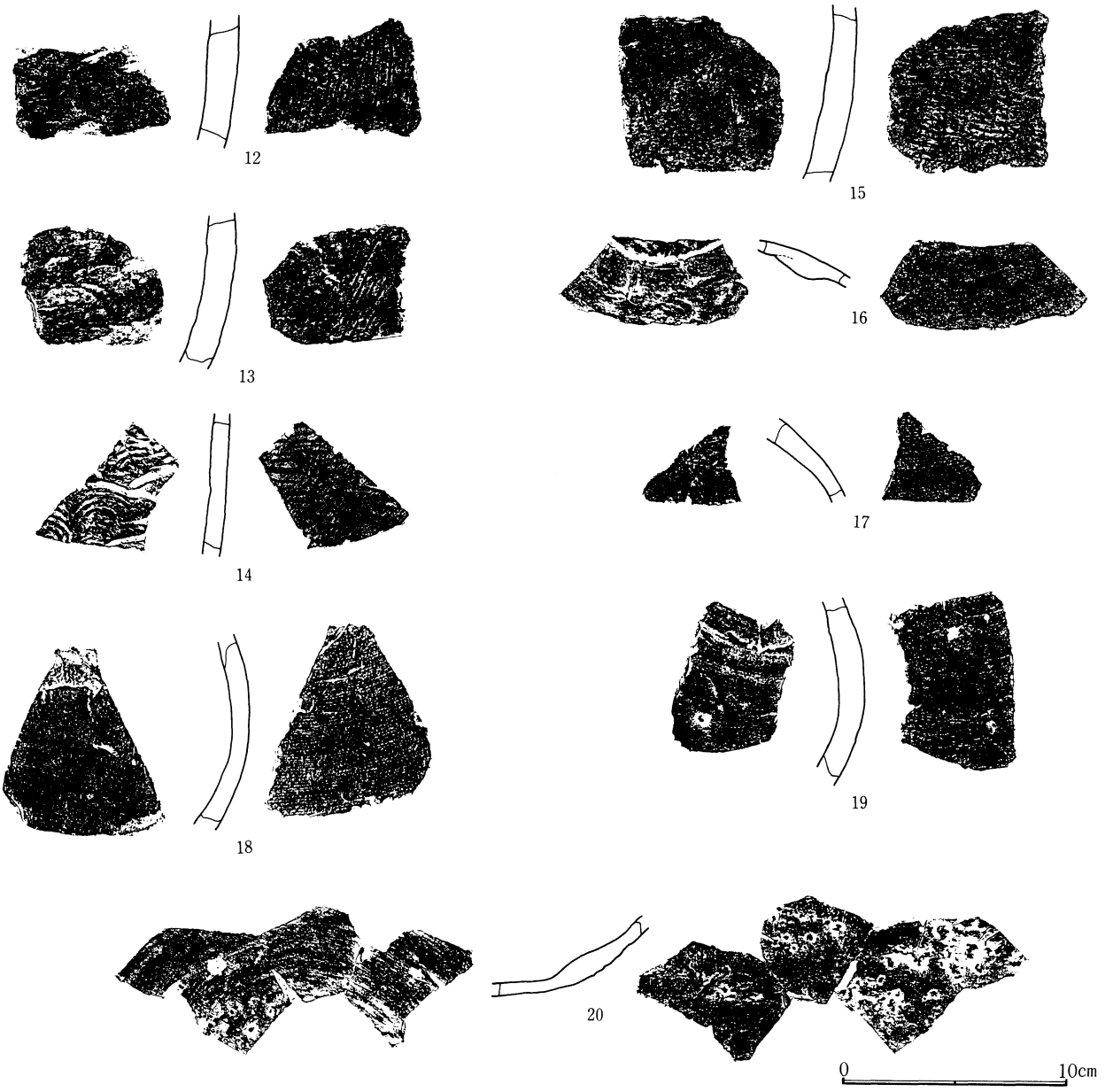
図－26　M－7号古墳平・断面図



図—27　M—7号古墳出土遺物実測図(1)



図—28　M—7号古墳出土遺物実測図(2)



図—29　M—7号古墳出土遺物実測図(3)

M－8号古墳

位置　調査区南東端のタ－0区に位置する。南側5分の1は調査区外のため未堀である。

墳丘　現状から考えると円墳と考えられる。南北（現状）8.8m、東西10.4mを測る。周堀は北側で上巾1.66m、下巾1.02m、東側が上巾1.74m、下巾0.6m。総長は東西13.92m、南北（現状）10.6mを測る。

墳丘はほとんど削平をうけていたが、中央部に礫床の残存部と思われる礫が残っていた。南北約2m、東西約1m、小礫が中心であるが、一部大きいものも含まれる。

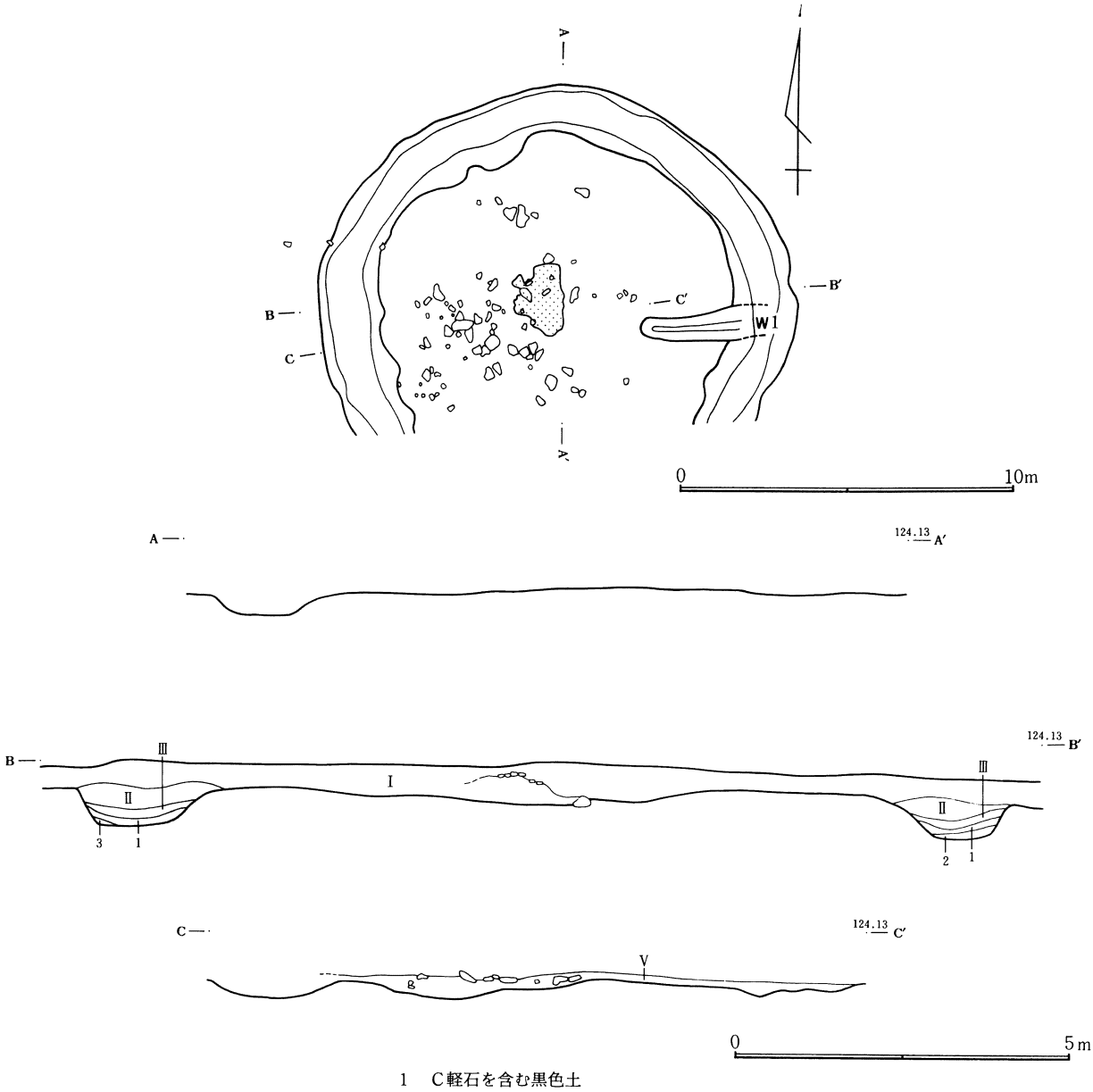
重複関係　墳丘中央を東西にW－1が通っている。W－1は推定礫床手前で終っており、礫床を切っていないことから古墳期以降の新しいものと考えられる。

また、礫床除去後の面より多量の山石が墳丘上より検出された。出土レベルは礫床の下であり、M－8地山となるV層中からも検出されており、古墳形成以前のものと考えられる。

周堀覆土　最下層はロームに近い褐色土層で、その上にC軽石を含む黒色土、その上にFA層が9～14cmの厚さで堆積している。

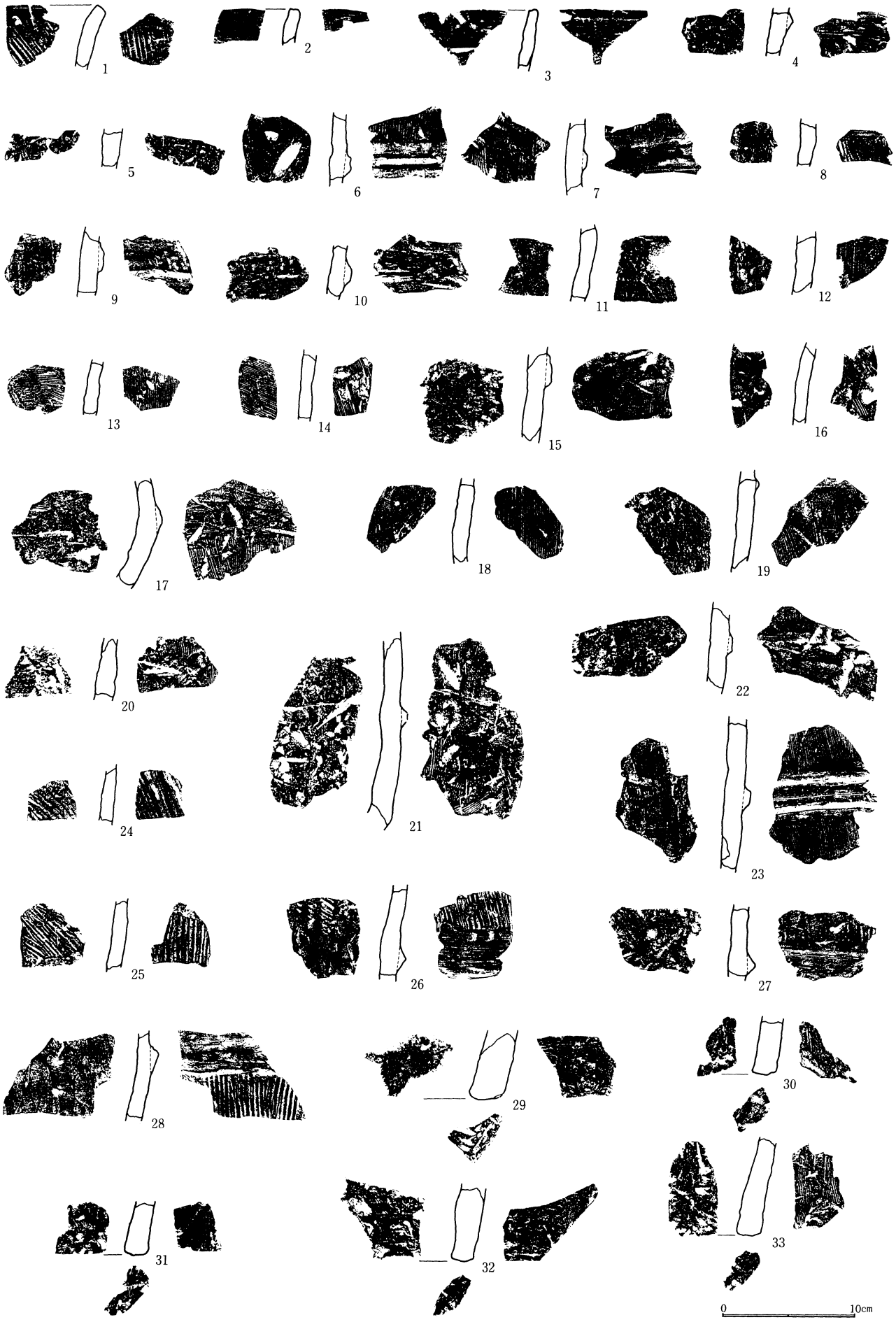
出土遺物　円筒埴輪、須恵器、土師器が出土している。

（井野）

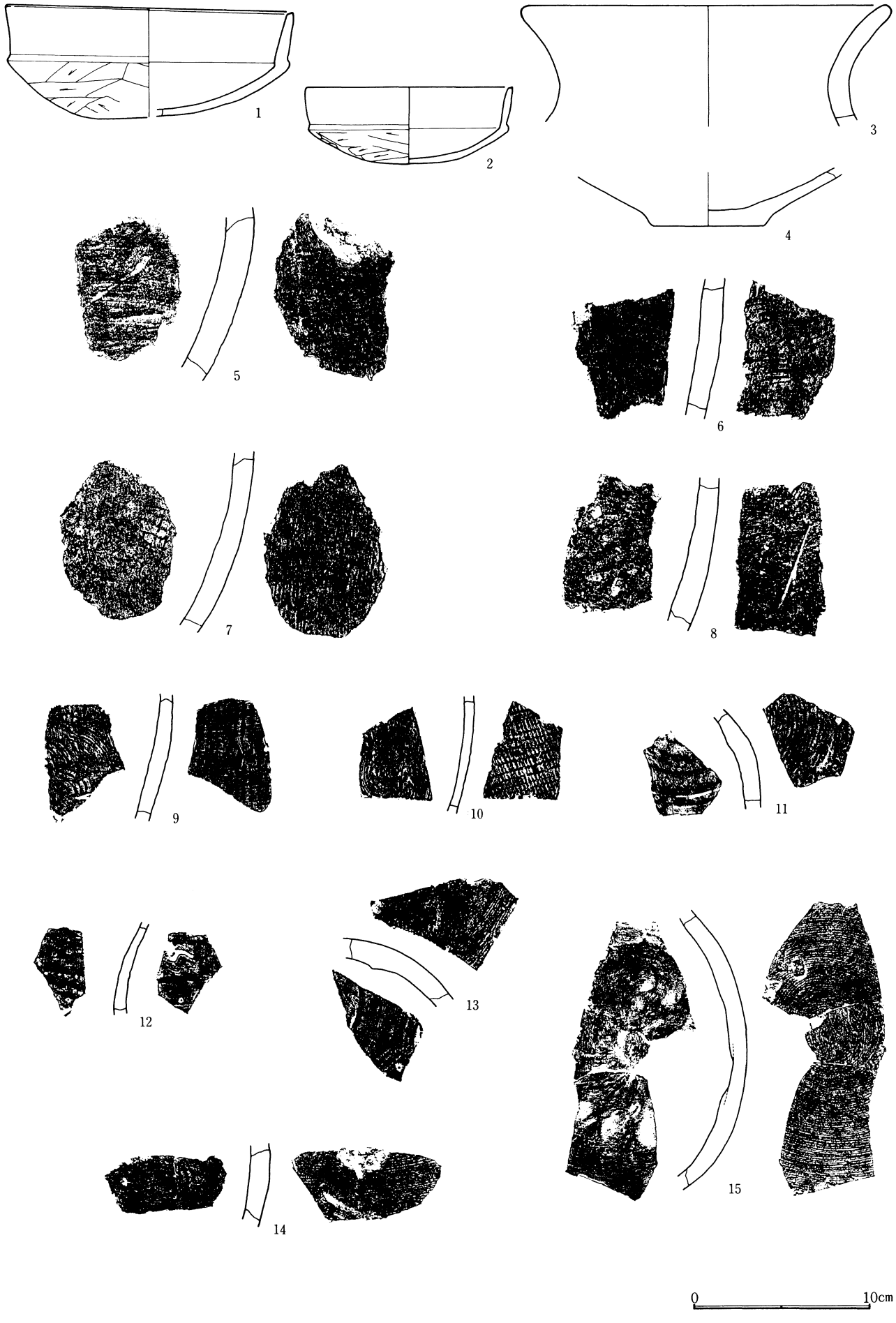


1　C軽石を含む黒色土
2　褐色土
3　ロームブロック

図－30　M－8号古墳平・断面図



図—31　M— 8 号古墳出土遺物実測図(1)



図—32　M—8号古墳出土遺物実測図(2)

M－9号古墳

位置　調査区南端に近いヨ・タ－1区に位置する。周囲にはM－7・8・10・11が位置する。

墳丘　円墳と考えられる。削平をうけている。周囲の古墳との間には重複関係はなく、また周囲の古墳よりやや小ぶりである。東西9.80m、南北9.40mを測る。周堀は南がやや狭く、南は上巾1.0m、下巾0.62mで、北が上巾1.12m、下巾0.86m、東が上巾1.24m、下巾0.95mを測る。

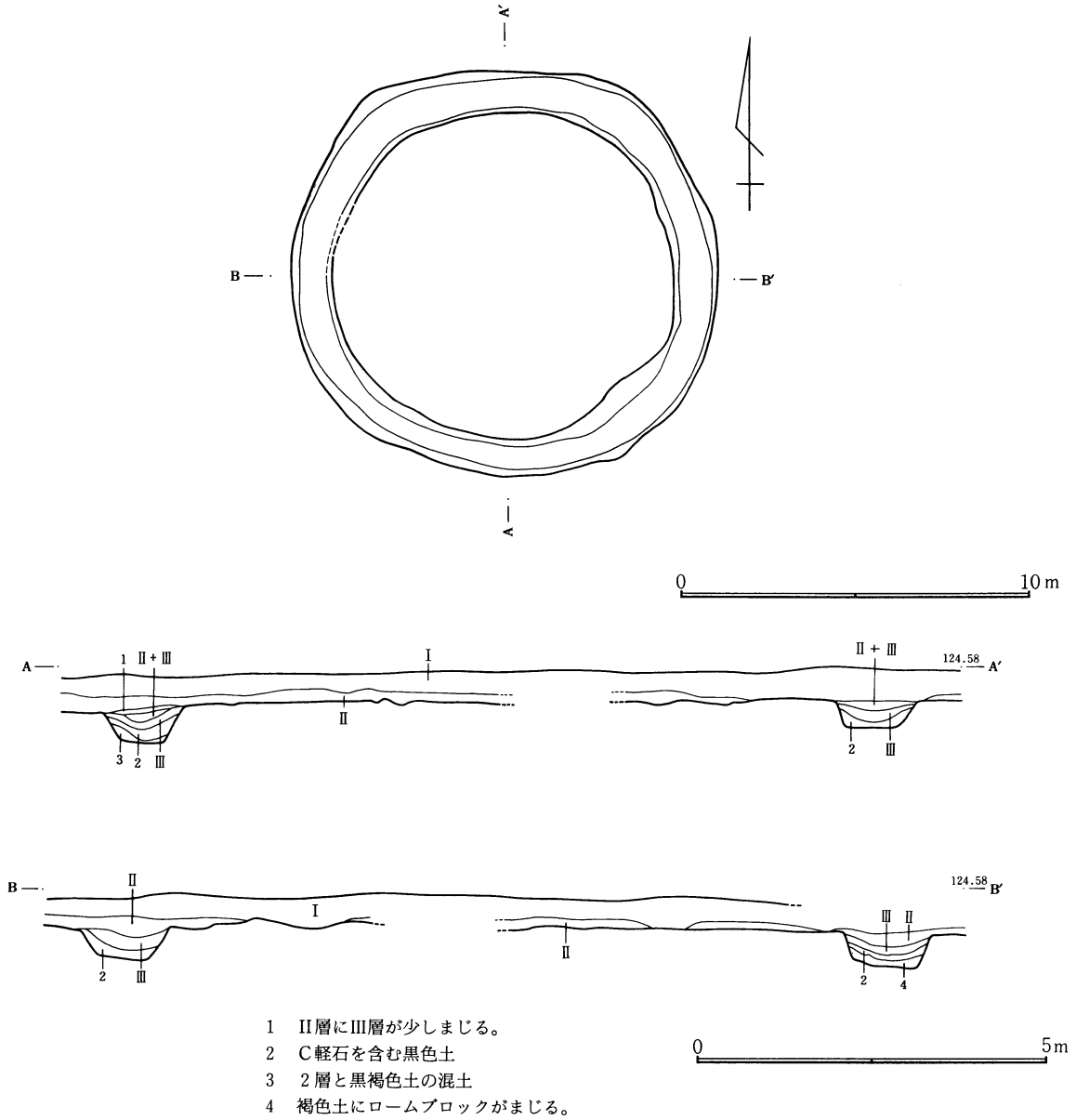
総長は南北11.75m、東西が12.30m。

主体部　削平によるためか不明である。

周堀覆土　最下層はC軽石を含む黒色土で、その上にFA層が約10cmの厚さでレンズ状に堆積している。周堀の切りこみ面を地層断面でみると、浮石を含まない黒褐色土層が地山であり、地山と周堀覆土を含んでFP・C軽石を含む黒色土が覆っている。このことからみると、B軽石が含まれていない土層が削平された墳丘・周堀を覆っていることからこの古墳の削平は平安期かそれ以前のかなり早い時期と考えられる。

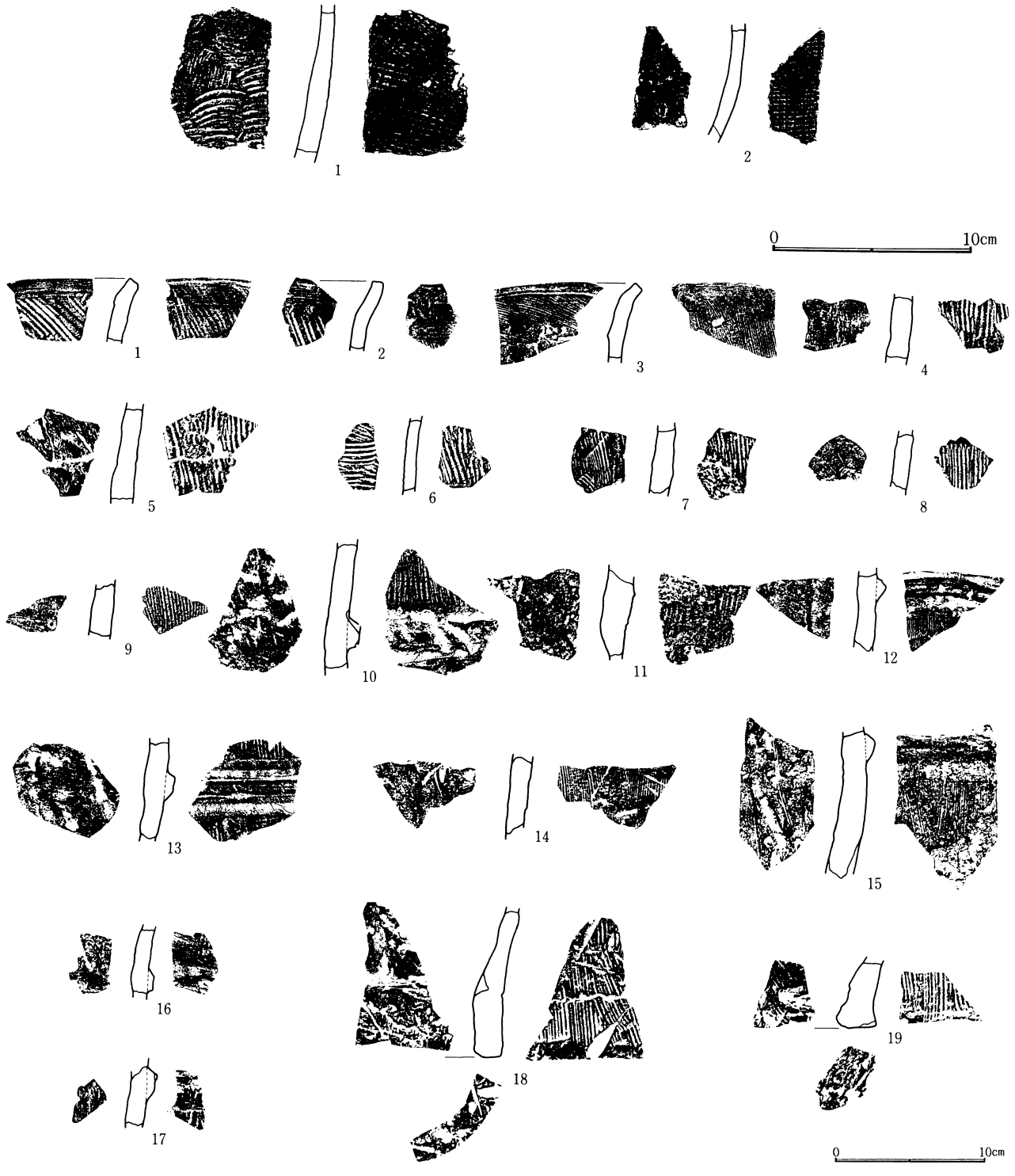
出土遺物　埴輪と須恵器が出土している。

（井野）



1　II層にIII層が少しまじる。
2　C軽石を含む黒色土
3　2層と黒褐色土の混土
4　褐色土にロームブロックがまじる。

図－33　M－9号古墳平・断面図



図—34　M—9号古墳出土遺物実測図

M—10号古墳

位置　調査区南端に近いカ・ヨ—1・2区に位置する。北にM—14、東にM—9・13が位置する。M—10の西には古墳が検出されていないことからM—10は古墳群の西縁に位置すると考えられる。

墳丘　削平をうけているが円墳と考えられる。南北が13.00m、東西が13.05mを測る。周堀は北側がM—14との係わりで狭く変形しているが、他はほぼ同じである。北側は上巾1.2m、下巾0.84m、南側が上巾2.04m、下巾が1.14mである。総長は南北16.00m、東西17.25m。

周堀の北西部がやや張り出してみえるのはI—3の堀削による変形によるもの。

周堀北東部に「渡り」がみられる。巾72cm、長さ116cm。

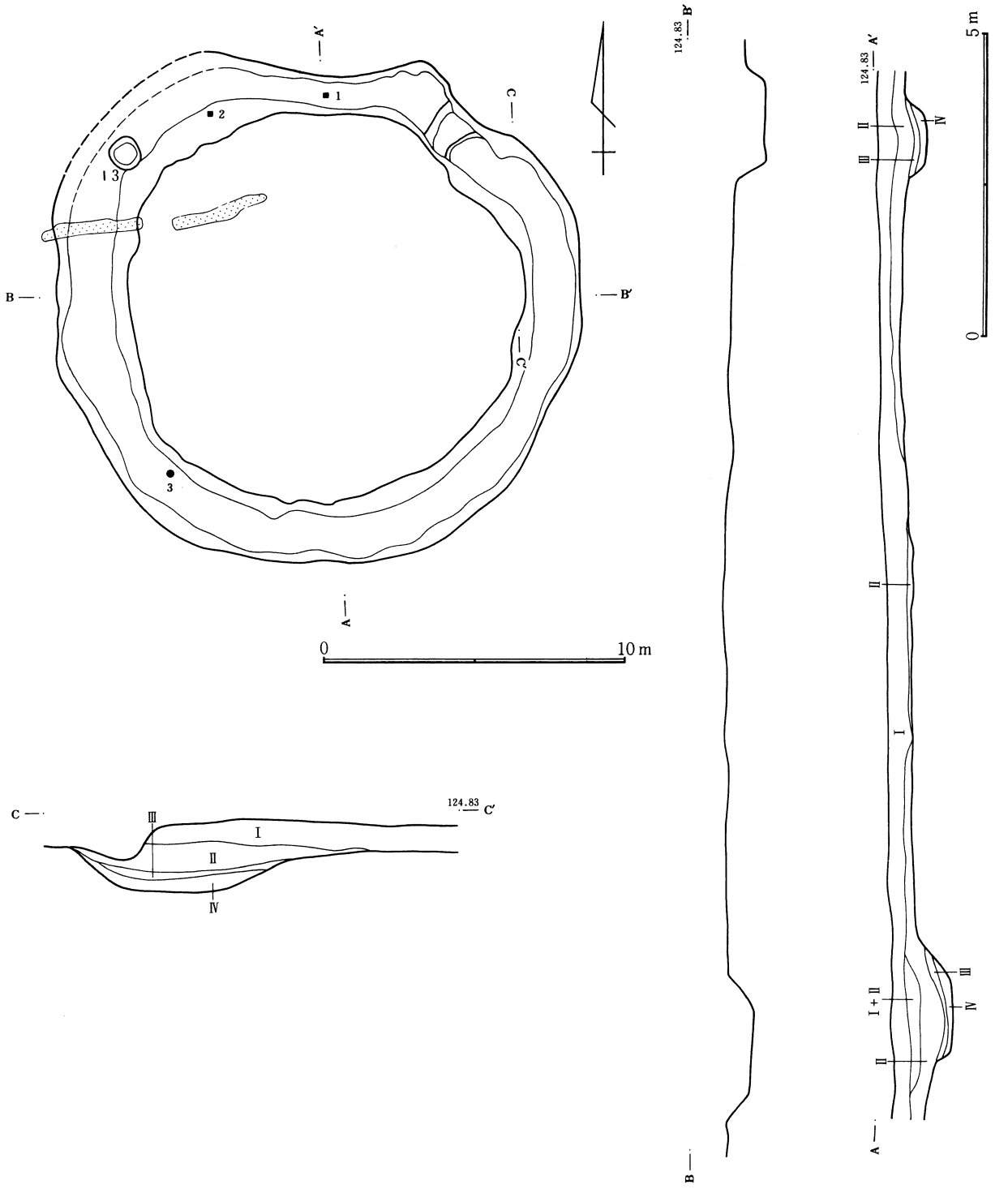
主体部　削平をうけたため不明である。墳丘北東に小石列がみられるが係わりは不明である。

周堀覆土　最下層は浮石を多少含む黒色土で、その上にＦＡが８～10cmの厚さでレンズ状に堆積している。その上の浮石を含む黒色土がＦＡ層の上と削平された墳丘上を覆い、その上にＢ軽石を主とした土層がみられる。この点からみると、この古墳もＢ軽石降下以前の平安期かそれ以前に削平されたものと考えることができる。

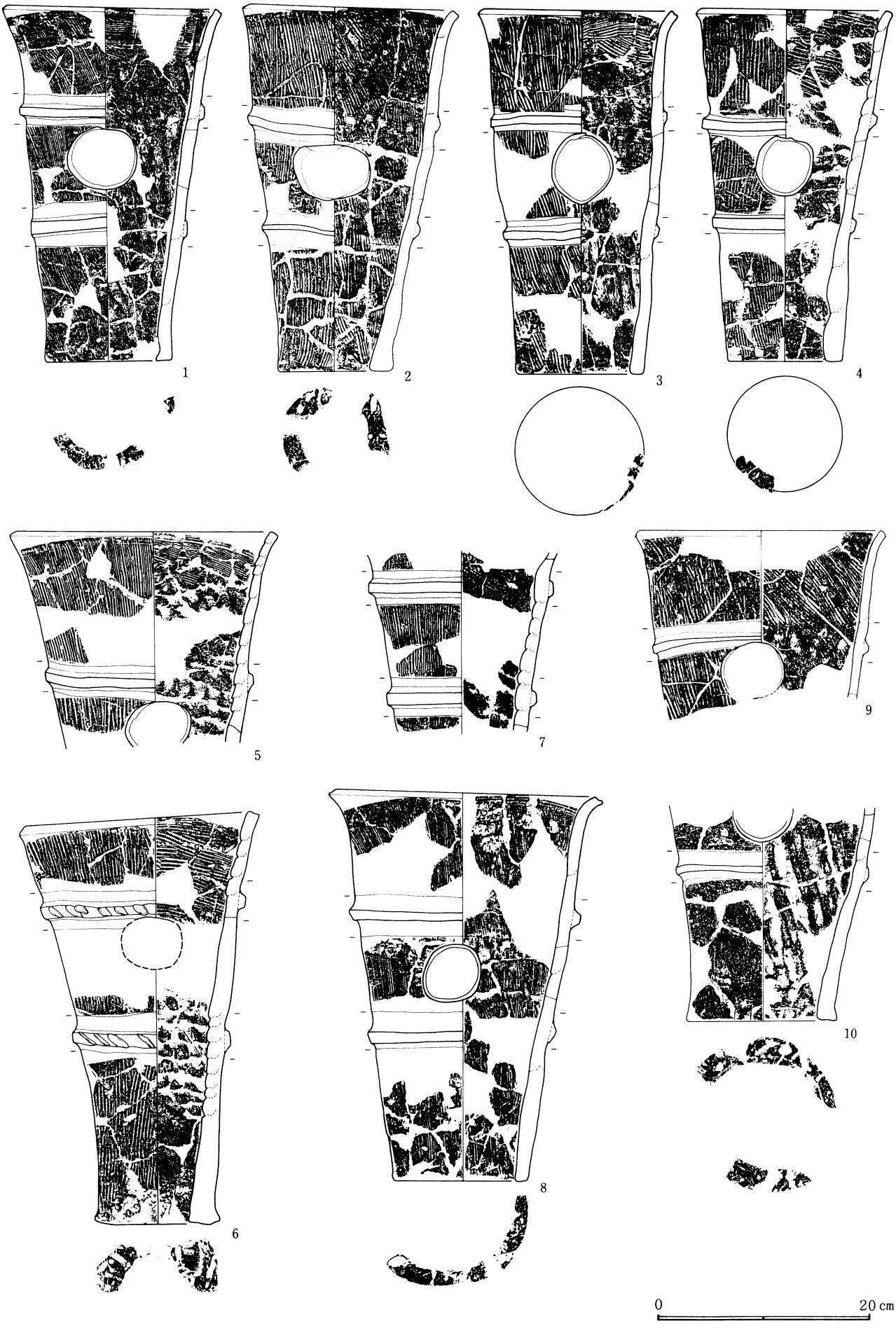
重複関係　重複する遺構はなく、北側でM—14が接している。M—14は円形でゆがみはないが、M—10の周堀がM—14に接する地点で変形し、重複を避けるように作られているので、M—14が旧く、M—10が新しいと考えることができる。北西でＩ－３と重複する。Ｉ－３が新しいか。

出土遺物　多数の円筒埴輪と土師器、須恵器、鉄製品が出土している。

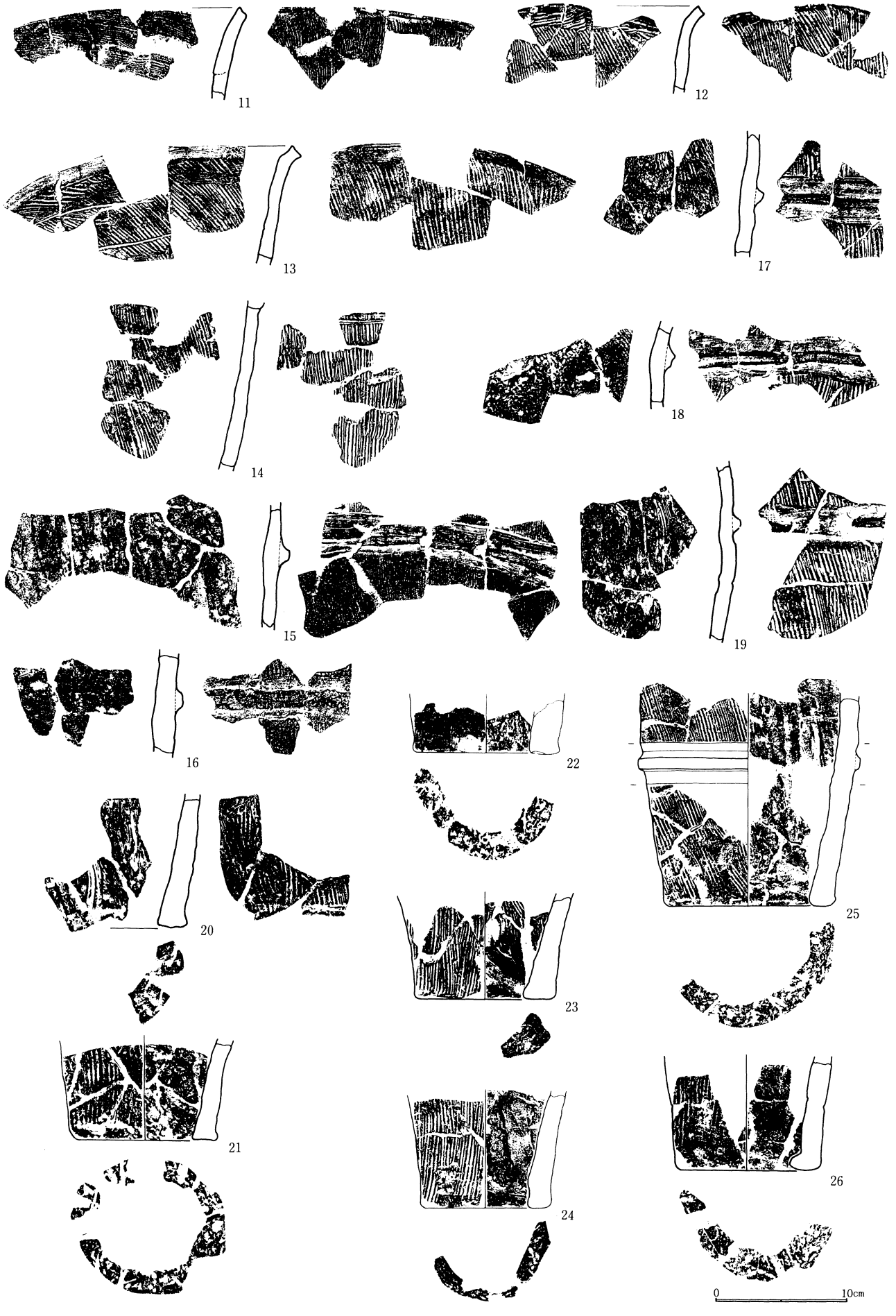
（井野）



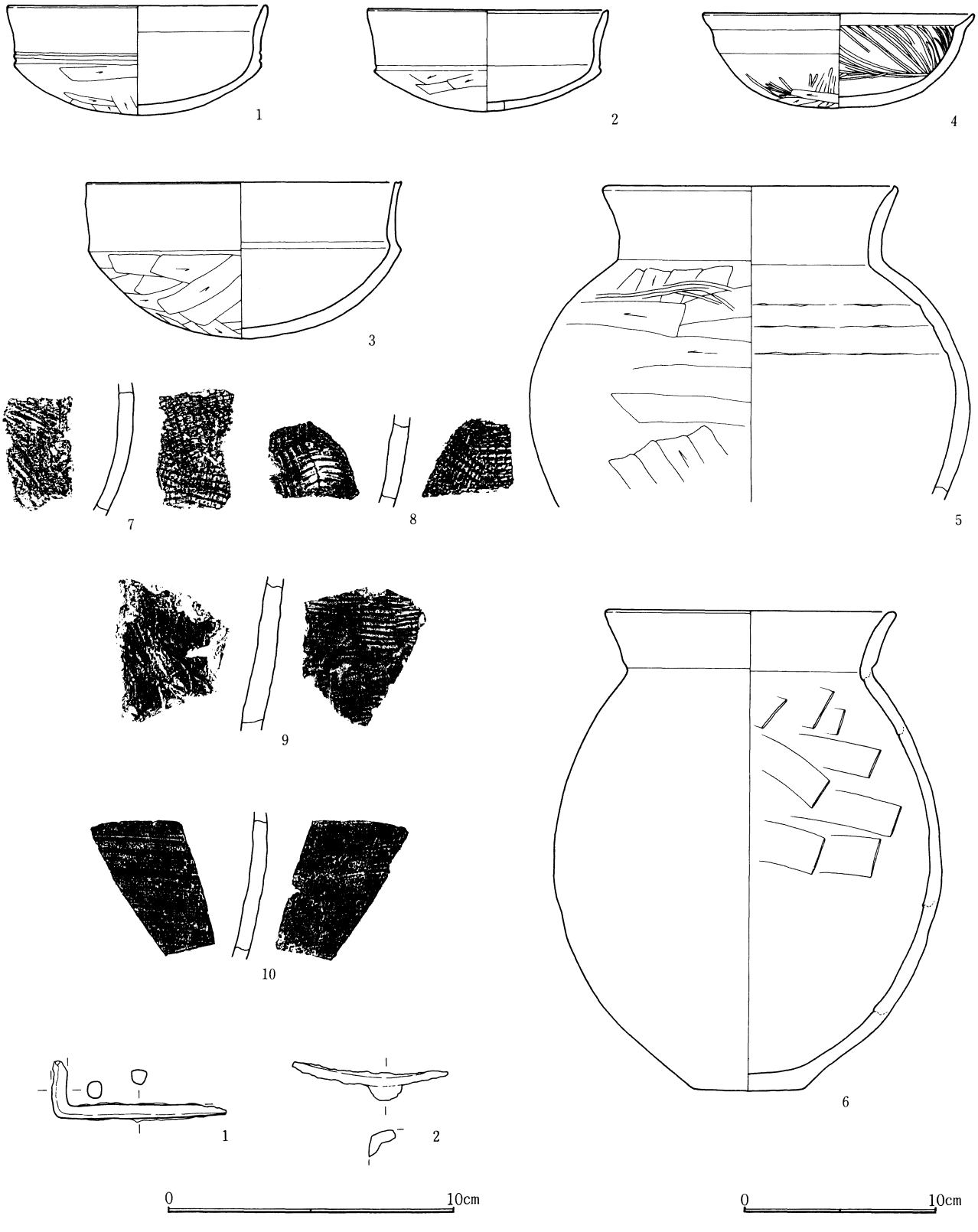
図—35　M—10号古墳平・断面図



図—36　M—10号古墳出土遺物実測図(1)



図—37　M—10号古墳出土遺物実測図(2)



図—38　M—10号古墳出土遺物実測図(3)

M—11号古墳

位置　調査区南端のヨ—0に位置する。墳丘の大部分は調査区外になる。地形からみると古墳群の南にあたる古墳とも考えられる。

墳丘　検出部が少なく、また削平をうけてはいるが、円墳と考えられる。現状で東西の最大長が7.20m、周堀は北側で上巾1.12m、下巾0.7m。総長は東西（現状）で10.26mを測る。

主体部　調査区外ではあるが、調査地点の状況からみて削平されていると考えられる。

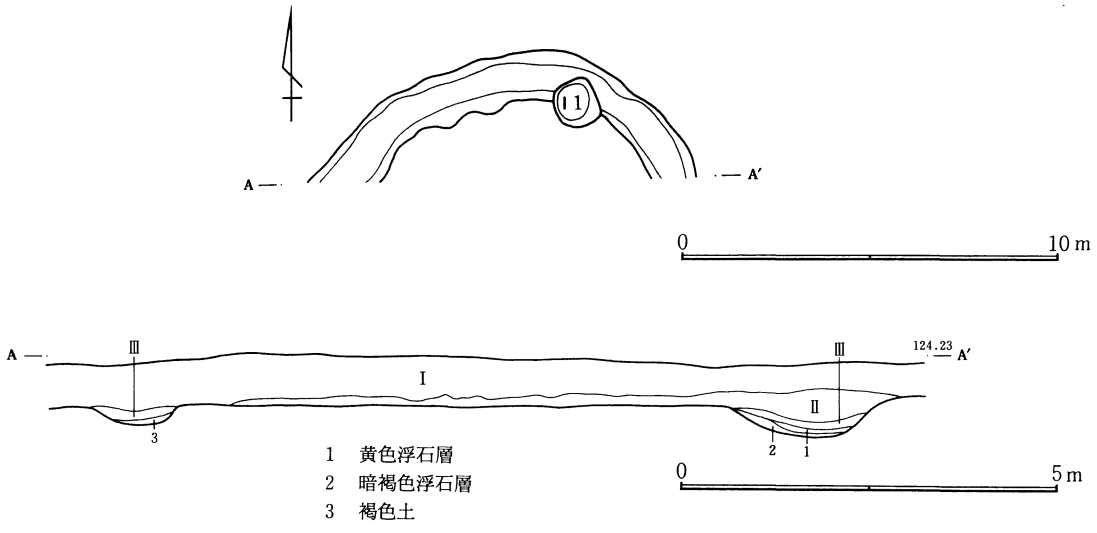
周堀覆土　周堀の最下層にＦＡ層が８～14cmの厚さでレンズ状に堆積している。断面でみると、ＦＡ降下直前まで周堀の機能は生きていたものと考えられる。

重複関係　井戸１と重複する。井戸１は地層断面でみるとＢ軽石を主として含む土層で埋まり、周堀のＦＰ層を切っていることから古墳削平後作られ、Ｂ軽石降下後まで使われ、その後埋められたものと言える。

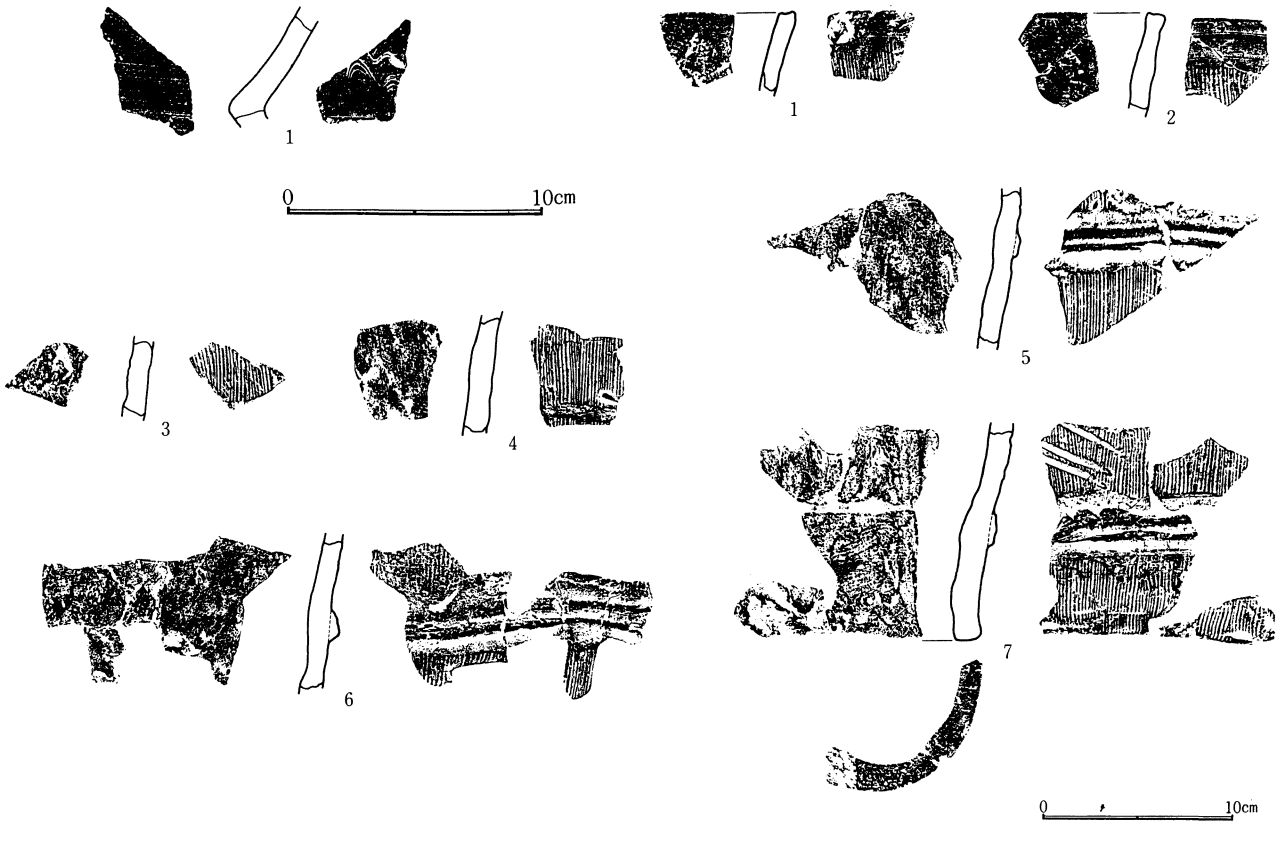
また、古墳東側に位置する、方形ピット１も井戸１と同じ土で埋められており、重複はしていないが、Ⅰ′－１同様の新しいものと言える。

出土遺物　円筒埴輪と須恵器が出土している。

（井野）



図－39　M－11号古墳平・断面図



図－40　M－11号古墳出土遺物実測図

M－12号古墳

位西　調査区南端のヨ－０・１、タ－０区に位置する。北にM－９、南にM－11が位置する。

墳丘　削平をうけているが、円墳と考えられる。南北11.48m、東西11.14mを測る。周堀は北から東にかけてやや狭く、北が上巾1.1mで下巾0.66m、東が上巾1.06mで下巾0.68mであるが、南は上巾1.46mで下巾0.98m、西が上巾1.44mで下巾1.04mと広くなっている。総長は東西13.76m、南北13.92mを測る。

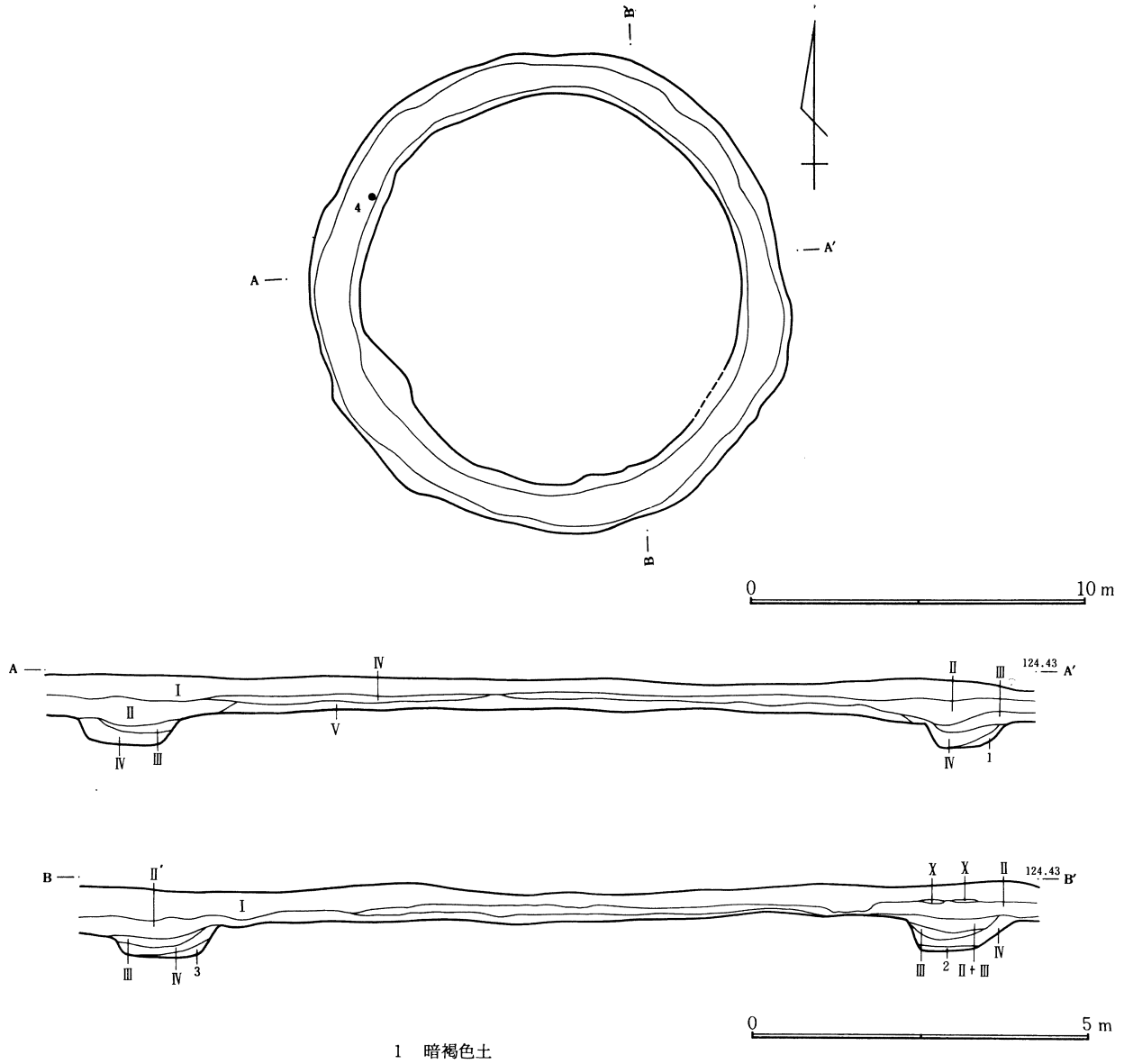
主体部　削平されたものと考えられる。

周堀覆土　下層のC軽石を含む黒色土上にＦＡ層が厚さ10～13cmでレンズ状に堆積している。また、墳丘部全体をＦＰを多量に含む黒色土が覆っており、その上にB軽石層が検出されていることから、この古墳の削平はB軽石降下のかなり以前と言える。墳丘を覆う土にＦＰが多く含まれる点からみると、ＦＰ降下前に削平がすでにあり覆土となったとも考えられる。

重複関係　西側で井戸２が接するが、新旧は不明。井戸２は井戸１と同じく新しいものか。

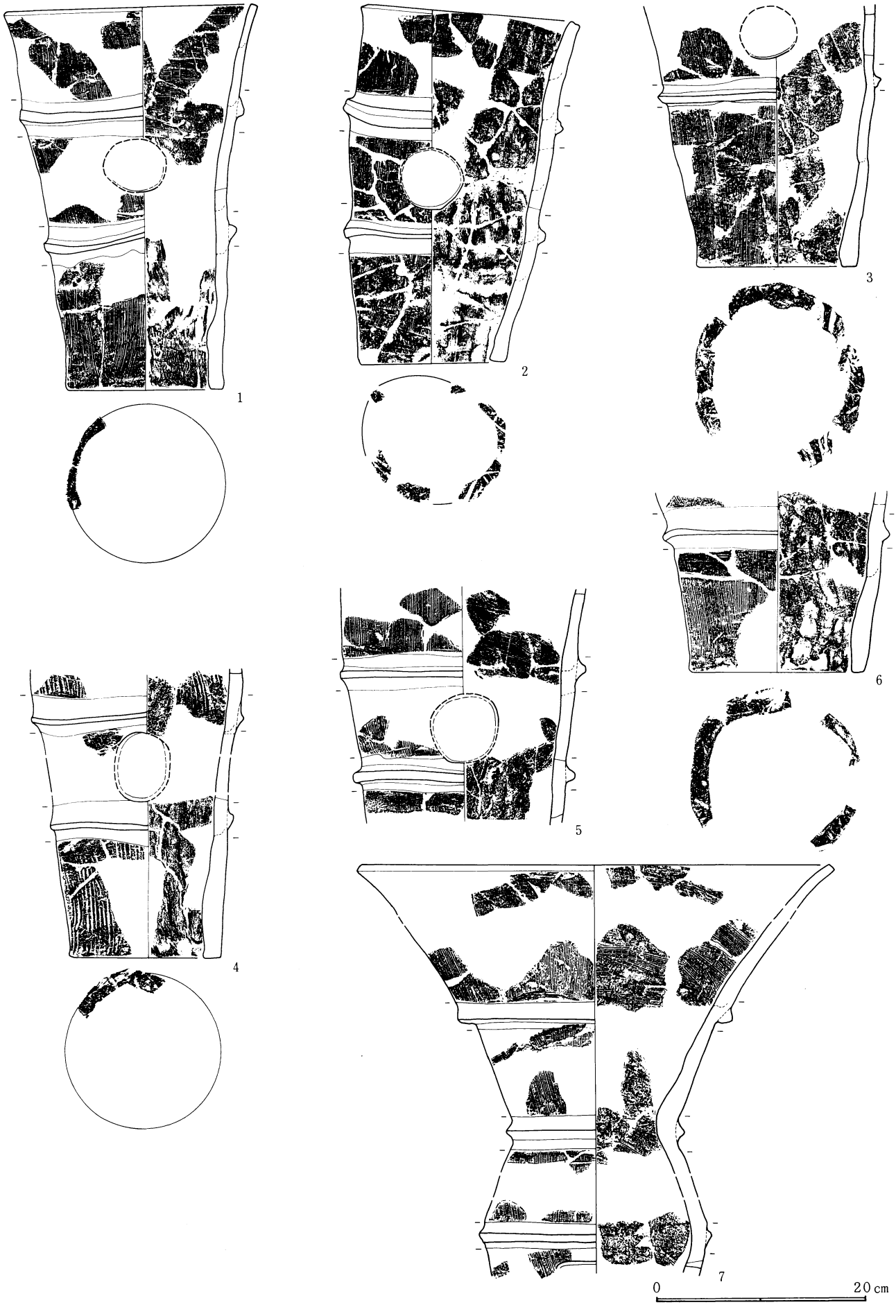
出土遺物　円筒埴輪、朝顔型埴輪、土師器、須恵器、鉄製品が出土している。

（井野）

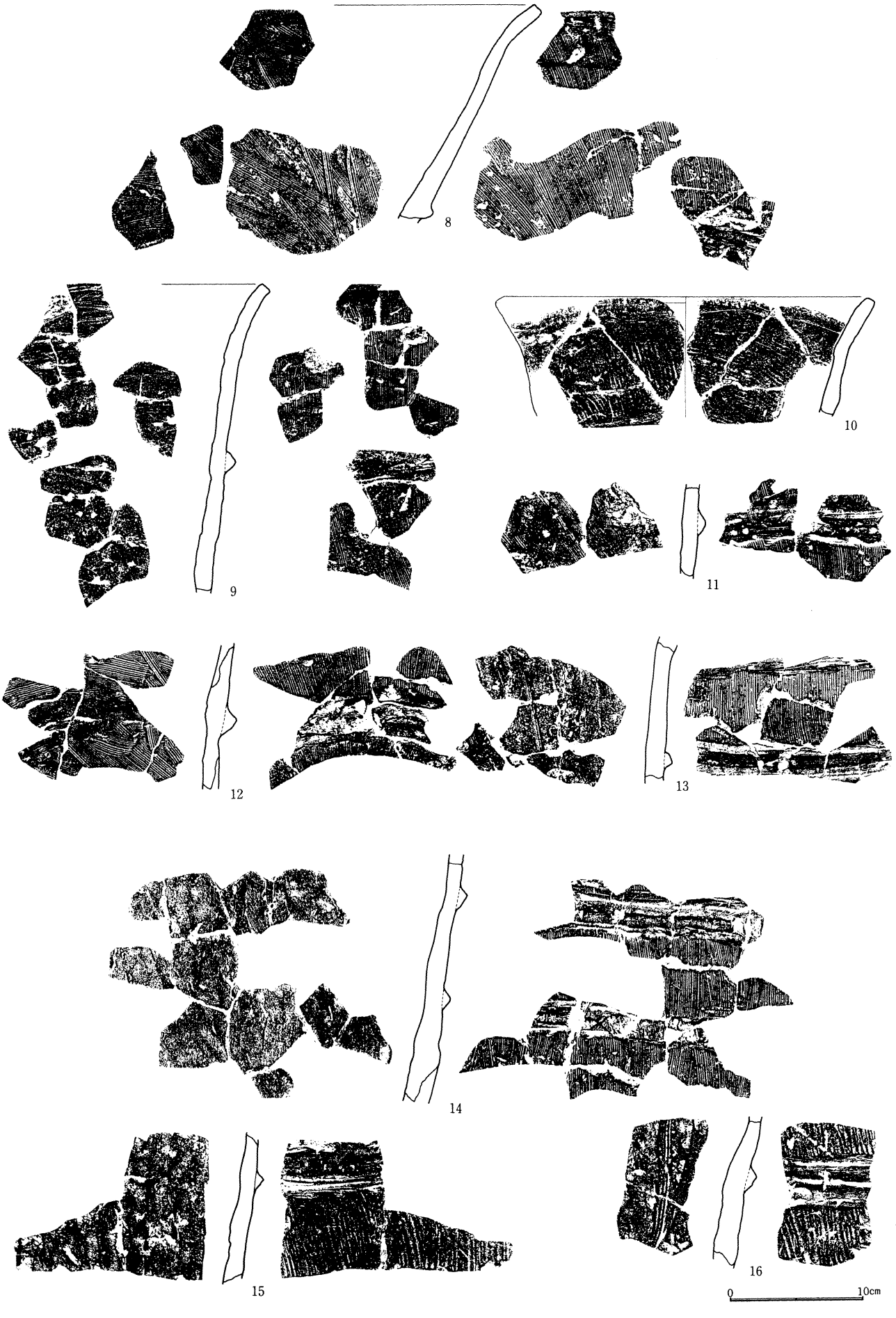


1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　黒色土と褐色土の混土。

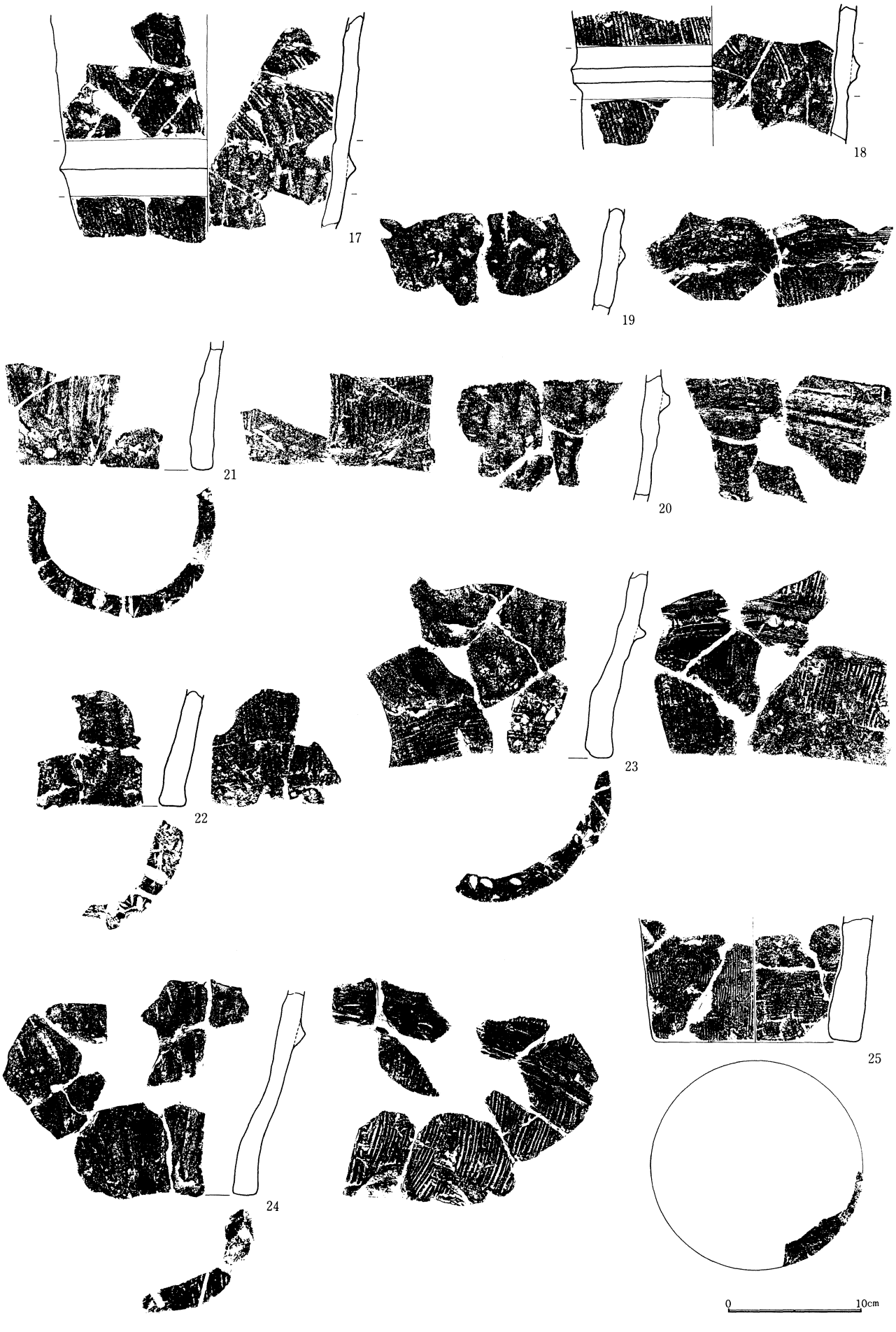
図－41　M－12号古墳平・断面図



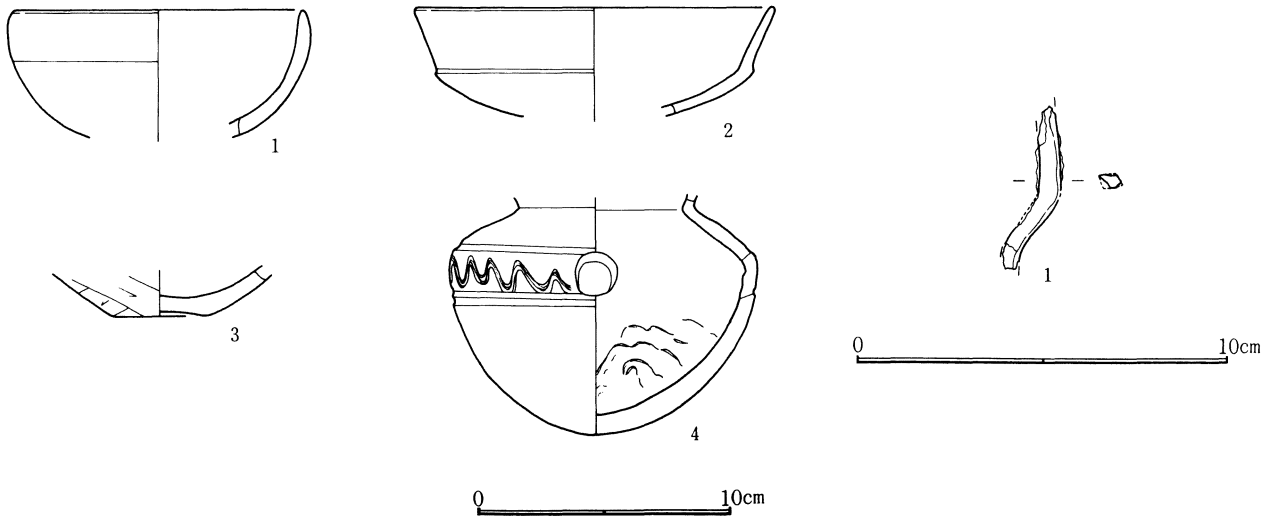
図—42　M—12号古墳出土遺物実測図(1)



図—43　M—12号古墳出土遺物実測図(2)

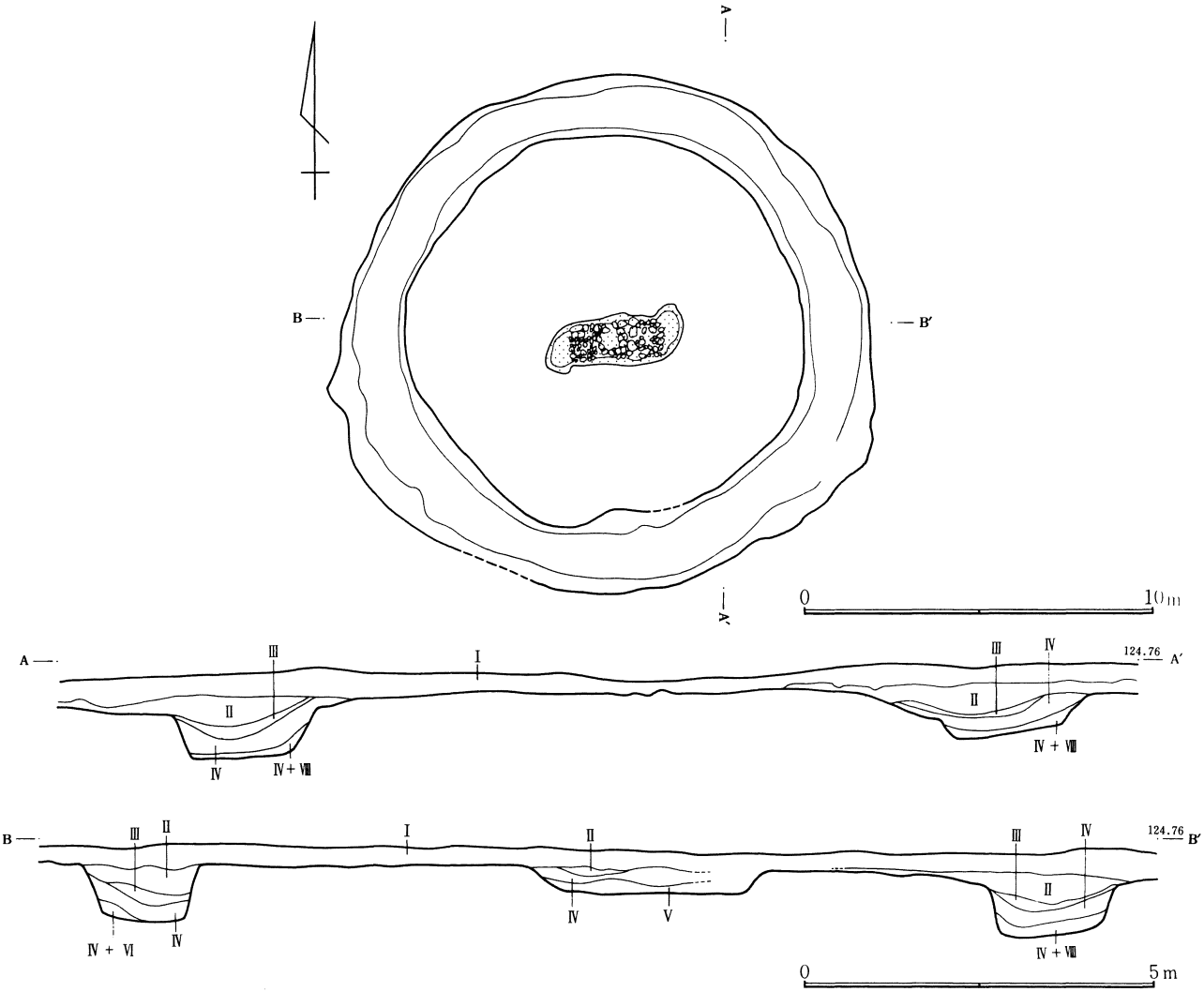


図—44　M—12号古墳出土遺物実測図(3)



図—45　M—12号古墳出土遺物実測図(4)

M—13号古墳



図—46　M—13号古墳平・断面図

位置　調査区南東のヨ・タ—1・2区に位置する。西にM—10・14、東にM—6が位置する。

墳丘　削平をうけているが円墳と考えられる。南北10.8m、東西11.12mを測る。周堀は南から東がやや広く、南は上巾1.8m、下巾1.2mを測る。総長は南北14.44m、東西14.76m。

主体部　墳丘中央に東西3.8m、南北1.2mの長方形の掘り込みがみられる。内部には東西2.5m南北1.0mの範囲で石

敷きが残されていた。石の大きさは大小さまざまであるが、下層が小礫でその上層に、径20cmほどの山石が並べてあり、位置、形態からみると石室の礫床と思われる。

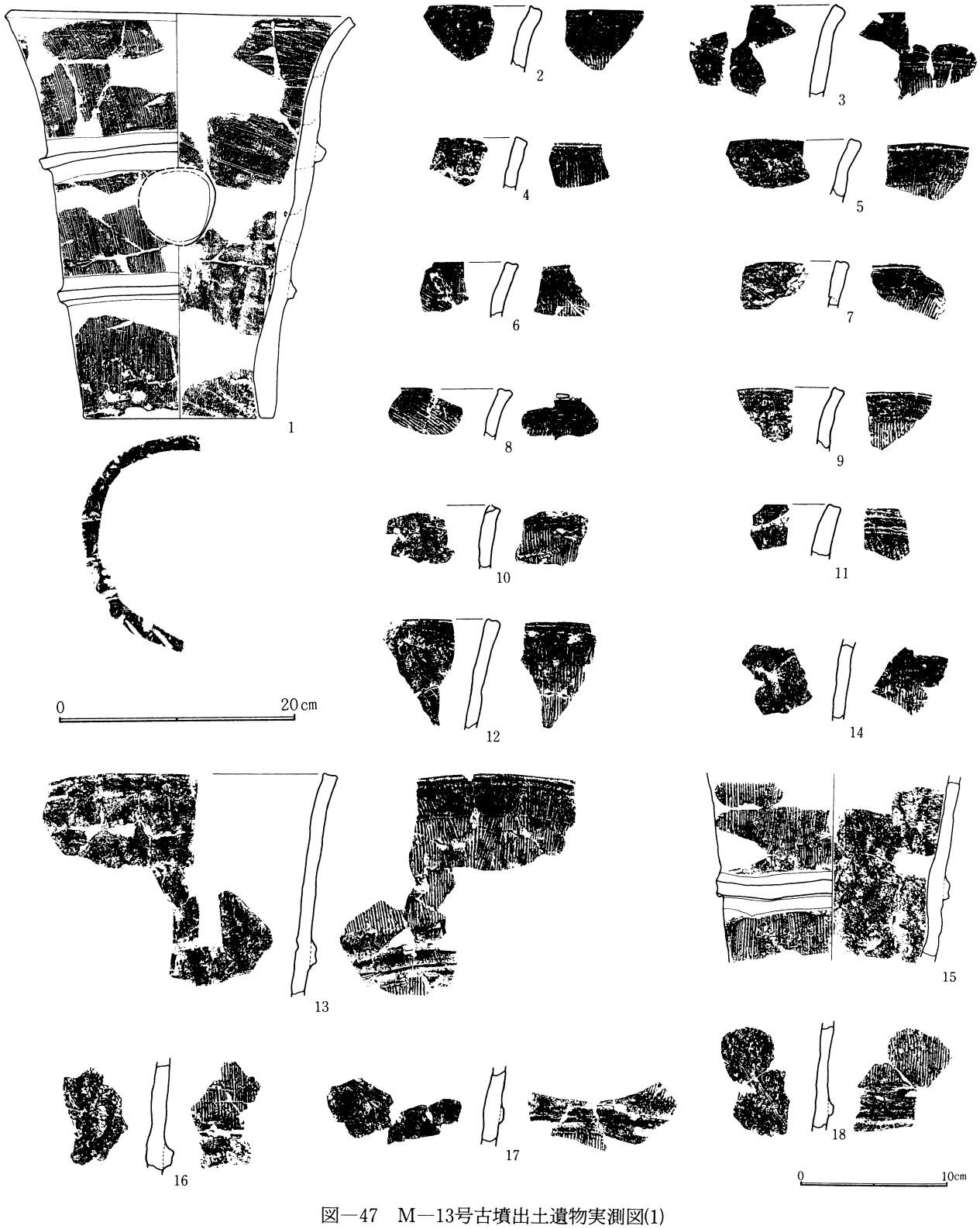
石を除去した後の精査では、東西2.5m、南北1.0mの長方形の掘り形が検出された。石室掘り形か。

周堀覆土　周堀はほとんどC軽石を含む黒色土（厚さ25cm）で埋まり、その上にFA層が厚さ8～10cmでレンズ状に堆積している。その上は古墳の外側を含めFPを多量に含む黒色土が埋めており、この土層の堆積前の削平と考えられる。

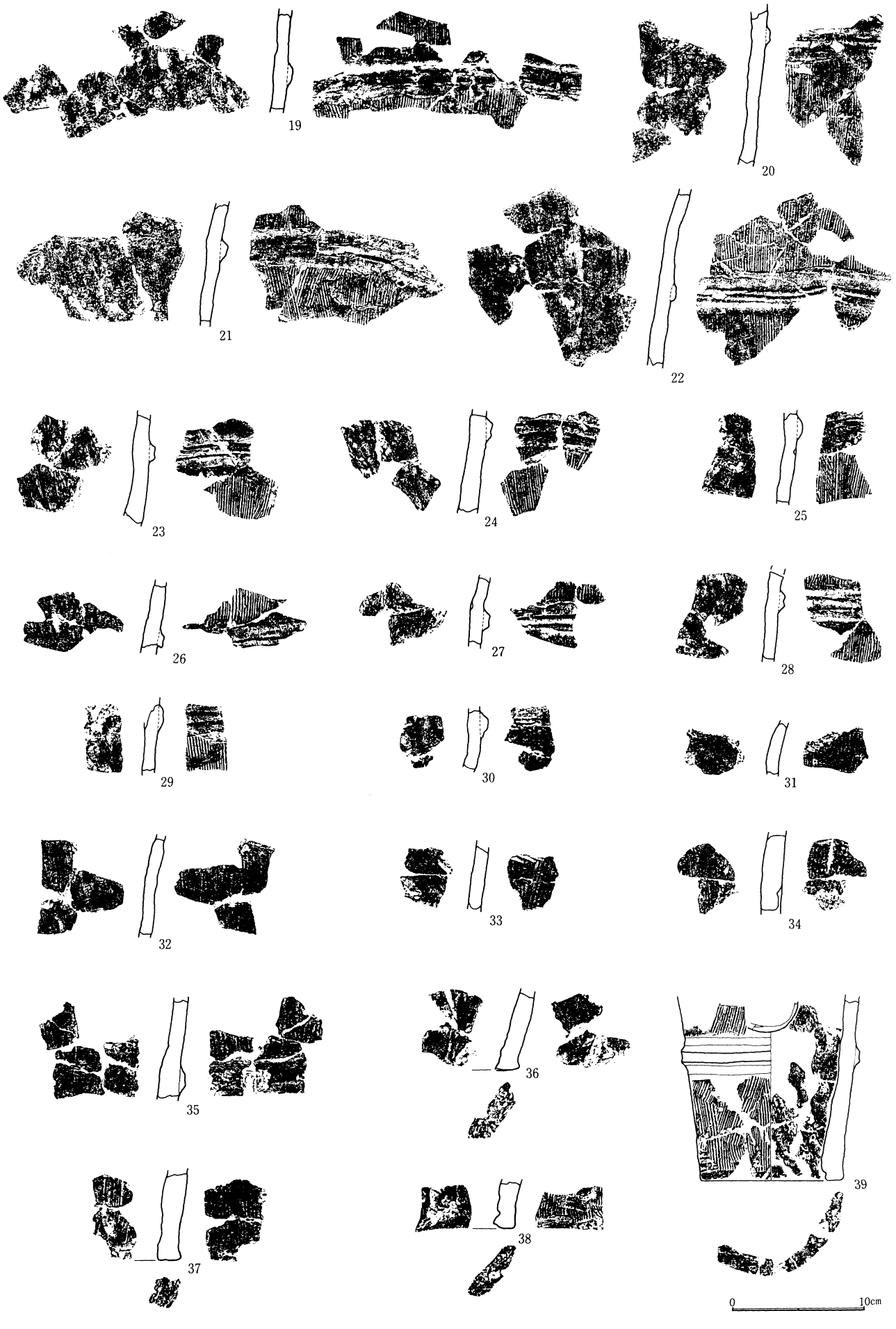
重複関係　なし

出土遺物　円筒埴輪が出土している。

（井野）



図－47　M－13号古墳出土遺物実測図(1)



図—48　M—13号古墳出土遺物実測図(2)

M—14号古墳

位置　調査区南東のカ・ヨ－２区に位置する。南側にM—10、東側にM—13が位置する。

墳丘　南から東にかけてややすぼまった円墳と考えられる。墳丘はすでに削平をうけていた。南北12.26m、東西12.4.mを測る。周堀は東から南がかなり狭くなっている。北が上巾3.32m、下巾1.92m、西が上巾2.48m、下巾1.56mと広いが、南側は上巾1.56m、下巾1.12m、東側が上巾1.02m、下巾0.42mと狭い。このように狭くなっているのは東側にあるM—13を意識し、重複を避けるためのものも考えられる。これは、周堀覆土中のＦＰ層が、M—13では比較的上位層にあるのに対して、M—１４では中下層にみられることからも考えることができる。

総長は南北17.0m、東西16.08mを測る。

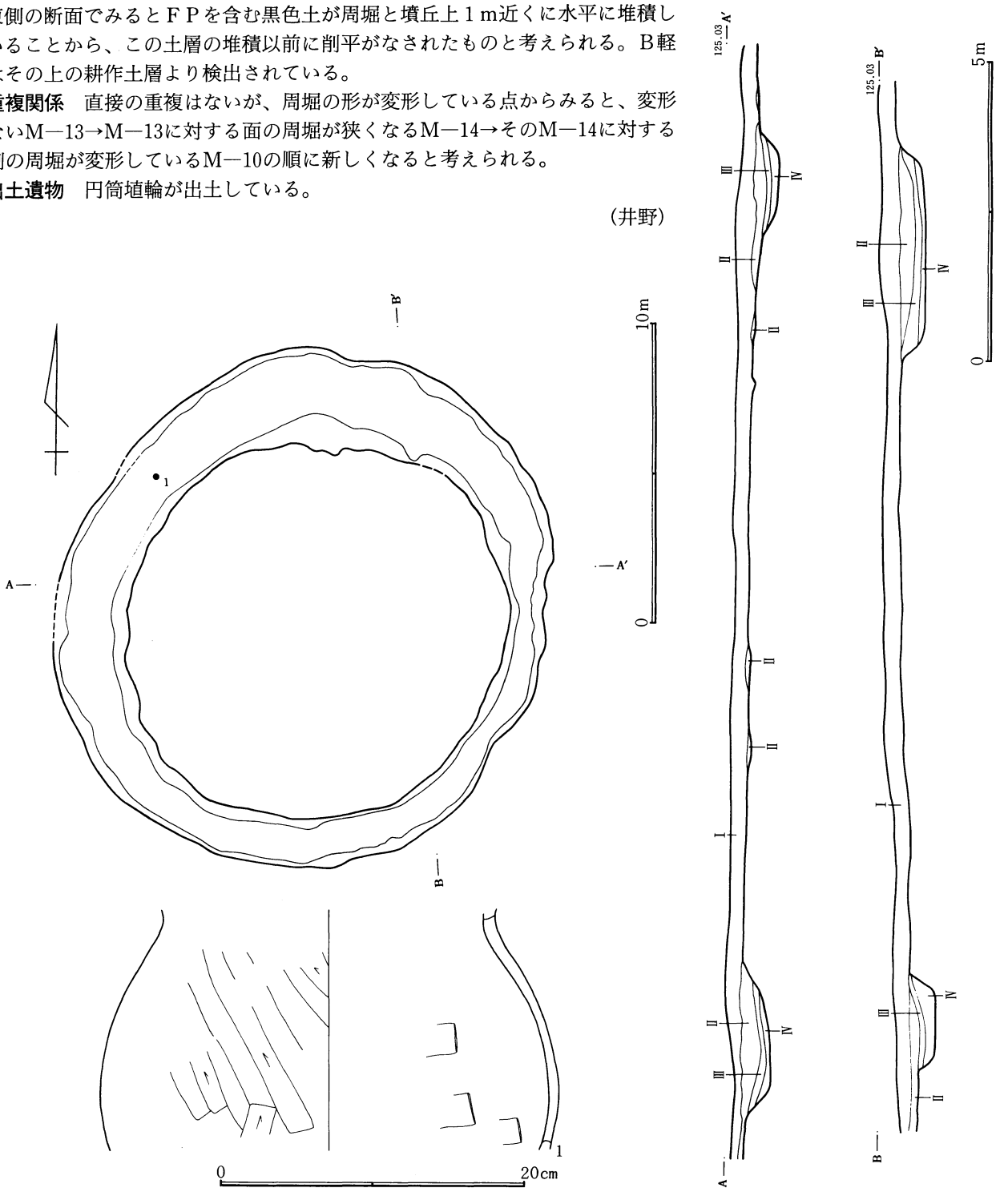
主体部　削平されていると思われる。不明。

周堀覆土　最下層にはＣ軽石を含む黒色土が堆積し、その上にＦＡが６～８cmの厚さでレンズ状に堆積している。周堀東側の断面でみるとＦＰを含む黒色土が周堀と墳丘上１m近くに水平に堆積していることから、この土層の堆積以前に削平がなされたものと考えられる。Ｂ軽石はその上の耕作土層より検出されている。

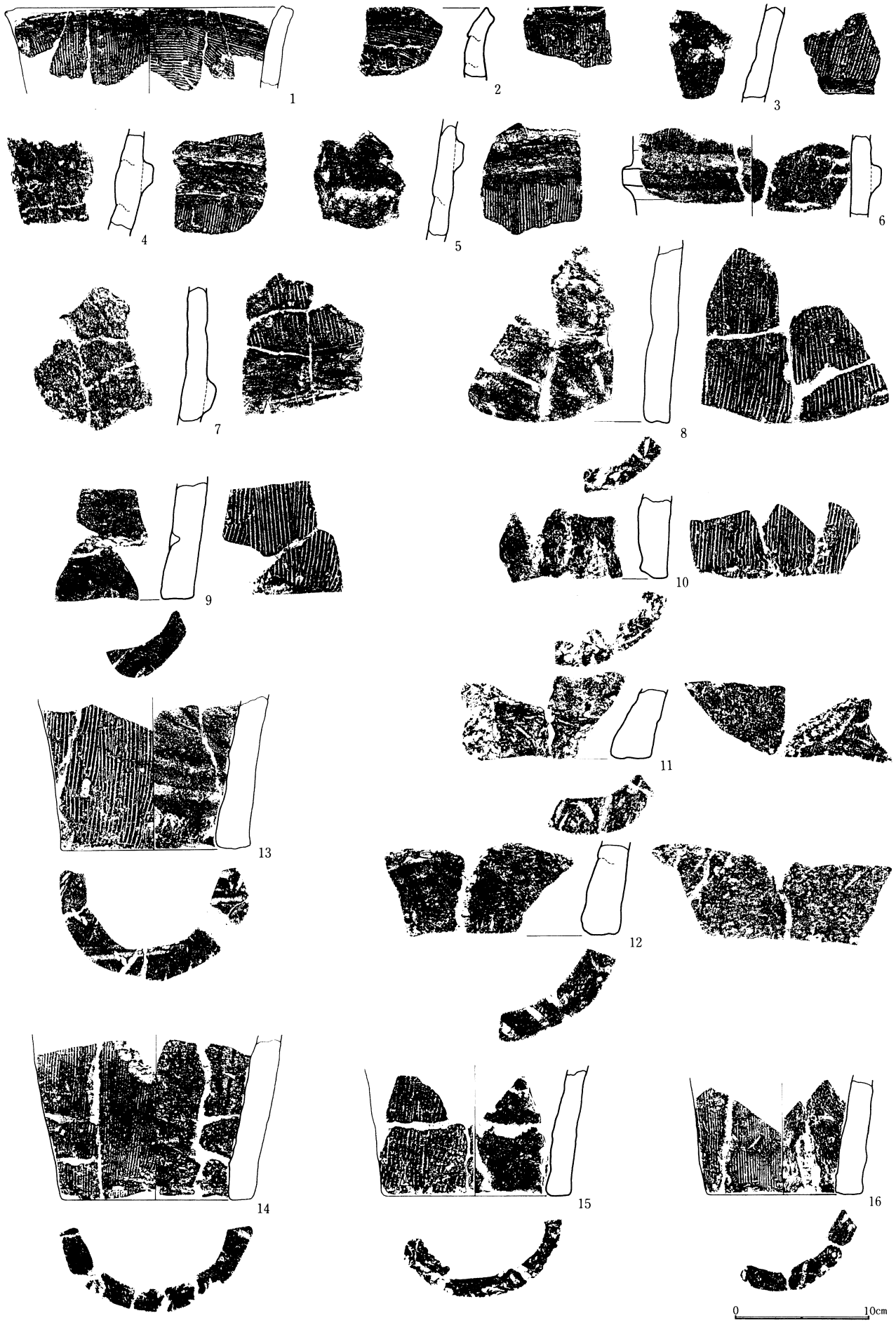
重複関係　直接の重複はないが、周堀の形が変形している点からみると、変形のないM—13→M—13に対する面の周堀が狭くなるM—14→そのM—14に対する北側の周堀が変形しているM—10の順に新しくなると考えられる。

出土遺物　円筒埴輪が出土している。

（井野）



図—49　M—14号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)



図—50　M—14号古墳出土遺物実測図

M—15号古墳

位置　調査区南東のヨ・タ—2・3区に位置する。東にM—16、南にM—14が位置する。

墳丘　削平をうけているが円墳。南北12.66m、東西14.18mを測る。周堀北側は二段でやや上面が広くなり、墳丘側には埴輪片が多く検出された。周堀は北側がやや狭い。北は上巾2.30m、下巾0.96m、南は上巾2.44m、下巾1.14m、東が上巾2.0m、下巾1.22m、西が上巾1.96m、下巾1.36mを測る。

周堀内には北西、南西、南東方向にレベル差50cm程の「渡り」状の高まりがみられる。巾4m程である。

総長は南北18.68m、東西18.04mを測る。

主体部　削平されていると思われる。不明。

周堀覆土　比較的深い周堀をもつ。最下層には墳丘の崩落と考えられるロームを含む土層、黒褐色土が30cm程堆積しその上に浮石（C？）を含む黒色土が堆積し、その上にFAが厚さ12～16cmでレンズ状に堆積している。

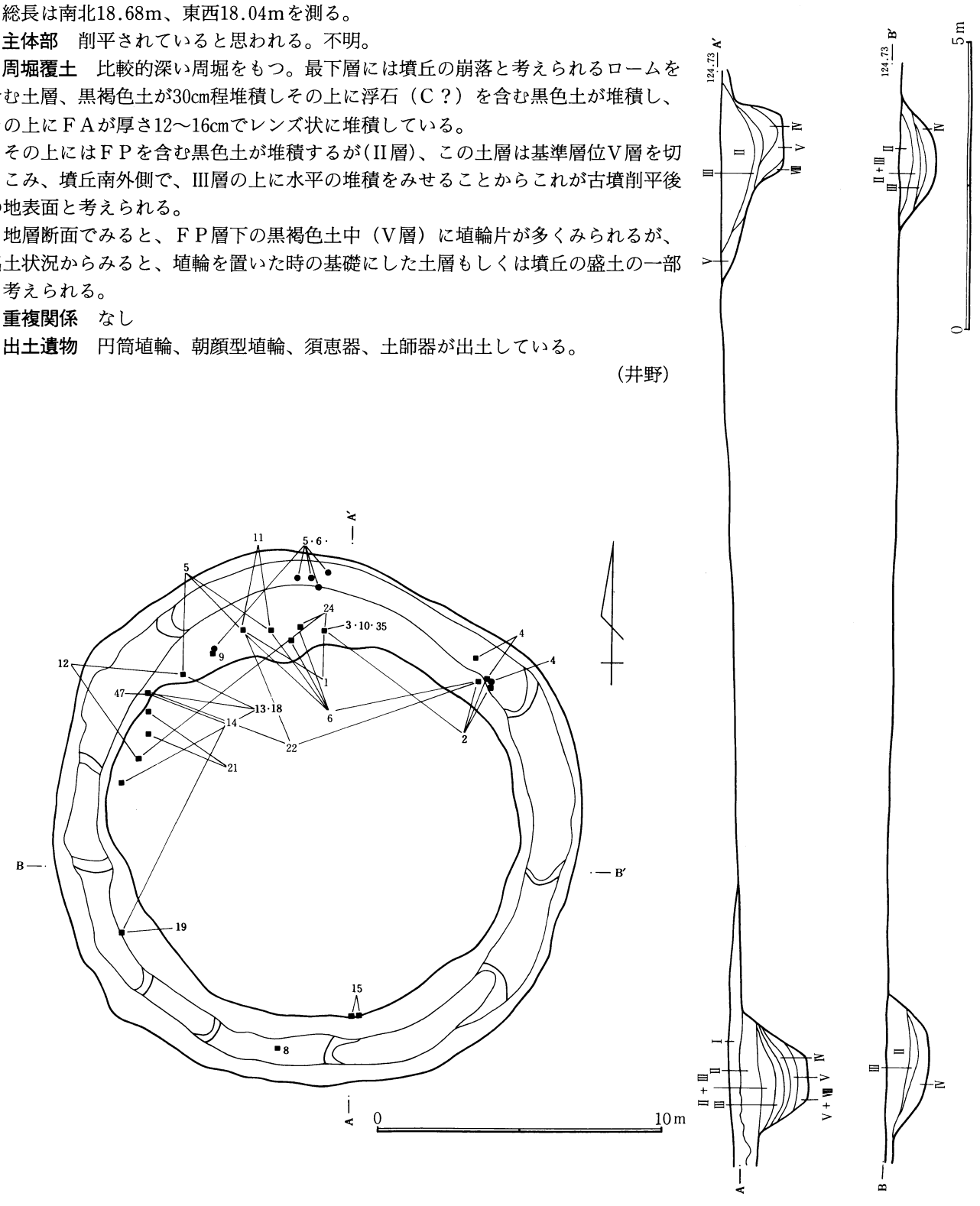
その上にはFPを含む黒色土が堆積するが(II層)、この土層は基準層位V層を切りこみ、墳丘南外側で、III層の上に水平の堆積をみせることからこれが古墳削平後の地表面と考えられる。

地層断面でみると、FP層下の黒褐色土中（V層）に埴輪片が多くみられるが、出土状況からみると、埴輪を置いた時の基礎にした土層もしくは墳丘の盛土の一部と考えられる。

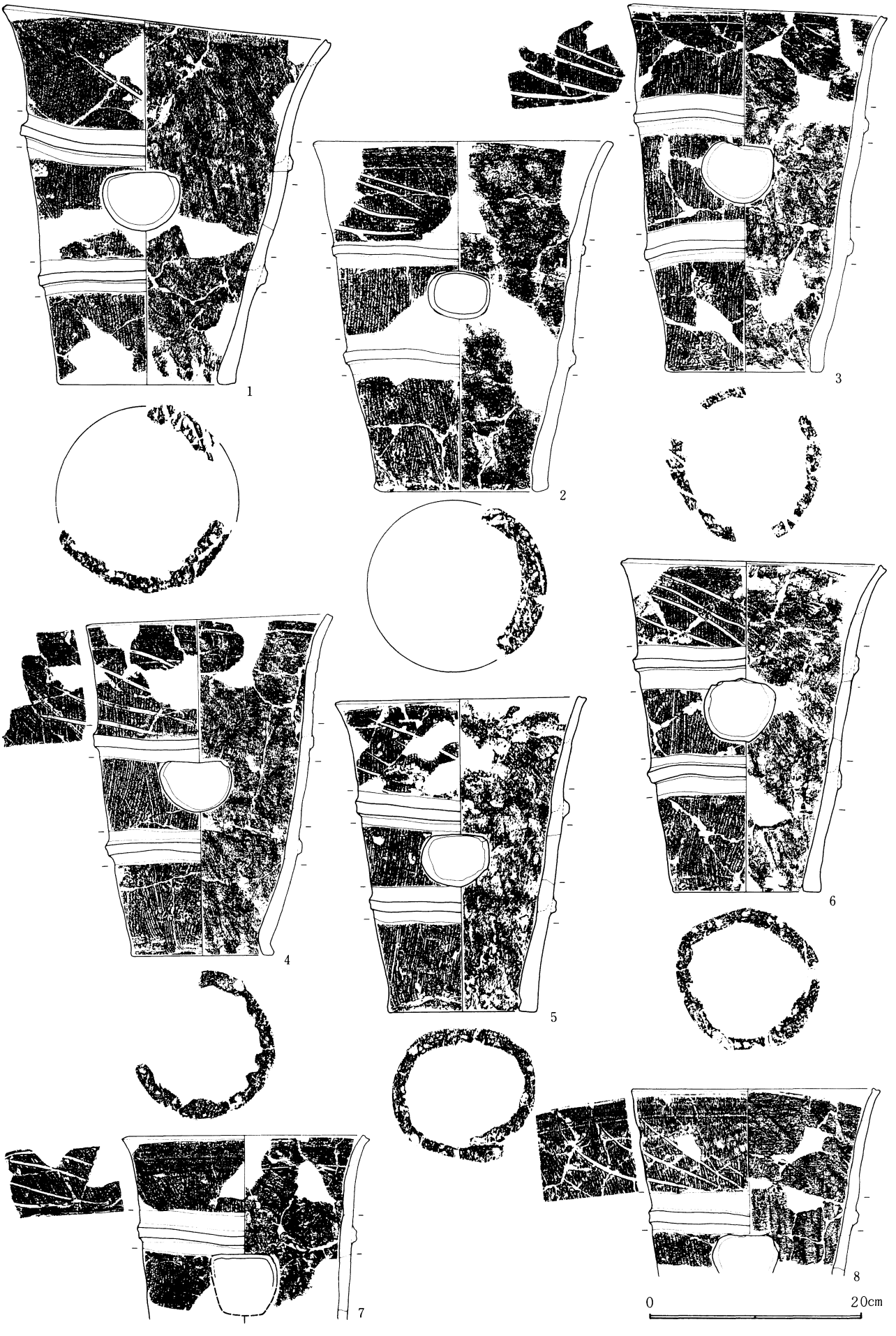
重複関係　なし

出土遺物　円筒埴輪、朝顔型埴輪、須恵器、土師器が出土している。

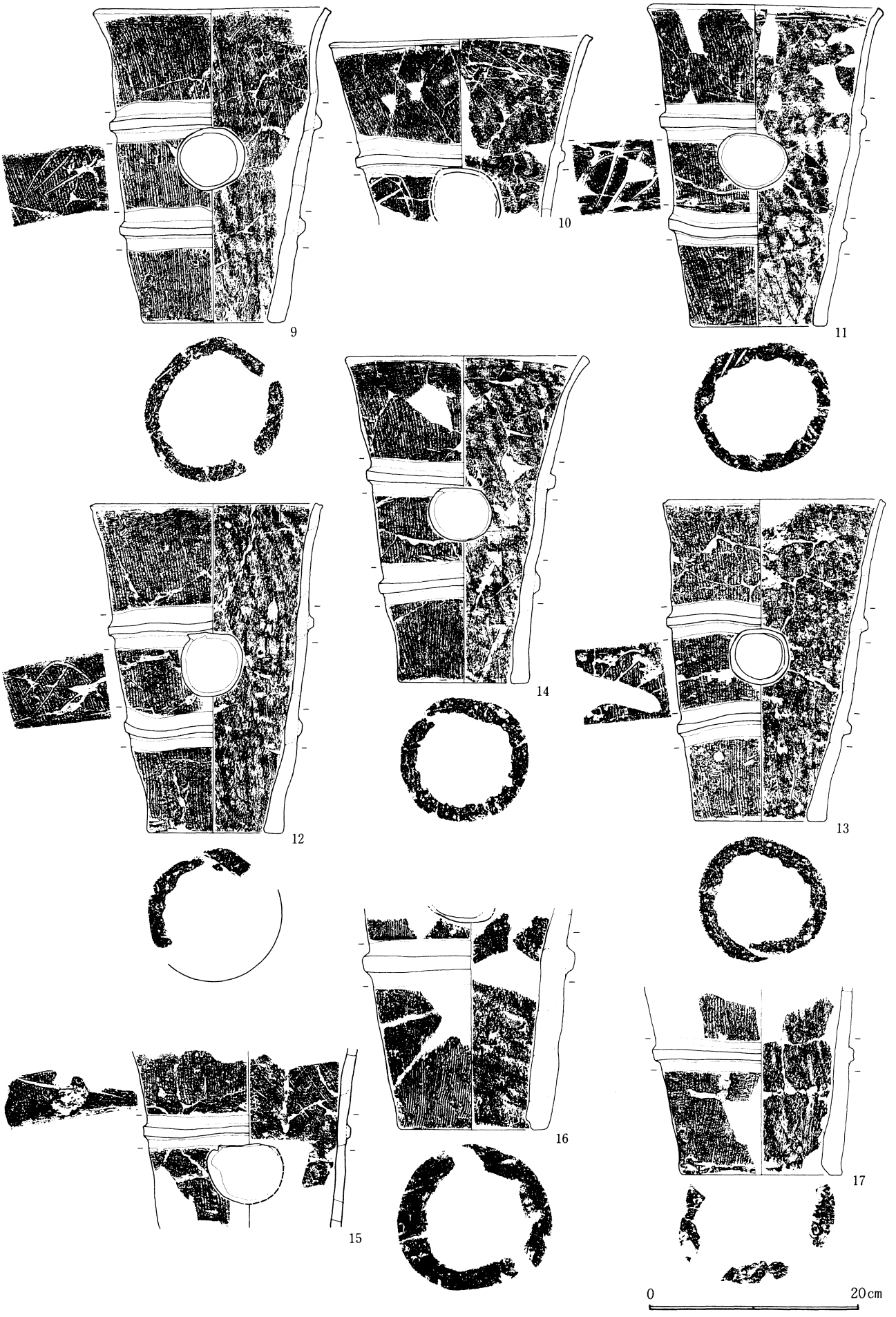
（井野）



図—51　M—15号古墳平・断面図

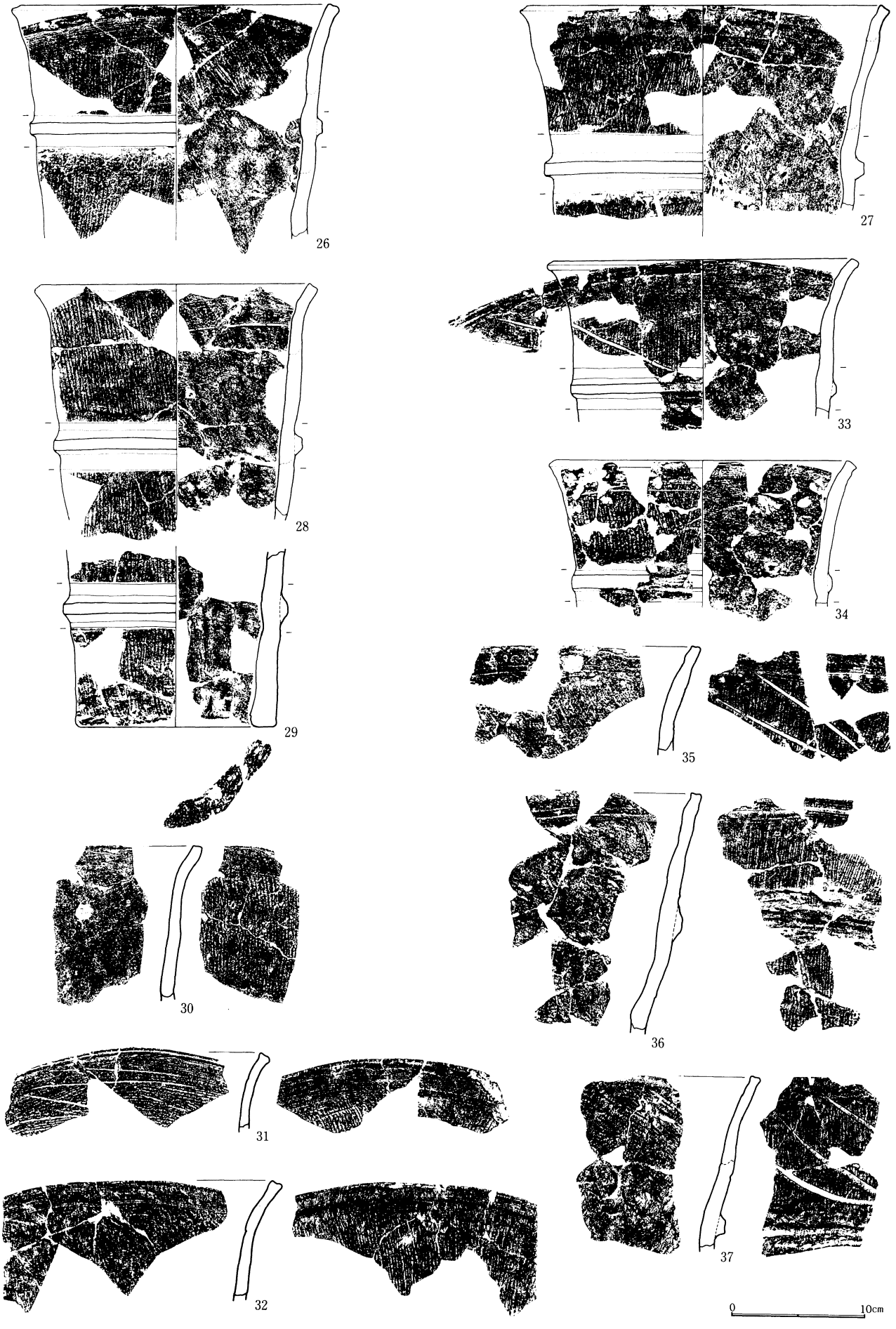


図—52　M—15号古墳出土遺物実測図(1)

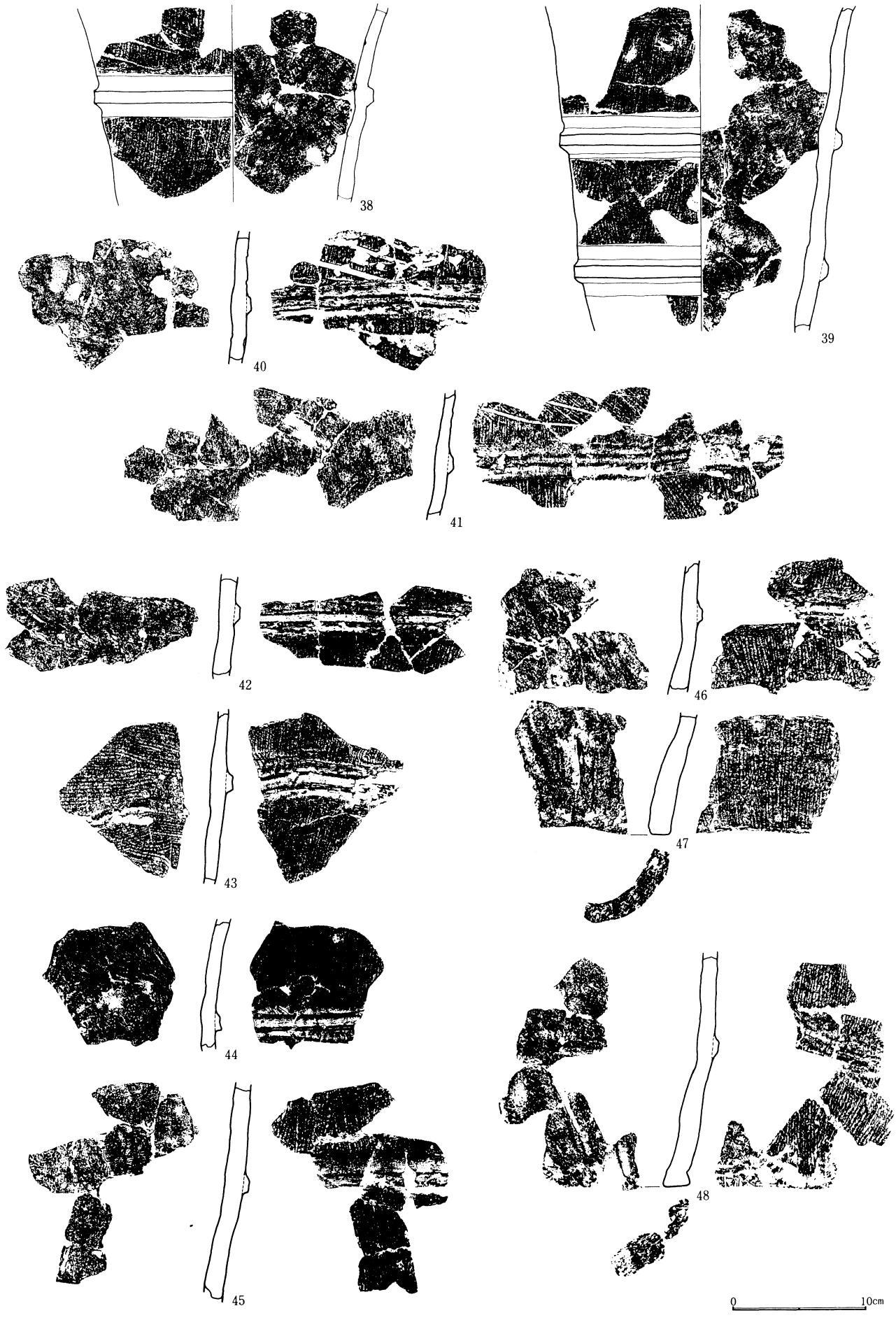


図—53　M—15号古墳出土遺物実測図(2)

図－54　M－15号古墳出土遺物実測図(3)

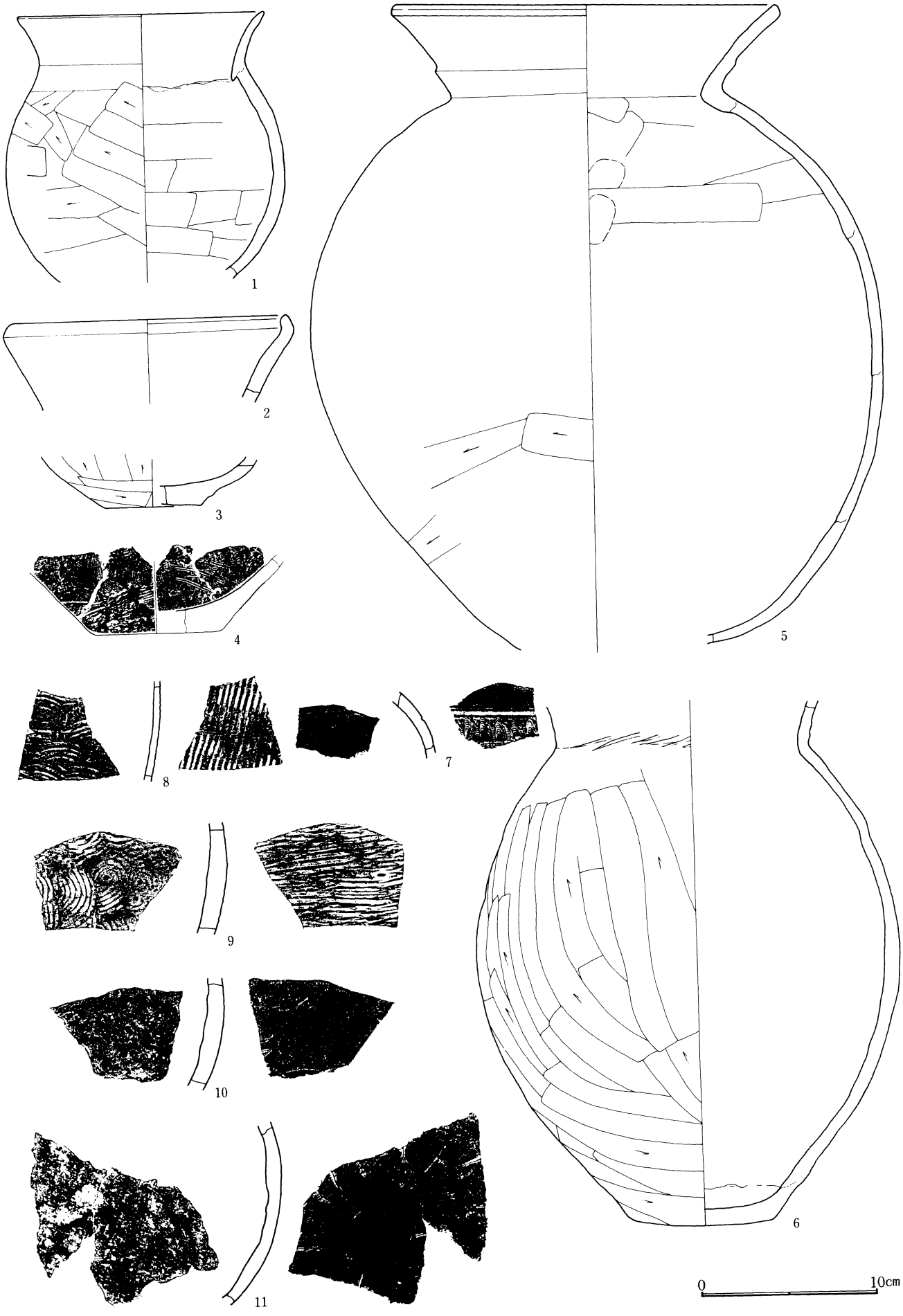


図—55　M—15号古墳出土遺物実測図(4)



図—56　M—15号古墳出土遺物実測図(5)

図—57　M—15号古墳出土遺物実測図(6)



図—58　M—15号古墳出土遺物実測図(7)

M－16号古墳

位置　調査区南東のタ・レ－２・３区に位置する。西にM－15、北にM－20が位置する。

墳丘　墳丘・周堀ともに削平が進んでおり、特に周堀は部分的に検出されたのみであるが、円墳と考えられる。南北は推定で13.8m、東西はやや狭く13.36mを測る。周堀は残存部のみであるが、東側が上巾1.32m、下巾0.44m、西側が狭く、上巾0.94m、下巾0.24mを測る。総長は、南北が推定16m、東西が15.72mである。

周堀の西側が狭く、やや直線的に走行しているのは、西側にあるM－15との係わりによるものと考えられる。M－16側に変形がみられることからみるとM－16がM－15よりも新しいと考えられる。

主体部　墳丘中央部に南北５m×東西3.5mの範囲で石敷が検出されている。石除去後の精査によると西側で堀り形がみられる。堀り形の上に土層が一層みられ、小礫層、さらにその上にやや大きい山石の並びがみられる。

位置、形態からみると竪穴式石室の残存部と考えられる。

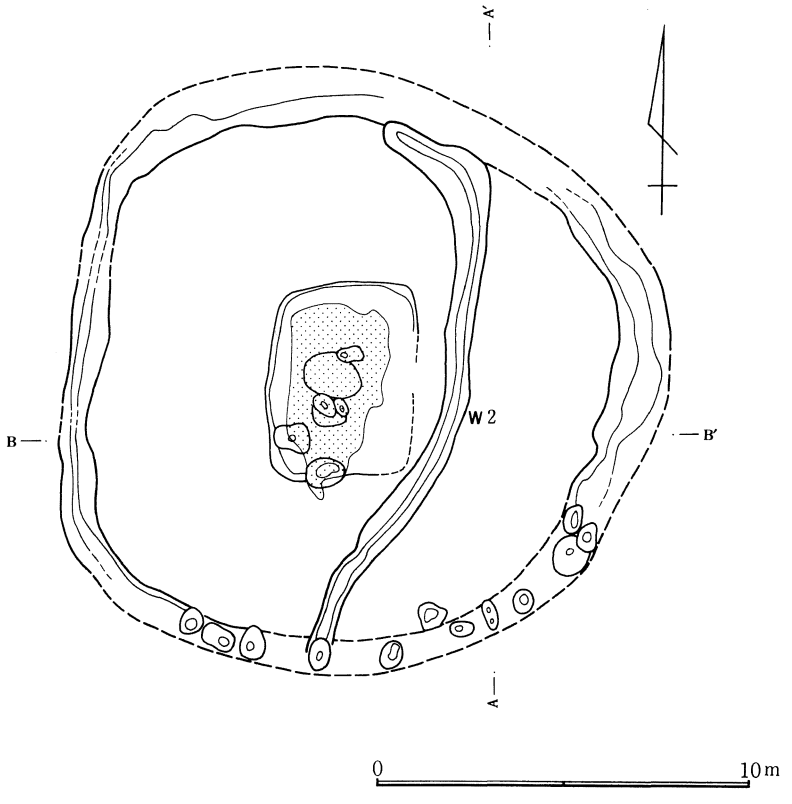
周堀覆土　周堀の残存状況が良くないため周堀覆土は最下層の土層が検出されているのみである。浮石を含む黒色土であるが、この浮石がC軽石かＦＰかの注記がないが、そのすぐ上にB軽石を主体とする層があるので、ＦＰと思われるが確実ではない。この土層は西側で墳丘上に水平に堆積しており、B軽石降下以前のこの段階で墳丘はすでに削平されていることがわかる。

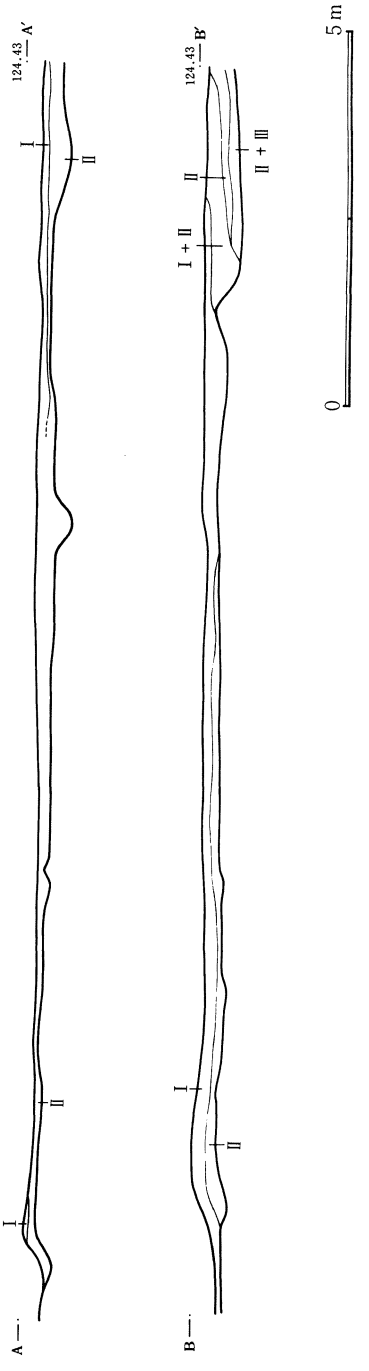
重複関係　墳丘北側に広がる落ちこみは、前述のＦＰ（？）と思われる軽石を含む黒色土に褐色がまじっており、この落ちこみを掘削した土の崩落と思われる。その下のII－２層は墳丘削平後堆積の堆積土層と、墳丘地山の土に浮石が若干まじった土とみられ、この落ちこみの掘削がII層堆積以前の墳丘削平に近い時期と考えられる。

墳丘を南北に通る溝W２は、地層断面でみると埋土が耕作土であり、比較的新しいものと考えられる。

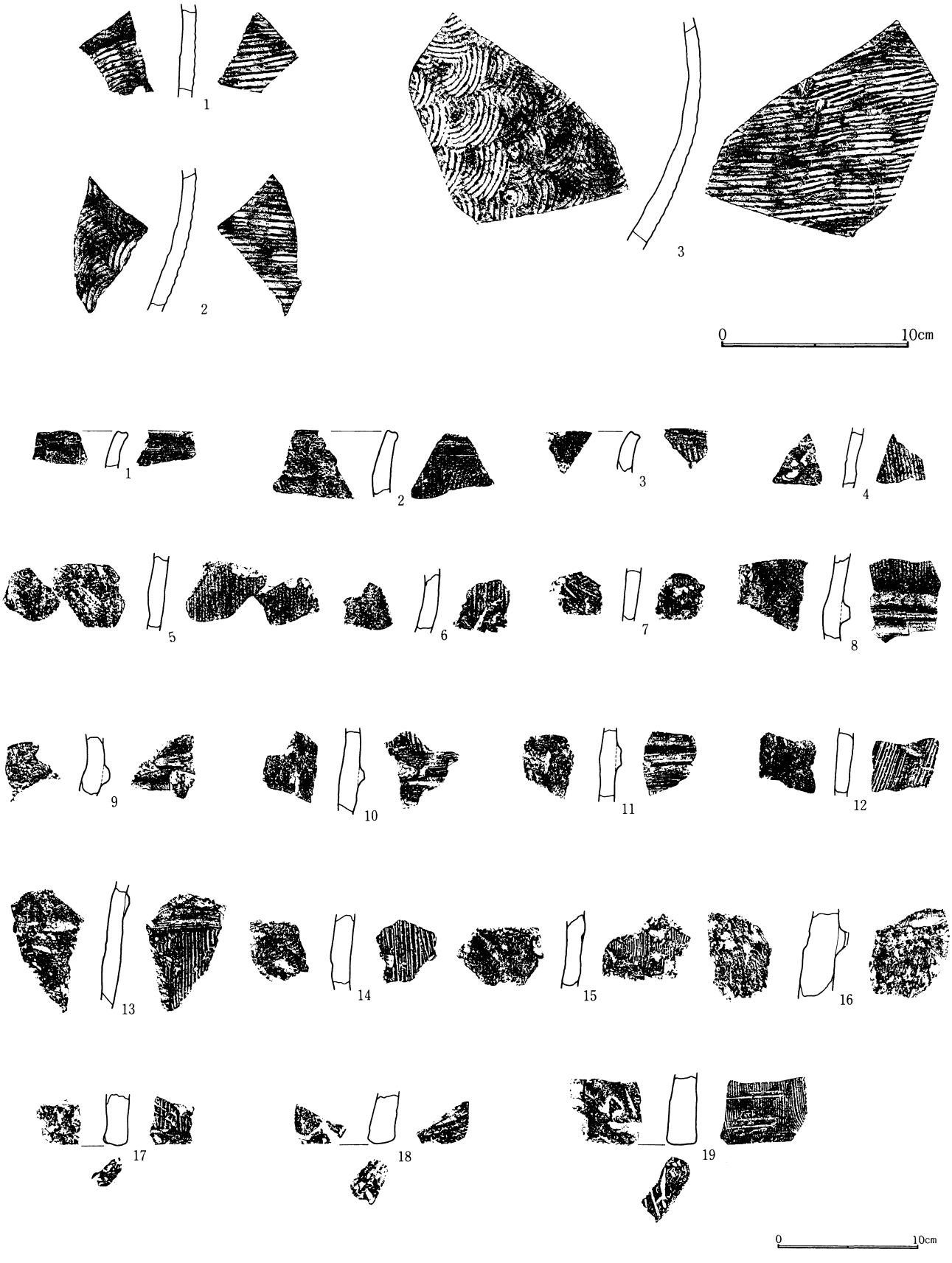
出土遺物　埴輪片、須恵器片が出土している。

（井野）





図－59　M－16号古墳平・断面図



図—60　M—16号古墳出土遺物実測図

M－17号古墳

位置　調査区南東のレ・ソ－２・３区に位置する。この古墳群の東縁にあたる。

墳丘　削平をうけてはいるが円墳と考えられる。東西12.1m、南北12.44mを測る。周堀は北側がやや狭いが円形を呈す。北側は上巾1.78m、下巾0.6m、東側は上巾1.4m、下巾0.88m。総長は南北15.8m、東西15.0mである。

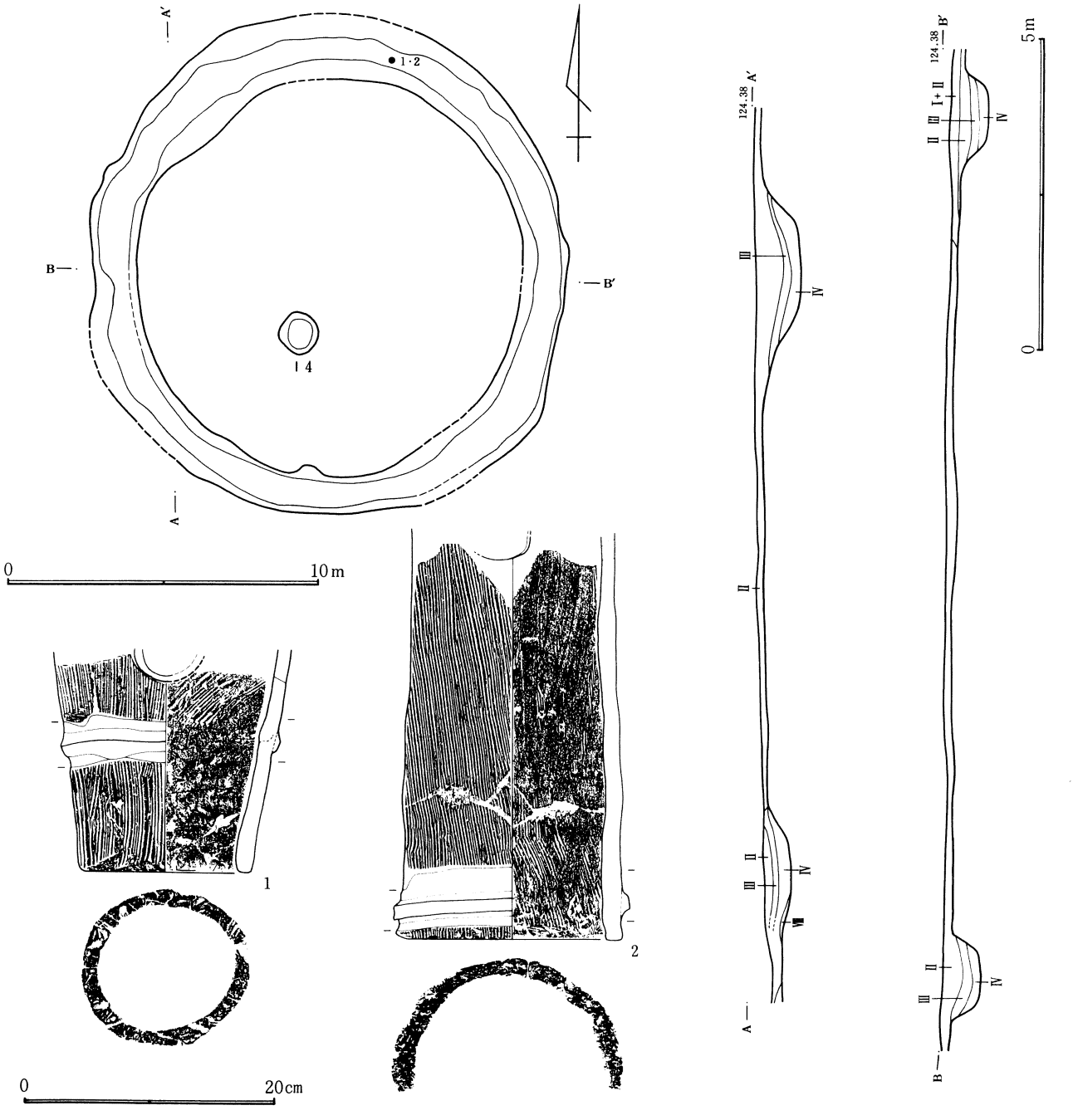
主体部　削平されたと考えられる。不明。

周堀覆土　最下層ではC軽石を少し含む黒色土で、その上にＦＡ層が８～10cmの厚さでレンズ状に堆積している。地層断面図で墳丘北西部をみるとＦＰ、C軽石を含む黒色土が墳丘上と周堀の半ばを覆っており、この土層の堆積時にはこの古墳の削平が進んでいたことがわかる。このII層の堆積が周堀内に厚さ50cmに近いことからみると、ＦＡ降下後で、B軽石降下よりかなり前に削平が行なわれたと考えることができる。

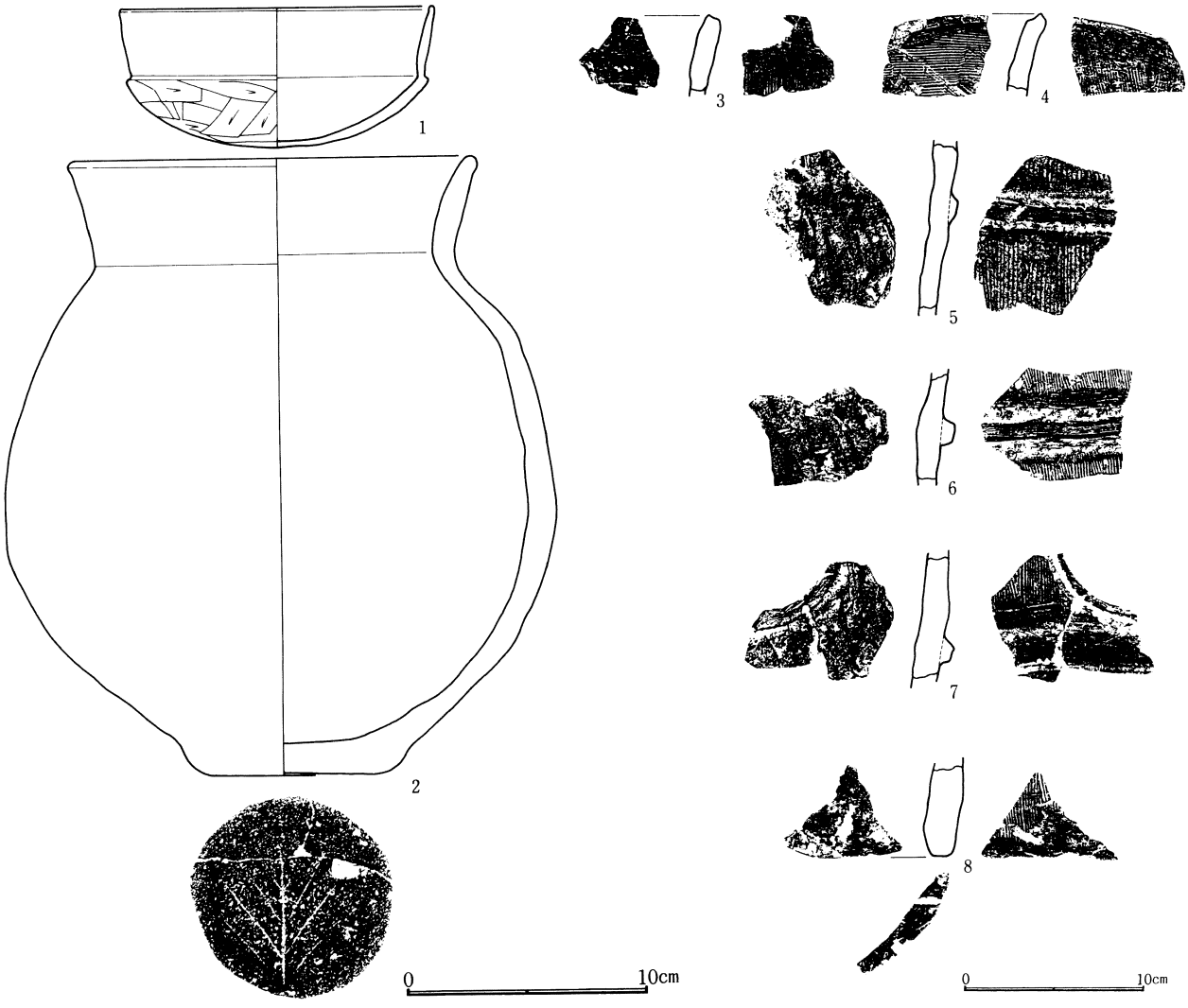
重複関係　墳丘の中央やや南で井戸４号と重複する。井戸４号は形態でみると比較的新しいものか。

出土遺物　円筒埴輪、器材埴輪基部、土師器が出土している。

（井野）



図－61　M－17号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)



図—62　M—17号古墳出土遺物実測図(2)

M—18号古墳

位置　調査区南西のレ・ソ—3・4区に位置する。東にM—19、南にM—17、西にM—20が接する。

墳丘　削平が進んでいるが円墳。東西12.24m、南北12.12mを測る。周堀は北、西、南はやや狭くなっている地点があるが、東は比較的広い。北は上巾1.6m、下巾0.68m、東は上巾1.72m、下巾1.16mを測る。周堀北東部には「渡り」がみられる。巾70cm、長さ1m、レベル差14cmである。また、「渡り」の墳丘側には「渡り」に対応するとみられる半円状の落ちこみがみられる。径120cmである。

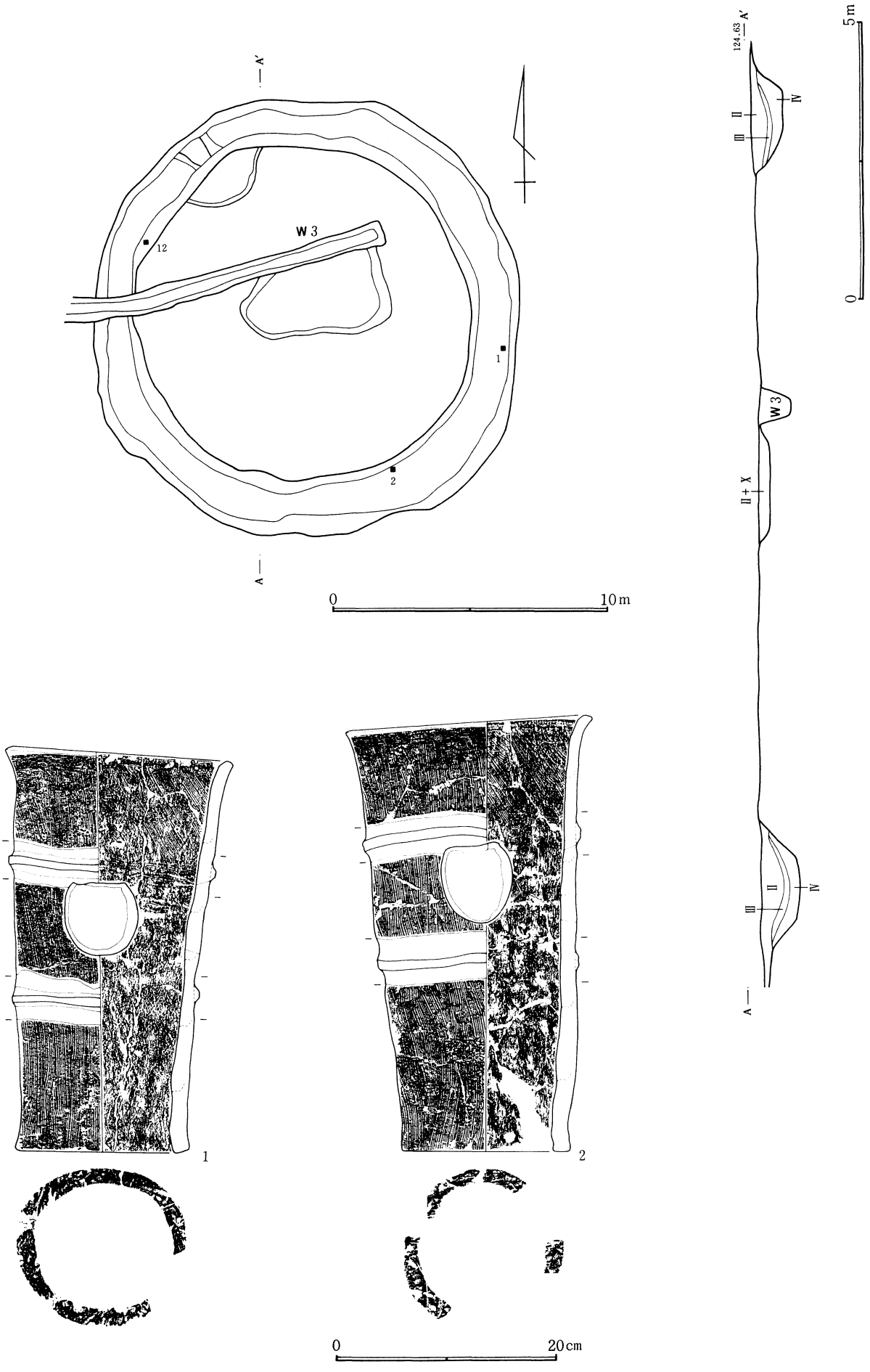
主体部　墳丘中央部に4.8m×2.2mの長円形の落ち込みがみられる。位置からみると主体部の跡とみえるが、地層断面でみるとB軽石を含む土層が覆土になっており、試堀のグリッドトレンチの位置とも重なるので、主体部の可能性はあるが確実ではない。主体部跡としても、主体部の石材を除去した跡か。

周堀覆土　浮石（C軽石？）を含む黒色土が最下層にあり、その上にFAが7～9cmの厚さでレンズ状に堆積している。その上と墳丘外にかけて浮石（FP？）を多量に含む黒色土が堆積している。FP層下の浮石を含んだ黒色土が、周堀の3分の1ほど埋め、さらにFAで周堀の2分の1ほどが埋まったままになっていることは、この古墳の管理がなされていなかったとも考えられる。そう考えるとこの古墳の造立者とその子孫はFA降下時にはこの付近にはいず、管理もできなかったと考えることもできる。

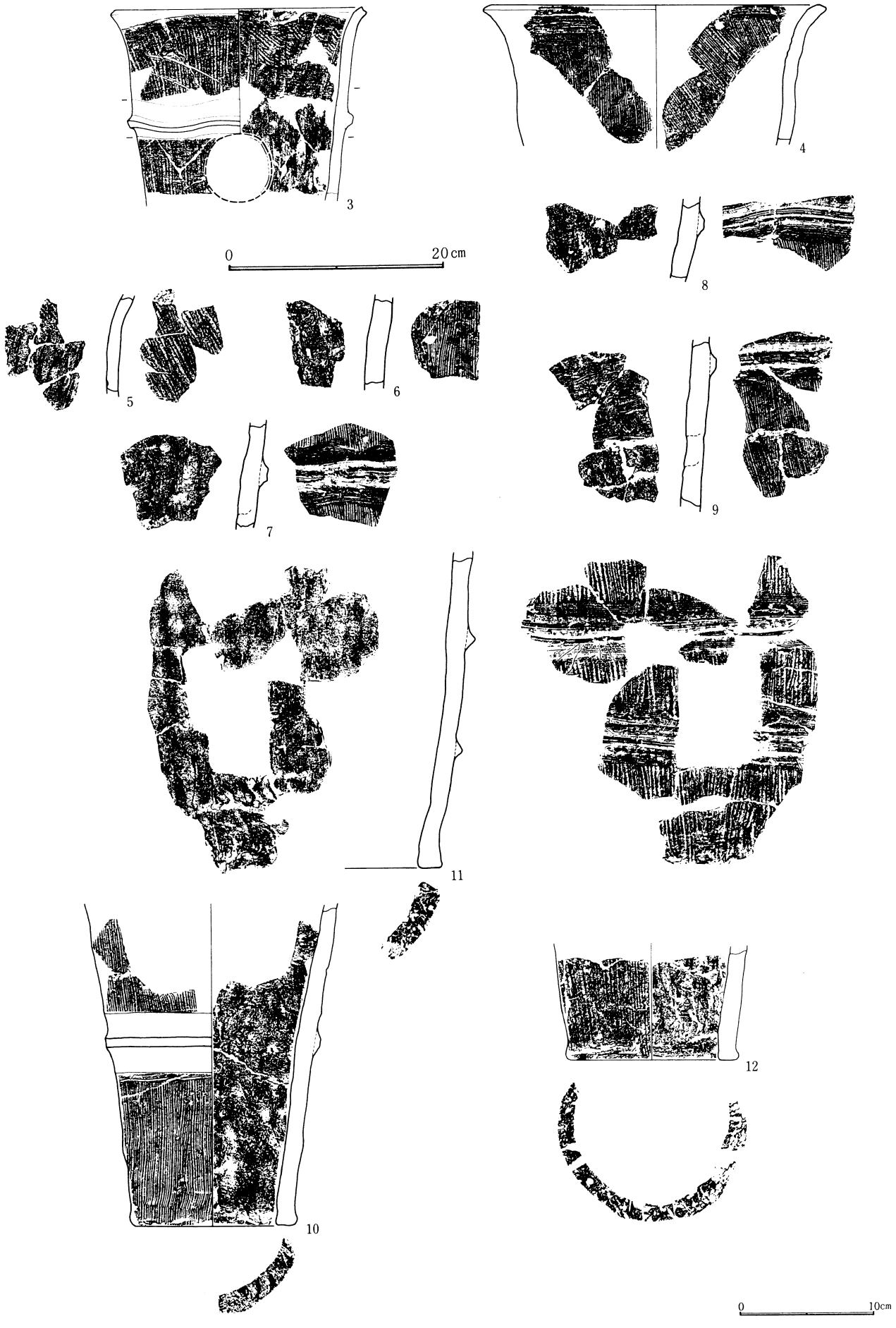
重複関係　墳丘中央やや北で東西にW—3が走る。地層断面でみると、溝の覆土は上部にはI層の耕作土がまじるものの、II層に似て、II層より粘性があることから、W—3の掘削はB軽石降下以前で、II層の堆積に近い、墳丘の削平時かその近いころと考えられる。

出土遺物　円筒埴輪が出土している。

（井野）



図—63　M—18号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)



図—64　M—18号古墳出土遺物実測図(2)

M－19号古墳

位置　調査区南東のソ・ツ－３・４区に位置する。東にM－１、西にM－17・18が接する。

墳丘　かなりの削平をうけているが円墳と考えられる。南北12.56m、東西13.2m。周堀は北西、南～東が狭い。西側は上巾1.06m、下巾0.96m、南は上巾0.52m、下巾0.46mを測る。総長は東西15.54m、南北14.4m。墳丘、周堀ともに北側がかなり変形している。他の部分は円形に近い。他の古墳の例でみると北側に接して旧い古墳があった場合、後にM－19を造る時に重複を避けてこのような変形を呈すのが例となる。本調査ではM－19の北側は空白域が見られるが、周堀まで削平された痕跡をとどめない古墳があった可能性がある。

主体部　墳丘中央部に長方形を呈するとみられる掘り形の一部が検出され、その北西から北にかけて礫帯が検出された。石室の裏ごめの石と考えられるもの。

堀り形は東西3.2mで南北は推定5.5mの長方形、礫の内側は、南北3m、東西は推定1.6mの長方形と考えられる。詳細については削平が多く不明。

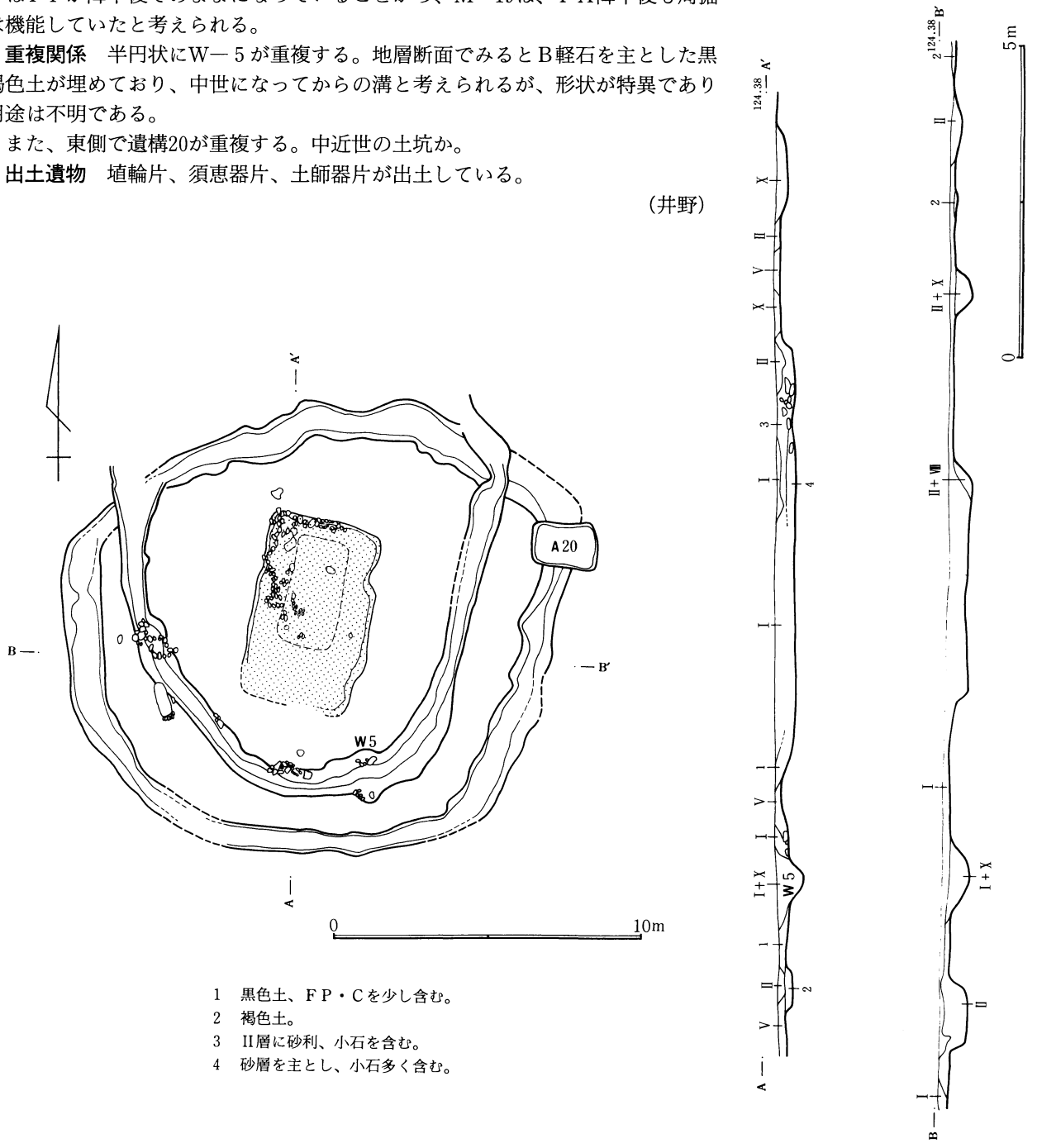
周堀覆土　周堀覆土は最下層がＦＰ、Ｃ軽石を含む黒色土になっており、他にみられるＦＡがみられない。他の古墳ではＦＰが降下後そのままになっていることから、M－19は、ＦＡ降下後も周堀は機能していたと考えられる。

重複関係　半円状にW－５が重複する。地層断面でみるとＢ軽石を主とした黒褐色土が埋めており、中世になってからの溝と考えられるが、形状が特異であり用途は不明である。

また、東側で遺構20が重複する。中近世の土坑か。

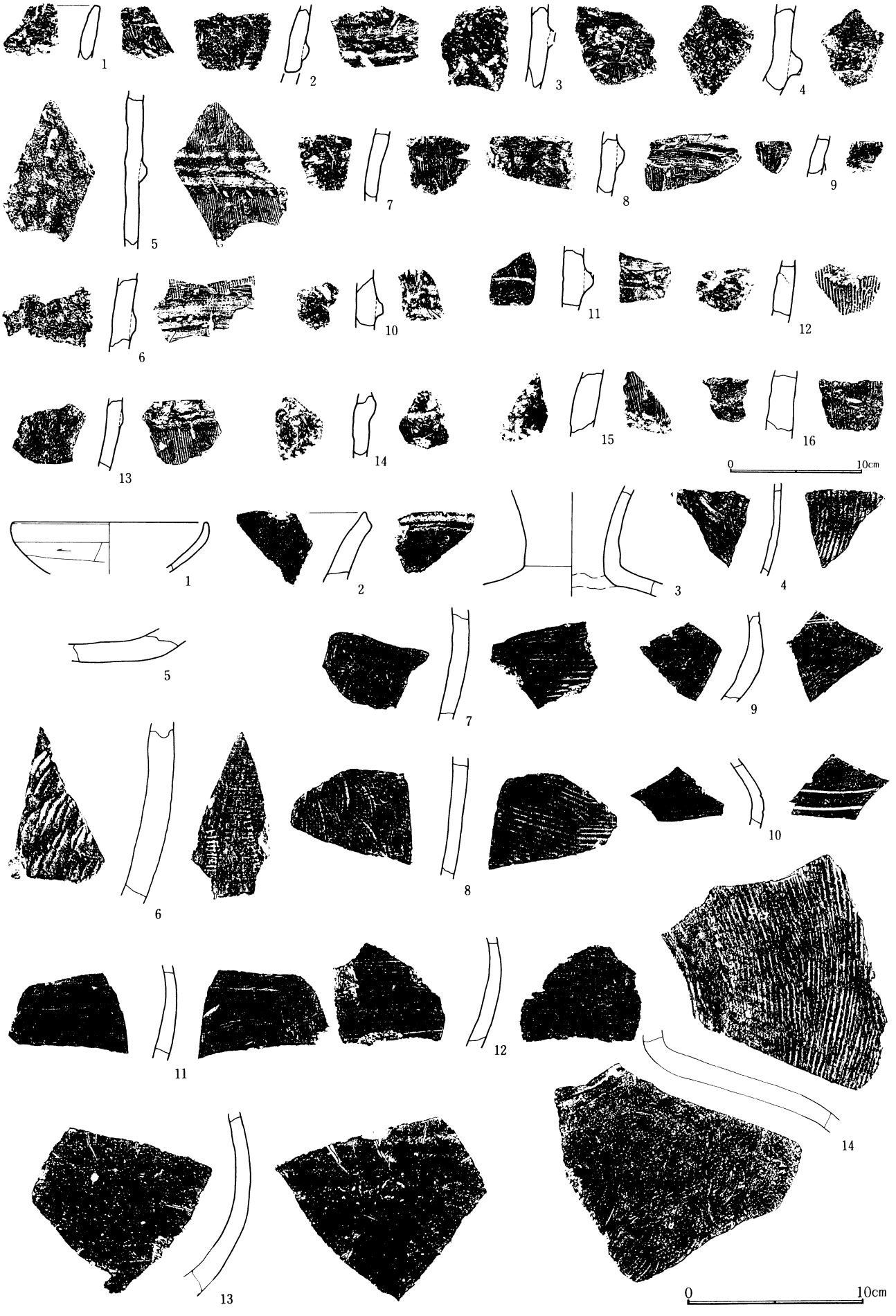
出土遺物　埴輪片、須恵器片、土師器片が出土している。

（井野）

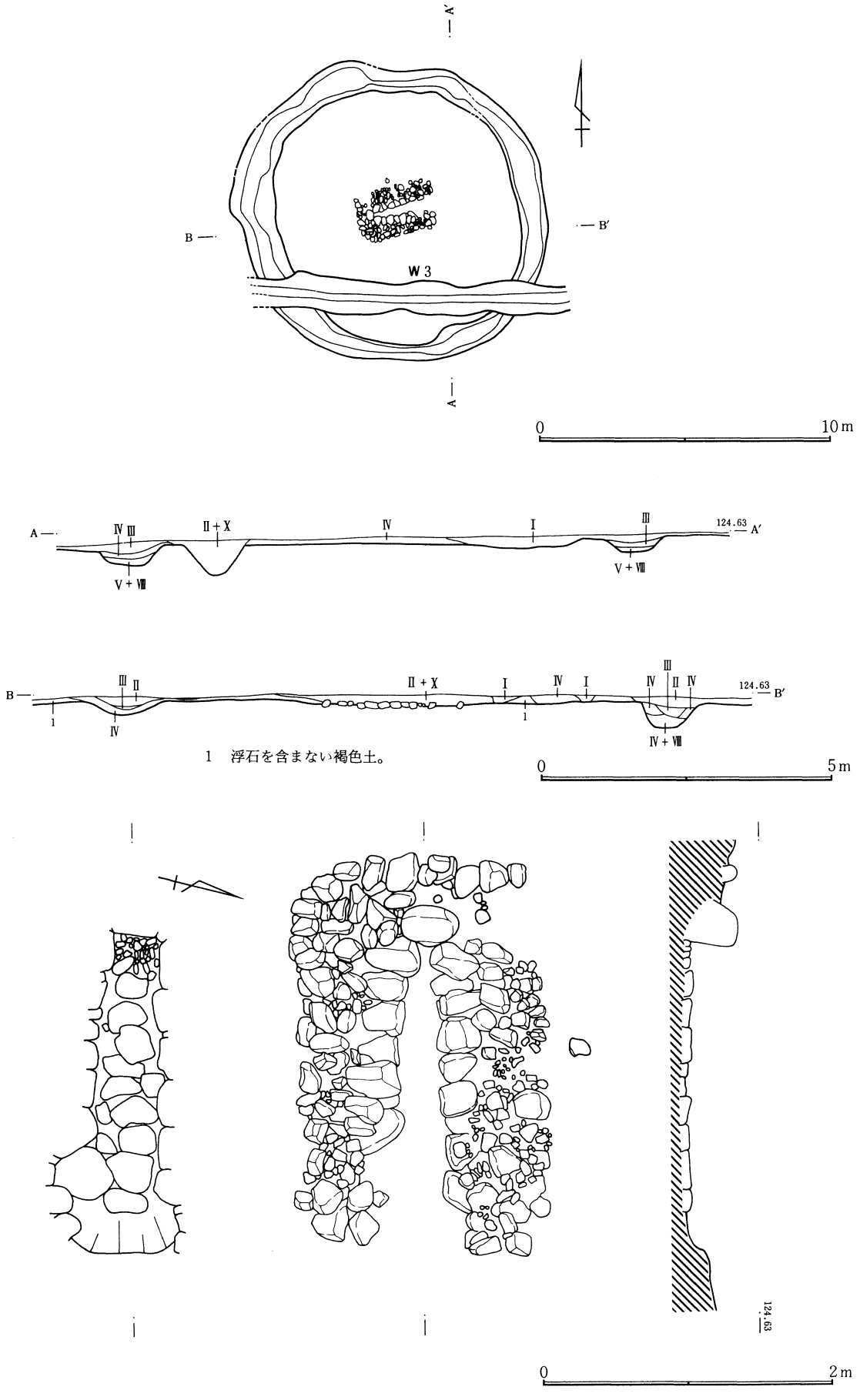


1　黒色土、ＦＰ・Ｃを少し含む。
2　褐色土。
3　II層に砂利、小石を含む。
4　砂層を主とし、小石多く含む。

図－65　M－19号古墳平・断面図



図—66　M—19号古墳出土遺物実測図



図—67　M—20号古墳平・断面図　出土遺物実測図

位置　調査区南東、検出された古墳群の中央のタ・レ－３・４区に位置する。北にM－21、南にM－16、東にM－18が接する。この古墳群では比較的規模が小さい。

墳丘　竪穴式石室をもつ円墳。東西8.38m、南北8.52m。周堀は南と北で狭くなっている。南は上巾0.56m、下巾0.16mであるが、西は上巾1.06m、下巾0.4mを測る。総長は南北9.76m、東西10.32m。

南北の変形はM－20がM－21、M－16よりも新しく、重複を避けるためのものと考えられる。

主体部　墳丘中央。残存部は裏ごめの石を含めて東西2.9m、南北1.7m。山石の乱石積み。裏ごめの石の範囲に堀り形をとり、径25～40cmの石を敷石、壁石としたもので、壁石は現状で三段みられる。天井石も同様の石を使用したものと見られる。石室床面は、東西が巾推定1.9m、南北巾が、西で30cm、中央45cm、東で50cmを測る。

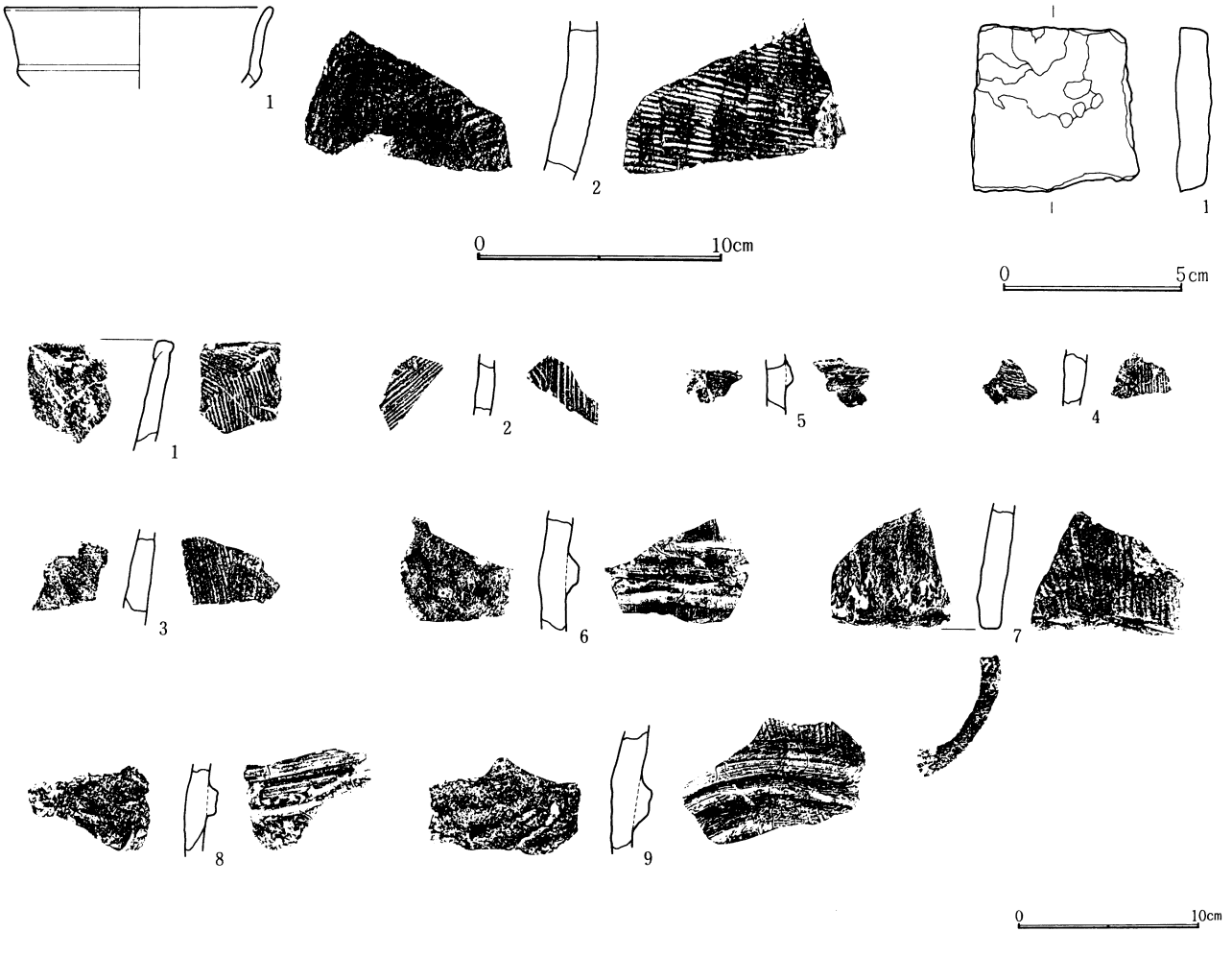
周堀覆土　最下層は浮石（C軽石？）を含む黒色土とロームの混土で、その上に純粋に近い浮石層（FA？）が堆積している。その上はFP、C軽石まじりの黒色土で、東側では墳丘上まで水平に堆積している。

重複関係　W－３が墳丘南側を東西に切る。地層断面でみるとB軽石の純層がみられ、この溝は平安期には掘削されたと言える。溝の埋土の上層にB軽石があることから、廃棄後かなりたってB軽石降下があったことになる。

M－20の削平はW－３の様子でみるとB軽石降下よりかなりさかのぼると考えられる。

出土遺物　埴輪片、須恵器片、土師器片、金属製品が出土している。

（井野）



図－68　M－20号古墳出土遺物実測図

M－21号古墳

位置　調査区南東のタ・レ－４．５区に位置する。検出された古墳群の中央に位置する。北にM－23・24、南にM－20が接する。

墳丘　削平をうけているが円墳。東西10.04m、南北9.82m。周堀は南～東が狭い。北は上巾2.06m、下巾1.0m、南は上巾1.20m、下巾0.72mである。周堀内で部分的に低くなっているところがみられる。南東南西部にあり、「渡り」にあたるものか。総長は南北13.06m、東西13.34mを測る。

主体部　削平されたと考えられる。不明。

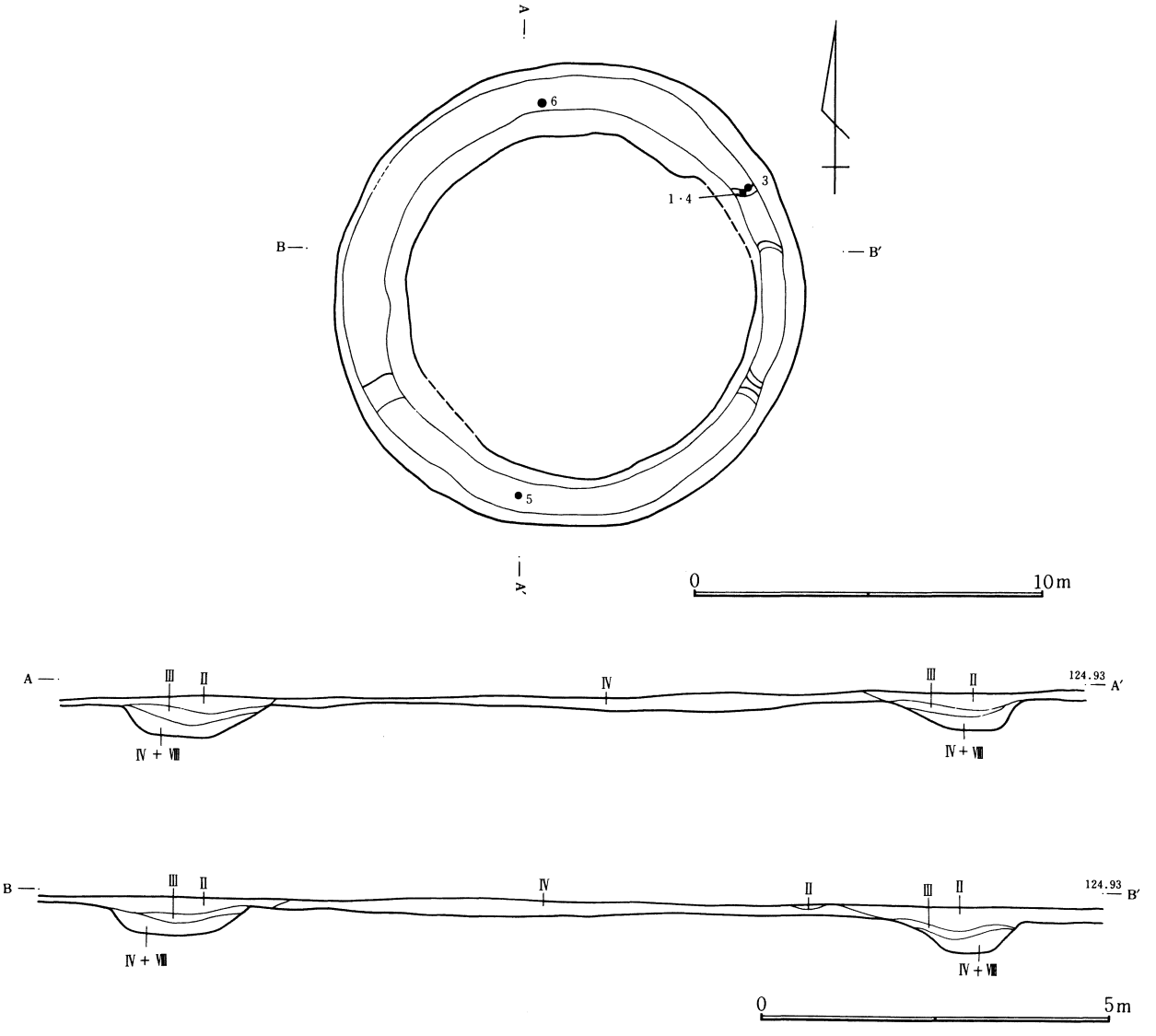
周堀覆土　周堀下層には浮石（C軽石？）を含む黒色土が半ば埋まり、その上にＦＡ層が厚さ８～10cmでレンズ状に堆積している。ＦＡの堆積で周堀はほぼ埋没したものとみられる。この時点で墓としての機能は失なわれたものか。もしくは黒色土で周掘が半ば埋まる時に管理はすでになされていず、機能としても失なわれていたことになる。

削平はこの時点とあまり離れない時点か。削平されるということはこの墓域の形成者と削平者は全く異ることになる。相対する集団か。

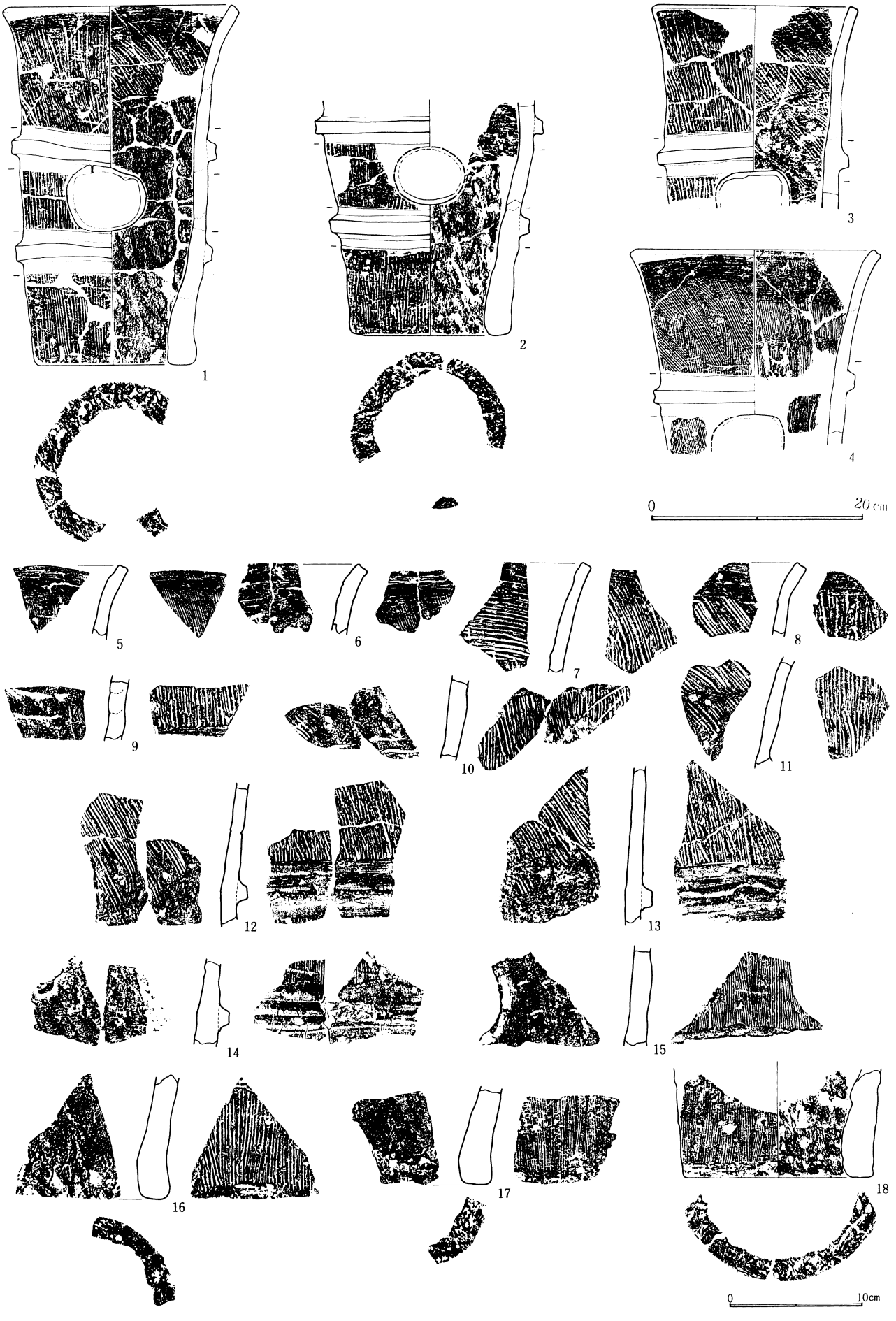
重複関係　なし

出土遺物　円筒埴輪と土師器が出土している。

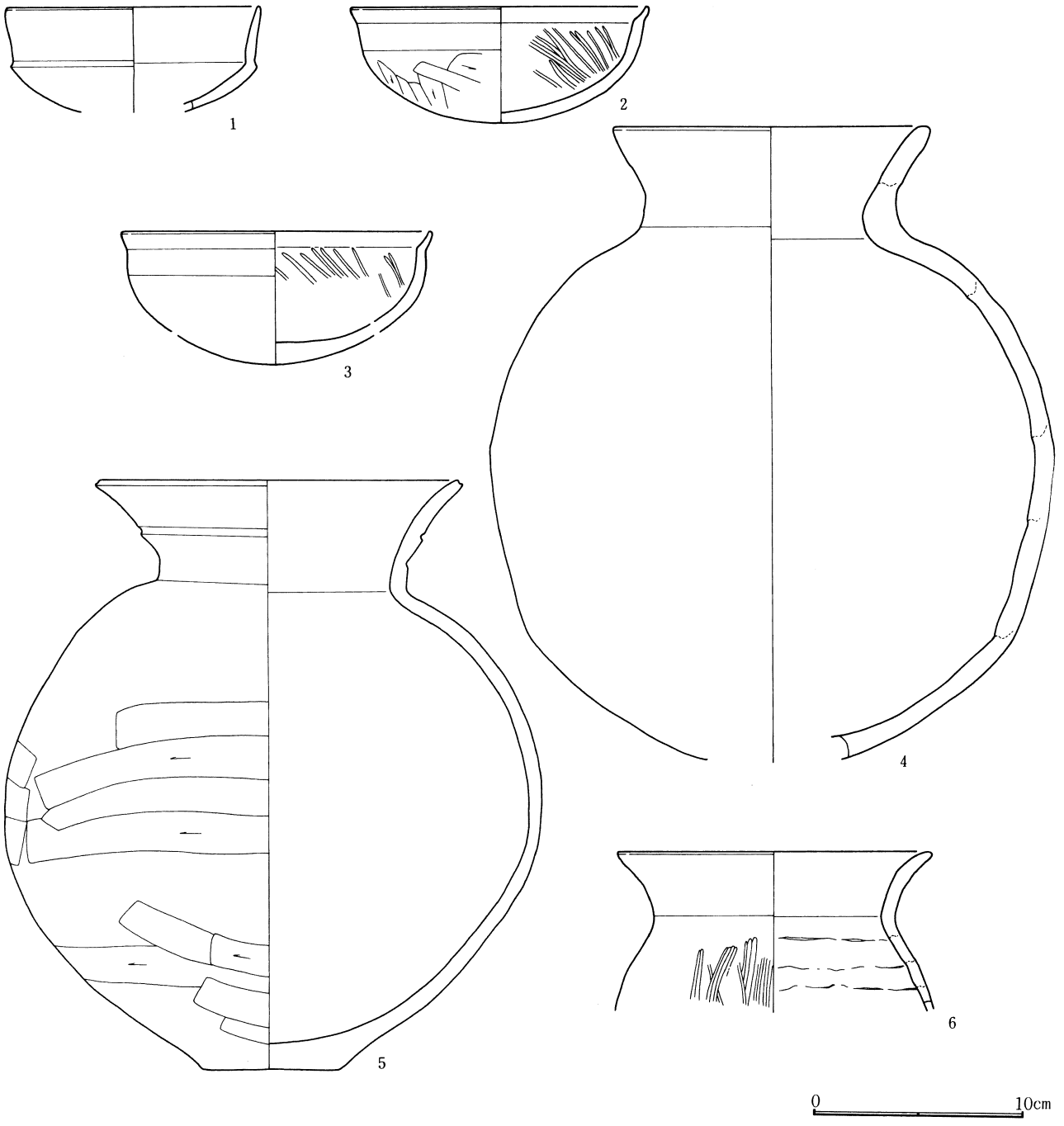
（井野）



図－69　M－21号古墳平・断面図



図—70　M—21号古墳出土遺物実測図(1)



図—71　M—21号古墳出土遺物実測図(2)

M—22号古墳

位置　調査区東南のヨ・タ—4区に位置する。古墳群の西縁に位置する。南にM—15、東にM—21・23が位置する。

墳丘　円墳。東西12.5m、南北12.36m。周堀は南から西にかけて広い。北は上巾1.36m、下巾0.6m、南は上巾1.56m、下巾0.96m．測る。総長は南北15.92m、東西15.84m。周堀西側には一段高くなっている部分がある「渡り」にあたるものか。レベル差15cm。巾2.8m。

主体部　不明。削平されたものか。

周堀覆土　下層は大粒の浮石（C軽石？）を含む黒色土で、ロームがまじっている。この土層でほぼ周堀が埋められ、その上にFA層が厚さ9～12cmでレンズ状に堆積していた。FA層の堆積で周堀はほぼ埋められている。

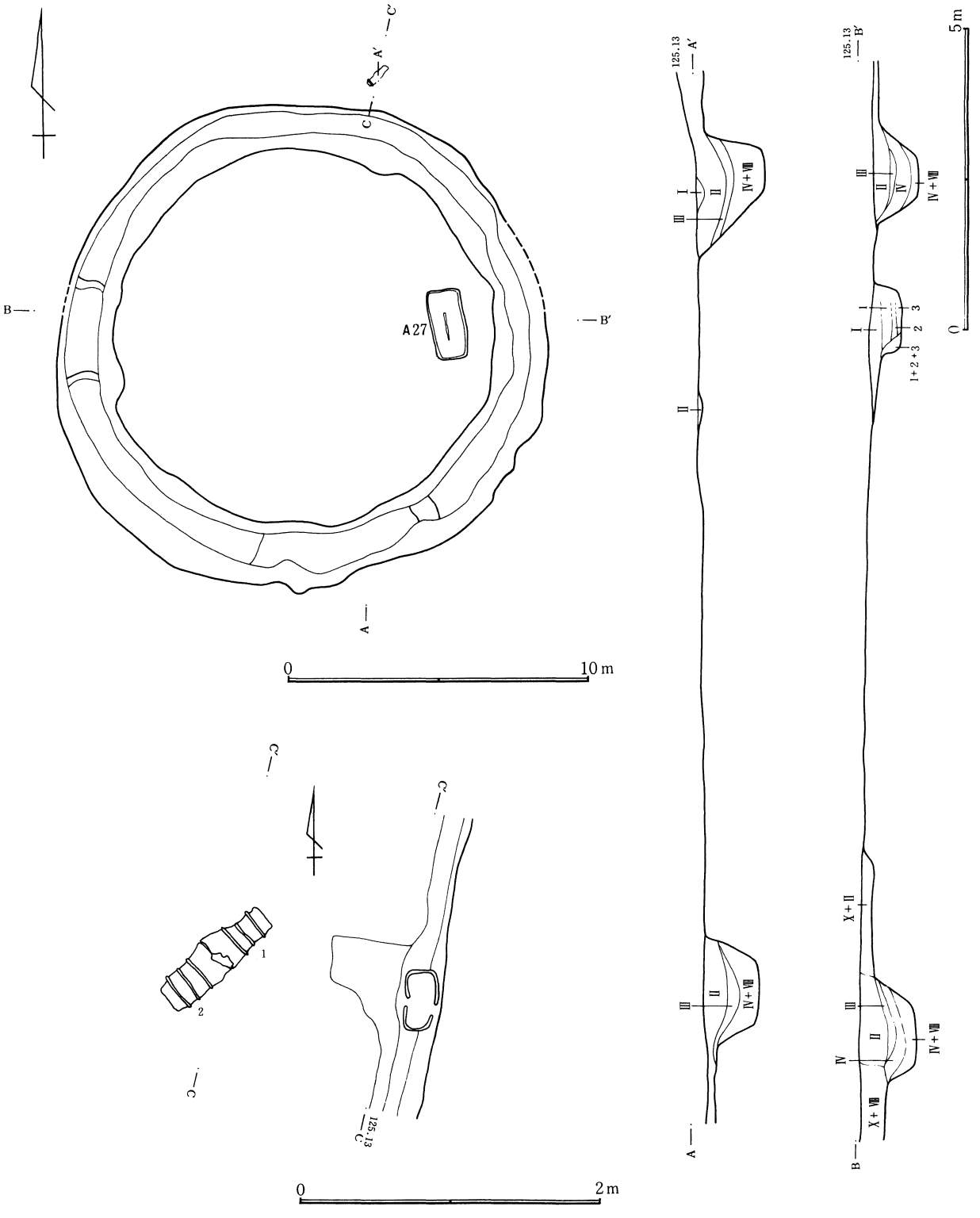
FA以前にほぼ墓としての機能が失なわれており、FAの降下時にはそれが決定的となったものか。

重複関係　墳丘上の土坑A—27と重複する。土坑埋土下層にII層がみられることから、この土坑は墳丘の削平後に作られたと考えられる。

周堀北側に埴輪棺が出土している。地層断面でみるとII層で覆われている。地層でみるとこの埴輪棺が検出位置におかれたのは古墳削平後といえる。古墳削平後の転用と考えられる。

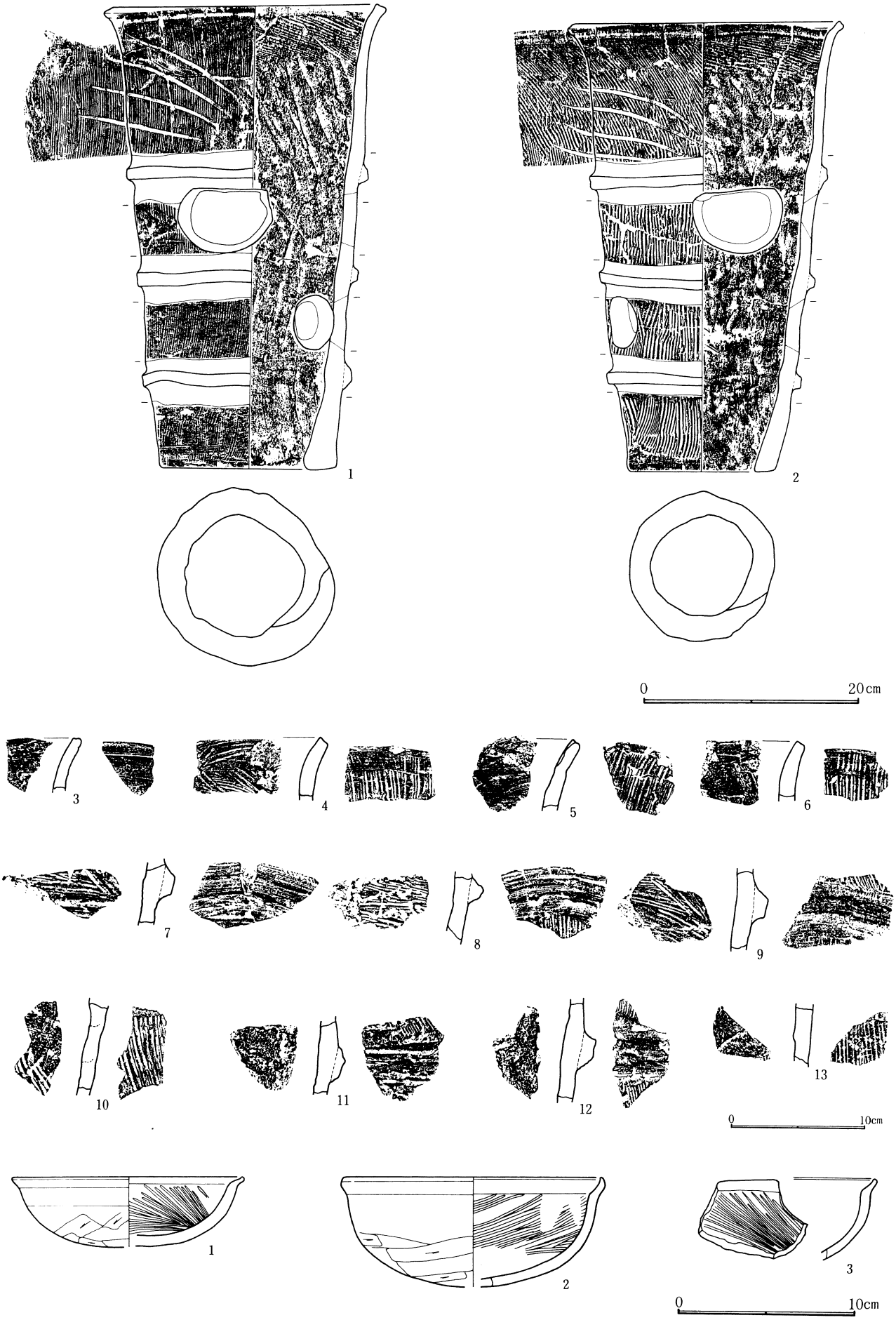
出土遺物　円筒埴輪と土師器が出土している。

（井野）



1　黒色土にローム塊混入。
2　大きい粒の浮石を含む黒色土。
3　黒色土とロームの混土。

図—72　M—22号古墳平・断面図　埴輪棺出土状態実測図



図—73　M—22号古墳出土遺物実測図

M—23号古墳

位置　調査区南東のタ・レ—5区に位置する。古墳群の西縁に位置する。北にM—25・27、南にM—21が接する。

墳丘　削平をうけているが円墳。南北11.34m、東西10.44m。周堀は北側が上巾1.52m、下巾0.90m、東側は上巾2.04m、下巾0.66mを測る。総長は東西14.34m、南北14.44m。

主体部　削平されたと考えられる。不明。

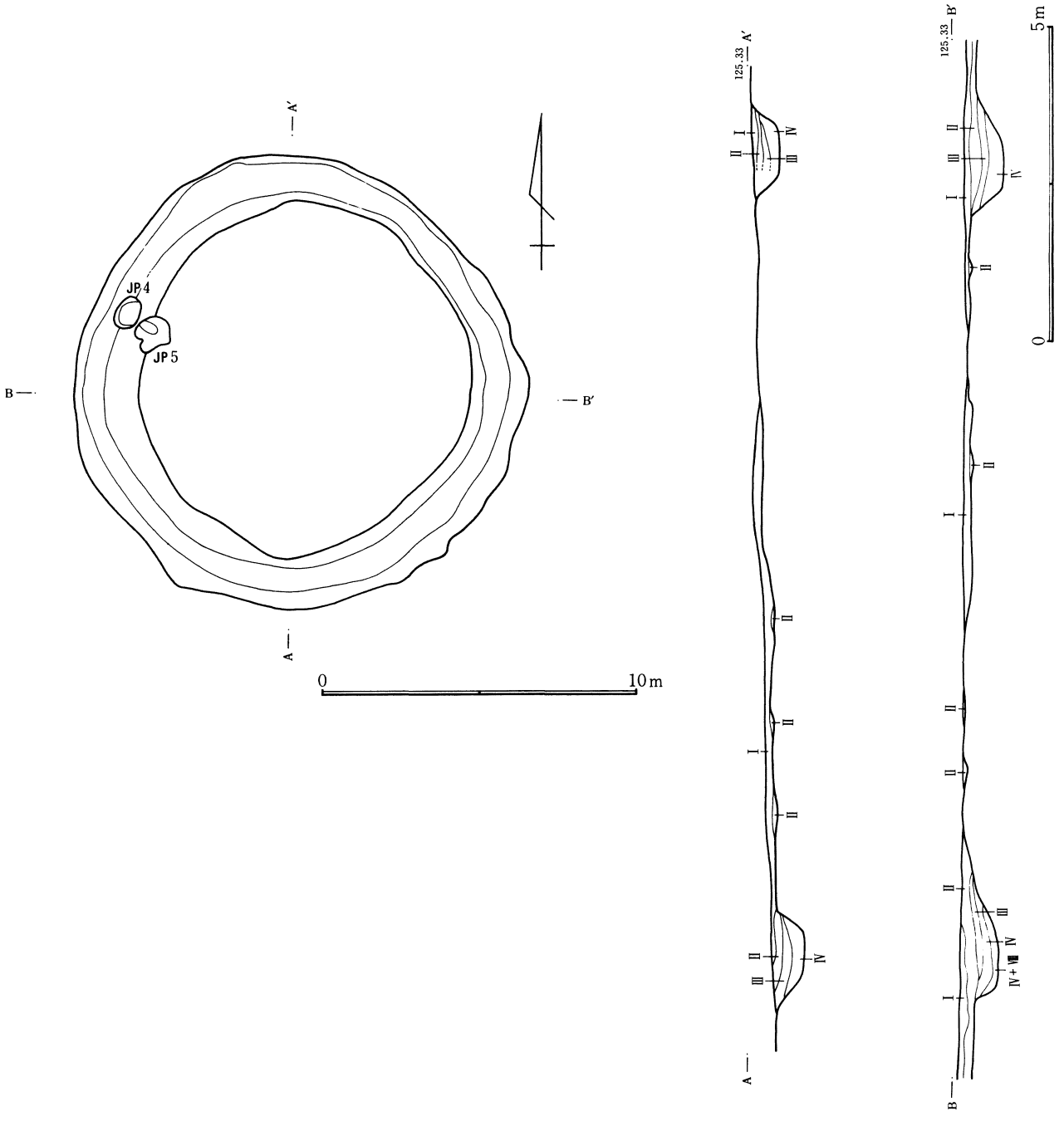
周堀覆土　周堀のほとんど上面まで大粒の浮石（C軽石か？）を含む黒色土で埋められている。その上にFA層が厚さ8～10cmでほぼ水平に堆積している。このFAの降下によって周堀はほぼ埋められた。

FA層の上にはII層（FPを含む黒色土）が堆積しているが、このII層は削平後の墳丘上でも検出されており、II層の堆積前にはこの古墳は削平されていたと考えられる。

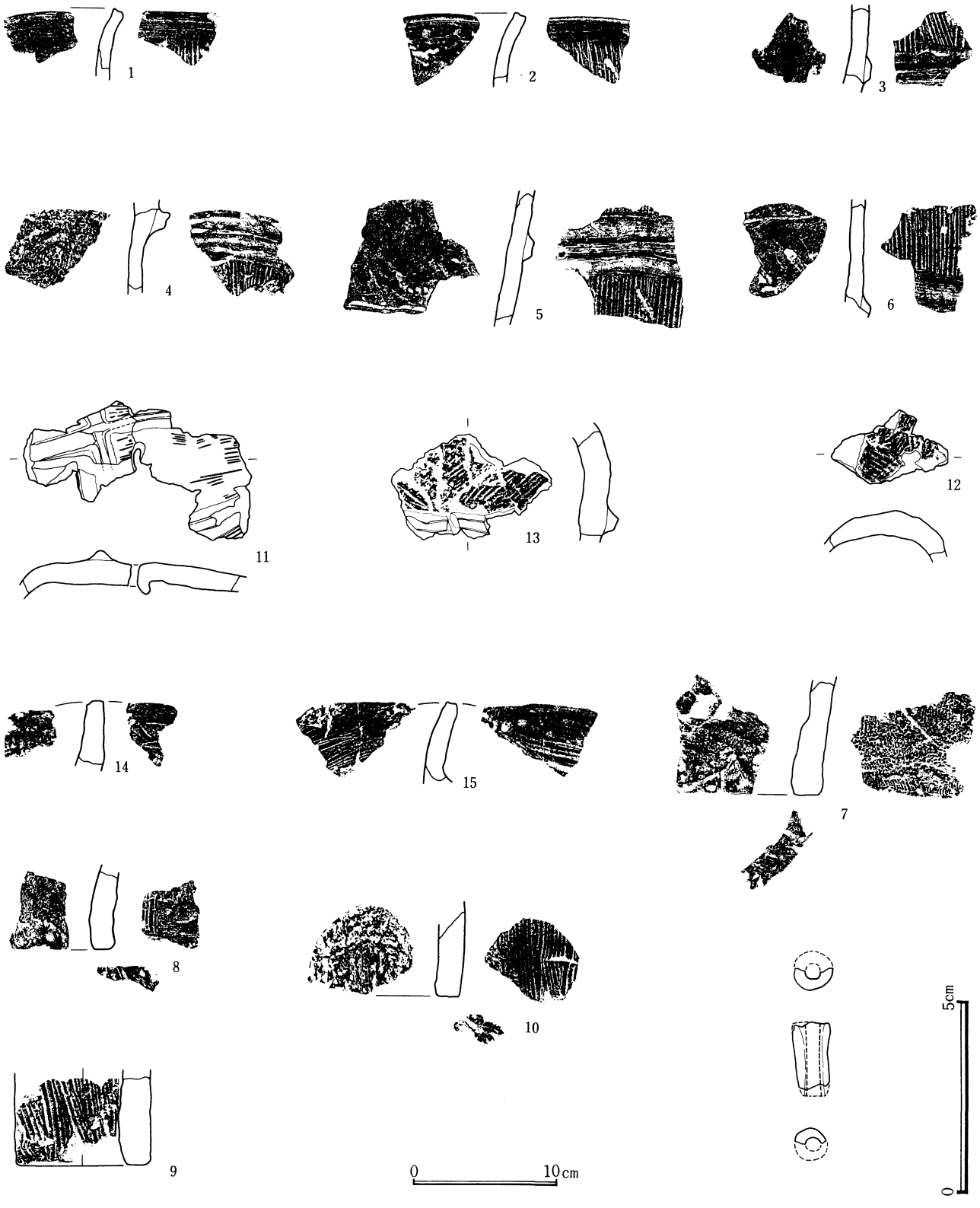
重複関係　墳丘西側でJP—4・5と重複している。

出土遺物　形象埴輪、管玉半製品が出土している。

（井野）



図—74　M—23号古墳平・断面図



図—75　M—23号古墳出土遺物実測図

M－24号古墳

位置　調査区南東のレ－４・５区に位置する。北にM－29・27、西にM－23・21に接する。古墳群中では比較的小規模である。

墳丘　削平をうけてはいるが円墳。東西7.88m、南北7.52m。周堀はほぼ同規模。北側は上巾1.26m、下巾0.76mを測る。総長は南北10.06m、東西は10.62mである。

主体部　削平をうけていると思われる。不明。

周堀覆土　周堀下半分には大粒の浮石（C軽石か？）を含む黒色土が埋め、その上にＦＡ層が６～10cmの厚さでレンズ状に堆積している。その上層のＦＰを含む黒色土が削平後の墳丘上に堆積している。このII層の堆積前にこの古墳が削平されたことがわかる。

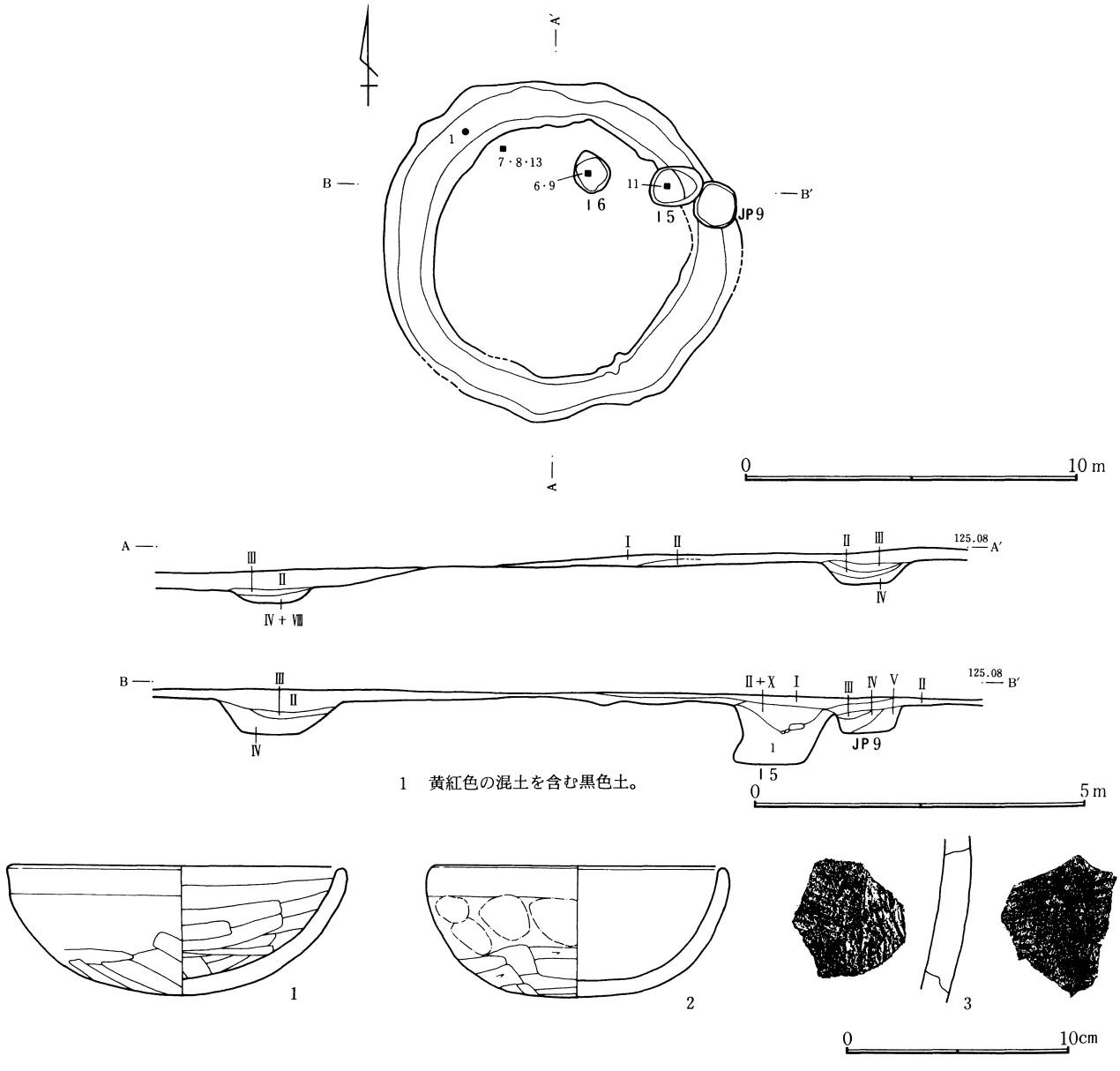
重複遺構　井戸５号は、地層断面をみるとII層が最下層にあり、この古墳の削平直後に作られたものか。中央部にはＢ軽石を含む黒色土があり、廃棄されたのはＢ軽石降下後か。

ＭＰ－１は古墳の地山のＶ層を切りこんでおり、周堀覆土最下層の１層が上面にあることから、古墳の造られた時にはその下になっていたことがわかる。

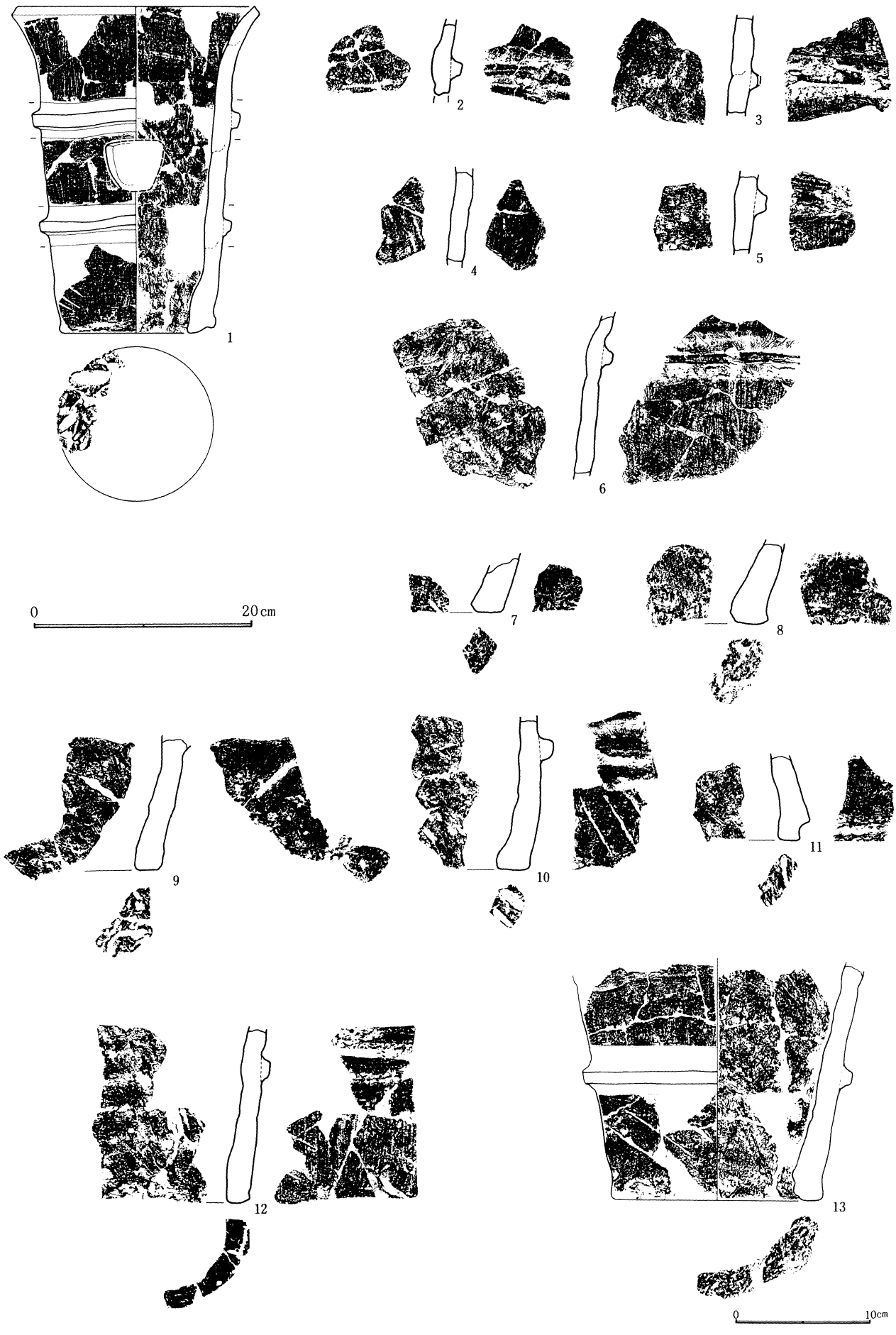
井戸６は地層断面がなく不明だが、井戸５に近い時期のものか。

出土遺物　円筒埴輪、須恵器、土師器が出土している。

（井野）



図－76　M－24号古墳平・断面図　出土遺物実測図(1)



図—77　M—24号古墳出土遺物実測図(2)

M—25号古墳

位置　調査区南東部やや北のタ—5・6に位置する。東にM—27、南にM—23が接する。北は調査区外。

墳丘　削平をうけているが円墳。南北7.0m、東西推定7.44m。周堀は南側は広く、上巾1.12m、下巾0.82mを測るが、北側は上巾0.78m、下巾0.42mと狭い。総長は南北8.92m、東西推定9.00m。

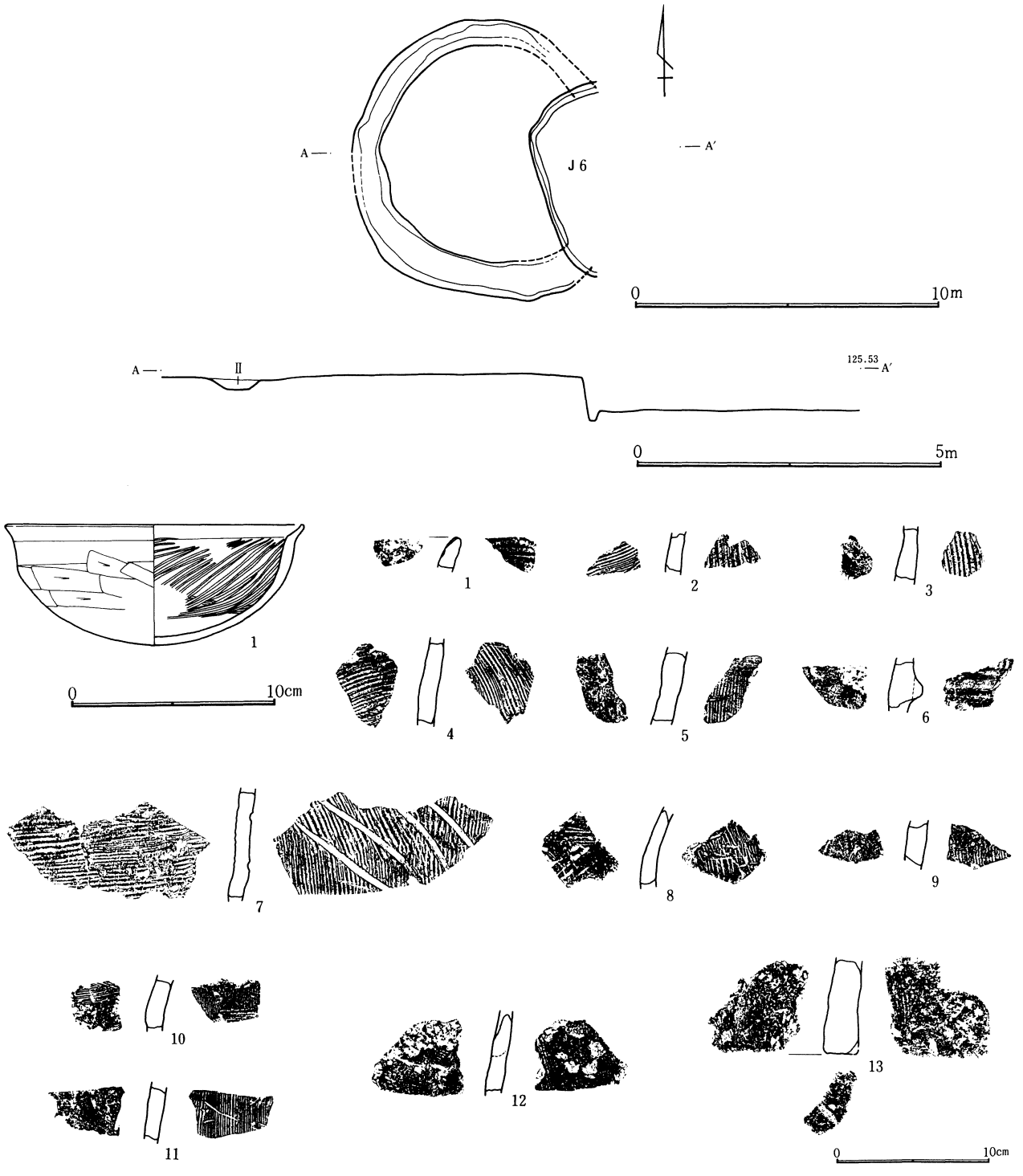
主体部　削平されていると思われる。不明。

周堀覆土　ＦＰ、Ｃ軽石を含む黒色土が堆積している。他の古墳にみられるＦＡ層はなくこれでみると、ＦＡ降下後も周堀は機能していたことになるが、削平が多く、周堀部も残りが良くないので確実ではない。

重複関係　Ｊ—6と重複する。

出土遺物　埴輪片と土師器が出土している。

（井野）



図—78　M—25号古墳平・断面図　出土遺物実測図

M—26号古墳

位置　調査区南東でやや東のソ・ツ—4・5区に位置する。北西でM—29に接し、南東にM—1が位置する。

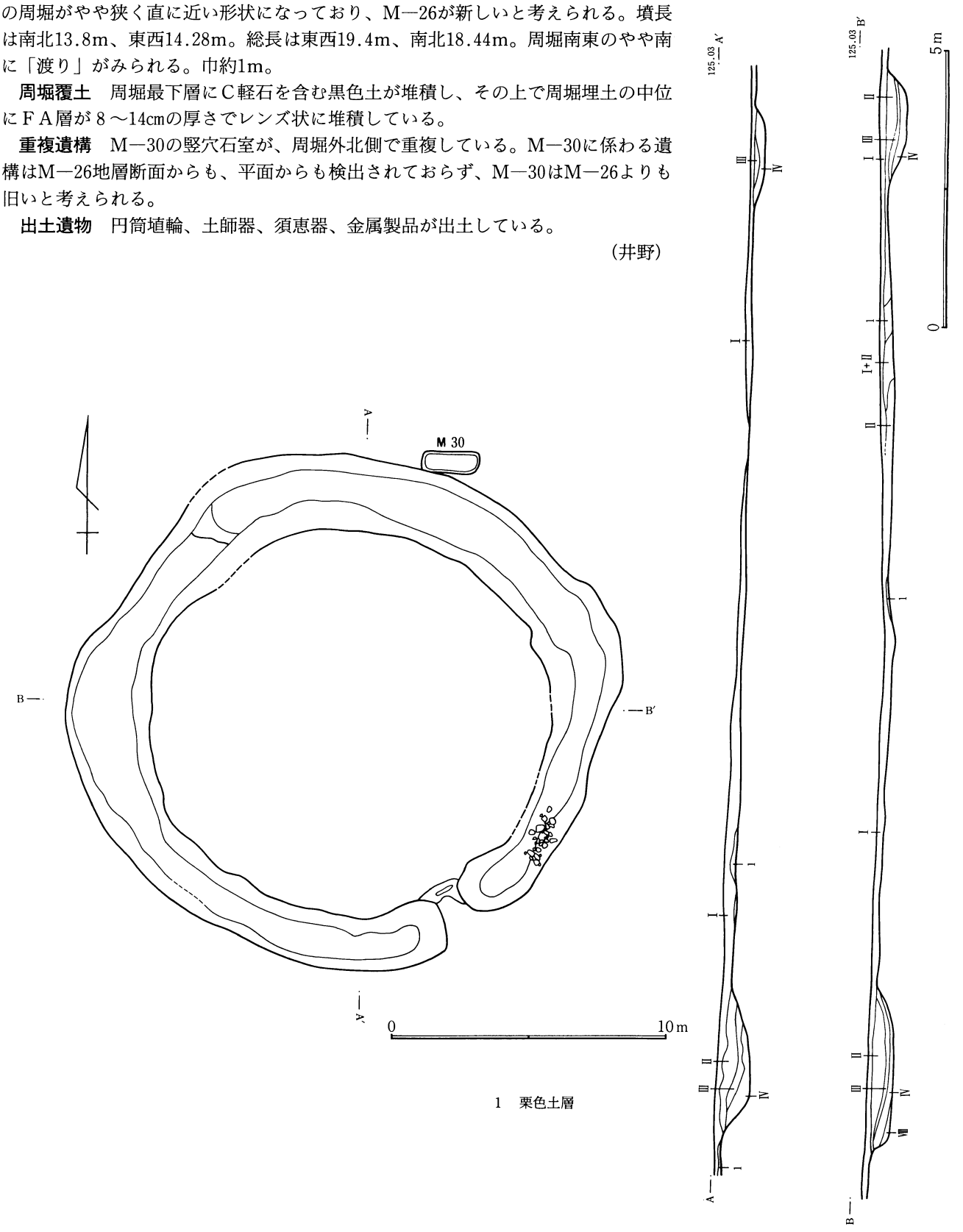
墳丘　削平をうけているが円墳。周堀は南東と北西がやや狭くなる。西と北東は広い。北は上巾2.62m、下巾1.08m、西は上巾3.0m、下巾2.04mを測る。周堀にやや変形がみられるのは北東のM—29、南東のM—1との係わりによるものか。M—29との係わりでみると、変形しているM—26が新しいと考えられる。M—1とはやや距離があるものの南東部の周堀がやや狭く直に近い形状になっており、M—26が新しいと考えられる。墳長は南北13.8m、東西14.28m。総長は東西19.4m、南北18.44m。周堀南東のやや南に「渡り」がみられる。巾約1m。

周堀覆土　周堀最下層にC軽石を含む黒色土が堆積し、その上で周堀埋土の中位にFA層が8～14cmの厚さでレンズ状に堆積している。

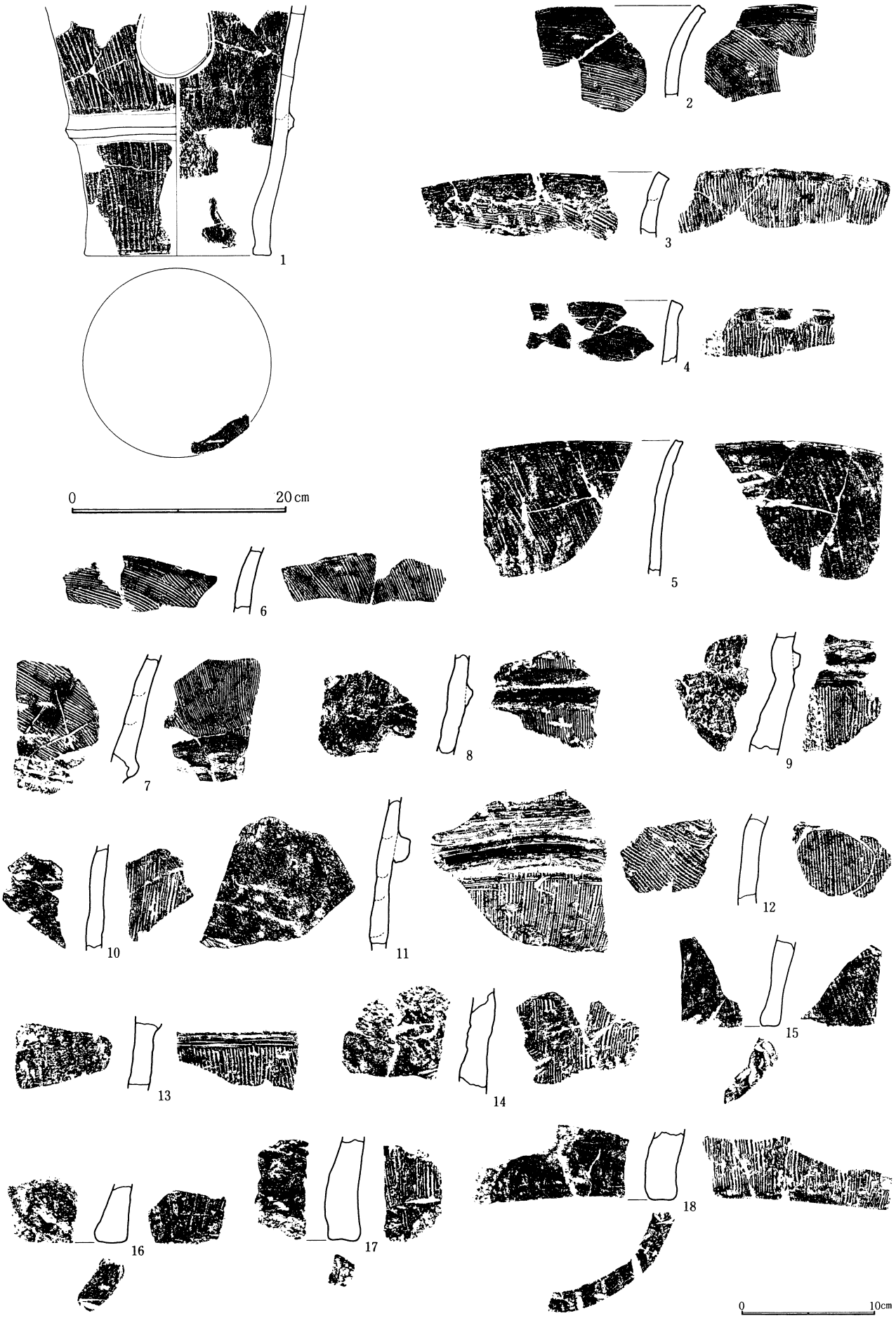
重複遺構　M—30の竪穴石室が、周堀外北側で重複している。M—30に係わる遺構はM—26地層断面からも、平面からも検出されておらず、M—30はM—26よりも旧いと考えられる。

出土遺物　円筒埴輪、土師器、須恵器、金属製品が出土している。

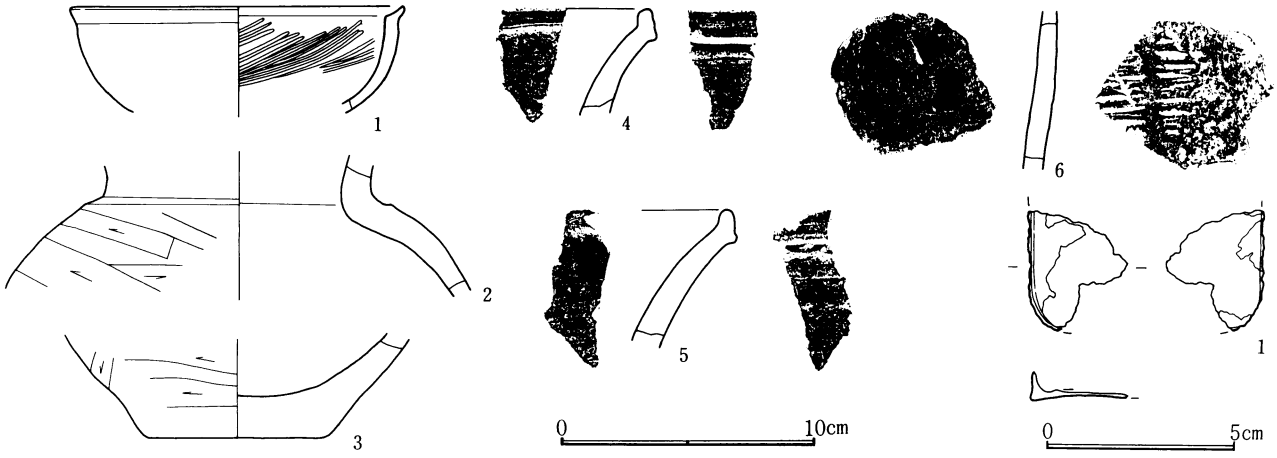
（井野）



図—79　M—26号古墳平・断面図



図—80　M—26号古墳出土遺物実測図(1)



図—81　M—26号古墳出土遺物実測図(2)

M—27号古墳

位置　調査区東側のタ・レ—5・6区に位置する。北半は調査区外になる。西にM—25、南西にM—23、南東でM—29が接する。

墳丘　削平をうけており、また重複が多いが、円墳と考えられる。東西16.16m、南北は現状で10.44m。周堀は南が上巾2.36m、下巾1.72m、西側が上巾1.90m、下巾1.56mを測る。総長は東西18.7m。

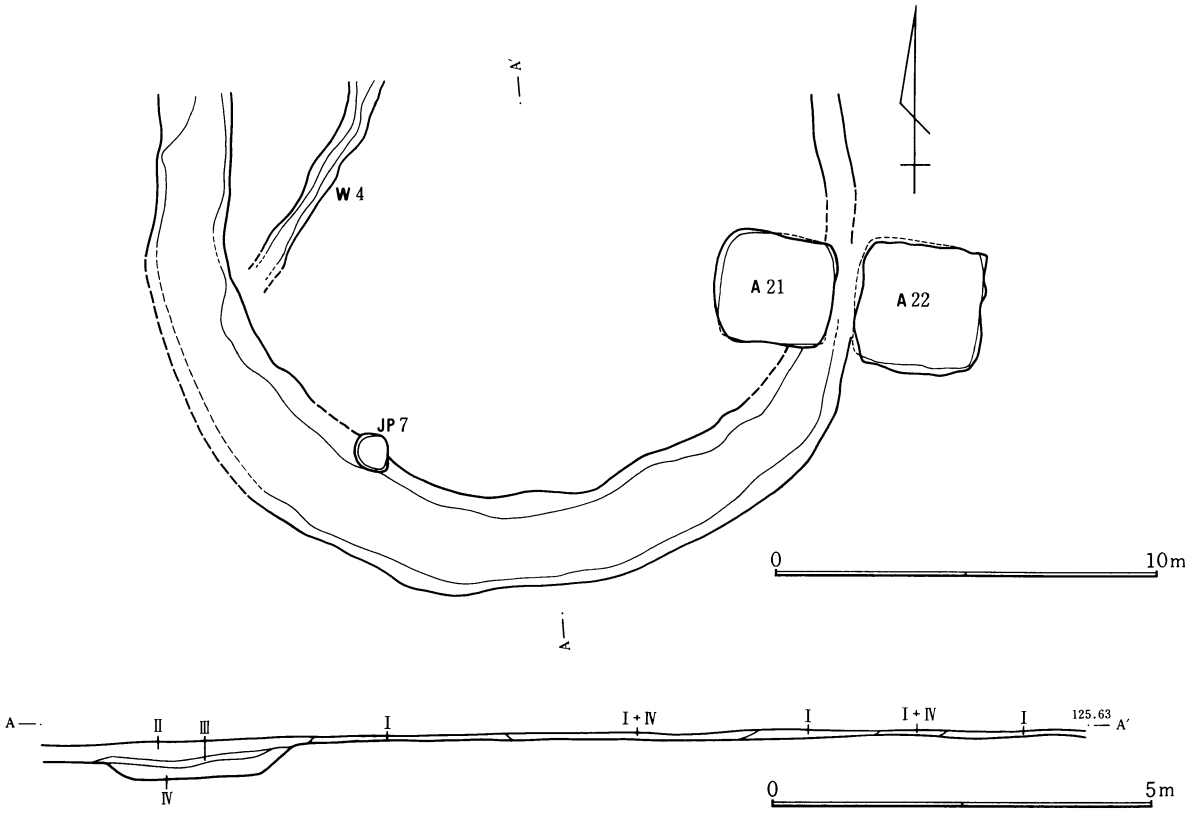
主体部　削平されたと考えられる。不明。

周堀覆土　周堀の半ばは浮石（C軽石か？）を含む黒色土が堆積しており、その上にFA層が7～12cmレンズ状に堆積している。その上にはFPを含む黒色土が堆積し周堀は完全に埋められている。

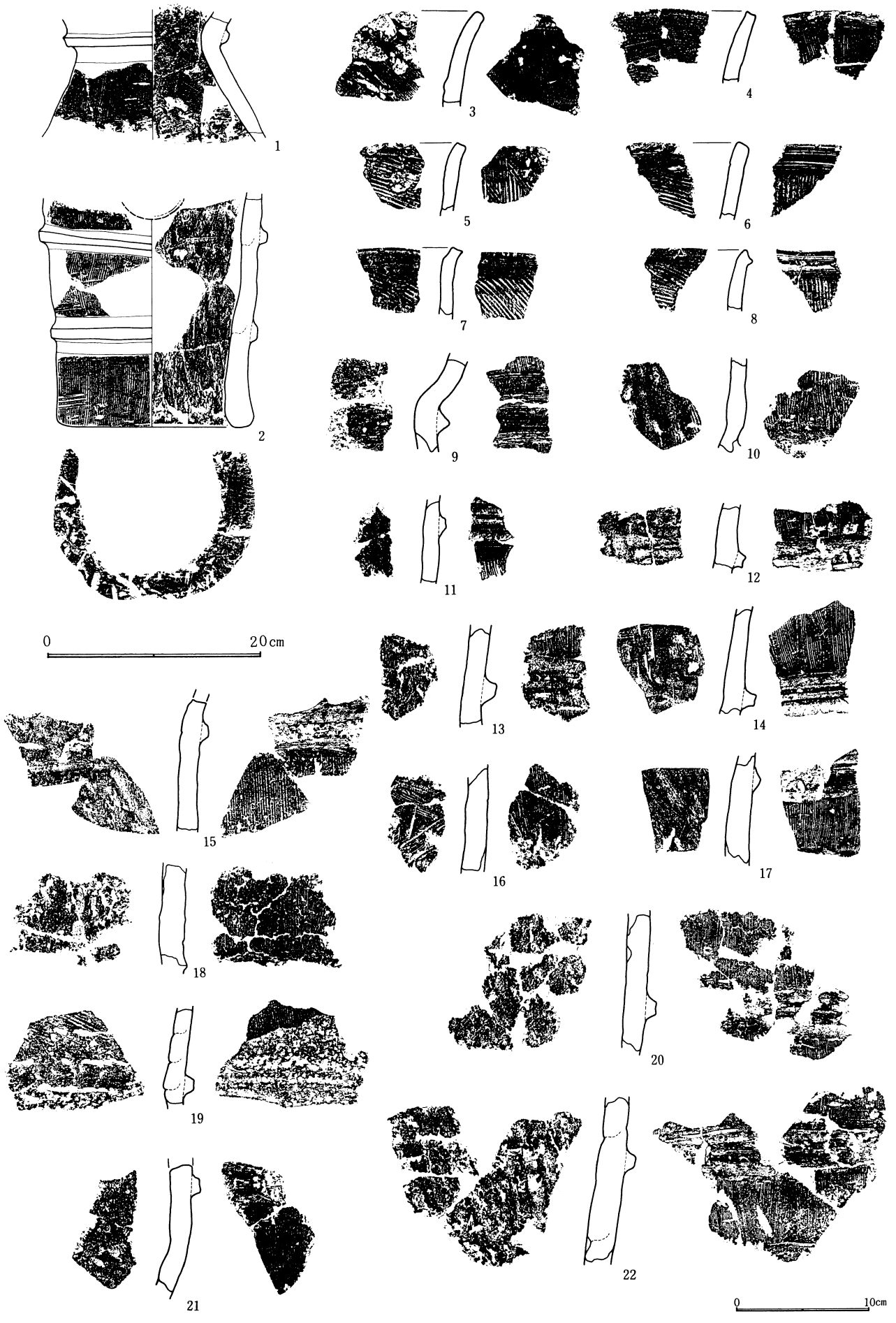
重複関係　墳丘中央部でJ—5と重複する。（全体図参照）。また、墳丘南西部でJP—7と重複する。さらに墳丘東側で遺構21・22とW—4が重複する。いずれも古墳以後のものか。周堀南西部でJ—6と重複する。

出土遺物　円筒埴輪、朝顔型埴輪、土師器が出土している。

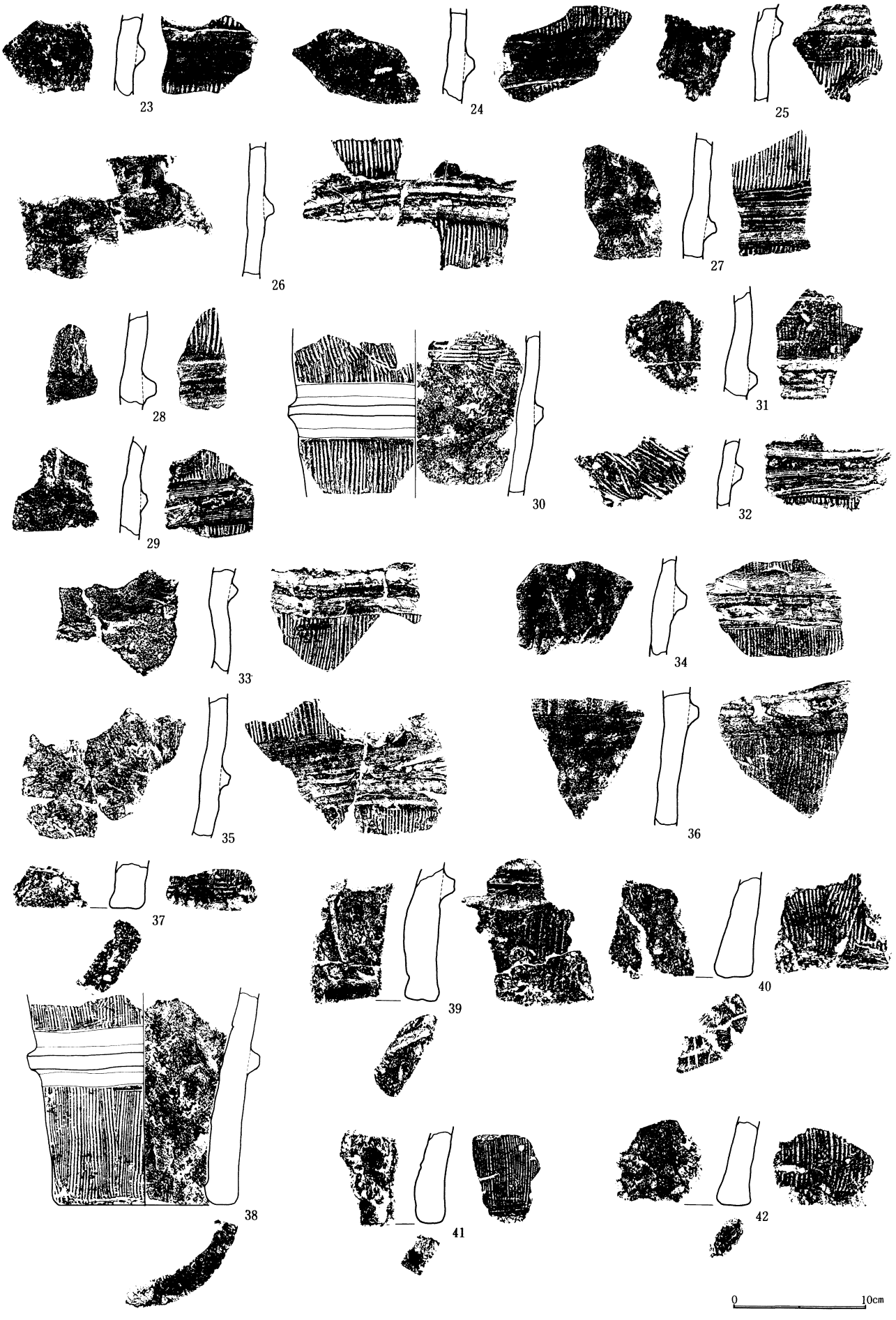
（井野）



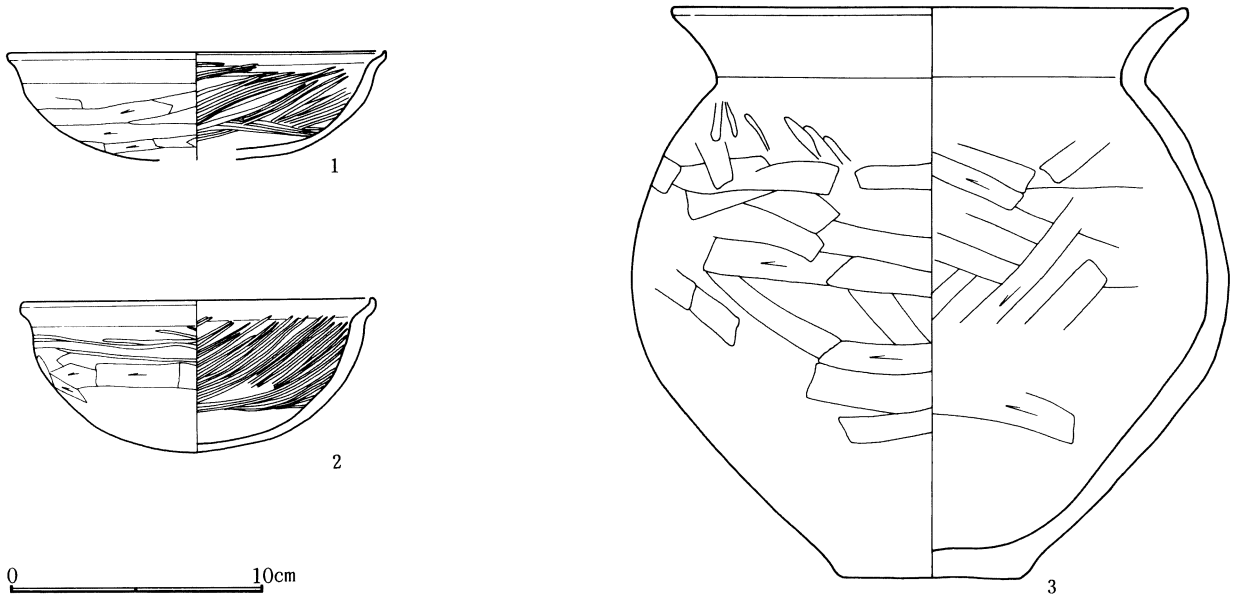
図—82　M—27号古墳平・断面図



図—83　M—27号古墳出土遺物実測図(1)

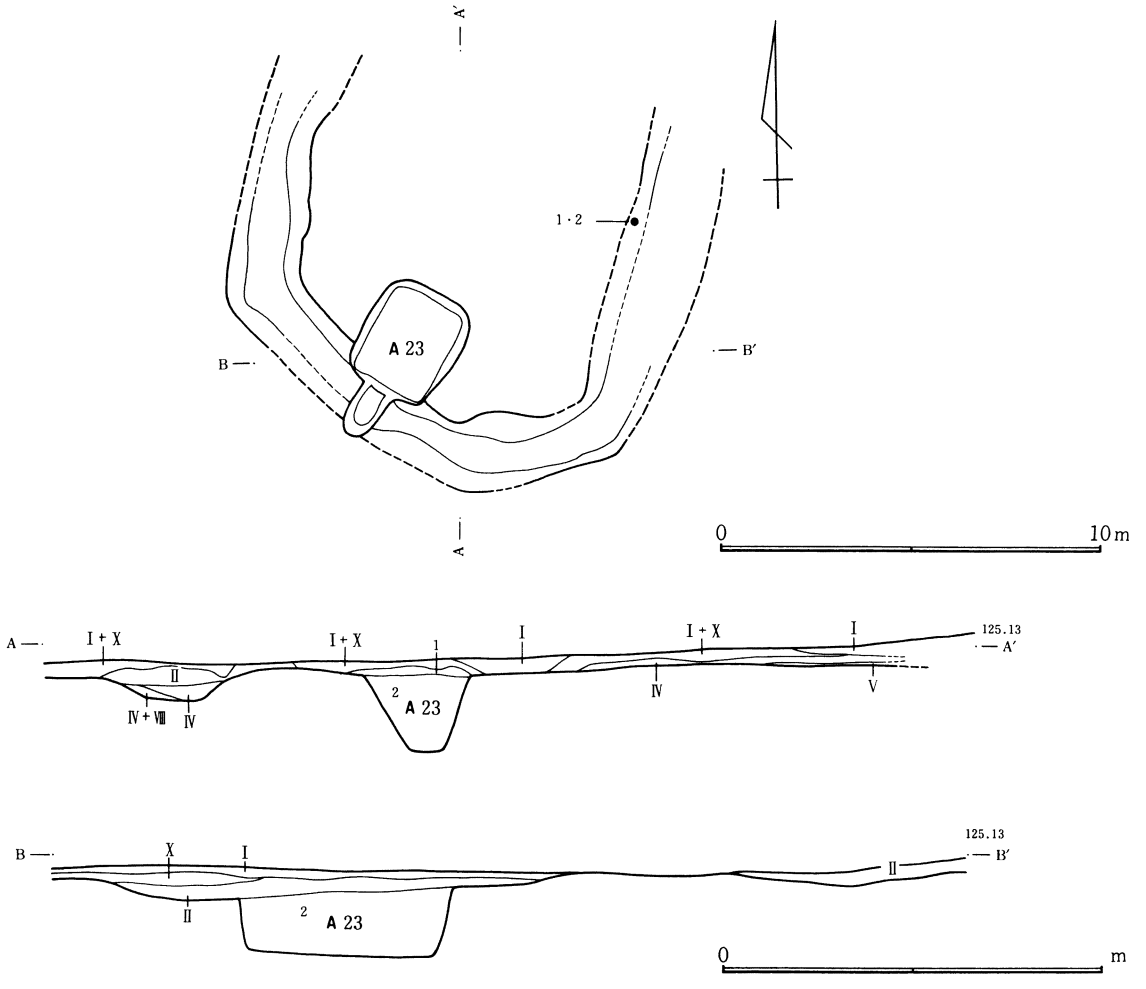


図—84　M—27号古墳出土遺物実測図(2)



図—85　M—27号古墳出土遺物実測図(3)

M—28号古墳



1　小さい浮石を含む黒色土
2　砂質の黒褐色土、ＦＰ・Ｂを含む。

図—86　M—28号古墳平・断面図

位置　調査区東端のツ－5・6に位置する。北側は調査区外であり、東は削平により不明な点が多い。周辺ではM－29、M－26が近くに位置する。

墳丘　部分的な検出に加え、重複・削平が多く不明な点が多い。周堀は南西側の検出部でみると六角墳丘の一部をなすようにみえる。東西8.6m、総長12.8mを測る。周堀は西側で、上巾1.72m、下巾0.8m。

周堀覆土　地層断面図東側でみると、新しい掘り込みの東にＦＰを多量に含む黒色土層があり、その下は地山であることから、ここが周堀で、ＦＰを多量に含む土層が最下層に入っていることになる。

これは、この古墳の削平がＦＰ降下後で、ＦＰまじりの黒色土は削平による二次推積と考えられるものである。このM－28の削平がこの古墳群で一番後期に近いと考えられる。ＦＰ降下前までは墓として機能していたものか。

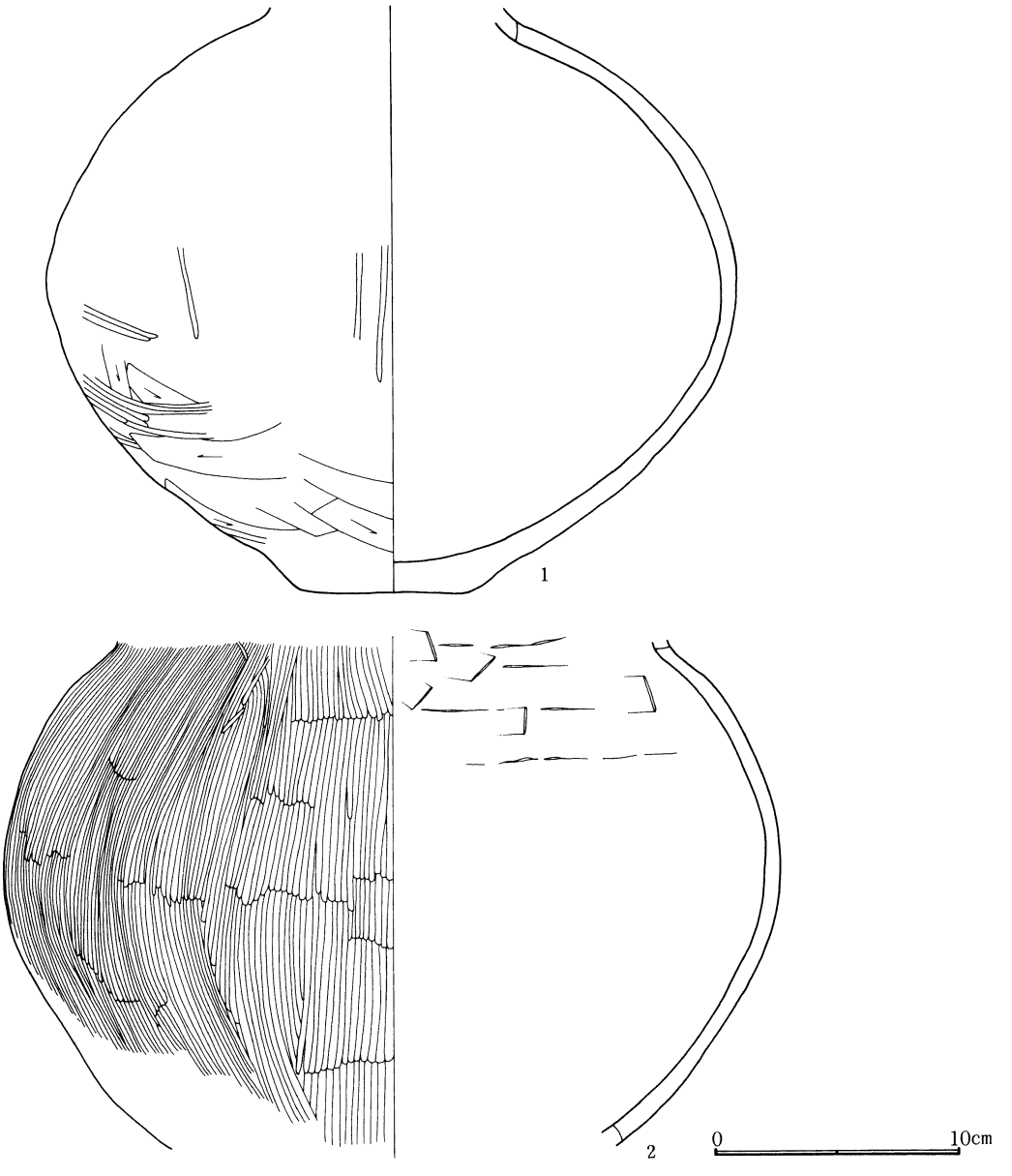
主体部　削平されたと考えられる。不明。

重複関係　遺構23が墳丘南西で重複する。地層断面で遺構23をみると、西側の重複土坑上にはＢ軽石層がみえ、遺構23はこのＢ軽石層を切っているように見える。しかし、遺構23の埋土をみると、最下層はＦＰのやや多い黒色土で、その上にＦＰが少し入る黒色土となっている。この二層の上面はやや水平となっており、この上にＢ軽石を含む土層が厚く堆積している。特に上より２層目のII層にはＢ軽石がブロック状となるとの注記があり、Ｂ軽石の純層が崩落によりブロック状となったと考えられるものである。

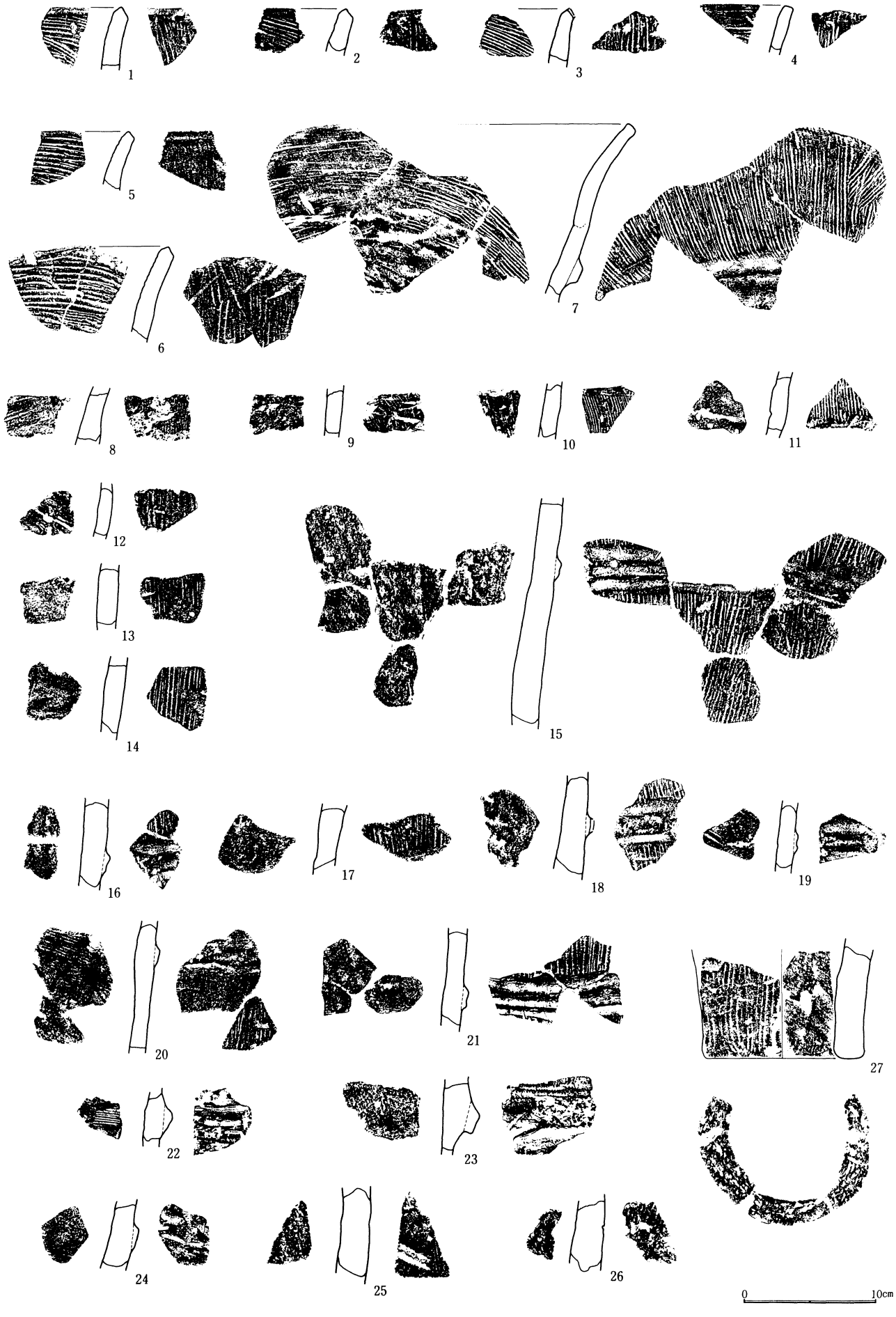
この点から考えるとこの遺構23の形成はＢ軽石降下直前で、直後のまだ遺構23の上部の天井部上にＢ軽石層があった時に崩落したと考えられる。埋土からみて、Ｂ軽石降下時には天井部はあまり厚くなく地表面と同じレベルで平らに近かったとみられ、これらは作られた時も同様と考えられる。

出土遺物　円筒埴輪が出土している。

（井野）



図－87　M－28号古墳出土遺物実測図(1)



図—88　M—28号古墳出土遺物実測図(2)

M－29号古墳

位置　調査区東側のレ・ソ－５・６区に位置する。南東がM－26、南西にM－24、北西にM－27が接する。この古墳群中においても規模の大きいほうである。

墳丘　削平をうけているが円墳。東西14.52m、南北14.08m。周堀は南西と南東がやや広い。北は上巾2.76m。下巾1.52m、南は上巾2.60m、下巾2.06m、西は上巾2.48m、下巾1.60mを測る。総長は南北19.44m、東西19.96m。

周堀の北側で一段高いところがみられる。比高差22cm。巾約３m。「渡り」にあたるものか。

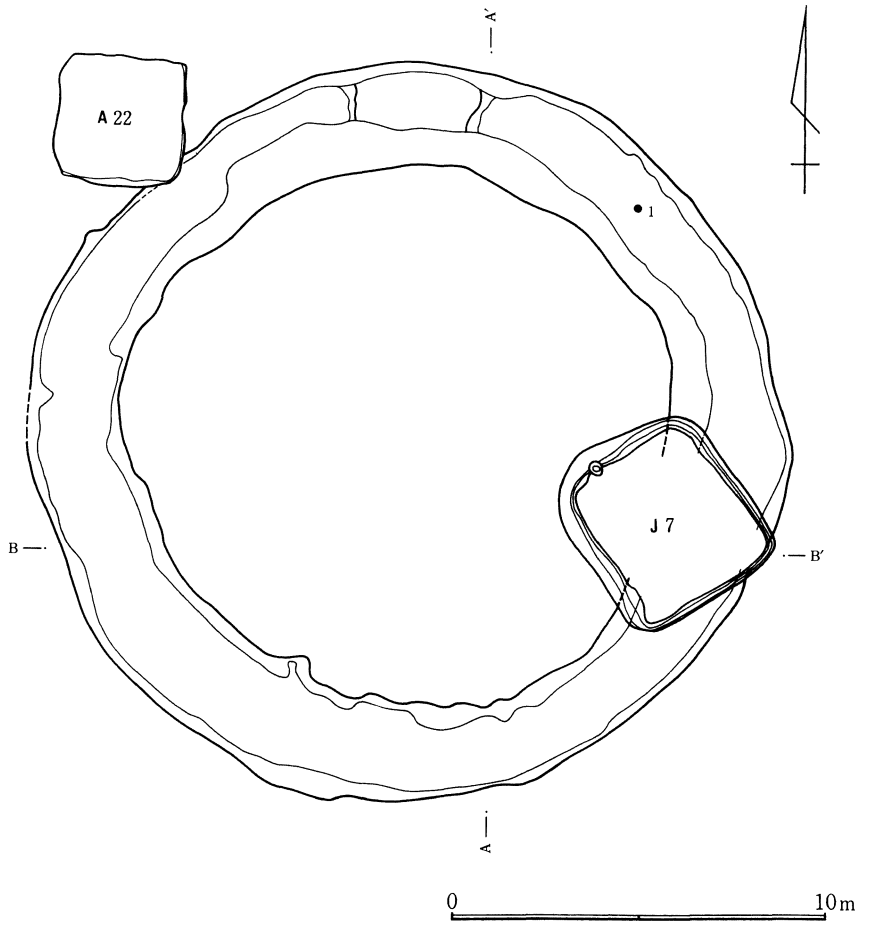
主体部　削平されたものと考えられる。不明。

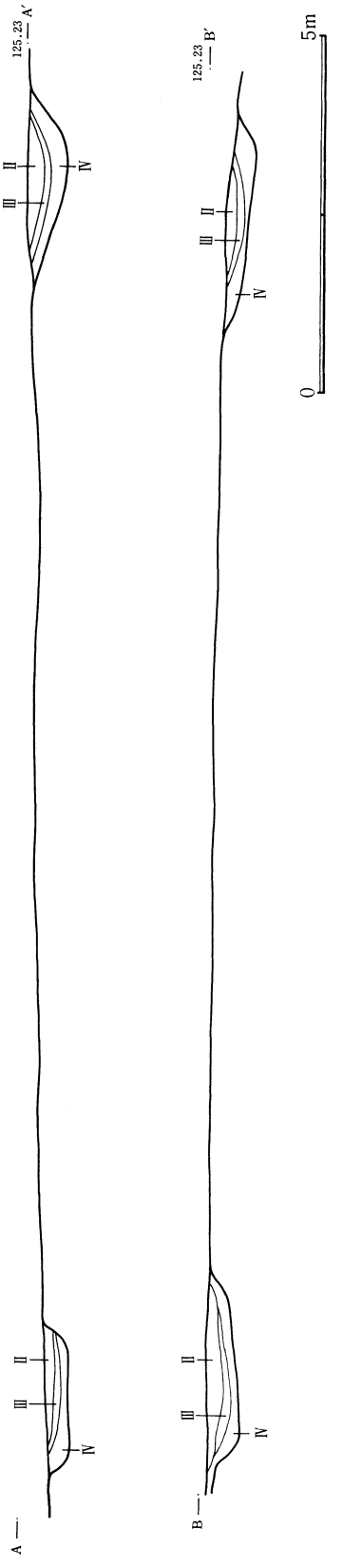
周堀覆土　最下層にC軽石を含む黒色土が堆積し、その上、埋土中位にＦＡ層が６～10cmの厚さでレンズ状に堆積している。その上にＦＰ、C軽石を含む黒色土が半ば以上の厚い堆積となっている。

重複遺構　Ｊ－７、遺構22と重複する。遺構22は古墳時代以降のものか。

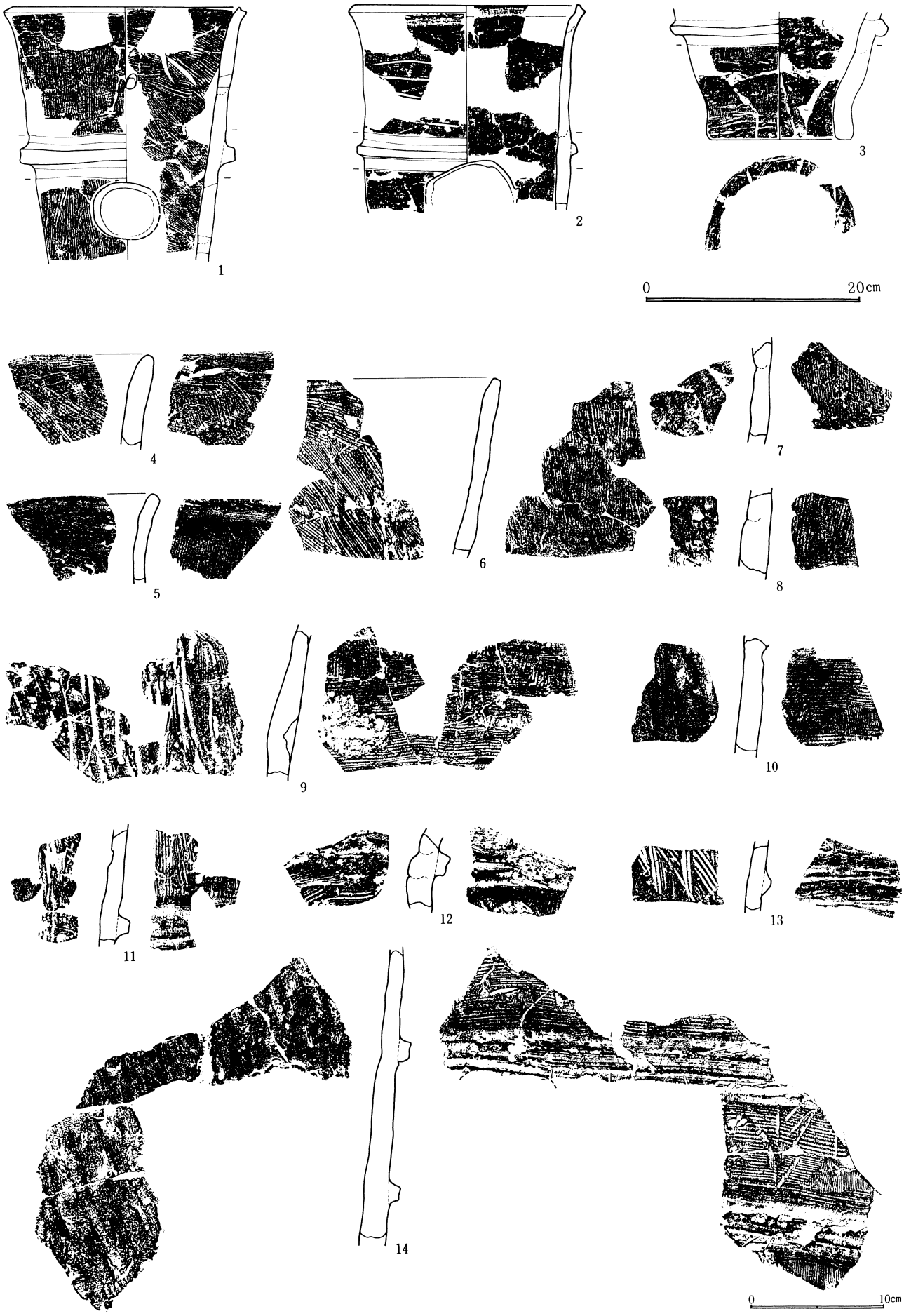
出土遺物　円筒埴輪と土師器、須恵器片が出土している。

（井野）

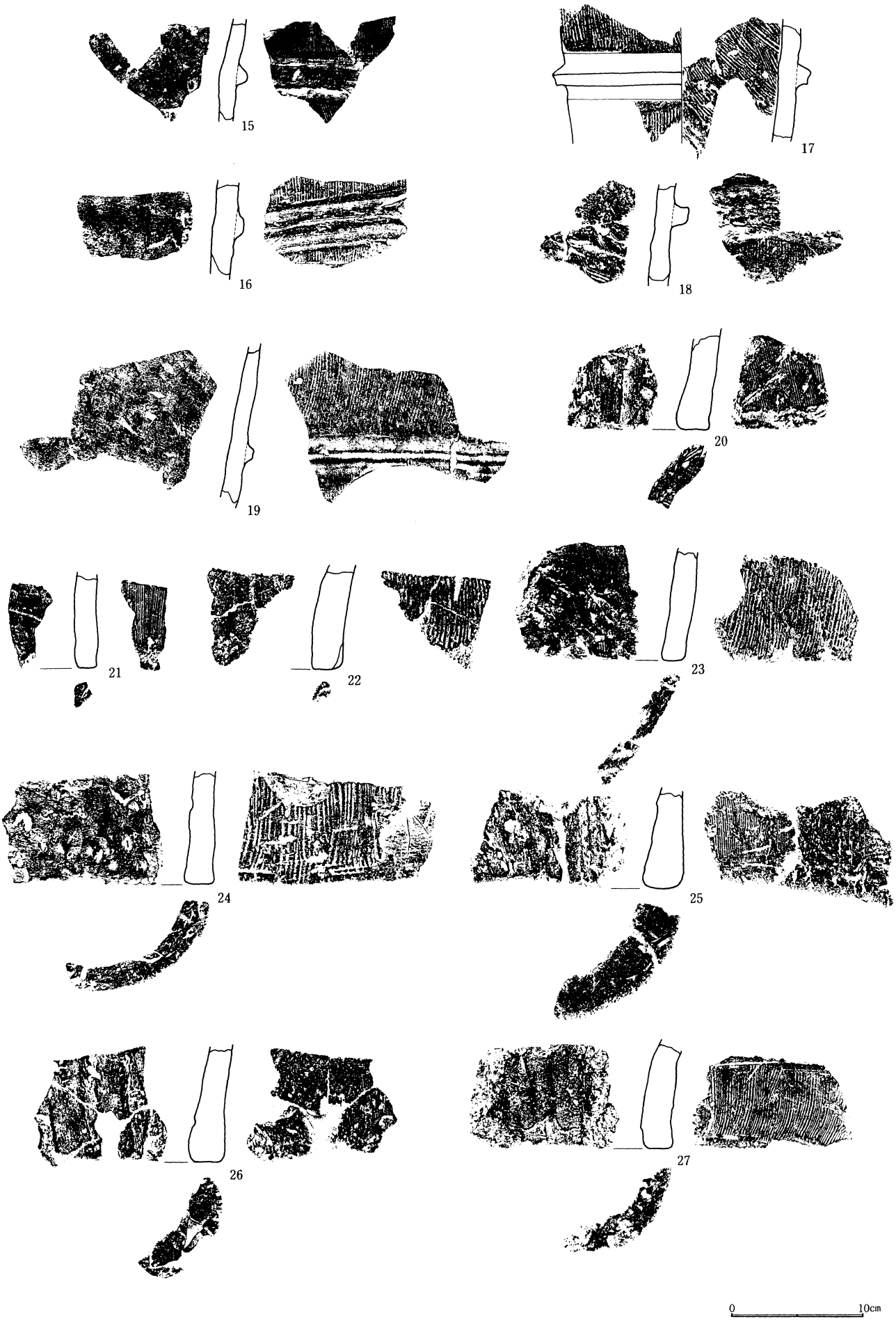




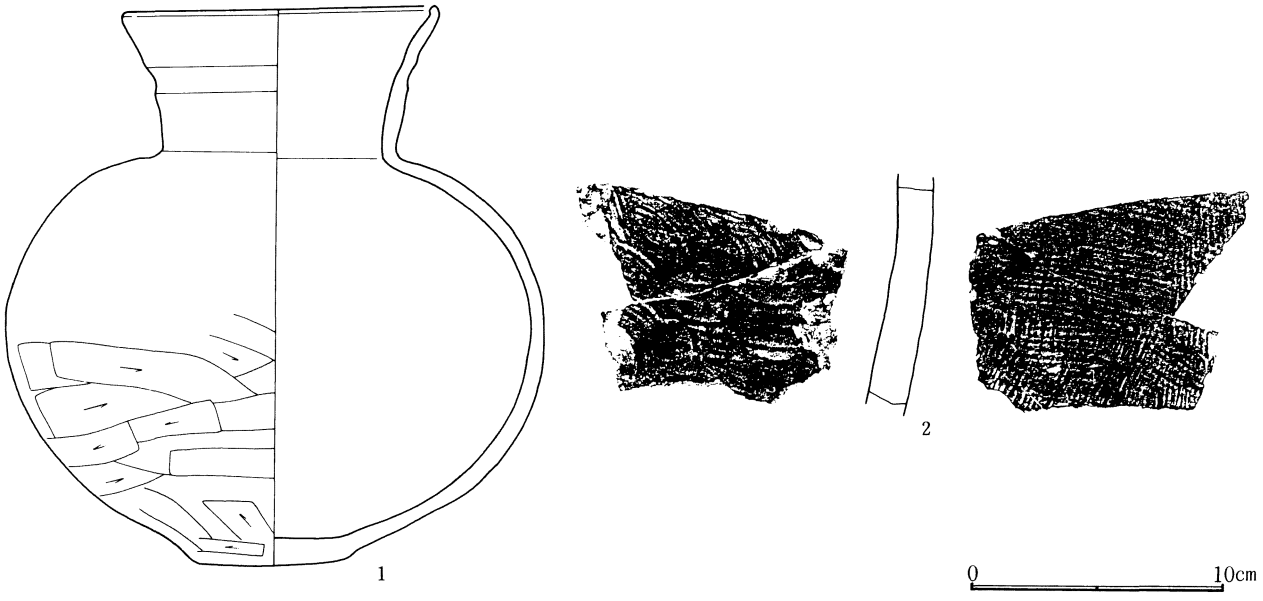
図－89　M－29号古墳平・断面図



図—90　M—29号古墳出土遺物実測図(1)



図—91　M—29号古墳出土遺物実測図(2)



図—92　M—29号古墳出土遺物実測図(3)

M—30号古墳

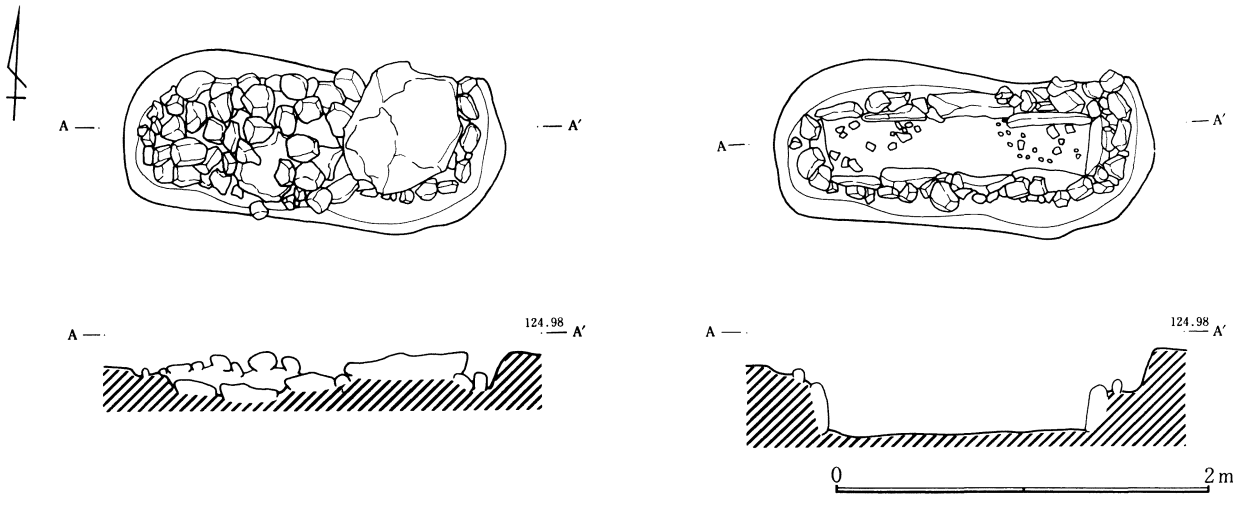
位置　調査区東のソ・ツ—5区。M—26の周堀すぐ北に位置する。

墳丘　不明。削平されたと考えられる。

主体部　竪穴式石室がのこる。未掘。平の面をそろえた石で石室を作る。裏ごめ石（径10～15cm）は黄褐色粘土と一緒につめられていた。天井石は東に68×56cmの一石と、西に60×20cmほどの石4石が使われていた。壁石は東と西に各一石、北と南は4石ずつの8石使われていた。堀り形は185×65cmの長方形。

石室規模は東西137cm×南北30cm。壁高は30cm。

（井野）



図—93　M—30号古墳石室実測図

2　中近世

A－1号遺構

位置　調査区南西のト・チ－4・5区に位置する。付近には遺構2、3が東に、遺構4、5が西に位置する。周辺にはその他の遺構は検出されていない。

形状　東西に長い長方形。各辺はほぼ直で、隅角も直角に近い。規模は南北が2,75m×東西3.54mを測る。面積は㎡。現壁高は72～90cmを測る。周溝は見られない。長軸方向はN－83°－Eである。

床面　ほぼ平担である。

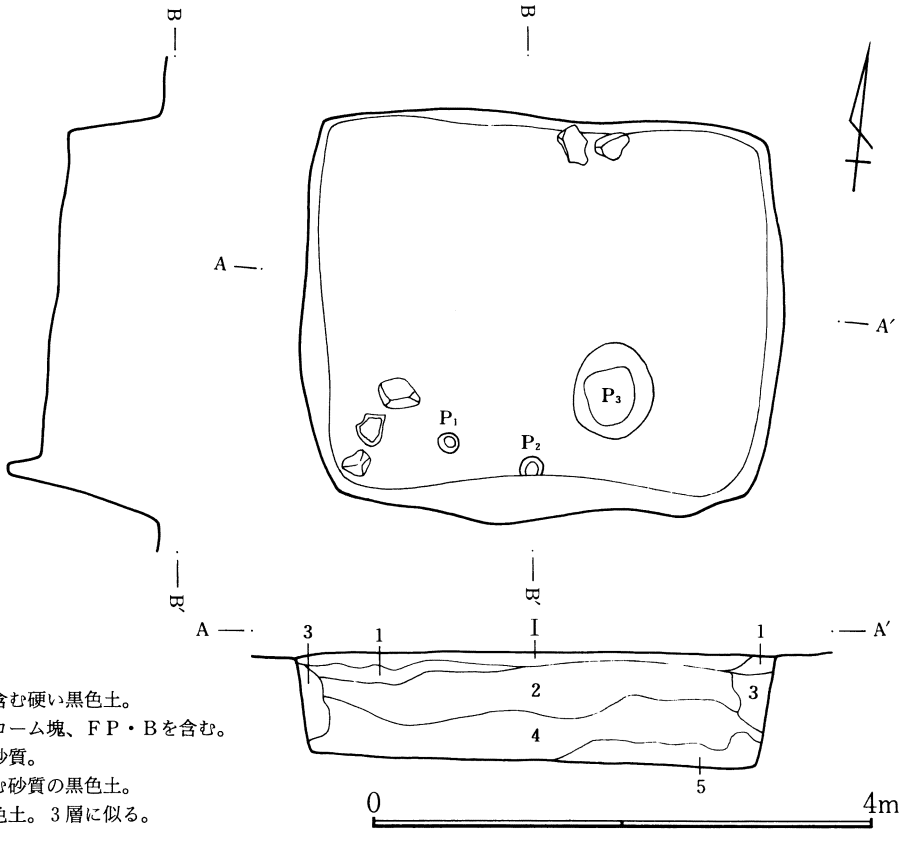
ピット　床面3カ所。P_1南西（15×13cm）円筒形。P_2南（18×16×37cm）。P_3南東（75×63cm）、皿状で浅い。いずれも柱穴とは見られない。

炉等の施設　不明。床面の南西部には床面近くに3石が並び、壁へ向かってのおちこみ、P_1、P_2のピットがみられるが、性格は不明である。

テフラ　最下層までFPを含むが、B軽石は検出されていない。

その他　住居跡とするには施設が欠けており、竪穴遺構とするのが適当か。

出土遺物　古銭（挿122—23・28）が出土している。　（井野）



図—94　A－1号遺構平・断面図

A－2号遺構

位置　調査区南西のチ－4・5区に位置する。遺構1が西に、遺構3が東に位置する。

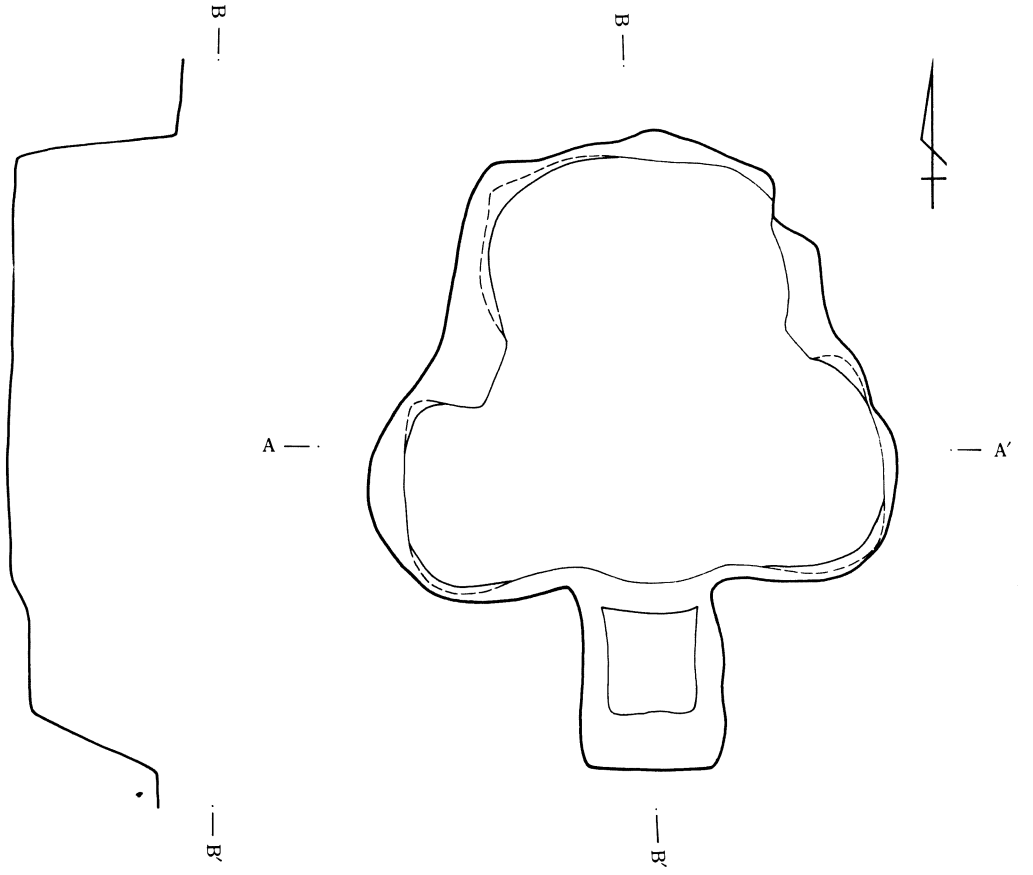
形状　南北に長い長方形の主部に、東と西に張り出し部と、南に入口部と考えられる長方形の張り出しを持つ。ほぼ直の壁をもつが、一部袋状を呈す。上面よりも、下面のほうが隅角は直に近い。規模は南北が3.4m、東西が北では2.40m、南では3.80mを測る。壁高は121～123cmと深い。長軸方向はN－87°－E。

南側に入口施設をもつ。底面にくらべ南にむかって傾斜がわずかに見られる。上面は南北1.48m×東西1.10m、下面は南北1.04m×東西0.71mを測る。

床面　ほぼ平担である。

埋土　自然堆積とは考えにくい不自然な土層。掘り出されて室状になった天井部の土層の崩落によるものか。地下式の土坑と考えられる。最下層の粘質土層は底部を形状する土層か。B軽石を含む土層で埋められている。

出土遺物　古銭（挿122—21）が出土している。　（井野）



1　黒色土、浮石を含む。II層に近い。
2　褐色土。下層にローム多い。
3　ロームを主とする層。
4　暗褐色土。B・FP含む。
5　黒色土。B軽石を含む。
6　褐色土。粘性強い。
7　白褐色土。粘土塊が中心。
8　2層に似る。
9　2、8層に似る。
10　褐色土。

図—95　A—2号遺構平・断面図

A—3号遺構

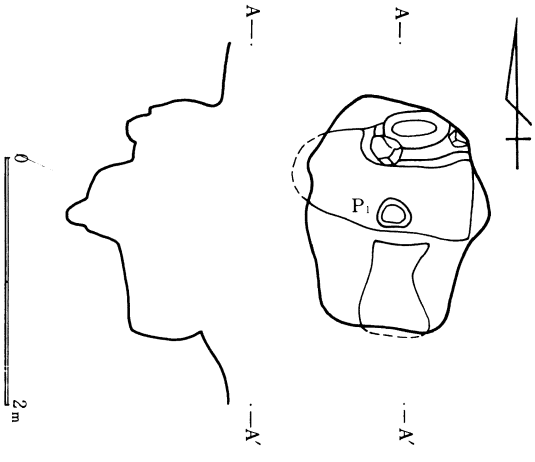
位置　調査区南西のリ—4に位置する。西に遺構2が位置する。

形状　東西に長い長方形の主部と、南側に張り出した入口部をもつ。主部はほぼ直の掘り込みであるが、一部袋状の断面をもつ。規模は南北0.9mで東西1.40m。深さは最大72cmを測る。入口部は南側で、ほぼ床面近くまで掘られ、わずかな傾斜をもって作られていた。形状はほぼ長方形で、0.85m×0.55mの規模をもつ。

床面　ほぼ平坦である。北壁側に2石。入口部前にピット（30×22cm）深さ15cm。

埋土　反転層と思われる。地下式の土坑の性格によるものか。

（井野）



図—96　A—3号遺構平・断面図

A－4号遺構

位置　調査区南西のト－4・5区に位置する。東に遺構1・2が接し、南に遺構5が位置する。

形状　遺構2に似た形状、東西に長い長方形の主部と、北の張り出しと、南側の入口部をもつ。ほぼ直に掘られているが、一部袋状になり、底面は隅角が直に近い形状をもつ。規模は南北2.56m×東西4.32m。深さは最大1.11mを測る。入口部は長方形で、底面は1.03m×0.75m。底面近くまで掘り込まれ、わずかに主部に向かって傾斜している。

床面　主部底面はほぼ平坦である。

埋土　出土遺物で板碑片が大小6片検出されている。主部西側で、底面より20cm～50cmの地点である。地層断面図でみると板碑出土地点より下層には浮石を含まない粘性の強い土層が30～40cmの厚さで堆積している。その上層にはＦＰ、Ｂを含む土層が厚く堆積するが板碑の上層のみ、浮石を含まない黒色土となっている。また、板碑の西側は浮石のない粘性の強い土層が厚く堆積している。板碑の下の土は注記が欠けているが、写真でみると粘性の強い土層に見える。

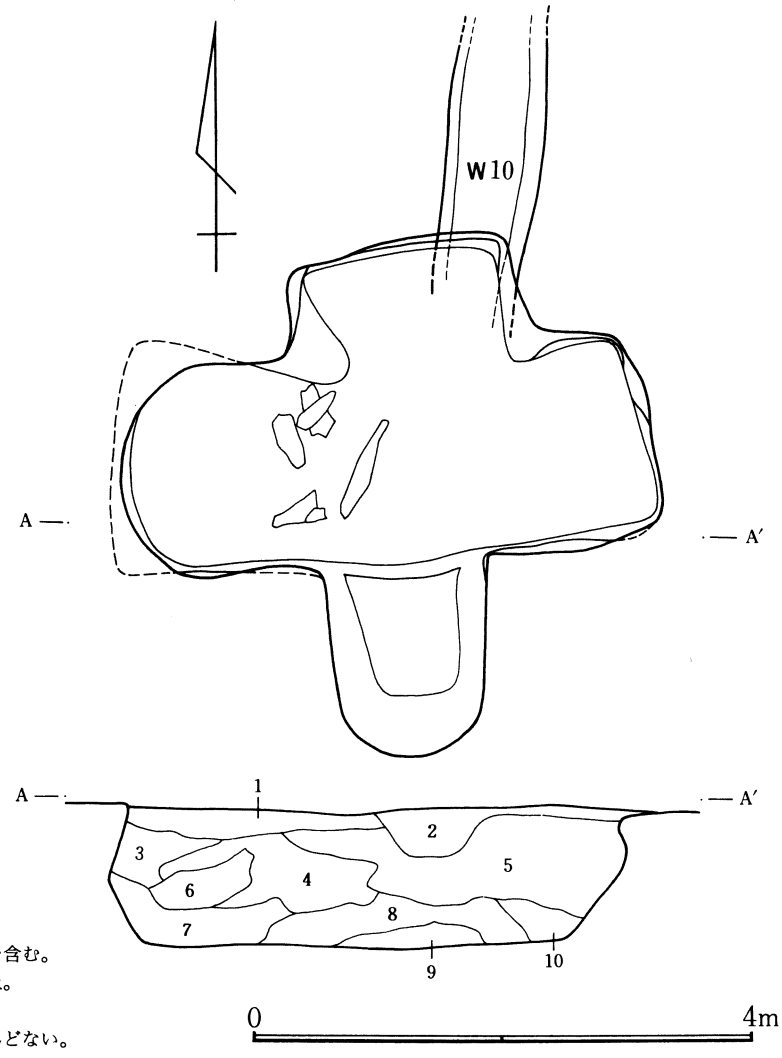
以上から考えると、底面がほぼ平坦であることからみて、下層にみられる粘性のある浮石を含まない土層は一坦掘り出された土層で、地下式土坑の天井部を作ったもの、また板碑はその天井部の上の黒色土の土山（？）に立てられていたのではないかと考えられる。

この地下式土坑はこれからみると中世の墓壙として使用されていたと考えられるものである。遺構2も同様の形状をもつことから同様に墓壙と考えられる。

重複関係　溝－10と重複する。溝は、Ｂ軽石を含む土層を切っていることから近世のものか。

出土遺物　板碑が出土している。（挿120－14・15、挿121－16）

（井野）



1　黒色土。Ｂ・ＦＰを含む。
2　溝埋土。砂質褐色土。
3　暗褐色土。軟質。
4　黒色土。浮石ほとんどない。
5　褐色土。Ｂが少し、ＦＰが多く含まれる。
6　褐色土。粘性強い。
7　褐色土。粘性強い。ブロック状でまじる。
8　ローム中心の褐色土。粘性強い。
9　砂質土混入の褐色土。粘性あり。
10　粘性のある褐色土。粒子は細かい。

図－97　Ａ－4号遺構平・断面図

A－5号遺構

位置　調査区南西のト－4区に位置する。北に遺構1～4が位置する。

形状　方形の主部に東側の入口部とみられる張り出しをもつ。規模は主部が南北2.2mで、東西が1.98mである。壁は各辺ともにわずかな袋状を呈す。深さは最大が100cmを測る。東側張り出しは長方形で、底面が1.22m×0.53mで入口部と考えられる。

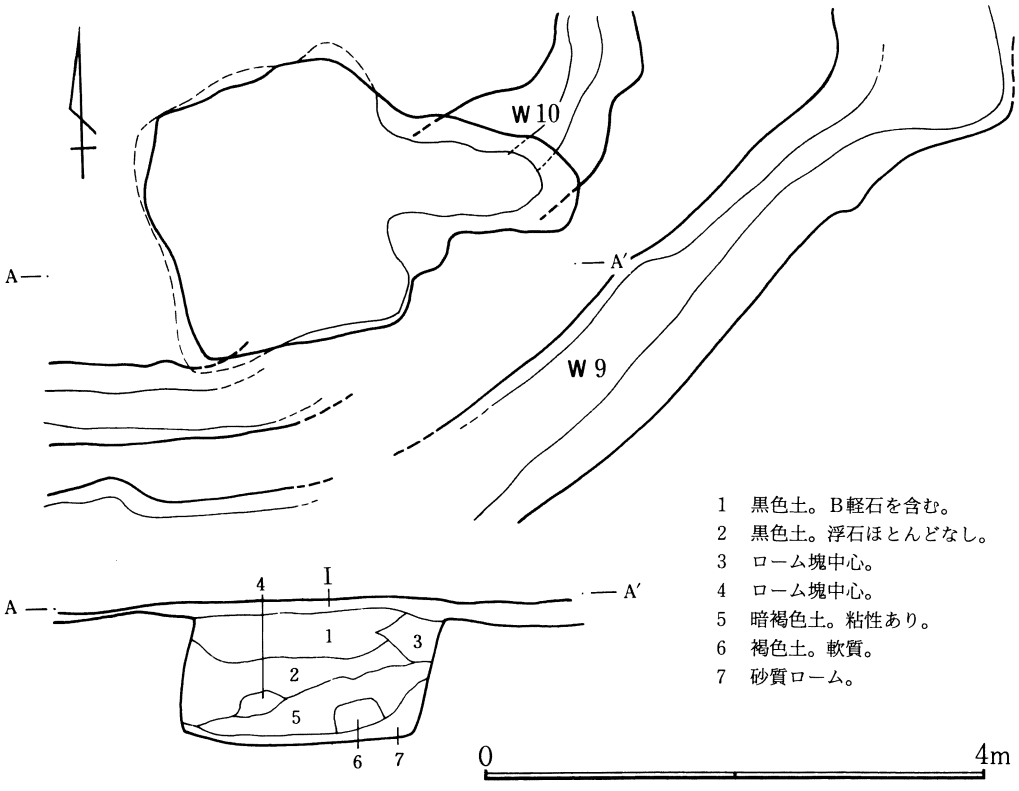
底面はほぼ平坦である。

埋土　中・下層にはローム塊、浮石を含まない黒色土、粘性をもつ暗褐色土がみられる。その上にB軽石まじりの黒色土がみられる。自然堆積よりは崩落によると考えられる。人為埋転とするには土層のまじりが少ない。

土層でみると、主部の上には粘性のある暗褐色土で天井部を作り、さらにその上に黒色土が重ねてあったとみられる。これが崩落し、その窪みにB軽石を含む黒色土が入ったものと考えられる。2～4と同様の地下式土坑か。

重複関係　溝－10と重複する。遺構5の埋土を切っており、溝－10が新しい。

（井野）



図－98　A－5号遺構平・断面図

A－6号遺構

位置　調査区北東のヨ－9に位置する。周囲には同様の遺構群と古墳が位置している。

形状　南北に長い長方形をなし、壁はほぼ直に掘り込まれている。規模は南北2.82m×東西1.45m、深さは最大58cmを測る。底面は南3分の2が礫で占められていた。本来は主部に東側への張り出しをもつ形状であったと考えられる。

地層断面でみると、遺構8の主たる埋土層を切って遺構6が作られており、新旧が判明する。東にはこの遺構8の埋土と同じ土が埋土となっている遺構28がある。このことから遺構28が旧く、遺構6が新しい。遺構6の入口部は、遺構28に重複していたとも見られるが不明。

埋土　ほぼ下層までB軽石がまじる。B軽石とロームブロックまじりの褐色土で、中に山石が検出されている。自然埋没でなく、一時の人為埋転と見られる。性格は不明。

（井野）

A－28号遺構

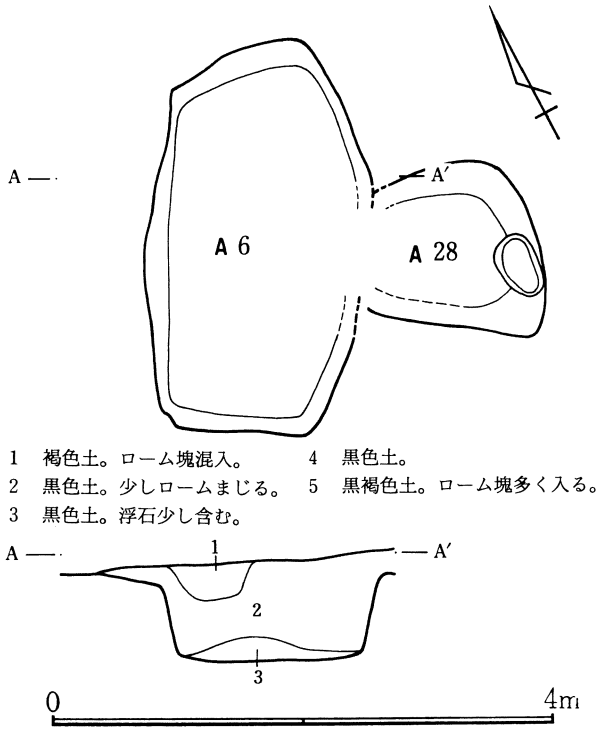
位置　ヨ－9。遺構6と重複。

形状　方形の主部に南への張り出し部をもつ。重複のため一部不明。規模は南北0.85m、東西推定1.2m。やや傾斜をもつ壁。底部はほぼ平坦である。遺構6にくらべ礫が見られない。底面レベルは上で極めて浅い。東壁際に浅いピット

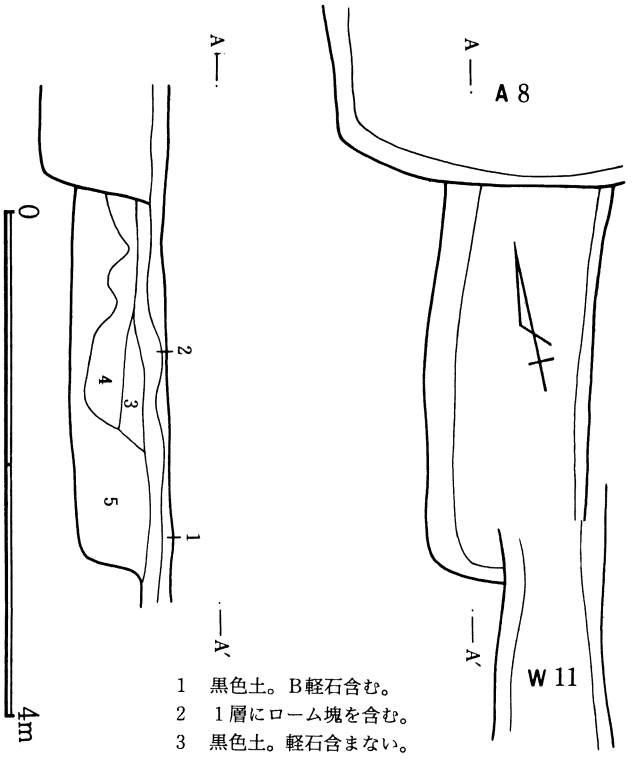
状の落ち込みがみられる。規模は、南北0.5m×東西0.32mを測る。

埋土　部分的にしかわからないが、遺構８と同じ土層が上層で確認されており、同時期もしくは遺構８よりも旧いと考えられる。Ｂ軽石、ロームブロックを含む褐色土。

（井野）



図―99　Ａ―６・28号遺構平・断面図



図―100　Ａ―７号遺構平・断面図

Ａ―７号遺構

位置　調査区北東のヨ・タ―９区に位置する。遺構群の中央にある。この遺構群は東にのびると思われるが、調査区外である。遺構７は遺構８と重複しており、北端は不明である。

形状　南北に長い長方形。壁はほぼ直に掘られている。現状で南北3.04m、東西0.96mを測る。深さは最大で58cmである。底面はほぼ平坦である。

埋土　ロームを多く含み、浮石のほとんどない黒褐色土。黒色土。自然堆積とは思えない。人為的なものか。

重複関係　遺構８と重複する。地層断面からみると遺構７の埋土を遺構８が切り南壁を作っており、遺構８が新しい。溝―11と重複する。地層断面からみると遺構７が旧い。

遺構７・８ともにＢ軽石が埋土中で確認されていない。ＨＰになるものか。

（井野）

Ａ―８号遺構

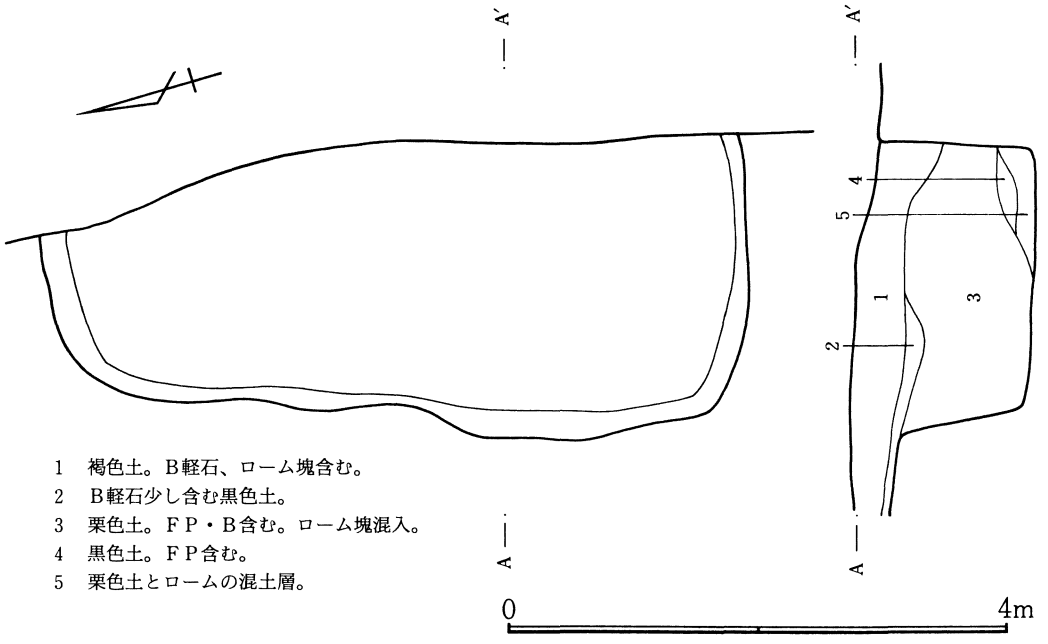
位置　調査区北東のヨ・タ―９区に位置する。遺構７と重複し北に位置する。東側は調査区外のため完掘ではない。

形状　南北に長い長方形と考えられる。壁はほぼ直に掘られている。規模は南北が5.3mで東西が現状で2.16mを測る。深さは最大1.0mである。底面はほぼ平坦である。

埋土　堆積の様子は自然堆積と考えられる。主たる土層にはロームブロックが多く含まれている。浮石はあまり含まれておらず、掘り出された土の二次堆積か。

重複関係　遺構７とは地層断面により遺構８が新しい。遺構11とは地層断面がなく不明であるが遺構ののこり方でみると遺構８が新しいか。

（井野）



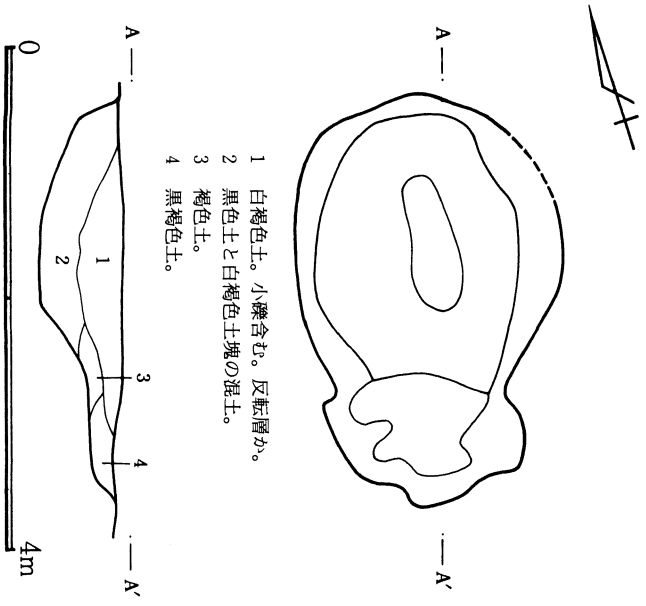
図—101　A—8号遺構平・断面図

A—9号遺構

位置　調査区北東のヨ—9に位置する。

形状　上面は長円形で、塊形の断面をもつ。底面には細かい凹凸が見られる。現状で上面は南北2.22m、東西2.10m。深さは67cmを測る。埋土形状からみると根跡とも考えられる。

（井野）



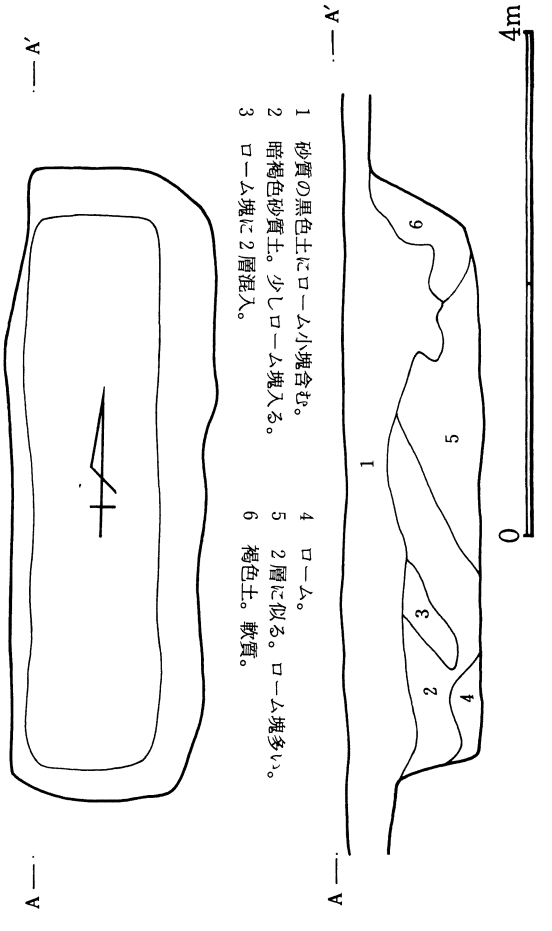
図—102　A—9号遺構平・断面図

A—10号遺構

位置　調査区北東のカ—9に位置する。M—3の北西にあたり、わずかに重複する。

形状　南北に長い長方形、ほぼ直に掘り込まれている。規模は南北が4.44mで、東西が1.01mである。深さは67～82cmを測る。

埋土　下層は暗褐色土、上層は黒色土（砂質）にロームブロックが多くまじっている。堆積の状況からみると人為的なものと考



図—103　A—10号遺構平・断面図

えられる。B軽石との注記はないが砂質黒色土にはまじっているか。
重複関係　M－3と北西部で重複。遺構10が新しい。（全体図参照）

（井野）

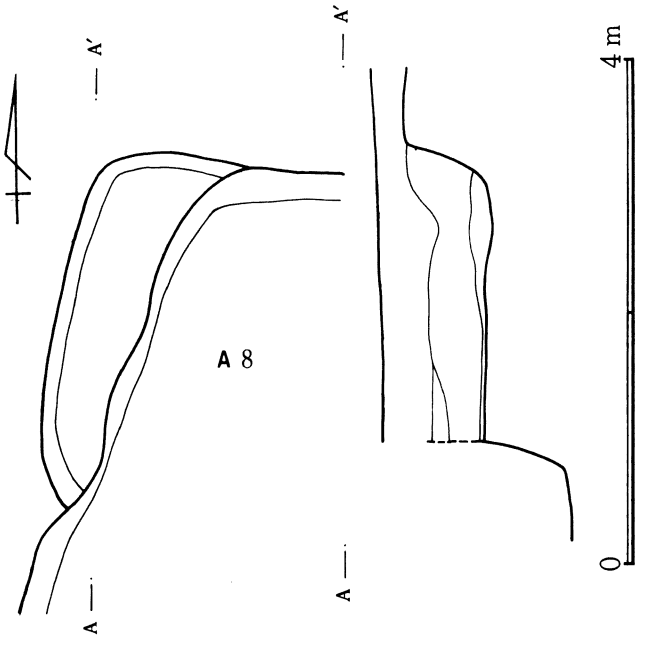
A－11号遺構

位置　調査区北東のヨ・タ－9区に位置する。遺構8、M5と重複。
形状　推定長方形。壁は直に近い掘り込み。重複のため残存部は少ない。現状で南北2.62m、東西0.60mを測る。深さは41～68cmを測る。底面はほぼ平坦。
埋土　主体は褐色土ブロックを含む黒色土である。土坑であるが用途は不明。（井野）

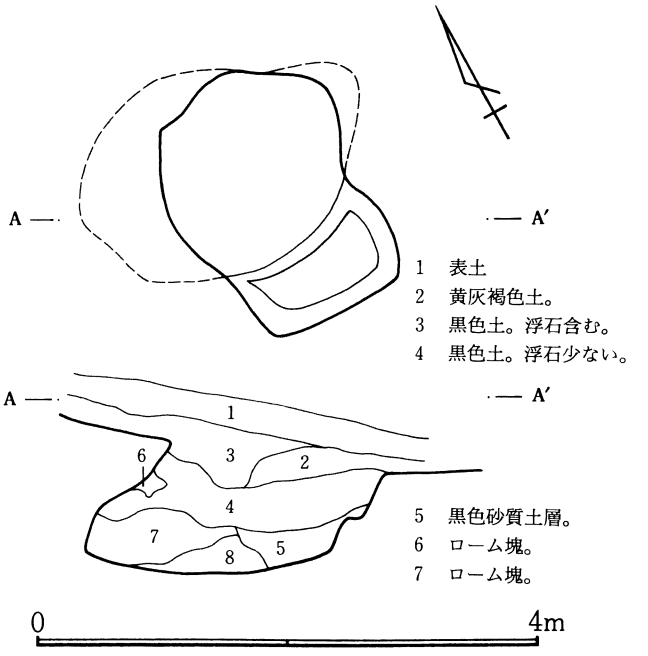
A－12号遺構

位置　調査区北西のヨ・タ－9区。M－5に重複する。（全体図参照）
形状　不整形。北西側と東西に袋状の断面となっている。底は塊形となっている。規模は南北1.70mで東西2.44m。深さは最大で118cmを測る。南側に張り出しをもつ。0.92m×0.4m。
埋土　自然堆積にしてはやや不自然。地下式の土坑か。
重複関係　M－5と重複。M－5周堀の埋土を切りこんでおり遺構12が新しい。

（井野）



図－104　A－11号遺構平・断面図



図－105　A－12号遺構平・断面図

A－13号遺構

位置　調査区北東のヨ・タ－10区。古墳群、遺構群の北端。東端は調査区外のため完掘ではない。
形状　東西に長い長方形と考えられる。壁は直に掘り込まれているが、一部袋状になっている。規模は南北1.38mで東西4.00m、深さは最大47cmを測る。底面はほぼ平坦である。
埋土　ほとんど全てがロームブロックを多く含む褐色土層である。浮石は少量である。浮石がＦＰかＢかの表記がないために不明であるが、他との関係でみるとＦＰと考えられる。

（井野）

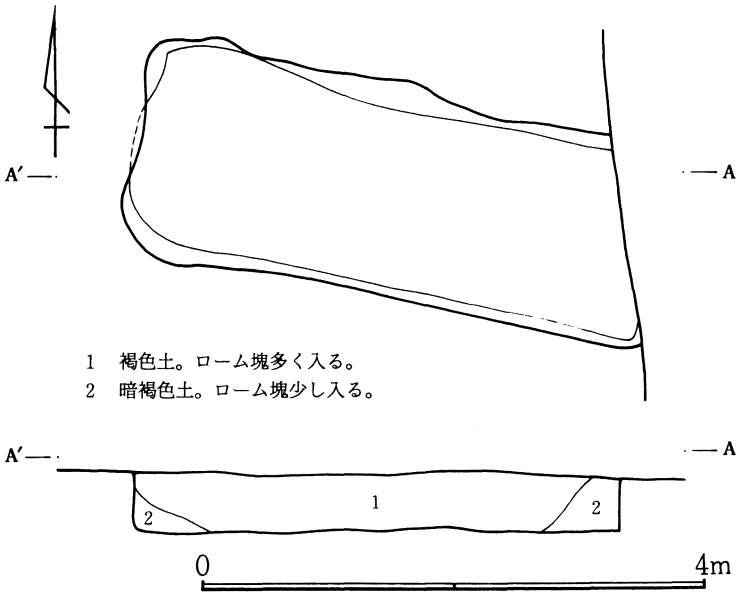
A－14号遺構

位置　調査区北東のカ－10に位置する。J－1の南西。
形状　南辺がひろがる長方形の主部に、東側の張り出しをもつ。壁は直に近い掘り込みをもつ。規模は南北1.90mで東西が1.30m、深さは50～60cmを測る。底面はほぼ平坦である。張り出しは入口施設と考えられる。上面で72×32cm。

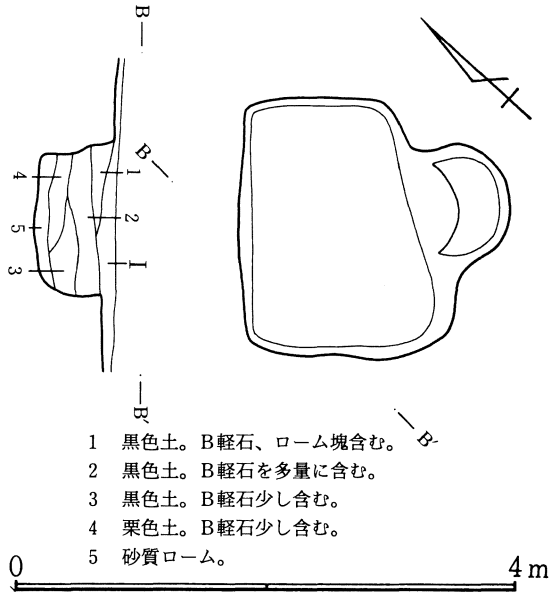
主部底面近く掘りこまれ、主部に向かってゆるやかな傾斜となっている。

埋土　下層までB軽石がまじっている。中層から下はB軽石がわずかで、酸化した砂質土層がみられるが、これは地山の土に似ている。一度掘り出されたものが再堆積したものか。中層より上にはB軽石を多量に含む黒色土がある。B軽石降下後の掘削と考えられる。地下式の土坑か。遺構2・5に似ており墓壙か。

出土遺物　土師器甕（挿120—13）が出土している。　（井野）



図—106　A—13号遺構平・断面図



図—107　A—14号遺構平・断面図

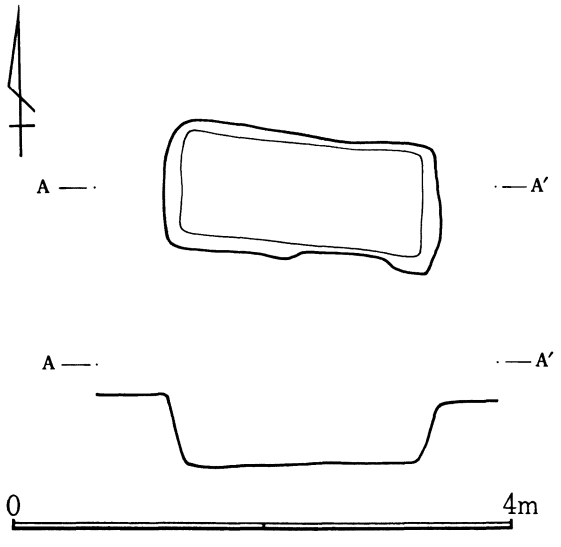
A—15号遺構

位置　調査区南東のレー2に位置する。M—6墳丘上より検出。

形状　東西に長い長方形。ほぼ直に掘り込まれる。規模は南北0.78m、東西1.90mで、深さは54～57cmを測る。底面はほぼ平坦である。地層断面が欠けていて埋土は不明である。中～近世の土坑か。墓壙？。

その他　M6墳丘上にはA—15の他にA—16、A—24、A—25が位置している。三様に異なり、A—24・25は方形の土坑状を呈す。造られた時期が異なることによるものか。

（井野）



図—108　A—15号遺構平・断面図

A—16号遺構

位置　調査区南東のレー1区。M—6墳丘上。

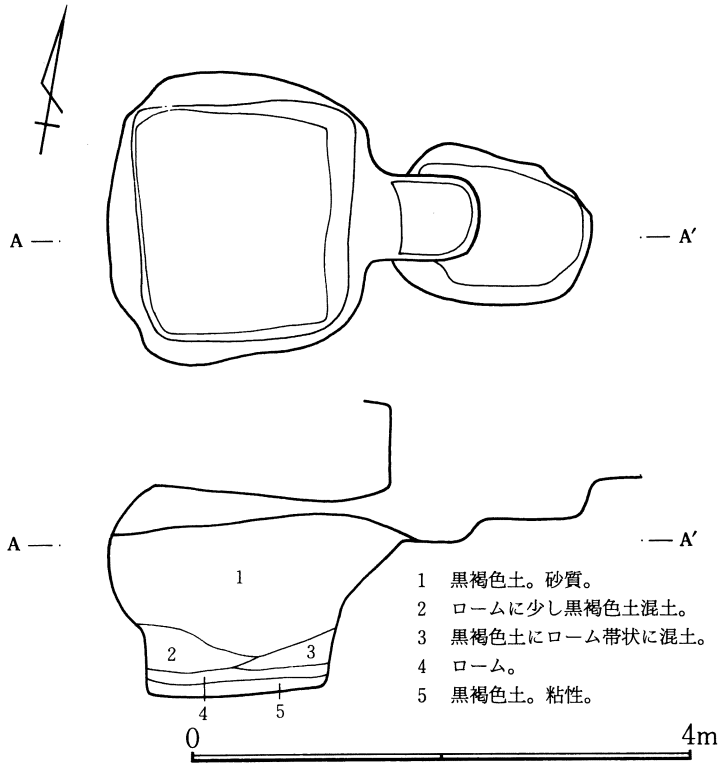
形状　M—6墳丘内に方形の主部をうがち、東側に方形のトンネル状の入口部の張り出しをもつ。入口部の先端には長方形の掘り込みが続いている。規模は主部が南北1.72mで、東西は1.52m。室の高さは156～160cmである。

入口部は59×60cmで高さは20cm。方形の断面で掘り込まれている。外の掘り込みは144×92cmで深さは30cmである。この掘り込みは向きが主部の向き、出入口部の向きにくらべかたよりが見られることから、別の遺構とも考えられる。

埋土　主室下層はロームの混入が多いが、最大層は主部形成後の自然崩落による土層とみられる。中層以上の厚く堆積したB軽石まじりの黒褐色土は風雨による流入と考えられるもので一時に多量に堆積したと考えられる。上部にはわずかな空間が認められた。

遺構の様子からみると、作られたのちも空間をおく形で存在し、のちに埋まったと考えられる。しかし入口部はせまく、出し入れに適するかはやや疑問である。地下式土坑。平面形は遺構2～5に似る。同様の墓壙か。

（井野）



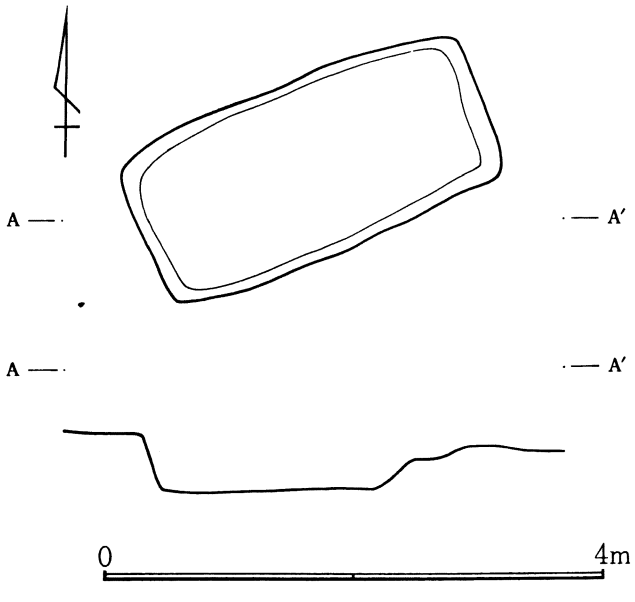
図—109　A—16号遺構平・断面図

A—17号遺構

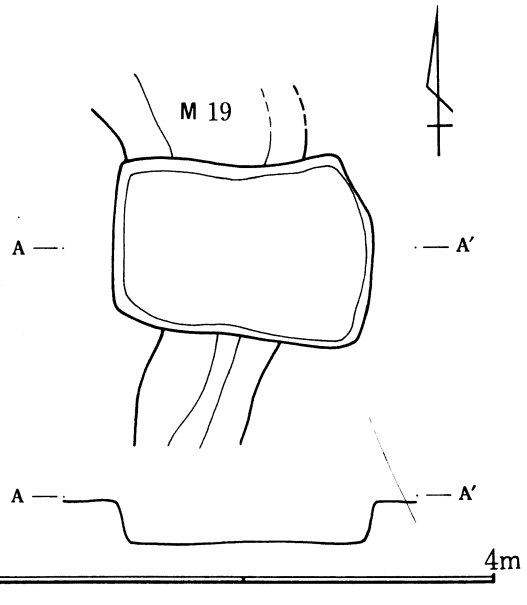
位置　調査区南西のタ—1に位置する。M—7東周堀と重複する。
形状　東西に長い長方形。東西2.7mで南北1.24mである。深さは26～52cmを測る。
埋土　地層断面図が失なわれていて不明。掘られている様子からみると古墳期以降の土坑か。　（井野）

A—20号遺構

位置　調査区南西のソ・ツ—3区に位置する。M—19東周堀と重複する。
形状　東西に長い長方形。東西1.92mで南北1.12m。深さは34cm。
埋土　不明。M—19周堀を削平しており、古墳期以降のものか。土坑。　（井野）



図—110　A—17号遺構平・断面図



図—111　A—20号遺構平・断面図

A－21号遺構

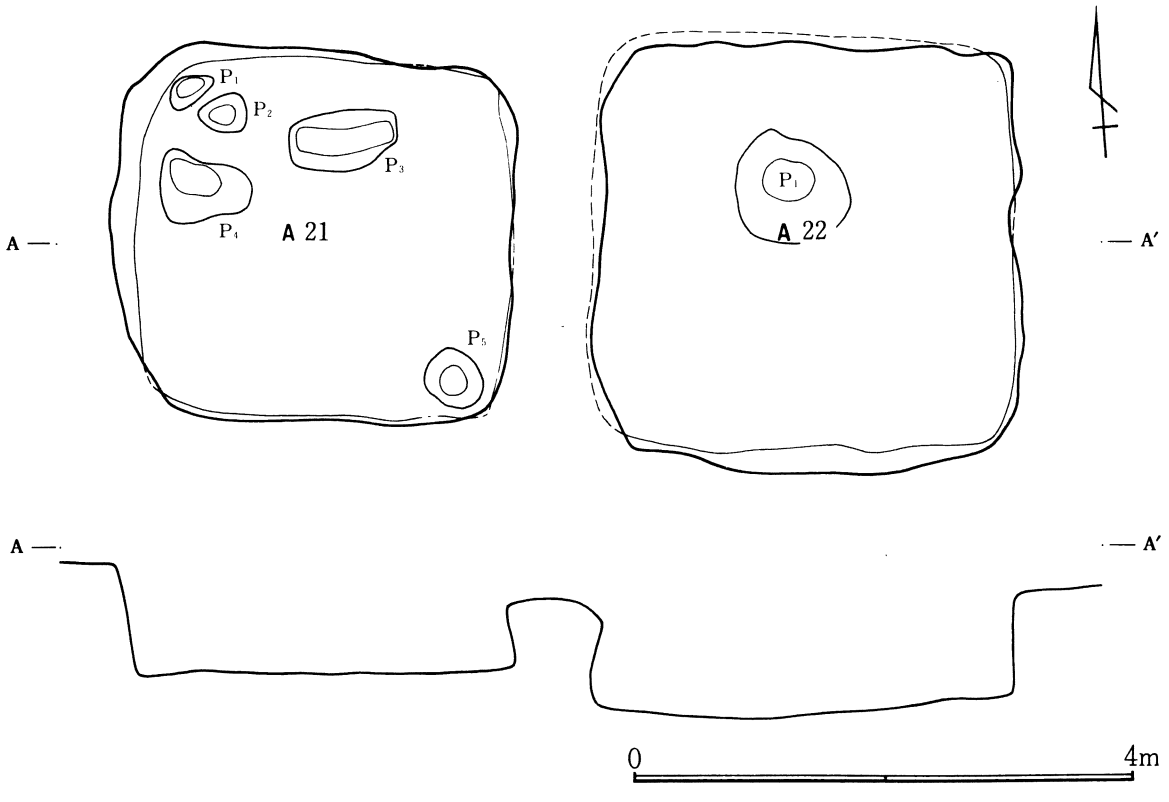
位置　調査区南西のレ－６に位置する。遺構22に並び、M－27に重複している。Ｊ－５が西に位置する。
形状　正方形。規模は南北2.78m、東西2.98m。壁はほぼ直に掘られている。深さは50～90cmを測る。
床面　ほぼ平坦であるがピットが５基検出されている。いずれも性格不明。径35～90cm。
埋土　主たる埋土は黒色土にロームが点在する土層で（II－４′層）で、その上にII－１層よりやや浮石の少ない黒色土II－１′層が堆積する。B軽石層は層位でみるとこの上になるので、古墳地山を切りこんでいる点からみても古墳削平後で、B軽石降下前に作られた土坑か。

（井野）

A－22号遺構

位置　調査区南西のレ－６に位置する。遺構21の東に接する。
形状　正方形、規模は南北3.3m、東西3.35mである。壁はやや袋状。壁高は80～85cmを測る。
床面　ほぼ平坦であるが、中央部やや北にピット１基。90×82cmで深さ34cm。
埋土　遺構21に同じ。同時期のものか。

（井野）

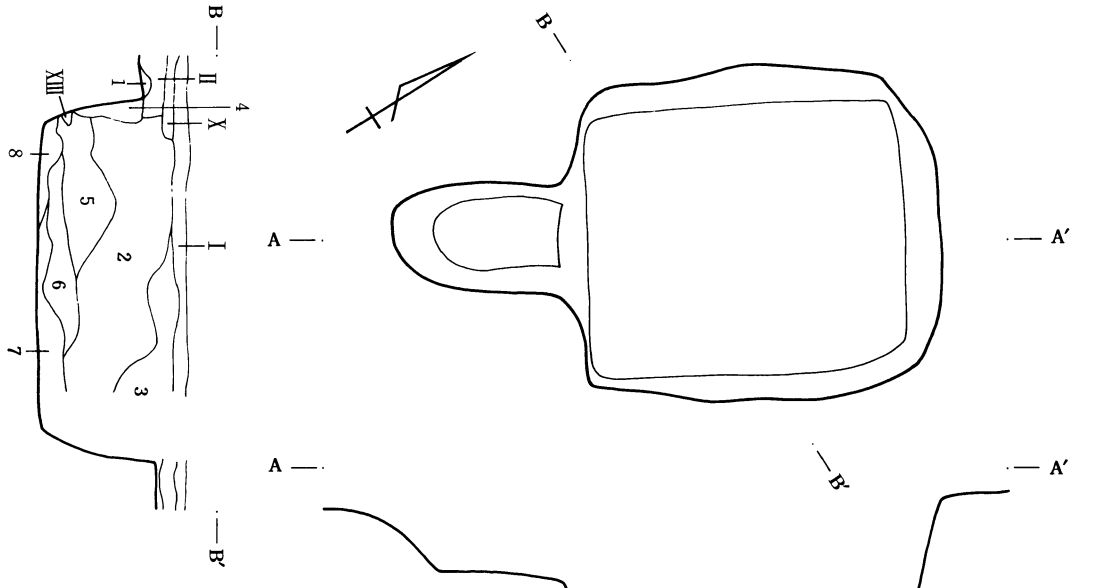


図－112　A－21・22号遺構平・断面図

A－23号遺構

位置　調査区東のツ－５・６区に位置する。M－28と重複する。
形状　主部は南北にやや長い長方形で南に出入口部をもつ。規模は主部が南北に2.58mで東西2.08m。壁高は100～106cmを測る。南側張り出しは入口部と考えられ、長方形で上面で128×85cmを測る。壁はわずかに袋状となる。
埋土　主部の主たる埋土はB軽石がブロックになったものを含む砂質の黒色土である。埋土の上半分を占める。入口部は、ＦＰ・C軽石を含む黒色土が埋めている。これと似た土は、主部の底部にわずかに見られる。主部の壁面はわずかに袋状になっているが、天井があったかどうかについては、埋土の様子でみると、入口部の埋土土層にはB軽石の純層がみられるが、主部内には見られない。また、主部ではB軽石が上半分の土層にのみ見られること、５と６層が粘性が強いことから、掘り出した土で作られた天井と考えられ、８・７層は形成後に流入推積した土層、２・３層は天井崩落により作られた土層と考えられる。B軽石の推積状況からみると平安期のものか。

（井野）



1　褐色土。
2　黒褐色土。ＦＰ・Ｂ軽石ブロック混入。
3　黒色土。ＦＰ・Ｂ軽石含む。
4　黒色土。軟質。
5　黒褐色土。ＦＰ・Ｂ軽石含む。
6　黒色土。ＦＰ少し含む。
7　褐色土。粘性。
8　黒色土。ＦＰ含む。

図―113　Ａ―23号遺構平・断面図

Ａ―24号遺構

位置　調査区南西のレ―１に位置する。Ｍ―６と重複する。同様の形状をもつ遺構25に接する。西には地下式土坑の遺構24が重複する。

形状　方形。規模は南北1.52ｍで東西1.0ｍを測る。深さは最大51㎝である。

床平　ほぼ平坦。

埋土　遺構25の埋土がⅠ層の耕作土になっており、遺構24も同様の新しいものか。土坑。　（井野）

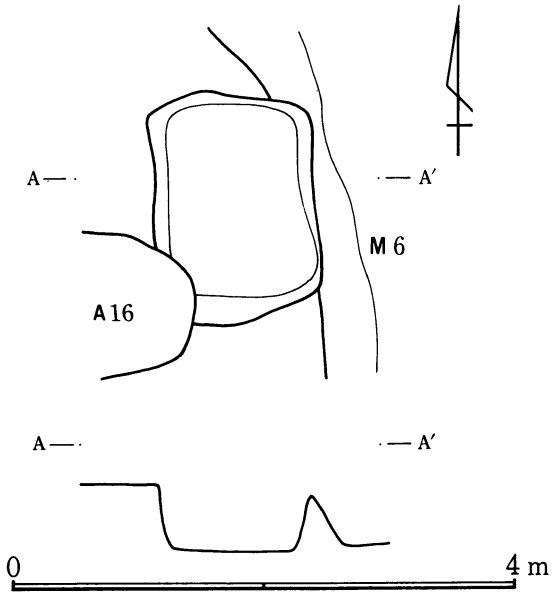
Ａ―25号遺構

位置　調査区南西のレ―１。遺構24の南に接する。Ｍ―６と重複する。

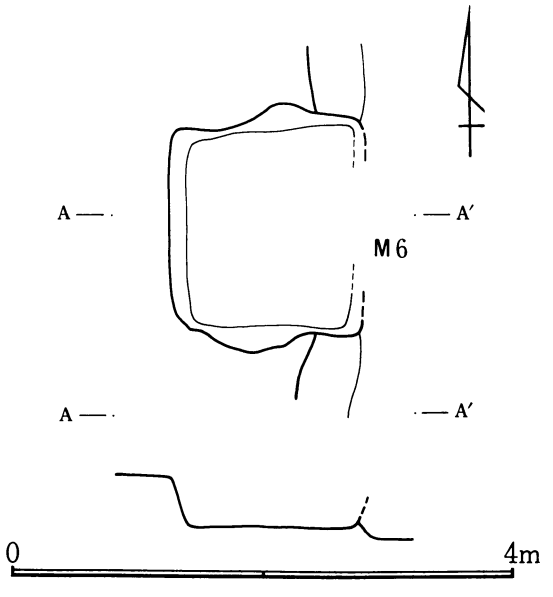
形状　方形。規模は南北1.52ｍで東西1.34ｍ。深さは最大61㎝。

床面　ほぼ平坦。

埋土　耕作土と同じ。比較的新しい土坑か。　（井野）



図―114　Ａ―24号遺構平・断面図



図―115　Ａ―25号遺構平・断面図

A－26号遺構

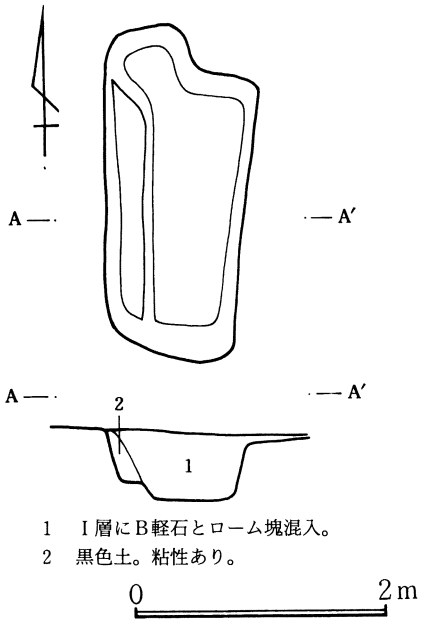
位置　調査区北東のカ－８・９区に位置する。M－３の南西に接する。
形状　南北に長い長方形。規模は南北2.27mで、東西0.90m。
その他の資料は不明であるが、付近の同様の形態の遺構と同じ土坑か。

（井野）

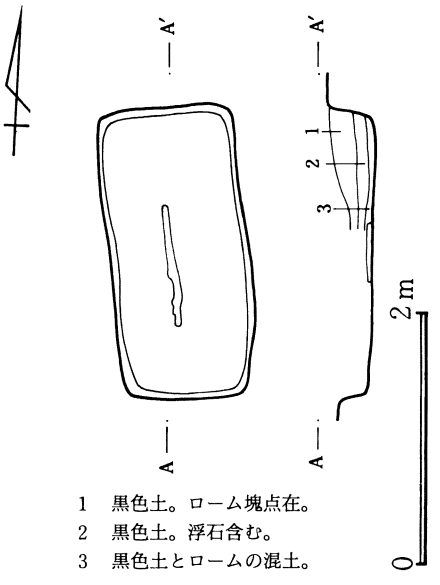
A－27号遺構

位置　調査区南西のタ－４に位置する。M－22の墳丘上。
形状　南北に長い長方形で、壁はほぼ直に掘り込まれている。規模は南北2.24m、東西1.08mを測る。壁高は24～35cm。
床面　ほぼ平坦。
埋土　最下層は黒色土とロームの混土で、その上に浮石を含む黒色土（II－１層？）が堆積し、その上で埋土の２分の１を占める土層が黒色土にロームが点々と混入している土層である。
浮石についての記述がないが、黒色土層は標準層位のII層とみられる。このII層は古墳削平後でB軽石降下前に堆積しており、この土壙墓も作られたのはこの時期と考えられる。
出土遺物　刀が一振り出土。（挿120－20）

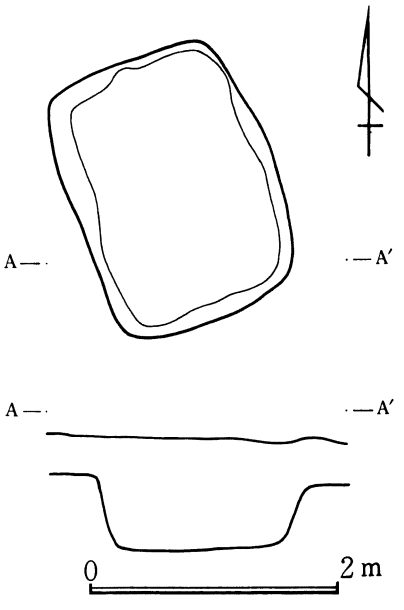
（井野）



図－116　A－26号遺構平・断面図



図－117　A－27号遺構平・断面図



図－118　MP－１号ピット平・断面図

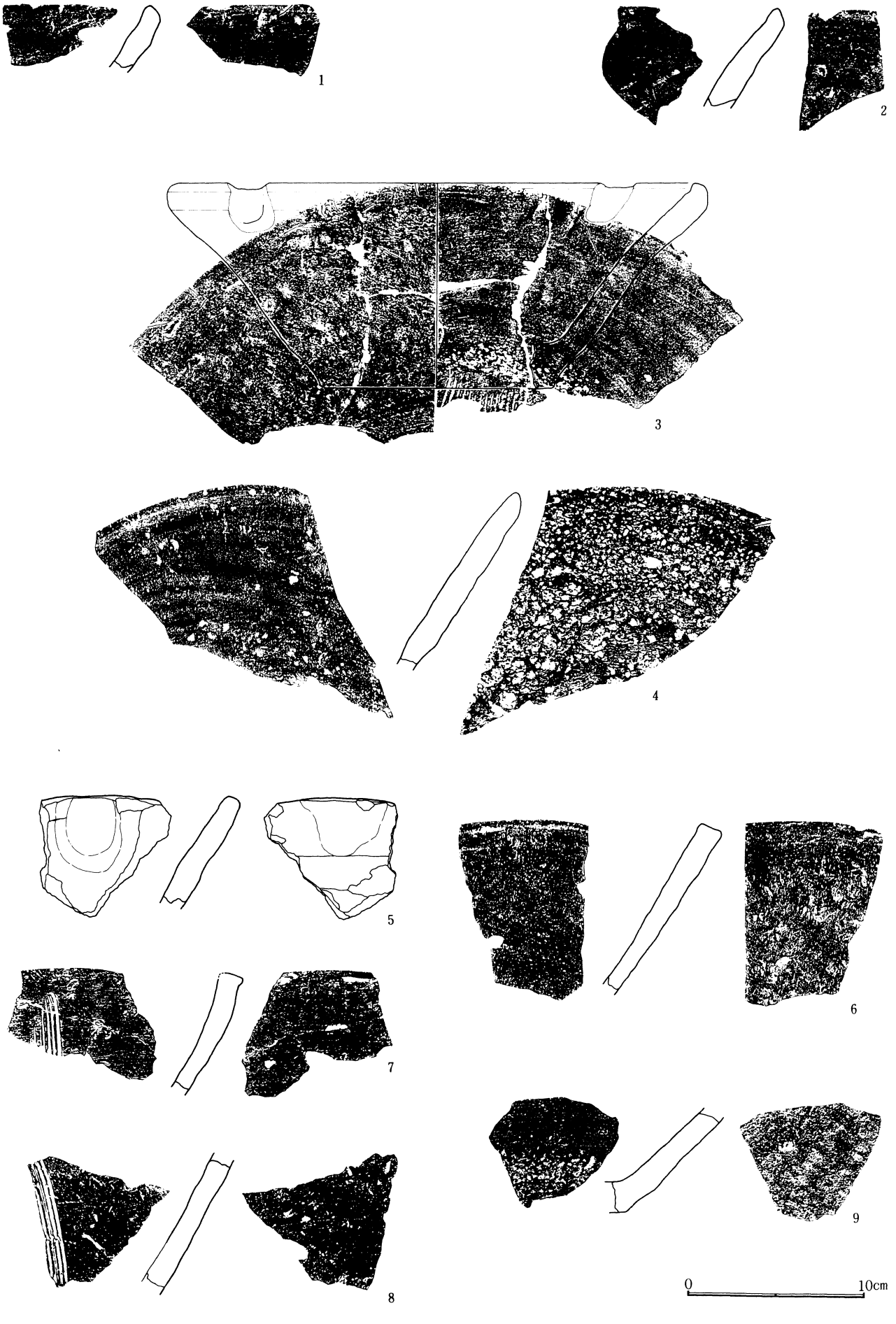
MP－１号方形ピット

位置　ヨ－０。M－11の北東。　**形状**　方形。南北1.92mで東西1.40m。深さ58cmである。
埋土　B軽石を主とする土層で埋められている。

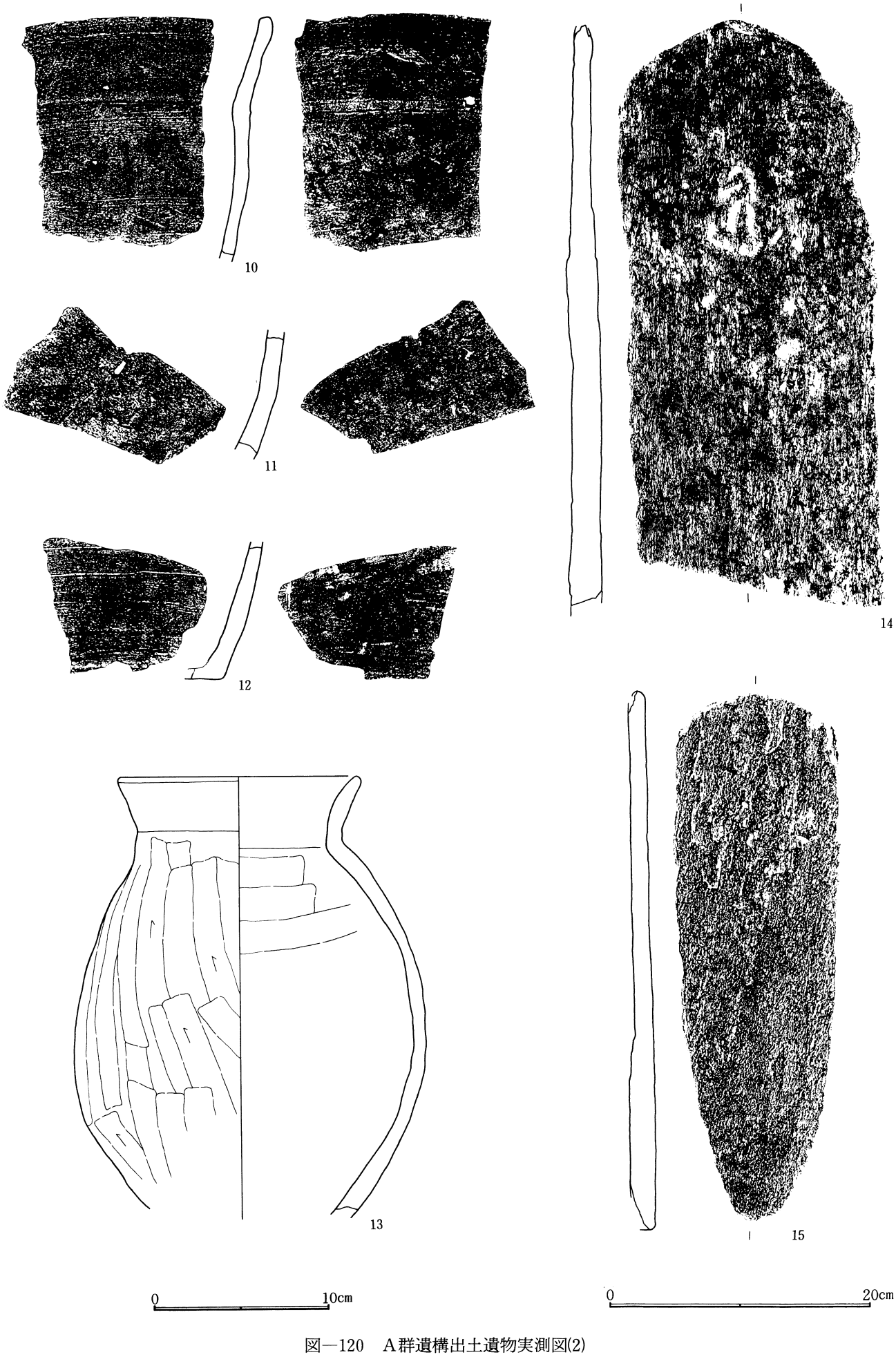
（井野）

表－1　芳賀西部団地遺跡出土陶器一覧表

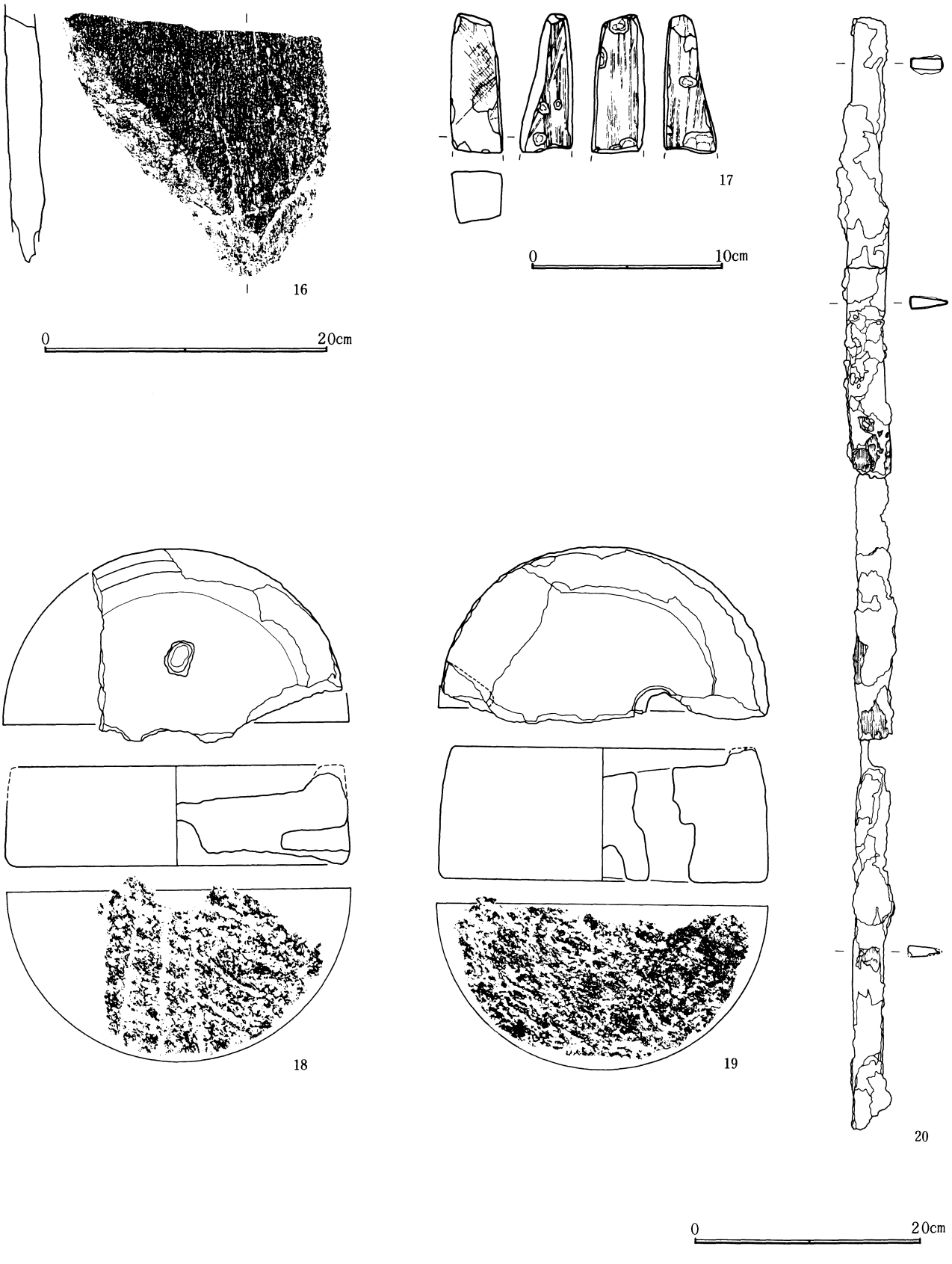
製作地　器種	点数	時代
肥前系染付碗	1点	江戸時代
肥前系染付碗	1点	江戸時代
肥前系陶器碗	1点	江戸時代
陶津系青緑釉皿	1点	江戸時代
瀬戸・美濃系陶器碗	23点	江戸時代
瀬戸・美濃系緑釉皿	6点	江戸時代
瀬戸・美濃系長石釉皿	2点	江戸時代
瀬戸・美濃系片口鉢	2点	江戸時代
瀬戸・美濃系香炉	5点	江戸時代
瀬戸・美濃系瓶類	3点	幕末～近代
製作地不詳陶器碗	1点	江戸時代
製作地不詳瓶類	10点	幕末～近代
瀬戸・美濃系すり鉢	8点	江戸時代
益子すり鉢	1点	近　代
製作地不詳すり鉢	1点	江戸時代～近代
瀬戸・美濃系灯明皿	3点	江戸時代
製作地不詳灯明皿	3点	江戸時代
瀬戸・美濃系練鉢	1点	江戸時代～近代
益子練鉢	1点	明治～大正時代
益子行平	1点	近　代
製作地不詳急須	1点	近　代
製作地不詳小型坏？	1点	近　代
製作地不詳焼締陶器甕	1点	不　詳
土　管	2点	明治時代末～現代
在地製軟質陶器鍋、焙烙	84点	江戸時代～近代
在地製軟質陶器混炉、その他	72点	江戸時代～近代
瓦	9点	江戸時代～現代
石	9点	時期不詳



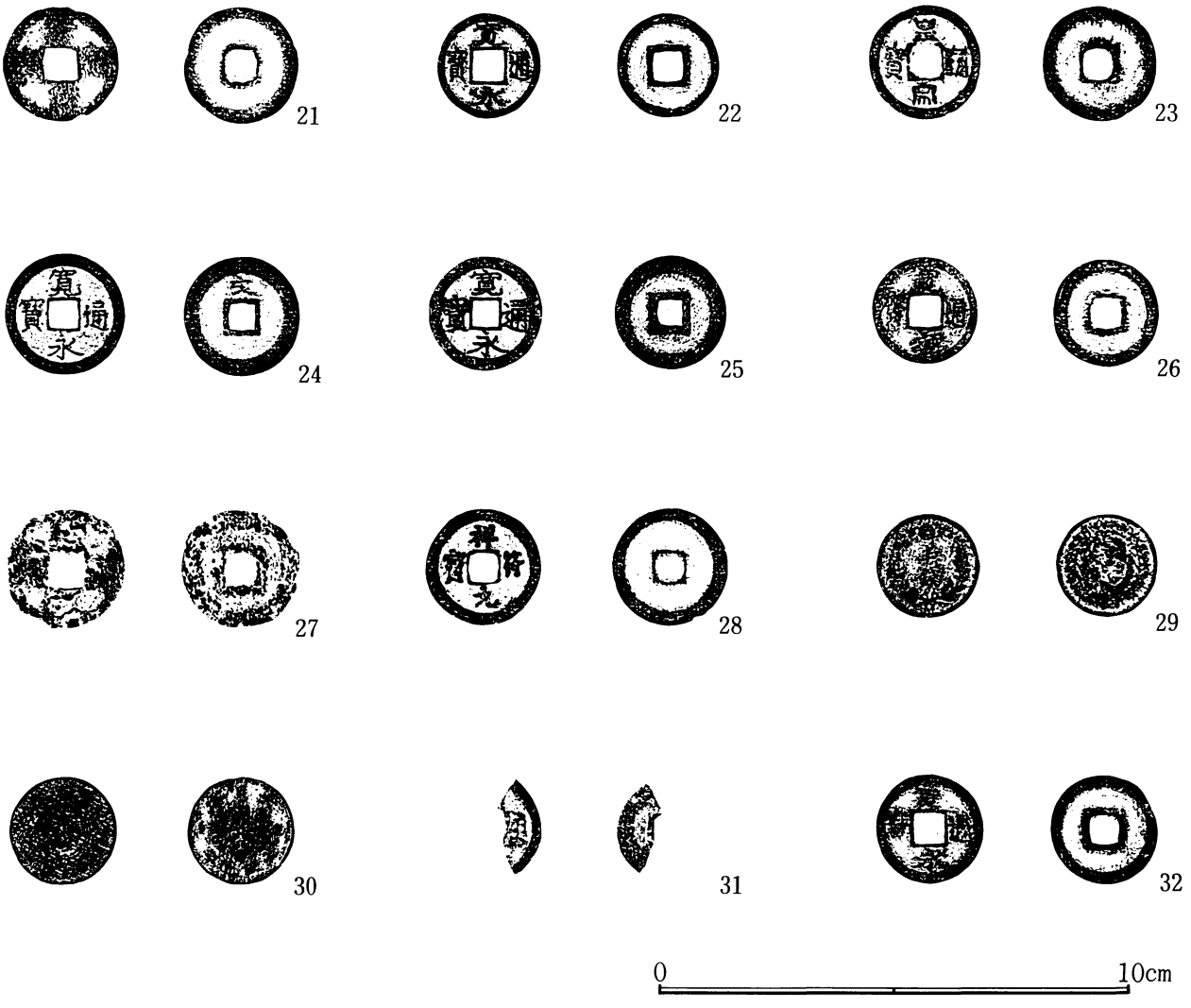
図—119　A群遺構出土出土遺物実測図(1)



図—120　A群遺構出土遺物実測図(2)



図—121　A群遺構出土遺物実測図(3)



図—122　A群遺構出土遺物実測図(4)

Ⅰ—1号井戸跡

位置　ヨ—0。M—11周堀北と重複。　**形状**　円形。上面1.15m×1.20m。下面0.90m×0.85m。深さは1.13mを測る。埋土はB軽石を主とする土層であり、B軽石降下後作られたものか。　（井野）

Ⅰ—2号井戸跡

位置　ヨ—0。M—12北西。　**形状**　長円形。上面2.2×2.12m、下面1.46×1.06m。深さは地層断面によると1.18mを測る。埋土は耕作土に似たB軽石を主とした黒味のある土層である。下層より多数の石検出。　（井野）

Ⅰ—3号井戸跡

位置　カ—1・2区。M—10北西周堀内。　**形状**　円形。上面1.05×1.00m、下面0.76×0.80m。深さは1.85mを測る。埋土はB軽石の入る砂層で、周堀埋土層を切っていた。上層に多数の石を検出。　（井野）

Ⅰ－4号井戸跡

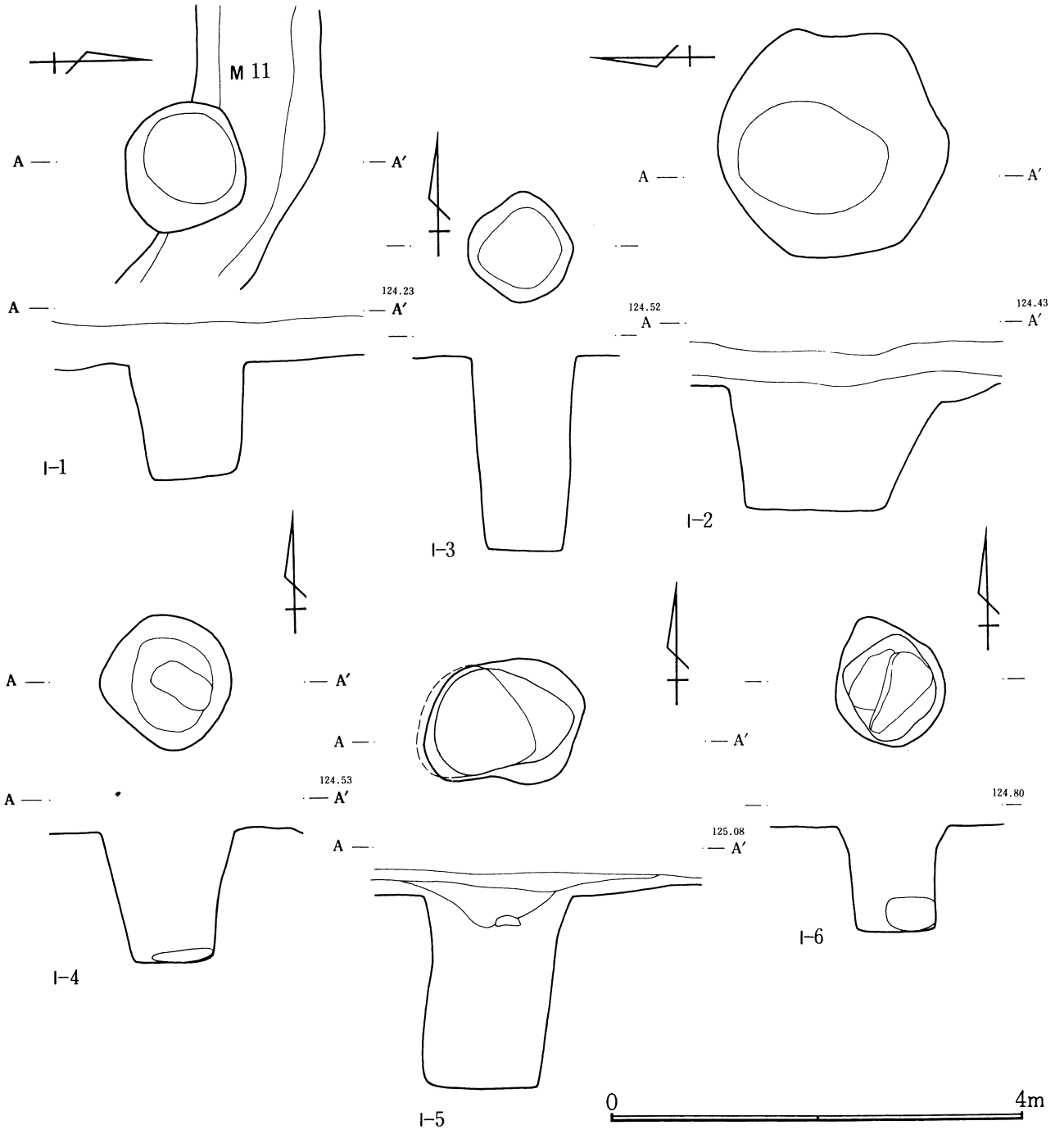
位置　レ－2。M－17墳丘内。　**形状**　円形。上面1.30×1.30m、下面0.90×0.80m。深さは1.28mを測る。底より石を検出。　（井野）

Ⅰ－5号井戸跡

位置　レ－5。M－24墳丘上。　**形状**　楕円形。上面1.10×1.54m。下面0.95×1.35m。深さは1.85mを測る。M－24墳丘と周堀の一部を削平。古墳削平後のものか。ＦＰを含む黒色土が堆積。石が出土。　（井野）

Ⅰ－6号井戸跡

位置　レ－5。M－24墳丘上。　**形状**　円形。上面1.20×1.06m、下面0.98×0.88m。深さは1.0m。底に80×40cmの石が検出されている。古墳削平後のものか。　（井野）



図－123　Ｊ－１～６号井戸跡平・断面図

W－1号溝跡

位置　タ－0。M－8墳丘に重複する。墳丘の東から周堀に重複し墳丘上3mの地点に至る。　**形状**　検出された長さ4.4m。薬研堀状の掘り方。東に続く溝状のものは配石遺構のトレンチ。M－8削平後作られたものか。上巾70cm。下巾20cm。

W－2号溝跡

位置　タ－2～3。M－16墳丘と重複する。墳丘を南北に通る。　**形状**　断面は逆台形で、掘り込みはしっかりとしている。検出された長さ16m。上巾は60～120cm。下巾16～38cmを測る。埋土は耕作土に近い。古墳削平後の新しいもの。

W－3号溝跡

位置　タ－3。レ－3～4。M－18墳丘と重複する。さらに西のM－20墳丘の南と重複する。　**形状**　断面は逆台形のしっかりした掘り込み。検出された部分の長さ22m。M－18上が東端、西端は不明。埋土中にB軽石純層がみられるので古墳削平後でB軽石堆積の間に作られたものか。溝の上巾80～120cm、下巾30～40cm。

W－4号溝跡

位置　タ－6。M－27墳丘と重複する。墳丘上のみで、北は調査区外、南は不明。　**形状**　断面は逆台形。巾は上巾50～60cm、下巾20～30cm。検出された長さ6.6m。古墳削平後のものか。

W－5号溝跡

位置　ソ－3。M－19墳丘と重複する。円を描くように位置する。溝内に礫の検出が多い。　**形状**　埦形の断面で、上巾は65～120cm。下巾は20～40cm。埋土はB軽石を主とした黒褐色土である。B軽石降下後に作られたものである。形状からみると溝というより「塚」の堀のようにも見える。

W－6号溝跡

位置　ツ－3。ネ－3・4。M－1周堀東を南北に重複している。南端・北端ともに不明。　**形状**　しっかりした掘り形をもつ。規模は南で広く、上巾60～150cm、下巾30～120cm。埋土は耕作土に同じ。比較的新しいものか。

W－7号溝跡

位置　ヨ－7・8区。M－4墳丘上。南北に重複している。墳丘内に北端がある。南端は不明。　**形状**　偏平な逆台形の断面をもつ。上巾20～100cm、下巾10～40cm。溝のほとんどに礫が入る。埋土は耕作土であり、区画・流水用とみるよりも、耕作土内の礫の埋設用のものか。

W－8号溝跡

位置　カ－11区。東西に走る。部分的な検出。掘り形はしっかりしている。この溝付近で、土地の大きな区画の境になっており、それに伴うものか。

W－9号溝跡

位置　ト－3～5、チ－5・6区を南北に走る。　**形状**　逆台形の断面をもち、しっかりした掘り形。B軽石主体の砂質の暗褐色土層がうめる。上巾100～110cm、下巾20～55cm。検出された長さ40m。

W－10号溝跡

位置　ト－4・5を南北に走る。遺構4・5に重複する。　**形状**　方形に近い断面をもつ。B軽石を含む砂質の埋土。検出された長さ36m。上巾75cm、下巾50cm。

W－11号溝跡

位置　ヨ－8・9、タ－9。M－4・遺構7と重複する。　**形状**　直に近い掘り込みをもつ。埋土中にロームブロックや礫を多く含む。南のW－7に続くかどうかは確認されていない。上巾90～120cm、下巾70～80cm。検出長11m。

W－12号溝跡

位置　ト、チ、リ－1。　**形状**　巾150～385cmで深さ30～80cm。検出長16m。　（井野）

3　縄文時代

Ｊ－１号住居跡

位置　調査区北東のカ－10。南東に古墳群が位置する。周囲には縄文時代の遺構はみられない。

形状　北辺が張り出す不整形。北壁はしっかりした掘り込み。南辺はやや円形を呈し、深い掘り込みである。東壁は現状はやや掘りすぎており、地層断面図でみるとほぼ直に掘り込まれている。西壁はなだらかな傾斜となっており、他の壁と異なる。やや張り出しており、住居内施設である可能性をもつ。

規模　南北5.12m×東西4.80m。面積は20.21㎡。

壁高　43～64cm。地層断面によると58cmを測る。

周溝　東壁下に、地層断面図によればわずかな落ちこみがみられるが、精査では検出されなかった。

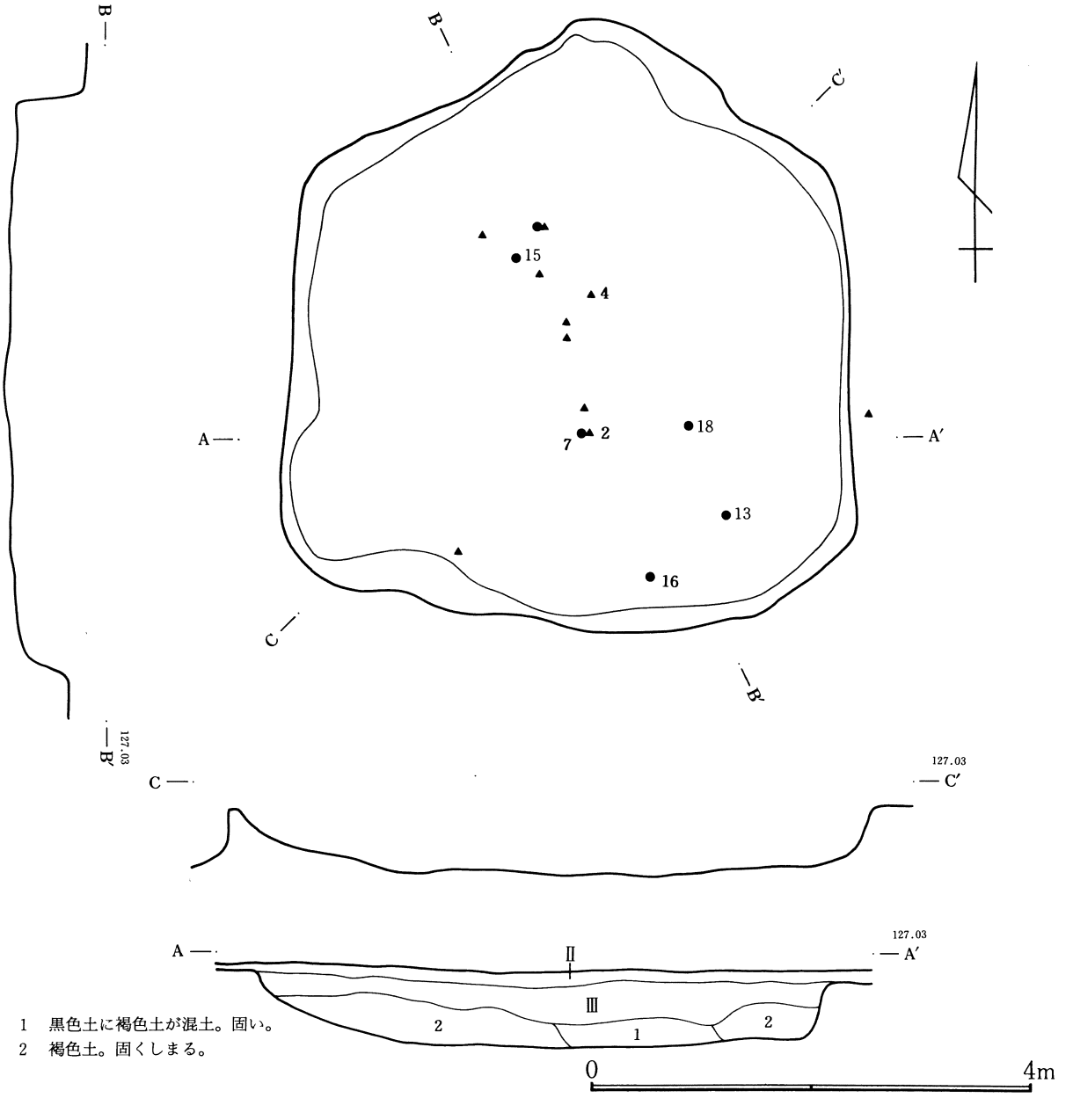
長軸方向　Ｎ－0°－Ｅ

炉　検出されなかった。

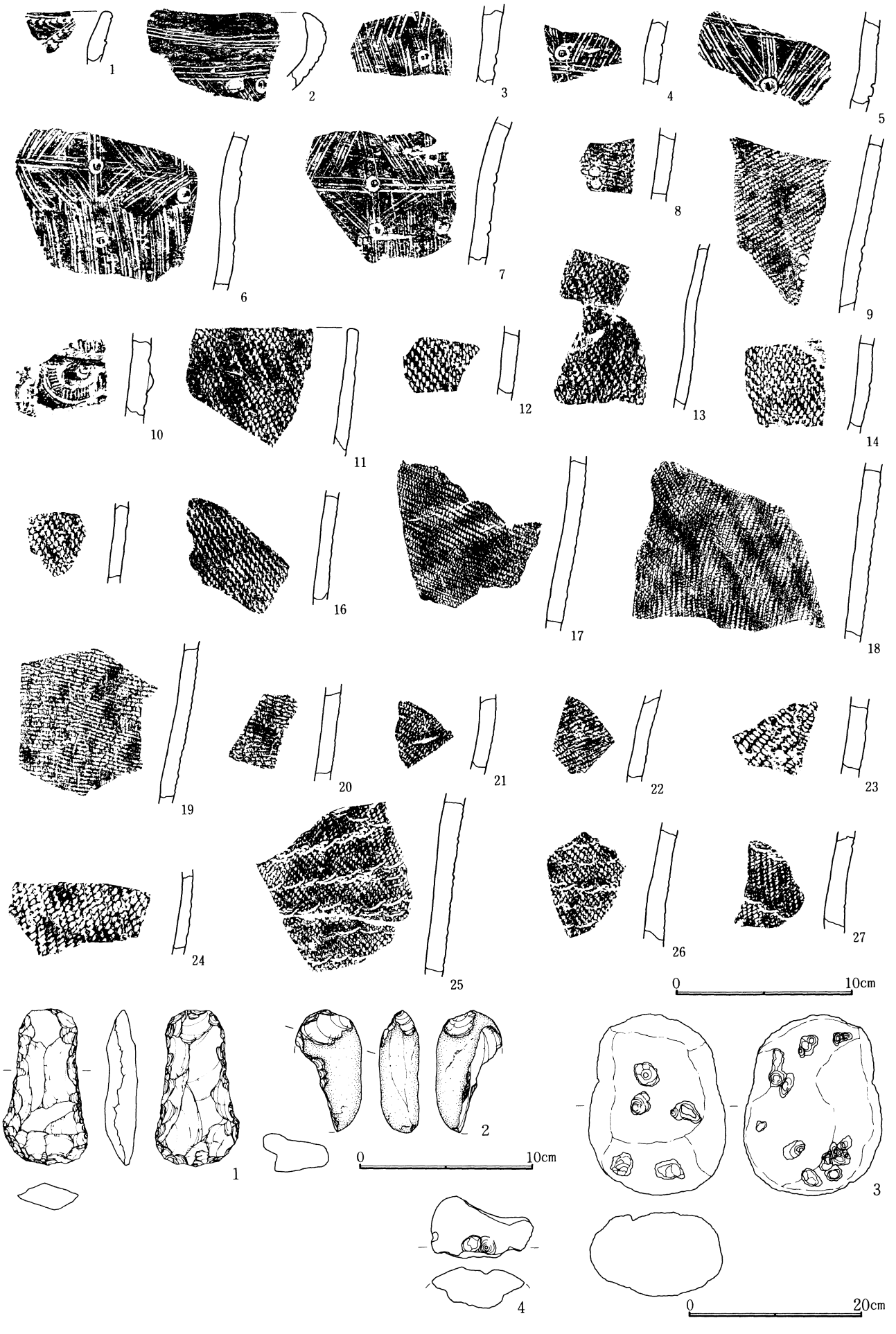
重複遺構　重複する遺構はないが、南西に遺構14が接する。

遺物　遺物の出土レベルはほぼ同じであり、Ｊ－１に係わるものと考えられる。打斧、敲石、多凹石が出土している。

（井野）



図－124　Ｊ－１号住居跡平・断面図



図—125　J—1号住居跡出土土器・石器

Ｊ－２号住居跡

位置　調査区北西のヌ―15に位置する。付近からはＪ－３・4、ＪＰ－１と縄文時代の遺構が検出されている。

形状　東西に長い長方形。各辺ともほぼ直に近く、しっかりした掘り込みをもつ。西側の隅角は直に近いが、東側は隅丸に近い形状をもつ。規模は南北4.05m×東西5.52m。面積21.36㎡。壁高は46～73cmを測る。

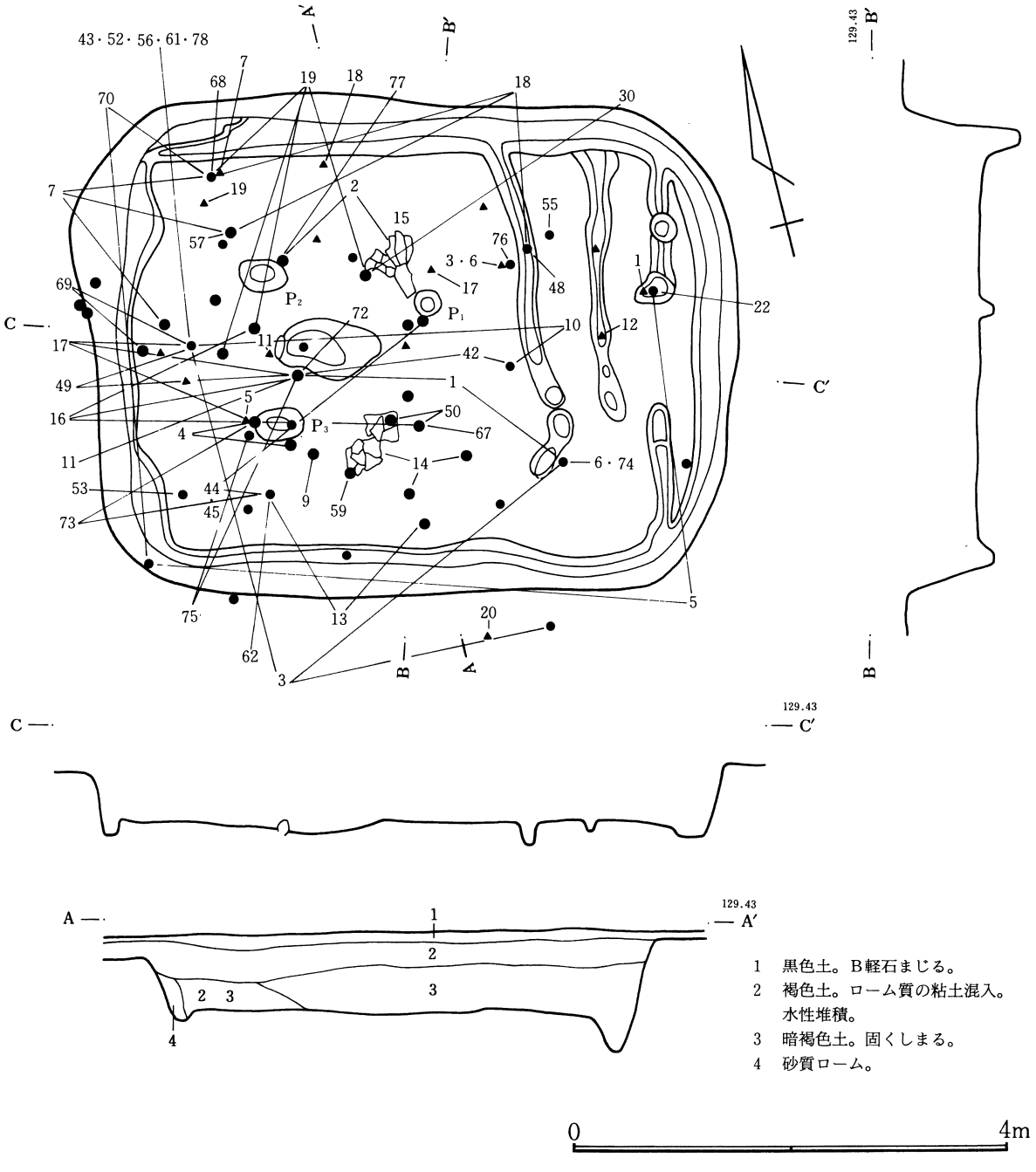
周溝　深くしっかりとした周溝が全周する。東側は四重になっている。巾４～27cm、深さ10～32cmを測る。四重になっている部分は当初の地層断面図に記載がないが、床面精査後の検出であることなどから、床面の拡張によるものと考えられる。順次拡張されたと考えると、当初は南北4.05m×東西3.75m、二次は同×4.45m、三次は同×5.00mとなる。

柱穴　あまり明確ではないが、床面に３か所。中央部にＰ₁(23×23×18cm)、西側にＰ₂(44×29×９cm) Ｐ₃(45×26×18cm) Ｐ₂、Ｐ₃は床面西側に南北で並ぶ。また、拡張によると考えられる床面東側の周溝は現周溝にくらべると部分的に20cmほど浅く、小ピット列を呈すところも見られる。最終の住居跡は床面の柱穴による建物と考えられるが、拡張による周溝と考えると、以前の建物は壁際に柱を林立させたものとも考えることもできる。

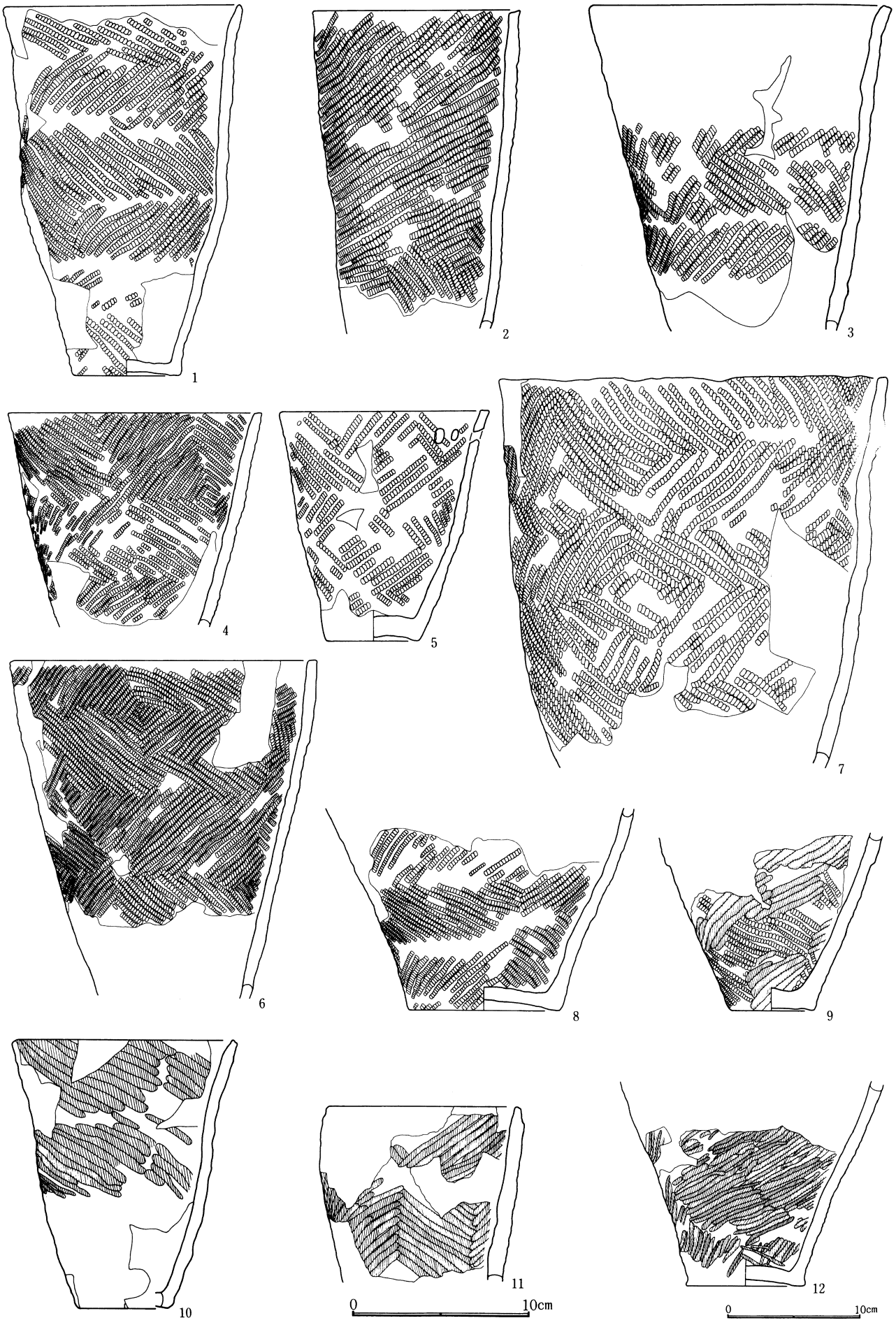
炉　床面中央部西。不整円形で90×49cm。現状はピット状で西側に長さ20cmほどの石一石を配す。

遺物　深鉢、浅鉢、石器の出土多数。

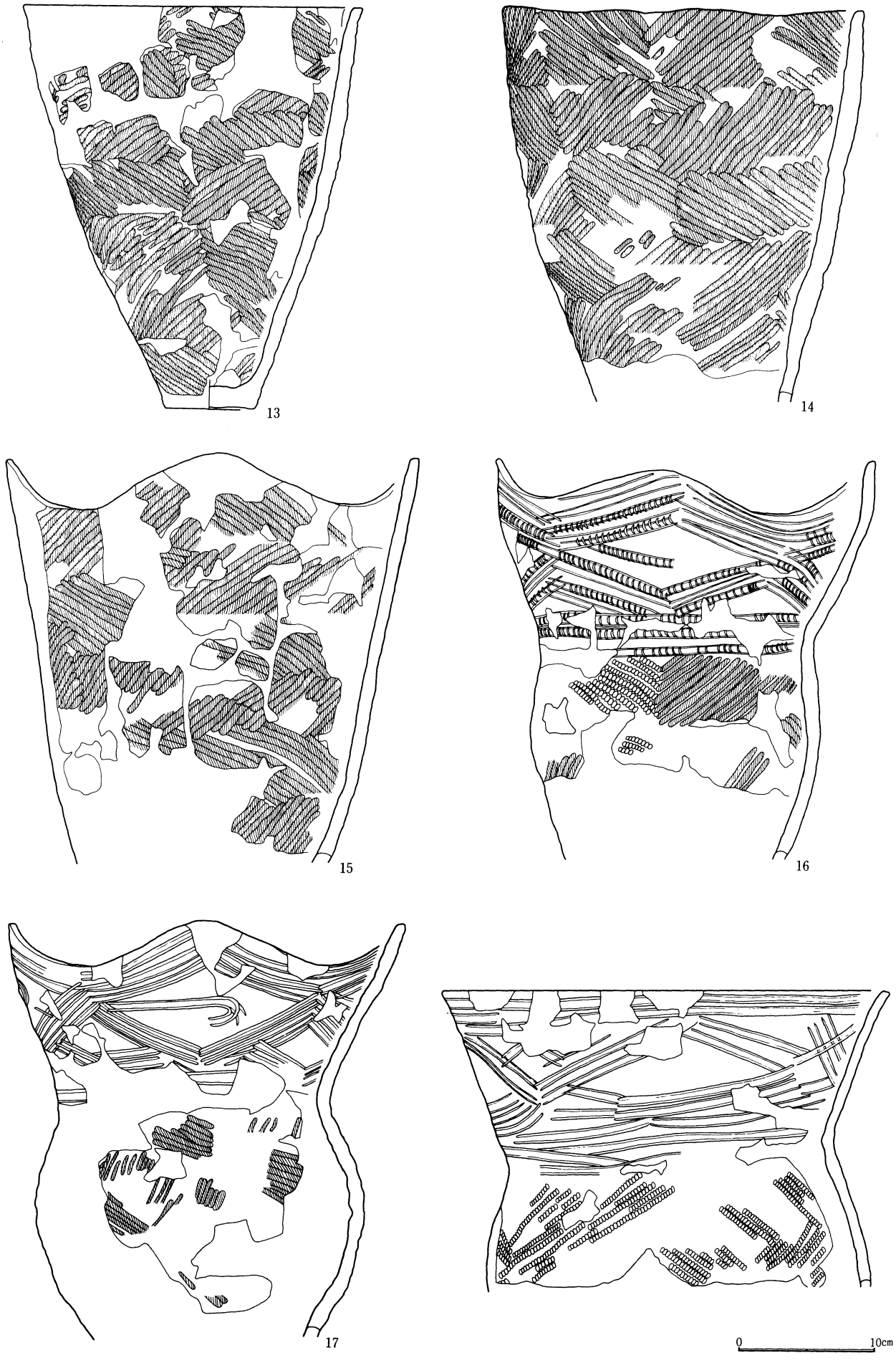
（井野）



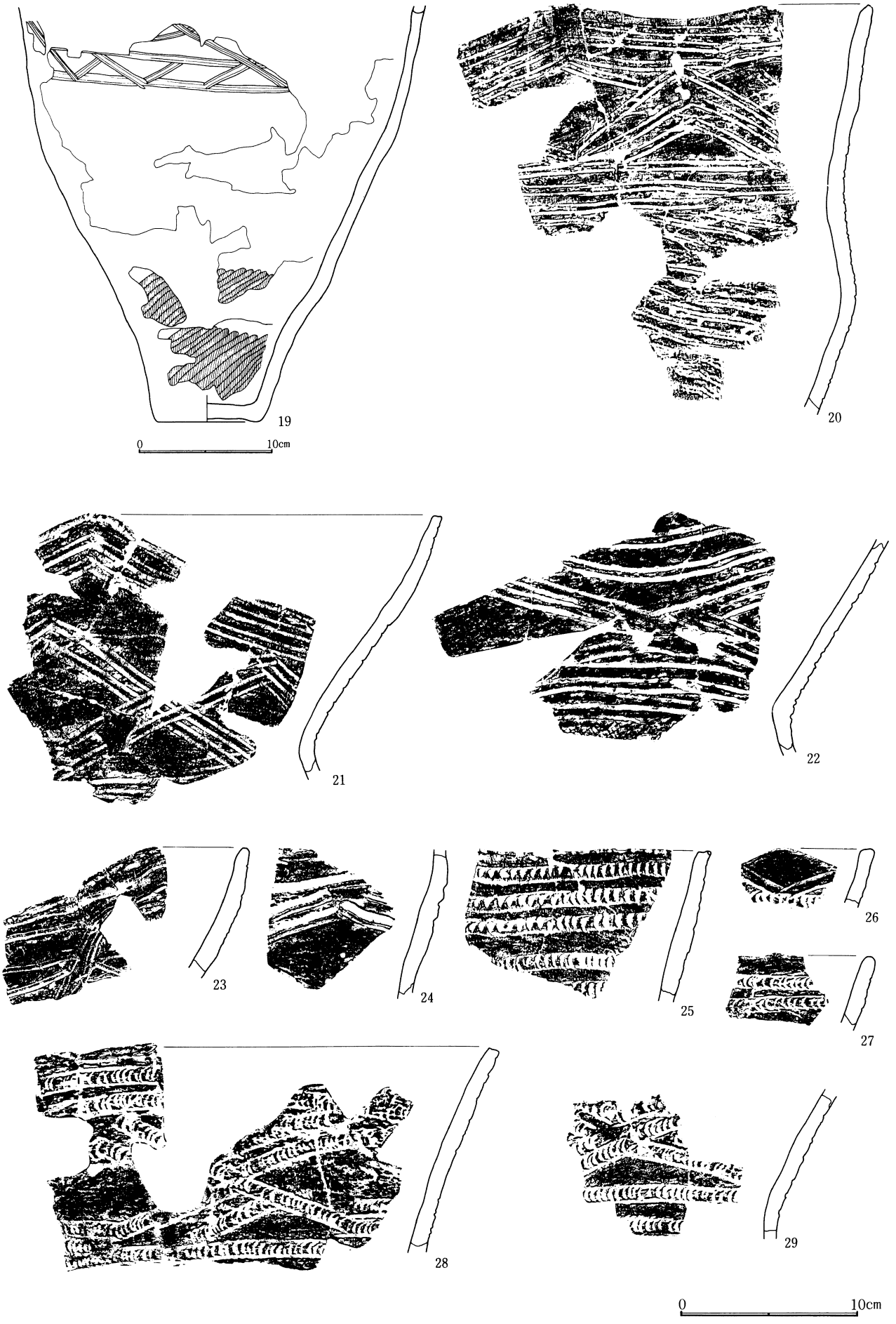
図―126　Ｊ－２号住居跡平・断面図



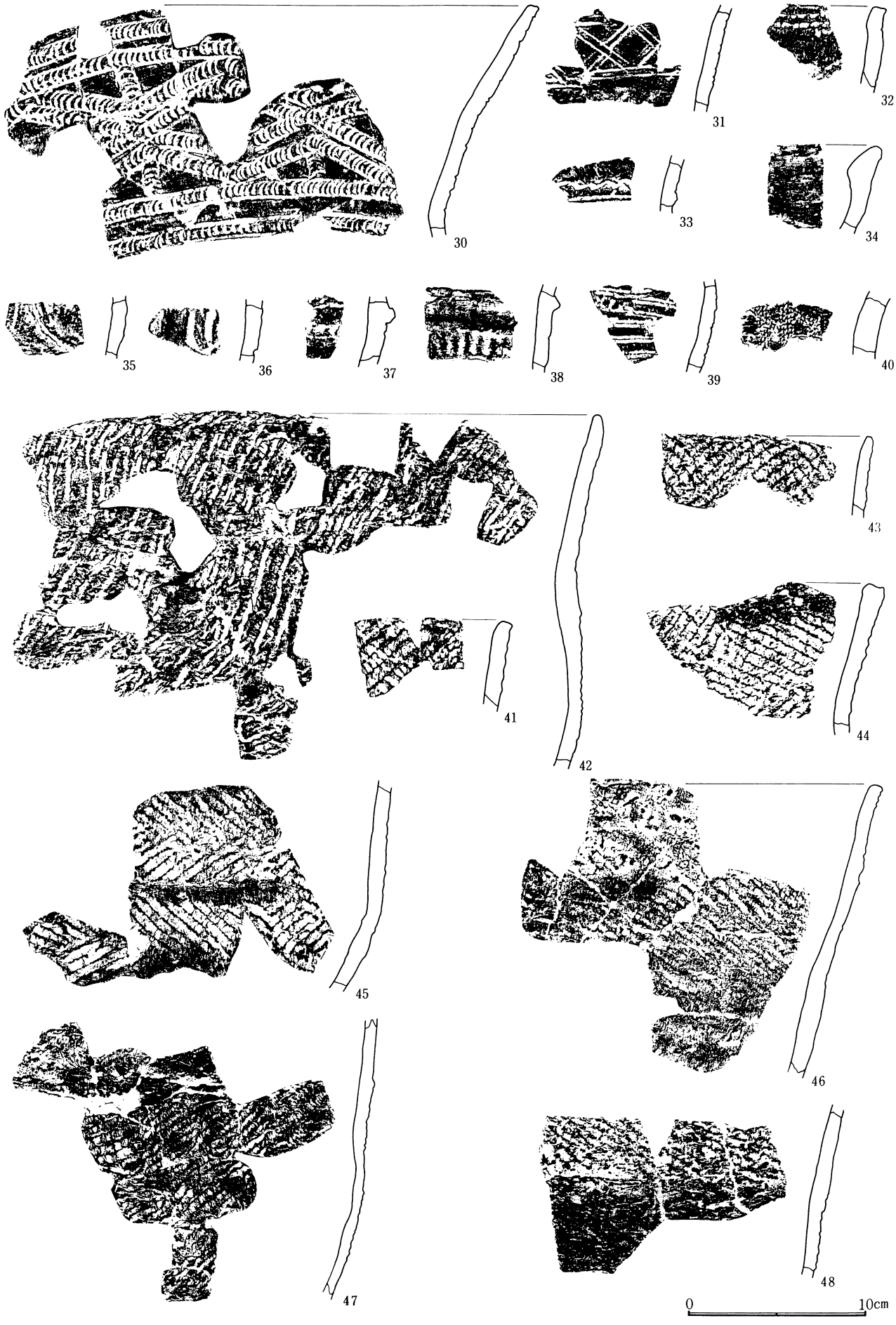
図—127　J — 2 号住居跡出土土器(1)



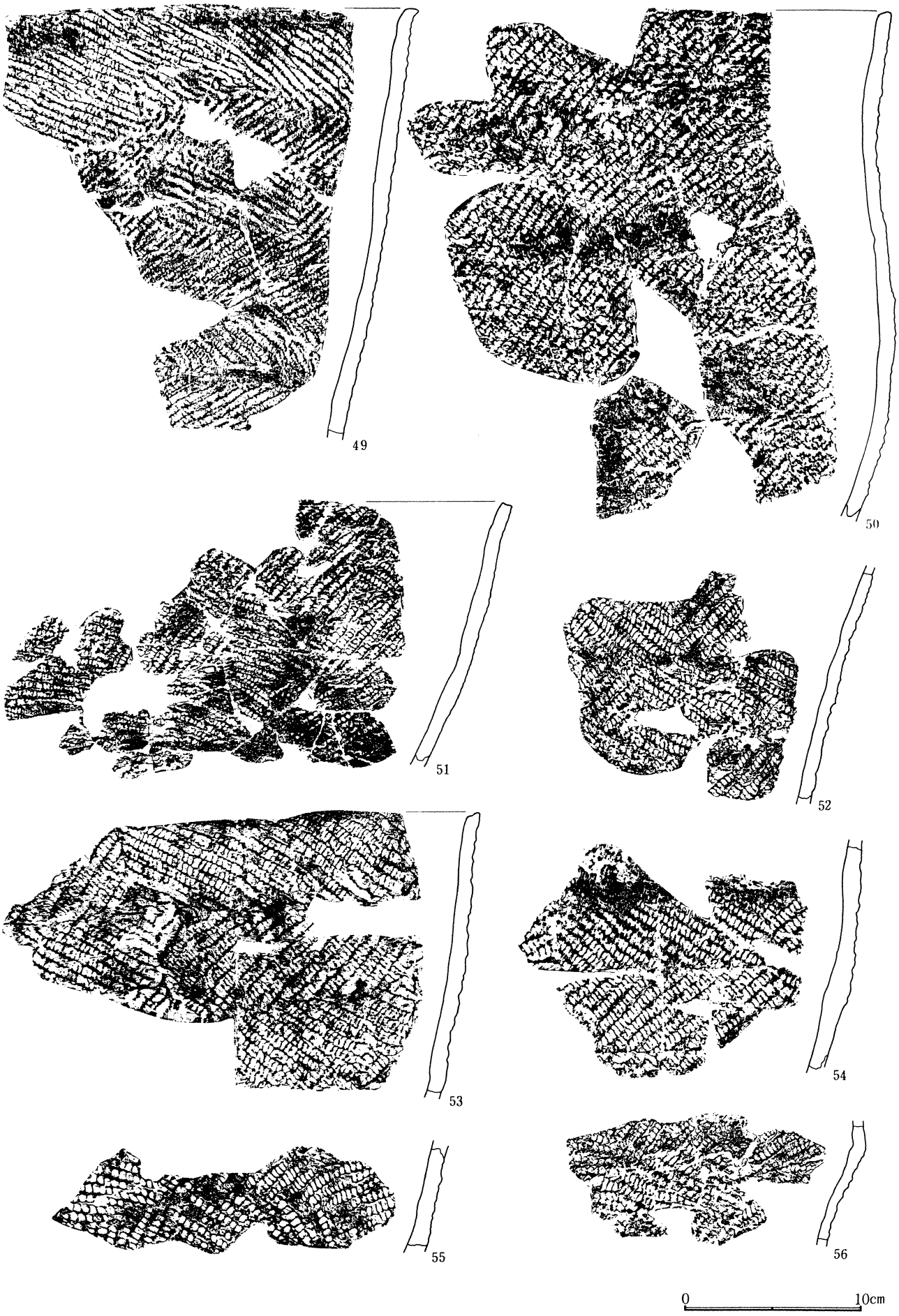
図—128　J — 2 号住居跡出土土器(2)



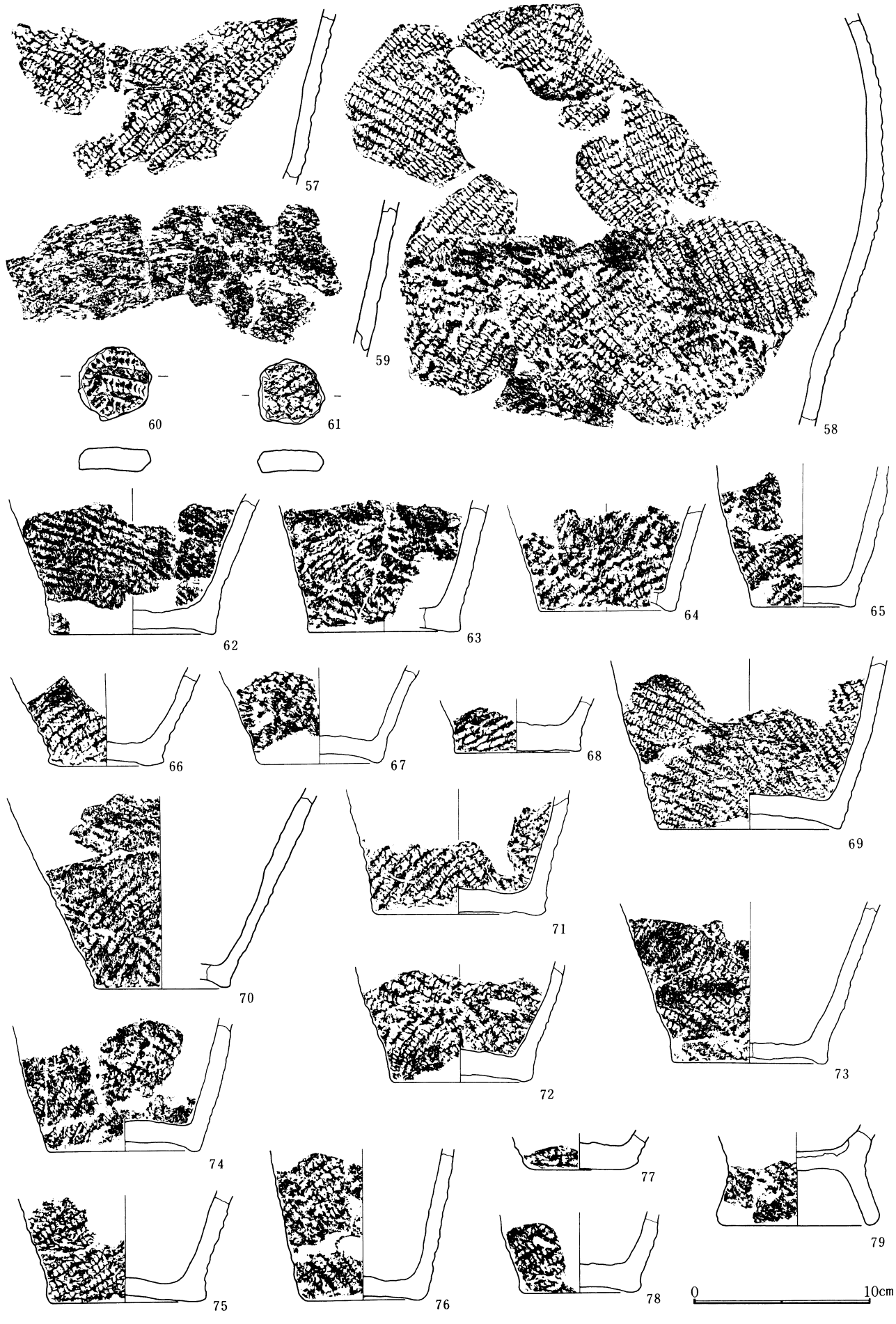
図—129　J — 2 号住居跡出土土器(3)



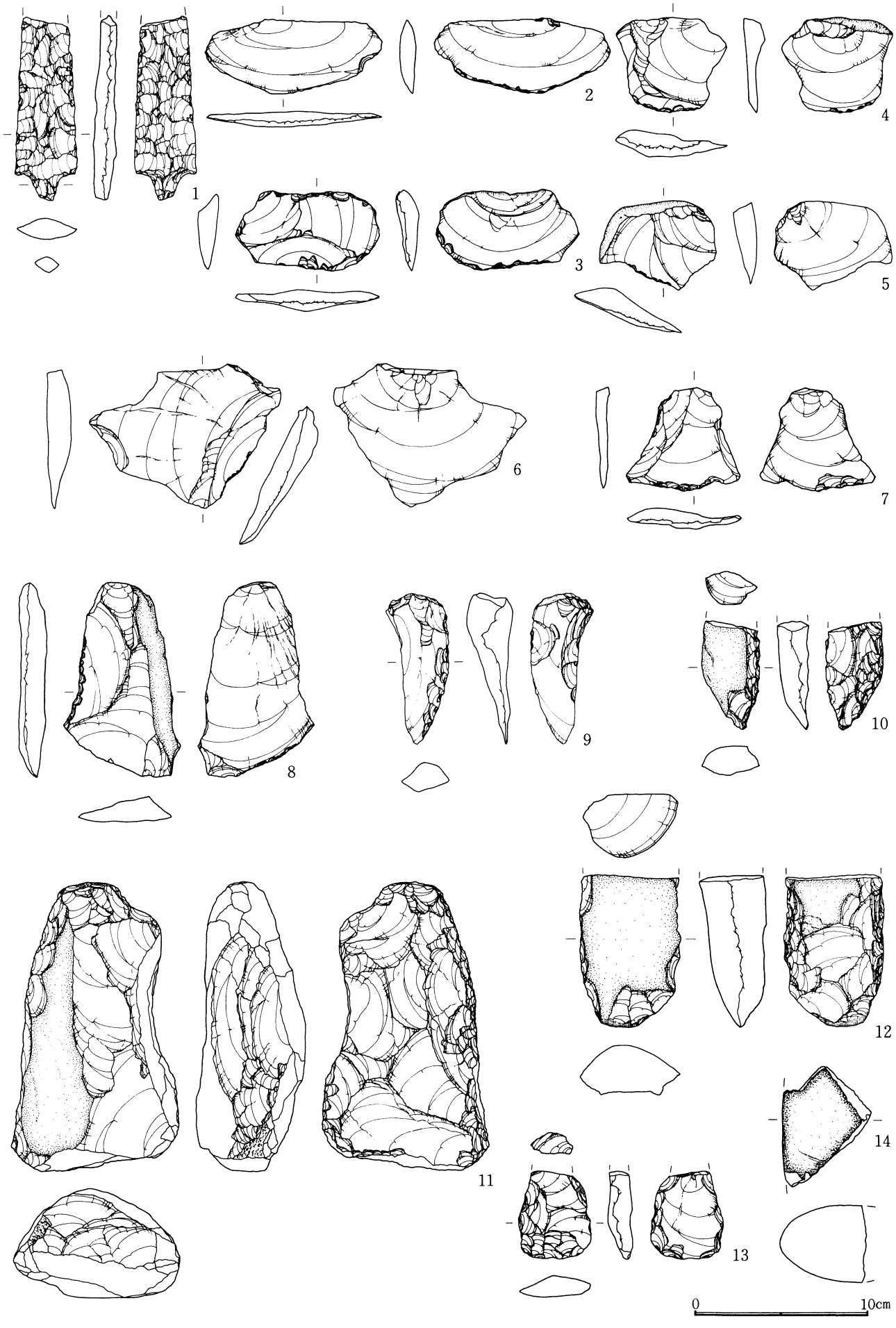
図—130　J — 2 号住居跡出土土器(4)



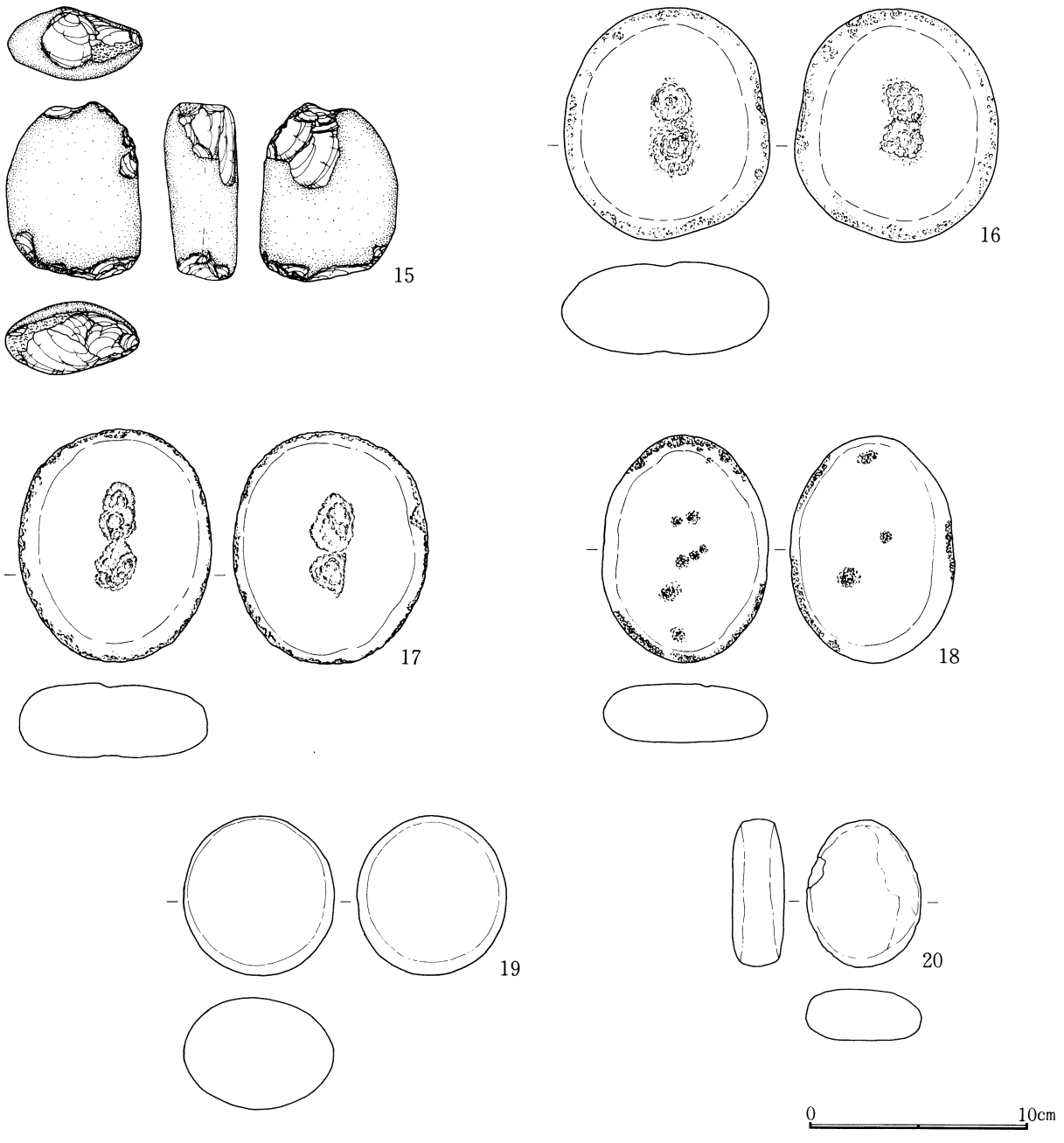
図—131　J — 2 号住居跡出土土器(5)



図—132　J — 2 号住居跡出土土器(6)



図—133　J — 2 号住居跡出土石器(1)



図—134　J — 2 号住居跡出土石器(2)

J — 3 号住居跡

位置　調査区北東のリ—14・15に位置する。

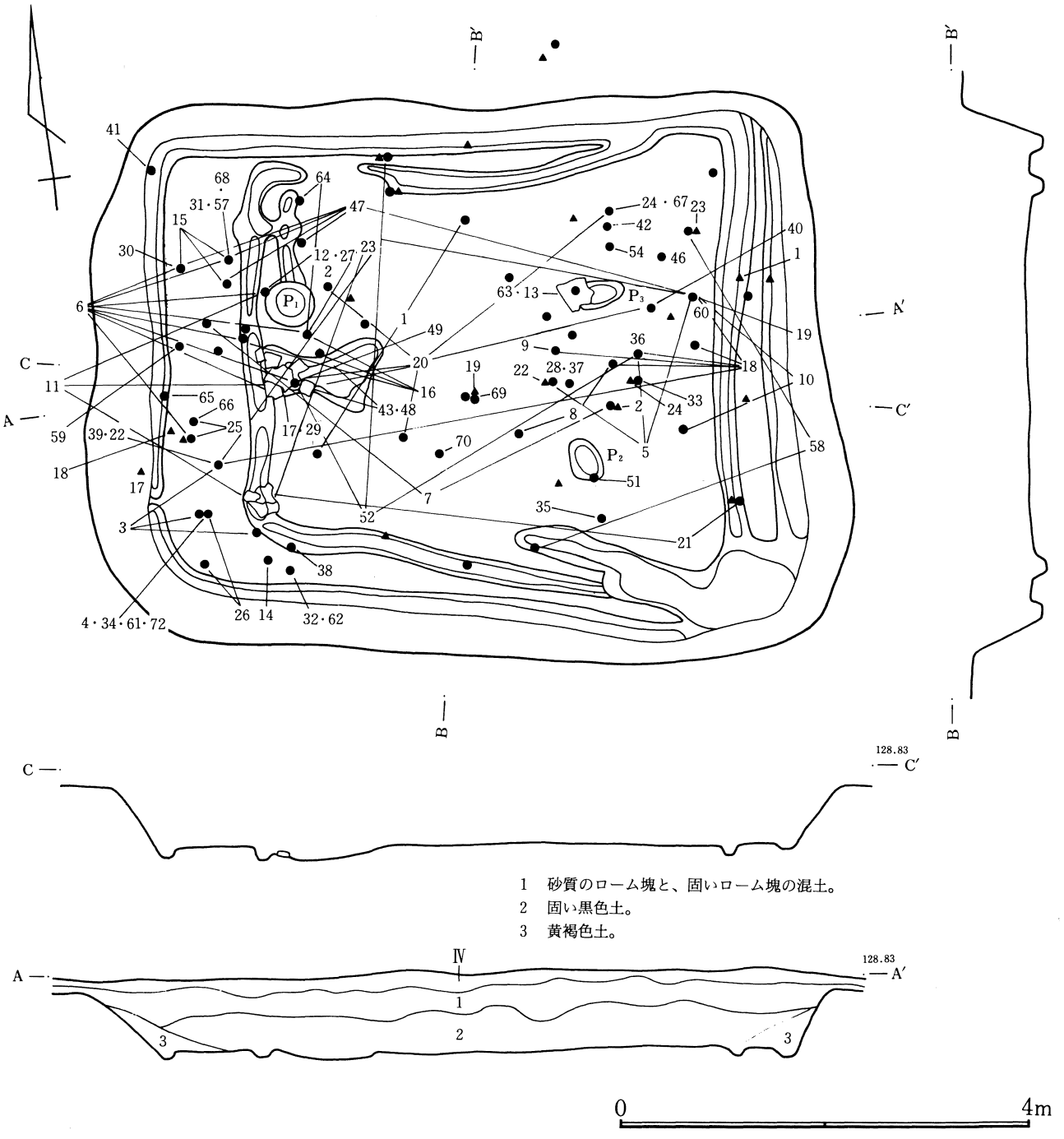
形状　長方形。各辺とも直線をとるが、東辺は西辺にくらべて長く、やや東側がひろがっている。隅角はほぼ直に近い形状をもつ。規模は南北4.66m×6.22m。面積29.36m²。現壁高は59〜63cm。周溝は全周する。拡張住居跡と考えられ、拡張前の周溝がほぼ全周する。一部その内側に周溝と考えられるものが見られ、二度の拡張をうけたと考えられる。最終の周溝は巾 6 〜22cm。深さ 9 〜12cmである。長軸方向はN—81°—W。拡張前は南北3.8m×東西4.70m。

ピット　床面 3 カ所。P_1北西（45×42×27cm）、P_2南東（41×27×38cm）、P_3北東（44×26×32cm）。南西を欠く。また、P_1北の最も旧いと見られる周溝内には、11cm、15cmの深さをもつ小ピットがみられ、南東の最も旧いとみられる周溝内にも24cmの深さをもつ小ピットがみられる。また、P_1西の周溝は、21cm、22cmの深さをもつ長い円状のピットのつらなり状になっている。このことはJ — 2 同様に建物の構造材が床面の柱でなく、壁の柱ではなかったかと考えられるものである。

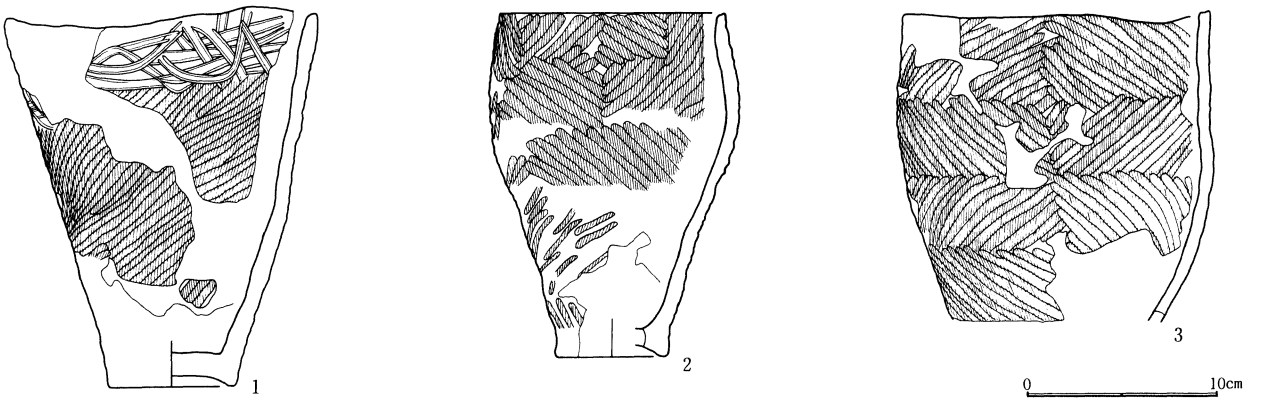
炉　床面西側中央、ピット状不整円形。117×64cm。長さ 5 〜10cmの三石が西側に残る。

遺物　深鉢、浅鉢、石器出土多数。

（井野）



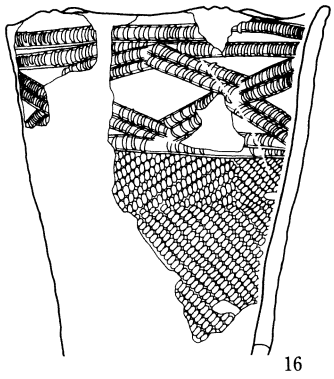
図—135　J — 3 号住居跡平・断面図

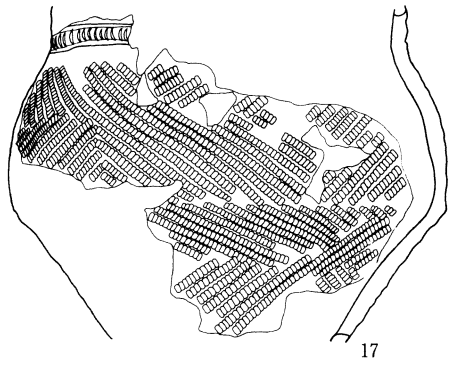


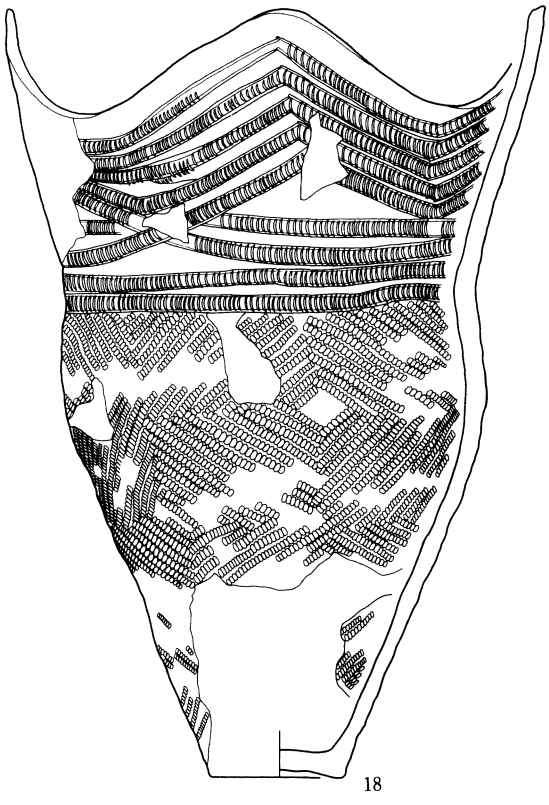
図—136　J — 3 号住居跡出土土器(1)

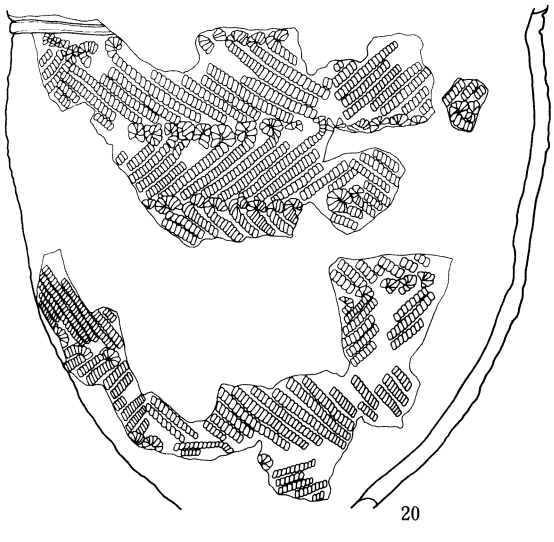
図—137　J－3号住居跡出土土器(2)

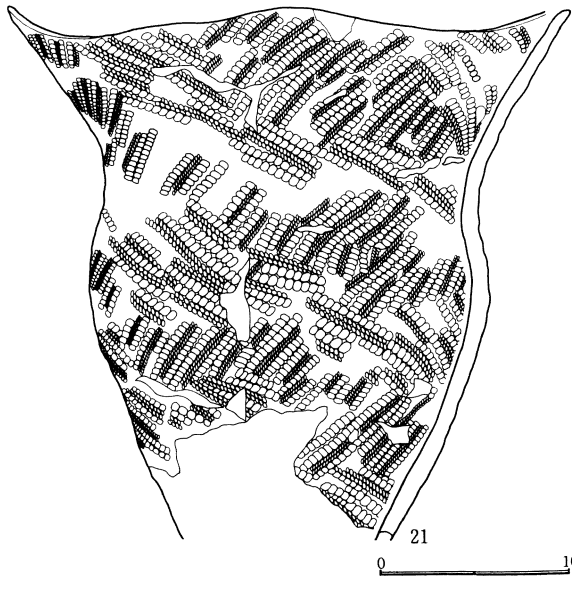
図—138　J — 3 号住居跡出土土器(3)



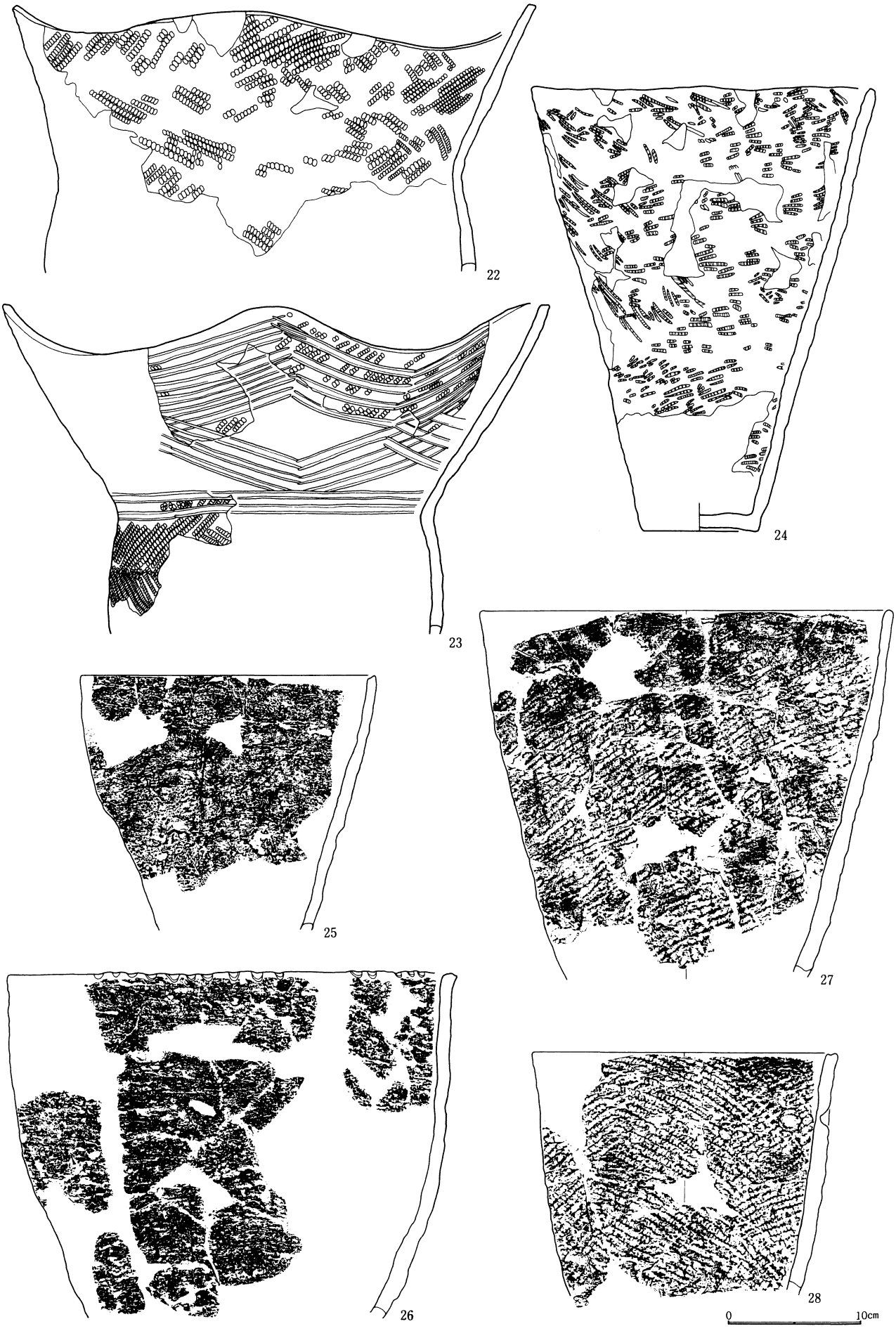




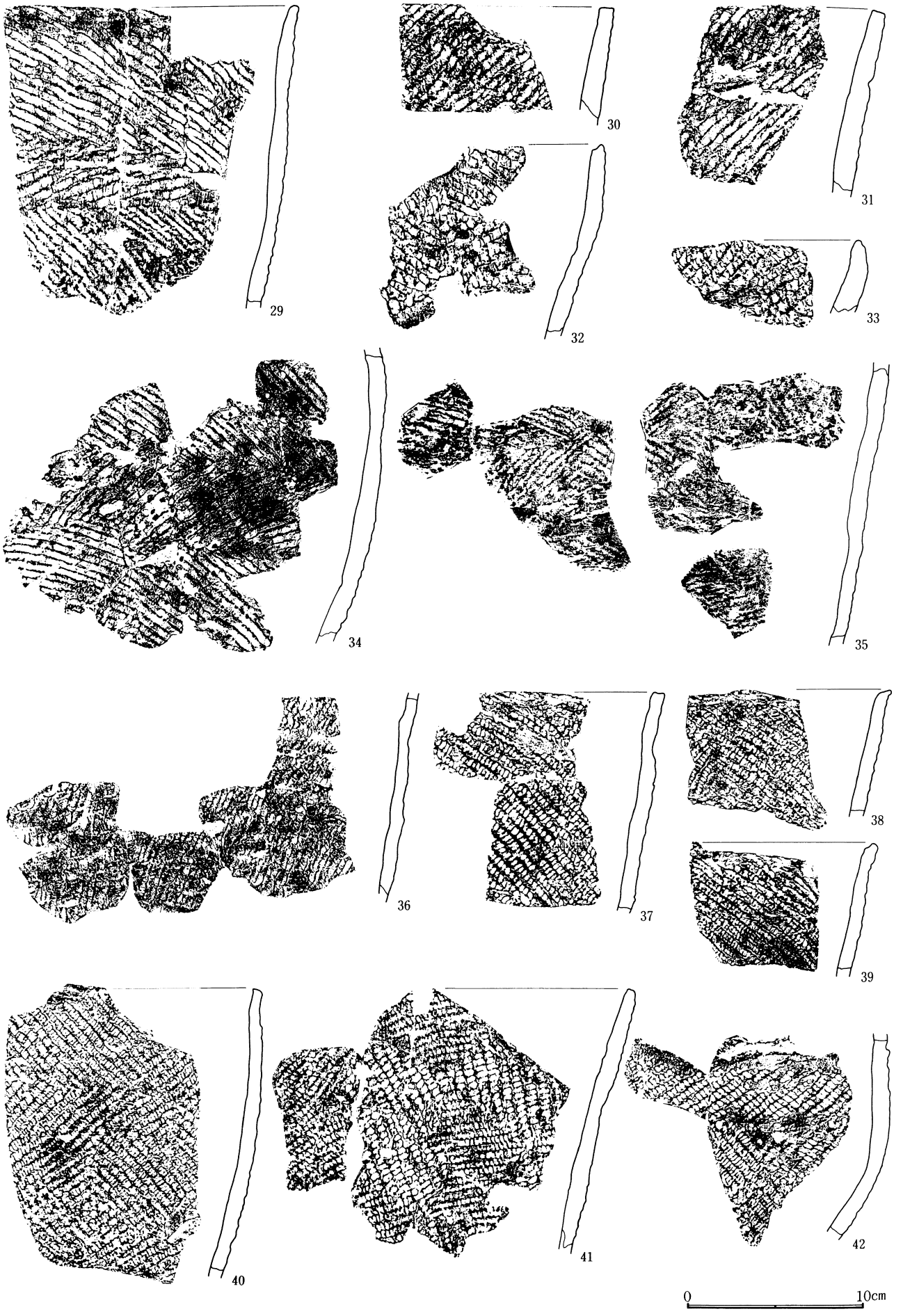




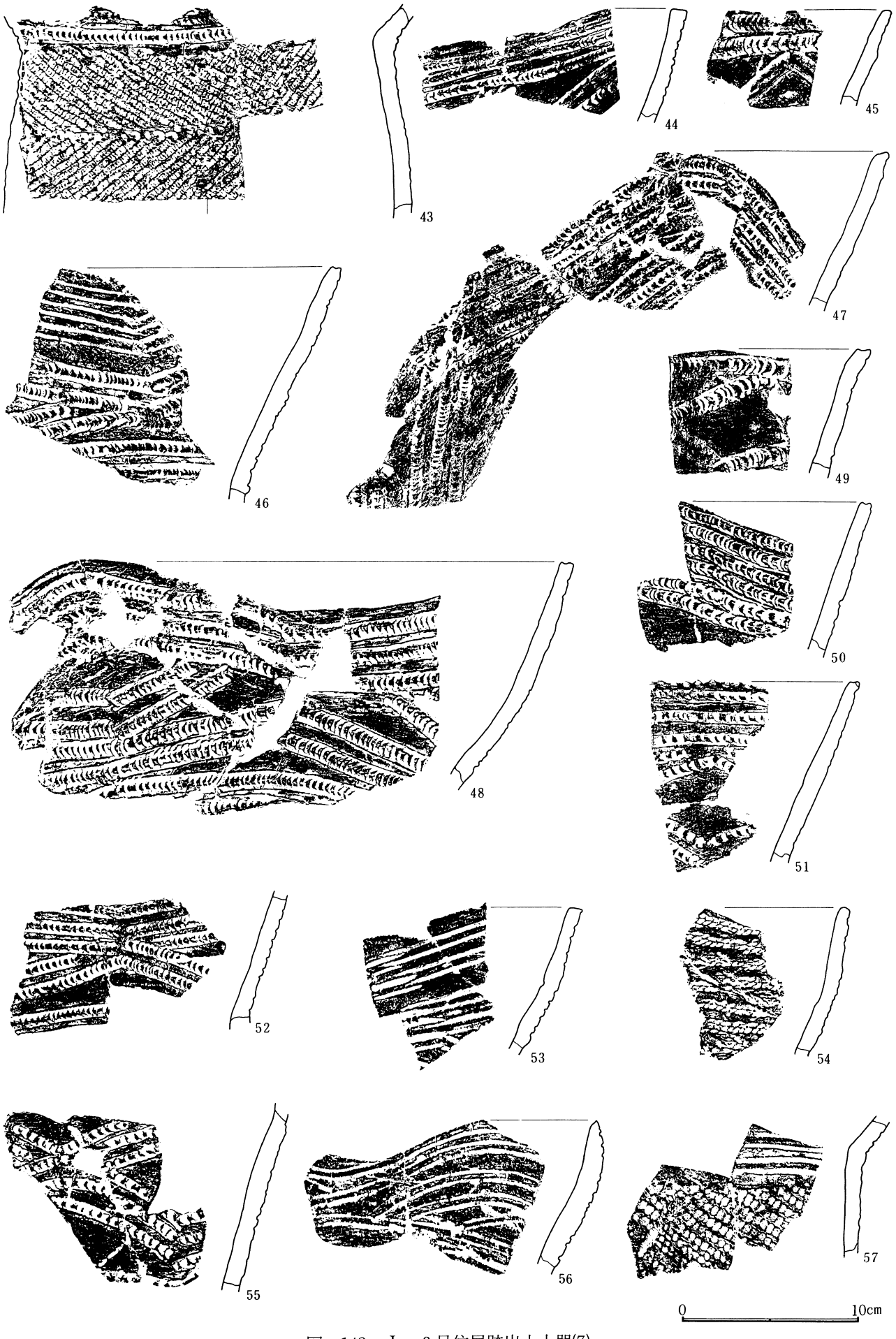
図—139　J — 3 号住居跡出土土器(4)



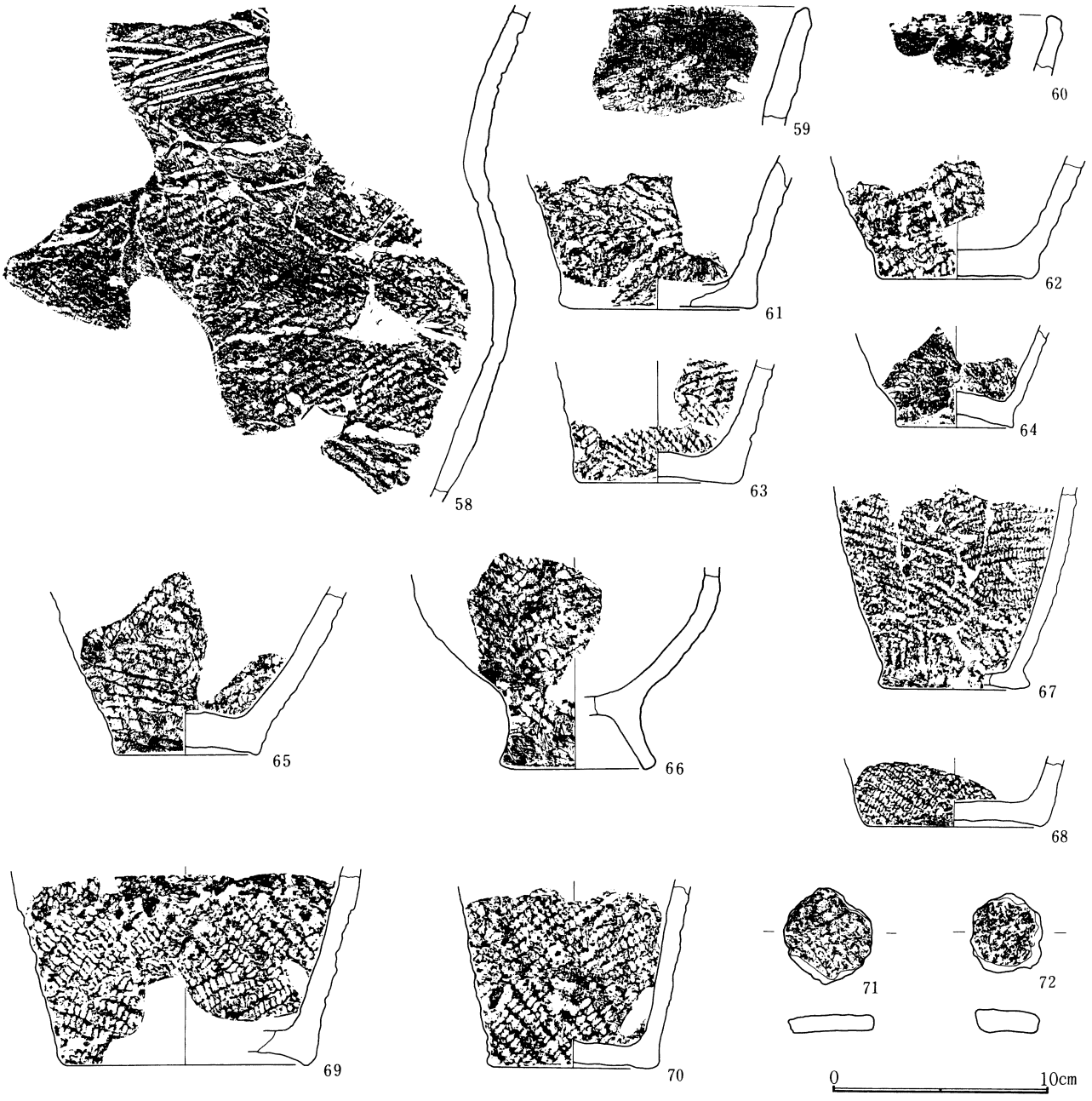
図—140　J — 3 号住居跡出土土器(5)



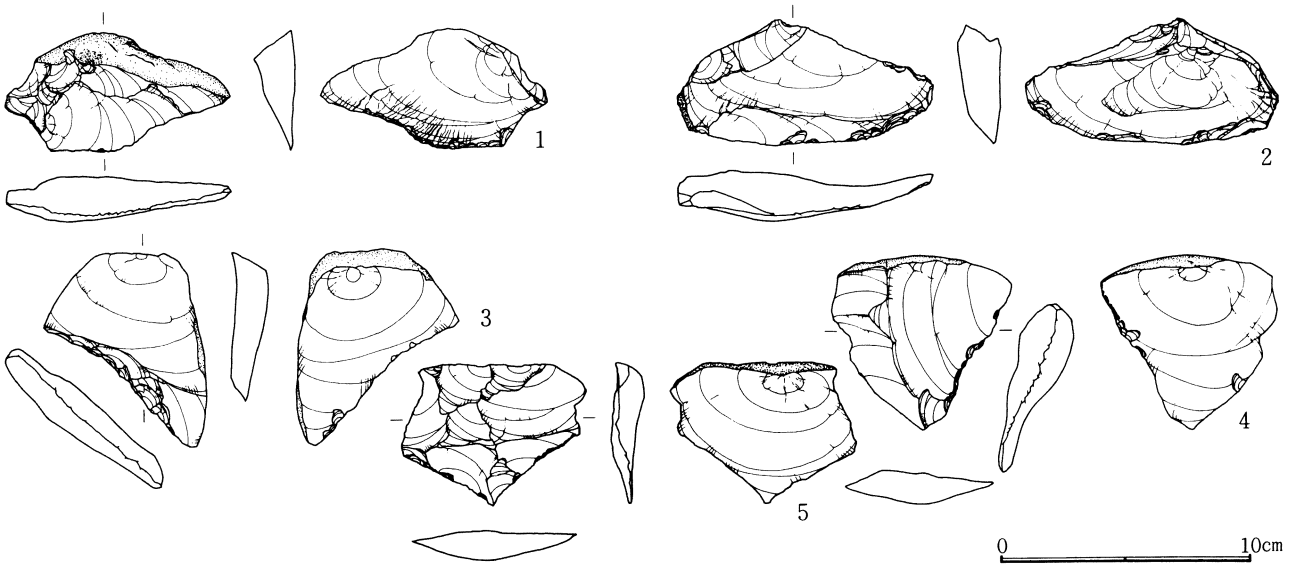
図—141　J — 3 号住居跡出土土器(6)



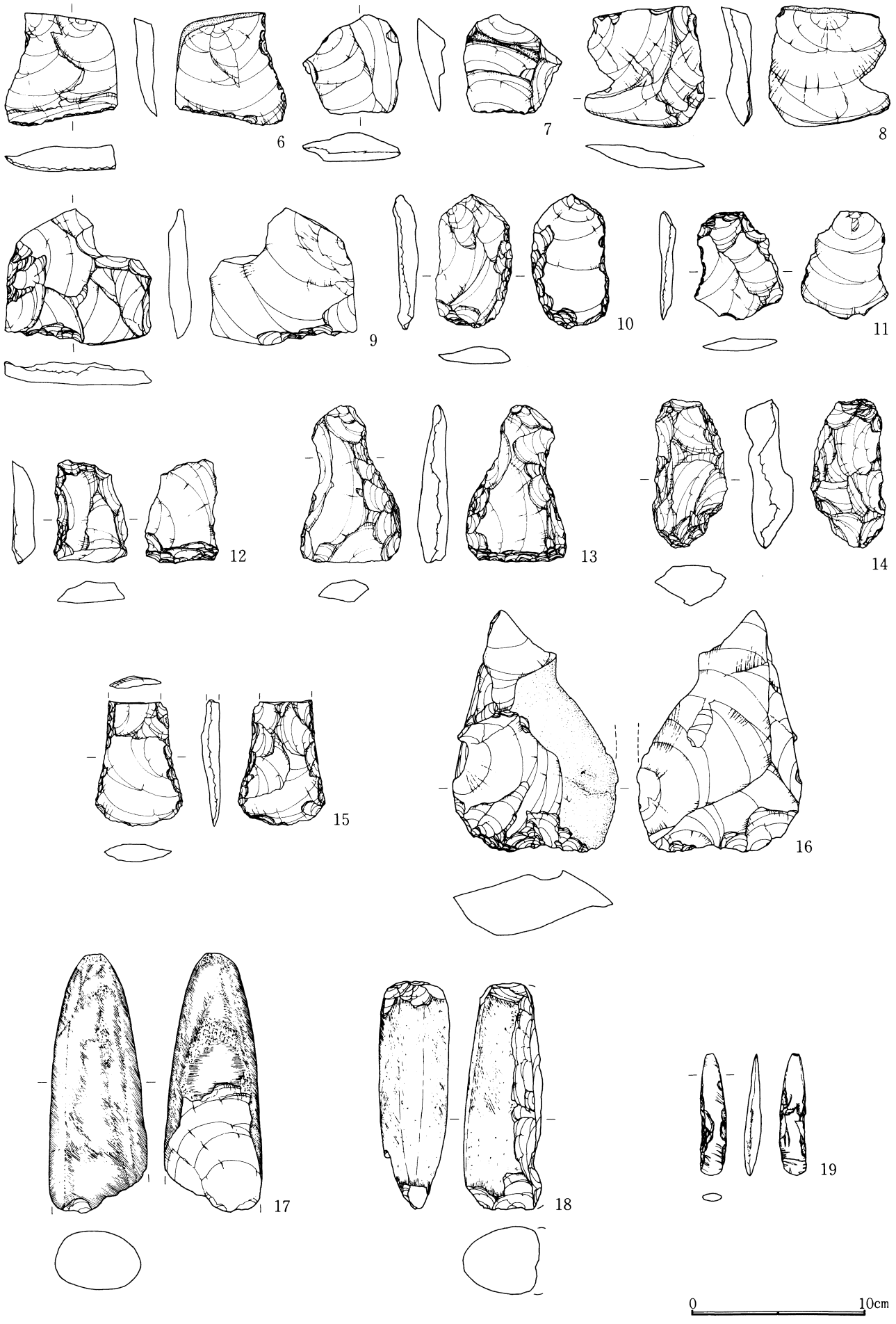
図—142　J — 3 号住居跡出土土器(7)



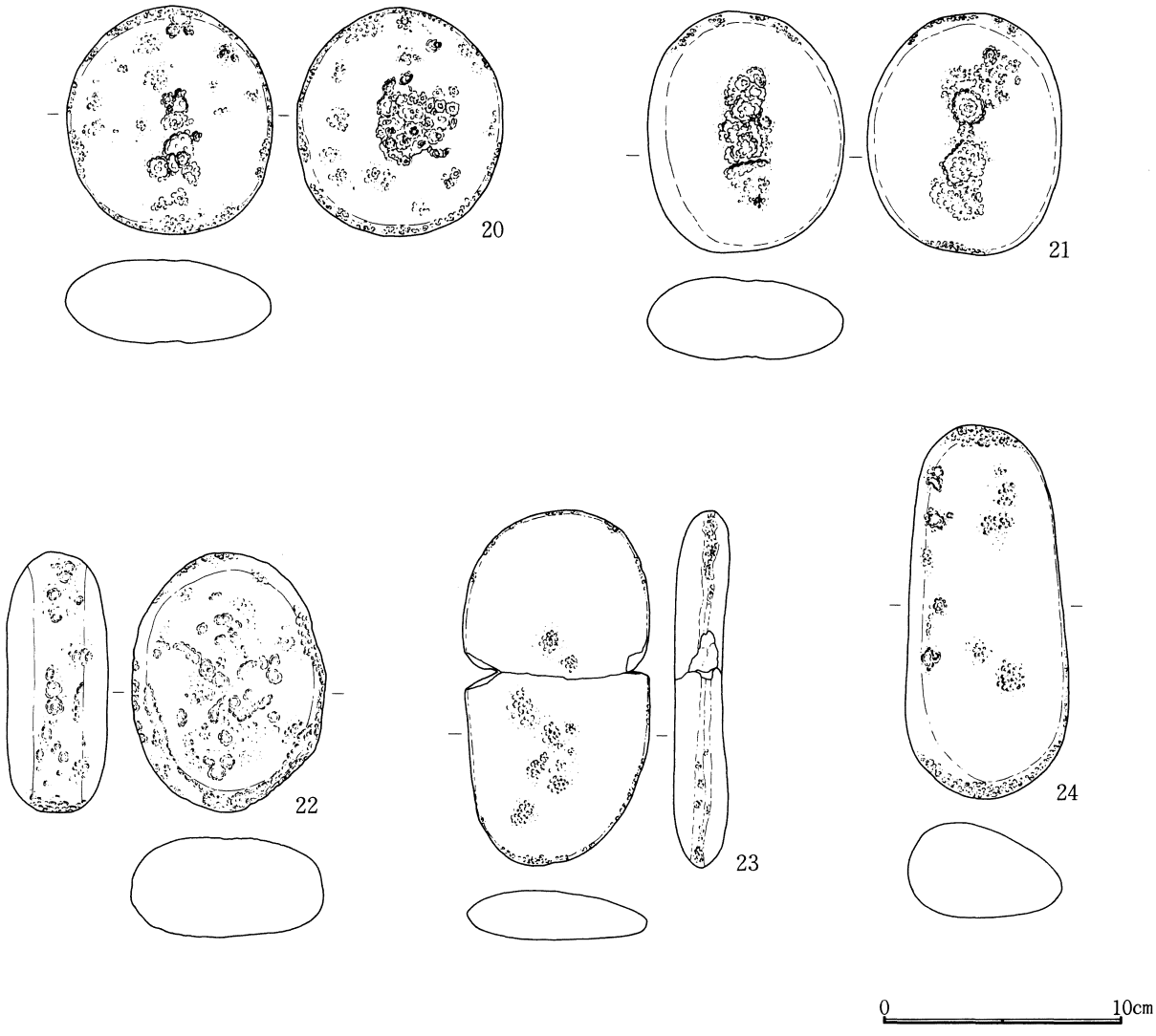
図—143　J — 3 号住居跡出土土器(8)



図—144　J — 3 号住居跡出土石器(1)



図—145　J — 3 号住居跡出土石器(2)



図—146　J—3号住居跡出土石器(3)

J—4号住居跡

位置　調査区北西のル—16に位置する。

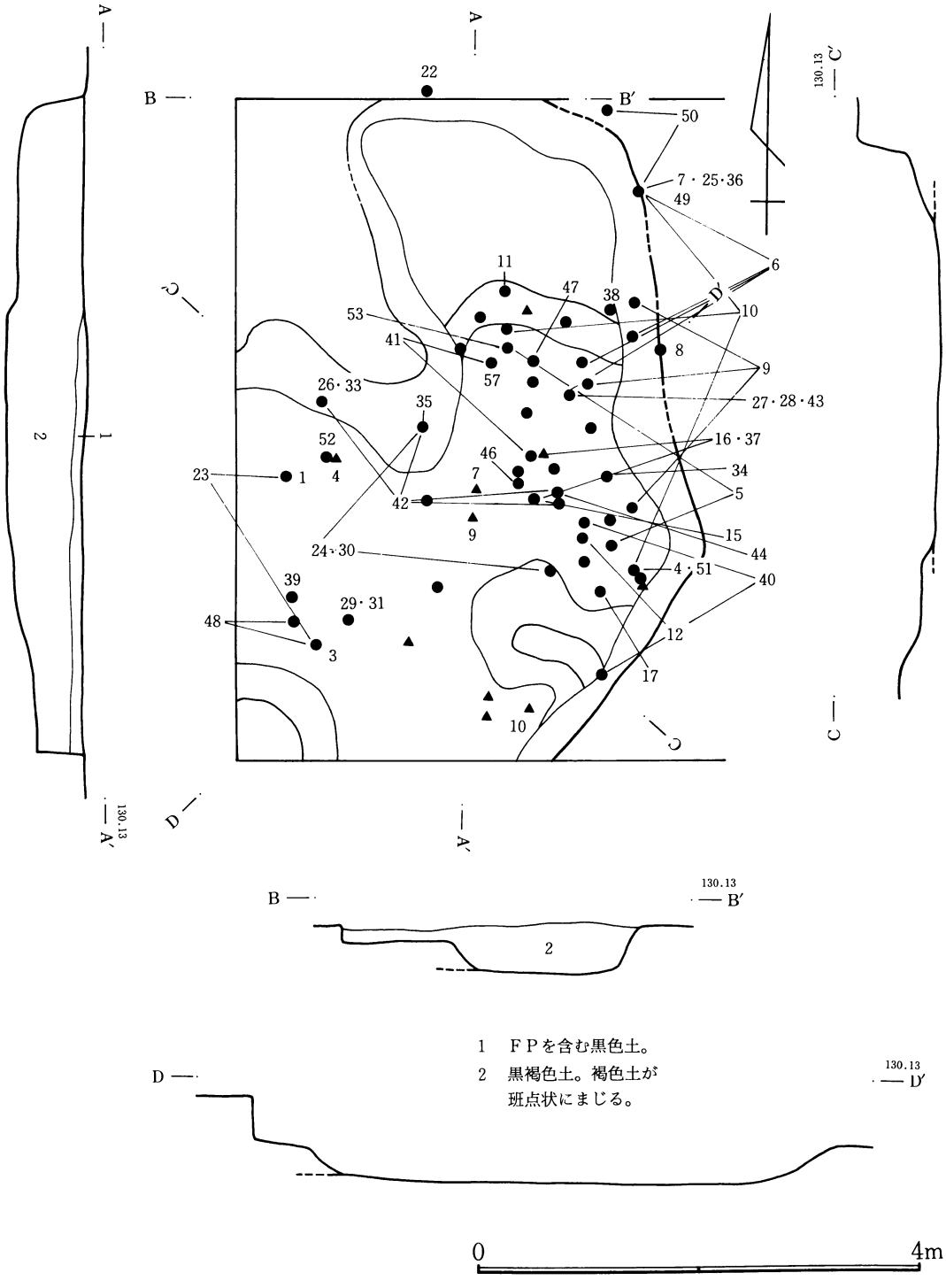
形状　不整形。完掘されていない。明確な形状、規模についてはつかみえない。現状の面積は14.97㎡。現壁高は27～36cmを計る。周溝はみられない。

遺構内にピット・炉等の施設は検出されておらず、住居扱いには疑問がのこる。ＪＰ扱いが適当か。

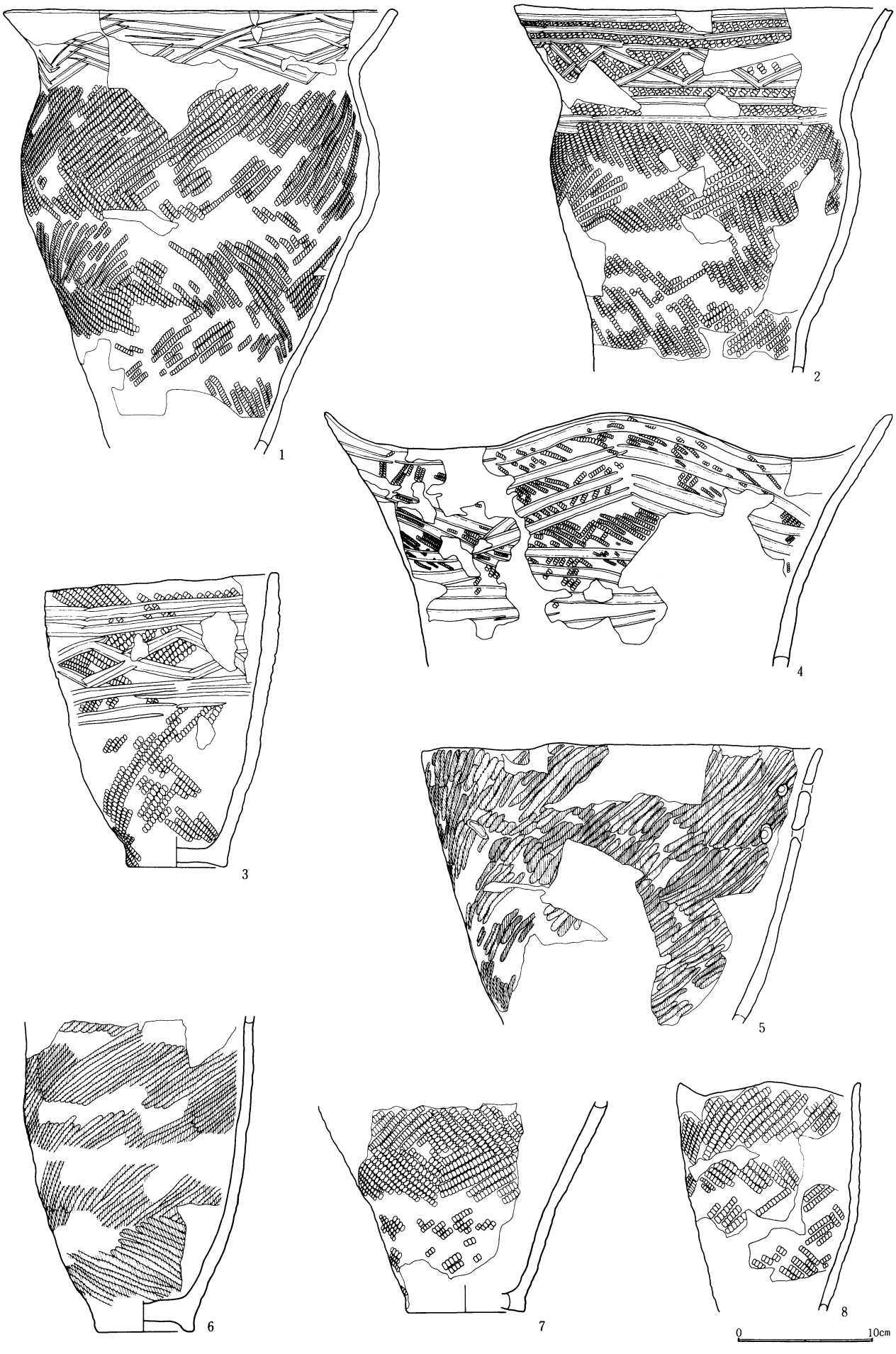
J—4の北東にみられる落ち込みも同様の覆土をもつ。これも完掘ではない。ＪＰ扱いが適当か。

遺物　土器、石器の出土多数。

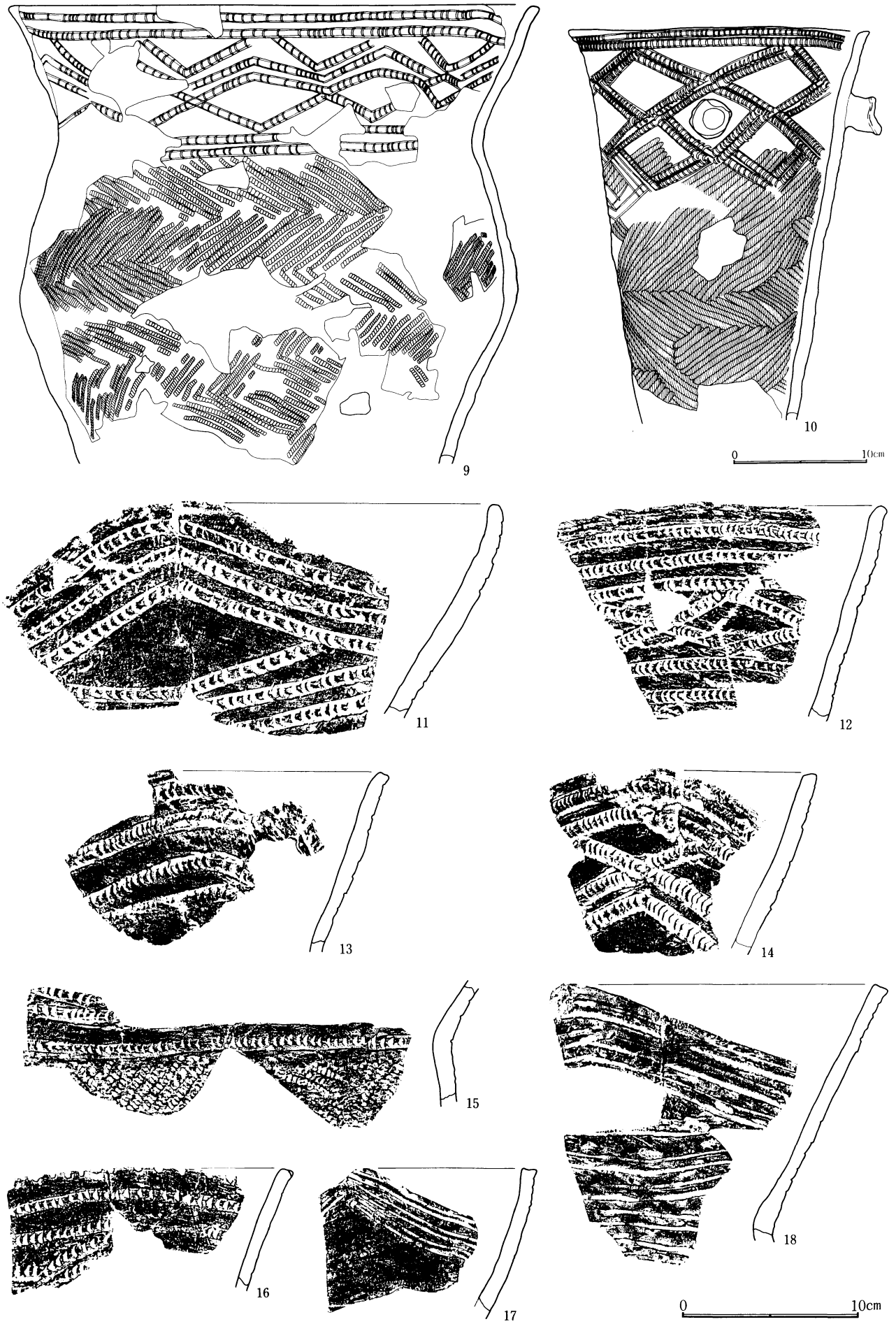
（井野）



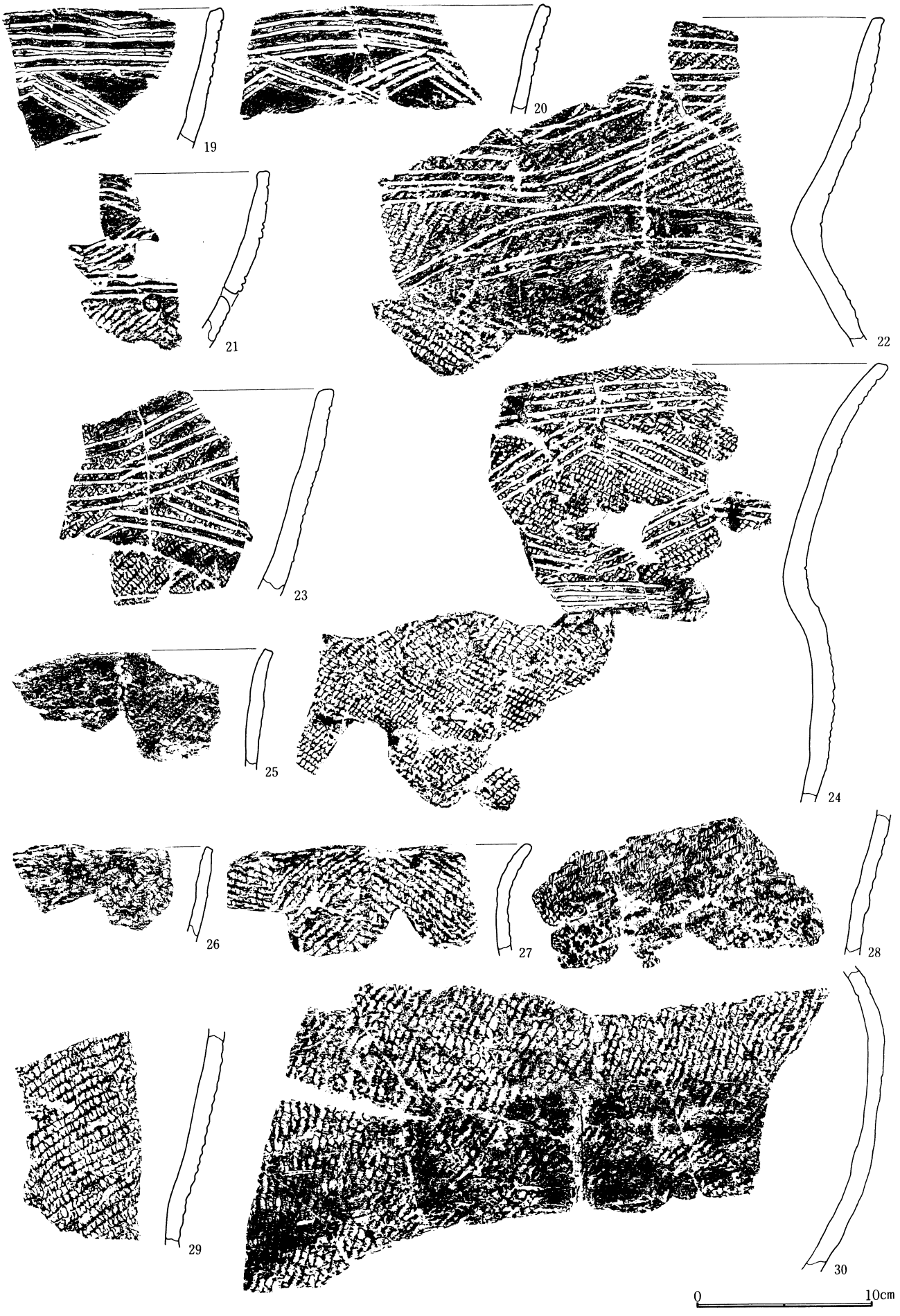
図—147　J — 4 号住居跡平・断面図



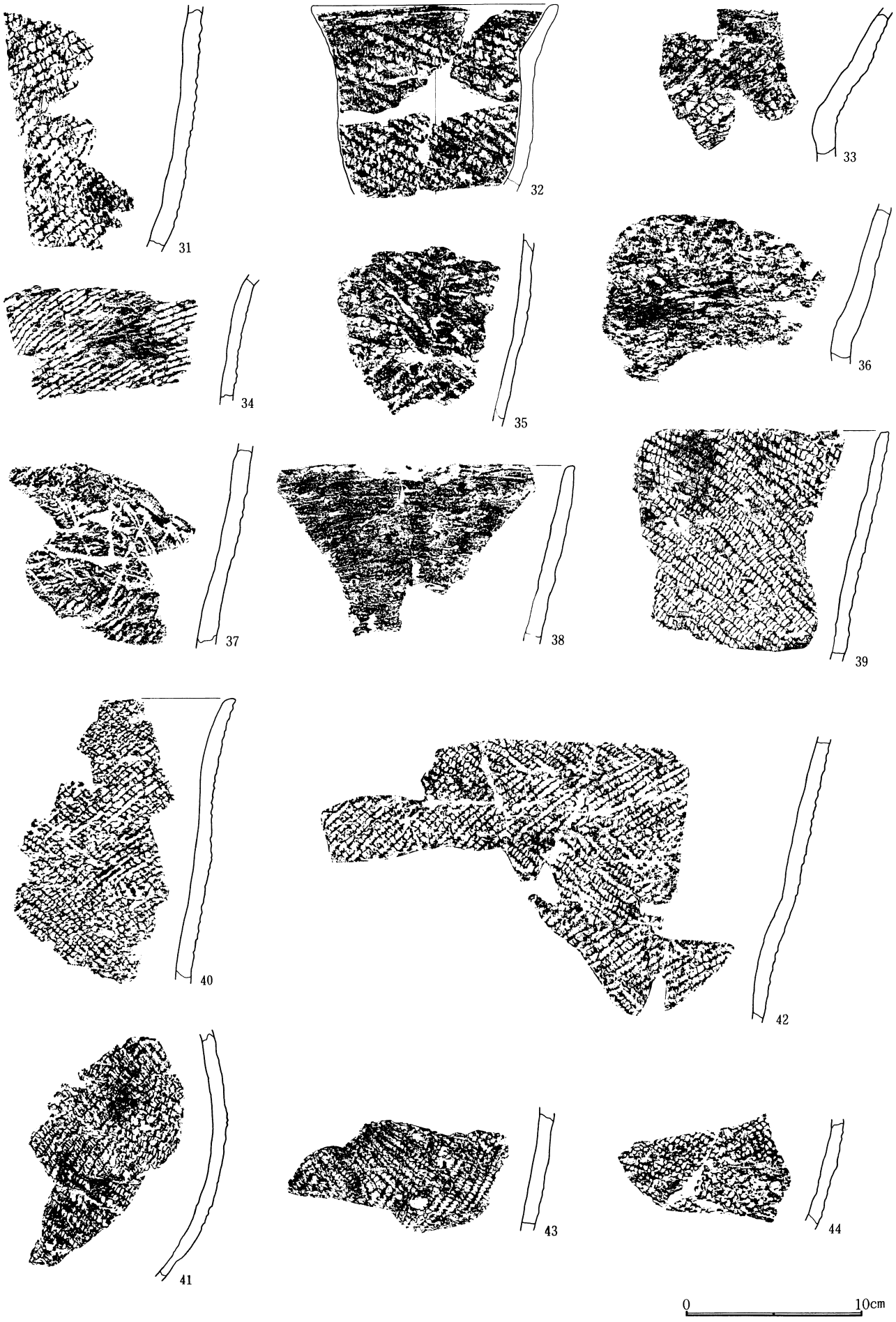
図—148　J — 4 号住居跡出土土器(1)



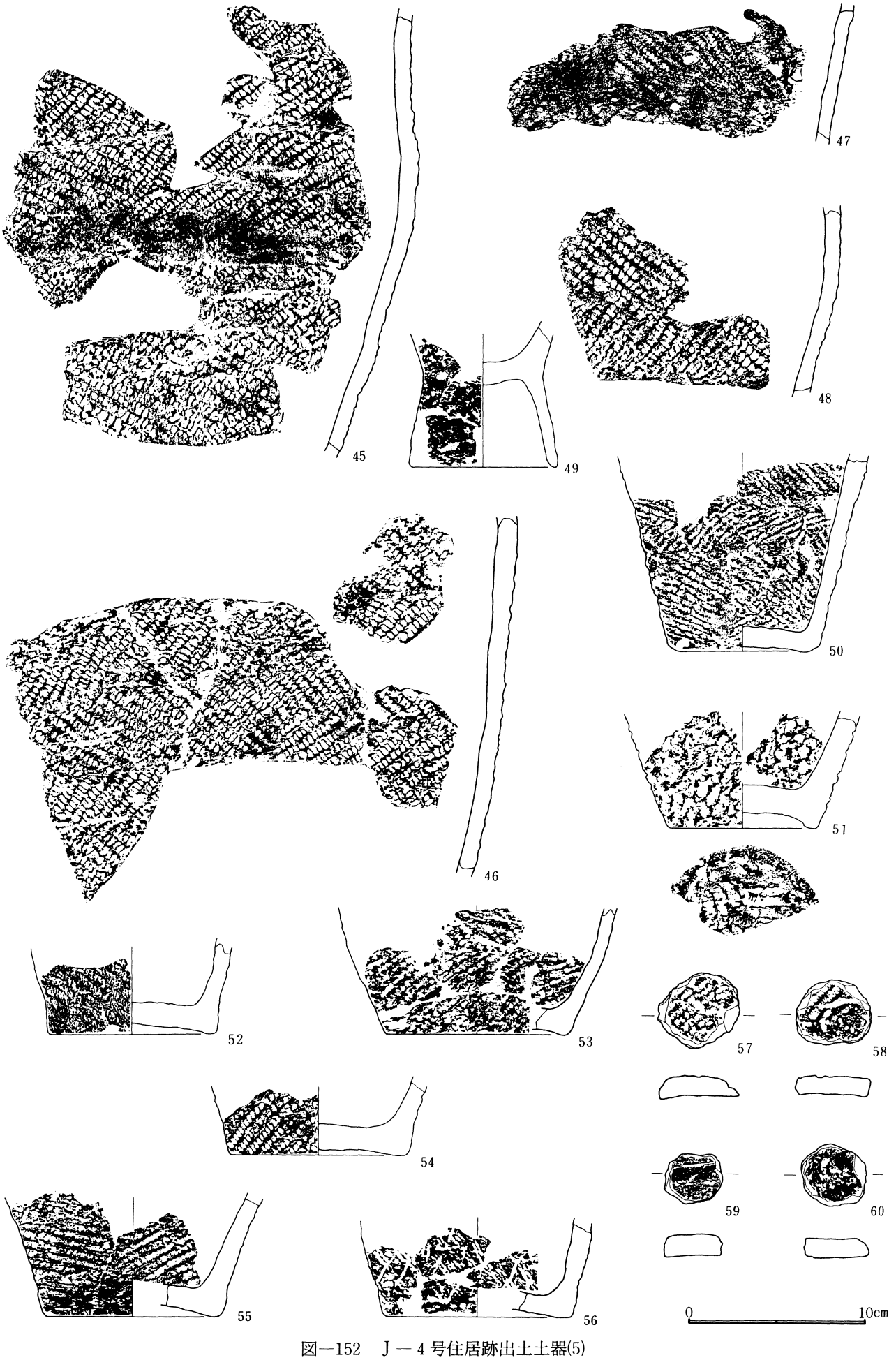
図—149　J—4号住居跡出土土器(2)



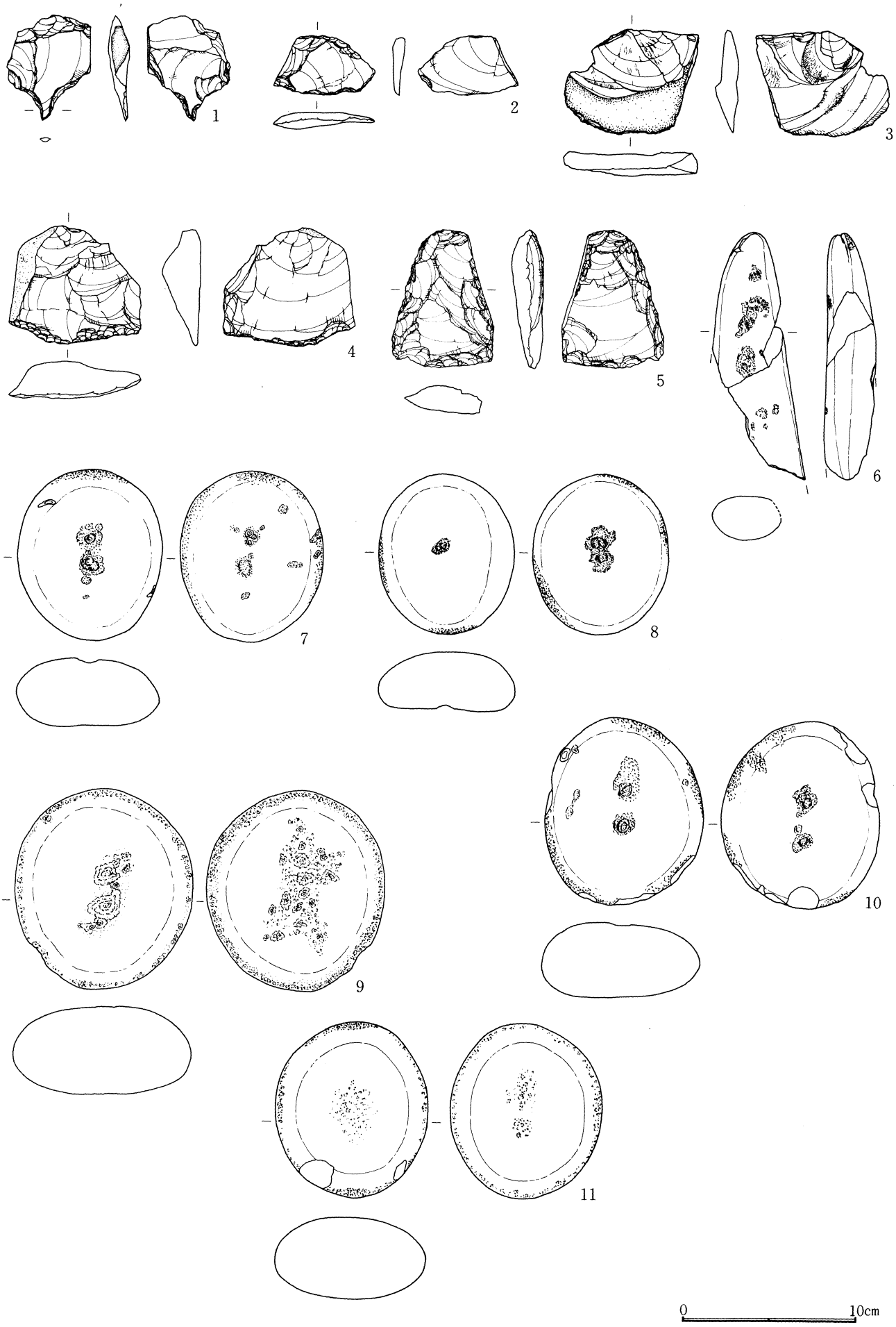
図—150　J — 4 号住居跡出土土器(3)



図—151　J — 4 号住居跡出土土器(4)



図—152　J — 4 号住居跡出土土器(5)



図—153　J — 4 号住居跡出土石器

J－5号住居跡

位置　調査区南東のレ－6区に位置する。M—27と重複し、M—27下面にある。

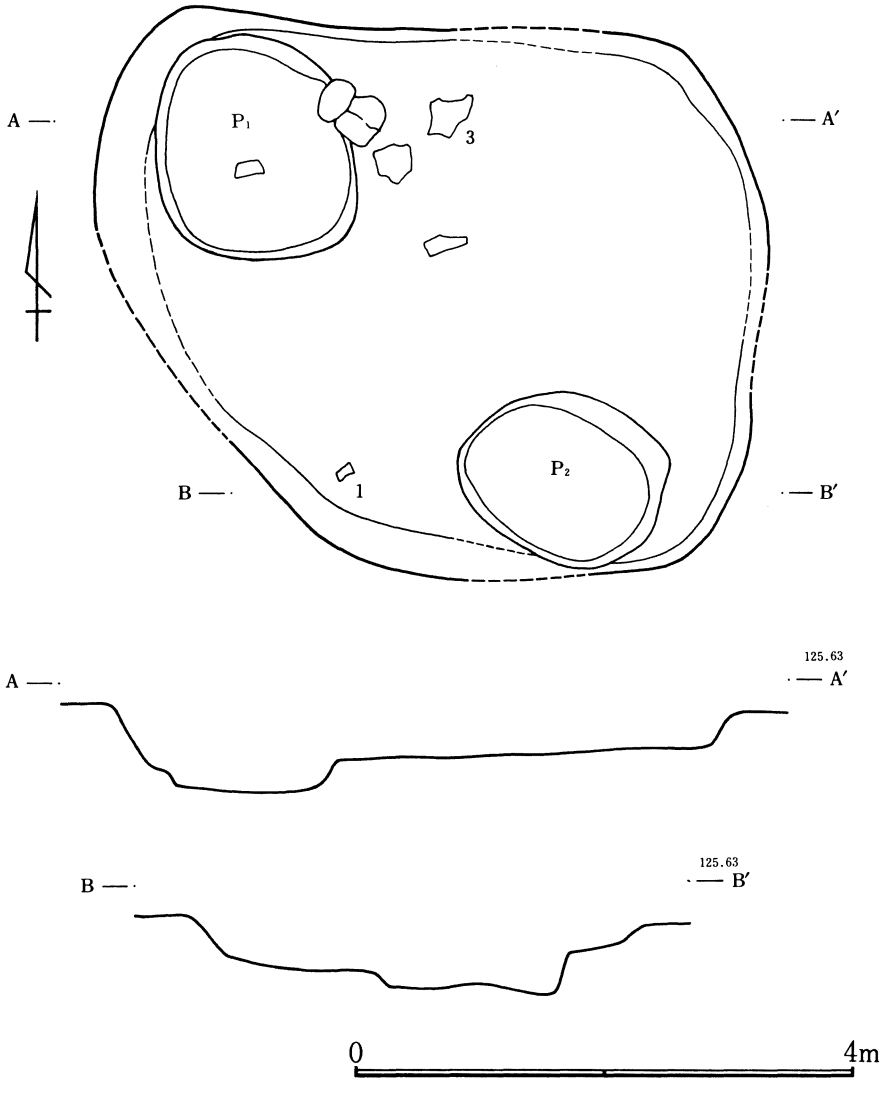
形状　基本形は隅丸方形。P_1により北東に張り出しを持った形になっている。北・東・南辺とも直に近い。現状の規模は南北4.0m×東西4.80mである。面積16.77㎡。現壁高は23～50cmを測る。周溝はみられない。長軸方向はN—89°—Wである。北西の張り出し部はP_1掘削によるものと思われる。P_1 P_2とも形状が似ており、同様のものと考えられるが、地層断面図が失なわれており、住居施設か、別の遺構か不明である。検出の様子からみるとJ－5以降のものか。

ピット　P_1北西（180×160×28cm）で皿状の底をもつ。P_2南東（160×135×28cm）で同様の皿状の底をもつ。

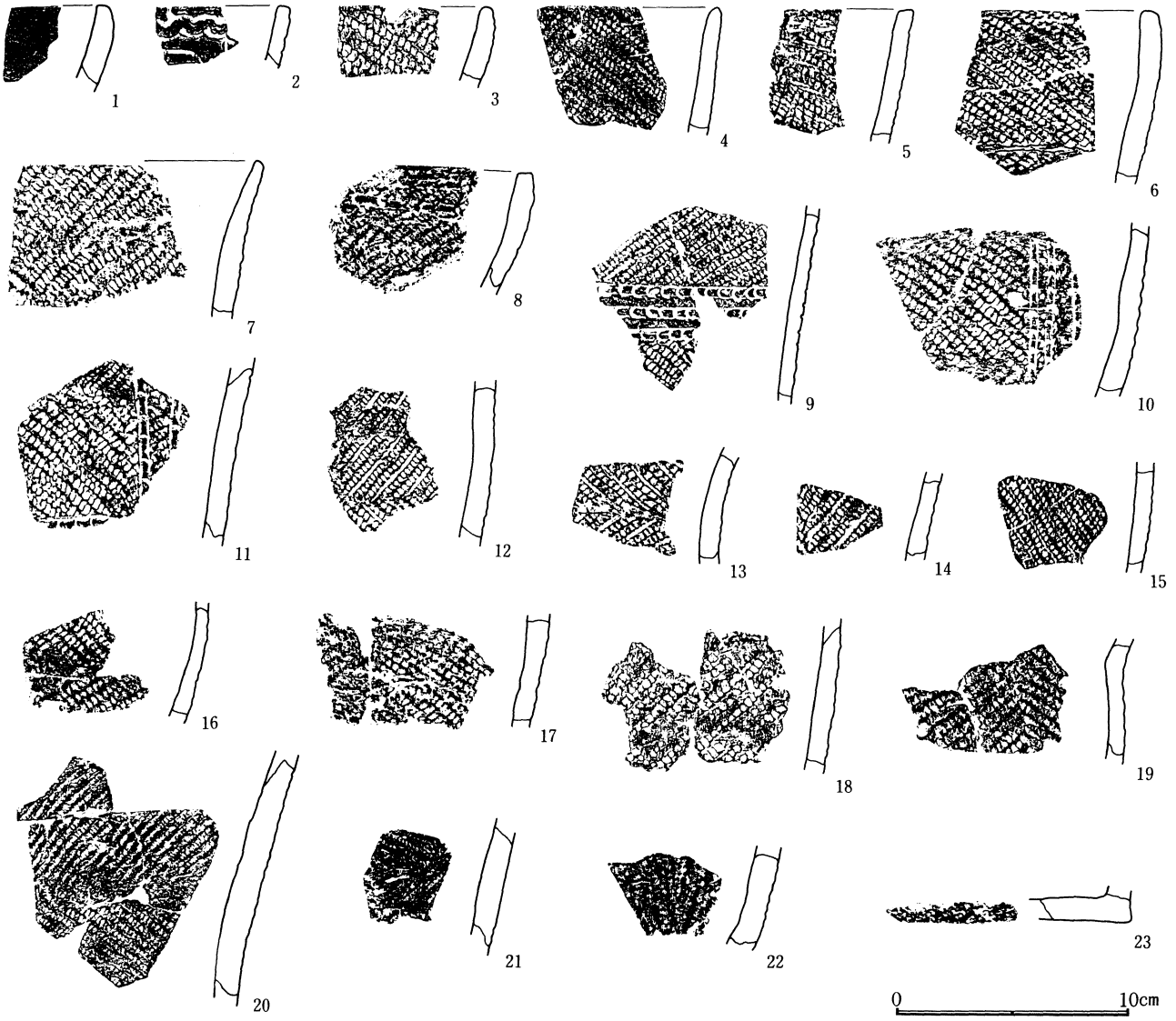
炉　検出されていない。

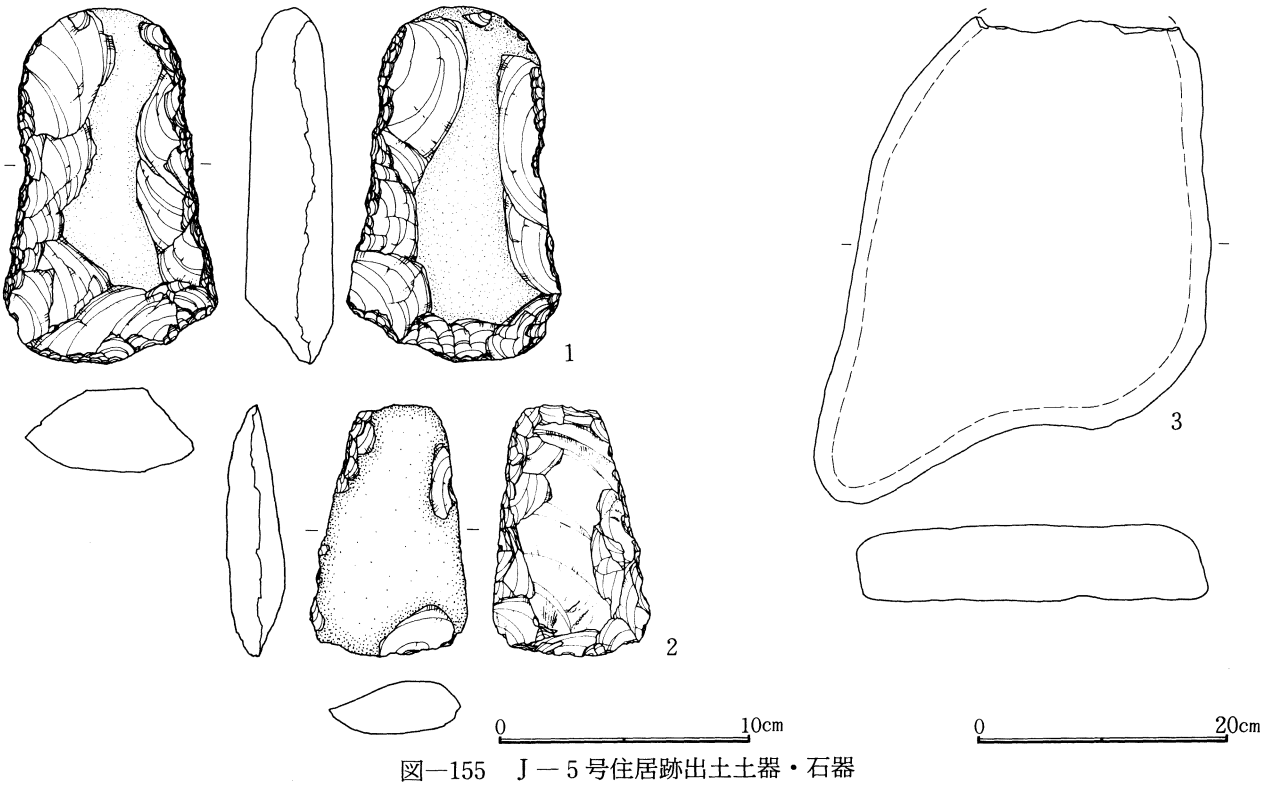
出土遺物　北西より石が7石検出されているが、いずれも覆土上面であり、M—27に係わるものも含まれる。土器片及び石器が出土している。

（井野）



図—154　J－5号住居跡平・断面図





図—155　J—5号住居跡出土土器・石器

Ｊ－６号住居跡

位置　調査区南東のタ－５・６区に位置する。Ｍ－25・27の周堀下より検出されている。東側よりＪ－５、南側よりＪＰ－４・５が検出されている。

形状　方形。北辺はやや膨らむが、他辺はほぼ直に近い。南・東辺は直に近いが、北辺は隅丸に近い形状をもつ。規模は南北5.6m×東西5.34m。面積は27.78㎡である。現壁高は58～60cmであるが、地層断面よりは65cmを測る。

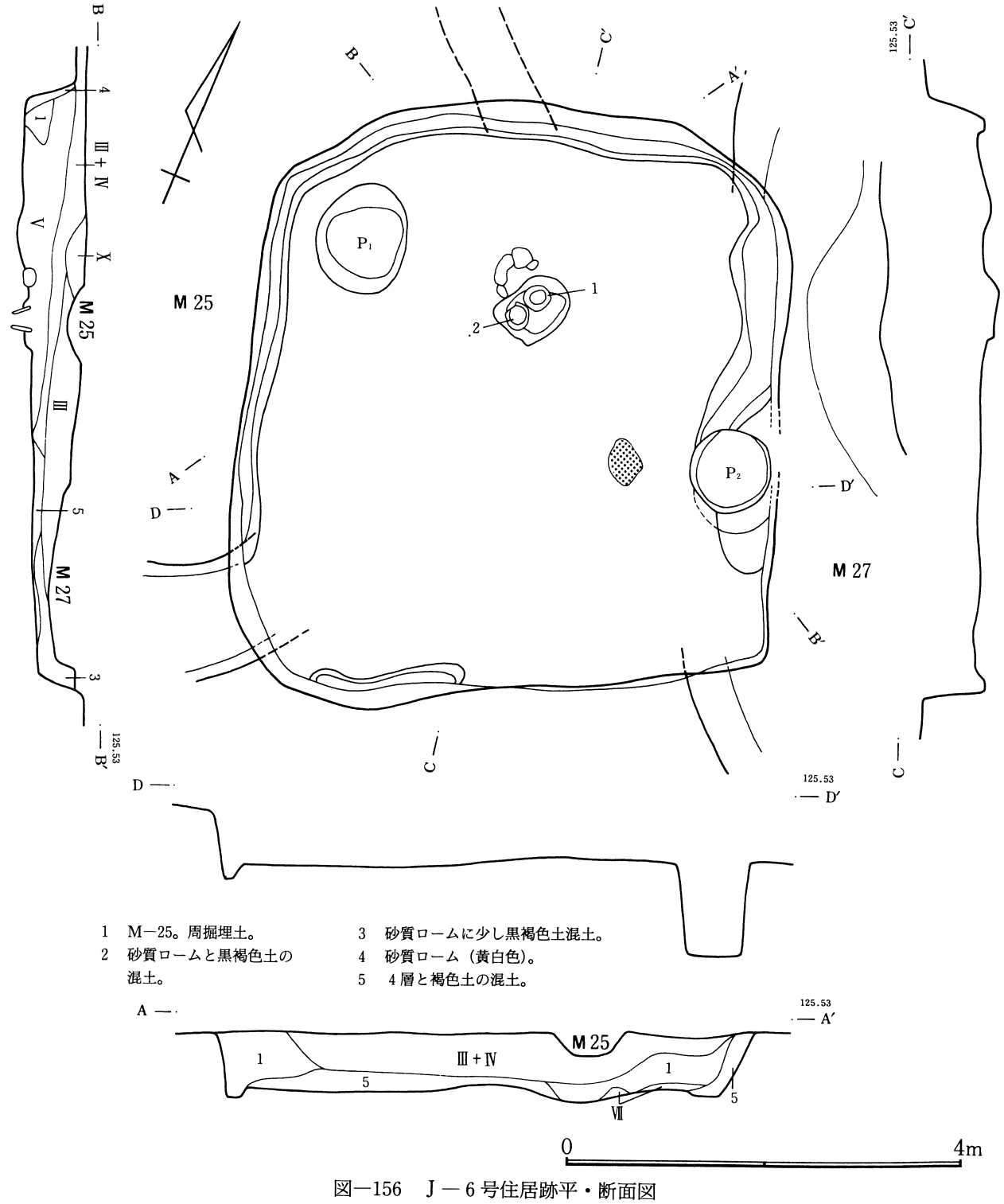
周溝は南東部を除きほぼ全周する。巾３～37cmで、深さ８～15cmである。主軸方位はＮ－24°－Ｗである。

ピット　床面２カ所。Ｐ₁北西。110×90×39cm。Ｐ₂南東。85×80×93cm。いずれも地層断面図が失なわれており新旧は不明であるが、検出の状況からみると、住居施設の可能性が高い。柱穴というより貯蔵穴に近いものか。

炉　床面北中央。４石が方形を作るように配され、その南に埋設土器２個が検出されている。

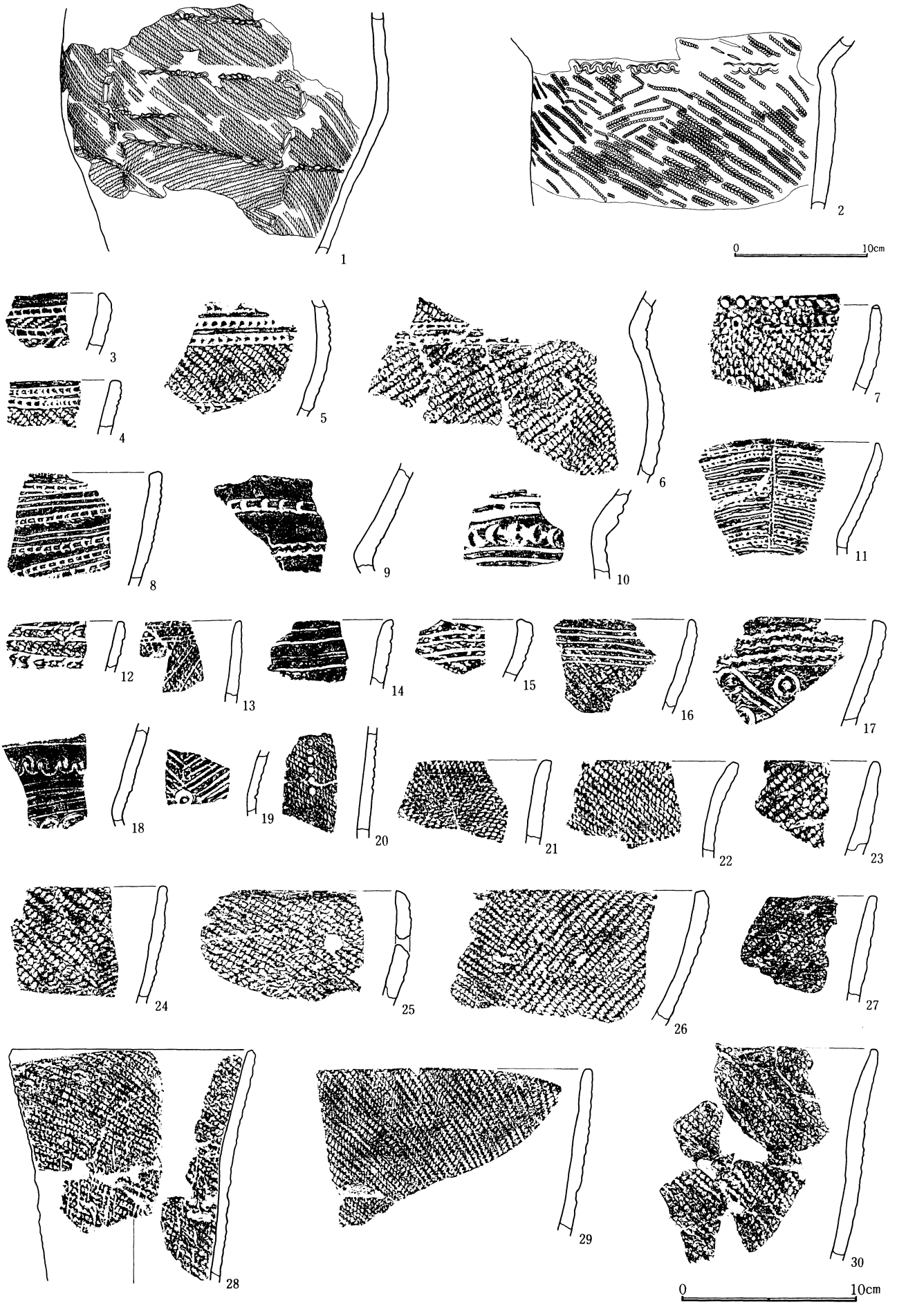
出土遺物　深鉢や石器等が出土している。

（井野）

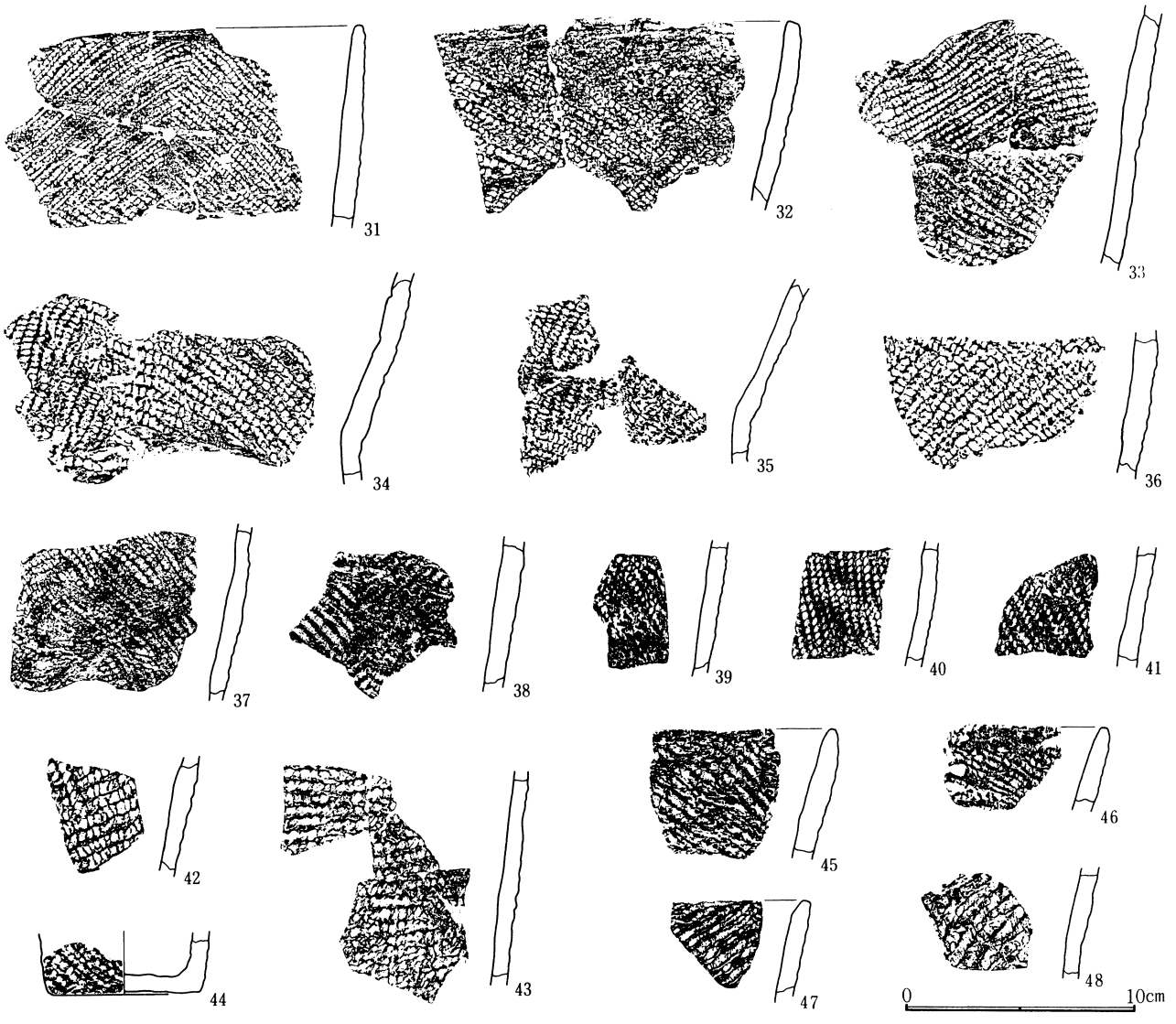


1　M－25。周掘埋土。
2　砂質ロームと黒褐色土の混土。
3　砂質ロームに少し黒褐色土混土。
4　砂質ローム（黄白色）。
5　４層と褐色土の混土。

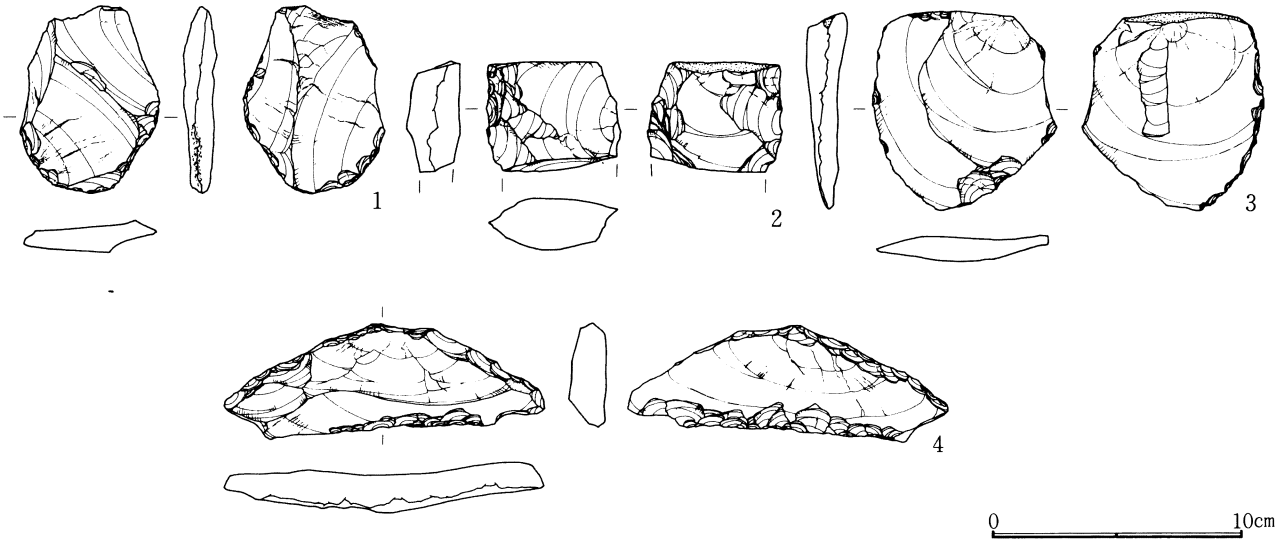
図－156　Ｊ－６号住居跡平・断面図



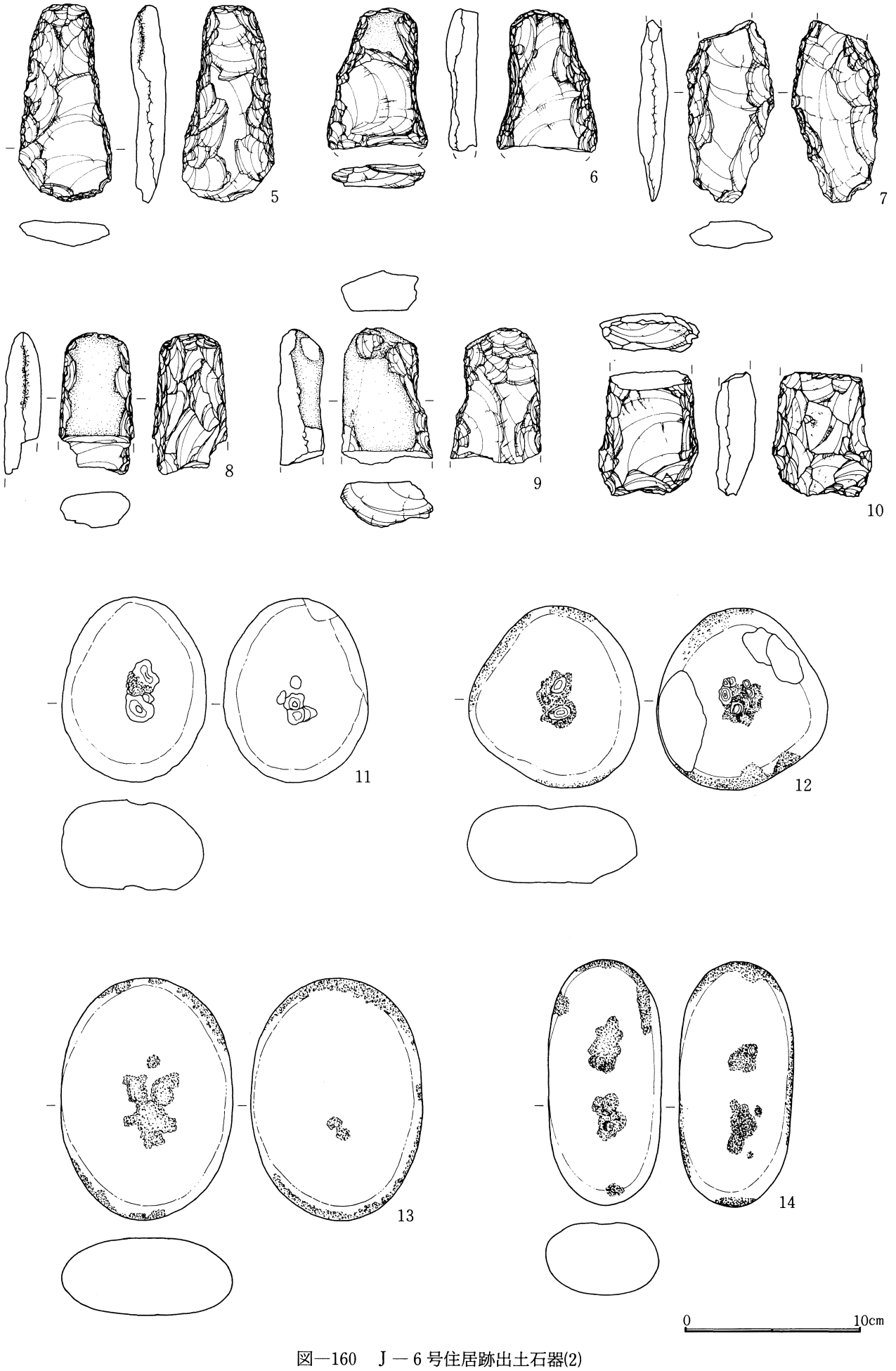
図—157　J — 6 号住居跡出土土器(1)



図—158　J — 6 号住居跡出土土器(2)



図—159　J — 6 号住居跡出土石器(1)



図—160　J — 6 号住居跡出土石器(2)

Ｊ－７号住居跡

位置　調査区南東のソ－５に位置する。M－29周堀下より検出されている。

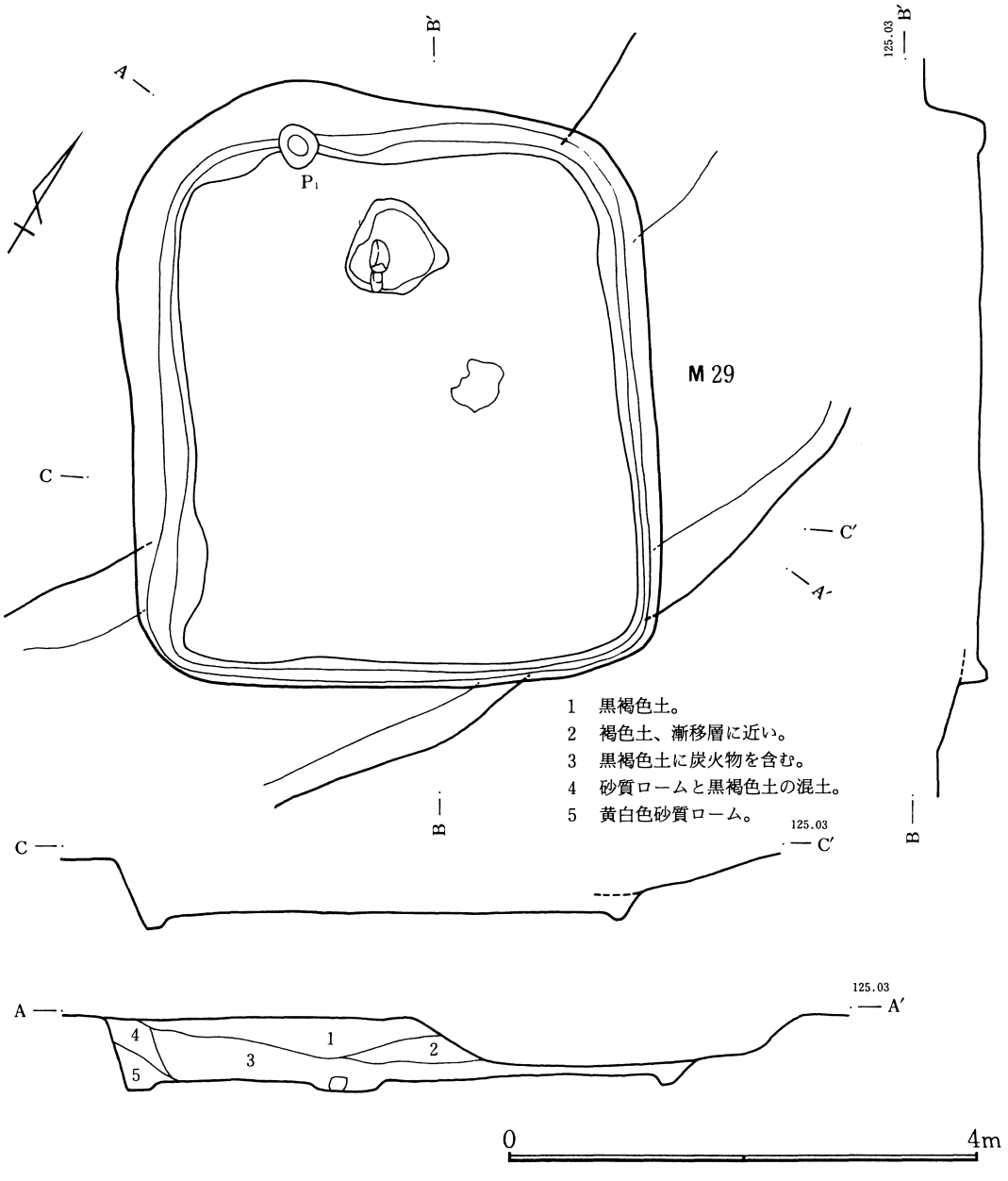
形状　方形。各辺とも直で、しっかりした掘り込みである。隅角も直に近い。規模は南北4.65m×東西4.0m。面積は20.17㎡。現壁高は21～48cmであるが、地層断面図からは52cmを測る。周溝が全周する。巾３～20cmで、深さ６～14cmである。長軸方向はN－30°－W。

ピット　北壁下に一基。36×30×23cm。

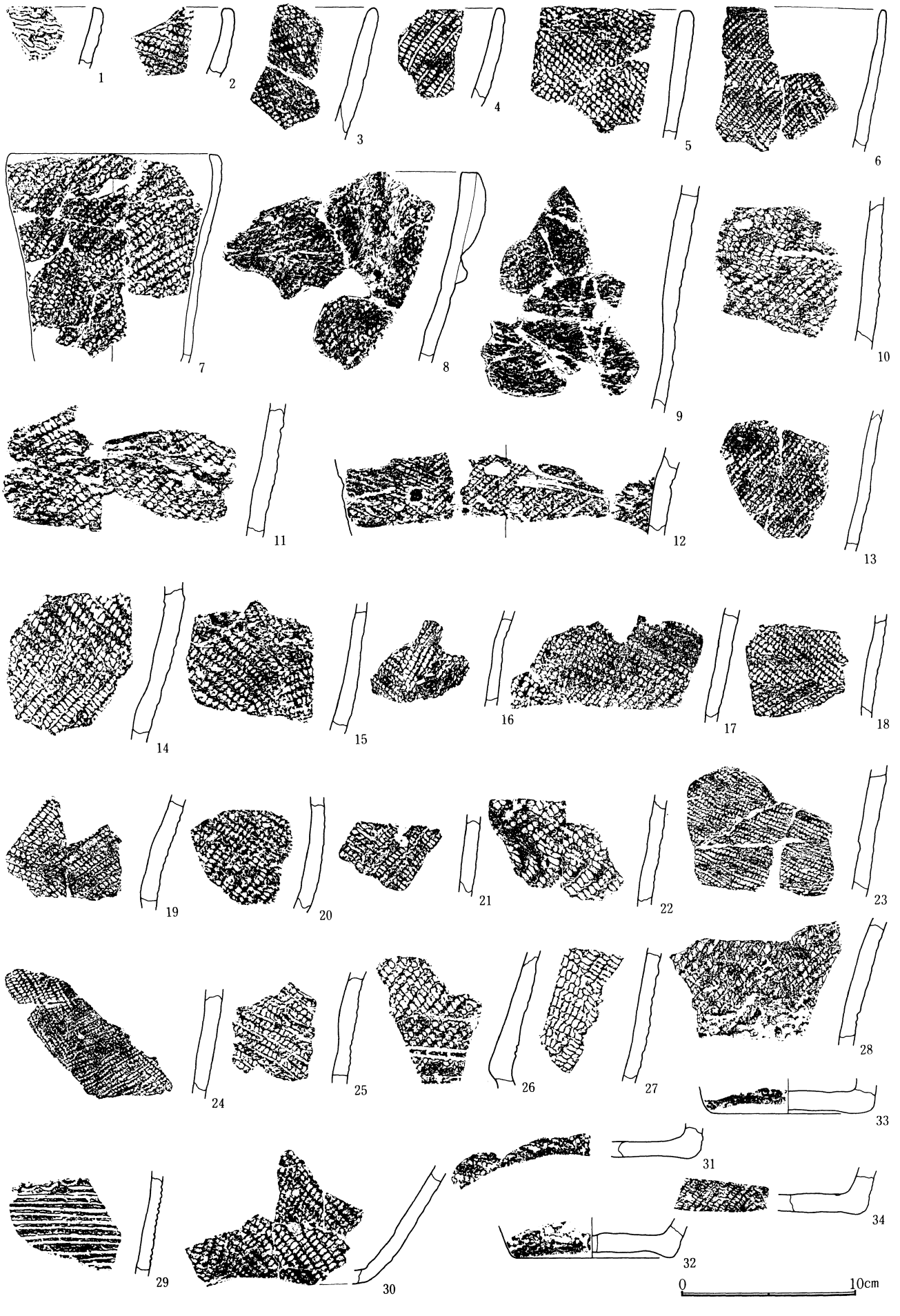
炉　床面北側中央。２石がのこり、その下に掘りこみ（80×70cm）が検出された。

出土遺物　深鉢や石器等が出土している。

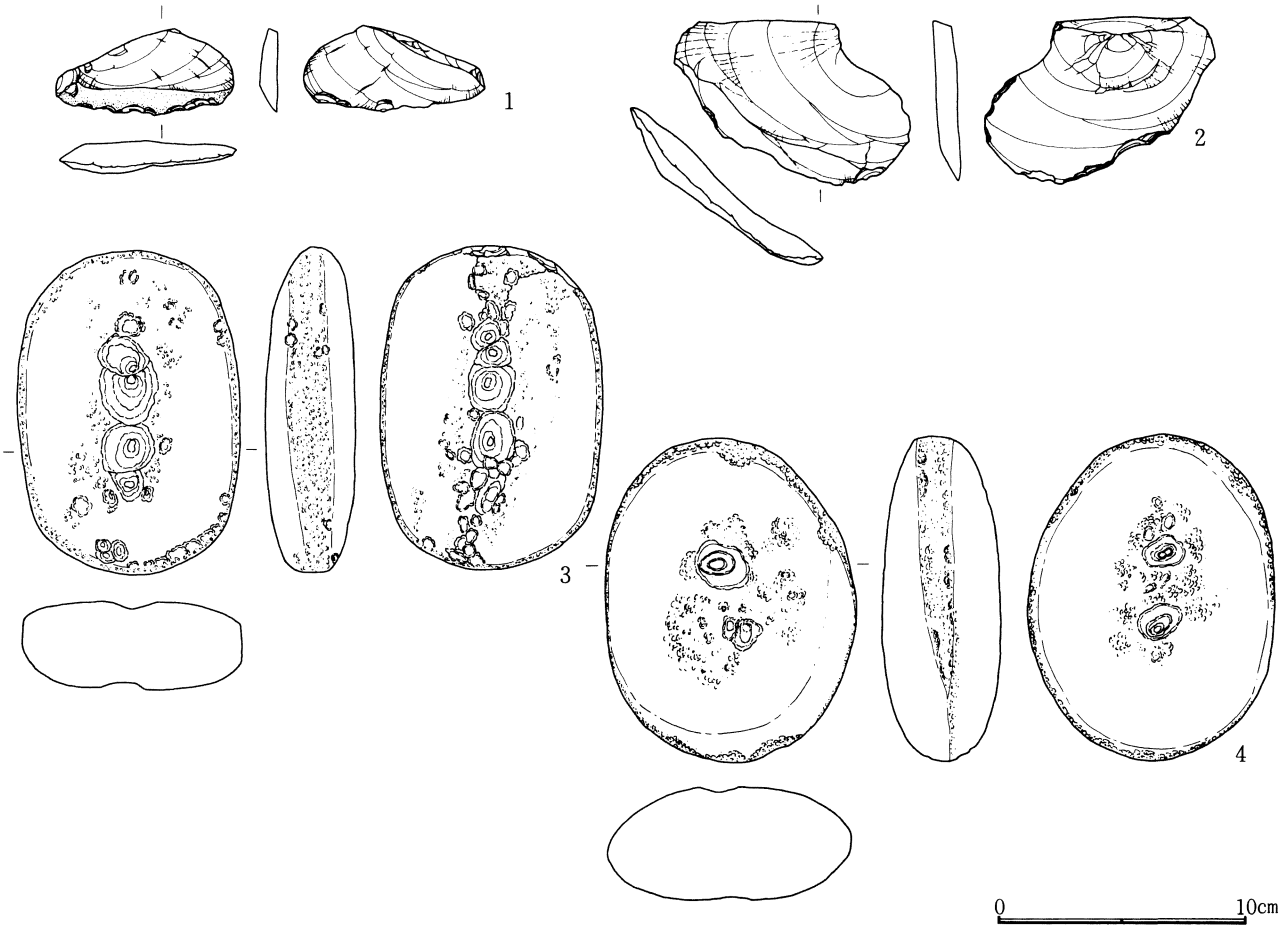
（井野）



図－161　Ｊ－７号住居跡平・断面図



図—162　J — 7 号住居跡出土土器



図—163　J—7号住居跡出土石器

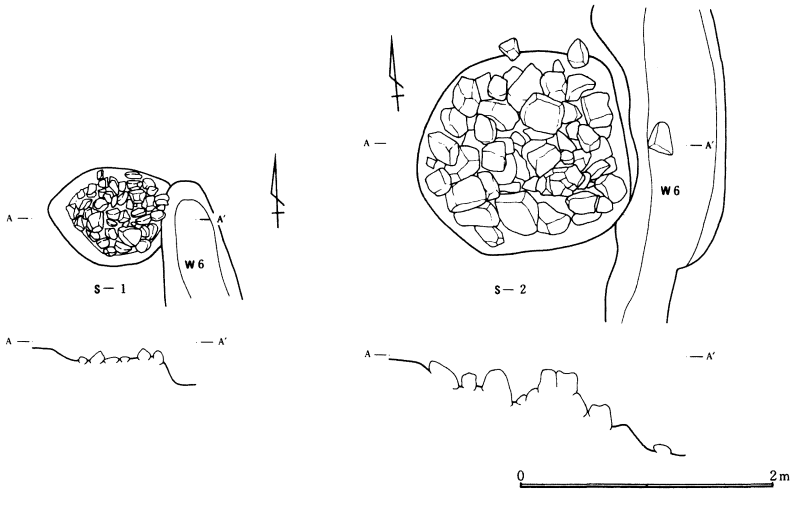
S—1号集石

位置　ネ—4。M—1北東部で重複。　**形状**　円形。規模南北60cm×東西80cm。掘り形は55×44cm。

M—1周堀内にかかっているが、この部分のみ周堀が掘り残された形になっている。出土レベルでみると削平後の古墳丘レベルに近い点からみても、後世に縄文遺物が混入した集石と考えられる。（井野）

S—2号集石

位置　ネ—4。M—1北東部で重複。　**形状**　円形。140cm×150cm。S—1同様の古墳削平後の集石と考えられる。（井野）



図—164　S—1・2集石平・断面図

ＪＰ－１号土坑

位置　調査区北東のヌ―15に位置する。Ｊ－２・3住居跡の中間に位置する。

形状　円形。浅い皿状の底面をもつ。規模は南北129×東西110cm。面積は0.72㎡である。深さは最大70cmを測る。長軸方向はＮ―15°―Ｅ。

（井野）

ＪＰ－２号土坑

位置　調査区南東のタ・レ－１区に位置する。Ｍ－６南周堀下より検出されている。

形状　長円形。東側に円形の落ち込みをもつ。規模は南北82×東西105cm。面積は0.33㎡、深さは最大33cmを測る。底面はほぼ平坦である。長軸方向はＮ―84°―Ｗ。

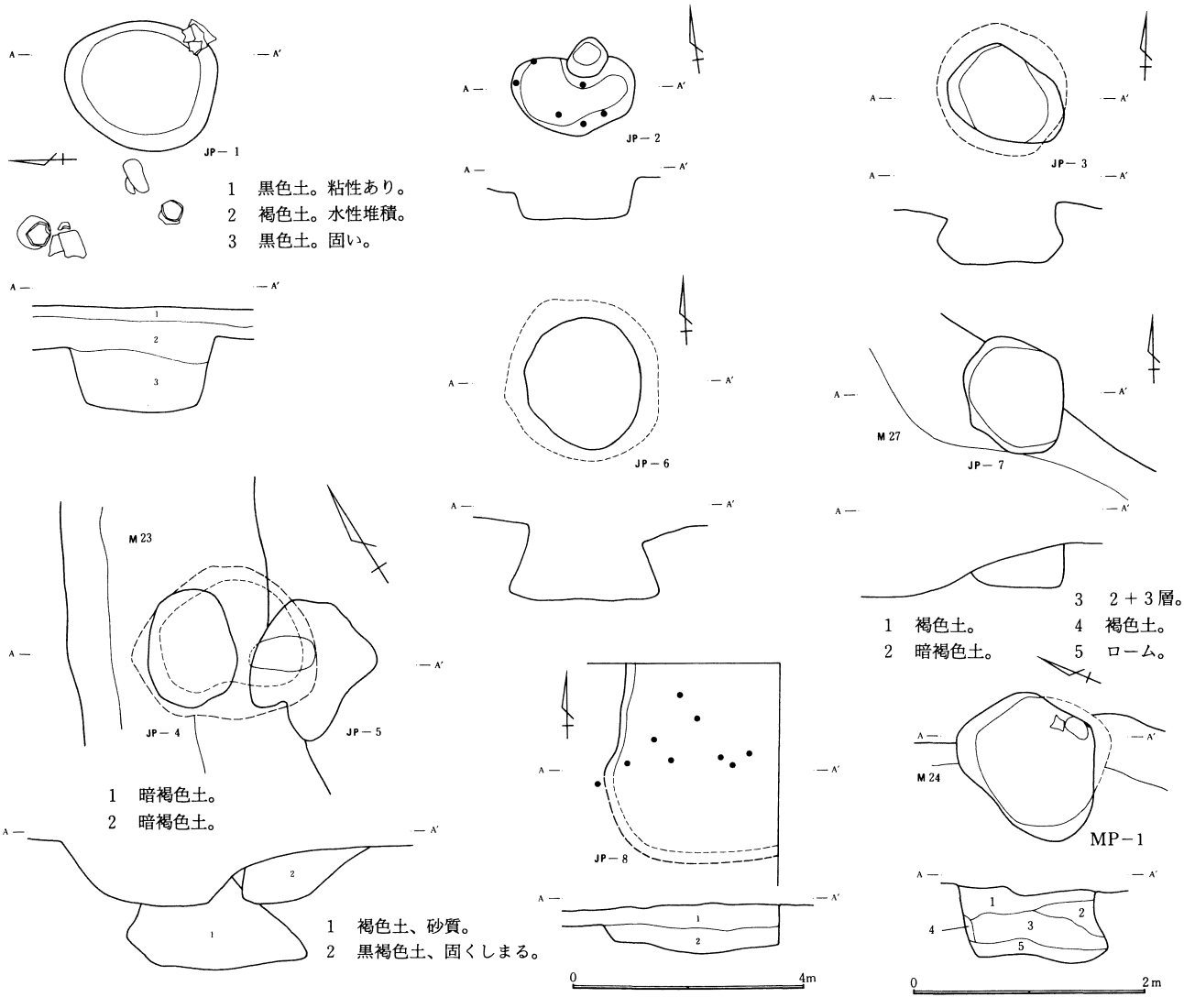
（井野）

ＪＰ－３号土坑

位置　調査区南東のタ－３に位置する。Ｍ―16北周堀下より検出されている。

形状　上面は円形。袋状の断面をもつ。規模は南北112×東西110cm。深さは最大55cmを測る。長軸方向はＮ―57°―Ｗ。

（井野）



図―165　JP―１～８号土坑平・断面図

ＪＰ－４号土坑

位置　調査区東中央のタ－５に位置する。M—23西周堀下より検出された。ＪＰ－５と接する。北にＪ－６・5、ＪＰ－６・7が位置する。

形状　上面は長円形である。断面でみると袋状を呈し、特に東側に大きくえぐれている。規模は上面が南北102×東西76cm、下面が132×158cm。深さは最大86cmを測る。

重複関係　ＪＰ－５と重複するが、地層断面図が欠けていて不明である。遺構の様子からみるとＪＰ－５が新しいか。

（井野）

ＪＰ－５号土坑

位置　調査区東中央のタ－５。ＪＰ－４と接する。

形状　上面は不整形で南北120×東西108cm。下は南北30×東西55cm。深さは最大59cmを測る。形状からみると自然の根跡とも考えられる。

（井野）

ＪＰ－６号土坑

位置　調査区東中央のレ－５に位置する。Ｊ－５、ＪＰ－７が近くに位置する。

形状　上面は円形で、断面は袋状を呈す。底面は円形で平坦。規模は上面が南北113×99cm。下面は南北140×130cm。埋土には炭化物が含まれている。貯蔵穴か。

（井野）

ＪＰ－７号土坑

位置　調査区東中央のタ－５区に位置する。M—27墳丘下より検出された。

形状　円形。南北100×東西85cm。深さは最大57cmを測る。

（井野）

ＪＰ－８号土坑

位置　調査区北西のル—16。Ｊ－４の北東に位置する。完掘ではない。

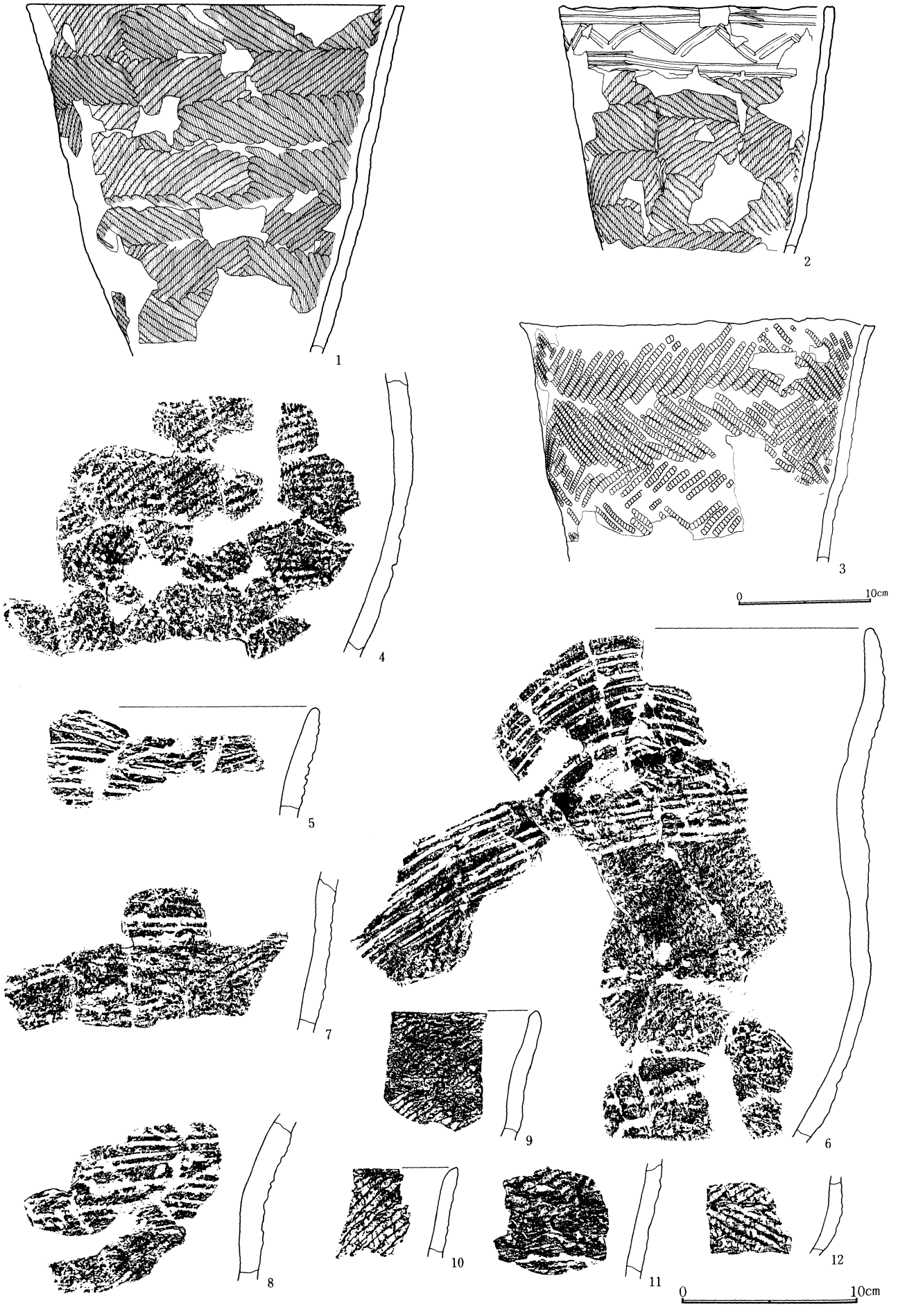
形状　部分掘である。現状では方形。規模は現状で南北342×304cm。現壁高は56cmである。住居跡に近い規模をもつＪＰとも考えられる。

（井野）

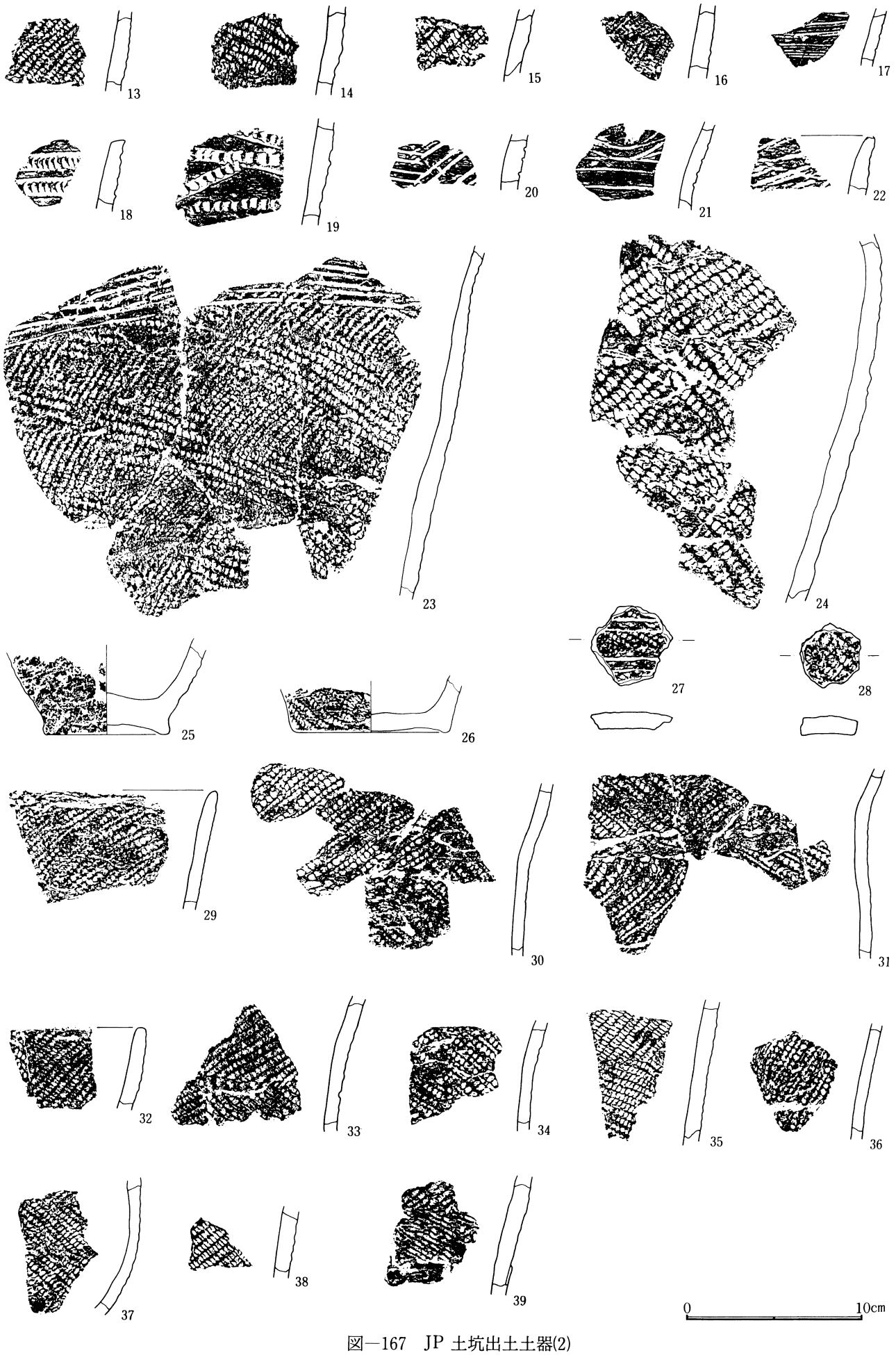
ＭＰ－１号土坑

位置　レ－５。M—24北東周堀と重複する。　**形状**　円形。袋状の断面をもつ。上面は120×108cm、下面は112×100cm深さは70cmである。　**埋土**　古墳の地山を切りこんでいるが、上層に古墳周堀と同じ土層の堆積がみられる。古墳形成以前のもの。古墳期初期のものか。埋土は炭化物、焼土が含まれ、中位層に石と土器が多く検出されている。

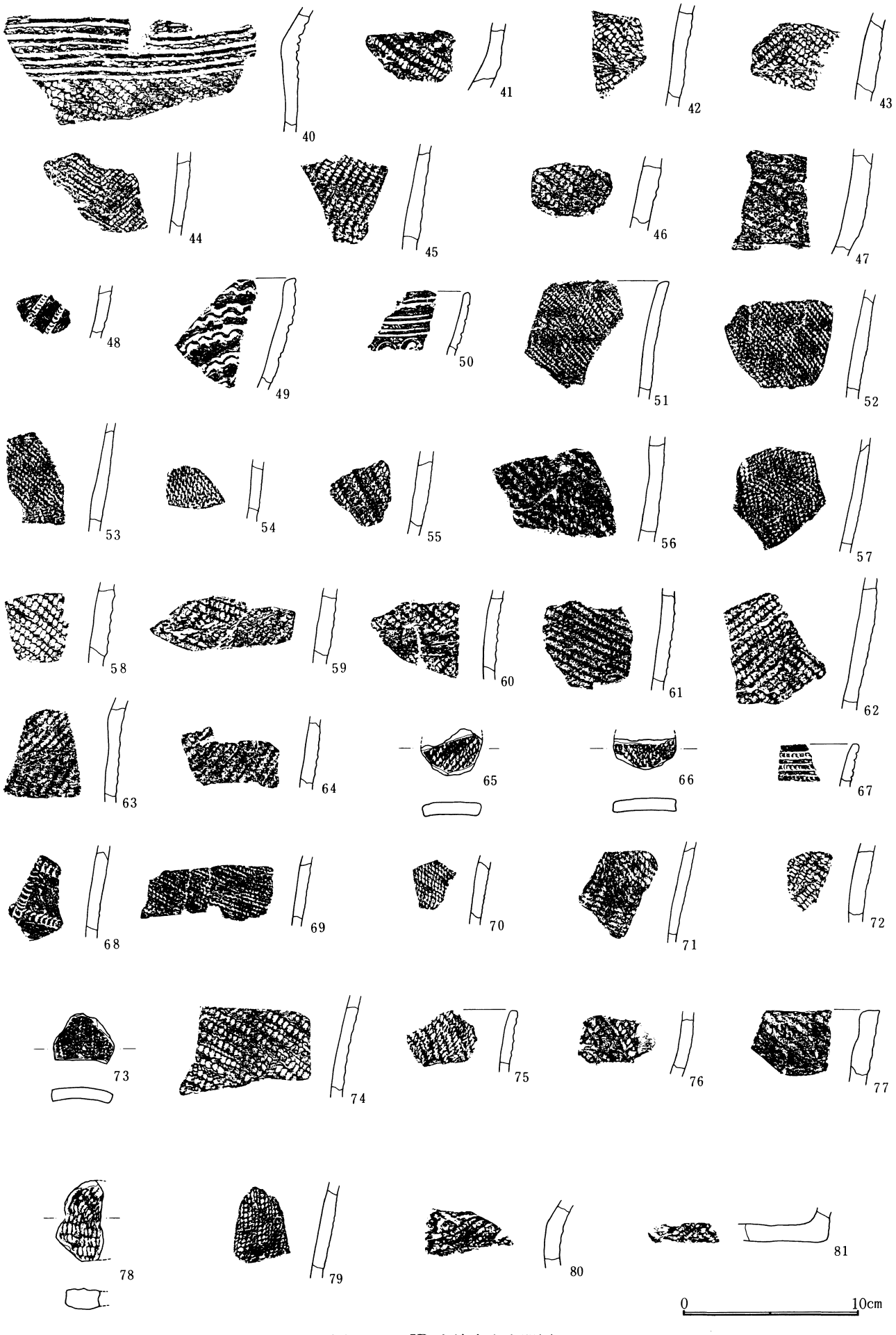
（井野）



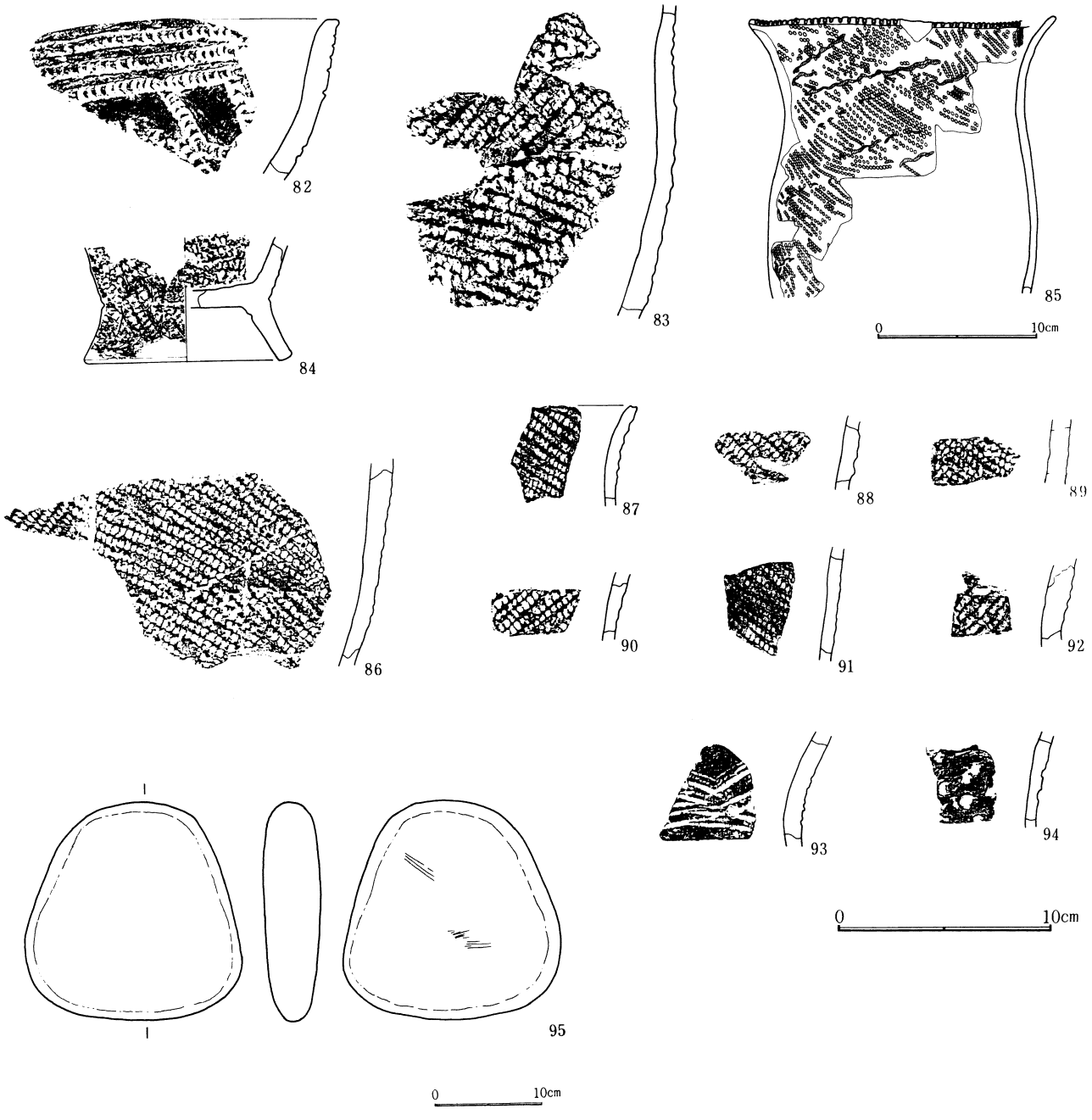
図—166　JP 土坑出土土器(1)



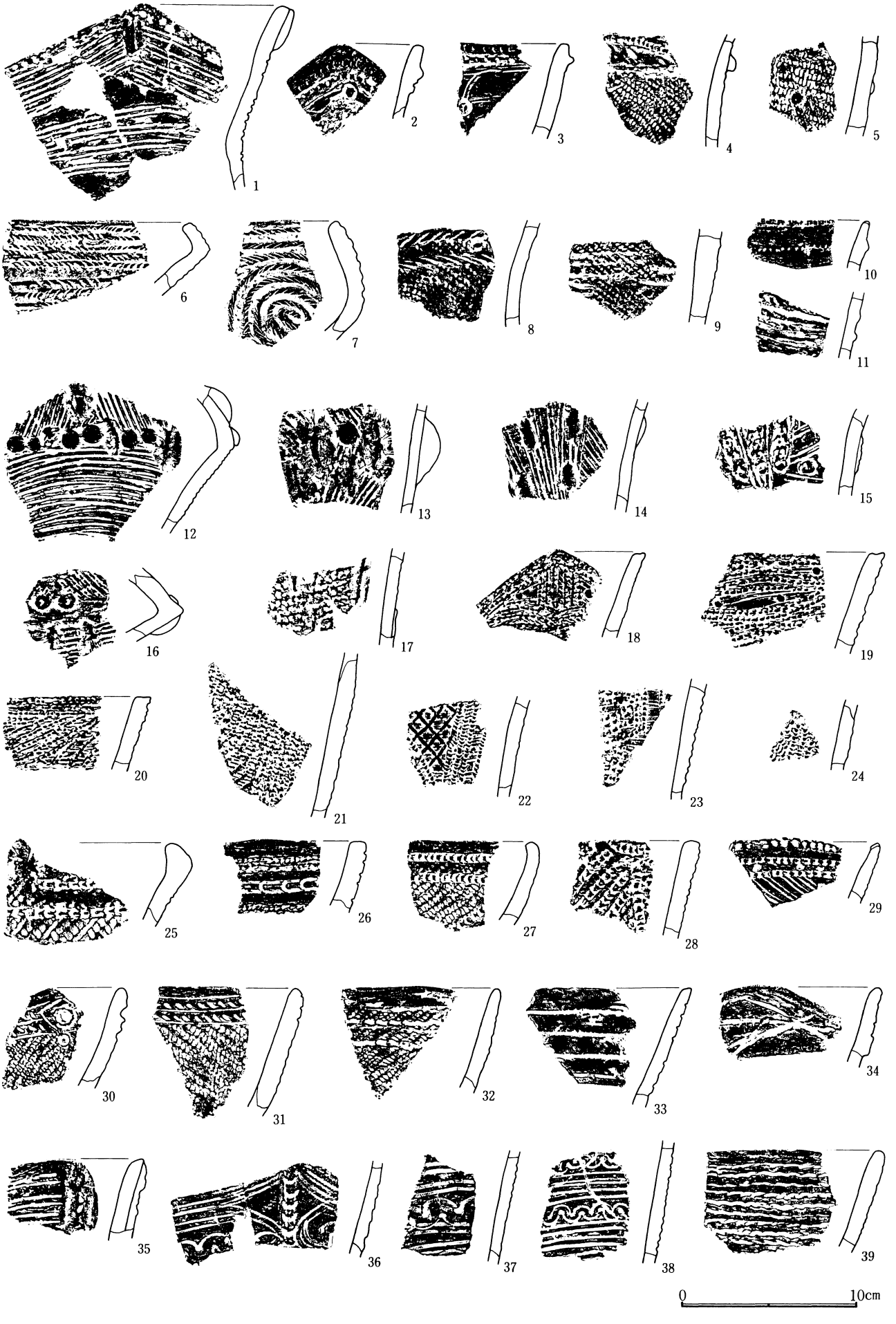
図—167　JP 土坑出土土器(2)



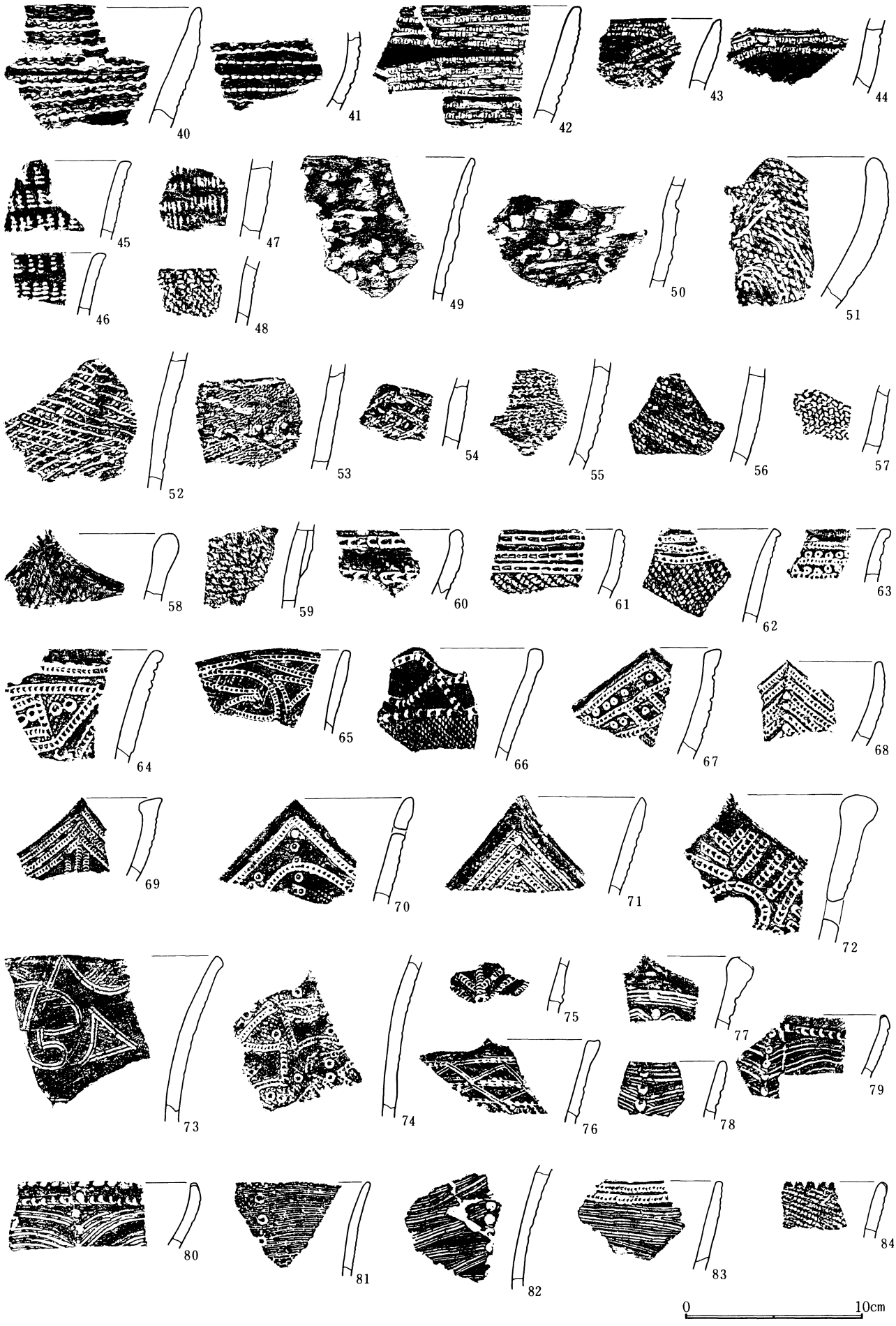
図—168　JP 土坑出土土器(3)



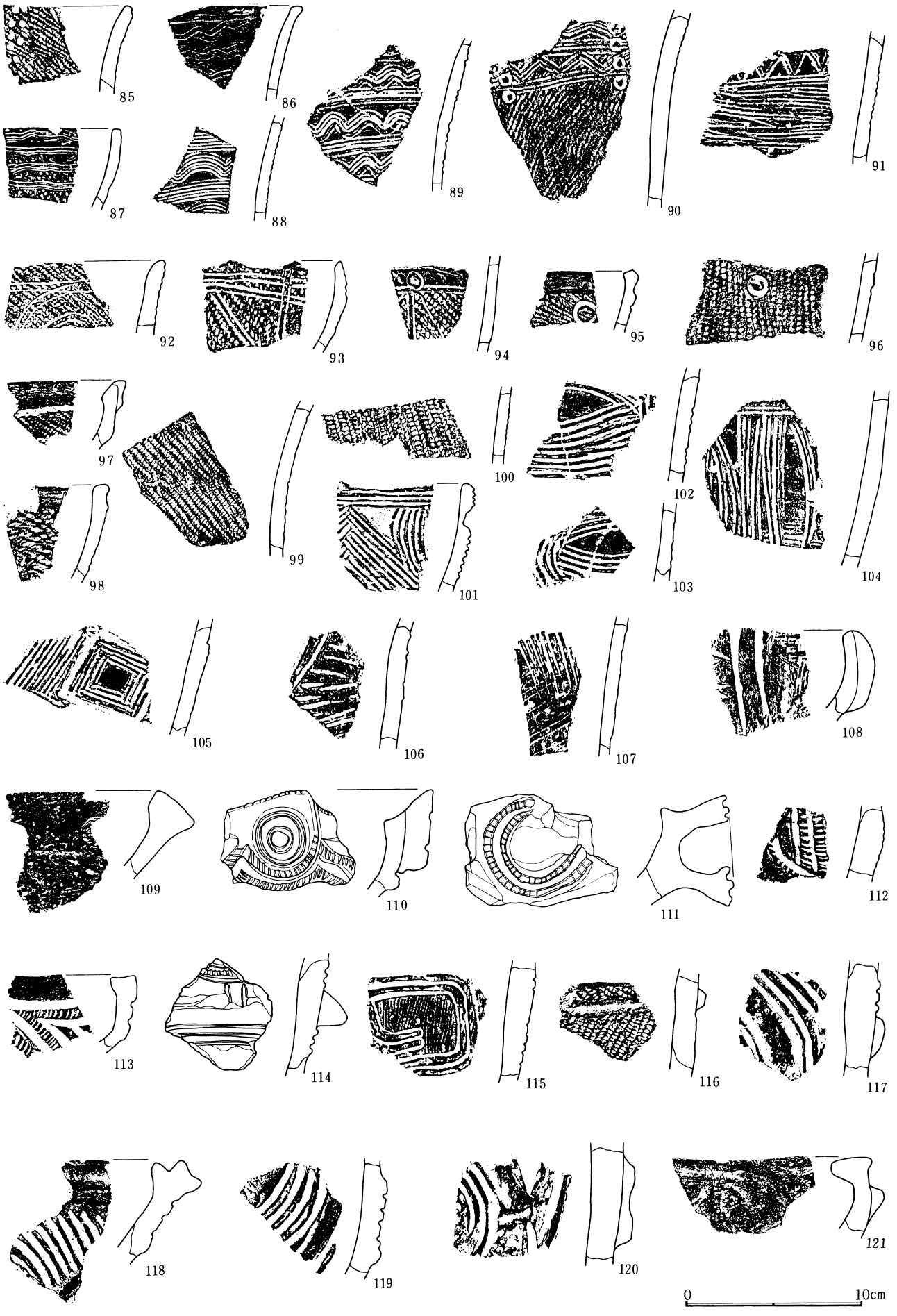
図—169　JP 土坑出土土器(4)・石器



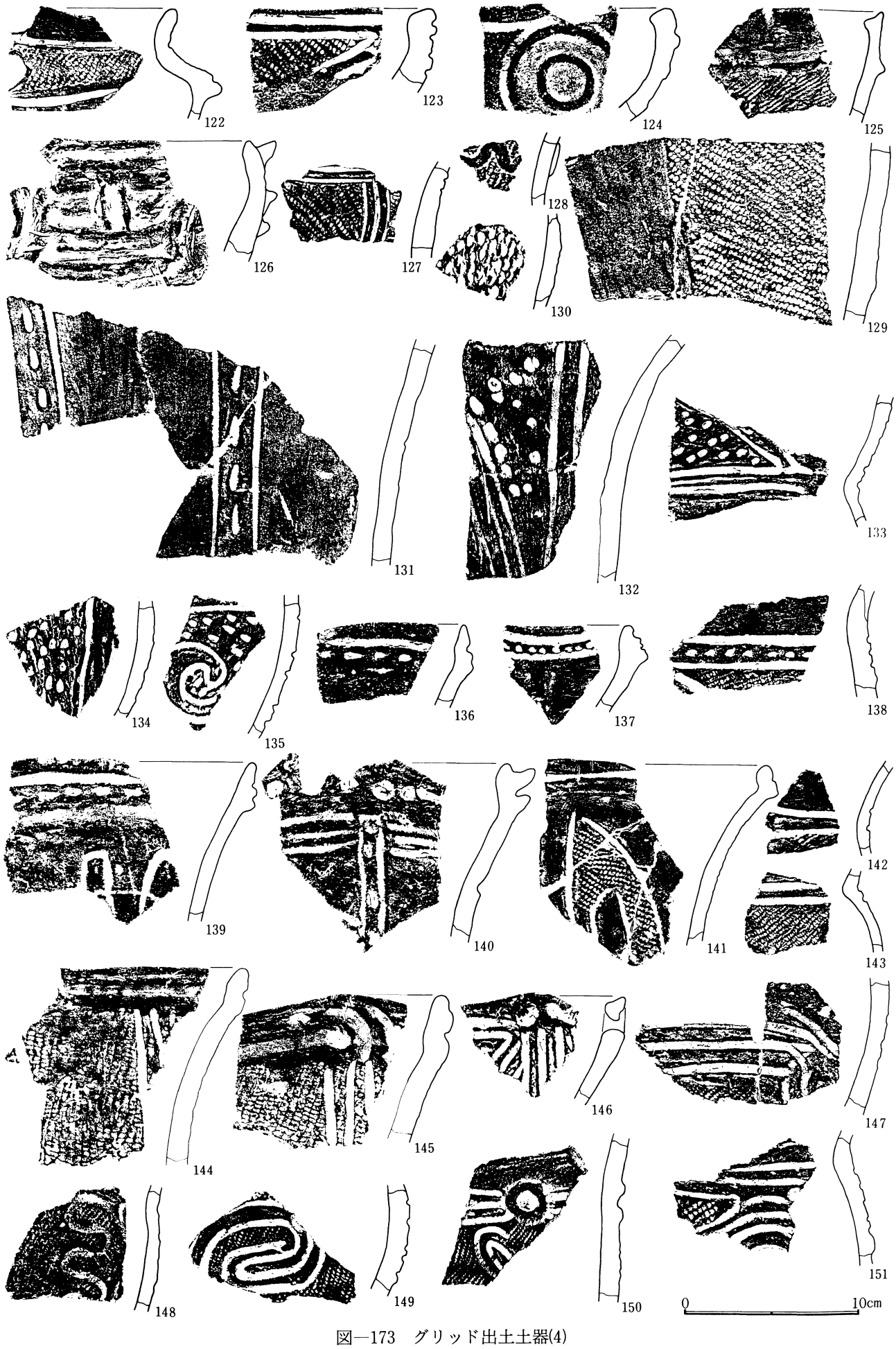
図—170　グリッド出土土器(1)



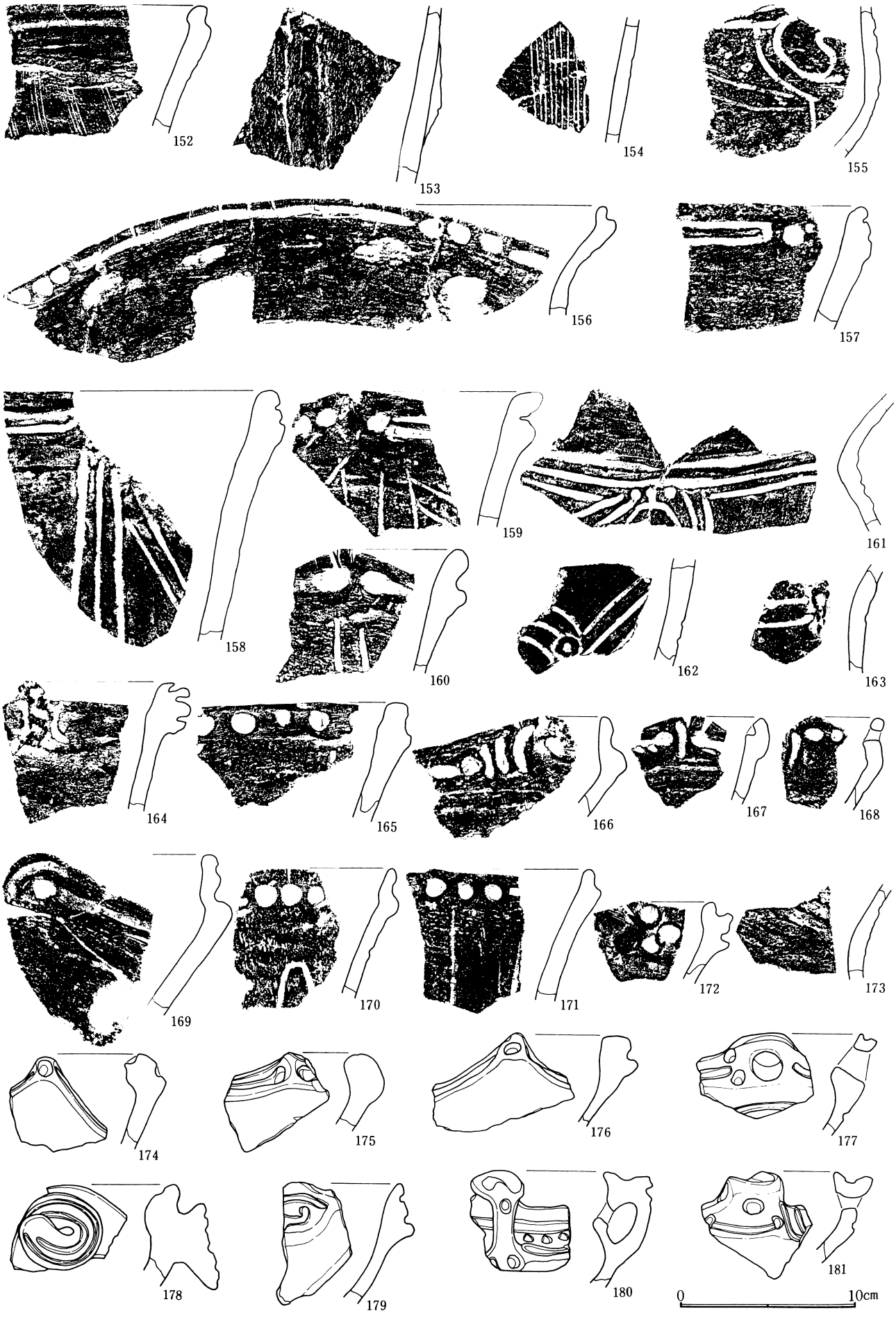
図—171　グリッド出土土器(2)



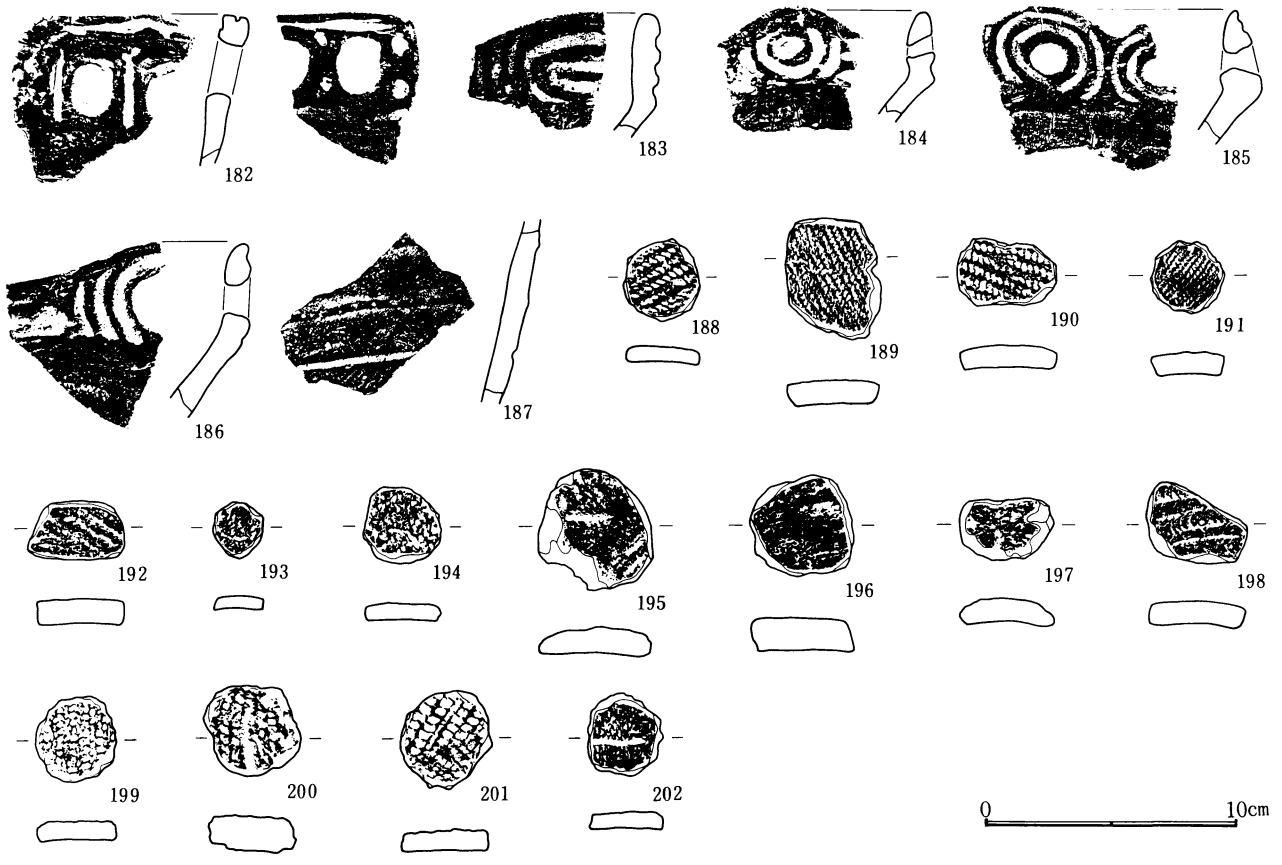
図—172　グリッド出土土器(3)



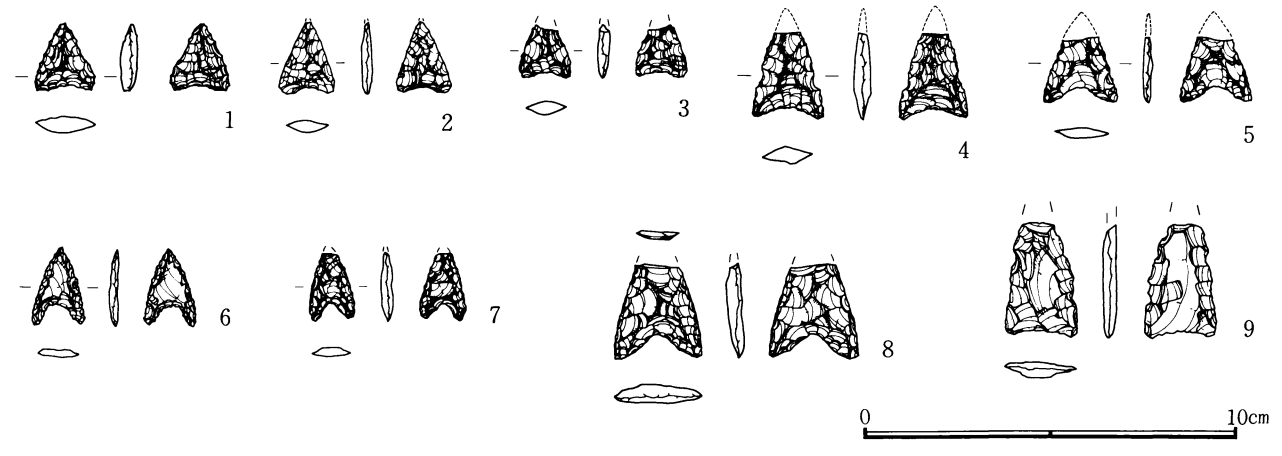
図—173　グリッド出土土器(4)



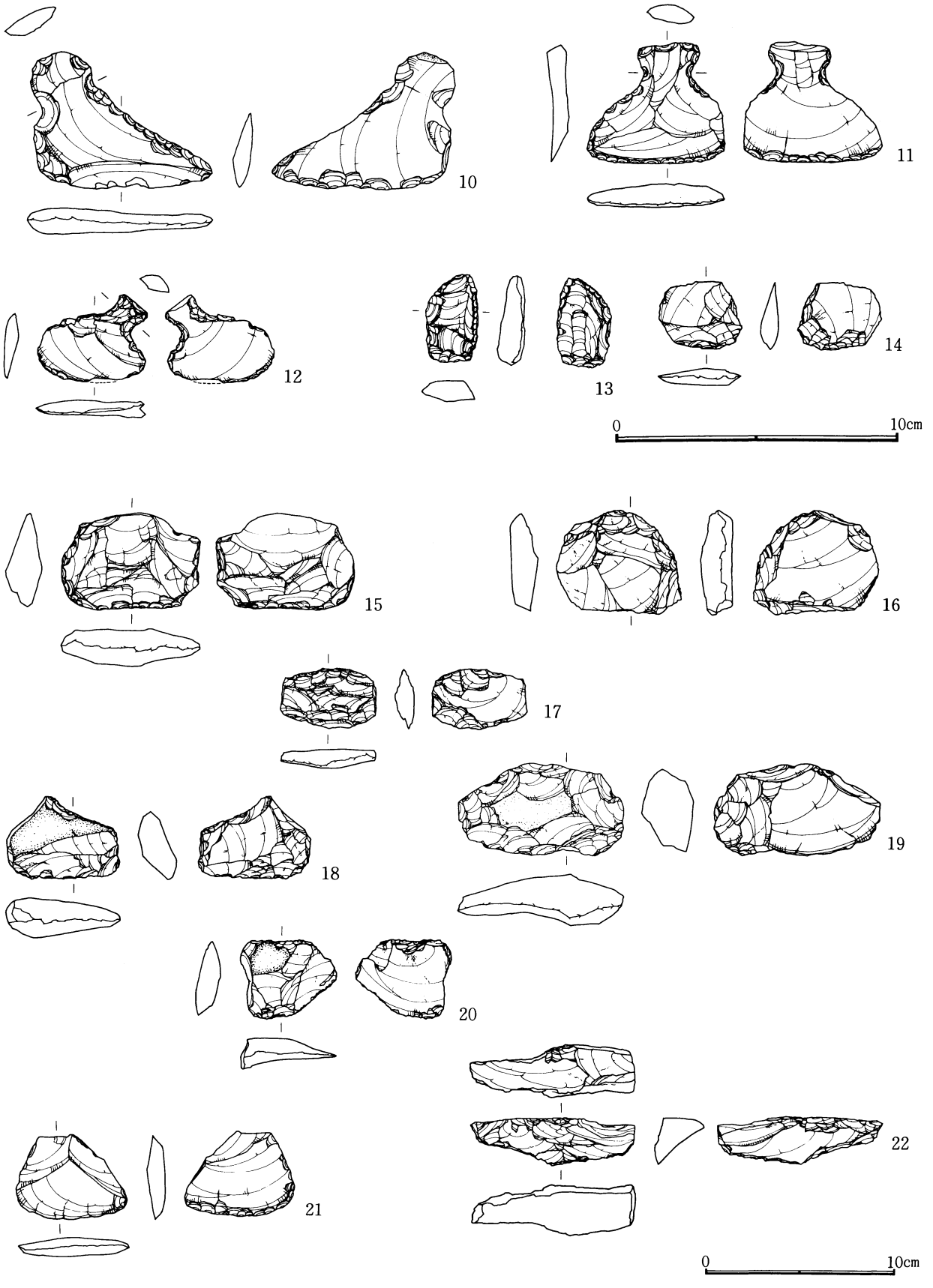
図—174　グリッド出土土器(5)



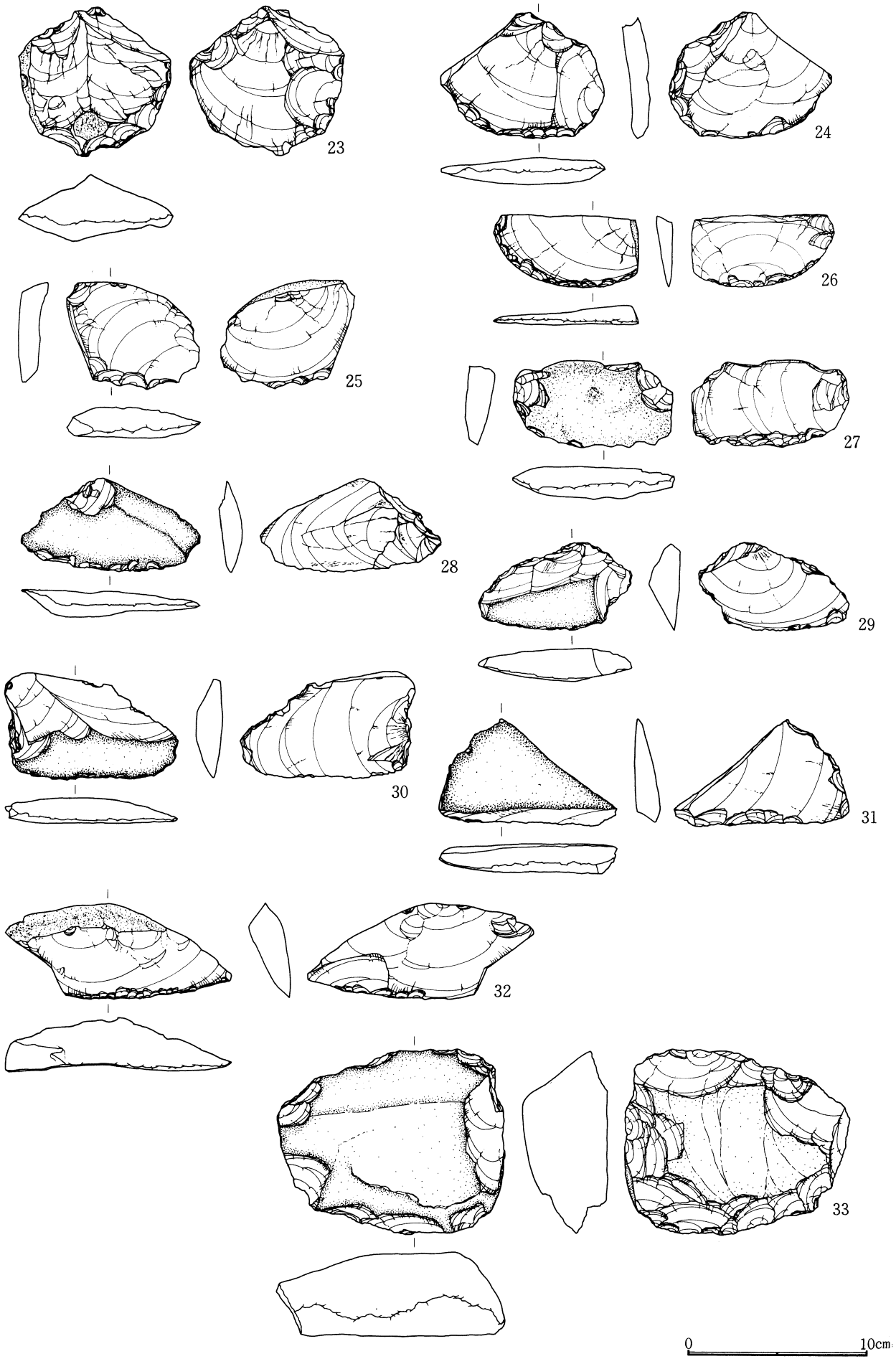
図—175　グリッド出土土器(6)



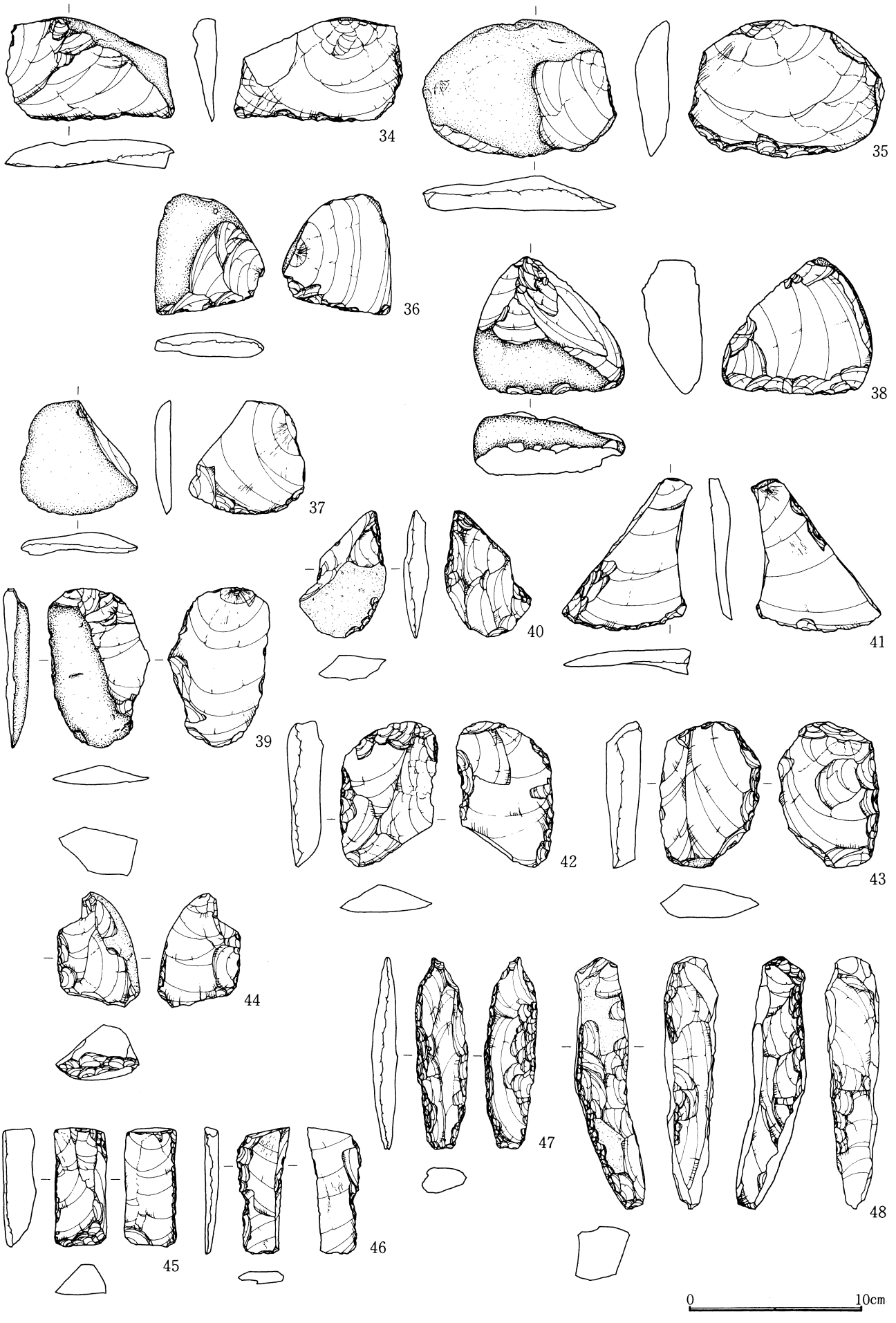
図—176　グリッド出土石器(1)



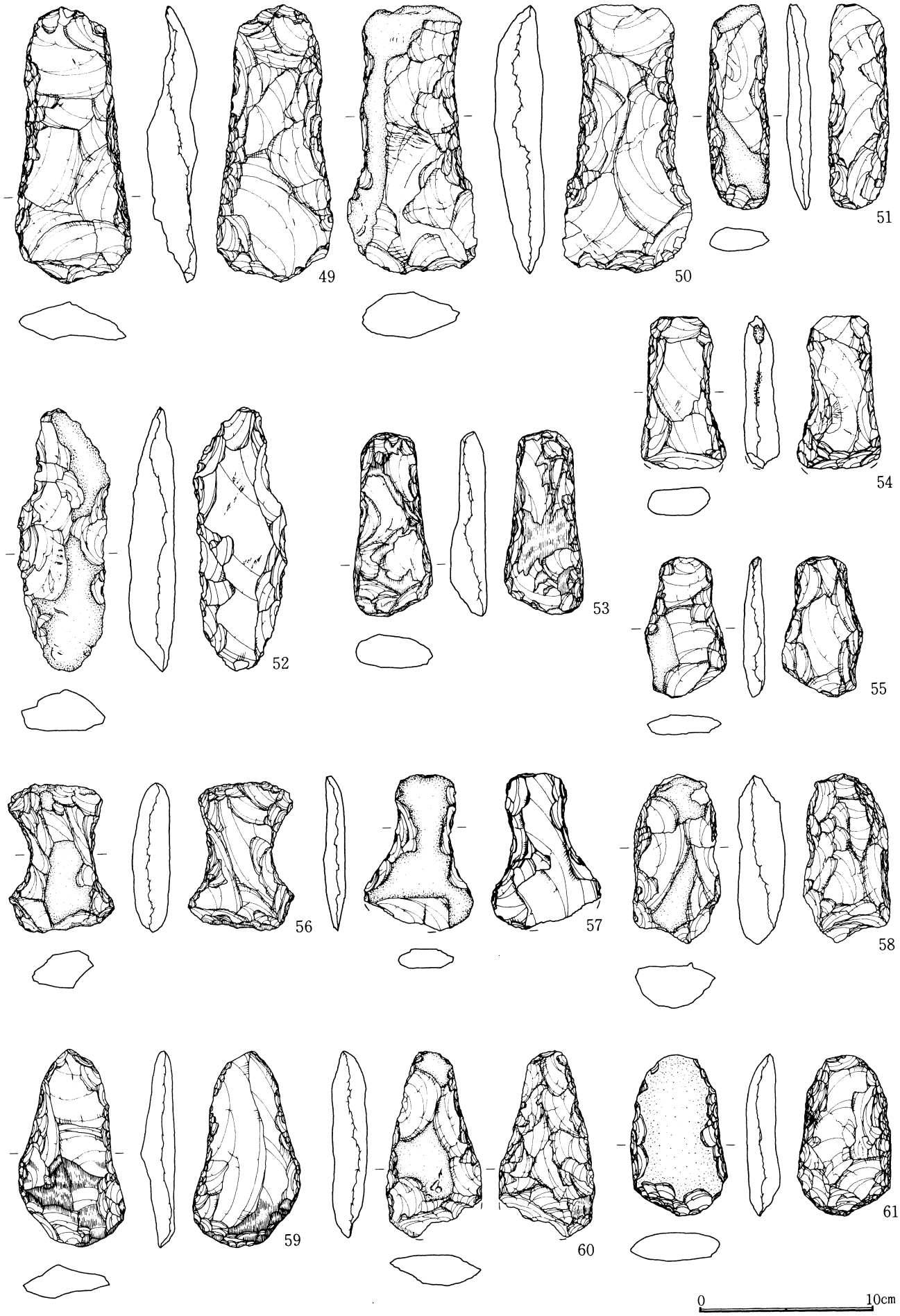
図—177　グリッド出土石器(2)



図—178　グリッド出土石器(3)

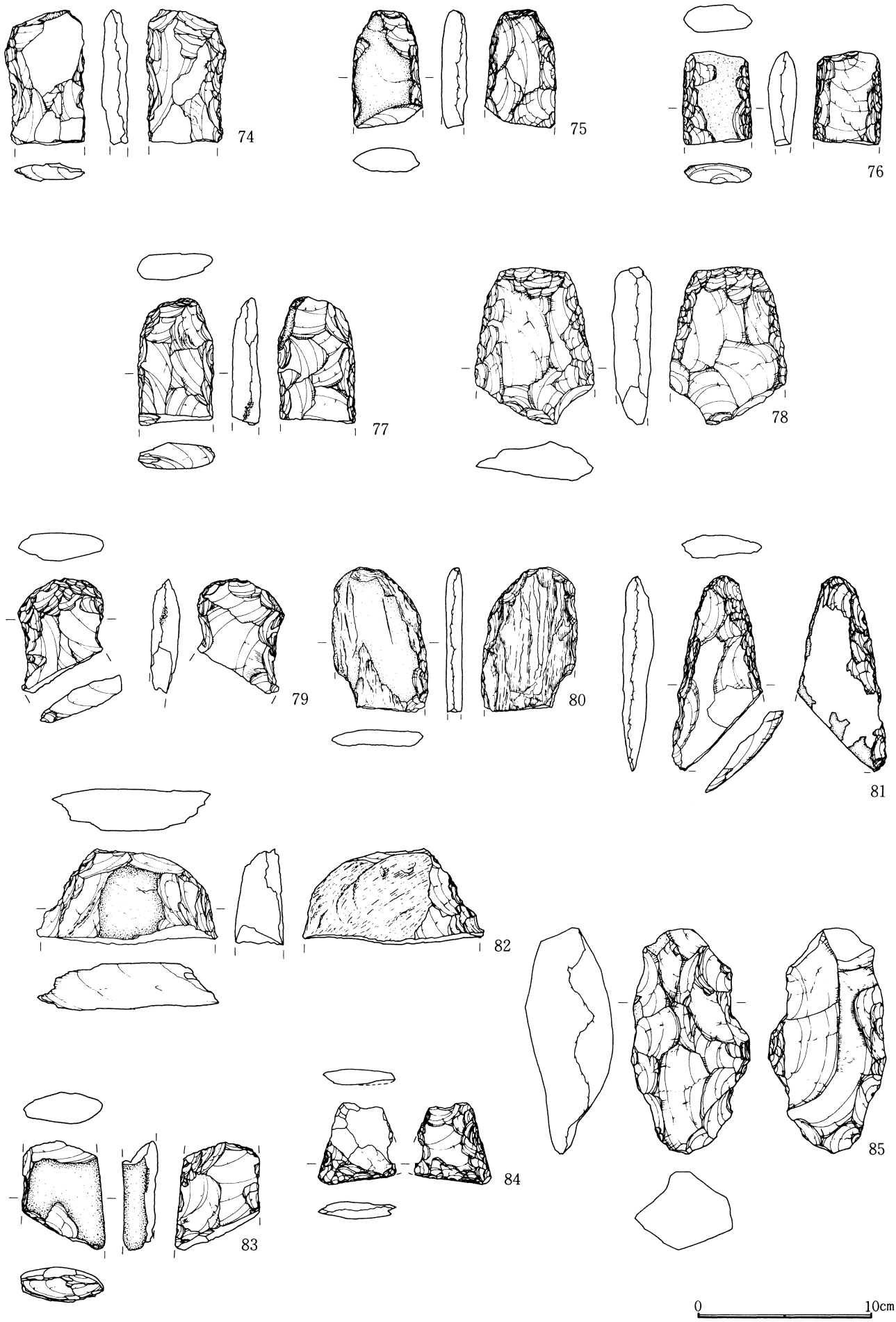


図—179　グリッド出土石器(4)



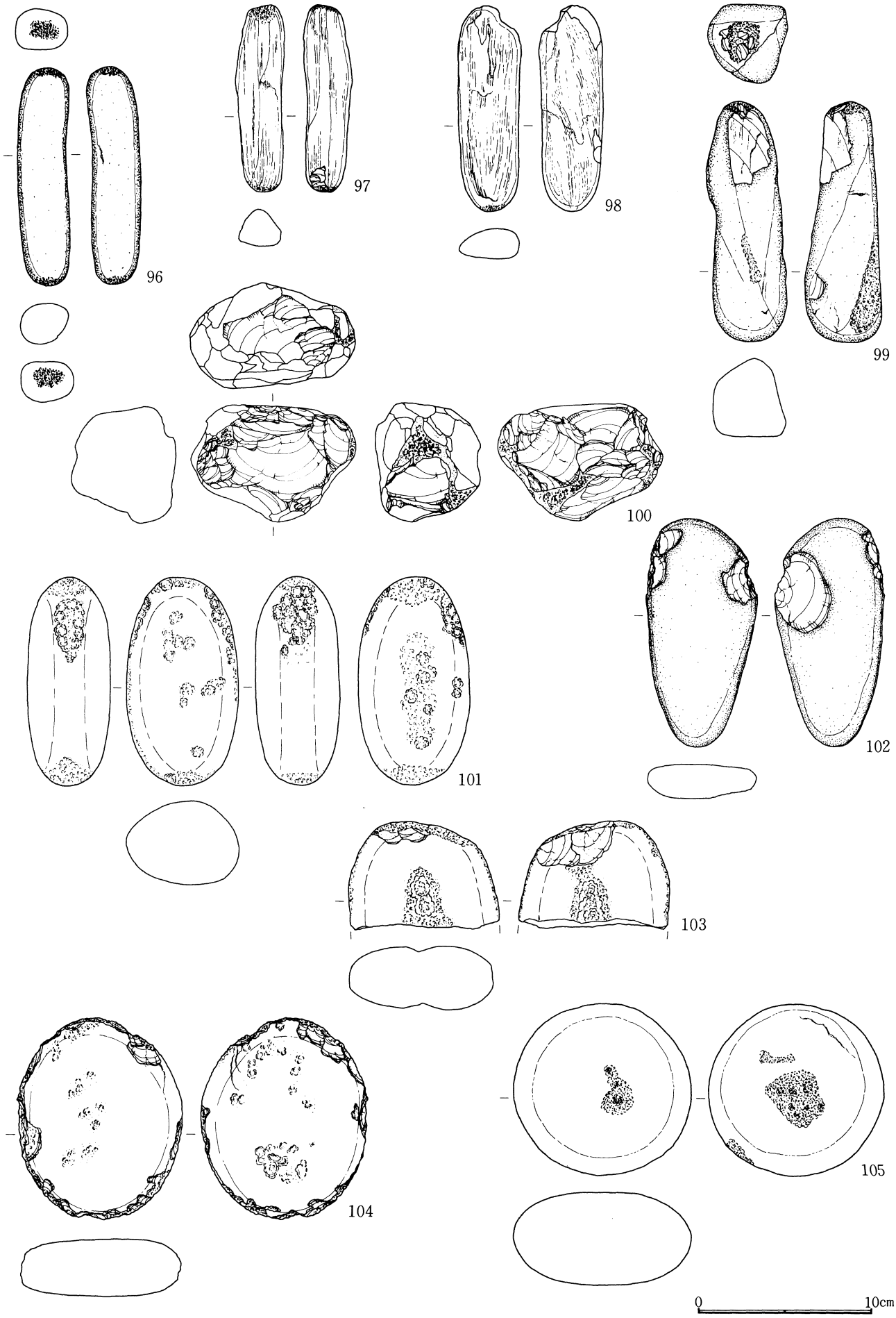
図—180　グリッド出土石器(5)

図—181　グリッド出土石器(6)

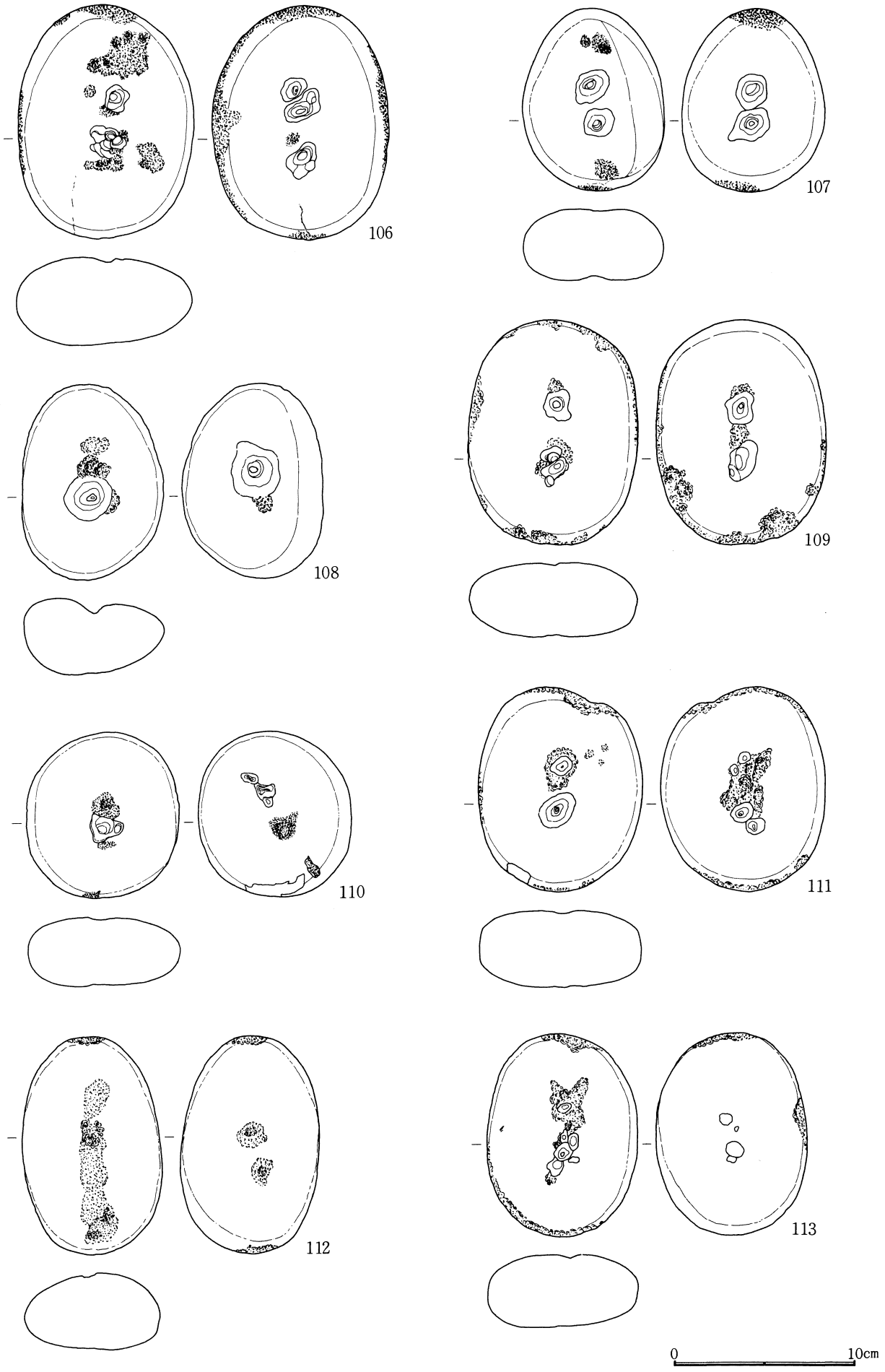


図—182　グリッド出土石器(7)

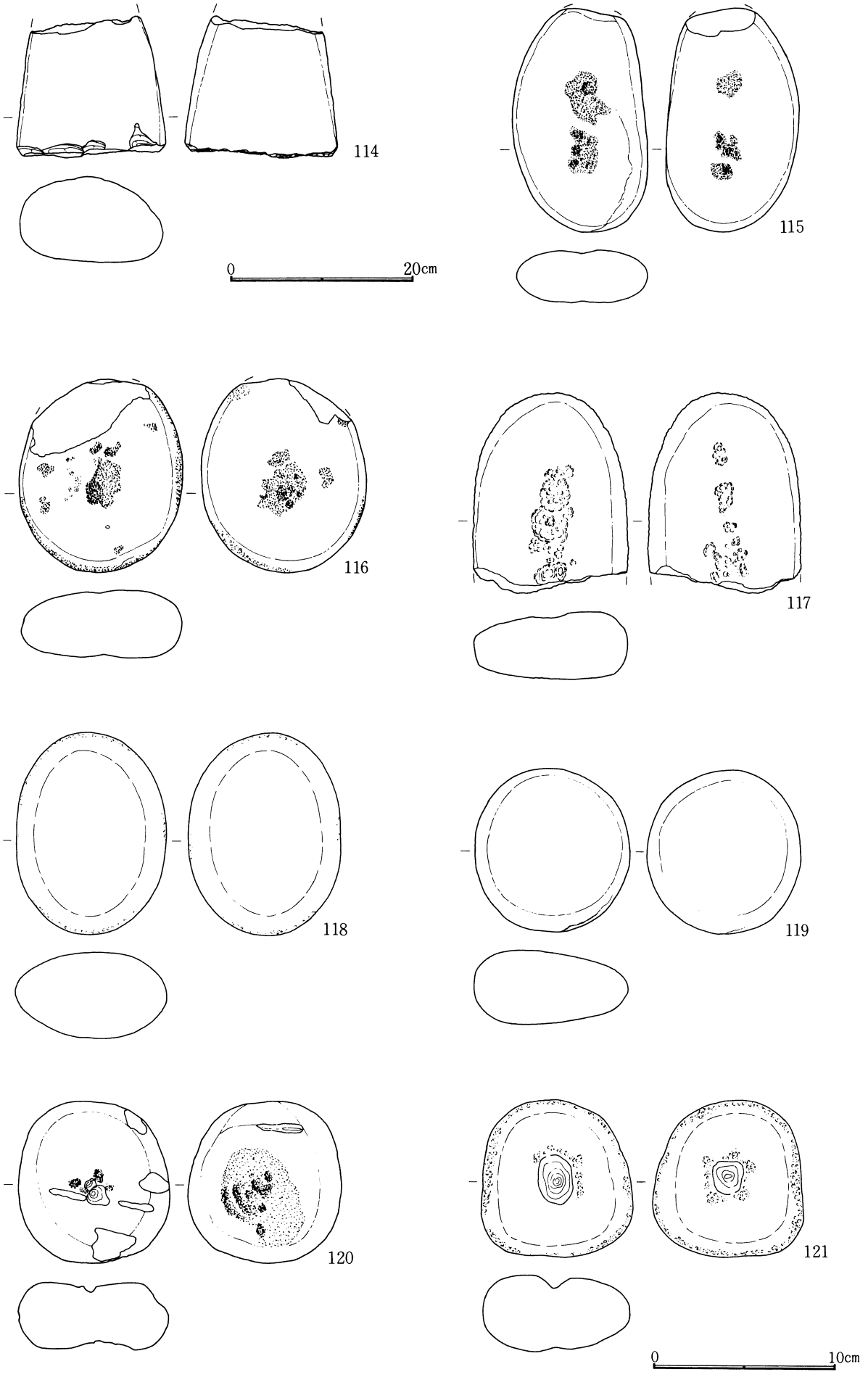
図—183　グリッド出土石器(8)



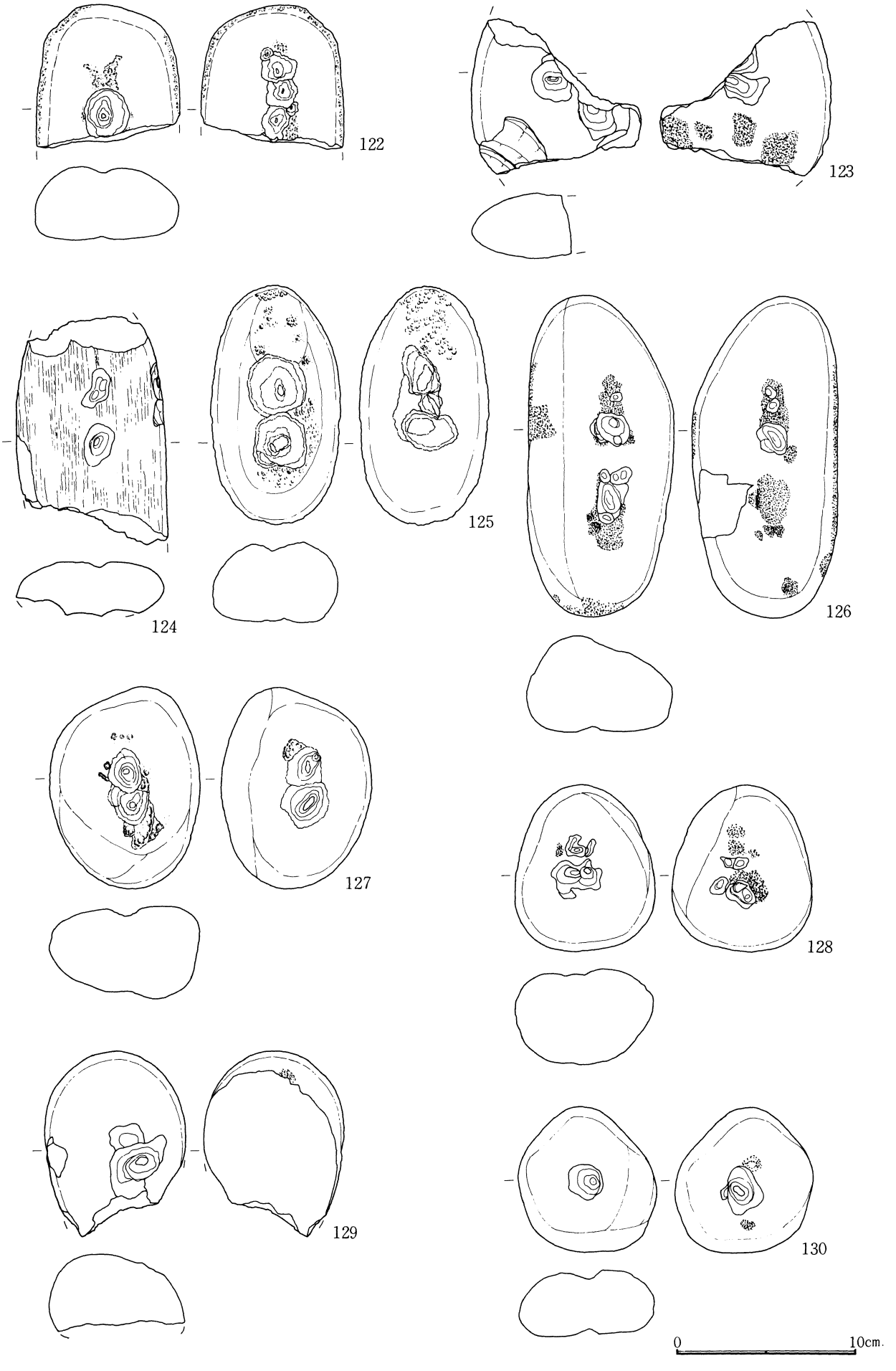
図—184　グリッド出土石器(9)



図—185　グリッド出土石器(10)

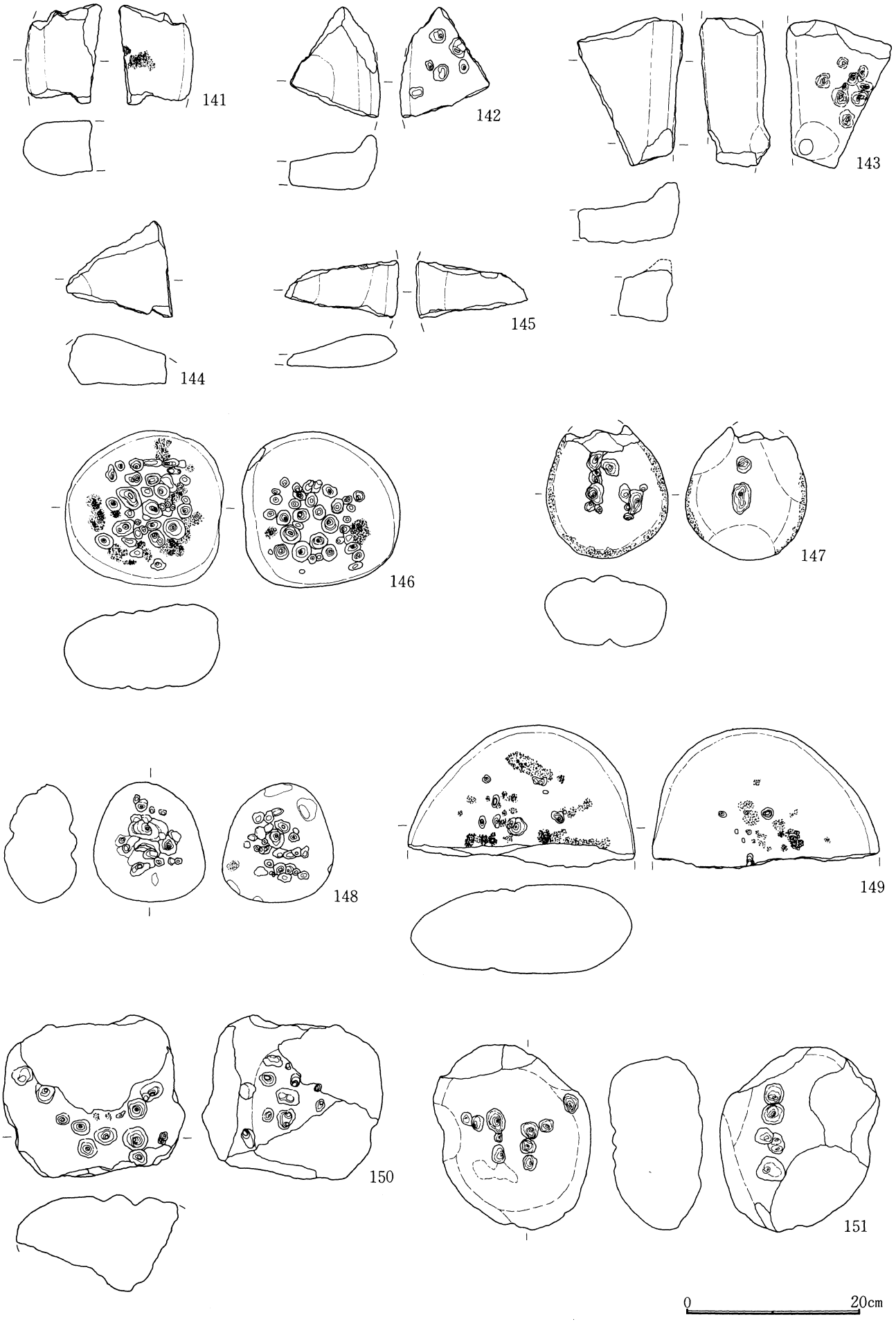


図—186　グリッド出土石器(11)

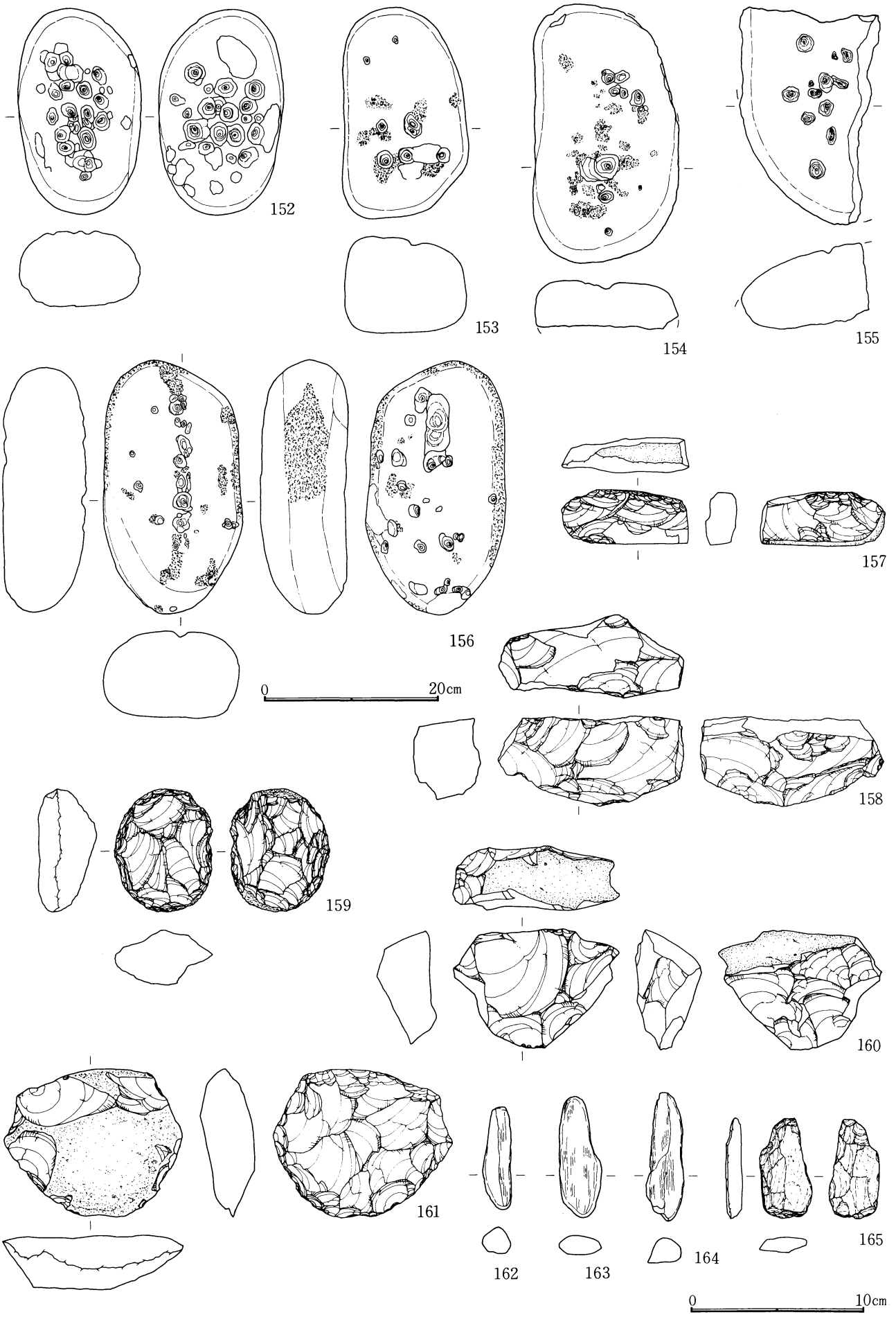


図—187　グリッド出土石器(12)

図—188　グリッド出土石器(13)



図—189　グリッド出土石器(14)



図—190　グリッド出土石器(15)

表－2　出土遺物観察表　　埴輪

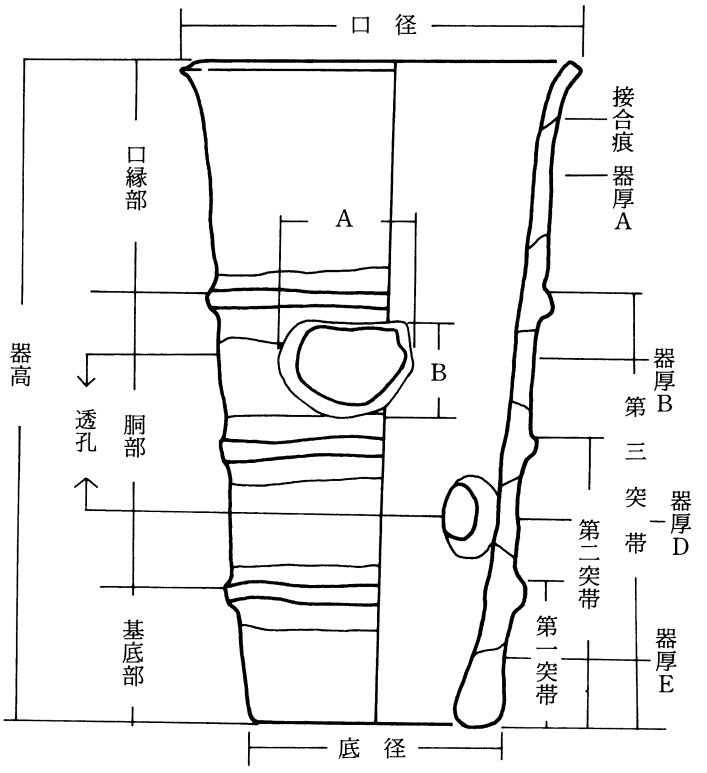
埴輪観察表　基準

形態
- A　円筒埴輪
- B　朝顔型円筒埴輪
- C　形象埴輪

胎土
- 細砂粒含
- 微砂粒含
- 精砂粒含
- 粗砂粒含
- 小石含

焼成
- 良好
- 普通
- 不良

色調――標準土色帖　昭和45年版による



図－191　円筒埴輪部位名称基準図

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
1	M－11	A	3.2			1.6						—	赤橙 10R 6/6	微砂粒含 小石含	普通	
2	M－12	A	3.9			0.8						—	にぶい橙 7.5YR 7/4	微砂粒含 小石含	良好	
3	M－13	A	5.0			1.2						12	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
4	M－14	A	6.9			1.1						7	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
5	M－15	A	5.4			0.9						5～6	浅黄橙 10YR 8/3	小石含 微砂粒含	普通	
6	M－16	A	5.0			1.4						—	橙 2.5YR 6/8	微砂粒含 小石含	良好	
7	M－17	A	4.0			0.9						5	橙 5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
8	M－18	A	4.9			0.9						—	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
9	M－19	A	3.3			0.8						5	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
10	M－110	A	3.8			0.9						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	普通	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
11	M－1 11	A	4.7			1.0						5	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	普通	
12	M－1 12	A	2.2			1.2						—	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
13	M－1 13	A	5.8			1.1						19	橙 5YR 7/6	細砂粒含 小石含	良好	
14	M－1 14	A	4.0			1.0						12	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
15	M－1 15	A	4.0			1.0						7	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
16	M－1 16	A	3.7			1.0						8	橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
17	M－1 17	A	4.0			1.4						12	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
18	M－1 18	A	3.2			1.7		右				—	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 細砂粒含	良好	
19	M－1 19	A	5.2			1.7						—	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 細砂粒含	良好	
20	M－1 20	A	2.8			0.9		右				—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
21	M－1 21	A	3.2			1.4						—	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 微砂粒含	良好	
22	M－1 22	A	2.5			1.2						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
23	M－1 23	A	3.9			1.1						—	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
24	M－1 24	A	3.8			1.4						9	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
25	M－1 25	A	5.9			1.0						8	橙 7.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
26	M－1 26	A	4.5			—						14	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
27	M－1 27	A	5.5			1.7~2.2						13	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 細砂粒含	普通	
28	M－1 28	A	3.5			1.8						16	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
29	M－1 29	A	18.2			B1.3 C1.7		右	9.8			7	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
30	M－3 1	A	2.6			0.8						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
31	M－3 2	A	3.0			1.5						7	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
32	M－33	A	4.4			2.3						—	橙 5YR 7/8	小石含 細砂粒含	良好	
33	M－41	A	現 25.6	27.6	—	A1.3 B1.3		A6.8 右 B6.5	—	—	0.9 0.8	8～9	橙 2.5YR 6/6	砂粒含密	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位、縦位指撫で
34	M－42	A	現 25.5	25.6	—	1.2		A7.1 左 B －			1.1 0.6	8～10	明赤褐 2.5YR 5/8	微砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
35	M－43	B	59.8	38.5	13.5	A0.9 B1.1 C1.3 D1.1 E1.0 F1.6		A6.6 左 B5.7	16.0		0.6～1.0 0.5～0.8	5～6	橙 2.5YR 7/6	φ0.2mm 白色軽・小石含	普通	外面刷毛目 内面口縁刷毛目、胴部縦位指撫で
36	M－44	A	13.2			1.2						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
37	M－45	A	5.7			0.9						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
38	M－46	A	7.5			1.0						9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	良好	
39	M－47	A	5.1			0.9						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
40	M－48	A	6.7			1.1						10	橙 5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
41	M－49	A	7.3			10		右				8	にぶい橙 5YR 7/4	粗砂粒含 小石含	良好	
42	M－410	A	5.8			1.2		右				9	灰褐 5YR 6/2	小石含 粗砂粒含	良好	
43	M－411	A	6.4			1.4						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
44	M－412	A	6.4			1.0						7	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
45	M－413	B	9.9			0.8～1.3		左				15	橙 5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	46と接合
46	M－414	B	7.1			1.3						17	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
47	M－415	A	5.7			1.2						7	橙 7.5YR 7/6	粗砂粒含 小石含	良好	
48	M－416	A	5.0			1.3		右カ				7	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
49	M－417	A	5.5			1.5						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
50	M－418	A	16.5			1.8						8	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	良好	
51	M－419	A	16.4			1.0						7	にぶい橙 10YR 7/3	小石含 粗砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
52	M－5 1	A	5.0			1.0						7	にぶい赤褐 2.5YR 5/3	小石含 微砂粒含	良好	
53	M－5 2	A	8.8			1.1						8	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
54	M－5 3	A	7.5			1.4						8	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
55	M－5 4	A	3.2			0.8						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
56	M－5 5	A	8.3			1.3						7～8	橙 2.5YR 7/8	小石含 微砂粒含	良好	
57	M－5 6	A	6.0			1.4						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
58	M－5 7	A	6.3			1.2						5	橙 2.5YR 6/8	小石混 微砂粒含	良好	
59	M－5 8	A	4.0			1.6						7	橙 2.5YR 7/6	粗砂粒含 小石含	良好	
60	M－5 9	A	5.0			1.1						7	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
61	M－5 10	A	6.0			0.9						7	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含 小石含	良好	
62	M－5 11	A	16.0			0.9～1.5		一右				8	橙 2.5YR 6/8	微砂粒含 小石含	良好	
63	M－5 12	A	5.3			1.4						8	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含 小石含	良好	
64	M－5 13	A	8.5			1.0						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
65	M－5 14	A	6.0			1.0						7	橙 7.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
66	M－5 15	A	7.7			1.5						6～7	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
67	M－5 16	A	9			1.3						8	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
68	M－5 17	A	8.8			1.3						9	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
69	M－5 18	A	11.3			1.2						9	橙 2.5YR 6/6	小石混 微砂粒含	良好	
70	M－5 19	B	16.0			1.2～1.3						15	橙 5YR 6/6	小石混 微砂粒含	良好	
71	M－5 20	A	11.5			1.1～1.3		左				18	にぶい橙 5YR 6/4	小石混 粗砂粒含	良好	
72	M－5 21	A	8.7			1.1～1.4						14	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 粗砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
73	M－5 22	A	5.9			1.1		— 右				15～16	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石混 微砂粒含	良好	
74	M－5 23	A	4.8			1.3						16	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石混 微砂粒含	良好	
75	M－5 24	A	4.4			1.5						16	橙 5YR 6/6	微砂粒含 小石含	良好	
76	M－5 25	A	8.9			2.0						9	橙 5YR 7/6	小石混 微砂粒含	良好	
77	M－5 26	A	5.2			1.4						8	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
78	M－6 1	A	32.6	26.0	11.6	0.9～1.4 A0.7 B1.3 C1.6		A7.0 B6.3 右 A7.4 B — 右	10.8	22.0	0.9 0.5～0.6	16～17	にぶい橙 7.5YR 7/4	微砂粒含	良好	外面刷毛目、内面口縁刷毛目、胴～縦位指撫で
79	M－6 2	A	34.5	28.6	(14.8)	A0.8 B0.9 C1.4		A6.8 B(8.7) 右	8.5	23.0	0.9 0.5～0.6	15～16	橙 7.5YR 7/6	砂粒 φ0.3mm小石含む	ややあまい	外面刷毛目、内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
80	M－6 3	A	(34.8)	26.0	(14.8)	0.9～1.3 A0.9 B1.2 C1.5		A(8.2) B5.9 右 A7.5 B6.5 左	9.5	24.7	0.6～0.8	16	橙 5YR 6/6	微砂粒、白色軽石含	良好	外面刷毛目→突帯貼付、内面口縁刷毛目、上～縦位指撫で
81	M－6 4	A	34.8	(15.3)	15.0	0.8～1.2 A0.8 B1.1 C1.3		A6.9 B6.9 右 A6.5 B — 左	12.0	15.2	0.9 0.6	15～17	にぶい黄橙 10YR 7/4	砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
82	M－6 5	A	37.1	(26.5)	14.5	0.9～1.4 A1.0 B1.2 C1.6		A7.0 B — 右 A — B8.1 左	11.0	25.1	0.8 0.5	15～16	明黄褐 10YR 7/6	微砂粒 φ0.4mm 酸化鉄含	ややあまい	外面刷毛目 内面刷毛目、胴～縦位指撫で
83	M－6 6	A	36.5	26.3	13.6	0.8～1.5 A0.9 B1.1 C1.5		A6.9 B6.9 右 A6.7 B7.0 右	12.9	26.4	1.0 0.6～0.9	15～17	橙 7.5YR 7/6	砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
84	M－6 7	A	38.7	27.5	(14.0)	0.8～1.4 A1.0 B1.0 C1.5		A(6.5) B7.6 右 —	14.0	27.3	1.0 0.6	16	橙 7.5YR 7/6	微砂粒、白色軽石粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
85	M－6 8	A	37.6	15.5	14.0	0.8～1.4 A0.9 B1.2 C1.8		A7.0 B6.7 右 A6.5 B7.3 右	12.8	25.2	0.7 0.7	15～17	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面口縁刷毛目、胴部～縦位指撫で
86	M－6 9	A	36.3	23.0	14.2	0.8～1.5 A1.0 B1.2 C1.7		A6.5 B6.8 右 A7.2 B7.0 右	10.1	25.2	0.9～1.0 0.5～1.0	14～17	橙 7.5YR 6/6	微砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
87	M－6 10	A	35.4	(29.2)	—	1.0～1.2 A0.9 B1.0 C1.3		—右			0.9 0.7	15～18	橙 5YR 6/6	微砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
88	M－6 11	A	37.3	23.8	13.4	0.8～1.4 A0.8 B1.3 C1.4		—左	12.2	26	0.9 0.6	9	橙 5YR 6/6	微砂粒、酸化鉄含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
89	M－6 12	A	31.9	(24.0)	—	0.8～1.4 A0.9 B1.2 C1.5		—右			0.7～0.8 0.6	12	橙 7.5YR 6/6	砂粒含 φ0.2mm、酸化鉄	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
90	M－6 13	A	36.2	25.1	13.5	1.1～1.7 A1.0 B1.0 C1.4		A7.4 B7.4 右 A7.2 B(7.3) 右	12.2	25.0	1.0～1.3 0.5～0.6	16～17	にぶい橙 7.5YR 7/4	微砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、胴～縦位指撫で
91	M－6 14	A	36.7	26.3	14.6	0.7～1.2 A0.9 B1.1 C1.4		A － B6.8 右 A － B(5.3) 右	12.1	24.1	1.0 0.7	17～18	にぶい橙 7.5YR 7/4	微砂粒含	良好	外面刷毛目 内面口縁刷毛目、胴～縦位指撫で
92	M－6 15	A	36.0	25.8	14.2	1.1～1.2 A1.0 B1.2 C1.4		A7.3 B7.4 右 A － B7.5 右	12.0	25.0	1.0 0.4～0.6	16～18	橙 5YR 7/6	微砂粒φ0.4mm 酸化鉄含	良好	外面刷毛目 内面口縁刷毛目、胴部～縦位指撫で
93	M－6 16	A	35.5	(24.9)	13.5	A0.8 B1.0 C1.4		A6.7 B7.3 左	13.2～14	26.6	1.0 0.5～0.6	15～17	にぶい黄橙 10YR 7/4	砂粒φ0.2mm 酸化鉄含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
94	M－6 17	A	25.0	(25.5)	—	0.9～1.2 A0.9 B1.2		—右			1.0 0.5～0.7	15～16	にぶい橙 7.5YR 7/4	砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面口縁刷毛目、胴～縦位指撫で
95	M－6 18	A	31.9	—	(14.5)	1.0 1.3 A1.0 B1.1 C1.5		A － B6.1 右	11.4	25.2	1.1 0.5	15～16	にぶい黄橙 10YR 7/4	砂粒含	ややあまい	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
96	M－6 19	B	7.8			1.0						15	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
97	M－6 20	A	5.0			0.9						14	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
98	M－6 21	A	18.0			0.9～1.2						17	浅黄橙 7.5YR 8/4			
99	M－6 22	A	11.0			1.2						15	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
100	M－6 23	A	10.0			1.4						14	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
101	M－6 24	A	15.0			0.9～1.3						14	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
102	M－6 25	B	11.0			1.2						17	浅黄橙 7.5YR 8/6	小石含 微砂粒含	良好	
103	M－6 26	A	13.0			1.2						18	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
104	M－6 27	A	(11.5)			1.2						19	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
105	M－6 28	A	9.0			1.4						18	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
106	M－6 29	B	(14.5)			0.9～1.2		右				17	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
107	M－6 30	A	(27.0)			A1.2 B1.3 C1.3		左				17	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
108	M－6 31	A	(14.3)			0.7～1.2		右 右				16	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
109	M－6 32	A	14.5			1.0						16	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
110	M－6 33	B	(13)	(3.0)	—	A1.1 B1.1		—	—	—		16	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含	良好	
111	M－6 34	A	(17.8)			1.1		右				5	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
112	M－6 35															111に接合
113	M－6 36	A	7.0			1.3						18		小石含 微砂粒含	良好	
114	M－6 37															105に接合
115	M－6 38	B	(15.0)			1.3		右				12	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
116	M－6 39	A	6.5			1.7						17	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
117	M－6 40															109に接合
118	M－6 41	A	17.2			B1.3 C1.5		右	11.2			18	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
119	M－6 42	A	10.5			1.5						16	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
120	M－6 43	A	16.0			B1.1 C1.5		右	11.0			17	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
121	M－6 44	A	16.3			1.3~1.5			13.2			9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
122	M－6 45	A	12.2			1.3~1.5			9.0			16	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
123	M－6 46	A	8.9			1.2						16	浅黄橙 7.5YR 8/6	小石含 微砂粒含	良好	
124	M－6 47	A	13.2			1.4~1.8			10.0			16	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
125	M－6 48	A	22.2			B1.0 C1.4		右	11.7			17	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
126	M－6 49	A	9.0			1.6						16	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
127	M－6 50	C	21.3			1.3~2.0						17	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
128	M－6 51	C	(17.8)			1.1~1.6						17	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
129	M－6 52	C	28.5			1.0~2.0						16	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	鹿（犬）？

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
130	M－6 53	C	11.5			1.3~1.5						16	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	猪
131	M－6 54	C	16.0			1.7						17	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	動物脚
132	M－6 55	C	15.9			1.4						—	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	動物の脚、粘土板、円筒化成形
133	M－6 56	C	6.2			1.5						15	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
134	M－6 57	C	11.5			1.5							橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	馬脚つけ根
135	M－6 58	C	12.1			1.5						—	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	動物の脚
136	M－7 1	B	3.5			0.8						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
137	M－7 2	B	3.7									17	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
138	M－7 3	A	4.5			0.9						18	浅黄橙 7.5YR 8/3	小石含 微砂粒含	良好	
139	M－7 4	B	5.3			1.4						18	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
140	M－7 5	A	4.8			1.0						17	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
141	M－7 6	A	4.9			1.0						15	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
142	M－7 7	B	5.5			0.8						18	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
143	M－7 8	A	5.5			1.3						20	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
144	M－7 9	A	9.5			1.4						18	浅黄橙 7.5YR 8/4	粗砂粒含 微砂粒含	良好	
145	M－7 10	A	5.5			1.0						16	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
146	M－7 11	B	9.0			1.0		右				17	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
147	M－7 12	A	6.7			0.9						18	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
148	M－7 13	A	6.0			1.0						15	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
149	M－7 14	A	6.0			1.3		左				13	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
150	M－7 15	A	6.6			1.2						15	浅黄橙 7.5YR 8/6	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
151	M－7 16	A	9.0			1.1						16	橙 7.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
152	M－7 17	A	7.5			1.6						16	橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
153	M－7 18	B	8.2			1.0						8	橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
154	M－7 19	B	10.3			1.1						11	橙 5YR 7/8	小石含 微砂粒含	良好	
155	M－7 20	A	4.5			1.0						7	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
156	M－7 21	A	5.8			1.2		左				11	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
157	M－7 22	A	5.7			1.6						15	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
158	M－7 23	A	7.4			1.6						18	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
159	M－7 24	A	6.2			1.5						17	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
160	M－7 25	A	5.0			1.8						16	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
161	M－7 26	A	9.8			1.8						13	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
162	M－7 27	A	9.0			1.5						14	浅黄橙 10YR 8/3	小石含 微砂粒含	良好	
163	M－7 28	A	7.3			1.4						11	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
164	M－7 29	A	9.5			1.7						10	橙 7.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
165	M－8 1	A	4.7			1.1						5	淡橙 5YR 8/4	小石含 微砂粒含	普通	
166	M－8 2	A	2.6			0.8						—	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
167	M－8 3	A	4.5			0.7						—	浅黄橙 10YR 8/3	微砂粒含	普通	
168	M－8 4	A	3.0			1.0						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
169	M－8 5	A	2.2			1.3						—	明赤褐 2.5YR 5/8	微砂粒含	良好	
170	M－8 6	A	5.0			0.9						9	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
171	M－8 7	A	4.9			1.2						10	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
172	M－8 8	A	3.2			1.0		右				8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
173	M－8 9	A	5.1			1.3						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
174	M－8 10	A	4.7			1.0						—	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
175	M－8 11	A	5.0			1.0		右				10～11	橙 5YR 7/8	小石含 微砂粒含	良好	
176	M－8 12	A	3.8			1.4						16	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
177	M－8 13	A	3.9			1.1						15	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	普通	
178	M－8 14	A	4.7			1.0						16	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
179	M－8 15	B	6.3			1.2						14	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
180	M－8 16	A	3.8			1.0						—	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
181	M－8 17	B	7.4			1.4						16	橙 2.5YR 7/8	小石含 細砂粒含	普通	
182	M－8 18	A	6.0			1.2						16	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
183	M－8 19	A	7.5			1.1		右				18	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 細砂粒含	普通	
184	M－8 20	A	4.0			1.3						14	橙 7.5YR 8/6	小石含 細砂粒含	普通	
185	M－8 21	A	13.8			1.2～1.7						14～15	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	普通	
186	M－8 22	A	4.9			1.4						—	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	普通	
187	M－8 23	A	10.8			1.4		左				19	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
188	M－8 24	A	3.9			1.0						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	普通	
189	M－8 25	A	5.2			1.0						6	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 微砂粒含	普通	
190	M－8 26	B	6.4			1.0		右				5～6	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 細砂粒含	普通	
191	M－8 27	A	4.8			1.2						5	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
192	M－8 28	A	6.5			1.2		右				6	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
193	M－8 29	A	4.8			2.7						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
194	M－8 30	A	4.5			1.8						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
195	M－8 31	A	3.8			1.6						9	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
196	M－8 32	A	5.1			2.1						—	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
197	M－8 33	A	7.4			1.5						—	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
198	M－9 1	A	4.1			1.0						7	淡橙 5YR 8/3	小石含 微砂粒含	良好	
199	M－9 2	A	4.6			1.0						—	浅黄橙 7.5YR 8/3	小石含 細砂粒含	良好	
200	M－9 3	A	5.2			1.0						14	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
201	M－9 4	A	3.9			1.3						6	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
202	M－9 5	A	6.0			1.4						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
203	M－9 6	A	4.7			0.9						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
204	M－9 7	A	4.5			1.3						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
205	M－9 8	A	3.6			1.2						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
206	M－9 9	A	3.4			1.3						10	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
207	M－9 10	A	9.0			1.3						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
208	M－9 11	A	5.8			1.8						6	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
209	M－9 12	A	4.9			1.2						16	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
210	M－9 13	A	5.6			1.2						8	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
211	M－9 14	A	5.1			1.1						13	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 微砂粒含	普通	
212	M－9 15	A	9.8			1.8						13	浅黄橙 7.5YR 8/3	小石含 微砂粒含	普通	
213	M－9 16	A	4.1			1.0						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
214	M−9 17	A	4.0			1.2						—	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
215	M−9 18	A	9.8			1.6						9	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
216	M−9 19	A	5.0			1.8						8	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
217	M−10 1	A	33.2	20.5	—	A1.0 B1.2 C1.4	—	A6.3 B5.5 左	12.8	23.6	1.1 0.4~0.5	10〜11	明赤褐 2.5YR 5/6	軽石酸化鉄 φ0.2小石	良好	外面刷毛目→突帯貼付、内面上端刷毛目、上〜下縦位指撫で、外面口縁部ヘラ記号
218	M−10 2	A	34.3	22	10.4	A1.0 B1.1 C1.7	—	A7 B5 右 / A7.9 B —	25	23.1	0.8 0.4~0.6	8〜9	橙 2.5YR 6/6	軽石、酸化鉄含	良好	外面刷毛目→突帯貼付 内面刷毛目 外面口縁部ヘラ記号
219	M−10 3	A	34.6	18.3	(11.6)	A1.0 B1.0 C1.2		—右	13.7	24.2	0.7 0.4 —	7〜8	橙 2.5YR 6/6	細砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目 中〜輪積痕顕著 外面口縁部ヘラ記号
220	M−10 4	A	32.8	18.6	(10.8)	1.0~0.9		—右	—	23	0.8 0.6 —	9	橙 5YR 6/8	酸化鉄、輝石、白色軽石含	良好	外面刷毛目 内面口縁部刷毛目 輪積痕膨著
221	M−10 5	A	19	(25.3)	—	0.9~0.3 —		— 右	—	—	0.8 0.5	7〜11	橙 2.5YR 6/8	微砂粒含	良好	外面刷毛目→突帯貼付 内面上端刷毛目 輪棟痕顕著
222	M−10 6	A	39	21.1 〜 22.3	(11.7)	A1.3 B1.4 C2.0		—左	19	30	1.1~1.3 0.6	7〜10	橙 2.5YR 6/6	軽石、酸化鉄、石英含やや雑	良好	外面刷毛目、突帯斜位撫でつけ痕、内面上端刷毛目、輪積痕顕著
223	M−10 7	A	現 (14.5)			11.0						10	明赤褐 5YR 5/6	小石含	良好	
224	M−10 8	A	37	25.2	12.2	1.0~1.5		—左	14.6	25.3	0.8 0.8	11〜14	橙 7.5YR 6/6	微砂粒含 φ0.2小石	普通	外面刷毛目→突帯貼付 内面刷毛目
225	M−10 9	A	(19.8) 15.8	23.6	—	A0.8 B0.8		—左	—	—	0.6 0.5	6〜7	橙 5YR 6/6	微砂粒含	良好	外面刷毛目→突帯貼付 内面上端刷毛目 中〜縦位指撫で
226	M−10 10	A	18.2	—	14.5	A1.1 B1.2	—	—左	14.5	—	0.6 0.5	—	橙 2.5YR 7/6	酸化鉄 φ0.2小石含	良好	外面刷毛目、器面磨耗、内面縦位指撫で
227	M−10 11	A	5.1			1.0						12	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含	良好	
228	M−10 12	A	5.3			0.8						10	明赤褐 2.5YR 5/6	微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
229	M—10 13	A	7.8			0.9						6～7	橙 5YR 6/6	微砂粒含	良好	
230	M—10 14	A	12.1			0.8						10～11	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含	良好	
231	M—10 15	A	11.0			1.0						12	橙 5YR 6/6	微砂粒含	良好	
232	M—10 16	A	7.1			1.7						—	橙 2.5YR 6/6	小石含	良好	
233	M—10 17	A	7.2			0.9～1.0						7	橙 7.5YR 6/6	微砂粒含	良好	
234	M—10 18	A	5.8			1.1						6	橙 5YR 6/6	微砂粒含	良好	
235	M—10 19	A	13.0			1.0						7	橙 5YR 6/6	微砂粒含	良好	
236	M—10 20	A	9.2			2.1						6	橙 7.5YR 6/6	微砂粒含	良好	
237	M—10 21	A	7.8			1.5						7	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含	良好	
238	M—10 22	A	5.0			2.0						10	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
239	M—10 23	A	7.7			1.4						9	橙 2.5YR 6/6	微砂粒含	良好	
240	M—10 24	A	8.6			1.5						9	明赤褐 2.5YR 5/6	微砂粒含	良好	
241	M—10 25	A	17.5			1.5～1.7						9	にぶい橙 5YR 6/4	微砂粒含 小石含	良好	
242	M—10 26	A	8.6			1.5						6	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
243	M—11 1	A	4.1			0.8						10	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
244	M—11 2	A	5.2			1.0						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
245	M—11 3	A	3.6			1.1						12	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
246	M—11 4	A	5.8			1.2		右				12	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
247	M—11 5	A	8.4			1.2		左				12	橙 5YR 7/8	小石含 微砂粒含	良好	
248	M—11 6	A	7.8			1.1		左				10	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
249	M—11 7	A	10.3			B1.2 C1.7		右	6.4			12	橙 5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
250	M—12 1	A	(35.5)	24.0	14.8	0.9～1.5 A1.0 B1.1 C1.5		— 右？	15.5	26.5	0.5～0.6 0.6～0.7 —	14～16	橙 7.5YR 7/6	微砂粒含	普通	外面刷毛目 内面上端刷毛目、 上～縦位指撫で
251	M—12 2	A	33.6	20.6	13.6	1.2～1.4 A1.4 B1.5 C1.8		(A — B5.6 左	14	25	0.7 0.7	13～15	にぶい橙 7.5YR 7/4	微砂粒含	普通	外面刷毛目→突帯 貼付、内面上端横、 上～縦位指撫で 形いびつ
253	M—12 3	A	現 22.2	—	15.0	0.9～1.2 B1.1 C1.3		— 右	16.1	—	0.7 0.7	15	橙 7.5YR 6/6	酸化鉄含	普通	外面刷毛目 内面上端刷毛目、 上～縦位指撫で
254	M—12 4	A	現 26.6	—	(14.3)	A1.2 B1.1 C1.6	—	(A — B6.3 左？	13	22	0.3～0.4 0.5	6～7	橙 5YR 6/6	微砂粒含	普通	外面刷毛目 内面上端刷毛目 上～縦位指撫で
255	M—12 5	A	現 21.0	—	—	0.9～1.2		— 右			0.6～0.8 0.8～0.9	15	橙 7.5YR 6/6	微砂粒含	普通	外面刷毛目 内面上端刷毛目、 上～縦位指撫で
256	M—12 6	A	現 15.6	—	16.2	1.4 B1.2 C1.5		—	13.2	—	0.5 0.7 —	15	浅黄橙 10YR 8/3	微砂粒含	普通	外面刷毛目 内面縦位指撫で
257	M—12 7	B	現 (35.2)	(45.0)	—	1.2～1.4 A1.2 B1.6 C1.6		— 右			厚 0.5～0.9	14～15	にぶい橙 2.5YR 6/4	微砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、 指撫で
258	M—12 8	B	19.0			1.1～1.5						15	赤褐 10R 5/4	小石含 微砂粒含	普通	
259	M—12 9	A	23.2			A1.2 B1.2		右				16	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
260	M—12 10	A	8.0			1.1						7	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
261	M—12 11	A	6.5			1.2						16	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
262	M—12 12	B	10.5			1.4						13	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
263	M—12 13	B	10.5			1.2						13	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
264	M—12 14	A	18.8			1.5	右	？				15	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
265	M—12 15	A	11.5			1.2						6	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
266	M—12 16	A	11.0			1.4						6	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
267	M—12 17	A	15.5			1.2		左				8	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
268	M—12 18	A	6.8			1.2		右				6	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
169	M—12 19	A	8.0			1.3		右				6	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
270	M—12 20	A	8.8			1.2		左				—	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 細砂粒含	普通	
271	M—12 21	A	9.2			1.5						7	浅黄橙 7.5YR 8/3	小石含 微砂粒含	普通	
272	M—12 22	A	8.3			1.3~1.8						6	浅黄橙 10YR 8/3	小石含 微砂粒含	良好	
273	M—12 23	A	13.9			1.3~2.0		左	10.0			6	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
274	M—12 24	A	16.6					右	13.0			6	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
275	M—12 25	A	11.0			1.7~2.2						13	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 粗砂粒含	普通	
276	M—13 1	A	34.4	(29.3)	(16.2)	A1.5 B1.6 C2.3		— 左	11.5	2.3	0.9 0.8	15~17	にぶい橙 5YR 7/4	砂粒含む	ややあまい	外面刷毛目→突帯貼付、内面上端刷毛目、上~縦位指撫で
277	M—13 2	A	4.0			1.0						10~11	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
278	M—13 3	A	6.0			1.0						14	にぶい橙 2.5YR 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
279	M—13 4	A	3.1			0.8						10	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
280	M—13 5	A	3.2			0.8						12	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
281	M—13 6	A	3.5			0.8						10~11	赤褐 10R 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
282	M—13 7	A	2.9			0.8						11~12	赤褐 10R 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
283	M—13 8	A	3.0			0.8						10	赤褐 10R 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
284	M—13 9	A	3.8			0.8						10	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
285	M—13 10	A	3.9			0.9						10	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
286	M—13 11	A	3.5			1.1						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
287	M—13 12	A	7.5			0.8						10	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
288	M—13 13	A	15.0			0.8~1.0		— 右				11	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
289	M—13 14	A	4.7			0.8						10	赤褐 10R 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
290	M—13 15	A	12.0			0.8~1.0		一左				12	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 細砂粒含	良好	
291	M—13 16	A	7.5			1.0						10	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	小石含 粗砂粒含	良好	
292	M—13 17	A	3.7			1.0						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
293	M—13 18	A	7.3			0.8		一右				13	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 微砂粒含	良好	
294	M—13 19	A	7.5			0.7~1.0		右				11	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
295	M—13 20	A	11.5			1.0		左				12	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
296	M—13 21	A	9.0			0.9		左				12	にぶい赤褐 2.5YR 5/4	小石含 微砂粒含	良好	
297	M—13 22	A	11.5			1.2		右				12	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
298	M—13 23	A	8.0			1.2						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
299	M—13 24	A	8.0			1.3						12	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
300	M—13 25	A	6.6			0.8						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
301	M—13 26	A	4.5			1.0						10	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
302	M—13 27	A	5.0			0.8						10	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
303	M—13 28	A	6.8			0.8		左				10~11	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
304	M—13 29	A	4.8			0.8						10	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
305	M—13 30	A	4.3			1.0						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
306	M—13 31	A	3.7			0.9						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
307	M—13 32	A	6.7			0.9						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
308	M—13 33	A	4.1			1.0						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
309	M—13 34	A	5.5			1.5						7~8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
310	M—13 35	A	7.2			1.2						7～8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
311	M—13 36	A	5.2			1.3						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
312	M—13 37	A	6.4			1.6						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
313	M—13 38	A	3.3			1.3						10	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
314	M—13 39	A	13.5			1.0~1.3		右	8.8			12	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
315	M—14 1	A	5.2			1.4						13	にぶい橙 5YR 6/4			
316	M—14 2	A	4.9			1.3						11	にぶい橙 5YR 7/4	小石含	普通	
317	M—14 3	A	6.6			1.5						8～9	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
318	M—14 4	A	7.5			1.7						12	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
319	M—14 5	A	8.5			1.5						10	にぶい橙 5YR 7/4	小石混 粗砂粒含	普通	
320	M—14 6	A	5.8			1.5						12	浅黄橙 10YR 8/3	小石含 ざらつき	普通	
321	M—14 7	A	10.0			1.8						6	にぶい橙 7.5YR 7/4	粗砂粒含	普通	
322	M—14 8	A	12.7			2,2						6	にぶい橙 7.5YR 7/4	粗砂粒含	普通	
323	M—14 9	A	8.5			2.0						7	橙 7.5YR 6/6	粗砂粒含	良好	
324	M—14 10	A	6.0			2.3						9	橙 5YR 7/6	粗砂粒含 小石含	普通	
325	M—14 11	A	5.7			2.4						(12)	にぶい橙 7.5YR 7/4	粗砂粒含	普通	
326	M—14 12	A	7.0			2.6						—	浅黄橙 10YR 8/3	粗砂粒含 小石含	普通	
327	M—14 13	A	10.7			2,2						7	橙 5YR 6/6	粗砂粒含	良好	
328	M—14 14	A	12.0			2,2						13	にぶい橙 7.5YR 7/4	粗砂粒含	良好	
329	M—14 15	A	9.5			1.8						7	にぶい橙 5YR 7/6	粗砂粒含	良好	
330	M—14 16	A	8.5			1.7						11	橙 5YR 6/6	粗砂粒含	普通	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
331	M—15 1	A	(35.2)	(30.7)	(16.5)	0.9～1.1 A0.9 B1.4 C1.6		A7.2右 B5.6	11.0	22.0	0.8 0.5	7	橙 2.5YR 6/8	φ0.6mm 白色軽石、砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端横位、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
332	M—15 2	A	(32.7)	(28.0)	(16.3)	0.9～1.3 A0.9 B0.9 C1.1		A5.7右 B —	12.8	22.8	0.8 0.4	8	橙 2.5YR 6/6	φ0.4mm 白色軽石 砂粒含	良好	外面刷毛目→突帯貼付 内面上端横位、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
333	M—15 3	A	34.0	24.5	14.5	0.9～1.3 A0.9 B1.1 C1.4		A6.7右 B5.5 A — B5.6	11.4	24.1	0.8 0.5	9～10	明赤褐 2.5YR 5/6	φ0.5mm 白色軽、石英含密	良好	外面刷毛目、横位撫で、内面上端横、上～縦位指撫で
334	M—15 4	A	31.5	23.0 ～ 25.2	(13.4)	1.0～1.3 A1.0 B0.9 C1.4		A6.6右 B4.6 A6.1 B—	10.5	21.0	0.9 0.4	7～8	明赤褐 2.5YR 5/6	φ0.6mm 白色軽石含密	良好	外面刷毛目 内面上端横位、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
335	M—15 5	A	29.5	23.4	13.8	0.8～1.5 A0.9 B1.1 C1.4		A6.4右 B4.9 A6.0右 B5.0	10.4	20.4	0.9 0.5	7～8	橙 5YR 6/6	φ0.2mm 白色軽石砂粒、やや雑	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
336	M—15 6	A	31.0	25.0	13.8	0.9～1.2 A0.9 B0.9 C1.2		A6.5右 B5.7	11.5	21.5	1.0 0.5	7～8	橙 2.5YR 6/6	φ0.3mm 白色軽石 φ0.2mm 石英含	良好	上面刷毛目、横位撫で 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
337	M—15 7	A	現 16.5	(23.1)	—	1.0～1.7 A0.9 B1.1		—右			0.7 0.5	7～8	明赤褐 2.5YR 5/6	白色軽石多含	良好	外面口縁横位撫で刷毛目、内面上端刷毛目、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
338	M—15 8	A	現 17.0	23.2	—	0.9～1.0 A0.9 B1.1		A6.2左 B — A5.2左 B —	—	—	0.7 0.5	7～8	橙 5YR 6/6	φ0.2mm 石英白色軽石、酸化鉄含	良好	外面刷毛目横位撫で、内面上端横位、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
339	M—15 9	A	29.6	22.3	13.5	0.7～1.5 A0.7 B1.1 C1.5		A6.3左 B5.9	9.3	19.0	0.7 0.6	9	橙 5YR 6/8	φ0.6mm 小石、白色軽、石英含	良好	外面刷毛目→突帯貼付、内面上半刷毛目、上～縦位指撫で 胴部ヘラ記号
340	M—15 10	A	現 17.8	24.9	—	0.8～1.0 A0.7 B0.8		—左			0.7 0.5	7～8	明赤褐 2.5YR 5/6	微石粒含密	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦斜位指撫で
341	M—15 11	A	30.3	22.1	12.6	0.7～1.1 A0.8 B1.1 C1.2		A6.5右 B— A — B6.5右	10.3	19.7	0.8 0.5	8～9	明赤褐 2.5YR 5/6	φ0.2mm 石英、白色軽石含密	良好	外面刷毛目、横位撫で、内面上端横位、上～縦位指撫で 胴部ヘラ記号
342	M—15 12	A	31.0	21.8	(12.5)	0.8～1.4 A1.0 B1.0 C1.2		A — B6.1右	9.7	20.0	0.8 0.5	7～9	明赤褐 2.5YR 5/6	φ0.7mm 白色軽石、砂粒含	良好	外面刷毛目、横位撫で、内面上端横位、上～縦位指撫で 胴部ヘラ記号

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
343	M−15 13	A	30.6	23.0	12.0	0.8~1.4 A0.9 B1.0 C1.4		A6.0 左 B5.0 A − 右 B6.1	9.5	19.8	1.0 0.6	7	明赤褐 2.5YR 5/8	φ0.4mm 白色軽石 φ0.2mm 石英含	良好	外面刷毛目、横位撫で、内面上端撫で、上〜縦位指撫で 胴部ヘラ記号
344	M−15 14	A	30.4	21.0	12.1	0.7~1.3 A0.8 B1.1 C1.4		A5.5 右 B5.3 A5.7 B5.8	8.7	19.2	0.7 0.6	8	赤橙 10YR 5/6	φ0.4mm 白色軽石、石英含	良好	外面刷毛目、横位撫で、内面上端撫で、上〜縦位指撫で 胴部ヘラ記号
345	M−15 15	A	現 14.5	—	—	0.9~1.1 A0.9 B0.9		—右 A − B5.4 左			0.9 0.4	7〜8	橙 2.5YR 6/6	φ0.3mm 酸化鉄、砂粒含	良好	外面刷毛目→突帯貼付、内面上端刷毛目、上〜縦位指撫で
346	M−15 16	A	20.8	—	14.0	1.8~2.3 B2.0 C2.4		—	16.6		1.4 0.8	12	にぶい橙 7.5YR 7/4	砂粒含 ざらつく	やや不良	外面刷毛目 内面
347	M−15 17	A	現 17.5	—	15.1	1.1~1.6 B1.2 C1.5	—		11.9		0.8 0.5	7〜8	明赤褐 2.5YR 5/6	φ0.2mm 白色軽石、石英含	良好	外面刷毛目 内面縦位指撫で
348	M−15 8	A	31.2	(26.0)	14.0	1.0~1.4 A0.9 B0.9 C1.4		—右	10.0	21.1	0.8 0.5	7〜9	橙 5YR 7/6	φ0.2mm 白色軽、石英含	良好	外面刷毛目、撫で 内面上端横位、上〜縦位指撫で
349	M−15 19	A	(31.5)	(22.4)	13.1	1.1~1.4 A1.0 B1.0 C1.4		A6.3 左 B5.2 A6.4 右 B —	10.5	20.7	0.8 0.5	7〜10	明赤褐 2.5YR 5/8	φ0.2mm 白色軽石、砂粒含	良好	外面刷毛目、指頭調整、内面上端横位、上〜縦位指撫で
350	M−15 20	A	現 14.0	20.1	—	0.9 A0.8		—右			0.7 0.5	8	赤 10YR 4/6	φ0.5mm 白色軽石、石英、やや雑	良好	外面口唇横撫で刷毛目、内面口唇横撫で、上〜縦位指撫で
351	M−15 21	A	13.4	(20.1)	—	0.9~1.1 A0.8		—右			1.0 0.6	9	赤褐色 2.5YR 4/6	白色軽石、石英含 やや雑	良好	外面刷毛目撫で 内面上端横、上〜縦位指撫で
352	M−15 22	B	54.5	38.9	(17.0)	0.9~1.7 A0.8~1.2 B1.2 C1.0 D1.0 E1.1		A − 左 B4.2			0.8~0.9 —	8〜11	明赤褐 2.5YR	φ0.5mm 白色軽石 石英含	良好	外面刷毛目、内面口縁部刷毛目、胴〜縦斜位指撫で
353	M−15 23	A	現 27.8	—	—	A0.9 B1.0 C1.4~1.6		A7.2 右 B5.2	13.5	22.8	0.8~1.0 0.4~0.5	8〜10	明赤褐色 2.5YR 5/6	白色軽石、石英、酸化鉄含	良好	外面刷毛目 内面縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
354	M−15 24	A	現 25.4	—	16.0	1.1~1.3 B1.0 C1.5		—左	13.5	25.0	0.7 0.5	8〜9	明赤褐 2.5YR 5/6	φ0.2mm 白色軽石、小石含密	良好	外面刷毛目 内面縦位指撫で

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
355	M−15 25	A	現 31.8	—	16.0	1.1~1.2 A1.0 B1.1 C1.4		—	14.6	—	0.7~0.9 0.4	7~8	にぶい橙 7.5YR 7/4	φ0.2mm 白色軽石、砂粒岩	やや不良	外面刷毛目 内面縦位指撫で
356	M−15 26	A	17.0			1.0		右				10	赤 10R 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
357	M−15 27	A	15.0			0.8~1.0		右				9	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
358	M−15 28	A	(16.3)			1.0~1.3		右				8	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
359	M−15 29	A	(13.1)			1.3~1.6			9.0			8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
360	M−15 30	A	11.3			0.8~1.0						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
361	M−15 31	A	5.1			0.8						9	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
362	M−15 32	A	8.4			0.8						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含		
363	M−15 33	A	12.0			0.7~1.0						11	赤 10R 5/6	粗砂粒含	良好	
364	M−15 34	A	11.6			1.0			右			8	橙 2.5YR 6/8	粗砂粒含 小石含	良好	
365	M−15 35	A	8.5			1.0						9	赤 10R 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
366	M−15 36	A	18.5			1.0						12	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
367	M−15 37	A	13.0			1.0						8	赤 10R 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
368	M−15 38	A	14.0			0.9			右			8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
369	M−15 39	A	(23.0)			1.0~1.3			—右			9	赤 10R 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
370	M−15 40	A	9.8			0.8~1.0			—左			8	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
371	M−15 41	A	8.2			0.8~1.0		左				9	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
372	M−15 42	A	7.1			1.2						8	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
373	M−15 43	A	12.9			1.0						8	赤 10R 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
374	M−15 44	A	9.4			1.0						9	赤 10R 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
375	M−15 45	A	16.0			1.1~1.4		右				8	赤橙 10YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
376	M—15 46	A	9.0			1.0~1.2						7	灰褐 5YR 6/2	小石含 粗砂粒含	良好	
377	M—15 47	A	8.8			1.5						7	にぶい橙 5YR 6/3	小石含 粗砂粒含	普通	
378	M—15 48	A	17.0			1.2~1.5			9.5			7	にぶい橙 5YR 6/3	小石含 粗砂粒含	普通	
379	M—15 49	A	9.8			1.5						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
380	M—15 50	A	14.4			1.1~1.4			10.4			8	橙 2.5YR 6/5	小石含 粗砂粒含	普通	
381	M—15 51	A	8.2			1.5						(8~9)	明赤褐 2.5YR 5/6	小石混 粗砂粒含	良好	
382	R—15 52	A	11.2			1.3~1.8						(7~8)	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
383	M—15 53	A	6.0			1.5						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
384	M—15 54	A	6.7			1.6						1	赤 10R 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
385	M—15 55	A	16.8			1.2~1.5			12.2			8	赤橙 10R 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
386	M—15 56	A	7.5			1.4						8	にぶい橙 5YR 7/4	粗砂粒含 小石含	普通	
387	M—15 57	A	8.0			1.5						8	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
388	M—15 58	A	14.0			1.5						9	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 粗砂粒含	やや不良	
389	M—15 59	A	15.5			1.1~1.5			13.2			9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
390	M—15 60	A	14.6			1.1~1.3			11.3			8	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
391	M—16 1	A	2.5			0.8						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
392	M—16 2	A	4.5			1.0						10	赤 10R 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
392	M—16 2	A	4.5			1.0						10	赤 10R 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
393	M—16 3	A	2.8			0.9						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
394	M—16 4	A	3.8			0.8						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
395	M—16 5	A	4.8			1.0		右				8	橙 5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	普通	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
396	M—16 6	A	3.9			1.0						7～8	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
397	M—16 7	A	3.4			0.9						8～9	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
398	M—16 8	A	5.6			0.9						8	橙 2.5YR 6/8	小石含 細砂粒含	良好	
399	M—16 9	A	4.5			1.1						—	橙 2.5YR 6/8	小石含 細砂粒含	良好	
400	M—16 10	A	5.8			1.0		右				7	橙 2.5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	良好	
401	M—16 11	A	4.9			1.0						—	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
402	M—16 12	A	3.7			1.0						9	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
403	M—16 13	A	9.2			1.2						8	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
404	M—16 14	A	4.7			1.3						9	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 粗砂粒含	普通	
405	M—16 15	A	6.0			1.3		右				13	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 細砂粒含	普通	
406	M—16 16	A	5.9			2.3						20	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
407	M—16 17	A	3.4			1.5						5	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	普通	
408	M—16 18	A	4.2			1.8						—	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
409	M—16 19	A	4.6			1.6						13	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
410	M—17 1	A	現 16.8	—	13.2	1.0～1.2 B1.1 C1.2		—右	10.2		1.0 0.5	9	橙 5YR 6/6	砂粒含む	良好	外面刷毛目 内面刷毛目、縦位指撫で
411	M—17 2	A 基部	現 31.5	—	17.5	1.1～1.4 B1.2 C1.4		—右	3.6		1.0 0.6	10	橙 5YR 6/6	砂粒含む、密	良好	外面刷毛目 内面 形象埴輪か
412	M—17 3	A	4.3			1.0						13～14	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
413	M—17 4	A	4.7			1.1						14	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
414	M—17 5	A	9.0			1.0		左				8	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
415	M—17 6	A	6.0			1.2						13	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
416	M—177	A	6.5			1.5		右				12	淡赤橙 2.5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
417	M—178	A	5.0			1.9						13	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
418	M—181	A	37.0	20.5	15.6	1.1~1.5 A1.0 B1.4 C1.5		(A6.5 B6.5 右) (A6.5 B — 右)	14.8	27.0	0.7 0.5	12~13	橙 5YR 6/6	酸化鉄、石英、長石含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で 内面ヘラ記号？
419	M—182	A	39.3	22.1	15.1	0.9~1.6 A1.0 B1.6 C1.5		(A6.4 B7.2 右) (A6.4 B7.0 右)	18.0	29.2	0.7 0.5	12	橙 5YR 6/6	φ0.2mm 酸化鉄、砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で 内面ヘラ記号？
420	M—183	A	現 17.0	23.5	—	0.9~1.1 A0.9 B0.9		— 右			0.6 0.6	7~8	赤橙 10YR 6/6	微砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、上～縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
421	M—184	A	(9.5)			1.0						14	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
422	M—185	A	8.2			1.0						8	赤橙 10R 6/6	小石含 細砂粒含	普通	
423	M—186	A	6.0			1.6						12	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
424	M—187	A	7.4			1.2						12	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
425	M—188	A	5.7			1.4						12	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
426	M—189	A	12.0			1.5		右				13	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
427	M—1810	A	23.2			1.4		右	14.0			13	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
428	M—1811	A	22.6			A1.2 B1.3 C1.4		右	9.5	16.7		8	橙 5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
429	M—1812	A	8.2			1.3						9	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
430	M—191	A	4.2			1.0						9	浅黄橙 7.5YR 8/6	小石含 微砂粒含	普通	
431	M—192	A	4.5			1.1						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
432	M—193	A	5.6			1.4						10~11	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
433	M—194	A	6.0			1.3		右				—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
434	M—195	A	11.5			1.0		右				18	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
435	M—19 6	A	4.8			1.5						11	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
436	M—19 7	A	4.2			1.0						11	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
437	M—19 8	A	8.9			1.0						12	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
438	M—19 9	A	2.9			1.0						—	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
439	M—19 10	A	3.7			1.3						—	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 細砂粒含	良好	
440	M—19 11	A	4.5			1.5						—	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 微砂粒含	良好	
441	M—19 12	A	3.7			1.3						9	橙 2.5YR 6/8	小石含 細砂粒含	良好	
442	M—19 13	B	4.9			1.0						13	橙 5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
443	M—19 14	A	4.0			1.3						16	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
444	M—19 15	A	4.6			2.0						12	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
445	M—19 16	A	3.9			1.8						—	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
446	M—20 1	A	5.2			0.9						9	淡赤橙 2.5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
447	M—20 2	A	1.9			0.8						7	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
448	M—20 3	A	3.7			1.2						11	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
449	M—20 4	A	2.9			1.1						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
450	M—20 5	A	2.6			0.9						—	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 細砂粒含	良好	
451	M—20 6	A	6.3			1.3						21	赤橙 10R 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
452	M—20 7	A	6.9			1.4						6	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	良好	
453	M—20 8	A	4.8			1.0						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
454	M—20 9	B	5.9			1.5						8	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
455	M—21 1	A	33.3	21.9	15.0	1.0~1.8 A1.0 B1.5 C2.3		(A7.5 B6.5左 (A— B6.7	11.0	20.8	1.3 0.7	6~8	にぶい橙 10YR 7/4	砂粒含む ややあらい	普通	外面刷毛目、横位撫で、内面上端刷毛目、上～縦位指撫で

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
456	M−21 2	A	現 21.5	—	14.8	1.5~2.1 B1.3 C2.2		— 右	10.7	20.1	1.0 0.8	7	にぶい橙 7.5YR 7/4	砂粒含むややあらい	普通	外面刷毛目、内面縦位指撫で、上～縦位指撫で
457	M−21 3	A	現 17.5	(19.2)	—	1.1~1.5 A1.1 B1.5		左			1.0 0.8	7	橙 5YR 6/6	砂粒含むややあらい	普通	外面刷毛目 内面上端横位撫で
458	M−21 4	A	現 17.3	23.5	—	1.0~1.4 A1.1 B1.0		— 右？			0.9 0.7	11	橙 5YR 6/6	砂粒含 小石混	普通	外面刷毛目、横撫で 内面上端横位撫で、上～刷毛目、胴部～縦位指撫で
459	M−21 5	A	5.4			1.0						14	橙 5YR 6/6	小石含 微砂粒含	普通	
460	M−21 6	A	5.1			1.0						11	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 微砂粒含	普通	
461	M−21 7	A	8.2			1.0						9	橙 2.5Y 6/6	小石含 微砂粒含	普通	
462	M−21 8	A	5.3			1.8						6	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
463	M−21 9	A	4.2			1.2						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
464	M−21 10	A	4.6			1.3						8	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
465	M−21 11	A	7.5			1.0						6	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
466	M−21 12	A	11.2			1.0						7	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
467	M−21 13															466に接合
468	M−21 14	A	7.5			1.2		左				14	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
469	M−21 15	A	6.5			1.5		右				14	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
470	M−21 16	A	9.5			2.0						8	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
471	M−21 17	A	6.5			2.0						12	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
472	M−21 18	A	8.4			2.2						12	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
473	M−22 1	A	43.0	27.0	16.6	A1.0 B1.3 C1.4 D2.0	A4.8 B5.0 右 A5.3 B5.6 右	A9.0 B6.0 右 A9.4 B6.2 右	8.7	18.1	27.7	12	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 粗砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
474	M—22 2	A	41.8	25.5	14.0	A0.9 B1.1 C1.1 D1.7	A5.0 B4.9 右 A5.1 B4.9 右	A9.0 B6.0 右 A9.0 B5.9 右	9.1	18.6	27.8	12	明赤褐 2.5YR 5/8	粗砂粒含	良好	
475	M—22 3	A	4.3			0.8						—	赤褐 2.5YR 4/6	小石含 細砂粒含	普通	
470	M—22 4	A	4.1			1.1						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
477	M—22 5	A	5.6			1.0						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
478	M—22 6	A	4.7			1.3						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
479	M—22 7	B	4.3			1.1						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
480	M—22 8	A	4.6			1.1						6	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 細砂粒含	良好	
481	M—22 9	B	5.4			1.1						9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
482	M—22 10	A	6.7			1.1						5	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
483	M—22 11	B	5.0			1.3						9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
484	M—22 12	B	6.9			1.1						9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
485	M—22 13	A	4.0			1.2						7	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
486	M—23 1	A	4.1			0.9						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
487	M—23 2	A	5.2			1.0						5	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
488	M—23 3	A	5.2			1.2						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
489	M—23 4	A	6.3			1.1		右				8	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
490	M—23 5	A	8.6			1.2		右				5	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 細砂粒含	良好	
491	M—23 6	A	7.5			1.0						7	浅黄橙 10YR 8/4	小石含 細砂粒含	良好	
492	M—23 7	A	7.6			1.9						—	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
493	M—23 8	A	5.4			1.7						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
494	M—23 9	C	5.9			1.8~2.2						6	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	馬脚
495	M—23 10	A	5.8			1.6						6	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
496	M—23 11	C	15.8			1.4						—	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	馬顔
497	M—23 12	C				1.5						9	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	馬耳？
498	M—23 13	C				1.8						7	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	馬頬手網
499	M—23 14	A	4.5			1.3						—	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
500	M—23 15	A	5.2			1.4						4	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
501	M—23 16	C				1.1~1.8							明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	馬顔
502	M—24 1	A	30.0	(22.5)	(14.4)	1.2~1.6 A1.2 B1.5 C1.6		一右	10.0	20.0	0.8~1.0 0.8	8~9	明赤褐 5YR 5/6	砂粒含 φ0.3mm 白色軽石	良好	外面刷毛目、内面上端刷毛目、上～縦位指撫で
503	M—24 2	A	5.0			1.2		右				—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	やや不良	
504	M—24 3	A	7.5			1.4						—	橙 2.5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
505	M—24 4	A	7.5			1.1						5	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	やや不良	
506	M—24 5	A	5.5			1.6						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	やや不良	
507	M—24 6	A	11.5			1.0~1.7						12	にぶい橙 2.5YR 6/4	小石含 粗砂粒含	良好	
508	M—24 7	A	4.2			2.2						—	浅黄橙 10YR 8/3	小石含 粗砂粒含	やや不良	
509	M—24 8	A	5.5			2.4						—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	やや不良	
510	M—24 9	A	7.4			1.5						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	普通	
511	M—24 10	A	11.0			1.7~2.0			10.0			—	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
512	M—24 11	A	6.5			1.7						—	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
513	M—24 12	A	13.0			1.7			10.6			—	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	やや不良	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
514	M—24 13	A	17.5			1.3~2.0		右	10.2				にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	やや不良	
515	M—25 1	A	2.5			1.0						—	橙 2.5YR 6/8	小石含 細砂粒含	普通	
516	M—25 2	A	2.4			0.9						7	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
517	M—25 3	A	3.2			1.2						6	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
518	M—25 4	A	5.8			1.1						9	赤 10R 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
519	M—25 5	A	5.0			1.3						10	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	良好	
520	M—25 6	A	3.0			1.3						—	赤 10R 5/8	小石含 細砂粒含	良好	
521	M—25 7	A	6.8			1.0						9	赤 10R 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
522	M—25 8	A	5.0			0.9						9~10	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
523	M—25 9	A	2.7			1.2						10~11	橙 5YR 7/8	小石含 細砂粒含	良好	
524	M—25 10	A	3.1			1.2						21~22	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	良好	
525	M—25 11	A	3.2			1.1		右				15	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
526	M—25 12	A	5.3			1.1						—	橙 5YR 7/8	小石含 微砂粒含	普通	
527	M—25 13	A	6.2			1.8						—	浅黄橙 7.5YR 8/6	小石含 細砂粒含	やや不良	
528	M—26 1	A	現 21.6	—	(17.0)	1.2 B1.1 C1.1		—右？		12.0	0.6 0.5	4~5	にぶい橙 7.5YR 7/4	微砂粒含	良好	外面刷毛目 内面縦位指撫で
529	M—26 2	A	7.5			1.1						10	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
530	M—26 3	A	4.5			1.0						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	普通	
531	M—26 4	A	4.3			0.9						10	にぶい橙 10R 6/4	小石含 細砂粒含	普通	
532	M—26 5	A	10.0			0.8						—	橙 2.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
533	M—26 6	B	4.6			1.2						12	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
534	M—26 7	B	9.0			1.2						15	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
—	M—26 ソ-6-2	A	現 19.7	—	(15.8)	1.4~2.4 A1.7 B1.9	—	左	14.6	—	1.0 1.2	10	橙 2.5YR 6/8	砂粒含 ややざらつく	良好	外面刷毛目グリット 内面刷毛目
535	M—26 8	A	7.5			1.3		右				14	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
536	M—26 9	A	8.7			1.9						11	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
537	M—26 10	B	7.7			1.1						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
538	M—26 11	A	11.0			1.0						11	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
539	M—26 12	A	5.2			1.4						9	赤褐 10R 5/4	小石含 細砂粒含	良好	
540	M—26 13	A	5.2			1.5						7	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
541	M—26 14	A	7.2			1.5~2.0						8	にぶい橙 5YR 6/4	小石含 微砂粒含	普通	
542	M—26 15	A	6.5			1.3						7	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
543	M—26 16	A	4.3			1.8						9	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
544	M—26 17	A	7.5			2.2						9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
545	M—26 18	A	5.2			2.0~2.4						10	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 細砂粒含	良好	
546	M—27 1	B	現 11.0	—	—	1.7 A1.2					0.7 0.5	18	にぶい橙 2.5YR 6/4	砂粒含	良好	外面刷毛目 内面刷毛目
547	M—27 2	A	21.4	—	18.0	1.5~1.9 B1.5 C2.0		— 右	9.4	8.8	0.7~1.0 0.6~0.7	10	にぶい橙 7.5YR 7/4	砂粒含	良好	外面刷毛目 内面縦位指撫で
548	M—27 3	A	7.1			1.2						14~15	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
549	M—27 4	A	5.4			1.0						15	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	良好	
550	M—27 5	A	4.6			1.0						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
551	M—27 6	A	6.0			1.1						8~9	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
552	M—27 7	A	4.8			0.9						6	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
553	M—27 8	A	4.4			1.0						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
554	M—27 9	B	7.0			1.4						14	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
555	M—27 10	B	6.7			1.2		左				12	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
556	M—27 11		6.0			1.2		右				11	赤 10R 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
557	M—27 12	B	5.0			1.4						26	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
558	M—27 13	B	7.0			1.5		右				19	赤 10R 5/6	粗砂粒含 小石含	良好	
559	M—27 14	B	7.9			1.3						15	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
560	M—27 15	B	9.0			1.5		右				11	にぶい赤褐 5YR 5/3	粗砂粒含 小石含	良好	
561	M—27 16	B	8.6			1.7						16	赤褐 10R 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
562	M—27 17	A	8.4			1.7						16	橙 5YR 7/6	微砂粒含 小石含	良好	
563	M—27 18	B	7.1			1.7						16～17	橙 5YR 7/6	粗砂粒含	普通	
564	M—27 19	B	6.8			1.2		右				13	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	普通	
565	M—27 20	B	9.5			1.8		右				19	橙 5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	普通	
566	M—27 21	B	9.6			1.5		右				19	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
567	M—27 22	B	14.0			1.8～2.4		右				19	橙 5YR 7/6	粗砂粒含 小石含	良好	
568	M—27 23	A	6.0			1.3		左				5～6	明赤褐 2.5YR 5/6	粗砂粒含 小石含	良好	
569	M—27 24	A	5.2			1.0～1.3		右				6	明赤褐 2.5YR 5/8	粗砂粒含 小石含	良好	
570	M—27 25	A	7.0			1.2						7	赤 10R 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
571	M—27 26	A	5.7			1.3		右				7	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
572	M—27 27	A	9.0			1.3						7	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
573	M—27 28	A	5.6			1.4		右				6	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
574	M—27 29	A	6.8			1.0～1.5		右				7	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
575	M—27 30	A	10.8			1.0~1.2		左				7	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 粗砂粒含	良好	
576	M—27 31	A	8.0			1.4						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
577	M—27 32	A	4.6			1.0						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	やや不良	
578	M—27 33	B	7.5			1.2						8	橙 5YR 7/6	微砂粒含 小石含	良好	
579	M—27 34	A	6.5			1.3						9	橙 2.5YR 6/8	小石含 微砂粒含	良好	
580	M—27 35	B	9.5			1.2						9	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
581	M—27 36	A	9.7			1.8						8	橙 2.5YR 6/8	粗砂粒含 小石含	良好	
582	M—27 37	A	3.0			2.3						8	にぶい橙 7.5YR 7/4	粗砂粒含 小石含	普通	
583	M—27 38	A	16.0			1.5~2.4		右	11.5			9	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	良好	
584	M—27 39	A	10.0			2.5			9.5			5	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	良好	
585	M—27 40	A	7.5			2.2						7	橙 2.5YR 6/8	小石含 細砂粒含	良好	
586	M—27 41	A	7.2			1.8						11	橙 5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	良好	
587	M—27 42	A	6.3			2.0						7	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
588	M—28 1	A	4.3			1.2						7	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
589	M—28 2	A	3.1			1.2						—	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
590	M—28 3	A	3.8			1.2						5	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	普通	
591	M—28 4	A	3.2			0.9						6	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	普通	
592	M—28 5	A	4.0			1.1						7~8	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
593	M—28 6	A	6.8			1.4						5	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 細砂粒含	普通	
594	M—28 7	B	10.5			1.1						7	橙 2.5YR 6/6	小石含 細砂粒含	普通	
595	M—28 8	A	3.5			1.4						11	赤 10R 5/6	小石含 粗砂粒含	普通	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
596	M—28 9	A	2.8			1.2						8	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
597	M—28 10	A	3.5			1.2						12	橙 5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
598	M—28 11	A	4.0			1.2						9	橙 7.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
599	M—28 12	A	3.7			0.9						6	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	普通	
600	M—28 13	A	4.0			1.5						8	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
601	M—28 14	A	5.0			1.5						6	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
602	M—28 15	A	11.8			1.8～2.1						5	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
603	M—28 16	A	6.0			1.8						—	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
604	M—28 17	A	5.0			1.6						5	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
605	M—28 18	A	6.5			1.8～2.0						5	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
606	M—28 19	A	4.7			1.3						—	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
607	M—28 20	A	9.2			1.3						6	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
608	M—28 21	A	5.7			1.3						5	橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
609	M—28 22	A	2.8			1.4						—	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
610	M—28 23	A	4.0			2.0						—	赤橙 10R 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	
611	M—28 24	A	3.8			1.5						—	にぶい橙 7.5YR 6/4	小石含 細砂粒含	やや不良	
612	M—28 25	A	6.0			2.0						—	橙 7.5YR 7/6	小石含 細砂粒含	普通	
613	M—28 26	A	5.3			2.0						7	にぶい橙 5YR 7/4	小石含 粗砂粒含	普通	
614	M—28 27	A	8.5			2.2～2.4						5	橙 7.5YR 7/6	小石含 粗砂粒含	普通	
615	M—29 1	A	現 23.3	22.6	—	1.2～1.3 1.1		—左	—	—	1.0 1.1	10～11	にぶい橙 2.5YR 6/4	φ0.3mm 小石 砂粒含	良好	外面刷毛目、口縁部穿孔、内面刷毛目、一部指撫で 口縁内面ヘラ記号

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
616	M—29 2	A	18.5	(21.9)	—	1.0~1.2		—左			0.7 0.6	10~11	赤褐 2.5YR 4/6	微砂粒含	良好	外面刷毛目 内面上端刷毛目、 上~縦位指撫で 口縁部ヘラ記号
617	M—29 3	A	現 11.2	—	13.2	~1.8			11.3	—	1.0 1.0 —	12~15	にぶい橙 7.5YR 7/4	砂粒含む	普通	
618	M—29 4	A	6.5			1.5						9	赤 10R 5/6	小石含 粗砂粒含	良好	
619	M—29 5	A	6.1			1.0						12	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 細砂粒含	良好	
620	M—29 6	A	13.0			1.0~1.3						8	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
621	M—29 7	A	6.8			1.4		右				11	にぶい褐 7.5YR 5/3	小石含 粗砂粒含	普通	
672	M—29 8	A	5.9			2.0						8	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
623	M—29 9	A	10.8			1.5						9	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
624	M—29 10	A	8.0			1.6						14	橙 2.5YR 6/6	小石含 微砂粒含	良好	
625	M—29 11	B	8.5			1.0~1.3						9	明赤褐 2.5YR 5/6	小石含 微砂粒含	良好	
626	M—29 12	A	5.4			1.8						9	明赤褐 2.5YR 5/8	小石含 粗砂粒含	良好	
627	M—29 13	A	4.0			1.2						15	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	
628	M—29 14	A	13.6			1.2~1.8		右				14	橙 2.5YR 6/6	粗砂粒含 小石含	良好	
629	M—29 15	A	7.7			1.1						15	浅黄橙 7.5YR 8/3	小石含 微砂粒含	良好	
630	M—29 16	A	6.5			1.4						10	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
631	M—29 17	A	7.0			1.4		右				8	赤褐 10R 5/4	小石含 粗砂粒含	良好	
632	M—29 18	A	7.8			1.3						9	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	普通	
633	M—29 19	A	11.8			1.1~1.4		右				11	赤 10R 5/6	小石含 細砂粒含	良好	
634	M—29 20	A	7.5			2.3						13	橙 2.5YR 7/8	小石含 細砂粒含	良好	
635	M—29 21	A	6.4			1.7						14	浅黄橙 7.5YR 8/4	小石含 微砂粒含	良好	

番号	挿図No.	形態	器高	口径	底径	器高	透孔		突帯			刷毛目本数／2cm	色調	胎土	焼成	成形・調整・備考
							下段	上段	第1	第2	第3					
636	M−29 22	A	7.0			2.3						6	橙 2.5YR 6/8	小石含 粗砂粒含	良好	
637	M−29 23	A	8.8			1.8						7	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
638	M−29 24	A	8.8			2.0						6	にぶい橙 7.5YR 7/4	小石含 微砂粒含	良好	
639	M−29 25	A	7.5			2.4						13	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
640	M−29 2	A	8.9			1.8						—	橙 2.5YR 7/6	小石含 微砂粒含	良好	
641	M−29 27	A	7.0			2.2						11	橙 2.5YR 6/6	小石含 粗砂粒含	良好	

表−3　出土遺物観察表　土器

番号	挿図No.	形種	出土位置	法量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備考
1	M−1 1	土師器 坏	北側	口 (14.3) 底 —— 高 5.8	①良②良 ③5YR5/6 ④50%	口縁部横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き。外面ヘラ削り。	
2	M−1 2	土師器 坏	周堀 北西	口 (13.6) 底 —— 高 4.2	①良②良 ③5YR5/6 ④30%	口縁部横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き。外面ヘラ削り。	
3	M−1 3	土師器 坏	周堀 北西	口 (14.3) 底 —— 高 (5.5)	①密②良好 ③2.5YR5/6 ④20%	口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。外面ヘラ削り。	
4	M−1 4	土師器 小型壺	123.20	口 9.3 底 —— 高 5.5	①稠密②良 ③7.5YR7/6 ④99%	口縁部横ナデ。内面ナデ。 外面黒色二次焼成痕あり。ヘラ削り。	
5	M−1 5	土師器 小型壺	123.20	口 9.2 底 —— 高 7.3	①密②良 ③7.5YR7/6 ④100%	口縁部横ナデ。内面ナデ。 外面ヘラ削り。黒色二次焼成痕あり。	
6	M−1 6	土師器 小型壺	123.88	口縁部を欠く	①良②良 ③5YR5/6 ④90%	口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。 外面ヘラ削り。 底部に丸い凹を持つ。	
7	M−1 7	土師器 埦	—	口 10.0 底 —— 高 5.3	①密②良 ③5YR5/6 ④70%	口縁部横ナデ。内面ナデ。 外面ヘラ削り。底部に丸い凹を持つ、黒色二次焼成痕あり。	
8	M−1 8	土師器 小型壺	123.20	口 8.8 底 4.3 高 8.2	①良②良 ③10YR7/2 ④90%	外面刷毛目整形後ヘラ磨き。 口縁部内側ナデ。下部ナデつけ。	
9	M−1 9	土師器 甕	周堀 南東 北西	口 12.4	①密②良 ③5YR5/4 ④70%	外面ヘラナデ	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　　考
10	M－1 10	土師器 小型壺	123,20	口　　11.1 底　　3.9 高　　15.2	①稠密②良好 ③10YR⅝ ④100%	坩を思わせる器形。器外及び口縁内側の一部はヘラ磨き。黒色二次焼成痕が顕著。底部から胴半分まで赤色塗彩を認める。	
11	M－1 11	土師器 壺	123,53	— 底　　5.3		外面ヘラ磨き。	
12	M－1 12	土師器 壺	周堀 南東 北西	底部のみ 底　　5.3	①稠密②良好 ③5YR⅝	壺状土器か、体部ヘラ削り。内面ヘラ磨き。	
13	M－1 13	土師器 壺	周堀 北側	高　　(9.8)	①密②良好 ③5YR⅝ ④25%	壺形土器。内外ともヘラ削り後ヘラ磨き。二次焼成痕あり。	
14	M－1 14	須恵器 甕	周堀 北西	口縁部	①稠密②良好 ③5Y⅝	口縁部を三角形に集束し、折り返し部を貼り付けて作る。	
15	M－1 15	須恵器 甕	周堀 南西	胴部	①稠密②良好 ③7.5Y⅝	外面ヘラ削り。内面叩き目痕あり。	
16	M－1 16	須恵器 甕	—	胴部	①稠密②良好 ③10Y⅝	外面横櫛目。内面叩き目痕あり。	
17	M－1 17	須恵器 甕	周堀 南西	胴部	①稠密②良 ③10Y⅝	外面横櫛目描き。内面叩き目痕あり。	
18	M－4 1	土師器 甕	周堀 北東 北西	口　　19.1 底　　—— 高　　(27.5)	①良②良好 ③10R⅝ ④40%	口縁部外反。最大径を胴中央部に持つ。 黒色二次焼成痕を70%以上受ける。赤色塗彩。	
19	M－4 2	土師器 甕	周堀 北西	口縁部から体部 体部から底部	①良②良好 ③10YR⅞	口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 底部を作り、体部を作り足す痕跡が明確にでる。 底部近くに黒色二次焼成痕あり。	
20	M－5 1	須恵器 高　坏	—	口端から肩の一部	①稠密②良好 ③N⅘	内外ナデ調整。頸部は横位櫛描き紋。	
21	M－5 2	須恵器 甕	—	胴部	①良②良好 ③N⅞	内面ナデ。 外面横位櫛描き短線を並べる。	
22	M－5 3	須恵器 甕	—	胴部	①良②良 ③N⅘	内外面叩き後ナデ。	
23	M－6 1	勾　玉		3.6 2.1 10.2g			
24	M－6 2	勾　玉		3.2 1.9 5.8g			
25	M－6 3	勾　玉		3.2 1.7 5.4g			

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　　考
26	M－64	土師器 甕	—	底部　　5.4	①良②良 ③10YR7/4	外面ヘラ削り。内面ナデ。	
27	M－65	土師器 甕	—	底部　　8.4	①良②良 ③2.5YR5/6	外面ヘラ削り。	
28	M－66	土師器 甕	東南	底部　　5.7	①良②良 ③7.5YR7/4	外面ヘラ磨き。	
29	M－67	土師器 甕	—	底部	①良②良 ③5YR5/6	内外面叩き。	
30	M－68	須恵器 甕	—	胴部	①密②良 ③N5/	内外面叩き。	
31	M－69	須恵器 甕	周堀 西	胴部	①密②良 ③N4/	内外面叩き。	
32	M－610	須恵器 甕	—	胴部	①密②良 ③5B5/1	内外面叩き。	
33	M－71	須恵器 甕	—	口縁部	①密②良好 ③N5/6	内外ともナデ。口端外側に凸帯一状。 内面焼成時の灰を受ける。	
34	M－72	須恵器 甕	—	口縁部	①密②良好 ③7.5Y5/1	内外ともナデ。口端部に返りが付く。	
35	M－73	須恵器 甕	—	胴部(肩部より) の一部	①やや良②良好 ③7.5Y6/1	内面叩き後ロクロ挽き、肩部を付け足す痕跡あり。	
36	M－74	須恵器 甕	中央	肩部	①良②良好 ③N4/6	内外ともナデ調整。	
37	M－75	須恵器 甕	—	肩部	①密②良好 ③N5/6	内外ともナデ。肩部作り足しの空隙を持つ。	
38	M－76	須恵器 甕	中央	肩部端から胴部	①良②良好 ③N5/6	内面ナデ。 外面横櫛描き文。	
39	M－77	須恵器 大　甕	中央	胴部	①稠密②良好 ③10Y5/1	内面叩き目痕。 外面井桁状押圧紋。	
40	M－78	須恵器 甕	—	胴部	①密②良好 ③5BG5/1	内面叩き目。 外面井桁状押圧紋。	
41	M－79	須恵器 甕	東南	胴部	①良②良好 ③N4/6	内面叩き後ナデ。 外面井桁状押圧紋。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　　考
42	M－7 10	須恵器 甕	中央	胴部	①稠密②良好 ③N5/	内面叩き目痕。 外面櫛描き紋あり。	
43	M－7 11	須恵器 甕	東南	胴部	①良②良好 ③7.5Y5/1	内外とも叩き後ナデ調整。	
44	M－7 12	須恵器 甕	東南	胴部	①良②良好 ③10Y5/1	内外とも叩き後ナデ調整。	
45	M－7 13	須恵器 甕	北ベルト	胴部	①良②良好 ③7.5Y5/1	内外とも叩き目痕あり。	
46	M－7 14	須恵器 甕	東南	胴部の一部	①密②良 ③N5/	内外面とも叩き目。 内面7.5R5/3	
47	M－7 15	須恵器 甕	東南	胴部の一部	①密②良好 ③N5/	内外とも叩き後ナデ調整。	
48	M－7 16	須恵器 甕	東南	肩部から胴部	①稠密②良好 ③10Y7/1	内面叩き後ナデ。 外面ナデ調整。自然釉あり。肩部の付け足し痕あり。	
49	M－7 17	須恵器 甕	東南	肩部	①密②良好 ③N4/	内面叩き目痕。 外面井桁状押圧痕。	
50	M－7 18	須恵器 甕	—	胴部の一部	①良②良好 ③5BG5/1	内外面ともロクロ挽き痕。	
51	M－7 19	須恵器 甕	—	肩部の一部	①密②良好 ③10GY5/1	内面叩き後内外ともナデ調整。	
52	M－7 20	須恵器 甕	東南	肩部の一部	①良②良好 ③N6/	内面叩き後ナデ。 外面ナデ。焼成時の自然釉を付着。	
53	M－8 1	土師器 坏	周堀 北東	口　16.2 底　—— 高　(6.2)	①稠密②良好 ③2.5YR6/ ④60%	口縁部立上がりの高さと底部の高さをほぼ等しくする。 口縁部は外反気味に立ち上がり、横ナデ。底部ヘラ削り。 赤色塗彩。	
54	M－8 2	土師器 坏	周堀 北東	口　11.5 底　11.6 高　4.2	①良②良 ③5YR6/8 ④80%	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。	
55	M－8 3	土師器 甕	—	口縁の一部のみ	①密②良好 ③10YR6/4	口縁部横ナデ。大型甕の一部。	
56	M－8 4	土師器 甕	—	底部の一部	①密②良好 ③7.5YR6/	円盤状の底部から体部を壺状に横方向へ強く張り出す。	
57	M－8 5	須恵器 甕	中央	胴部の一部	①稠密②良好 ③N4/	外面ヘラ削り。内面ヘラ削り。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　　考
58	M－86	須恵器 甕	—	胴部の一部	①密②良好 ③10Y5/1	外面叩き目痕。内面ヘラ削り。	
59	M－87	須恵器 甕	中央	胴部の一部	①密②良 ③10Y7/1	表面ナデ調整。焼成煤付着。内面10Y5/1 叩き後、ナデ調整。	
60	M－88	須恵器 甕	北西	胴部の一部	①良 ②良 ③N5/	表面ヘラ調整。内面叩き目痕あり。ナデ調整。	
61	M－89	須恵器 甕	中央	胴部の一部	①稠密②良好 ③N5/	外面ヘラ削り。内面叩き目痕あり。	
62	M－810	須恵器 甕	—	胴部の一部	①稠密②良好 ③N5/	外面叩き目痕。内面ナデ調整。中心部に同心円状櫛目痕。 内側に返りの端部が残る。	
63	M－811	須恵器 壺	北半	肩部	①稠密②良好 ③2.5Y7/1	外面自然釉。2.5Y5/2。	
64	M－812	須恵器 壺	北半	頸部の一部	①稠密②良好 ③2.5Y5/1	5条の櫛描波状紋と区画凸線を持つ。焼成時の自然釉が 内外面にかかる。	
65	M－813	須恵器 甕	北西	肩部	①密②良好 ③外N5/ 内N5/	M－8、15と一体か。	
66	M－814	須恵器 甕	南ベルト	胴部	同上	M－8・13、15と一体か。	
67	M－815	須恵器 提　瓶	北半	胴部	①密②良好 ③外N5/ 内N5/	外部櫛描き同心円。内部絞り目痕あり。	
68	M－91	須恵器 甕	—	胴部	①良②良好 ③N5/	内面叩き目。 外面櫛描き紋。	
69	M－92	須恵器 甕	—	胴部	①良②良好 ③10Y5/1	内面ナデ調整。 外面縦横の櫛描き文。	
70	M－101	土師器 坏	西溝	口　(13.1) 底　(12.0) 高　5.3	①良②良好 ③5YR5/8 ④50%	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。	
71	M－102	土師器 坏	西南	口　12.3 底　11.6 高　5.5	①密②良好 ③5YR5/8 ④90%	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。	
72	M－103	土師器 坏	—	口　15.8 底　16.0 高　8.1	①密②良好 ③2.5YR5/8 ④95%	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。	
73	M－104	土師器 坏	—	口　13.7 底　—— 高　5.3	①稠密②良好 ③5YR5/8 ④80%	口縁部横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き。外面ヘラ削り。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　　考
74	M—105	土師器 甕	—	口　　16 底　　—— 高　　(16.3)	①稠密②良好 ③2.5YR⅘ ④50%	口縁部外反。胴上部に最大径を持ち口縁部から壺状に丸くなり、明確な肩を持たない。赤色塗彩。	
75	M—106	土師器 甕	—	口　　(14.3) 底　　5.8 高　　24.8	①密②良 ③7.5YR¾ ④50%	口縁部外反、胴中央部に最大径を持つ。底部成形後上部を輪積みで付け足す。10R⅝及び5YR⅞の二次焼成痕あり。	
76	M—107	須恵器 甕	北西	胴部	①密②良好 ③5Y⅝	内外面に叩き目痕を有す。	
77	M—108	須恵器 甕	南ベルト	胴部	①稠密②良好 ③N⅗	内外面に叩き目痕あり。	
78	M—109	須恵器 甕	北東	胴部	①稠密②良好 ③10Y⅝	固く焼きしまる。内外面共に叩き目痕あり。	
79	M—1010	須恵器 甕	南西	胴部	①稠密②良好 ③2.5Y⅝	輪積み成形後、水挽きロクロ整形。 2.5YR⅘の二次焼成痕あり。	
80	M—111	土師器 甕	南西	口縁部	①密②良 ③10YR⅝	内外とも横ナデ。外面に波状櫛描き紋あり。	
81	M—121	土師器 坏	南東	口縁部	①密②良好 ③5YR¾	口縁部横ナデ。一部に二次焼成痕あり。	
82	M—122	土師器 坏	南東	一部	①稠密②良好 ③5YR⅝	外反口縁。口縁部横ナデ。底部ヘラ削り。内面ナデ潰し。	
83	M—123	土師器 壺	南東	底部 底径　　3.8	①稠密②良好 ③5YR¾	外面ヘラ削り。内面磨き調整。	
84	M—124	須恵器 瑞	—	胴部 高　　(8.9)	①稠密②良好 ③10Y⅝ ④体部90%	半球状から肩部を付け足す。5条の櫛目で波状紋を表し、区画帯二条を沈線で出す。内外面共に自然釉あり。	
85	M—151	土師器 小型甕	周堀 北	口縁から底部に 近い胴部の一部	①密②良好 ③7.5YR¾	外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ヘラナデ。 胴部成形後口縁部を作り足す痕跡あり。	
86	M—152	土師器 甕	南東	口縁部	①密②良好 ③5YR⅝	内外面とも横ナデ後ヘラ磨き。口縁端部を80°近く内側に曲げる作り。	
87	M—153	土師器 甕	南西	底部の一部	①やや良②良好 ③7.5YR¾	外面ヘラ削り。 内面ヘラナデ。	
88	M—154	土師器 甕	北東	底部の一部	①粗②良好 ③5YR⅝	内外面ともにヘラナデ。	
89	M—155	土師器 甕	周堀 北・北東	口　　21.4	①密②良好 ③5YR⅝	内外面ヘラ削り。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　考
90	M—15 6	土師器 甕	—		①粗②良好 ③5YR5/4	外面ヘラ削り。胴部一部にスス付着。	
91	M—15 7	須恵器 甕	周堀 北	胴部の一部	①密②良好 ③7.5Y5/1	内面横ナデ。外面ロクロ成形後波状櫛描き文を施す。	
92	M—15 8	須恵器 甕	東北	胴部の一部	①稠密②良好 ③7.5Y5/1	内面叩き目痕。 外面粗い櫛描き。自然釉あり。	
93	M—15 9	須恵器 甕	周堀 北	胴部の一部	①稠密②良好 ③7.5Y6/1	内面叩き目痕。外面粗い横櫛描き文。	
94	M—15 10	須恵器 甕	周堀 北	胴部の一部	①やや良②良好 ③10Y5/1	内面叩き目痕をナデで覆う。 外面ヘラ削り後ヘラナデ。	
95	M—15 11	須恵器 甕	周堀 北	胴部の一部	①良②良好 ③7.5Y7/1	内面叩き後ヘラナデ。 外面ヘラナデ。	
96	M—16 1	須恵器 甕	—	胴部の一部	①密②良好 ③7.5Y7/1	内面叩き目痕あり。 外面粗い横櫛描き紋。	
97	M—16 2	須恵器 甕	中央	胴部の一部	①稠密②良好 ③7.5Y6/1	内面叩き目痕。 外面粗い横櫛描き紋。	
98	M—16 3	須恵器 甕	北東	胴部の一部	①稠密②良好 ③7.5Y6/1	M—16の2と同一個体と思われる。	
99	M—17 1	土師器 坏	周堀 北東	口　12.8 高　5.8	①密②良好 ③7.5R4/6	内面と外面口縁部横位の横ナデ 外面下半ヘラ削り。	
100	M—17 2	土師器 甕	周堀 北東	口　16.2 底　6.8 高　23.3	①稠密②良好 ③5YR5/6 ④80%	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。 底部木葉痕	
101	M—19 1	土師器 坏		口縁から胴部への一部	①稠密②良好 ③5YR5/6 ④口縁から体部への一部	外面ヘラ削り。内面一部にヘラ磨きあり。ナデ調整。口縁部横ナデ。	
102	M—19 2	須恵器 甕	南西	口縁部の一部	①密②良好 ③7.5Y7/1	横ナデ。	
103	M—19 3	土師質 長頸壺	南西	頸部から肩の一部	①密②良 ③7.5YR5/4	外面ナデ。内面ヘラ削り後ヘラ磨き。胴部はヘラ削りのみ。	
104	M—19 4	須恵器 小型甕	北西	胴部の一部	①稠密②良好 ③10Y5/1	薄手。内外面とも叩き目痕あり。	
105	M—19 5	土師質 甕	南西	底部の一部	①良好②良 ③5YR5/3	外面ヘラ削り。内面ヘラ磨き。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　考
106	M—19 6	須恵器 大　甕	西ベルト	胴部の一部	①稠密②良好 ③5Y7/1	外面ヘラ削り後ヘラ磨き。 内面叩き目痕あり。	
107	M—19 7	須恵器 甕	南ベルト	胴部の一部	①やや良②良 ③N5/	内面叩き目痕あり。 外面櫛削り。	
108	M—19 8	須恵器 甕	南東	胴部の一部	①稠密②良好 ③7.5Y5/1	内面叩き目。 外面櫛削り自然釉を受ける。	
109	M—19 9	須恵器 甕	南ベルト	胴部の一部	①密②良好 ③N5/	内面ナデ調整。 外面ヘラ削り。	
110	M—19 10	須恵器 甕	南ベルト	胴部の一部	①稠密②良好 ③N5/	内面ヘラ削り後ナデ調整。外面ヘラ削り。 焼成時の灰を受ける。	
111	M—19 11	須恵器 甕	南ベルト	胴部の一部	①密②良 ③N5/	内外面ともヘラ削り。 外面焼成時の灰を受ける。	
112	M—19 12	土師質 甕	南西	胴部の一部	①密②良 ③2.5YR5/3	内外面ともヘラ削り。 外面二次焼成7.5YR5/1を呈す。	
113	M—19 13	土師質 甕	南西	底部に近い胴部 の一部	①密②やや良 ③5YR5/4	底部成形後重ねつないで上部を作り足す。 内・外面ともヘラ削り。	
114	M—19 14	須恵器 大　甕	南東	頸部から胴部へ の一部	①密②良好 ③N5/	体表から頸部の内側まで自然釉がかかる。器厚の中心部に焼成による空隙を生じる。内面叩き目。表面櫛描き紋あり。	
115	M—20 1	土師器 坏	北西	口縁部	①良②良好 ③2.5YR5/6	横ナデ。	
116	M—20 2	須恵器 甕	西ベルト	胴部の一部	①密②良好 ③7.5Y7/2	外面粗い櫛描き。内面叩き目後ヘラナデ。	
117	M—21 1	土師器 坏	南	口縁から体部の 一部	①密②良好 ③2.5YR5/6	外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデ調整。	
118	M—21 2	土師器 坏	西	口　(13.7) 底　—— 高　5.6	①密②良 ③5YR5/6 ④50%	口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。外面ヘラ削り。	
119	M—21 3	土師器 坏	北東	口　(14.6) —— 高　(5.3)	①良②良 ③5YR5/6 ④20%	口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。 内面ヘラ磨き。	
120	M—21 4	土師器 小型甕	南東	口縁から体部へ の一部	①密②良好 ③10YR5/4	外面体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ヘラ調整輪積み痕あり。	
121	M—21 5	土師器 甕	—	口　17.3 底　6.4 高　28.5		外面ヘラ削り。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　考
122	M—216	土師器 甕	—	口　15.0		内面輪積み痕 外面ヘラ磨き。	
123	M—221	土師器 坏	北西	口　(12.8) 底　—— 高　4.1	①良②良好 ③2.5YR5/6 ④30%	口縁横ナデ。外面ヘラ削り。内面ヘラ磨き。 器高が低く、口縁が水平に開く。	
124	M—222	土師器 坏	東ベルト	口　(14.2) 底　—— 高　6.0	①密②良 ③5YR5/6 ④40%	口縁部横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き。 外面ヘラ削り。底部黒色。二次焼成痕。	
125	M—223	土師器 坏	北西	口縁から体部の 一部	①密②良好 ③2.5YR5/6	口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き。外面ヘラ削り。	
126	M—241	土師器 坏	—	口　14.6 底　6.0	①密②良 ③2.5YR5/4	外面口縁部横位の撫で。体部指ナデ。 内面工具による撫で。	
127	M—242	土師器 坏	—	口　13.0 底　—— 高　6.2	①密②良好 ③5YR5/6 ④100%	口縁部横ナデ、内面ヘラ削り。外面ヘラ削り。 赤色塗彩痕あり。	
128	M—243	須恵器 甕	東ベルト	胴部	①良②良 ③7.5Y5/1	内面叩き目痕。 外面粗い横櫛描き文。 内面色調10R4/3。	
129	M—251	土師器 坏	北東	口　14.3 底　—— 高　5.6	①稠密②良好 ③5YR4/6 ④80%	口縁部横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き。 外面ヘラ削り。	
130	M—261	土師器 坏	北東	口縁から体部	①稠密②良好 ③2.5YR5/6	口縁部横ナデ。 外面ヘラ削り。 内面ヘラ磨き。	
131	M—262	土師器 甕	北東	頸部から胴部	①良②良好 ③10YR5/4	内面ヘラナデ。 外面ヘラナデ。	
132	M—263	土師器 甕	北東	底部の一部	①良②良好 ③10YR5/4	内面ヘラナデ。 外面ヘラ削り。底部に二次焼成痕あり。赤色塗彩。	
133	M—264	須恵器 甕	北西	口縁部	①粗②良好 ③7.5Y5/1	内外とも焼成時の自然釉。	
134	M—265	須恵器 甕	北西	口縁部	①良②良好 ③10Y7/1	内外ともナデ調整。 外面自然釉あり。	
135	M—266	須恵器 甕	北東	胴部	①稠密②良好 ③7.5Y5/1	内面ナデ調整。 外面ナデ調整後横位の櫛描き短線を並べる。	
136	M—271	土師器 坏	南西	口　14.5 底　—— 高　5.9	①稠密②良好 ③5YR5/6 ④98%	口縁部横ナデ。内面ナデ。 外面ヘラ削り。	
137	M—272	土師器 坏	南東	口　(14.2) 底　—— 高　5.7	①密②良好 ③5YR5/6 ④60%	口縁部横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き 外面ヘラ削り。	

番号	挿図No.	形　種	出土位置	法　量(m) 口径・底径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形の特徴・成形・調整技法	備　考
138	M—27 3	土師器 甕	南東	口　(20.2) 底　6.8 高　(22.3)	①粗②良好 ③5YR5/4	内外面ヘラ削り。外面撫でつけ。 外面口縁部横位の撫で。外面スス付着。	
139	M—28 1	土師器 甕	—	底　6.3	①粗②良好 ③5YR5/6	外面ヘラ磨きにヘラ削り。胴部一部にスス付着。	
140	M—28 2	土師器 壺	—		①良②良好 ③2.5YR5/6	外面ヘラ磨き。内面ヘラ削り。	
141	M—29 1	土師器 壺	—	口　12.4 底　6.2 高　21.5	①密②良 ③2.5YR5/6	口縁部横ナデ。 外面ヘラ削り。	
142	M—29 2	須恵器 甕	南西		①密②良好 ③10Y7/1	内外面叩き。	
143	A—14 挿120 13	土師器 甕	—	口　13.2 底　—— 高　(25.2)	①密②良 ③10YR7/3 ④70%	体部下方に最大径を持つ無果花形。口縁部横ナデ。 一部に黒色二次焼成痕を有す。	

表—4　出土遺物観察表　銅・鉄製品・石製品・玉類

番号	挿図No.	器種	出土位置	法量・器形・成形の特徴・残存	重量(g)	備　考
1	M—2 1	耳　環	主体部 石室内	外径1.20×2.00。内径1.10×1.10。断面径0.80×6.60。切込幅0.20。 楕円形の形態。新環のみの残存。完形。	11.0	
2	M—2 2	耳　環	主体部 石室内	外径3.20×2.90。内径1.50×1.50。断面径0.90×0.70。切込幅0.20。 楕円形の形態。新環のみの残存。完形。	26.2	
3	M—6 1	勾　玉	主体部	径3.50×2.30。厚1.00。孔径0.30×0.40。頭部やや幅広。 表、裏面共に各2面取り。面取部は、擦痕状の調整痕あり。瑪瑙製か。	10.5	
4	M—6 2	勾　玉	主体部	径2.10×1.90。厚0.90。孔径0.30×0.40。頭部やや幅広。 表、裏面共に各2面取り。面取部、擦痕あり。瑪瑙製か。	6.8	
5	M—6 3	勾　玉	主体部	径3.10×1.90。厚0.90。孔径0.40×0.30。3点のうち最も小形。 表、裏面共に各2面取り。主には横位方向に擦痕認む。瑪瑙製か。 形状やや「コ」の字状。表面穿孔部幅広。	5.8	
6	M—7 1	鉄　鏃		現存長14.0。篦被長11.5。刃部長2.80。茎現長2.50。刃部幅0.7。 厚0.3。身部中位径0.5。厚0.4。茎幅0.6。厚0.5。 有茎式細根形。刃部は片刃か。茎下端を欠損する。	10.1	
7	M—7 2	鉄　鏃		現存長9.5。篦被長9.4。刃部長3.0。刃部幅0.8。厚0.4。身部中位径0.6。厚0.5。銹化著しい。茎以下を欠損。 有茎式細根形。刃部は片刃。	6.0	
8	M—7 3	鉄　鏃		現存長13.4。篦被現長8.7。茎現長4.7。身部幅0.4。厚0.4。茎幅0.4。厚0.3。刃部先端を欠損。茎部巻込痕あり。材質不明。 有茎式細根形。	10.3	

番号	挿図No.	器種	出土位置	法量・器形・成形の特徴・残存	重量(g)	備考
9	M－74	鉄鏃		現存長8.5。篦被現長3.8。茎現長4.7。身部長0.4。厚0.4。茎幅0.35。厚0.3。身部先端を欠損。茎端部巻込痕あり。材質不明。 有茎式細根形。	5.4	
10	M－75	鉄鏃		現存長5.4。茎現長4.7。幅0.4。厚0.3。 身部大半を欠損する。茎下半巻込痕あり。材質不明。 有茎式。	3.3	
11	M－76	鉄鏃		現存長7.6。篦被長のみの残存。刃部幅0.8。厚0.3。身部幅0.5。厚0.4。身部下端に鹿の子状の面をもつ繊維付着。 有茎式細根形か。刃部は片刃。	4.9	
12	M－77	鉄鏃		2対付着した状態で出土。左現存長8.8。篦被現長6.7。茎現長2.1。 身部幅0.5。厚0.3。茎部幅0.3。厚0.3。右現存長7.5。篦被現長6.7。身部幅0.5。厚0.3。茎部幅0.4。厚0.3。共に両端部欠損。有茎式。	10.5	右茎部木質付着。
13	M－78	鉄鏃		2対付着した状態で出土。篦被部のみの残存。現存長5.2。片側刃部幅0.8。厚0.3。身部幅0.4。厚0.3。刃部に表面鹿の子状の繊維付着。	5.3	12と同一個体か。
14	M－79	刀子か		現存長0.4。刃部幅1.6。厚0.3。棟は平背。 刃部のみの残存。錆化著しい。	6.3	
15	M－710	刀子か		現存長6.0。刃部幅1.2。厚0.4。棟は平背。 刃部のみの残存。錆化著しい。	7.0	
16	M－101	－		L字状の形状。断面方形状。片側端部先細りする。 現存長6.2。幅0.5。厚0.5～0.6。錆化著しい。	7.5	
17	M－102	－		一部L字状に折れ曲がる。器面剝落著しい。 器肉概して薄い。現存長5.2。	4.1	
19	M－121	－		棒状。断面長方形状。S字状に彎曲する。錆化著しい。 現存長4.5。幅0.5。厚0.3。	2.6	
20	M－201	－		板状の形態。器肉概して厚い。 径4.5×4.5。厚0.9。	74.5	
21	M－261	－		薄い板状で、片側端部折れ曲がる。錆化著しい。 径3.1×2.6。厚0.1。	2.2	
22	挿12014	板碑		現存長90.0。幅83.0。厚5.0。 根部欠損。山形上端欠損。種子。	4210.0	
23	挿12115	板碑		現存長80.0。幅25.0。原4.0。 板状に成型。小型の器形。	1650.0	
24	挿12116	板碑		現存長35.0。幅38.0。厚5.0。 根部のみ残存。山形は丸み強い。刻字の痕跡認めがたい。	1160.0	
25	挿12117	砥石		全長7.1。幅2.3。厚2,7。重量57g 3面に条線状の調整痕残る。上面は使用痕著しく、平滑化する。	57.0	

番号	挿図No.	器種	出土位置	法量・器形・成形の特徴・残存	重量(g)	備考
26	挿121 18	石臼		直径30.0。高さ8.0。挽き手穴径1.8。茎穴径（4.6）上縁高（2,2）上縁幅（2.2）副溝6区画か。全形の⅓ ふくみは中心に向かって傾斜。上縁は平坦。	2360.0	
27	挿122 19	石臼		直径28.8。高さ11.6。供給口径上3.3　下4.0。芯穴径（4.4）全形の約½残。上縁欠損。 供給口は断面L字形。2方向より貫通か。ふくみは中心に向かって傾斜。	5070.0	
28	挿121 20	大刀？		現存長　茎長　幅　厚 部分的に木質残存。棟部は平らか。内部の状態不鮮明。全体的に錆化著しい。	900.0	
29	挿122 21	銭貨	2号遺構	外輪径2.5。内輪径2.0。郭径0.9。 銭名は不明。腐食著しい。	2.2	
30	挿122 22	銭貨	—	外輪径2.2。内輪径1.9。郭径0.8。 「寛永通寶」初鋳1636年。対読。真書。	3.4	
31	挿122 23	銭貨	1号遺構	外輪径2.4。内輪径2.0。郭径0.8。 「皇宋通寶」宋銭。初鋳1039年。対読。篆書か。	2.3	
32	挿122 24	銭貨	—	外輪径2.5。内輪径2.0。郭径0.8。 「寛永通寶」背文「文」。対読。真書。	3.4	
33	挿122 25	銭貨	—	外輪径2.4。内輪径1.8。郭径0.7。 「寛永通寶」対読。真書。背側の郭径幅広。	2.4	
34	挿122 26	銭貨	—	外輪径2.2。内輪径1.8。郭径0.8。 「寛永通寶」か。対読。器肉薄い。	1.1	
35	挿122 27	銭貨	—	外輪径2.5。郭径0.8。 銭名不明。腐食著しい。	3.0	
36	挿122 28	銭貨	1号遺構	外輪径2.5。内輪径1.9。郭径0.8。 「祥符元寶」北宋銭。初鋳1008年。廻読。行書。	2.5	
37	挿122 29	銭貨	—	径2.2	2.8	
38	挿122 30	銭貨	—	径2.3	4.3	
39	挿122 31	銭貨	—	全形の⅓残存。縁幅0.2。	0.9	
40	挿122 32	銭貨	—	外輪径2.3。内輪径1.9。郭径0.8。 「寛永通寶」対読。真書。	1.4	

表－5　Ｊ１号住居跡出土土器観察表

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土　②色調　③残存	時期	出土位置	備考
1	125－1	半截竹管による平行沈線と連続爪形文。	①中粒②②赤褐③口縁部	諸磯ａ	雑	
2	125－2	２本１組と半截竹管による平行沈線。円管文。	①繊維②浅黄③口縁部	黒浜	〃	２～７は同一個体
3	125－3	半截竹管が密接して条痕状に入る。円管文。	①繊維②浅黄③胴部	黒浜	〃	
4	125－4	２本１組半截竹管により菱形構成の平行沈線。円管文。	①繊維②浅黄③胴部	黒浜	〃	
5	125－5	２本１組の半截竹管により菱形構成の平行沈線。円管文。	①繊維②浅黄③胴部	黒浜	〃	
6	125－6	２本１組の半截竹管により菱形構成の平行沈線。円管文。下半は条痕状。	①繊維②浅黄③胴部	黒浜	〃	
7	125－7	２本１組の半截竹管により菱形構成の平行沈線。円管文。下半は条痕状。	①繊維②浅黄③胴部	黒浜	＋－０	
8	125－8	縄文ＲＬを地文とし円形の刺突がやや斜めに２ケ押捺。	①繊維②赤褐③胴部	諸磯ａ	雑	８・９は同一個体
9	125－9	縄文ＲＬを地文とし円形の刺突がやや斜めに３ケ押捺。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	雑	
10	125－10	半截竹管による幅広の平行沈線。沈線内には刻み。円形の貼付。	①繊維②浅黄橙③胴部	関山２	〃	
11	125－11	押捺の浅い縄文ＲＬ。	①中粒②赤褐③口縁部	諸磯ａ	〃	11・12は同一個体
12	125－12	押捺の浅い縄文ＲＬ。	①中粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
13	125－13	押捺の浅い縄文ＲＬ。	①中粒②橙③胴部	諸磯ａ	＋３	
14	125－14	縄文ＲＬ。	①細粒②にぶい赤褐③胴部	諸磯ａ	雑	
15	125－15	縄文ＲＬ。	①細粒②灰黄褐③胴部	諸磯ａ	＋12	
16	125－16	縄文ＲＬ。	①細粒②灰黄褐③胴部	諸磯ａ	＋３	
17	125－17	縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	雑	17・18は同一個体
18	125－18	縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	＋－０	
19	125－19	縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	雑	
20	125－20	縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
21	125－21	縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
22	125—22	縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
23	125—23	０段多条縄文ＲＬ。	①細粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
24	125—24	縄文ＲＬ。	①細粒②明黄褐③胴部	諸磯ａ	〃	
25	125—25	縄文ＲＬ。結節。	①中粒②明黄褐③胴部	諸磯ａ	〃	25～27は同一個体。
26	125—26	縄文ＲＬ。結節。	①中粒②明黄褐③胴部	諸磯ａ	〃	
27	125—27	縄文ＲＬ。結節。	①中粒②明黄褐③胴部	諸磯ａ	〃	

Ｊ２号住居跡出土土器観察表

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
1	127—1	平口縁。口唇は平坦。０段多条縄文ＲＬとＬＲによる菱形構成。底部は揚げ底。	①繊維②橙③½	有尾系	－４	
2	127—2	平口縁。口唇部は内削ぎ状。０段条縄ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③⅓	有尾系	＋３	
3	127—3	平口縁。口唇部はやや内削ぎ状。口縁部から胴上半部にかけて横方向のナデによる無文部を形成する。胴中位～下部にかけて０段多条縄文ＲＬ・ＬＮによる羽状構成。	①繊維②橙③⅔	有尾系	－４	
4	127—4	平口縁。口唇部は内削ぎ状を呈する。０段多条縄文ＬＲ・ＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい黄橙③⅔	有尾系	＋４	
5	127—5	平口縁。口唇部は内削ぎ状。０段多条縄文ＬＲとＲＬによって菱形文が構成される。底部は揚げ底。	①繊維②にぶい黄③ほぼ完形	有尾系	＋３、Ｍ－７接	
6	127—6	平口縁。口唇部は平坦。０段多条縄文のＲＬとＬＲによって菱形文を構成する。口縁上端部の縄文はナデに消し。	①繊維②浅黄③⅔	有尾系	－４	
7	127—7	平口縁。口唇は平坦。０段多条縄文ＬＲとＲＬによって菱形文を構成。	①繊維②明赤褐③⅔	有尾系	－６	
8	127—8	胴上半～中位を大きく欠損する。０段多条縄文ＲＬ・ＬＲによる羽状構成。	①繊維②橙③⅓	有尾系	＋48 ヌ－15接	
9	127—9	縄文Ｌと０段多条縄文ＲＬにより菱形文構成。揚げ底。	①繊維②明赤褐③⅙	有尾系	－９	
10	127—10	平口縁。口唇は尖る。縄文Ｒが胴上半部に施文される。底部は揚げ底。	①繊維②橙③⅓	有尾系	＋27	
11	127—11	平口縁。口唇尖る。縄文ＬとＲによって菱形文構成。	①繊維②橙③⅓	有尾系	＋７、ヌ－15接	
12	127—12	異束縄文Ｌが横位施文。底部は揚げ底。	①繊維②黄橙③⅙	黒浜	＋23	
13	128—13	平口縁。口唇部は平坦。縄文ＬとＲによって菱形構成。底部は揚げ底。	①繊維②暗赤褐③⅔	有尾系	＋６	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
14	128—14	平口縁。口唇はやや内削ぎ状。0段多条縄文LとRによって菱形文を構成。	①繊維②橙③⅘	有尾系	－8	
15	128—15	4単位の波状口縁。口唇部は平坦に作出。0段多条縄文LおよびRが多段にわたって羽状構成。	①繊維②にぶい橙色③⅓	有尾系	＋6	
16	128—16	4単位の波状口縁。口唇部は内削ぎ状。胴上半部に半截竹管による平行沈線で菱形文が構成され、部分的に爪形文が入る。菱形文内には、半円と直線がA＋A＋B＋Bの構成をとる。胴下半は縄文LとRLで羽状構成。	①繊維②灰黄褐③½	有尾系	－3	
17	128—17	4単位の波状口縁。口唇部は平坦。胴上半部に半截竹管による菱形文を構成する。4単位の菱形文内には、「つ」の字状の曲線がそれぞれ施文される。胴部には、縄文RとLによる羽状構成。	①繊維②灰黄褐③½	有尾系	＋9	
18	128—18	平口縁。口唇部は平坦。半截竹管により菱形を意識した三角形の区画が4単位で描かれ、上下に平行線が巡る。胴部には縄文LRとRLによる菱形構成。	①繊維②橙③½	有尾系	＋8	
19	129—19	口縁部欠落により口縁形状不明であるが、文様構成からみると、平口縁であろう。半截竹管による平行沈線で菱形ないしは鋸歯文が2段以上構成される。部分的に鋸歯がくずれた格子目状になる。胴部下半部に縄文Lが施文される。底部は揚げ底。	①繊維②明赤褐③胴部	有尾系	－3	
20	129—20	4単位の小波状口縁。半截竹管による平行沈線で菱形文構成。胴部には2本1組とした撚糸文Rが施文される。	①繊維②浅黄③口縁部	有尾系	雑	
21	129—21	波状口縁。幅のある半截竹管による平行沈線で菱形文が構成される。	①繊維②にぶい橙③口縁部	有尾系	雑ヌ－15接	
22	129—22	幅広の半截竹管による菱形文構成。胴部には縄文LR。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋24	
23	129—23	半截竹管によるくずれた平行沈線。波状口縁。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	有尾系	雑	
24	129—24	粗い肉厚の半截竹管により菱形文が構成される。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	〃	
25	129—25	幅広の半截竹管による平行沈線が施文された後に、肉厚の半截竹管による連続爪形文。口唇部は内削ぎ状で、外縁に刻み。	①繊維②浅黄③口縁部	有尾系	〃	
26	129—26	波状口縁。半截竹管による平行沈線と連続爪形文。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	〃	
27	129—27	半截竹管による平行沈線と連続爪形文。	①繊維②赤褐③口縁	有尾系	〃	
28	129—28	平行沈線と連続爪形文により菱形文構成。口唇部は角頭状。	①繊維②浅黄③口縁	有尾系	〃南北断面	
29	129—29	半截竹管による平行沈線の後、連続爪形文で菱形構成。	①繊維②にぶい黄橙③胴部	有尾系	雑	
30	130—30	平行沈線と連続爪形文による菱形文構成。口唇部は内削ぎ状。	①繊維②浅黄③口縁	有尾系	－4	
31	130—31	半截竹管による格子目を構成。	①繊維②にぶい黄③胴部	有尾系	雑	
32	130—32	半截竹管による有節沈線。	①中粒②赤褐③口縁部	前期末～中	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
33	130—33	隆帯と山形の沈線。	①金雲母②暗赤褐③胴部	阿玉台	〃	
34	130—34	波状口縁。口唇は肥厚し、内面に稜をなす。無文部。	①金雲母②灰褐③口縁部	阿玉台	〃	
35	130—35	隆帯と沈線。	①中粒②明赤褐③胴部	中期	〃	
36	130—36	隆帯と幅広の沈線による曲線。	①細粒②暗赤褐③胴部	後期	〃	
37	130—37	隆帯と結節沈線。	①金雲母②赤褐③胴部	阿玉台	〃	
38	130—38	隆帯と幅広の間隔を空けた刻み。	①金雲母②暗赤褐③胴部	阿玉台	〃	
39	130—39	２本１単位とした撚糸文Ｒ	①繊維②黄褐③胴部	黒浜	〃	
40	130—40	２本１組の撚糸文Ｌの上に４本１組の撚糸文Ｒの組合わせ	①繊維②赤褐③胴部	黒浜	〃	
41	130—41	平口縁。口唇部は平坦。縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	〃	
42	130—42	平口縁。口唇部は尖る。異束の縄文Ｌ。	①繊維②浅黄③½	黒浜	＋７、ヌ－15接	
43	130—43	平口縁。縄文ＬとＲによる羽状縄文。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	有尾系	＋43	
44	130—44	波状口縁。０段多条縄文のＲＬとＬＲによゆ羽状構成。	①繊維②浅黄③口縁部	有尾系	＋19	
45	130—45	０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②灰褐③胴部	有尾系	－10	
46	130—46	平口縁。口唇部には間隔を空けて浅い凹みが押捺される。縄文Ｒが空白をあけて施文される。	①繊維②暗赤褐③口縁部	有尾系	雑、ヌ－15接	
47	130—47	縄文Ｌ。胴下半は無文部。	①繊維②灰黄褐③胴部	有尾系	〃	
48	130—48	縄文Ｒ。下半は無文部。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	＋37、ヌ－あお接	
49	131—49	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状縄文。	①繊維②黄橙③½	有尾系	＋７	
50	131—50	波状口縁。０段多条縄文ＲＬが横位に施文される。下部は空白を残して施文。	①繊維②暗赤褐③½	有尾系	－４、ヌ－15接	
51	131—51	縄文ＬＲとＲＬによる不規則な羽状構成。	①繊維②赤褐③口縁～胴部	有尾系	雑	
52	131—52	０段多条縄文ＬＲとＲＬにより羽状構成。	①繊維②灰褐③胴部	有尾系	＋43	
53	131—53	平口縁。口唇は内削ぎ状。０段多条縄文ＬＲとＲＬにより菱形構成をとる。	①繊維②暗赤褐③口縁～胴	有尾系	十26	
54	131—54	０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。上半は無文部を残す。	①繊維②暗赤褐③胴部	有尾系	雑	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
55	131—55	0段多条縄文ＬＲと縄文ＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	〃、ヌ－15接	
56	131—56	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③胴部	有尾系	＋43	
57	132—57	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③胴部	有尾系	＋8	
58	132—58	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	雑	
59	132—59	無文部。	①繊維②赤褐③胴部	前期中葉	＋10	
60	132—60	土製円盤。連続爪形文。周囲はわずかに研磨が入る。	①繊維②灰黄褐③完形	有尾系	雑	
61	132—61	土製円盤。0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②暗赤褐無完形	有尾系	＋43	
62	132—62	揚げ底。縄文Ｒ。	①繊維②黄橙③底部	有尾系	＋19	
63	132—63	揚げ底。縄文ＲとＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	雑	
64	132—64	揚げ底。縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	〃	
65	132—65	揚げ底。0段多条縄文ＬＲと縄文ＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	〃	
66	132—66	揚げ底。0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	〃	
67	132—67	揚げ底。縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	－9	
68	132—68	平底。縄文Ｒ。底部にも縄文ＬとＲの羽状構成。	①繊維②黄橙③底部	有尾系	＋37	
69	132—69	揚げ底。0段多条縄文ＬＲ。	①繊維②黄橙③底部	有尾系	＋3	
70	132—70	揚げ底。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋3	
71	132—71	やや揚げ底。0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②灰黄③底部	有尾系	雑	
72	132—72	揚げ底。0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②明黄褐③底部	有尾系	＋7	
73	132—73	揚げ底。0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③底部	有尾系	＋9	
74	132—74	揚げ底。0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	－4	
75	132—75	揚げ底。縄文ＬＲ。	①繊維②黄橙③底部	有尾系	＋7	
76	132—76	揚げ底。0段多条縄文ＬＲとＲＬよる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③底部	有尾系	＋24	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
77	132—77	0段多条縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋3	
78	132—78	揚げ底。縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋43	
79	132—79	台付土器の底部。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②灰黄③底部	有尾系	＋23	

Ｊ３号住居跡出土土器観察表（１～72）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
1	136—1	平口縁。口唇部は平坦。底部は揚げ底。口縁部に半截竹管による求位の沈線が５～６条施され、その上に崩れた菱形文が描かれる。胴部には縄文Ｌを横位施文。	①繊維②にぶい黄橙③⅔	有尾系？	＋4	
2	136—2	平口縁。口唇部は平坦。底部は揚げ底。縄文ＬとＲによる菱形構成。	①繊維②橙③ほぼ完形	有尾系	＋15	
3	136—3	平口縁。口唇部は内削ぎ状。縄文のＬとＲによる菱形構成。	①繊維②黄橙③⅓	有尾系	＋8	
4	137—4	平口縁。口唇部は凹み状。縄文ＬとＲの横位施文による菱形文構成。底部は揚げ底。	①繊維②橙③⅔	有尾系	＋12	
5	137—5	平口縁。口唇部は内削ぎ状。底部は揚げ底。縄文ＬとＲにより菱形文が構成される。	①繊維②にぶい黄橙③⅓	有尾系	＋8	
6	187—6	平口縁。口唇部は凹字状。縄文ＲとＬによる羽状構成。	①繊維②明赤褐③⅓	有尾系	＋2	
7	137—7	平口縁。口唇部は平坦。底部は揚げ底。縄文ＬとＲにより菱形構成。	①繊維②赤褐③¾	有尾系	＋36	
8	137—8	平口縁。口唇は凹字状。縄文ＬとＲによる羽状構成。口縁端部にナデが入る。	①繊維②にぶい赤褐③¼	有尾系	＋3	
9	137—9	口縁～胴部を欠損する。残存する範囲で文様は、縄文ＬとＲによる羽状構成。底部は揚げ底気味。	①繊維②橙③½	有尾系	＋24	
10	138—10	平口縁。口唇部は内削ぎ状。口縁部に縄文ＬとＲによる羽状構成。胴部は0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③½	有尾系	＋46	
11	138—11	平口縁。口唇部は平坦もしくは内削ぎ気味。全体的にゆがんであり、底部が張り出し揚げ底となる。文様は縄文Ｒを横位施文。	①繊維②灰赤③ほぼ完形	有尾系	＋2、リ－15接	
12	138—12	4単位の波状口縁。口唇部は平坦もしくは内削ぎ状を呈する。縄文Ｌと0段多条縄文ＲＬにより羽状構成。底部は揚げ底。	①繊維②橙③⅓	有尾系	＋32	
13	138—13	平口縁。口唇部は内削ぎ状となる。縄文Ｌと縄文ＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③½	有尾系	＋－0	
14	138—14	平口縁。口唇は内削ぎ状。口縁～胴部に縄文ＲＬが間隔を空けて横位施文。胴部下半は横方向のナデつけ。底部は揚げ底気味。	①繊維②橙③ほぼ完形	有尾系	＋8	
15	138—15	口縁部を欠損するが、連続爪形文による菱形構成。胴部は0段多条縄文のＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③⅙	有尾系	＋27 リ－15、M—6接	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
16	139—16	小波状口縁。口縁部に連続爪形文による菱形構成。胴部に縄文のＬとＲによる羽状構成。口唇は内削ぎ状。	①繊維②黄橙③⅙	有尾系	＋5	
17	139—17	口縁部を欠損するが、半截竹管による連続爪形文で菱形構成されたものな。胴中位に強い屈曲を有する器形をとる。胴部文様は0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③¼	有尾系	＋2	
18	139—18	4単位の波状口縁。口唇部は内削ぎ状。口縁部は半截竹管の連続爪形文による三角形の区画文。胴部には0段多条縄文ＬＲとＲＬの菱形構成。胴下半部には縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③⅕	有尾系	＋11、Ｊ－2接	
19	139—19	くびれ部に半截竹管による連続爪形文が認められる。胴部には0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③⅔	有尾系	＋48	
20	139—20	口縁部を欠損しているため形状不明。口縁部と胴部のくびれに半截竹管による平行沈線が入る。胴部には0段多条縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。両方にループがみえる。	①繊維②赤橙③⅙	有尾系	＋－0	
21	139—21	4単位の波状口縁。口唇部は尖る。器表面全体にわたって附加条縄文によって菱形文が形成される。附加条は縄文ＬＲとＬを2本右巻きにしたものと、縄文ＲＬにＲを2本左巻きにしたものである。	①繊維②橙③¾	有尾系	＋5	
22	140—22	4単位の小波状口縁。口唇は内削ぎ状。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗灰黄③⅙	有尾系	＋35	
23	140—23	4単位の波状口縁。口唇部は内削ぎ状。口縁部は縄文ＬＲを地文とし、半截竹管による菱形構成。胴部には縄文ＬＲと0段多条縄文ＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③⅙	有尾系	＋5	
24	140—24	平口縁。口唇は平坦。底部は揚げ底気味。器表面全体にわたってアナダラ属の貝殻背圧痕による文様施文される。圧痕の単位は3～4条で構成される。	①繊維②橙③ほぼ完形	前期中葉	Ｊ－4接合	
25	140—25	平口縁。口唇部は内削ぎ状。器面全体にわたって横方向のナデつけ。	①繊維②橙③¾	前期中葉	＋25	
26	140—26	平口縁。口唇は内削ぎ状で端部のを刻み。器表面にはナデ。	①繊維②黄橙③¼	前期中葉	＋12	
27	140—27	平口縁。口縁は幅広く無文帯をもつ。縄文Ｒが施文。	①繊維②灰褐③¼	有尾系	＋32	
28	140—28	平口縁。縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②黄橙③¼	有尾系	＋8	
29	141—29	平口縁。縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②暗褐③口縁部	有尾系	＋2	
30	141—30	平口縁。縄文Ｌ。口唇は角頭状。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	＋27	
31	141—31	平口縁。縄文Ｌによる斜行縄文。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	＋34	
32	141—32	波状口縁。口唇部は凹み状。縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②暗褐③口縁部	有尾系	＋9	
33	141—33	平口縁。縄文Ｌ。口唇部は凹み状。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	＋53	
34	141—34	縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	＋12	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
35	141—35	縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	＋41	
36	141—36	縄文Ｌによる斜行縄文。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	＋11	
37	141—37	平口縁。０段多条縄文ＬＲ。	①繊維②灰白③口縁部	有尾系	＋８	
38	141—38	平口縁。口唇は内削ぎ状。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	＋30	
39	141—39	平口縁で突起が付けられる。０段多条縄文ＲＬ。	①繊維②暗褐③口縁部	有尾系	＋35	
40	141—40	平口縁。０段多条縄文ＬＲとＲＬによる菱形文が構成。	①繊維②暗褐③口縁部	有尾系	＋11	
41	141—41	波状口縁。０段多条縄文ＬＲとＲＬによる菱形文。	①繊維②暗赤褐③口縁部	有尾系	＋30	
42	141—42	０段多条縄文ＲＬと縄文ＬＲによる羽状構成。	①繊維②黒褐③胴部	有尾系	＋29	
43	142—43	半截竹管による連続爪形文。胴部には０段多条縄文ＬＲとＲＬの羽状構成。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	＋２	
44	142—44	平口縁。連続爪形文により菱形文が構成される。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	雑	
45	142—45	口縁に平行する２条の連続爪形文。菱形文が構成される。半截竹管による平行沈線。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	〃	
46	142—46	波状口縁。半截竹管による菱形文構成。	①繊維②黒褐③口縁部	有尾系	＋19	
47	142—47	４単位の波状口縁。連続爪形文によって菱形文が構成される。	①繊維②明黄褐③口縁部	有尾系	＋27	
48	142—48	４単位の波状口縁。連続爪形文によって菱形文が構成される。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	＋２	
49	142—49	半截竹管による連続爪形文で菱形文が構成される。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	＋26	
50	142—50	波状口縁。半截竹管による連続爪形文で構成される。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	雑	
51	142—51	口唇外面刻み。半截竹管によるやや太めの連続爪形文で構成。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	＋33	
52	142—52	連続爪形文による菱形文様で構成される。	①繊維②灰褐③口縁部	有尾系	＋11	
53	142—53	半截竹管による平行沈線。	①繊維②明黄褐③口縁部	有尾系	雑	
54	152—54	２本１組の縄文Ｒによる撚糸文。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	＋14	
55	142—55	連続爪形文による菱形文を構成する。	①繊維②灰褐③胴部	有尾系	雑	
56	142—56	波状口縁。半截竹管により三角形と重弧線が施文。	①繊維②赤褐③口縁部	有尾系	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
57	142—57	口縁部は半截竹管による平行沈線。胴部には縄文ＲＬが施文される。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	＋34	
58	143—58	縄文ＬとＲによる羽状施文後に半截竹管による菱形文が構成される。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	＋38	
59	143—59	平口縁。口唇は内削ぎ状。縄文原体を用いた横方向のナデつけ。	①繊維②暗赤褐③口縁部	有尾系	＋14	
60	143—60	端部の在り方からみて台部か。竹管による連続刺突が入るが工具の先は不揃い。	①繊維②赤褐③台部？	有尾系	＋58	
61	143—61	揚げ底。縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋12	
62	143—62	揚げ底気味。縄文ＬとＲによる清状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋ 9	
63	143—63	揚げ底。縄文ＬとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋－ 0	
64	143—64	揚げ底。縄文Ｒによる横位施文。	①繊維②暗赤褐③底部	有尾系	＋21	
65	143—65	揚げ底。縄文ＬとＲＬによる羽状縄文。	①繊維②暗赤褐③底部	有尾系	＋ 1	
66	143—66	台部。撚りの緩いＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③台部	有尾系	＋32	
67	143—67	やや揚げ底。０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	Ｌ＝なし	
68	143—68	揚げ底。０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②灰褐③底部	有尾系	＋34	
69	143—69	揚げ底。０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	＋19	
70	143—70	揚げ底。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③底部	有尾系	＋ 3	
71	143—71	土製円盤。縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③完形	有尾系	雑	
72	143—72	土製円盤。無文部。	①繊維②黄橙③完形	有尾系	＋12	

Ｊ４号住居跡出土土器観察表（１～60）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
1	148—１	平口縁。口縁部は短く伸びる。口唇部は平坦。口縁部に半截竹管による菱形文が８単位構成。胴部には０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③½	有尾系	＋８	
2	148—２	平口縁。口縁部は半截竹管による平行沈線で横位文様と菱形文が構成される。地文には０段多条縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③½	有尾系？	雑	
3	148—３	平口縁。口唇部はほぼ平坦。口縁部に幅広の半截竹管で菱形文が構成される。地文には縄文ＬＲとＲＬが羽状構成。底部は揚げ底。	①繊維②橙③⅔	有尾系	＋９	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
4	148—4	波状口縁。口唇部は尖る。半截竹管の不明瞭な平行沈線で三角文が構成される。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③⅓	有尾系	＋5	
5	148—5	平口縁。口唇はほぼ平坦。縄文Ｌ。	①繊維②灰黄褐③⅓	有尾系	－1	
6	148—6	口縁部を欠損。底部は揚げ底。縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②橙③⅓	有尾系	＋－0	
7	148—7	口縁部を欠損。胴部に0段多条縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②橙③⅓	有尾系	＋3	
8	148—8	4単位の小波状口縁。口唇部は平坦。器面には0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状縄文。	①繊維②淡黄③½	有尾系	－1	
9	149—9	平口縁。口唇部は内削ぎ状。連続爪形文により菱形文が構成される。胴部には0段多条縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③¼	有尾系	＋1	
10	149—10	平口縁。口唇部は内削ぎ状。口縁直下に連続爪形文と平行線が2条、その下に2段の菱形文が構成される。菱形文の区画内には、円筒状の突起が1個付けられる。胴部には縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②黄橙③⅙	有尾系	＋－0	
11	149—11	波状口縁。連続爪形文による菱形文構成。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	有尾系	－4	
12	149—12	平口縁。連続爪形文による菱形文と横位平行線。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	－4	
13	149—13	平口縁。連続爪形文。	①繊維②橙③口縁部	有尾系	雑	
14	149—14	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。連続爪形文による菱形文。	①繊維②橙③口縁部	有尾系	〃	
15	149—15	連続爪形文。縄文ＬＲとＲＬに羽状構成。	①繊維②橙③胴部	有尾系	－16	
16	149—16	平口縁。口唇部は内削ぎ状で刻み。連続爪形文。	①繊維②にぶい橙③口縁部	有尾系	＋－0	
17	149—17	波状口縁。口唇部は凹み状。半截竹管による平行線で山形文が構成される。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾系	＋5	
18	149—18	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。篦状工具により菱形文が構成される。	①繊維②にぶい橙③口縁部	有尾系	雑	
19	150—19	平口縁。口唇部は内削ぎ状。半截竹管による平行線と菱形文が区画される。	①繊維②明赤褐③口縁部	有尾系	〃	
20	150—20	平口縁。半截竹管による平行線と菱形区画。	①繊維②にぶい橙③口縁部	有尾系	雑	
21	150—21	平口縁。半截竹管による平行線と菱形区画。縄文ＲとＬによる羽状構成。	①繊維②黒褐③口縁部	有尾系	〃	
22	150—22	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。口縁部に半截竹管による菱形文。地文に縄文ＬＲ。肩部に平行沈線。胴部に縄文ＲＬ。上半部。	①繊維②黄橙③口縁～胴部上半部	有尾系	－18	
23	150—23	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。半截竹管による平行線と菱形文が構成される。地文に縄文ＬＲ。	①繊維②にぶい黄橙③口縁	有尾系	＋8	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
24	150—24	小波状口縁。口唇部は内削ぎ状。半截竹管による平行波線と菱形文で構成。胴部には0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②明黄橙③口縁～胴部	有尾系	＋－0	
25	150—25	縄文Ｌ。	①繊維②暗褐③口縁部	有尾系	＋3	
26	150—26	縄文Ｌ。	①繊維②黒褐③口縁部	有尾系	＋7	
27	150—27	平口縁。口唇部は内削ぎ状。縄文ＲとＬにより羽状構成。	①繊維②褐③口縁部	有尾系	＋－0	
28	150—28	縄文Ｌ。	①繊維②明赤褐③胴部	有尾系	〃	
29	150—29	0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②明赤褐③胴部	有尾系	＋16	
30	150—30	縄文Ｌ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋－0	
31	151—31	0段多条縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	＋16	
32	151—32	口縁端に沈線。0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②淡橙③胴部	有尾系	雑	
33	151—33	縄文Ｌ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	有尾系	＋7	
34	151—34	縄文Ｒ。	①繊維②明赤褐③胴部	有尾系	＋5	
35	151—35	縄文ＬとＲ。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	－13	
36	151—36	縄文Ｌ。	①繊維②浅黄橙③胴部	黒浜	＋3	
37	151—37	縄文Ｌ。	①繊維②赤褐③胴部	黒浜	＋－0	
38	151—38	平口縁。無文部。	①繊維②暗赤褐③口縁部	有尾系	＋9	
39	151—39	平口縁。0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②浅黄橙③口縁部	有尾系	＋7	
40	151—40	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黒褐③口縁部	有尾系	＋－0	
41	151—41	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③胴部	有尾系	〃	
42	151—42	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋1	
43	151—43	0段多条縄文ＬＲと縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋－0	
44	151—44	縄文ＬＲとＲＬ。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	＋1	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
45	152—45	縄文ＬＲとＲＬの羽状構成。	①繊維②黒褐③胴部	有尾系	雑、ヌ－15接	
46	152—46	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	有尾系	＋2	
47	152—47	縄文ＬＲとＲＬ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋9	
48	152—48	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	有尾系	〃	
49	152—49	無文。台付き鉢。	①繊維②橙③台部	有尾系	＋3	
50	152—50	縄文ＬとＲによる羽状構成。揚げ底気味。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	〃	
51	152—51	縄文Ｌ。揚げ底。底にど縄文Ｌ。	①繊維②橙③底部	前期中葉	＋5	
52	152—52	縄文Ｒ。揚げ底。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	－11	
53	152—53	縄文ＬＲとＲＬの羽状構成。揚げ底気味。	①繊維②橙③底部	有尾系	－4	
54	152—54	縄文ＬＲとＲＬの羽状構成。揚げ底気味。	①繊維②赤褐③底部	有尾系	雑	
55	152—55	縄文ＬとＲによる羽状構成。揚げ底。	①繊維②暗赤褐③底部	有尾系	〃	
56	152—56	2本1組の撚糸文Ｒによる格子目文。	①繊維②黄橙③底部	黒浜	〃	
57	152—57	土製円盤。縄文Ｒが施文される。部分的に研磨。	①繊維②暗赤褐③胴部	前期中葉	＋7	
58	152—58	土製円盤。0段多条縄文ＲＬが施文。	①繊維②橙③胴部	有尾系	雑	
59	152—59	土製円盤。	①繊維②赤褐③胴部	前期中葉	〃	
60	152—60	土製円盤。	①繊維②赤褐③底部	前期中葉	〃	

Ｊ5号住居跡出土土器観察表（1～23）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
1	155—1	平口縁。無文部。	①繊維②にぶい褐③口縁部	前期中葉	雑	
2	155—2	平口縁。半截竹管によるコンパス文。	①繊維②黒褐③口縁部	黒浜	〃、Ｍ－27接	
3	155—3	平口縁。0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	雑	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
4	155－4	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。口縁部縄文ナデ消し。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
5	155－5	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。口縁端部縄文ナデ消し。	①繊維②暗赤褐③口縁部	黒浜	〃	
6	155－6	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。口縁端部縄文ナデ消し。	①繊維②灰褐③口縁部	黒浜	〃	
7	155－7	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。口縁部縄文ナデ消し。	①繊維②暗赤褐③口縁部	黒浜	〃	
8	155－8	平口縁。口縁下に半截竹管による連続爪形文。縄文ＬＲ。	①繊維②黒褐③口縁部	黒浜	〃	
9	155－9	半截竹管による３条の連続爪形文。縄文ＲＬとＬＲ。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
10	155－10	０段多条縄文ＬＲ。半截竹管による平行沈線と爪形文。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
11	155－11	縄文ＲＬと０段多条縄文ＬＲによる羽状構成。１条の平行沈線と爪形文。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
12	155－12	附加条。縄文ＬＲとＲの右巻きとＲＬとＬの左巻きによる羽状構成。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
13	155－13	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②赤黒③胴部	黒浜	〃	
14	155－14	縄文ＬＲ。	①繊維②黄橙③胴部	黒浜	〃	
15	155－15	附加条。縄文ＲＬにＬを左巻き。	①繊維②黄橙③胴部	黒浜	〃	
16	155－16	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
17	155－17	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②浅黄橙③胴部	黒浜	〃	
18	155－18	縄文ＲＬ。	①繊維②黒③胴部	黒浜	〃	
19	155－19	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③胴部	有尾系	〃	
20	155－20	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③胴部	有尾系	〃	
21	155－21	縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
22	155－22	縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
23	155－23	平底。	①繊維②明赤褐③底部	黒浜	〃	

Ｊ６号住居跡出土土器観察表（１～48）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土　②色調　③残存	時　期	出土位置	備　　考
1	157－1	縄文ＬとＲによる羽状構成。縄の端部処理の圧痕がみられる。縦位の６カ所にミミズ腫れ状の盛り上がり。	①繊維②明黄褐③½	黒浜	－11（炉内）	
2	157－2	縄文ＲとＬの２本１組の絡条体が施文。くびれ部に半截竹管によるコンパス文。	①繊維②黄橙③½	関山２	〃	
3	157－3	小波状口縁か。横位の連続爪形文。縄文ＬＲ。	①繊維②にぶい褐③口縁	黒浜	雑	
4	157－4	平口縁。横位の連続爪形文。縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
5	157－5	横位の連続爪形文。縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい褐③胴部	黒浜	〃	
6	157－6	口縁部に０段多条縄文ＲＬ。肩部に横位の連続爪形文。胴部に０段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②浅黄橙③口縁～胴部	黒浜	〃	
7	157－7	平口縁。半截竹管による横位と縦位の刺突文。０段多条縄文ＲＬ。口唇部に刻み。	①細粒②黄橙③口縁部	諸磯ａ	〃	
8	157－8	平口縁。半截竹管により連続爪形文。	①繊維②にぶい褐③口縁部	黒浜	〃	
9	157－9	半截竹管による押引文。コンパス文。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
10	157－10	半截竹管による連続爪形文。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃	
11	157－11	平口縁。半截竹管による平行沈線と連続爪形による肋骨文。	①細粒②極暗赤褐③口縁	諸磯ａ	〃	
12	157－12	平口縁。半截竹管による連続爪形文。縄文ＬＲ。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	
13	157－13	平口縁。口唇は内削ぎ状。半截竹管による押引文。撚糸文Ｌ。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	
14	157－14	櫛歯状工具による平行沈線。縄文Ｌ。	①繊維②浅黄橙③口縁部	黒浜	〃	
15	157－15	平口縁。口唇部に突起。４本歯の櫛歯状工具による平行沈線。撚糸文Ｒ。	①繊維②にぶい褐③口縁部	黒浜	〃	
16	157－16	平口縁。半截竹管による平行沈線。縄文ＬＲ。	①繊維②にぶい橙③口縁部	黒浜	〃	
17	157－17	平口縁。半截竹管によりコンパス文。半截竹管による円形刺突。篦状工具による刺突文。	①繊維②黒褐③口縁部	黒浜	〃	
18	157－18	半截竹管によるコンパス文。篦状工具による沈線。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
19	157－19	半截竹管による木葉文。円管文。	①中粒②浅黄橙③胴部	諸磯ａ	〃	
20	157－20	円管文。縄文ＲＬ。	①中粒②浅黄橙③胴部	諸磯ａ	〃	
21	157－21	平口縁。縄文ＲＬ。	①中粒②橙③口縁部	諸磯ａ	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
22	157—22	平口縁。縄文ＬＲ。	①中粒②橙③口縁部	諸磯ａ	〃	
23	157—23	平口縁。縄文ＬＲ。口縁端部の縄文をナデ消し。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	
24	157—24	平口縁。縄文ＲＬ。口縁端部の縄文をナデ消し。	①繊維②黒褐③口縁部	黒浜	〃、タ－５接	
25	157—25	平口縁。縄文ＲＬ。口縁端部の縄文をナデ消し。口縁部に穿孔。	①繊維②黒褐③口縁部	黒浜	雑	
26	157—26	平口縁。縄文ＲＬとＬＲ。口縁端部の縄文をナデ消し。	①繊維②明赤褐③口縁部	黒浜	〃	
27	157—27	平口縁。縄文ＬＲ。	①繊維②黒③口縁部	黒浜	〃	
28	157—28	平口縁。０段多条縄文ＲＬ。篦状工具による縦位の沈線。	①繊維②暗赤褐③口縁部	黒浜	〃	
29	157—29	平口縁。縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	雑	
30	157—30	平口縁。縄文ＲＬ。	①中粒②浅黄橙③口縁部	諸磯ａ	〃	
31	158—31	平口縁。親縄ＬＲ＋Ｌの左巻きと親縄ＲＬにＬを左巻きした附加条縄文による菱形構成。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	
32	158—32	平口縁。縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。口縁端部の縄文をナデ消し。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃、タ－５接	
33	158—33	０段多条縄文ＲＬと縄文ＬＲによる羽状構成。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	雑	
34	158—34	縄文ＬＲとＲＬ。	①繊維②明赤褐③胴部	黒浜	〃	
35	158—35	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい黄橙③胴部	黒浜	〃	
36	158—36	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③胴部	黒浜	〃	
37	158—37	縄文ＬＲとＲＬによる菱形文構成。	①繊維②浅黄橙③胴部	黒浜	〃	
38	158—38	縄文ＬＲとＲＬ。	①繊維②黄橙③胴部	黒浜	〃	
39	158—39	縄文ＲＬ。	①中粒②橙③胴部	諸磯ａ	〃	
40	158—40	縄文ＲＬ。	①細粒②褐灰③胴部	諸磯ａ	〃	
41	158—41	縄文ＲＬ。	①細粒②にぶい黄橙③胴部	諸磯ａ	〃	
42	158—42	縄文ＬＲ。	①中粒②橙③胴部	諸磯ａ	〃	
43	158—43	縄文ＬＲ。	①中粒②にぶい橙③胴部	諸磯ａ	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
44	158—44	縄文ＬＲ。揚げ底気味。	①繊維②にぶい赤褐③底部	黒浜	〃	
45	158—45	平口縁。縄文Ｒ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
46	158—46	平口縁。縄文Ｒ。	①繊維②暗赤褐③口縁部	黒浜	〃	
47	158—47	平口縁。縄文Ｌ。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	
48	158—48	縄文Ｌ。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	

Ｊ７号住居跡出土土器観察表（１～23）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
1	162—１	波状口縁。半截竹管による波状沈線。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	雑	
2	162—２	波状口縁。突起が付けられる。縄文ＲＬに縄文Ｒを左巻きにした附加条縄文。	①繊維②黒褐③口縁部	黒浜	〃	
3	162—３	波状口縁。縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
4	162—４	平口縁。縄文ＬＲに縄文Ｒを右巻きにした附加条。縄文は口縁端部がナデ消しされる。	①繊維②暗赤褐③口縁部	黒浜	〃	
5	162—５	平口縁。０段多条縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
6	162—６	平口縁。０段多条縄文ＬＲ。口縁端部の縄文はナデ消し。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
7	162—７	縄文ＬＲとＲＬの羽状縄文。	①繊維②浅黄橙③口縁～胴	黒浜	〃	
8	162—８	小波状口縁。縄文ＬＲ。棒状貼付と円形貼付。	①繊維②橙③口縁	黒浜	〃	
9	162—９	縄文ＬＲ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
10	162—10	０段多条縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	東ベルト	
11	162—11	０段多条縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	雑	
12	162—12	縄文ＲＬにＲを左巻きにした附加条と縄文ＬＲにＬを右巻きにした附加条縄文。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
13	162—13	縄文ＬＲ。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃	
14	162—14	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
15	162—15	0段多条縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③胴部	黒浜	〃	
16	162—16	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃	
17	162—17	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃	
18	162—18	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
19	162—19	縄文ＲＬとＬＲ。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	〃	
20	162—20	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②黄褐③胴部	黒浜	〃	
21	162—21	縄文ＲＬにＬを左巻きにした附加条と縄文ＬＲにＬを右巻きにした附加条縄文。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	〃	
22	162—22	0段多条縄文ＬＲ。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	〃	
23	162—23	縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
24	162—24	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
25	162—25	縄文ＲＬにｒを左巻きにした附加条縄文。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	〃	
26	162—26	0段多条縄文ＬＲ。半截竹管による押引文。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	〃	
27	162—27	0段多条縄文ＬＲとＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃	
28	162—28	縄文Ｌ。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
29	162—29	半截竹管によるループ文と沈線。	①繊維②暗赤褐③胴部	黒浜	〃	
30	162—30	縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい褐③底部	黒浜	〃	
31	162—31	縄文ＲＬにＲを左巻きにした附加条と縄文ＬＲにＬを右巻きにした附加条縄文。揚げ底。	①繊維②橙③底部	黒浜	〃	
32	162—32	揚げ底。	①繊維②にぶい黄褐③底部	黒浜	〃	
33	162—33	揚げ底気味。	①繊維②赤褐③底部	黒浜	雑	
34	162—34	縄文ＬＲ。平底。	①繊維②橙③底部	黒浜	〃	

ＪＰ１～８土坑出土土器観察表（１～94）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土　②色調　③残存	時　期	出土位置	備　　考
1	166－1	平口縁。口唇は平坦。縄文ＲとＬによる羽状構成。	①繊維②黄橙③⅔	有尾系	－20住居外	ＪＰ－1
2	166－2	平口縁。口縁部に半截竹管による平行沈線で上下に鋸歯文を配する。胴部に縄文ＲとＬによる菱形構成。	①繊維②橙③½	有尾系	－9住居外	
3	166－3	平口縁。口唇は凹み状。０段多条縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②橙③½	有尾系	＋36	
4	166－4	縄文Ｌ。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	－29住居外	5～8と同一個体
5	166－5	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。半截竹管による沈線で菱形構成。	①繊維②橙③口縁部	有尾系	〃　〃	
6	166－6	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。口縁部に半截竹管による沈線で菱形文が構成される。胴部に縄文Ｌが施文。	①繊維②橙③口縁～胴部	有尾系	雑　〃	
7	166－7	半截竹管による平行沈線。縄文Ｌ。	①繊維②黄橙③胴部	有尾系	－29　〃	
8	166－8	半截竹管による沈線で菱形構成。縄文Ｌ。	①繊維②にぶい黄褐③胴部	有尾系	〃　〃	
9	166－9	平口縁。縄文Ｌ。	①繊維②浅黄橙③口縁部	黒浜	雑　〃	10と同一個体
10	166－10	平口縁。縄文Ｌ。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	－50　〃	
11	166－11	縄文Ｌ。	①繊維②褐③胴部	黒浜	＋36	
12	166－12	縄文ＬとＲによる羽状構成。	①繊維②暗褐③胴部	黒浜	〃	
13	167－13	縄文ＬＲ。	①繊維②にぶい橙③胴部	黒浜	雑、住居外	ＪＰ－2
14	167－14	縄文ＬＲとＲＬによる異方向施文。	①繊維②にぶい橙③胴部	有尾系	－50、住居外	
15	167－15	０段多条縄文ＬＲ。	①繊維②暗赤褐③胴部	有尾系	雑　〃	
16	167－16	縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃　〃	
17	167－17	半截竹管による平行沈線。	①中粒②暗赤褐③胴部	諸磯ａ	〃　〃	
18	167－18	半截竹管による連続爪形文。	①繊維②黄褐③胴部	有尾系	〃　〃	
19	167－19	半截竹管による連続爪形文。菱形構成か。	①繊維②黒褐③胴部	有尾系	〃　〃	
20	167－20	半截竹管による沈線で菱形構成。	①繊維②にぶい黄橙③胴部	有尾系	〃　〃	
21	167－21	半截竹管による平行沈線。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	有尾系	＋36	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
22	167—22	2本1組の縄文Rによる絡条体圧痕。	①繊維②赤褐③胴部	黒浜	−20住居外	
23	167—23	半截竹管による平行沈線。胴部に0段多条縄文LRとRLによる菱形構成。	①繊維②暗赤褐③胴部	有尾系	−9、ヌ−15接	住居外
24	167—24	0段多条縄文LRとRLによる羽状構成。	①繊維②にぶい橙③胴部	有尾系	−20	
25	167—25	揚げ底。	①繊維②橙③底部	有尾系	−29	住居外
26	167—26	揚げ底。0段多条縄文LR。縄文RL。	①繊維②にぶい橙③底部	有尾系	+36	
27	167—27	土製円盤。半截竹管による平行沈線。縄文RL。	①繊維②明赤褐③胴部	有尾系	雑、住居外	
28	167—28	縄文Lと0段多条縄文RL。	①繊維②赤褐③胴部	有尾系	〃 〃	
29	167—29	平口縁。口唇部は内削ぎ状。縄文LR。	①繊維②赤褐③胴部	黒浜	+25	
30	167—30	0段多条縄文RLにRを左巻きにした附加条。	①繊維②浅赤橙③胴部	黒浜	+33	
31	167—31	縄文RLにRを左巻きにした附加条と縄文LRにLを右巻きにした附加条縄文の羽状構成。	①繊維②黄橙③胴部	黒浜	+25	
32	167—32	縄文LRとRLの羽状構成。	①繊維②暗褐③口縁部	黒浜	雑	
33	167—33	縄文LRとRLによる羽状構成。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
34	167—34	附加条。縄文RLにRを左巻き。	①繊維②浅黄橙③胴部	黒浜	〃	
35	167—35	0段多条縄文LRとRLによる羽状構成。	①繊維②暗褐③胴部	黒浜	+31	
36	167—36	附加条。縄文LRにRを左巻き。	①繊維②にぶい黄橙③胴部	黒浜	〃	
37	167—37	縄文RL。	①繊維②黄褐③胴部	黒浜	雑	
38	167—38	0段多条縄文RL。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
39	167—39	縄文LとRによる羽状構成。	①繊維②橙③胴部	黒浜	+20	
40	168—40	半截竹管による4条の平行沈線。0段多条縄文RL。	①繊維②褐③胴部	有尾系	雑	JP−3
41	168—41	縄文RL。	①繊維②灰褐③胴部	黒浜	雑	
42	168—42	縄文RLとLRによる羽状構成。	①繊維②極暗赤褐③胴部	黒浜	〃	
43	168〜43	縄文RLとLRによる羽状構成。	①繊維②極暗赤褐③胴部	黒浜	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
44	168—44	縄文ＲＬとＬＲ。	①繊維②黄褐③胴部	黒浜	〃	
45	168—45	縄文ＲＬ。	①繊維②灰白③胴部	黒浜	〃	
46	168—46	0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	〃	
47	168—47	0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	有尾系	〃	
48	168—48	幅の狭い連続爪形文。	①繊維②橙③胴部	黒浜	雑	ＪＰ—4
49	168—49	平口縁。口唇部は平坦。半截竹管によるコンパス文風の波状沈線。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	雑	
50	168—50	平口縁。半截竹管による平行沈線とコンパス文。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	〃	
51	168—51	平口縁。口唇部は内削ぎ状。縄文ＬＲ。	①中粒②橙③口縁	諸磯ａ	〃	
52	168—52	縄文ＲＬ。	①中粒②にぶい赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
53	168—53	縄文ＲＬ。	①中粒②橙③胴部	諸磯ａ	〃	
54	168—54	縄文ＲＬ。	①中粒②にぶい赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
55	168—55	縄文ＲＬ。	①中粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
56	168—56	縄文ＲＬ。	①中粒②橙③胴部	諸磯ａ	〃	
57	168—57	縄文ＲＬ。	①細粒②褐③胴部	諸磯ａ	〃	
58	168—58	縄文ＲＬ。	①繊維②黒褐③胴部	黒浜	〃	
59	168—59	縄文ＲＬとＬＲによる菱形構成。	①繊維②にぶい褐③胴部	黒浜	〃	
60	168—60	縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	黒浜	〃	
61	168—61	縄文Ｒ。	①繊維②にぶい褐③胴部	黒浜	〃	
62	168—62	縄文ＲＬとＬＲによる菱形構成。	①繊維②にぶい褐③胴部	黒浜	〃	
63	168—63	縄文Ｌ。	①繊維②にぶい橙③胴部	黒浜	〃	
64	168—64	縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	〃	
65	168—65	土製円盤。縄文ＬＲ。	①細粒②浅黄橙③胴部	諸磯ａ	〃	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
66	168—66	土製円盤。縄文ＲＬ。	①細粒②暗赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
67	168—67	平口縁。口唇部に刻み。半截竹管による連続爪形文。	①中粒②灰褐③口縁部	諸磯ａ	雑	ＪＰ—5
68	168—68	半截竹管による連続爪形文で菱形文を構成。	①中粒②黄橙③胴部	諸磯ａ	雑	
69	168—69	縄文ＲＬ。	①細粒②灰白③胴部	諸磯ａ	〃	
70	168—70	縄文ＲＬ。	①中粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
71	168—71	縄文ＲＬ。	①中粒②橙③胴部	諸磯ａ	雑	
72	168—72	縄文ＬＲとＲＬによる羽状構成。	①繊維②暗褐③胴部	有尾系	〃	
73	168—73	土製円盤。縄文ＲＬ。	①中粒②赤褐③胴部	諸磯ａ	〃	
74	168—74	０段多条縄文ＲＬにＬを左巻きにした附加条。	①繊維②灰白③胴部	有尾系	雑	ＪＰ—6
75	168—75	波状口縁。縄文ＲＬ。	①細粒②明赤褐③口縁部	諸磯ａ	雑	
76	168—76	縄文ＲＬにＬを左巻きした附加条。	①繊維②黄褐③胴部	黒浜	〃	
77	168—77	平口縁。縄文Ｒ。	①繊維②暗褐③口縁部	有尾系	〃	
78	168—78	０段多条縄文ＲＬと０段多条縄文ＬＲ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	〃	
79	168—79	縄文ＲＬ。	①細粒②浅黄橙③胴部	諸磯ａ	〃	
80	168—80	０段多条縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	〃	
81	168—81	平底。側面に縄文ＲＬ。	①繊維②浅黄橙③胴部	有尾系	〃	
82	169—82	小波状口縁。半截竹管による連続爪形文で菱形文。Ｖ字文。	①繊維②暗褐③口縁	有尾系	Ｌ＝なし	ＪＰ—8
83	169—83	０段多条縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。	①繊維②にぶい赤褐③胴部	有尾系	＋19	
84	169—84	台付深鉢。縄文ＲＬとＬＲ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋15	
85	169—85	平口縁。口唇部は外削ぎ状。口唇部に刻み。胴部に縄文ＲＬ。結節あり。	①細粒②暗赤褐③¼	諸磯ａ	＋33、レ—5・M—24接合	ＭＰ—1
86	169—86	縄文ＲＬとＬＲ。	①繊維②橙③胴部	黒浜	＋23	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
87	169—87	平口縁。口唇部に刻み。縄文ＲＬ。	①細粒②にぶい橙③口縁部	諸磯ａ	雑	
88	169—88	0段多条縄文ＲＬ。	①繊維②橙③胴部	有尾系	〃	
89	169—89	縄文ＲＬ。	①繊維②黄橙③胴部	黒浜	＋23	
90	169—90	縄文ＬＲ。	①繊維②暗褐③胴部	黒浜	雑	
91	169—91	縄文ＲＬ。	①細粒②明赤褐③胴部	諸磯ａ	＋23	
92	169—92	縄文Ｌ。	①繊維②褐③胴部	有尾系	〃	
93	169—93	半截竹管による平行沈線。	①繊維②橙③胴部	有尾系	＋42	
94	169—94	刺突。	①繊維②明赤褐③胴部	黒浜	＋23	

グリッド出土土器観察表（１～198）

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
1	170—１	波状口縁。口唇部は内削ぎ状。外縁に刻み。半截竹管による平行沈線。波頂部には棒状浮文。胴部に縄文。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	ヨ－１、(Ｍ－10)	
2	170—２	波状口縁。半截竹管による連続爪形文。波頂部に円管文。	①細粒②浅黄橙③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－15東北	３と同一個体
3	170—３	波状口縁。半截竹管による連続爪形。平行沈線と円管文。	①細粒②浅黄橙③口縁部	諸磯ａ	タ－３(Ｍ－15)	
4	170—４	半截竹管による連続爪形文。隆帯上には間隔の空いた刻み。胴部には縄文ＲＬ。	①細粒②褐灰③口縁部	諸磯ａ		
5	170—５	円形貼付文。地文に縄文ＲＬ。	①細粒②褐③胴部	諸磯ａ	Ｍ－24ベルト	
6	170—６	くの字状に内傾する口縁。浮線文。	①中粒②浅黄橙③口縁部	諸磯ｂ	Ｍ－12中央	
7	170—７	地文に縄文ＲＬ。浮線文。	①中粒②淡黄③口縁部	諸磯ｂ	Ｍ－20北東部	
8	170—８	地文に縄文ＲＬ。浮線文。	①中粒②黄橙③口縁部	諸磯ｂ	Ｍ－１南西側	
9	170—９	地文に縄文ＲＬ。浮線文にも縄文施文。	①中粒②にぶい褐③胴部	諸磯ｂ	タ－５(Ｍ－23)	
10	170—10	浮線文。	①中粒②橙③胴部	諸磯ｂ	タ－１(Ｍ－７)	
11	170—11	地文に縄文ＲＬ。浮線文にも縄文施文。	①中粒②にぶい橙③口縁部	諸磯ｂ	Ｍ－23南西	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
12	170—12	集合沈線文を地文とした耳たぶ状の貼付文と円形貼付文で文様構成される。	①中粒②黄橙③胴部	諸磯c	タ－4 (M－21)	
13	170—13	集合沈線文を地文とし耳たぶ状の貼付文と円形貼付文で文様構成される。	①中粒②灰黄褐③胴部	諸磯c	ヨ－4 (M－22)	
14	170—14	集合沈線文を地文とし、楕円形貼付文で文様構成される。	①中粒②明褐③胴部	諸磯c	タ－5	
15	170—15	半截竹管による平行沈線を地文とし、縦長の隆帯と円形貼付文。隆帯には刺突。	①中粒②灰白③胴部	諸磯c	ヨ－4 (M－22)	
16	170—16	集合沈線と刺突による耳たぶ状貼付文と円形貼付文が施される。	①中粒②橙③胴部	諸磯c	カ－4	
17	170—17	地文に縄文ＲＬが施文され、縦長の隆帯が貼付される。	①中粒②浅黄橙③胴部	諸磯c	ツ－3	
18	170—18	波状口縁。半截竹管による平行沈線を地文とし、結節浮で文様構成。円形の貼付。	①中粒②淡黄③口縁部	十三菩提	レ－2	
19	170—19	半截竹管による平行沈線を地文とし結節浮線文で文様構成される。円形の貼付。	①中粒②灰白③口縁部	十三菩提	〃	
20	170—20	半截竹管による平行沈線を地文とし、結節浮線文で文様構成される。	①中粒②灰白③口縁部	十三菩提	M－7東北	
21	170—21	半截竹管による平行沈線を地文とし、結節浮線文で文様構成される。	①中粒②淡黄③胴部	十三菩提	M－21南西	
22	170—22	半截竹管による平行沈線を地文とし、結節浮線文で文様構成される。粘土紐による格子目。	①中粒②浅黄橙③胴部	十三菩提	タ－4	
23	170—23	半截竹管による平行沈線を地文とし、結節浮線文で文様構成。	①中粒②褐灰③胴部	十三菩提	M－17東北	
24	170—24	半截竹管による平行沈線を地文とし、結節浮線文で文様構成。	①中粒②浅黄橙③胴部	十三菩提	ツ－5 (M－28)	
25	170—25	地文に縄文ＬＲにｒを右巻きにした附加条縄文。半截竹管による連続爪形文。	①繊維②浅黄橙③口縁部	黒浜	M－4北東	
26	170—26	半截竹管による押引状の平行沈線と連続爪形文。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	M－29	
27	170—27	半截竹管による連続爪形文。地文には縄文ＲＬ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	M－19	
28	170—28	半截竹管による連続爪形文。	①繊維②橙③胴部	黒浜	M－13	
29	170—29	口唇部は内削ぎ状。刻み半截竹管による連続爪形文。刺突と平行沈線。	①細粒②黄橙③口縁部	諸磯a	M－15東南	
30	170—30	平行沈線と連続爪形文。胴部には縄文ＬＲ。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	M－18	
31	170—31	平行沈線と連続刺突。胴部には縄文ＲＬ。	①繊維②明赤褐③口縁部	黒浜	M－29南東	
32	170—32	０段多条縄文ＲＬを地文とし、幅広い沈線が横位に３条施文される。	①繊維②灰褐③口縁部	黒浜	M－29北西	
33	170—33	半截竹管による平行沈線。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	Ⅰ－2	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
34	170—34	沈線により文様構成。	①繊維②にぶい赤褐③口縁	黒浜	レ－1	
35	170—35	口唇部は内削ぎ状。半截竹管による平行沈線と縦位の隆帯。隆帯は刻み。	①繊維②橙③口縁部	黒浜	M－10東北	
36	170—36	半截竹管による平行沈線で菱形区画。連続爪形文やコンパス文。	①繊維②褐灰③胴部	黒浜？	タ－6 (M－27)	
37	170—37	半截竹管による幅広の平行沈線とコンパス文。	①細粒②にぶい黄橙③胴部	黒浜？	ツ－4 (M－26)	
38	170—38	半截竹管による幅広の平行沈線とコンパス文。	①細粒②きぶい黄橙③胴部	黒浜？	M－27西南	
39	170—39	半截竹管による羽状気味の平行沈線。	①繊維②明赤褐③口縁部	黒浜	M－8北東	
40	171—40	半截竹管による波状の沈線。	①繊維②にぶい橙③口縁部	黒浜	ヨ－4	
41	171—41	半截竹管による押引平行沈線。	①繊維②淡黄③胴部	黒浜	M－10	
42	171—42	櫛歯状工具による連続刺突で横位文様を構成。	①繊維②灰褐③口縁部	有尾	M－28北西	
43	171—43	口唇部は内削ぎ状。櫛歯状工具による刺突。	①繊維②黄橙③口縁部	有尾	M－1北西	
44	171—44	櫛歯状工具。横位連続刺突。	①繊維②灰褐③胴部	有尾	M－28北西	
45	171—45	4本歯の櫛歯状工具による横位連続刺突。	①片岩②灰褐③口縁部	早～前期	ヨ－4	
46	171—46	4本歯の櫛歯状工具による横位連続刺突。	①片岩②にぶい赤褐③口縁	早～前期	M－13北東	
47	171—47	横位の連続した刻み。	①中粒②にぶい橙③胴部	早～前期	M－7西北	
48	171—48	半截竹管による横位の刺突。地文に縄文ＲＬ。	①片岩②にぶい赤褐③胴部	前期？	ヨ－4	
49	171—49	薄いつくり。不規則なナデの後に横位の規則性をもつ刺突。	①繊維②にぶい橙③口縁部	黒浜？	M－26北西	
50	171—50	薄いつくり。不規則なナデの後に横位の規則性をもつ刺突。	①繊維②灰褐③胴部	黒浜？	〃	
51	166—51	波頂部。地文に縄文ＲＬ。半截竹管による平行沈線。	①繊維②橙③口縁部	関山2	ツ－5 (M－28)	
52	166—52	附加条。縄文ＲにＲを左巻きにしたものと縄文ＬにＬを右巻きしたもので菱形文が構成される。	①繊維②橙③胴部	黒浜	ヨ－4	
53	168—53	縄文Ｒを4本1組とした絡条体。	①繊維②橙③胴部	黒浜	M－10東北	
54	168—54	附加条。縄文Ｒに2本1組のＲを左巻きにしたものと縄文Ｌに2本1組のＬを左巻きにしたもの。	①繊維②淡黄③胴部	黒浜	リ－15	
55	168—55	縄文ＬとＲの2本1組の絡条体。	①繊維②明黄褐③胴部	黒浜	ヨ－1 (M－10)	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
56	168—56	縄文ＲＬ。	①細粒②黄③胴部	諸磯ａ	Ｍ－６	
57	168—57	４本組紐。縄文ｒと１各２本。	①繊維②橙③胴部	黒浜	Ｍ－１	
58	168—58	突起部。縄文Ｌ。	①繊維②褐灰③口縁部	黒浜	Ｍ－29北ベルト	
59	168—59	突起の剝落痕。縄文Ｒ。	①繊維②褐灰③胴部	黒浜	タ－６	
60	168—60	やや間隔の空いた連続爪形文。	①砂粒②にぶい橙③胴部	諸磯ａ	レ－５	
61	168—61	口縁部に３条の連続爪形文。その下に縄文ＲＬが横位施文。	①施文②にぶい橙③口縁部	黒浜	Ｍ－14	
62	168—62	３条連続爪形文による平行線。縄文ＲＬが胴部に施文。	①中粒②橙③口縁部	諸磯ａ	ソ－３	
63	168—63	円管文と連続爪形文が横位に施文。	①細粒②橙③口縁部	諸磯ａ	タ－５	
64	168—64	連続爪形文による区画と円管文。区画円には縄文ＬＲが充塡。	①繊維②にぶい橙③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－15東南	
65	168—65	連続爪形文による区画。区画内には縄文Ｌが充塡。	①細粒②浅黄③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－20南西部	
66	168—66	半截竹管により鋸歯文が構成される。胴部には縄文ＲＬ。	①細粒②にぶい橙③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－13＋南	
67	168—67	波状口縁。連続爪形文による格子と円管文。	①細粒②橙③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－29北ベルト	
68	168—68	波状口縁。円形文と連続爪形文で構成。	①細粒②橙③口縁部	諸磯ａ	タ－５	
69	168—69	波頂部。連続爪形文により文様構成。	①細粒②黒褐③口縁部	諸磯ａ	カ－４	
70	168—70	波状口縁。連続爪形文と円管文、円孔で構成。	①細粒②明赤褐③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－20南西部	
71	168—71	波状口縁。連続爪形文と円管文。	①細粒②にぶい黄橙③口縁	諸磯ａ	タ－６	
72	168—72	波頂部。大きな円孔。円孔には連続爪形文で縁取り。周囲には連続爪形文が充塡。	①繊維②浅黄橙③口縁部	黒浜	Ｍ－９	
73	168—73	半截竹管による平行線で区画がなされる。区画内には縄文Ｌが充塡。	①中粒②淡赤橙③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－13西南	
74	168—74	連続爪形文による木葉文。円管文。縄文ＲＬが充塡。	①細粒②褐灰③胴部	諸磯ａ	ツ－５	
75	168—75	連続爪形文と円管文で文様構成。	①繊維②にぶい褐③胴部	黒浜	レ－５	
76	168—76	連続爪形文と平行沈線により菱形文が構成される。胴部	①砂粒②橙③口縁部	諸磯ａ	Ｍ－14西北	
77	168—77	集合沈線による横線と波状文。円管文。	①粗粒②橙③口縁部	諸磯ａ	タ－５	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
78	168—78	集合沈線と円管文。	①中粒②褐灰③口縁部	諸磯a	〃	
79	168—79	口唇部に刻み。連続爪形文が横位に施文。半截竹管による肋骨文と円管文。	①細粒②黄橙③口縁部	諸磯a	M－20	
80	168—80	口唇部に刻み。連続爪形文と半截竹管により肋骨文が構成。縦位の円管文。	①細粒②橙③口縁部	諸磯a	カ－3	
81	167—81	横位の条線と円管文。	①細粒②浅黄橙③口縁部	諸磯a	M－13西南	
82	167—82	肋骨文風の横線と円管文。	①中粒②赤橙③胴部	諸磯a	タ－5	
83	167—83	半截竹管による連続爪形文と条線。	①細粒②赤橙③口縁部	諸磯a	〃	
84	167—84	口唇外縁に刻み。縄文ＲＬ。	①中粒②にぶい赤橙③口縁	諸磯a	レ－3	
85	167—85	縄文ＲＬの施文後、２列の円管文が縦位施文される。	①細粒②浅黄橙③口縁部	諸磯a	レ－2	
86	167—86	３本単位の平行沈線による鋸歯文。	①細粒②灰褐③口縁部	諸磯a	ヨ－4	
87	167—87	地文に縄文ＲＬ。横位の条線。	①砂粒②橙③口縁部	諸磯a	カ－3	
88	167—88	横位と波状の条線で構成される。	①細粒②明赤褐③胴部	諸磯a	タ－5	
89	167—89	横位の平行線と波状の条線の繰り返し。	①細粒②橙③胴部	諸磯a	カ－4	
90	167—90	４本歯の櫛歯状工具により横位と波状沈線が繰り返され円管文が付される。胴部には縄文Ｌ。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	諸磯a	M－14＋南	
91	167—91	半截竹管による横線と鋸歯文で構成。	①砂粒②浅黄橙③胴部	諸磯b	M－14東中央	
92	167—92	異束縄文ＲＬの施文後、半截竹管による平行沈線。	①細粒②灰褐③口縁部	諸磯	ソ－2	
93	167—93	縄文ＲＬを地文とし、半截竹管の平行沈線で文様構成。	①細粒②にぶい橙③口縁部	諸磯b	M－14西南	
94	167—94	半截竹管による平行沈線と円形文。地文には縄文ＲＬ。	①細粒②褐灰③胴部	諸磯a	ソ－5	
95	167—95	口縁下に幅広い凹線。縄文ＲＬに円管文。	①細粒②橙③口縁部	諸磯a？	M－29	
96	168—96	縄文ＲＬと円管文。	①中粒②にぶい橙③胴部	諸磯a	レ－6	
97	168—97	口縁部が肥厚し段を有する。胴部には縄文ＬＲが縦位施文される。段の境界に明瞭な縄文の押捺。	①中粒②にぶい橙③口縁部		ツ－5	
98	168—98	口縁部に幅広の凹線。胴部には縄文Ｌ。	①中粒②灰褐③口縁部	諸磯a？	M－26東ベルト	
99	168—99	縄文ＲＬに結節。	①細粒②浅黄橙③胴部	諸磯a	M－14西南	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
100	168—100	縄文ＲＬにＬを左巻きにした附加条。	①細粒②にぶい橙③胴部	諸磯ａ	ツ－５	
101	166—101	規則性のある集合沈線で文様構成され、三角形の削りとりによる陰刻が入る。	①細粒②褐灰③口縁部	十三菩提	Ｍ－17東南	
102	166—102	半截竹管による集合沈線。	①中粒②黄橙③胴部	十三菩提	ソ－６	
103	166—103	半截竹管による集合沈線。	①中粒②橙③胴部	十三菩提	Ｍ－28北西	
104	166—104	半截竹管による集合沈線。	①粗粒②褐灰③胴部	十三菩提	Ｍ－18南東	
105	166—105	条線により菱形文が構成される。	①細粒②にぶい赤褐③胴部	十三菩提	Ｍ－15東北	
106	166—106	沈線区画内に短い沈線が充填される。	①砂粒②橙③胴部	田戸上層	ソ－３（Ｍ－１）	
107	166—107	半截竹管による平行沈線が綾杉状に入る。	①中粒②淡黄③胴部	諸磯ｂ？	ツ－３	
108	166—108	耳たぶ状の貼付。地文には集合沈線と刺突。	①砂粒②橙③口縁部	諸磯ｃ	タ－５	
109	166—109	肥厚した口縁部。無文部。	①金雲母②橙③口縁部	阿玉台	タ－４	
110	166—110	隆帯と刻み。大きな突起が付され、沈線で円が描かれる。	①中粒②赤褐③口縁部	勝坂	タ－５（Ｍ－23）	
111	166—111	隆帯と結節沈線。把手状。	①細粒②赤褐③口縁部	勝坂	Ｍ－４北東	
112	166—112	沈線で文様区画され、刻みが入る。	①中粒②にぶい橙③胴部	勝坂	Ｍ－４	
113	167—113	沈線区画により文様構成。隆帯上には刻み。	①中粒②赤褐③口縁部	勝坂	Ｍ－23東北	
114	167—114	隆帯と平行沈線。一部刻みが入る。	①細粒②赤褐③胴部	焼町	Ｍ－４	
115	167—115	半截竹管による平行沈線で文様区画される。地文には縄文Ｌが施文される。	①細粒②にぶい赤褐③胴部	勝坂	タ－９（Ｍ－３）	
116	167—116	隆帯上には縄文ＲＬ。下には縄文ＬＲ。	①中粒②赤褐③胴部	勝坂	Ｍ－１北西	
117	167—117	隆帯と平行沈線。	①細粒②赤褐③胴部	焼町	Ｍ－４	
118	167—118	隆帯と平行沈線。	①細粒②赤褐③口縁部	焼町	Ｍ－27南西	
119	167—119	隆帯と平行沈線。	①細粒②赤褐③胴部	焼町	Ｍ－19北西部	
120	167—120	隆帯と平行沈線。円形区画内に刺突。	①細粒②赤褐③胴部	焼町	Ｍ－４北東	
121	167—121	口縁内面に稜。隆帯で渦巻きが構成。	①中粒②黄橙③口縁部	加曽利Ｅ	タ－５（Ｍ－30）	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
122	167—122	沈線区画内に縄文ＬＲが充塡。	①細粒②にぶい橙③口縁部	加曽利Ｅ2	Ｍ－１南西	
123	167—123	隆帯区画内に縄文ＲＬが充塡。	①中粒②にぶい黄橙③口縁	加曽利Ｅ2	レ－２	
124	167—124	隆帯により○字文が構成される。	①中粒②にぶい黄橙③口縁	加曽利Ｅ3	Ｍ－13	
125	167—125	口縁内面に稜。口縁部に１条横位の隆帯。縄文Ｌ。	①中粒②橙③口縁部	加曽利Ｅ4	Ｍ－12＋南	
126	167—126	隆帯で文様区画。	①細粒②橙③口縁部	勝坂	Ｍ－４南西	
127	167—127	半截竹管による平行沈線で区画。縄文ＲＬが充塡される。	①細粒②橙③胴部	加曽利Ｅ	Ｍ－３	
128	167—128	粘土紐による波状文。縄文ＬＲ。	①細粒②にぶい橙③胴部	加曽利Ｅ	ヨ－４	
129	167—129	縦位の微隆起区画。縄文ＬＲ。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	加曽利Ｅ4	Ｍ－11	
130	167—130	横位の連続刺突。	①中粒②にぶい橙③胴部	三十稲場	Ｍ－18北東	
131	167—131	縦位の文様区画。２本１組の沈線間に縦長の連続刺突文。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	堀之内１	タ－２	
132	167—132	太い沈線と円形刺突。	①中粒②褐灰③胴部	堀之内１	レ－０	
133	167—133	鉢形の器形。太い沈線区画に斜め方向の刺突。	①中粒②明黄褐③胴部	堀之内１	タ－２	
134	167—134	沈線区画内に斜めの刺突が充塡。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	堀之内１	〃	
135	167—135	太い沈線で渦巻きが施文され、沈線内に斜め方向の刺突。	①中粒②明黄褐③胴部	堀之内１	〃	
136	167—136	平口縁。沈線下に隆帯。隆帯には斜め方向の長い刺突。	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内１	Ｍ－16東南	
137	167—137	波状口縁。くの字状に内傾。沈線区画内の隆帯には刺突。隆帯は縦位に胴部へ連結。	①中粒②にぶい黄橙③口縁	堀之内１	Ｍ－17北西	
138	167—138	２条の平行沈線間に斜めの連続刺突。縄文ＬＲが充塡。	①中粒②浅黄橙③胴部	堀之内１	Ｍ－15東南	
139	167—139	平口縁。口縁部に沈線区画による隆帯。隆帯上には斜め方向の刺突。胴部には曲線文。	①中粒②明黄褐③口縁部	堀之内１	タ－２(Ｍ－15)	
140	168—140	突起を有する平口縁。口縁に横位の沈線が巡り、突起は円孔や刺突が配される。胴部に縦位の沈線と刺突。	①中粒②黄橙③口縁部	堀之内１	Ｍ－24南東	
141	168—141	内稜をもつ平口縁。口縁部に横位沈線と隆帯。胴部には沈線区画と縄文ＬＲ。	①細粒②浅黄橙③口縁部	堀之内１	Ｍ－20北西部	
142	168—142	頸部に２条の沈線。胴部に縄文ＬＲ。	①細粒②暗赤褐③胴部	堀之内１	ヨ－２	
143	168—143	頸部に２条の沈線。胴部に縄文ＬＲ。	①細粒②浅黄橙③胴部	堀之内１	レ－１	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
144	168—144	平口縁。口縁部に1条の横位沈線。3本の懸垂文。地文に縄文LR。	①中粒②明黄褐③口縁部	堀之内1	レ－8	
145	168—145	突起を有する平口縁。口縁部に横位沈線とC字文。胴部には3本の懸垂文。地文には縄文LR。	①中粒②にぶい黄橙③口縁	堀之内1	レ－1	
146	168—146	突起を有する平口縁。口縁部には横位沈線と円孔。3本1組の懸垂文。地文に縄文LR。	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内1	M－6	
147	168—147	3本1組の浅く広い沈線区画。縄文LRが充填。	①中粒②淡黄③胴部	堀之内1	M－6南東	
148	168—148	蕨手状の沈線。地文には縄文LR。	①中粒②橙③胴部	堀之内1	レ－1	
149	168—149	3本1組の沈線でS字状の文様。細縄文LRが施文。	①中粒②浅黄橙③胴部	堀之内1	M－13	
150	168—150	3本1組の横位沈線と円形の貼付。胴部には曲線が配され、縄文LRが施文される。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	堀之内1	〃	
151	166—151	浅く太い横位の沈線。円形刺突もみられ縄文LRが充填。	①中粒②褐灰③胴部	堀之内1	M－12西	
152	166—152	平口縁。口縁部に無文帯。4～5条1単位で施文。	①中粒②淡黄③口縁部	堀之内,	M－7、P－北	
153	166—153	隆帯。間隔を空けて押捺。	①中粒②黄③胴部	堀之内1	タ－4	
154	166—154	深めの条線が縦位に施文。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	堀之内	ツ－5	
155	166—155	鉢形。沈線で文様構成。	①中粒②にぶい黄橙③胴部	堀之内1	ソ－2	
156	166—156	平口縁。口縁部に1条の横位沈線。沈線上には4単位で3個の円形の凹み。	①中粒②淡黄③口縁部	堀之内1	M－24＋南	
157	166—157	平口縁。口縁には沈線区画。突起と刺突。	①中粒②黄③口縁部	堀之内1	M－22東南	
158	166—158	平口縁。口縁に沿って沈線区画。胴部には3本1組の沈線で文様構成。	①中粒②灰黄③口縁部	堀之内1	M－15東南	
159	166—159	平口縁。口縁に沿って2条の沈線と刺突。胴部には沈線。	①中粒②黄③口縁部	堀之内1	〃	
160	166—160	波頂部。口縁には沈線と刺突。胴部には沈線	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内1	タ－2	
161	166—161	頸部が大きくくびれる鉢形土器。3本1組の沈線が横位と曲線で施文。交点には3個の円形刺突。	①中粒②淡黄③胴部	堀之内1	M－25＋南	
162	166—162	3本1組の沈線によって文様が描出。文様の交点に粘土が貼付され刺突が入る。	①中粒②淡黄③胴部	堀之内1	M－13北	
163	167—163	沈線区画。8字状貼付文。縄文LR。	①細粒②にぶい橙③胴部	堀之内2	ヨ－3(M－15)	
164	167—164	突起が付される平口縁。縦位の隆帯は円形刺突が3個。	①中粒②淡黄③口縁部	堀之内1	M－15	
165	167—165	平口縁。口縁部肥厚。口縁に円形刺突。胴部に沈線。	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内1	M－16西北部	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
166	167—166	突起を有する平口縁。刺突と弧線で構成。口縁に沿って1条の沈線。	①中粒②黄③口縁部	堀之内1	M－6中央	
167	167—167	口縁部が肥厚。口縁に沿って1条の沈線と刺突。内面にも刺突が付される。	①中粒②淡黄③口縁部	堀之内1	タ－2	
168	167—168	突起部。くの字状。円孔と円形刺突で構成。	①中粒②にぶい黄橙③口縁	堀之内1	カ－0	
169	167—169	口縁が短く内傾。口縁に1条の浅く太い沈線。波頂部にはC字状沈線と円形刺突。	①中粒②橙③口縁部	堀之内1	M－17東南	
170	167—170	平口縁。口縁がくの字に内傾。口縁に沿って円形刺突。胴部には沈線。	①中粒②黄橙③口縁部	堀之内1	ヨ－3(M－15)	
171	167—171	平口縁。口縁は肥厚。口縁に沿って沈線と円形刺突。胴部には沈線。	①中粒②にぶい黄橙③口縁	堀之内1	M－1	
172	167—172	幅広の口唇部。口唇部は3個の円形刺突。	①中粒②黄橙③口縁部	堀之内1	M－10＋南	
173	167—183	斜め方向のナデ痕。	①中粒②明褐灰③胴部	堀之内	M－8中央	
174	167—174	波状口縁。幅広の口唇には1条の沈線。波頂部には2方向から刺突。	①中粒②橙③口縁部	堀之内1	タ－2	
175	167—175	波頂部。口縁は「く」の字状。口縁に沿って沈線と刺突。	①中粒②灰③口縁部	堀之内1	M－15＋南	
176	167—176	平口縁。口縁に段を有し1条の沈線。	①細粒②にぶい黄橙③口縁	堀之内1	ヨ－2(M－14)	
177	167—177	突起部分。円孔に中心に環状の突起。縁には沈線。口縁に1条の沈線と円形刺突。	①中粒②黄橙③口縁部	堀之内1	M－23東ベルト	
178	167—178	突起部分。沈線による曲線文。中心に刺突。	①細粒②にぶい黄橙③突起	堀之内1	M－24＋南	
179	167—179	突起部。渦巻き状の沈線。	①細粒②橙③突起	堀之内1	ヨ－3	
180	167—180	橋状把手。正面には円形刺突。上端は刺突と隆帯によりC字状隆帯。口縁に沿って沈線と刺突。	①中粒②橙③把手	堀之内1	ヨ－3	
181	167—181	突起部分。沈線と円孔、円形刺突による文様構成。	①中粒②黄橙③突起	堀之内1	M－6南西	
182	167—182	突起部分。円孔が眼境状に並ぶ。口唇部等に縁どりの沈線や刺突が入る。	①中粒②浅黄橙③突起	堀之内1	タ－2	
183	167—183	浅く太い沈線。	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内1	M－8	
184	167—184	突起部。「く」の字状。円孔と2重の縁取り。	①中粒②にぶい橙③口縁部	堀之内1	M－15北東	
185	167—185	突起部。外面の円孔周囲は2重の縁取り。口縁は「く」の字。	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内1	M－9	
186	167—186	突起部。くの字状に内傾する。刺突と沈線、C字区画と円孔で構成される。	①中粒②浅黄橙③口縁部	堀之内1	M－6東南	
187	167—187	横位の刻み隆帯と沈線で区画される。縄文LRが施文。	①細粒②暗赤褐③胴部	堀之内2	M－16中央	

番号	遺物番号	文様構成・文様施文・器形の特徴	①胎土 ②色調 ③残存	時期	出土位置	備考
188	167—188	土製円盤。縄文ＲＬ。	①中粒②黄橙③完形		M－1東南側	
189	167—189	土製円盤。縄文ＲＬ。部分的に研磨。	①繊維②褐灰③完形		ソ－5	
190	168—190	土製円盤。縄文ＲＬ。部分的に研磨。	①中粒②橙③完形	諸磯	ソ－11	
191	168—191	土製円盤。縄文ＬＲ。	①中粒②明赤褐③完形		リ－3	
192	168—192	土製円盤。沈線。	①繊維②橙③½		M－7	
193	168—183	土製円盤。縄文ＲＬ。部分的に研磨。	①細粒②橙③完形		M－10	
194	168—194	土製円盤。縄文ＬＲ。	①中粒②橙③完形	諸磯	タ－0	
195	168—195	土製円盤。沈線。	①中粒②浅黄橙③完形		M－29北	
196	168—196	土製円盤。無文部。	①中粒②浅黄橙無完形	堀之内	M－6	
197	167—197	土製円盤。無文部。	①繊維②浅黄橙③½		M－14	
198	168—198	土製円盤。連続爪形文。	①中粒②橙③½		M－6	
199		土製円盤。異束縄文ＲＬ。	①繊維②灰褐③完形		M－1	
200		土製円盤。縄文ＬＲ。	①繊維②赤褐③完形		M－9	
201		土製円盤。附加条。縄文ＲＬに縄文Ｌを左巻き。	①繊維②灰褐③完形		M－10	
202		土製円盤。地文に縄文ＲＬ。沈線。部分的に研磨。	①細粒②赤褐③完形		M－15	

表－6　出土遺物観察表　縄文石器

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺存度	備考
1	J－11	打製石斧		9.0	4.8	1.9	83	黒色頁岩	完	
2	J－12	敲石		7.0	3.8	2.3	56	砂岩		
3	J－13	多孔石		20.7	15.8	10.6	3,370	粗粒安山岩	完	
4	J－14	多孔石		7.3	11.8	6.9	437	粗粒安山岩		

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
5	J－21	有舌尖頭器		7.0	2.4	0.9	14	黒色頁岩	先端欠	
6	J－22	削器		4.3	10.1	0.9	42	黒色頁岩	完	
7	J－23	削器		4.6	8.2	1.3	38	黒色頁岩	完	
8	J－24	削器		5.4	6.3	1.6	32	黒色頁岩	完	
9	J－25	削器		5.1	6.7	1.4	36	黒色頁岩	完	
10	J－26	削器		8.2	11.0	1.9	96	黒色頁岩	完	
11	J－27	削器		5.8	6.5	1.2	31	黒色頁岩	完	
12	J－28	削器		11.1	6.7	1.6	106	黒色頁岩	完	
13	J－29	削器		8.6	3.6	2.7	53	黒色頁岩	完	
14	J－210	削器		6.2	3.3	1.8	43	黒色頁岩		
15	J－211	打製石斧		16.5	9.6	6.3	1100	砂岩	完	
16	J－212	打製石斧		8.7	5.8	3.8	238	輝緑岩		
17	J－213	打製石斧		5.0	4.1	1.4	36	黒色頁岩		
18	J－214	磨製石斧		7.0	5.1	4.4	186	礫岩		
19	J－215	敲石		8.1	6.1	3.4	224	輝緑岩	完	
20	J－216	敲・凹石		10.6	9.3	4.1	640	粗粒安山岩	完	
21	J－217	敲・磨・凹石		10.5	8.8	3.4	550	石英閃緑岩	完	
22	J－218	敲・磨石		10.3	7.5	2.7	347	粗粒安山岩	完	
23	J－219	磨石		7.2	6.8	5.0	346	粗粒安山岩	完	
24	J－220	軽石製品		6.7	5.3	2.4	38	軽石	完	
25	J－31	削器		4.7	9.0	1.8	54	黒色頁岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
26	J－3 2	削器		5.0	10.1	2.0	81	黒色頁岩	完	
27	J－3 3	削器		7.8	6.5	1.7	62	黒色頁岩	完	
28	J－3 4	削器		7.0	7.2	2.2	67	黒色頁岩	完	
29	J－3 5	削器		5.7	7.3	1.4	45	黒色頁岩	完	
30	J－3 6	削器		6.5	6.4	1.5	59	黒色頁岩	完	
31	J－3 7	削器		5.7	5.6	1.7	36	黒色頁岩	完	
32	J－3 8	削器		6.9	6.8	1.7	62	黒色頁岩	完	
33	J－3 9	削器		7.8	8.3	1.4	92	黒色頁岩	完	
34	J－3 10	削器		7.6	4.5	1.5	42	黒色頁岩	完	
35	J－3 11	削器		6.1	5.0	0.9	24	黒色頁岩	完	
36	J－3 12	削器		5.9	4.2	1.4	37	黒色頁岩		
37	J－3 13	打製石斧		8.9	5.7	1.7	89	黒色頁岩	完	
38	J－3 14	打製石斧		8.5	4.3	2.7	89	黒色頁岩	完	
39	J－3 15	打製石斧		7.2	5.0	1.1	38	砂岩		
40	J－3 16	打製石斧		13.8	9.4	5.1	434	黒色頁岩		未製品
41	J－3 17	磨製石斧		14.8	5.6	3.4	403	変質玄武岩		
42	J－3 18	磨製石斧		13.0	4.0	4.0	386	変質玄武岩		
43	J－3 19	磨製石斧		7.0	1.5	1.0	12	緑色片岩	完	
44	J－3 20	敲・磨・凹石		9.4	8.5	3.5	427	粗粒安山岩	完	
45	J－3 21	敲・凹石		10.0	8.1	3.5	454	粗粒安山岩	完	
46	J－3 22	敲・磨石		10.8	8.0	4.3	551	粗粒安山岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
47	J－3 23	敲石		14.8	7.8	2.2	444	変質玄武岩	完	
48	J－3 24	敲石		15.5	6.8	4.0	673	石英閃緑岩	完	
49	J－4 1	石錐		6.0	4.8	1.2	34	黒色頁岩	完	
50	J－4 2	削器		3.4	5.8	1.0	14	黒色頁岩	完	
51	J－4 3	刈器		6.0	7.7	1.3	60	黒色頁岩	完	
52	J－4 4	削器		6.8	7.5	2.2	103	黒色頁岩	完	
53	J－4 5	打製石斧		7.9	5.8	1.8	84	黒色頁岩	完	
54	J－4 6	磨製石斧		14.0	5.4	2.9	195	蛇緑岩		
55	J－4 7	敲・磨・凹石		9.8	8.2	4.0	438	粗粒安山岩	完	
56	J－4 8	敲・磨・凹石		9.1	7.8	3.4	316	粗粒安山岩	完	
57	J－4 9	敲・磨石		11.5	10.2	4.9	810	粗粒安山岩	完	
58	J－4 10	敲・磨・凹石		10.7	9.0	4.4	548	粗粒安山岩	完	
59	J－4 11	敲・磨石		10.1	8.7	4.7	642	粗粒安山岩	完	
60	J－5 1	打製石斧		14.1	8.5	3.5	476	黒色頁岩	完	
61	J－5 2	打製石斧		10.1	6.3	2.3	167	黒色頁岩	完	
62	J－5 3	石皿		38.6	32.3	6.2	12500	粗粒安山岩		
63	J－6 1	削器		7.4	5.6	1.4	55	黒色頁岩	完	
64	J－6 2	削器		4.4	5.4	2.1	68	黒色頁岩		
65	J－6 3	削器		7.9	7.3	1.6	79	黒色頁岩	完	
66	J－6 4	削器		4.7	12.7	2.0	96	黒色頁岩	完	
67	J－6 5	打製石斧		11.0	5.2	2.0	118	黒色頁岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
68	J－6 6	打製石斧		8.0	5.7	1.8	92	黒色頁岩		
69	J－6 7	打製石斧		10.2	4.9	1.7	87	黒色頁岩		
70	J－6 8	打製石斧		7.9	4.2	2.0	81	粗粒安山岩		
71	J－6 9	打製石斧		7.7	5.1	2.6	135	黒色頁岩		
72	J－6 10	打製石斧		7.0	5.6	2.2	114	黒色頁岩		
73	J－6 11	凹・磨石		10.4	8.1	5.0	450	粗粒安山岩	完	
74	J－6 12	敲・凹石		10.2	9.6	4.3	585	粗粒安山岩	完	
75	J－6 13	敲・磨石		13.8	9.6	4.4	900	石英閃緑岩	完	
76	J－6 14	敲・磨石		13.9	6.4	4.1	578	石英閃緑岩	完	
77	J－7 1	削器		4.4	6.5	1.2	23	黒色頁岩	完	
78	J－7 2	削器		6.5	9.3	1.7	70	黒色頁岩	完	
79	J－7 3	敲・磨・凹石		12.8	10.0	4.9	793	粗粒安山岩	完	
80	J－7 4	敲・磨・凹石		12.8	8.8	3.5	593	粗粒安山岩	完	
81	JP-9 95	磨・砥石		19.9	20.2	5.3	3410	粗粒安山岩	完	
82	1	石鏃	ツ・ネ— 3・4	1.7	1.6	4.0	2.5	黒色安山岩	完	
83	2	石鏃	タ— 1・8	1.9	1.5	0.3	2	チャート	先端欠	
84	3	石鏃	チ— 4・56	1.4	1.4	0.4	25	チャート	先端欠	
85	4	石鏃	ル— 8・6	2.3	1.9	0.5	35	黒色安山岩	先端欠	
86	5	石鏃	表採	1.8	2.0	0.2	3	黒色安山岩	先端欠	
87	6	石鏃	タ・レ— 5・6	2.0	1.4	0.3	4	黒色頁岩	完	
88	7	石鏃	カ— 4・90	1.8	1.2	0.3	3	チャート	先端欠	

番号	挿図No.	器　種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　材	遺存度	備　考
89	8	石　鏃	ヨ・タ— 1	2.5	2.3	0.5	4	黒色安山岩	先端欠	
90	9	石　鏃	カ・ヨ— 7・8・9	3.0	1.9	0.4	5	黒色頁岩	先端欠	
91	10	石　匙	ソ・ネ— 3・4	4.9	6.4	0.9	21	黒色頁岩	完	
92	11	石　匙	タ— 5・26	4.2	4.8	0.9	12	黒色頁岩	完	
93	12	石　匙	ヨ— 6・84	3.1	3.8	0.6	7	黒色頁岩	完	
94	13	削　器	ホ— 6・70	3.1	1.9	1.0	7	チャート	完	
95	14	削　器	ツ・ネ— 3・4	2.4	2.9	0.6	4	黒色頁岩	完	
96	15	削　器	ツ・ネ— 3・4	5.1	7.3	2.0	77	黒色頁岩	完	
97	16	削　器	タ— 0・1	5.5	6.6	1.7	68	黒色頁岩	完	
98	17	削　器	ツ・ネ— 3・4	3.2	5.0	1.1	19	黒色安山岩	完	
99	18	削　器	ツ・ネ— 3・4	4.4	5.9	2.1	53	黒色頁岩	完	
100	19	削　器	ヨ・タ— 2・3	4.9	8.8	2.7	104	黒色頁岩	完	
101	20	削　器	ソ・ツ— 3・4	4.2	5.0	1.6	29	黒色頁岩	完	
102	21	削　器	タ— 0・1	4.4	5.8	1.0	26	黒色頁岩	完	
103	22	削　器	カ・ヨ— 1・2	2.5	8.7	2.7	63	黒色頁岩	完	
104	23	削　器	カ・ヨ— 1・2	8.2	8.5	3.7	208	黒色頁岩	完	
105	24	削　器	カ・ヨ— 8・9	7.0	9.0	1.5	82	黒色頁岩	完	
106	25	削　器	タ— 0・1	5.9	7.4	1.8	72	黒色頁岩	完	
107	26	削　器	ヨ・タ— 2・3	4.0	8.0	1.1	37	黒色頁岩	完	
108	27	削　器	ヨ—0	4.8	8.8	1.8	89	変質玄武岩	完	
109	28	削　器	カ・ヨ— 1・2	5.1	9.9	1.5	65	黒色頁岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
110	29	削器	カ・ヨ— 1・2	4.9	8.4	1.8	67	黒色頁岩	完	
111	30	削器	タ— 0・1	5.9	9.5	1.4	84	黒色頁岩	完	
112	31	削器	カ・ヨ— 2	5.9	9.8	1.6	92	閃緑岩	完	
113	32	削器	ヨ— 0・1	5.3	12.5	3.0	117	黒色頁岩	完	
114	33	削器	ヨ・タ— 1・2	10.3	12.6	4.7	791	粗粒安山岩	完	
115	34	削器	ヨ— 0・1	5.9	9.6	1.7	85	黒色頁岩	完	
116	35	削器	カ・ヨ— 2	7.9	11.2	2.0	86	黒色頁岩	完	
117	36	削器	タ— 0	6.8	6.3	1.4	66	黒色頁岩	完	
118	37	削器	カ・ヨ— 8・9	6.5	6.7	1.3	50	黒色頁岩	完	
119	38	削器	ヨ・タ— 2・3	7.9	8.6	3.6	275	輝緑岩	完	
120	39	削器	ツ・ネ— 3・4	9.2	5.9	1.6	66	黒色頁岩	完	
121	40	削器	レ・ソ— 3・4	7.2	4.9	1.4	40	黒色頁岩	完	
122	41	削器	ツ・ネ— 3・4	8.8	7.4	1.5	58	黒色頁岩	完	
123	42	削器	カ・ヨ— 2	8.3	5.6	2.1	89	黒色頁岩	完	
124	43	削器	タ— 0・1	8.3	5.8	2.0	103	黒色頁岩	完	
125	44	削器	ソ・ツ— 4・5	6.6	4.7	3.1	92	黒色頁岩	完	
126	45	削器	タ— 0・1	6.9	3.1	1.9	53	黒色頁岩	完	
127	46	削器	タ・レ— 1・2	7.4	3.0	0.8	19	黒色頁岩	完	
128	47	削器	ツ・ネ— 3・4	11.0	3.0	1.5	47	黒色頁岩	完	
129	78	削器	ソ・ツ— 3・4	14.5	4.0	3.1	190	輝緑岩	完	
130	49	打製石斧	カ・ヨ— 1・2	15.8	6.6	2.9	255	黒色頁岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
131	50	打製石斧	カ・ヨ—2	15.3	7.4	2.8	337	黒色頁岩	完	
132	51	打製石斧	ツ・ネ—3・4	11.6	3.6	1.4	73	黒色頁岩	完	
133	52	打製石斧	タ・レ—4・5	15.0	5.3	2.7	226	黒色頁岩	完	
134	53	打製石斧	タ—0・1	10.5	4.5	2.1	111	細粒安山岩	完	
135	54	打製石斧	カ・ヨ—2	8.7	4.9	2.0	97	黒色頁岩	完	
136	55	打製石斧	カ・ヨ—1・2	8.0	4.7	1.3	54	頁岩	完	
137	56	打製石斧	タ—0・1	8.5	6.0	2.2	113	黒色頁岩	完	
138	57	打製石斧	ヨ—6・84	8.9	6.3	1.3	69	黒色頁岩	完	
139	58	打製石斧	タ・レ—1・2	9.6	5.1	2.8	157	黒色頁岩	完	
140	59	打製石斧	タ・レ—2・3	11.3	6.1	2.0	106	黒色頁岩	完	
141	60	打製石斧	タ・レ—2・3	10.7	5.5	2.0	124	黒色頁岩	完	
142	61	打製石斧	タ—0	9.3	5.5	1.9	112	黒色頁岩	完	
143	62	打製石斧	カ・ヨ—7・8・9	12.8	8.8	2.6	458	黒色頁岩	完	
144	63	打製石斧	ヨ・タ—1	11.1	4.8	1.5	97	黒色頁岩	完	
145	64	打製石斧	ツ・ネ—3・4	7.8	4.1	2.2	62	黒色頁岩		
146	65	打製石斧	ツ・ネ—3・4	8.7	5.4	1.5	69	黒色頁岩		
147	66	打製石斧	ツ・ネ—3・4	7.9	6.0	1.8	96	細粒安山岩		
148	67	打製石斧	ヨ—0	7.0	4.4	1.6	59	黒色頁岩		
149	68	打製石斧	ツ・ネ—3・4	7.7	5.4	1.7	88	細粒安山岩		
150	69	打製石斧	タ・レ—1・2	7.7	4.6	2.1	77	黒色頁岩		
151	70	打製石斧	ヨ—0・1	4.0	4.1	1.5	30	黒色頁岩		

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
152	71	打製石斧	ツ・ネ一 3・4	7.3	7.5	1.5	77	細粒安山岩		
153	72	打製石斧	タ・レ一 1・2	7.7	4.2	1.0	29	黒色頁岩		
154	73	打製石斧	ヨ・タ一 2・3	7.9	7.0	2.5	157	閃緑岩		
155	74	打製石斧	ヨ一0	7.7	4.6	1.5	68	黒色頁岩		
156	75	打製石斧	ヨ・タ一 1・2	6.7	4.0	1.5	54	黒色頁岩		
157	76	打製石斧	タ一 5・6	5.3	4.0	1.7	52	変質安山岩		
158	77	打製石斧	タ・レ一 5・6	7.3	4.4	1.6	74	細粒安山岩		
159	78	打製石斧	ヨ・タ一 1・2	8.9	6.8	2.3	170	閃緑岩		
160	79	打製石斧	カ・ヨ一 1・2	6.5	4.9	1.6	59	黒色頁岩		
161	80	打製石斧	タ・レ一 2・3	8.3	5.5	0.9	56	緑色片岩		
162	81	打製石斧	タ・レ一 5・6	11.1	5.2	1.8	91	黒色頁岩		
163	82	打製石斧	タ・レ一 5	5.5	10.4	2.7	194	緑色片岩		
164	83	打製石斧	カ・ヨ一 2	6.2	4.8	2.0	74	黒色頁岩		
165	84	打製石斧	ヨ・タ一 4	4.7	4.4	1.0	17	黒色頁岩		
166	85	打製石斧	タ・レ一 5・6	12.9	6.8	5.0	378	黒色頁岩		未成品
167	86	磨製石斧	ヨ・タ一 1	8.3	7.2	2.0	144	黒色頁岩	完	
168	87	磨製石斧	レ・ソ一 5・6	8.5	3.8	3.2	141	変玄武岩		
169	88	磨製石斧	レ・ソ一 5・6	15.8	5.2	3.0	425	変玄武岩	完	
170	89	磨製石斧	タ・0	7.1	2.8	1.5	34	黒色頁岩	完	
171	90	三角錐	タ・レ一 3・4	7.2	4.6	3.4	128	黒色頁岩		
172	91	礫器	タ一 0・1	8.6	13.0	3.7	520	灰色安山岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
173	92	礫器	ツ・ネ— 3・4	5.6	9.5	3.5	227	黒色頁岩	完	
174	93	礫器	タ— 5・6	6.4	4.5	2.8	100	黒色頁岩		
175	94	礫器	タ・レ— 5	12.0	8.3	3.8	443	黒色頁岩	完	
176	95	礫器	タ— 5・6	9.6	4.8	4.0	204	黒色頁岩		
177	96	敲石	ヨ— 0・1	12.4	3.0	2.4	138	頁岩	完	
178	97	敲石	ヨ・タ— 1・2	10.7	2.8	2.1	90	黒色片岩	完	
179	98	敲石	カ・ヨ— 2	11.7	3.6	1.7	124	緑色片岩	完	
180	99	敲石	タ— 0・1	13.6	4.5	4.4	352	黒色頁岩	完	
181	100	敲石	カ・ヨ— 1・2	6.7	9.4	6.0	447	黒色頁岩	完	
182	101	敲石	ヨ・タ— 1・2	11.9	6.4	4.8	541	粗粒安山岩	完	
183	102	敲石	レ・ソ— 5・6	13.0	6.4	2.2	229	流紋岩質凝灰岩	完	
184	103	敲	ヨ・タ— 2・3	6.1	8.6	3.8	285	粗粒安山岩		
185	104	敲	タ・レ— 4・5	11.6	9.5	2.3	545	石英閃緑岩	完	
186	105	敲	レ・ソ— 2・3	9.8	10.1	5.3	737	粗粒安山岩	完	
187	106	敲凹	ヨ・タ— 1・2	12.8	9.6	4.9	782	粗粒安山岩	完	
188	107	敲凹	ヨ・タ— 1・2	100	7.7	4.1	484	粗粒安山岩	完	
189	108	敲凹	タ— 0・1	10.7	7.6	4.2	398	粗粒安山岩	完	
190	109	敲凹	No.3 出土地不明	12.3	9.3	4.1	763	粗粒安山岩	完	
191	110	敲・磨	カ・ヨ— 2	9.1	8.3	3.9	421	粗粒安山岩	完	
192	111	敲・磨	タ— 0・1	11.2	9.0	4.2	623	粗粒安山岩	完	
193	112	敲・磨	ヨ・タ— 1	12.0	7.6	4.4	589	粗粒安山岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
194	113	敲・磨	タ— 0・1	11.2	8.3	4.0	532	粗粒安山岩	完	
195	114	敲・磨	出土地不明	15.5	16.6	9.3	4,040	石英閃緑岩		
196	115	敲・磨	ツ・ネ— 3・4	12.3	7.4	3.8	387	粗粒安山岩		
197	116	敲・磨	タ・レ— 1・2	10.6	9.0	3.7	546	石英閃緑岩		
198	117	敲・磨	ヨ・タ— 1・2	10.7	8.4	3.8	548	粗粒安山岩		
199	118	磨	タ— 5・6	11.1	8.3	4.7	648	ひん岩	完	
200	119	磨	ヨ・タ— 2・3	8.8	8.4	4.1	459	石英閃緑岩	完	
201	120	凹・磨	カ・ヨ— 7・8・9	8.9	8.3	3.8	245	軽石	完	
202	121	凹・磨	カ・ヨ— 2	8.6	8.3	4.5	420	粗粒安山岩	完	
203	122	凹・磨	タ・レ— 2・3	8.0	7.9	4.1	364	粗粒安山岩		
204	123	凹・磨	タ・レ— 2・3	8.6	9.4	4.0	263	粗粒安山岩		
205	124	凹	ツ・ネ— 3・4	12.6	8.4	3.4	436	黒色頁岩		
206	125	凹	タ— 0	13.2	7.2	9.7	433	粗粒安山岩	完	
207	126	凹	ヨ— 0・1	17.8	8.0	5.3	890	粗粒安山岩	完	
208	127	凹	タ・レ— 1・3	11.1	8.3	5.1	588	粗粒安山岩	完	
209	128	凹	表採	9.2	7.7	5.3	450	粗粒安山岩	完	
210	129	凹	カ・ヨ— 2	10.3	7.7	4.4	382	粗粒安山岩		
211	130	凹	タ・レ— 1・2	8.1	7.6	3.9	241	粗粒安山岩	完	
212	131	凹・敲・磨	タ・レ— 2・3	11.7	8.5	3.6	571	粗粒安山岩	完	
213	132	凹・磨・敲	カ・ヨ— 2	10.6	7.2	4.3	380	粗粒安山岩	完	
214	133	凹・磨・敲	カ・ヨ— 2	13.7	9.2	3.6	648	粗粒安山岩	完	

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
215	134	凹・磨・敲	タ一 0・1	8.5	9.6	4.0	408	粗粒安山岩	完	
216	135	凹・磨・敲	ヨ・タ一 1	10.7	8.0	4.3	549	粗粒安山岩	完	
217	136	石皿(多孔)	ソ一 2・6	13.8	20.6	7.5	2,140	粗粒安山岩		
218	137	石皿(多孔)	出土地不明	17.8	15.0	5.6	1,860	粗粒安山岩		
219	138	石皿	カ・ヨ一 7・8・9	13.7	13.9	5.0	1,040	粗粒安山岩		
220	139	石皿	ツ・ネ一 3・4	15.4	10.7	4.6	712	緑色片岩		
221	140	石皿	ヨ・タ一 1・2	13.1	10.6	5.5	483	粗粒安山岩		
222	141	石皿	ヨ・タ一 1・2	11.3	8.6	6.6	722	粗粒安山岩		
223	112	石皿(多孔)	表採	12.6	10.3	6.2	428	粗粒安山岩		
224	153	石皿	表採	16.7	12.1	8.2	1,125	粗粒安山岩		
225	144	石皿	カ・ヨ一 2	10.9	12.2	5.8	618	粗粒安山岩		
226	145	石皿	ツ・ネ一 3・4	6.6	12.9	3.9	365	緑色片岩		
227	146	多孔石	カ・ヨ一 2	17.9	18.0	10.5	4,300	粗粒安山岩	完	
228	147	多孔石	タ・レ一 1・2	15.2	14.2	9.0	2,110	粗粒安山岩		
229	148	多孔石	ツ・ネ一 3・4	13.7	12.8	8.5	1,435	粗粒安山岩	完	
230	149	多孔石	出土地不明	16.1	26.6	10.2	5,080	粗粒安山岩		
231	150	多孔石	ヨ・タ一 1・2	18.9	20.6	11.5	4,500	粗粒安山岩		
232	151	多孔石	ヨ・タ一 1・2	21.2	18.5	10.8	4,650	粗粒安山岩	完	
233	152	多孔石	ヨ・タ一 1・2	23.7	14.1	9.7	3,420	粗粒安山岩	完	
234	153	多孔石	タ・レ一 1・2	24.3	14.4	11.8	5,710	粗粒安山岩	完	
235	154	多孔石	タ・レ一 1・2	29.5	16.5	6.2	3700	粗粒安山岩		

番号	挿図No.	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺存度	備考
236	155	多孔石	出土地不明	25.4	16.3	10.0	4,680	粗粒安山岩		
237	156	多孔石	ソー 3・48	29.9	16.0	9.9	6,410	粗粒安山岩	完	
238	157	石核	タ一 0・1	3.0	7.2	2.0	63	黒色頁岩	完	
239	158	石核	ヨ・タ一 1	5.2	10.6	4.8	276	細粒安山岩	完	
240	159	石核	カ・ヨ一 1・2	7.0	5.6	3.4	150	黒色頁岩	完	
241	160	石核	カ・ヨ一 1・2	6.8	9.5	3.8	203	黒色頁岩	完	
242	161	石核	カ・ヨ一 2	8.5	10.2	3.1	277	黒色頁岩	完	
243	162	石	タ一0	5.9	1.7	1.6	18	黒色頁岩	完	
244	163	石	タ一0	7.0	2.4	1.1	26	黒色片岩	完	
245	165	石	タ一0	7.4	2.1	1.7	32	雲母石英片岩	完	
246	165	石	タ一 5・6	5.8	3.0	0.9	20	緑色片岩	完	

表－7　遺構一覧表

遺構名	位置	墳丘(m)		総長(m)		周濠		主体部全長(m)		周堀推積軽石層		主体部方位	重複	備考
		南北	東西	南北	東西	幅(m)	深さ(cm)	長さ	幅					
M－1	ツ、ネ一 3、4	11.7	11.8	(推定) 20.7	(推定) 20.1	上5.5～5.8 下3.1～4.7	21～52			FA	6～14		M－2 W－6 JS－1、2	
〃 2	ネ－4							2.25	1.2～1.5			N－33°－W	W－6	
〃 3	カ－9 ヨ－8、9	10.96	11.08	13.44	14.0	上0.54～1.9 下0.26～1.50	地断より 16～46			FA	中・下層		A－10	
〃 4	カ－8 ヨ－7、8、9	(現状) 15.44	現状 9.35	22.10	(現状) 13.2	上2.15～3.85 下1.30～2.55	30～111			FA	8～12		W－7、11	
〃 5	ヨ－9 タ－9、10					上2.15 下1.5	地断より 40			FA	8～15		A－8、11、12	
〃 6	タ、レ一 1、2	12.9	13.25	16.85	16.2	上1.25～2.65 下0.85～1.52	47～64			FA	8～12		JP－2 A－15、16、24、25	

遺構名	位置	墳丘（m）		総長（m）		周濠		主体部全長(m)		周堀推積軽石層		主体部方位	重複	備考
		南北	東西	南北	東西	幅（m）	深さ(cm)	長さ	幅					
〃 7	タ－0、1	(現状) 12.30	14.50	16.4	17.2	上1.0 ～3.40 下0.48～2.30	26～44	6.14	3.14			N－0°	A－17	
〃 8	タ－0	(現状) 8.8	11.4	(現状) 10.6	13.92	上1.40～2.10 下0.6 ～1.20	20～70	2	1	FA	9～14		W－1	
〃 9	ヨ、タ－1	9.40	9.80	11.75	12.30	上1.24～1.0 下0.50～1.20	19～139			FA	10			
〃 10	カ、ヨ－1、2	13.00	13.05	16.0	17.25	上1.2 ～2.70 下0.84～1.84	38～84			FA	8～10		I－3	「渡り」
〃 11	ヨ－0		(現状) 7.2		(現状) 10.26	上1.12 下0.7	13～32			FA	8～14		I－1	
〃 12	ヨ－0、1	11.48	11.14	13.92	13.76	上1.06～1.65 下0.66～0.04	39～49			FA	10～13			
〃 13	ヨ、タ－1、2	10.8	11.12	14.44	14.76	上1.7 ～2.7 下0.75～1.45	32～53	3.8	1.2	FA	8～10	N－89°－E		
〃 14	カ、ヨ－2	12.26	12.4	17.0	16.08	上0.95～3.45 下0.55～2.15	20～51			FA	6～8			
〃 15	ヨ、タ－2、3	12.66	14.18	18.68	18.04	上1.67～4.03 下0.75～1.60	地断より 61～100			FA	12～16			「渡り」
〃 16	タ、レ－2、3	推定 13.8	13.36	推定 16.0	15.72	上0.75～1.60 下0.10～0.80	地断より 8～17	5.0	3.5			N－0°	W－2	
〃 17	レ、ソ－2、3	12.44	12.1	15.8	15.0	上1.20～2.25 下0.50～1.20	29～50			FA	8～10		I－4	
〃 18	レ・ソ－3、4	12.12	12.24	15.6	15.4	上1.50～2.33 下0.65～1.62	57～70			FA	7～9			「渡り」
〃 19	ソ、ツ－3	12.56	13.2	14.4	15.54	上0.55～1.40 下0.15～1.05	11～34	推定 5.5	3.2			N－11°－W	A－20 W－5	
〃 20	タ、レ－3、4	8.52	8.38	9.76	10.32	上0.55～1.60 下0.1 ～0.8	14～27	2.9	1.7			N－13°－E	W－3	
M－21	タ、レ－4、5	9.82	10.04	13.06	13.34	上1.40～2.10 下0.30～1.35	34～46			FA	8～10			「渡り」
〃 22	ヨ、タ－4	12.36	12.50	15.92	15.84	上1.45～2.45 下0.45～1.30	32～70			FA	9～12		A－27	「渡り」
〃 23	タ、レ－5	11.34	10.44	14.44	14.34	上1.1 ～2.25 下0.6 ～1.15	24～50			FA	8～10		JP－4、5	
〃 24	レ－4、5	7.52	7.88	10.06	10.62	上1.0 ～1.60 下0.35～1.07	31～48			FA	6～10		I－5、6 MP－1	
〃 25	タ－5、6	7.0	推定 7.44	8.92	推定 9.0	上0.9 ～1.55 下0.2 ～0.95	20						J－6	
〃 26	ソ、ツ－4、5	13.8	14.28	18.44	19.4	上1.6 ～3.1, 下0.5 ～2.15	25～60			FA	8～14		M－30	「渡り」
〃 27	タ、レ－5、6	現状 10.44	16.16	現状 13.2	18.7	上1.65～3.10 下0.70～2.10	14～47			FA	7～12		A－21、22、W－4、J－5、JP－7	

遺構名	位置	墳丘（m）		総長（m）		周濠		主体部全長(m)		周堀推積軽石層		主体部方位	重複	備考
		南北	東西	南北	東西	幅（m）	深さ(cm)	長さ	幅					
〃 28	ツ－5、6	現状 9.0	推定 8.6	現状 10.6	推定 12.8	上1.5～1.85 下0.55～0.95	17～28			FA	下層		A－23	
〃 29	レ、ソ－5、6	14.08	14.52	19.44	19.96	上2.25～2.95 下0.8 ～2.30	21～70			FA	6～10		J－7、A－22	「渡り」
〃 30	ツ－5							2.0	0.85			N－86°－E	M－26	

遺構名	位置	規模（m）		面積（㎡）	壁高（cm）	周溝（m）		炉位置	柱穴	方位	重複	挿図
		南北	東西			幅	深さ					
J－1	カ－10	5.21	4.80	20.21	43～64					N－0°		4巻 P103
〃 2	ヌ－15	4.05	5.52	21.36	46～73	0.4～22	12～38	床面中央部西	P_1～P_3	N－77°－W		〃 P105
〃 3	リ－14、15	4.66	6.22	21.36	59～63	6～22	9～12		〃	N－81°－W		〃 P114
〃 4	ル－16	測定不能		現状 14.97	27～36					測定不能		〃 P124
〃 5	レ－6	4.00	4.80	16.77	23～50				P_1～P_2	N－89°－W	W－27	〃 P131
〃 6	タ－5、6	5.60	5.34	27.78	58～60	3～37	8～15	床面北中央	〃	N－24°－W	M－25、27	〃 P133
〃 7	ソ－5	4.65	4.00	20.17	21～48	3～20	6～14	〃	P_1	N－30°－W	M－29	〃 P137

遺構名	位置	規模（m）		面積（㎡）	壁高（cm）	周溝（m）		炉位置	柱穴	方位	重複	挿図
		南北	東西			幅	深さ					
A－1	ト、チ－4、5	2.75	3.54	9.76	72～90				P_1～P_3	N－83°－E		4巻 P84
〃 2	チ－4、5	3.40	3.80	9.73	121～123					N－87°－E		〃 P85
〃 3	リ－4、5	1.80	1.40	1.48	68～72					N－5°－W		〃 〃
〃 4	ト－4、5	2.56	4.32	8.56	102～111					N－86°－E	W－10	〃 P86
〃 5	ト－4	2.20	1.98	4.03	98～100					N－13°－W	〃	〃 P87
〃 6	ヨ－9	2.82	1.45	3.64	58～60					N－30°－E	A－28	〃 P88
〃 7	ヨ、タ－9	3.04	0.96	2.90	48～58					N－14°－E	A－8、W－11	〃 〃
〃 8	ヨ、タ－9	5.30	現状 2.16	9.74	100					N－16°－E	A－7、11	〃 P89

遺構名	位置	規模（m）		面積（㎡）	壁高（cm）	周溝（m）		炉位置	柱穴	方位	重複	挿図
		南北	東西			幅	深さ					
〃 9	ヨ－9	2.22	2.10	2.75	67					N－16°－E		〃 〃
〃 10	カ－9	4.44	1.01	4.50	67～82					N－2.0°－W	M－3	〃 〃
〃 11	ヨ、タ－9	2.62	0.60	現状 1.33	41～68					N－11.0°－E	A－8	〃 P90
〃 12	ヨ－タ－9	1.70	2.44	2.99	118					N－87°－W		〃 〃
〃 13	ヨ、タ－10	1.38	4.00	5.73	47					N－79°－W		〃 P91
〃 14	カ－10	1.90	1.30	2.47	50～60					N－46°－E	J－1	〃 〃
〃 15	レ－2	0.78	1.90	1.55	54～57					N－82°－W	M－6	〃 〃
〃 16	レ－1	1.72	1.52	3.13	20～114					N－10°－W	〃	〃 P92
〃 17	タ－1	1.42	2.70	3.03	26～52					N－66°－E	M－17	〃 〃
〃 18	削除											
〃 19	〃											
〃 20	ソ、ツ－3	1.12	1.92	2.29	34					N－86°－W	M－19	4巻 P92
A－21	レ－6	2.78	2.98	7.92	50～90				P_1～P_5	N－86°－W	M－27	4巻 P93
〃 22	〃	3.30	3.35	10.72	80～85				P_1	N－84°－W	M－27、29	〃 〃
〃 23	ツ－5、6	2.58	2.08	5.03	100～106					N－31°－E	M－28	〃 P94
〃 24	レ－1	1.52	1.00	1.54	51					N－3°－W	M－6、A－16	〃 〃
〃 25	〃	1.52	推定 1.34	2.05	40～61					N－1°－W	M－6	〃 〃
〃 26	カ－8、9	2.20	0.90	1.80	40～50					N－5°－E		〃 P95
〃 27	タ－4	2.24	1.08	2.13	24～35					N－8°－W	M－22	〃 〃
〃 28	ヨ－9	0.85	推定 1.20	現状 0.87						N－56°－W	A－6	〃 P88
AP-1	ヨ－0	1.92	1.40	2.54	46～60					N－22°－E		〃 P95

遺構名	位　置	形状	方　位	規模(m) 長径 短径 深さ	下端径cm	面積㎡	重　複	挿　図	備　考
JP-1	ヌ—15	円　形	N—15°—E	129×110×65	100× 90	0.72		4巻　P140	
〃　2	タ、レ—1	長円形	N—84°—W	105× 65×33	92× 57	0.33	M—6	〃	
〃　3	タ—3	〃	N—57°—W	112×110×55	115×107	0.79		〃	
〃　4	タ—5	〃	N—65°—W	102× 76×86	158×132	1.62	M—23、JP—5	〃	
〃　5	〃	不整形	N—21°—W	120×108×59	56×30	0.14	M—23、JP—4	〃	
〃　6	レ—5	円　形	N—5°—E	113× 99×65	138×130	1.50		〃	
〃　7	タ—5	〃	N—0°	100× 85×38	85× 82	0.56	M—27	〃	
〃　8	ル—16	方　形	〃	現状 342×304×56	現状 328×280	現状 8.70		〃	
MP-1	レ—5	円　形	N—25°—W	120×108×70	115×112	0.98	M—24	〃	

遺構名	位　置	形状	規模(m) 長径 短径 深さ	下端径cm	重　複	挿　図	備　考
I—1	ヨ—0	円　形	115×120×113	90× 50	M—11	4巻　P101	
〃　2	ヨ—0	長円形	220×212×118	146×106		〃　〃	
〃　3	カ—1、2	円　形	105×100×185	80× 76	M—10	〃　〃	
〃　4	レ—2	円　形	130×130×128	88× 80	M—17	〃　〃	
〃　5	レ—5	楕円形	154×110×185	135× 95	M—24	〃　〃	
〃　6	レ—5	円　形	120×106×100	98× 88	M—24	〃　〃	

遺構名	位　置	幅(m)	深さ(cm)	長さ(m)	重　複	新　旧	備　考
W—1	タ—0	60～100	32	3.80	M—8		
〃　2	タ—2、3	50～140	7～14	16.30	M—16		
〃　3	タ—3、レ—3、4	70～120	14～16	24.50	M—18、20		

遺構名	位　　置	幅(m)	深さ(cm)	長さ(m)	重　　複	新　　旧	備　　考
〃　4	タ－6	50～100	15	6.00	M－27		
〃　5	ソ－3	60～180	50～62	27.50	M－19		
〃　6	ツ－3、ネ－3、4	50～210	50～60	24.70	M－1、2、S－1、2		
〃　7	ヨ－7、8	30～250	12～20	18.30	M－4		
〃　8	カ－1	40～ 50	不明	4.00			
〃　9	チ－5、6 ト－4、5	70～150	〃	21.00			
〃　10	ト－4、5	60～110	〃	9.00			
〃　11	タ－9 ヨ－8、9	90～130	〃	9.30	A－7		
〃　12	ト、チ、リ－1	150～385	35～80	16.00			

遺構名	位置	形状	規模(cm) 南北　東西	重　　複	挿　　図	備　　考
S－1	ネ－4	円形	60×80　推定	M－1　W－6	4巻　P139	
〃　2	ネ－4	〃	140×150	M－1　W－6	〃　〃	

VI 考　　察

(1) 縄文時代

芳賀西部団地遺跡住居跡出土の土器について

1．はじめに

縄文時代の遺構・遺物は、前期中葉の住居跡７軒、土坑９基と遺物包含層から前期の遺物をはじめとして中期・勝坂式や焼町タイプ、加曽利Ｅ式土器、後期・堀之内式土器が検出された。時期的には前期中葉の遺物が卓越するが、後期前葉の堀之内式土器もまとまっており良好な資料となり得る。

芳賀団地遺跡群の全体を見渡した場合、芳賀東部団地遺跡で縄文時代前期花積下層式から諸磯ｃ式までと中期加曽利Ｅ４式から後期堀之内式までの遺構と遺物、北部団地遺跡群で中期阿玉台式期の遺構と遺物、さらに西部団地に隣接する小神明遺跡群や芳賀北曲輪遺跡の調査で前期と後期の遺構・遺物が検出されている。今後、それらの成果と照合させながら芳賀団地遺跡群の縄文時代集落構造や変遷をとらえる必要がある。

ここで今回の調査のうち、特に住居跡に焦点を絞り、若干の検討を行いたい。７軒の住居跡の遺物について再度みて行きたい。各住居跡出土遺物の内容は、量的な差があるものの、前期中葉の良好な資料である。

2．住居跡出土の土器の検討

まず、Ｊ１号住居跡であるが、図示した27片のほか若干の破片が出土したに留まっている。胎土には繊維を含むものと含まないもので構成される。従来黒浜式と諸磯ａ式の画期を繊維の有無で区分していたが、近年両型式に繊維の有無が混在している資料が増加したため、繊維の有無による型式認定は不可能となってきている。例えば、２～７の米字文の文様構成をとる土器は繊維を含んでいるが、同じ文様を持ちながら繊維を含んでいないものも多数存在する。本住居跡のほかの土器には繊維は含まれないで、きつく撚った縄文を用い、結節回転が入ることから諸磯ａ式土器である。米字文の文様構成をとる類似資料として、笠懸町清水山遺跡II区２住の土器があげられる。この土器も繊維を微量に有しているが、共伴した土器の多くは繊維を含んでいない諸磯ａ式であることから、本住居跡の時期も、土器の系統問題は別にすれば、諸磯ａ式期の古い段階のものとされる。

Ｊ２号住居跡は、図上復元を含めて20個体近い土器の出土があった。このうち、15個体が全面に縄文が施文された深鉢が占める。平口縁の深鉢が主体で、底部はやや揚げ底に作られる。施文原体は０段多条の単節縄文、無節縄文であり、文様構成は羽状縄文を基調とする菱形構成をとる。ほかに波状口縁も存在する。

また、半截竹管による菱形文を有する土器も平口縁と波状口縁の２種類が出土している。施文要素も半截竹管による平行沈線によるものと連続爪形が充塡される２種類が存在する。

Ｊ３号住居跡からは、図上復元された土器は28個体におよぶ。平口縁と波状口縁の２形態が存在するが、全面に縄文施文されるもの（２～８・10～14・21・22・27・28）と16個体を占め、半截竹管による菱形文を持つもの（１・15～20・23)、貝殻背圧痕（24)、無文土器（25・26）と多種構成である。

Ｊ４号住居跡は、図上復元された個体は10点と少なかったが、半截竹管による菱形文を持つもの（１～４・９・10）と縄文施文（５・８）で構成される。

Ｊ５号住居跡は、復元されたものはなく小破片で構成される。23点とも繊維を含み、コンパス文や連続爪形文や付加条によって構成される。黒浜式期の新しい段階に位置付けられよう。

Ｊ６号住居跡は、図上復元された土器が２個体と小片で構成される。コンパス文（２・17・18）と連続爪形文（３～12)、平行沈線文（14～16）と単節斜行縄文で構成される。

Ｊ７号住居跡は、図示したものが34片であり、復元されたものは存在しない。波状文（１)、コンパス文（29)、連続爪形文（26）のほか、付加条縄文（２・４・12・25）等で構成される。黒浜式期の新しい段階に位置付けられよう。

次に、Ｊ１～７号住居跡から出土した土器は、形態上で大きく４単位の波状口縁と平口縁の２種の器形に分類される。口縁形態の分かるものは総数43個体を数え、このうち平口縁のものが34個体であり、波状口縁のものが９個体であり圧倒的に平口縁深鉢が多い。縄文のものの場合の比は27：４で、文様構成を持つものの比は７：５である。いずれも平口縁が多いが、菱形文の場合、波状口縁が多い点は、文様施文や文様区画を考慮した結果と考えられる。

１群　複数列の爪形文、平行沈線文で描かれた大形の菱形文により文様構成されるもの。

すべて繊維を有する土器である。縄文施文の土器とともに出土土器の大部分を占めている。

ａ類　平行沈線文による文様が表出されるもの。口縁形態は、平口縁（Ｊ２―18・Ｊ４－１・24）と波状口縁（Ｊ２―17・20・21、Ｊ３―23・Ｊ４－４）が存在し、菱形文内に縄文が施文（Ｊ３―23、Ｊ４－４・24）されるものも存在する。

ｂ類　連続爪形文による文様が表出されるもの。口縁形態は、平口縁（Ｊ２―16・28・30・Ｊ３―18・48、Ｊ４―10）

と波状口縁（Ｊ２―17・20・21、Ｊ３―23・Ｊ４―４・９・10）が存在する。

ｃ類　付加文を施すものが存在する（Ｊ２―17・30)。

２群　平行沈線文による菱形文で文様構成されるもの。

すべて繊維を含む土器である。胴部には単節（２段）斜行縄文や無節（１段）縄文が施文される。

ａ類　鋸歯状文を配するもの（ＪＰ―２）

ｂ類　鋸歯状文が入り組むもの（Ｊ４―２・３）

ｃ類　その他（Ｊ２―19、Ｊ３―１）

３群　半截竹管による平行沈線文を主な文様構成とするもの。

ａ類　平行沈線文を有する土器（Ｊ６―13～16・19、Ｊ７―26）

ｂ類　コンパス文を有する土器（Ｊ５―２、Ｊ６―２・９・18、Ｊ７―29）

半截竹管工具の支点を交互にずらすことによって生ずる文様である。いずれも繊維を有する土器である。Ｊ６―２は、口縁部を大きく欠損しているため口縁形態は不明である。胴部には縄文ＲとＬを２本１組にした絡条体が施文される。

ｃ類　波状文を有する土器（Ｊ６―17）

半截竹管による波状の沈線が施文される。Ｊ６―17の１点だけである。繊維を含む土器である。

ｄ類　米字文を有する土器（Ｊ１―２～７）

Ｊ１―２～７は同一個体片である。繊維を含む土器である。

４群　連続爪形文により文様構成するもの（Ｊ５―８・９・10・11、Ｊ６―３～12）

Ｊ６―７・11以外は繊維を有する。

５群　貝殻背圧痕を全面に有する土器（Ｊ３―24）

Ｊ３―24が該当する。アナダラ属の貝殻を折りとって施文具としている。３～４状の助脈を器面全体に押捺している。

６群　無文（Ｊ３―25・26）

Ｊ３―25・26の２個体だけである。Ｊ３―25は平口縁で横位のナデが入る。Ｊ３―26も同様なナデがみられるほか、口唇部に刻みが入る。

７群　器面全面に縄文が施文される土器（Ｊ２―１～６・10・11・13～15、Ｊ３―２～14・21・27・28、Ｊ４―５・８）

本遺跡の主体をなす土器群である。平口縁深鉢と４単位の波状口縁深鉢で構成されるが、平口縁深鉢が圧倒的多数を占めている。

ａ類　口縁部に無文帯を有するもの。（Ｊ２―３・Ｊ３―27）

ｂ類　縄文施文。羽状縄文で菱形構成を原則とする。施文原体は無節（１段）縄文、単節（２段）縄文、０段多条単節（２段）縄文、付加条が多数みられ、組紐なども存在する。

３．各群の様相

住居跡出土の土器について、７群に分類できたが、次にこれらの型式、内容の検討を行って行きたい。

１群土器については、県内からの出土事例の報告はあったものの、昭和50年後半に実施された関越自動車道新潟線の調査による成果が大きい。現在のところ、赤城山西麓から利根地域に遺跡はまとまっており、この種の良好な資料を出土している県内の遺跡としては、北橘村分郷八崎遺跡・下箱田向山遺跡、赤城村見立溜井遺跡、昭和村中棚遺跡・糸井宮前遺跡、月夜野町三後沢遺跡などがあげられる。これらの土器は、中部山岳地方で多数出土している「有尾式土器」と共通することから、有尾式土器、有尾系土器、大形菱形文系土器、見立式土器といった型式名が用いられている。型式名の統一をみていないことの要因として、中部地方における有尾式土器と若干異なっているためである。ここでは、中部地方で研究されてきた有尾式土器とは異なる内容を有し、中部地方を凌ぐ勢いで北関東北西部から遺跡が発見されている現状を踏まえて、ひとまず有尾系土器の名称を使用しておきたい。

中部地方では、有尾式土器以前の段階に無繊維土器の伝統を保有しつつ、他系統土器の要素を取り入れて神之木式土器が成立したと考えられている。さらに神之木式土器と型式的な連続性をして成立するのが有尾式土器である。南関東編年と対比させた場合、若干のズレがあるものの神之木式土器が関山式土器、有尾式土器が黒浜式土器に該当する。

有尾系土器の時期的な位置付けは、中棚遺跡では黒浜式土器を５段階に細分した中の１・２段階に有尾系土器が伴出することとし、糸井宮前遺跡では黒浜式土器を３段階に分け、１段階に伴出、分郷八崎遺跡では、黒浜式土器を３段階に区分し、１・２段階に伴出するとしている。近年、埼玉県内の研究者によって有尾系土器の研究が活発になされているが、大方の見解は関山式土器終末期に出現し、黒浜式土器の中段階で終焉を迎えている。

以上のことから、１群土器の有尾系土器は、神之木式土器に似た口縁部に櫛歯状工具による文様構成を持つ古い要素が認められないことから、比較的新しい部類に属することが考えられる。

２群の土器については、菱形文構成をとることから１群の土器と共通する性格の強いものである。単体の平行沈線文で構成される点は関山式終末にみられた文様構成の流れの中でとらえる事ができる黒浜式土器である。このことから、１群の有尾系土器と本群の共伴関係が有することから時間的に同列になることが証明できよう。

３群の土器については、繊維の有無が混在する土器群である。このことは次の４群も該当する。このことは、逆に次の繊維を混入しない土器への過渡期である証拠でもある。時期的には黒浜式終末段階から諸磯ａ式初頭段階に該当しよ

う。

4群も3群と同様に繊維の有無が混在する土器群である。この種の文様も黒浜式終末から諸磯a式期にかけて多数みとめられる。

5群に分類した貝殻背圧痕を有する土器は、早期終末から前期初頭の花積下層式土器にかけて盛行するものである。しかし、黒浜式期の貝殻文土器も少なからず存在することが確認されている。大宮台地から東関東に主体的な分布があり、貝殻文の種類も背圧痕のものと貝殻腹縁文で構成される2つが存在する。埼玉県大宮市大谷場貝塚事例では、4例の深鉢に貝殻背圧痕が認められる。

6群の無文の土器については、芳賀東部団地遺跡IIIで報告されたJ52号住居跡の無文土器と関連を持つものといえる。J52号住居跡の無文土器は、口縁部の4カ所に3個1組の刻みを有する深鉢で繊維をまったく含んでいない。無繊維であることや他の復原された土器の様相から諸磯期の所産と考えられることから、こういった無文土器の系譜を辿ることができよう。器壁は他の縄文が有文土器に比べ、薄く成形される特徴を有する。

7群の縄文が施文された土器の大多数は、繊維を含んでいる。口縁部に大きく無文部を残すものと全面施文の土器が存在する。口縁部に大きく無文部を残したものは、有文土器を意識したものと考えられる。縄文の種類は、無節(1段)縄文や0段多条の単節(2段)が圧倒的多数を占めるが、付加条・結節回転・ループ文や組紐等も少なからず存在する。羽状縄文で菱形構成をとるものが有尾系土器に帰属し、付加条やループ文、組紐といった文様をとるものが黒浜式に帰属するものと考えられる。

4. おわりに

以上、芳賀西部遺跡群の土器について大きく7群に分類することができた。これらの時期的な位置付けについては、黒浜式土器の中段階から一部諸磯a式土器にはいるものと考えられる。群の流れでみれば、1群と2群、大多数の7群土器が先行し、3・4群土器が続くものと理解される。5・6群については、類似例が少なく今後に残された点も多いが、大きく黒浜式土器の範疇に含まれるものと理解される。

こういった状況をもとに各住居跡の変遷をとらえてみたい。大きく有尾系土器を有するJ2～4号住居跡が先行し、J1・J5～7号住居跡が続くものといえる。先行する3軒の土器組成をみるならば、南関東系である黒浜式の量的の貧弱さが指摘できる。量比でみれば数パーセントも満たないものと思われる。このように、県内でもすでに指摘されていた赤城山西麓から利根地域に色濃く分布する有尾系土器の分布範囲が、さらに赤城山南麓まで席巻される事実が判明した。今後、いかなる要素で土器文化の地域圏形成がなされるか解明の鍵を握っているものといえる。

また、芳賀団地遺跡群内で縄文時代前期の集落形成を考えた場合、花積下層式から関山式期にかけて東部団地遺跡で集落が営まれ、有尾系土器の時期には西部団地遺跡に移動がみられ、諸磯a式期になると再び東部団地遺跡に集落が営まれるという実態が浮かび上がってくる。今後、北部遺跡群の整理がなされ報告書の刊行が予定されているため、報告書の刊行後、詳細なる視点から各遺跡群の時期別の変遷や関連について研究を進めることが必要と思われる。

参考文献

青木義脩　1971　「浦和市大谷場貝塚」『埼玉考古』第9号
高野博光　1974　「黒浜期における貝殻文土器理解のために(その1)」『埼玉考古』第12号
宮田　毅　1981　『大塚・間之原遺跡確認調査の概要一第2次調査(白金・榎戸・大塚・高原地区)一』群馬県太田市教育委員会
昼間孝志　1984　『三ケ尻林(2)・台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第34集
富沢敏弘　1985　『中棚遺跡』群馬県昭和村教育委員会
鳥羽政之　1985　『見立溜井遺跡』群馬県赤城村教育委員会
間庭　稔　1986　『大友館遺跡』群馬県月夜野町教育委員会
柿沼恵介　1986　『分郷八崎遺跡』群馬県北橘村教育委員会
菊地　実　1986　『三後沢遺跡・十二原II遺跡』群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財発掘調査団
間庭　稔　1986　『善上遺跡』群馬県月夜野町教育委員会
細田　勝　1989　「黒浜式土器成立の背景について一特に東北地方土器群との対比を通して一」『古代』第87号
奥野麦生　1989　「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号
金子直行　1989　「縄文前期中葉における大形菱形文土器群の成立と展開」『埼玉考古』第25号
田中和之　1990　「縄文時代前期中葉の土器群の問題点一組合わせ鋸葉状文土器群の成立と展開を中心として一」『埼玉考古』第27号
飯島義雄　1991　『下箱田向山遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財発掘調査団

前橋市内出土の有舌尖頭器について

1．はじめに

氷河時代である更新世は、約1万年前を境にして終わりとされるが、気候の温暖化はその前後から急速に進み、植生や環境に大きな変化をもたらせた。日本史の時代区分に従えば旧石器時代終末から縄文時代初頭にかけての時期にあたる。そうした気候の変化にあわせて、細石刃文化や神子柴・長者久保文化といった文化に伴う様々な石器がめまぐるしい変遷を遂げる。そのうちの1つとして有舌尖頭器があげられる。長く続いた石槍文化の終末期に位置する有舌尖頭器は、やがて来る弓矢の出現によって石鏃に替わる過渡期の石器といえる。

本遺跡J2号住居跡から図2－1の黒色頁岩製の有舌尖頭器が出土した。J2号住居跡は縄文前期中葉の所産と考えられる。従って、住居跡と有舌尖頭器は年代の隔たりが大きく、何らかの理由で混入したものと考えられる。この有舌尖頭器は、先端部に欠損しているが、表裏面とも丁寧な押圧剝離が施される優品である。残存している部分で長さ6.9cm・幅2.3cm・厚さ0.9cm・重さ14.0gを計り、明瞭な逆刺が観察できる。近年、市内の発掘調査でも有舌尖頭器が増えつつある状況なため、ここで表採資料を含めて集成を行っておきたい。

2．市内出土の有舌尖頭器

現在、市域の赤城南麓地域から16点の有舌尖頭器の出土が知られている。以下、個々にわたってみて行きたい。また、形態の説明については、鈴木1986による分類に従う。この分類では、基部形状に重点を置き、尖基式・凸基式・平基式・凹基式の4種類に分けられ、さらに側縁の形状を外湾側縁・直線側縁・内湾側縁・平行側縁の4種類を加味した分類を行っている（図1）。ほとんどの有舌尖頭器の形態に適合されるものである。

端気遺跡群（図2－2）

黒色頁岩製の有舌尖頭器が1点出土している。2は先端を欠損する。現存する部分で長さ5.8cm・幅2.1cm・厚さ0.6cmである。基部は平基式で、明瞭な逆刺が付き、身部は直線的な側縁で構成される。なお、爪形文土器片1点が周囲から検出されている。

小神明遺跡群（図2－3）

珪質頁岩製の有舌尖頭器が1点出土している。3は完形品であり、長さ4.5cm・幅1.5cm・厚さ0.3cmを計る。表裏面とも非常に丁寧な押圧剝離で調整される。基部は凸基式であるが逆刺が無く、平坦をなしている。また、表裏面の稜線部分に研磨がなされている。

引切塚遺跡（図2－4）

頁岩製の有舌尖頭器が1点出土している。4は完形品であり、長さ4.2cm・幅1.7cm・厚さ0.6cm・重さ3.3gを計る。基部は凸基式で逆刺が付き、身部は平行側縁で鋸歯状に調整される。

柳久保遺跡群（図2－5～7）

3点の有舌尖頭器が出土している。3点とも黒色頁岩製である。5は小形の有舌尖頭器で先端部を欠損する。現存する部分での長さ3.9cm・幅1.8cm・厚さ0.6cmを計る。基部は凸基式であり、身部に対して基部の発達がみられる。6はほぼ完形品である。大きさは長さ5.6cm・幅1.6cm・厚さ0.6cmを計る。凸基式の基部を有し、身部は外湾する側縁で構成される。7は先端を大きく欠損し、基部も欠損している。現存する部分での長さ6.7cm・幅2.2cm・厚さ0.6cmを計る。基部は凸基式で逆刺が明瞭につき、身部は直線的に構成される。

横俵遺跡群（図2－8～10）

3点の有舌尖頭器が出土している。8は先端部を欠損するチャート製の有舌尖頭器である。現存する部分の長さ4.6cm・幅1.6cm・厚さ0.5cmで重さ4.4gである。基部は尖基式で外湾しているため、逆刺は明瞭ではない。身部も外湾する側縁で構成され顕著な鋸歯縁で構成される。9は表裏面とも非常に丁寧な押圧剝離で調整される。基部は凸基式であるが逆刺が無く、平坦をなしている。魚尾形の基部を有する珪質頁岩製の有舌尖頭器でほぼ完形品である。全長5.0cm・幅1.2cm・厚さ0.3cmで重さ1.8gである。10は珪質頁岩製の有舌尖頭器で完形品である。長さ3.8cm・幅1.4cm・厚さ0.4cmで重さ1.6gである。表裏面とも主要剝離面を大きく残しているが、丁寧な押圧剝離が施される。基部は凸基式の魚尾形となり、身部は外湾する側縁で構成される。

荻窪地内表採品（図2－11）

11はチャート製の有舌尖頭器である。先端と基部を僅かに欠損している。現存している部分で、長さ5.6cm・幅2.4cm・厚さ0.8cm・重さ6.8gを計る。基部は尖基式で、身部は直線的な側縁で構成される。埼玉県長瀞総合博物館所蔵。

嶺地内表採品（図2－12）

12は頁岩製の有舌尖頭器である。先端を僅かに欠損しているが、現存している部分で、長さ6.0cm・幅1.9cm・厚さ0.7cm・重さ6.0gを計る。基部は尖基式で、身部は外湾する側縁で構成される。埼玉県長瀞総合博物館所蔵。

富田地内表採品（図2－13）

13は基部を大きく欠損しているが、頁岩製の有舌尖頭器と考えられる。現存している部分で、長さ5.2cm・幅1.4cm・厚さ0.5cm・重さ3.0gを計る。身部は直線的な側縁で構成される。埼玉県長瀞総合博物館所蔵。

小坂子地内表採品（図２－14）

14は頁岩製の有舌尖頭器である。先端部を僅かに欠損している。現存している部分で、長さ5.4cm・幅2.0cm・厚さ0.6cm・重さ5.2ｇを計る。基部は僅かに舌部が形成されることから凸基式ともとれるが、尖基式としておきたい。身部は直線的な側縁で構成される。埼玉県長瀞総合博物館所蔵。

このほかに、芳賀団地遺跡と内堀遺跡群Ⅲの調査でも各１点ずつ出土している。

３．有舌尖頭器の分類

本州における有舌尖頭器は白石1988によれば、中林形、萩平形、柳又形、小瀬が沢形、見立溜井形、花見山形の６形態に分類されている（図２）。各形態の特徴は、中林形は逆刺が顕著でなく舌部が逆三角形の形態を持ち、萩平形が逆刺は緩い抉り込みで舌部が発達している。柳又形は短い微尖基状の舌部を有し、小瀬が沢形は長身で逆刺が鋭く、発達した舌部を有している。また、見立溜井形は長身であるが逆刺が顕著でなく棒状の基部を有し、花見山形は逆刺が極めて顕著になり舌部が発達するという特色を持っている。

有舌尖頭器の変遷については、芹沢1966で提示した４期（Ⅰ期…本ノ木、鳴鹿山麓・Ⅱ期…本ノ木、中林、Ⅲ期…上黒岩、柳又、小瀬が沢の一部・Ⅳ期…橋立岩陰、一ノ沢岩陰、小瀬が沢の一部）の編年が今でも大方の支持を受けており、土器の変遷から対比させた白石1988でも大方追認されている。芹沢によれば「第Ⅰ期ではまだ尖頭器の基部の舌状突起が発達せず、第Ⅱ期にようやくそれが明確になる。第Ⅲ期には基部の両端に返しがつき、第Ⅳ期になると有舌尖頭器が鏃のように小形化してしまう」とされ、Ⅲ期とⅣ期には土器の伴出が認められ、Ⅰ期とⅡ期は土器の出現段階以前と位置付けられた。一方白石によれば、中林形、萩平形、柳又形、小瀬が沢形、見立溜井形、花見山形といった変遷をたどっている。今回の有舌尖頭器についても、単独出土であるため時期決定の根拠に乏しいため、これらの編年を適用して行きたい。

市内出土の有舌尖頭器をみた場合、これらの形態に帰属されるものもあるが、この分類から外れるものも存在する。本ノ木形有舌尖頭器は今の所検出されていない。強いて挙げれば、柳久保遺跡群Ⅰで報告された長身の尖頭器があげられよう。市内出土品の大部分を占めるのが小瀬が沢形有舌尖頭器や萩平形有舌尖頭器であろう。また、柳又形有舌尖頭器は地域的な色彩が強いためか、県内まで視点を広げた場合でも検出例をみない。見立溜井形と小瀬が沢形有舌尖頭器の差異は舌部の形態の相違であるため、同一グループとしてくくれることも考えられる。終末期の有舌尖頭器である花見山形有舌尖頭器は、市内でも柳久保遺跡などでみつかっている。これら小瀬が沢形や花見山形有舌尖頭器には、大部分が地元石材である黒色頁岩で製作される特色を有する。

４．「石墨形有舌尖頭器」と「壬形有舌尖頭器」について

さらに、これらの形態分類に含められない有舌尖頭器について若干の検討を行いたい。ここで、取り扱うのは、横俵遺跡群から出土した鋸歯縁を持つ８や珪質頁岩で製作される小神明遺跡群出土の３、横俵遺跡出土の９についてである。８は形態的には中林形に類似するが、中林の調整技法にくらべ押圧剝離が整然と並んでいるため明らかに異なっている。また、細部の形態もやや異なっており、決定的な相違は見事なまでに仕上げられた鋸歯状の側縁であろう。同形態の石器は、横俵遺跡群のほか県内では、沼田市石墨遺跡や中之条町柳沢、大胡町河原浜、同町堀越などの利根・吾妻・赤城南麓の県内全域に確認され、さらに広範囲に分布するものといえよう。横俵遺跡群例がチャート製であるが他の事例はすべて黒曜石製である。硬い緻密な石材でないとこういった鋸歯縁は製作できえないことが考えられる。以上、形態的な特徴からこの鋸歯縁を有する有舌尖頭器を「石墨形有舌尖頭器」として注意をはらいたい（図５）。

次に、３や９の極めて特徴的な形態を有する有舌尖頭器に注目したい。群馬県内では、横俵遺跡群や小神明遺跡群の３点をはじめとして赤城村見立溜井遺跡や東村曲沢遺跡などで検出されている。また、隣の新潟県壬遺跡や小瀬が沢洞窟でも認められ、山形県日向洞窟にも存在する。形態的な特徴は、独特な基部を有し、極めて薄く仕上げられる点にあり、石材も珪質頁岩を用いる点である。また、側縁に関しては鋸歯状に製作される小神明例、見立溜井例も存在する。さらに、小神明例や曲沢例には、表裏面に研磨がなされている。この形態の有舌尖頭器は、小形化した一群であることから花見山形段階に平行するものとしてとらえられる。極めて特徴的な形態を有することや、広域に分布することから、「壬形有舌尖頭器」と呼んで、今後注意を払って行きたい（図６）。

５．まとめ

以上、市内出土の有舌尖頭器について、大方は土器発生以後の所産に位置付けることが妥当と考えられる。芳賀西部出土の有舌尖頭器についても単独で出土しているため、時期的な位置付けを決定できない難しさがあるが、その形態から土器発生後の有舌尖頭器として位置付けられよう。

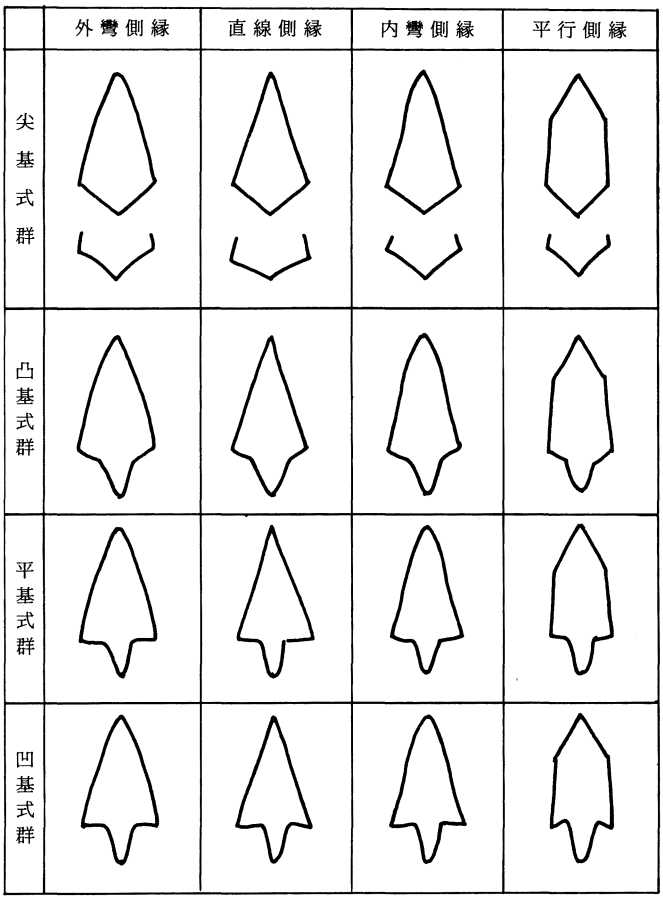
また、市域を含めて群馬県内の有舌尖頭器の石材をみた場合、普遍的に在地の黒色頁岩が用いられている。また、チャートや遠隔地石材である珪質頁岩・黒曜石といった石材も使用されている。しかし、チャートや黒曜石といった緻密な硬い石材は、側縁を鋸歯状に仕上げる形態に好んで用いられ、珪質頁岩は極めて特徴的な形態にのみ用いられている。

このように石材と形態は有機的な関係を有していることが確かめられたが、さらに細かな検討を必要としよう。それは、石材の意図的な選択が、時期的な違いによるものか、分布域の違いによるものか、汎日本的な視野での検討を必要

としよう。また、旧石器時代から普遍的に用いられている在地石材である黒色安山岩も多用されない事も分析しなければならない。珪質頁岩を用いる「壬形有舌尖頭器」については、珪質頁岩を用いた文化である荒屋型彫器を伴う細石刃文化の南下といった意識を色濃残したものを想起させる。

参考文献

芹沢長介　1966　「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第2集
山形県　1968　『山形県史　考古資料編』
中村孝三郎　1978　『越後の石器』学生社
横山　巧　1979　『佐波郡東村曲沢遺跡』群馬県佐波郡東村教育委員会
小林達雄　1980　『壬遺跡』国学院大学考古学研究室
前橋市教育委員会　1981　『芳賀の発掘』
木暮　誠ほか1984　『端気遺跡群II』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
井野修二　1985　『小神明遺跡群V』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
水田　稔　1986　『石墨遺跡』群馬県教育委員会・沼田市教育委員会
鈴木道之助　1986　「新東京国際空港№12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『研究紀要10』千葉県埋蔵文化財センター
白石浩之　1988　「縄文文化の起源をめぐる問題」『神奈川考古』第24号
前原　豊ほか1988　『柳久保遺跡群Ⅷ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
金子正人　1989　『引切塚遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
白石浩之　1989　『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
都所敬尚ほか1991　『横俵遺跡群Ⅲ』前橋市埋蔵文化財発掘調査団



図―1　有舌尖頭器の形態分類模式図（鈴木1986による）

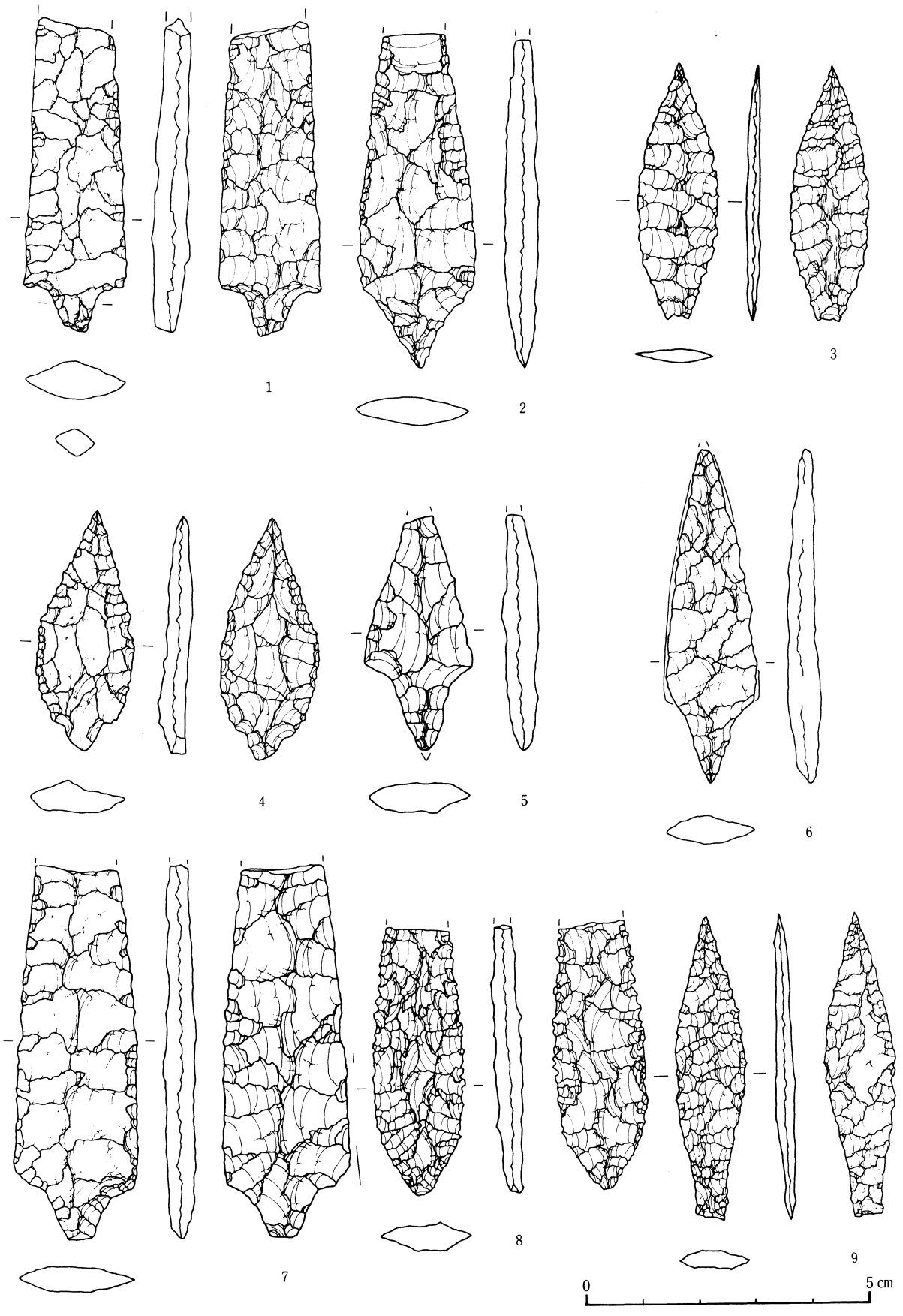
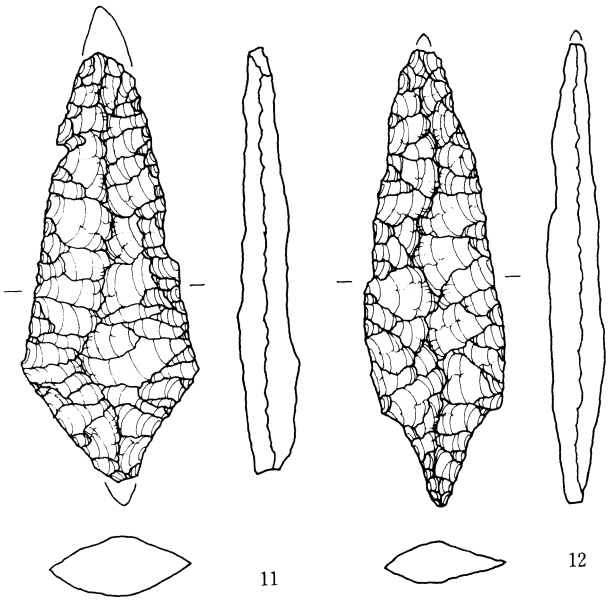
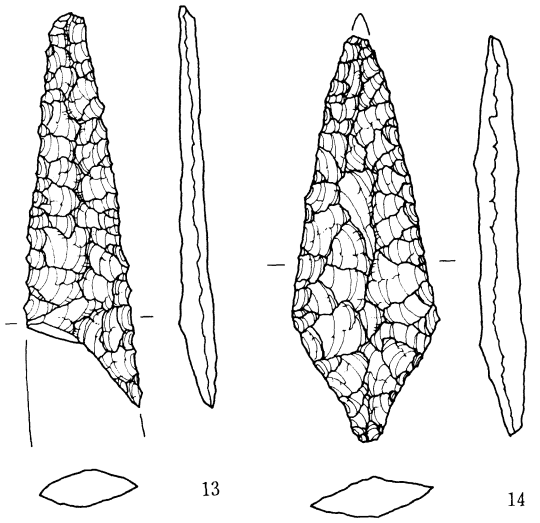


図２　前橋市内出土の有舌尖頭器(1)　１芳賀西部、２端気、３小神明、４引切塚、５～７柳久保、８～10横俵





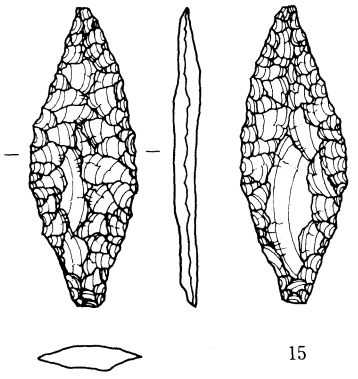


図３　前橋市内出土の有舌尖頭器　11～14市内各地出土

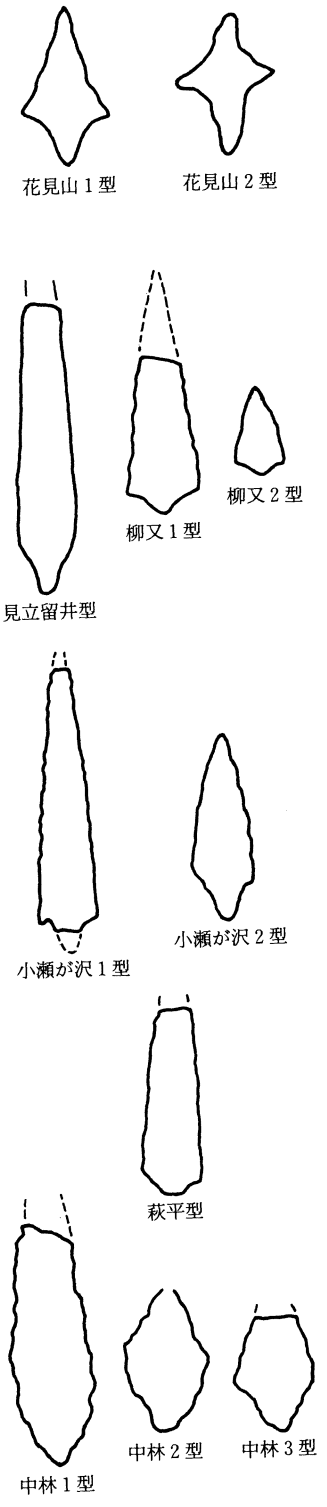


図４　有舌尖頭器の型式
（白石1988による）

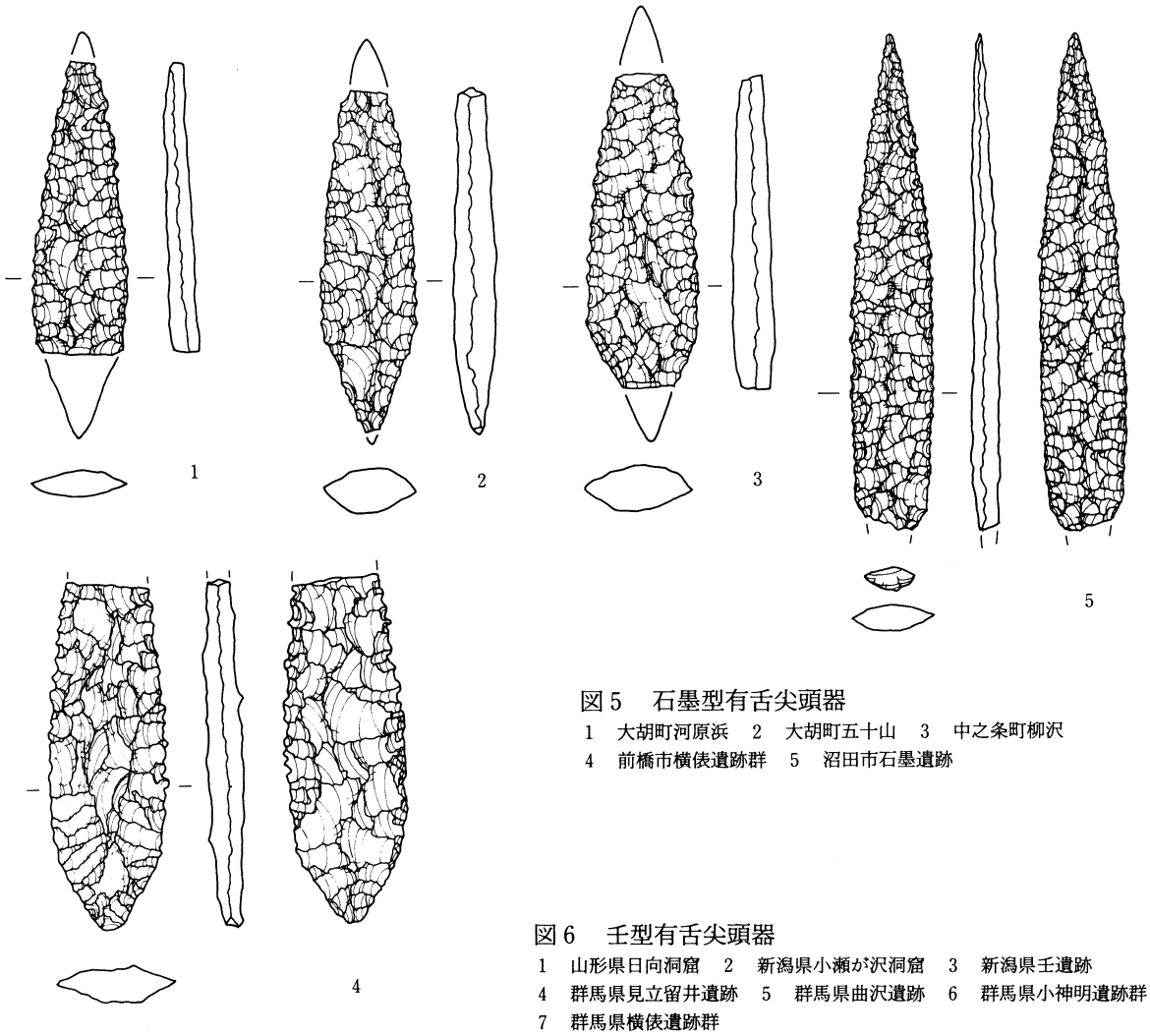


図5　石墨型有舌尖頭器
1　大胡町河原浜　2　大胡町五十山　3　中之条町柳沢
4　前橋市横俣遺跡群　5　沼田市石墨遺跡

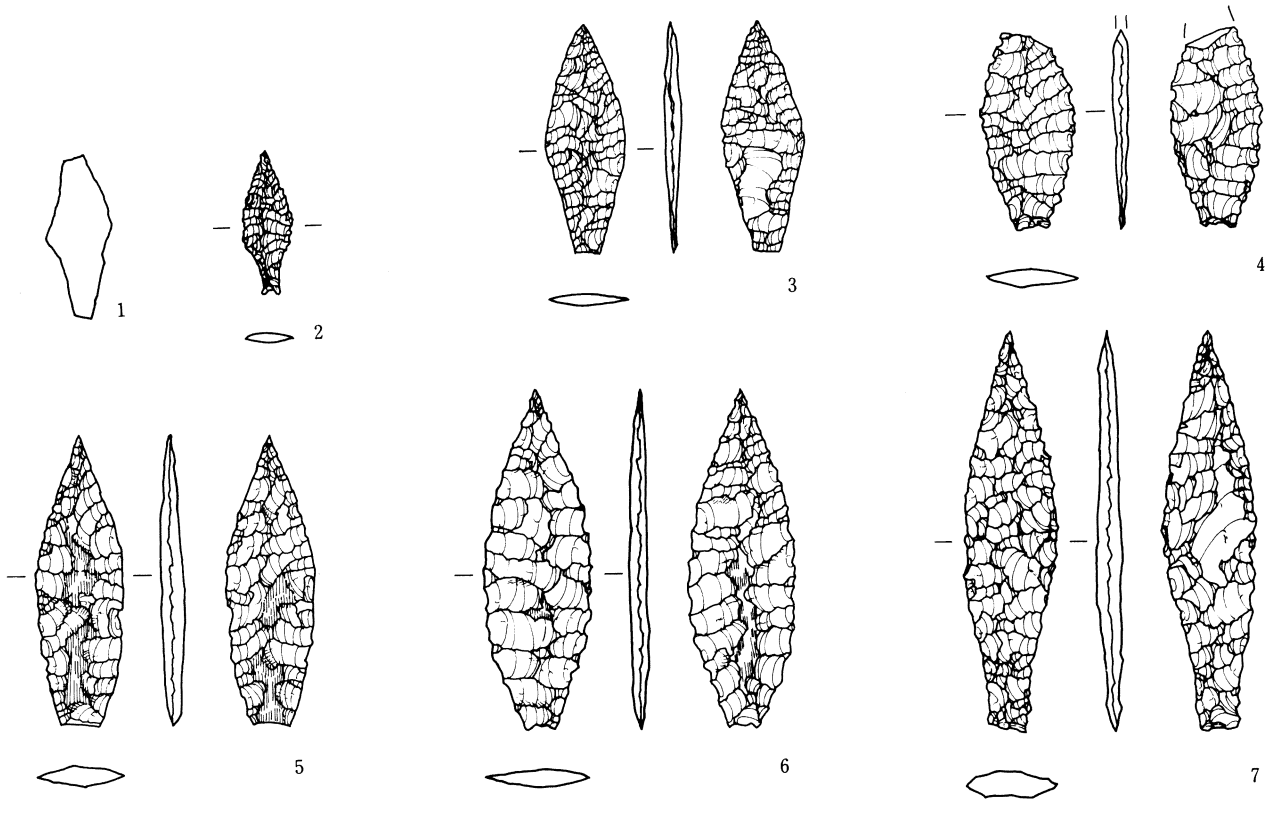


図6　壬型有舌尖頭器
1　山形県日向洞窟　2　新潟県小瀬が沢洞窟　3　新潟県壬遺跡
4　群馬県見立留井遺跡　5　群馬県曲沢遺跡　6　群馬県小神明遺跡群
7　群馬県横俣遺跡群

芳賀西部団地遺跡の住居跡及び土坑について

(1) 住居跡、芳賀西部団地遺跡からは七棟の竪穴住居跡が検出されている。いずれも前期の遺物を伴出する遺構であるが、遺跡内での占地、規模、形状、炉の位置、形態等によって大きく2つのグループに分けられた。

このような分類は芳賀団地遺跡調査報告書第3巻の考察で行なってきているが、本巻の考察においても同様の試みを行なった。

住居番号	位　置	形　状	規　模 (南北×東西)m	周　溝	炉の位置	炉の形状	柱　穴	拡張	遺　物
J－1	カ－10	方　形	5.12×5.54	なし	なし	——	なし	なし	諸磯の式 (古い時期)
J－2	ヌ－15	長方形	4.14×5.52	全周	中央部西	ピットに一石配す	3基 周溝内に設置力	3回	有尾式
J－3	リ－14・15	長方形	4.66×6.22	全周	西側中央	ピットに三石配す	周溝内に小ピット 列3基(方形配置)	2回	有尾式
J－4	ル－16	不整形	——	不明	不明	不明	不明	——	有尾式
J－5	レ－5・6	方　形	4.0×3.98	なし	なし	——	なし	なし	黒浜式 (新しい時期)
J－6	タ－5・6	方　形	5.6×5.34	全周	北側中央	四石配置 埋設土器	なし	なし	黒浜式～諸磯の式
J－7	ソ－5	方　形	4.51×4.0	全周	北側中央	ピットに2石配す	1基	なし	黒浜式 (新しい時期)

上の表でみると、位置、形状、炉の位置、柱穴、拡張の状況により分けられることがわかる。

J－2と3は調査区の北方にあり、長方形で東西に長く、炉は床面西側、柱穴は当初は周溝内であったが、拡張後は床面に設置されたと考えられること、数度の拡張をくりかえしている点に共通性をもつ。この2棟で一つのグループを形成するものとみられる。

J－6と7は調査区の南方で古墳下で検出されており、2棟とも方形で、周溝が全周し、炉が北側中央に置かれている点が共通しており一つのグループを形成するものとみられる。

J－2と3でみられる住居の拡張は、芳賀東部団地遺跡でも見られた住居の形態変化との共通性をもつ。当初の住居跡が方形に近く、柱穴が周溝内にピット列を形成するように並び、他に柱穴はみられず、拡張後は床面に方形配置にピットが配される変化は芳賀東部の前期前半での変化に似る。

以上の分類を遺物での分類と対比させめみると、J－2・3・4が有尾式、J－5・7が黒浜式の新しいころ、J－6が黒浜式から諸磯a式にかけて、J－1が諸磯a式の古いころと分類され、住居の形態での分類とほぼ一致することがわかる。

J－2と3は数度の拡張を重ねて規模が拡張しているが、これも芳賀東部で前期の住居跡の平均面積が時代を追うにつれて大きくなっていることと共通する。

芳賀東部団地遺跡での縄文時代の住居跡の時期別の形態分類によれば、前期の関山期には長方形で、周溝と周溝内に柱穴をもち、石組炉か土器埋設複式炉は床面やや北に位置した。

黒浜期には、住居の形は長方形もしくは方形で、柱穴も壁下もしくは床面に方形の配置されている。炉は床面中央北か西よりに位置している。

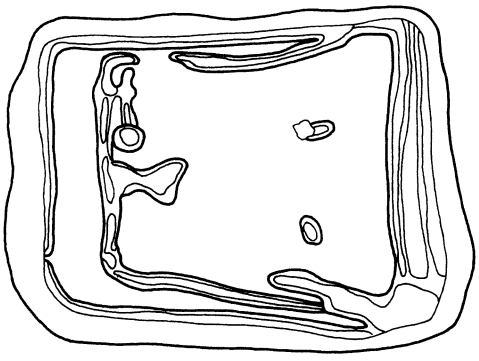
芳賀西部団地遺跡のJ－2、3、6、7はJ－2、3、4が有尾式であるが、特にJ－2、3は長方形である点、当初は周溝内に柱穴をもっていた点は、関山式、黒浜式の古い時期に共通するが、拡張後は柱穴が床面に方形配置されている点は、新しい諸磯期に共通する点である。これは芳賀の住居跡の変遷とはやや異なり、関山・黒浜から諸磯式の中間に位置し、両方の特長をもっている。有尾式の住居跡の特長とみることができる。

J－6・7はいずれも方形の住居跡であり、黒浜式の新しい時期及び諸磯式に共通しているが、柱穴は明確でない点などやや異にする点をもつ。

以上の点からみると、芳賀東部団地遺跡と西部団地遺跡の集落のかかわりは、有尾式の時期に西部団地に集落が移動したとも、この時期に有尾式の集落が西部団地遺跡にまで進出してきたとも考えられる。また、同時期に存在し、黒浜式住居跡との混在域とみることもできる。今後の検討課題となろう。

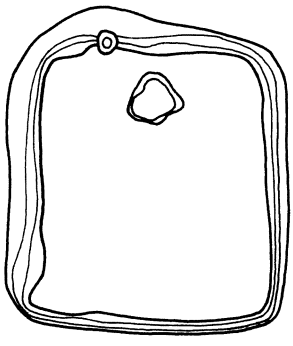
今後は芳賀北部団地遺跡における30軒の縄文時代住居跡、土坑の分類を通じての結果が同様になれば、芳賀地区の縄

有尾式



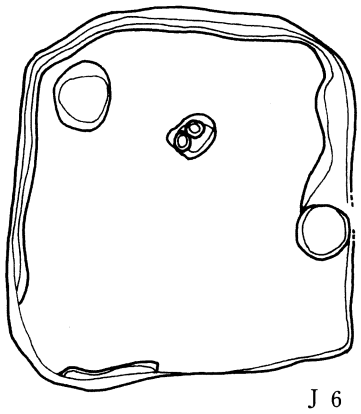
J 3

黒浜式



J 7

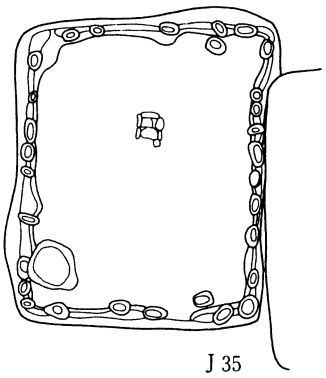
諸磯ａ式



J 6

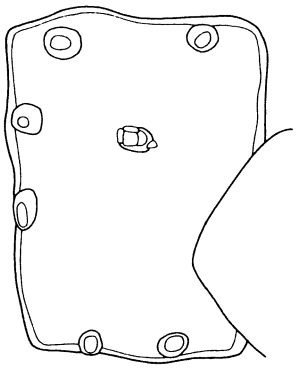
芳賀西部団地遺跡

関山式



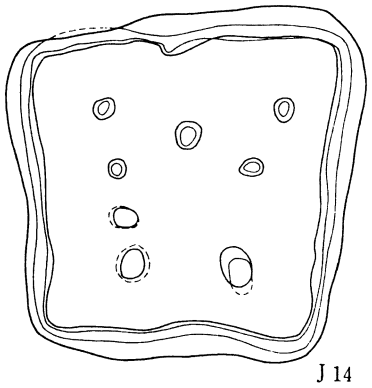
J 35

黒浜式



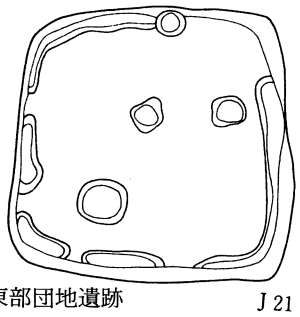
J 47

黒浜式



J 14

諸磯ａ式



芳賀東部団地遺跡 J 21

住居跡変遷図

文時代の様相の解明にも良好な資料となるもので、今後の課題となるものである。

(2) 土坑　芳賀西部団地遺跡からは土坑８基が検出されている。形態的には三種に分けることができる。ＪＰ－１・２・５・７は断面が円筒ないしはややひろがる形であり、ＪＰ－３・４・６は袋状の断面をもつ、またＪＰ－８は浅く底い断面をもつ。

住居跡同様に芳賀東部団地遺跡での土坑の分類に準じて考察を行なった。その際の考察ではＪＰ１・２・５・７は墓壙の性格、ＪＰ３・４・６は貯蔵穴の性格をもつとした。またＪＰ－８のタイプは完堀ではないものの住居に近い施設的なものであると考えられる。

(2) 古墳時代

芳賀西部団地遺跡出土の土器について

芳賀西部団地遺跡の調査に伴って出土した土師器はパン箱にして10箱という量であり、その内で実測対象になり得たものはわずかに47個体という少なさであった。調査区域内には住居跡を初めとする生活関連施設がなく、遺物の多くが削平を受けた古墳の周堀を中心として出土していることから、その殆どが古墳への供献土器としての性格を備えたものと考えることができる。

芳賀西部団地遺跡では本論において既に触れているように、31基の古墳が検出・調査されている。これらの内、実測可能な遺物（土師器）を出土したものは、Ｍ－１号墳、Ｍ－４号墳、Ｍ－８号墳、Ｍ—10号墳、Ｍ—12号墳、Ｍ—14号墳、Ｍ—15号墳、Ｍ—17号墳、Ｍ—21号墳、Ｍ—24号墳、Ｍ—26号墳、Ｍ—27号墳、Ｍ—28号墳、Ｍ—29号墳の15基の古墳である。器種別に見ると、所謂、坏を中心として、壷(小型壷)、甕、坩などを確認することができるが、ここではこれらの内で比較的出土例の多かった「内斜口縁坏」を中心に据えて変遷の様子を辿ってみることにする。ところで、芳賀西部団地遺跡に展開する古墳群はその殆どが周堀中の中、上部をＦＡの純層が埋めており、初期群集墳の一例として位置づけることが可能であるが、該期の「内斜口縁坏」については「三ツ寺Ｉ遺跡」において、「館築造前」「第Ｉ－１期」「第Ｉ－２期」「第II期」「第III－１期」として５期に亘る変遷観を呈示している。「三ツ寺Ｉ遺跡」においては「館築造前」とする和泉期末から内斜口縁坏の出土を見、「第III－１期」で「第II期」の傾向を継承しながらも最末期の様相を示すとし、「第III－２期」では完全に消滅するとしている。それぞれ指標としている遺構から出土した内斜口縁坏を変遷順に並べてみると次表のようになる。

また、芳賀西部団地遺跡と同一台地上に立地する小神明遺跡群（九料遺跡・昭和58年度調査実施）において鬼高Ｉ期に属する竪穴住居跡を10軒検出しているが、内４軒は覆土最上部にＦＡの純層が推積しており、芳賀西部団地遺跡に所在する群集墳とそれ程時間的な隔たりがない時期の集落と見てとることができる。特に、４軒の竪穴住居跡の中で９号住居跡と称されるものは遺物が非常に多く出土しており、床面直上の他、埋・履土中から1000点以上に及ぶ検出数をみている。調査では遺物を出土層位から床面直上、床面より30cm上、床面より60cm上の３グループに分類できるとし、住居が自然推積によって埋没していく中でそれぞれのグループ毎に変化の様子を跡づけることができる。ここでも内斜口縁坏に限定して変遷の順を追ってみると次のようになる。

床直グループ　内彎して口縁部が短く外傾するが、口唇部付近で直立して立ち上がり、受け口状を呈する。

＋30グループ　床直グループに見られた口唇部付近での直立化は殆ど目立たなくなる形で外傾化する。

＋60グループ　床直グループ、＋30グループで見られた口縁部の外傾傾向は更に弱くなり、斜め外方へ立ち上がる。また、体部と口縁部の境は特に外面において明瞭ではなく、連続して移行していく。いずれも、外面は体部下半部を中心としてヘラ削りが、内面は丁寧なヘラ研磨が施される。

そこで、次に三ツ寺Ｉ遺跡と小神明遺跡群（昭和58年度分九料遺跡）の変遷観・変化の有様を基本軸にして芳賀西部団地遺跡出土の内斜口縁坏の変遷を跡づけてみることにする。

ここでは、特に口縁部、口唇部の形態的特徴に着目し、４期に分類した。以下、各期毎に詳述する。

第１期

Ｍ－１号墳より出土した内斜口縁坏を指標とする。外傾する口縁部が内彎して立ち上がる傾向を持ち、口縁部上部は内傾、及至直立し、受け口状を呈する。口唇部は薄く、シャープな印象を与える。体部から口縁部にかけて外面は明瞭なくびれを持たず。だれながら連続するが、内面は逆に明瞭な稜を有する。体部は全体的に浅く、膨らみは顕著ではない。体部外面はヘラ削り、内面は口縁部を除くほぼ全面にヘラ研磨を施す。第１期とした形態の内斜口縁坏は小神明遺跡群からは出土例がなく、三ツ寺Ｉ遺跡においても「館築造前」から「第III－１期」に分類したものの中に見出すことはできない。しかし、三ツ寺Ｉ遺跡では館北濠取水部の上半を埋めるＦＰ混土砂中から受け口状の口縁部を持った内斜口縁坏が出土しており、少なくともＦＰ降下以前に該当坏を位置づけることができる。このように第１期内斜口縁坏は他遺跡例から下限としてＦＰ降下期をおさえることができるのみであるが、形態変化の流れの中で三ツ寺Ｉ遺跡の「館築造前」とした形態よりも更に遡及する時期のものとして把握することが妥当であると考えておきたい。

Ｍ－１号墳からはこの他、尖り気味の丸底から鋭いくびれ部に至り、内彎する口縁部を持つもの、上げ底、底部から

口縁部に至るもの、平底でカップ型を呈するものの3種類の小型壷や丁寧にヘラ研磨された壷などが出土している。

第2期

M—27号墳より出土している。第1期において顕著であった受け口状の口縁部は名残りを滞めながらも、形骸化していく。また、体部上半では器壁が肥厚し、体部と口縁部の境が外面において顕著な段差を持つことが特筆される。4期分類中、最も丁寧なヘラ研磨が施される。他に、小さめの底部を持つ、胴の張った壷が出土している。M—10号墳、M—25号墳も同期のものと考えられる。

第3期

M—22号墳出土土器を指標とする。基本的に第2期内斜口縁坏と同様な傾向を示すが、体部から口縁部にかけての段差が第2期程顕著ではないこと、更に体部上半の器壁が肥厚しないなど、第2期とは差異が認められる為、敢えて分類し、第3期とした。

第4期

M—21号墳出土土器を指標とする。外傾していた口縁部は斜め上方に立ち上がるようになり、全体的にシャープさはなくなり、だれた感が強い。体部と口縁部の段差も明瞭ではなく、体部内面のヘラ研磨も4期中、最も粗雑である。球形胴で、口縁部外面に2段の稜を有する壺や外方に大きく開く口縁部の小型壺が共伴する。

以上、内斜口縁坏から4期分類を試みたが、最後に共伴遺物の比較・検討から古墳の時期を内斜口縁坏の4期分類に基づき、次のように類別しておきたい。

	指標遺構	同期遺構	三ッ寺Ⅰ遺跡分類	小神明遺跡群グルーピング
第1期	M—1号墳			
第2期	M—27号墳	M—10号墳、M—14号墳、M—25号墳	第Ⅰ—1期	床直グループ
第3期	M—22号墳		第Ⅰ—2期	+30cmグループ
第4期	M—21号墳	M—18号墳、M—29墳、M—8号墳 M—17号墳（M—24号墳）	第Ⅱ期	+60cmグループ

参考文献

下城　正、女屋和志雄他「三ッ寺Ⅰ遺跡」　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988

前原照子他「小神明遺跡群Ⅱ」　前橋市教育委員会　1984

坂口　一「荒砥北原遺跡」　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

田中広明「上毛野、北武蔵の古墳時代後期の土器生産—土器生産の転換と在地首長制—」『東国土器研究』2号　1989

「引間遺跡」　高崎市教育委員会　1979

芳賀西部団地遺跡の古墳について

本遺跡において検出された32基（航空写真判読の結果存在が確認されたものを含む）の古墳の詳細については前述の通りである。また、現地での発掘調査が終了した段階において、既に、周堀の形状とFAの堆積状況による編年観や①古墳群の造墓主体の性格、②土地利用の変遷等、幾つかの問題点が指摘されていた。以下、これらの点を念頭において整理結果と併せて本遺跡について若干の考察を試みてみたい。

本遺跡の古墳の群構成を見ると、東西250m・南北150mの範囲に群在しており、当時の集落との重複関係は全く認められなかった。弥生時代の周溝墓には、居住域の内部あるいは集落に隣接して営まれたものと、周溝墓のみが単独にあるいは群在して営まれ、明らかに墓域を区別しているものの両者が認められる。しかし、本古墳群のような初期群集墳の調査事例を見ると、古墳の位置する場所においては同時期の住居跡が確認されている例は無く、居住域と墓域との分離が貫徹されていたものと考えられる。また、周堀の形態については、周堀墓にあっては、周溝が途切れる事なく全周するものは稀であり、初期群集墳を構成する低墳丘の中小規模円墳の周堀との間に直接的な発展関係を見いだすことは困難であるが、外界と墓とを隔絶する周堀の平面形状の差異が構築順序を反映したものであることは、赤堀町・地蔵山古墳群等でも確認された。なお、周堀を伴わない竪穴式小石槨及び埴輪棺の位置付けについては、大胡6号墳や峰岸山285号墳等の様に、一古墳の内部に並行あるいは重複して複数の埋葬主体部が構築されたものが存在すること及び、上縄引4号墳等でも重複関係が認められたように当該古墳と何らかの有機的な関連を持った者の墓であることは考えられるが、造墓主体の性格解明までには至っていない。

本遺跡のように5世紀後半から6世紀初頭の時期にかけて形成された初期群集墳を構成する古墳を見ると、竪穴式小石槨を埋葬主体部に採用した古墳が群中に数基残るが、多くは後世の削平によって埋葬主体部が検出されないものがほとんどである。これは、埋葬主体部の構築面と当時の地表面との関係から生じる差異であり、次のような幾つかの類型が考えられる。Ⅰ当時の地表面上に築いたもの、Ⅱ当時の地表面を掘り下げて築いたもの、Ⅲ当時の地表面上に盛られた封土を掘り下げて築いたもの。更に、周堀の有無（有A、無B）及び周堀底面と石槨床面とのレベル差（大a、小b）

によって７つのパターン化が可能である。実際の調査事例を見てみると、IIがほとんどであり、Ｉに関しては実際にこのような葬方を採ったか否か不明であり、特殊な場合を除き、発見される可能性は極めて低い。IIIに関しては渋川市・半田中原遺跡や境町・下渕名古墳群（４号墳では墳丘が80cm程残っていた）で検出されているが少数である。IIＡについては当然、墳丘の高さに影響を及ぼすと考えられ、葬法の相違が古墳のランクにも拘わってくるものと思われる。前橋市・上縄引遺跡では、周溝墓と墓域を同じくして終末期に至る古墳群が形成されていたが、竪穴式小石槨を埋葬主体部とする７号墳やその存在が想定される４号墳は比較的深い周堀が巡っていた。

本遺跡において確認された埋葬主体部は竪穴式小石槨２・円筒棺１を除くと遺存状態が芳しくなかった。M－２号墳・M－30号墳は検出状況からIIＢであり、M－６号墳・M－７号墳・M－８号墳・M－13号墳・M－16号墳・M－19号墳・M－20号墳の７基は明らかにIIＡｂであると考えられる。また、大部分が調査区域外に位置するM－５号墳・M－11号墳と後世の攪乱を受けたM－１号墳・M－18号墳も同様な埋葬施設を伴っていたものと考えられる。

埋葬主体部を当時の地表面下に構築し、その上に僅かばかりの封土を盛った低墳丘の古墳は、周堀が埋没してしまうと、墓地としての確固たる特定を著しく困難にするものであり、時間の経過によって墓域であったものが居住域・生産域へと変化して行くことは容易に想像されるものである。本遺跡においては、古墳の直上に堆積した土（ＦＰとＣ軽石を含む黒色土）の様相から推して奈良時代以前において既に土地利用が変化したことが明らかにされ、横穴式石室を埋葬主体部とする古墳が認められないこと等から、６世紀段階において既に造墓活動を停止して質的変化を遂げたことは考えられるが、その実態を解明するまでには至らなかった。平安時代に至っても、いわゆる「離れ国分」と呼ばれるような住居遺構及び骨蔵器等も検出されなかったことから推して、生産関連の土地として利用されたものと思われるが定かではない。

主体部自体に関連しては、赤堀町・峰岸山古墳群の調査では、埋葬施設の床面及び裏込め施設の構造に着目し、次のような変遷が考えられている。

		初　期	盛１期	盛２期	盛３期	終１期	終２期	終３期
裏込め	粘土・礫を用いない	■						
	粘土・礫交互使用		■	■	■			
	粘土・礫、中間に砂礫				■			
	砂礫を粗雑に使用				■	■	■	■
	小礫	■						
床面	舗石状如石上に小礫	■	■	■				
	粘土・小礫			■	■			
	角礫上に小礫						■	
	礫					■	■	■

当然、横穴式石室と竪穴式小石槨とでは構築手法が異なるものと思われるが、興味深い結果である。また、伊勢崎市・上植木光仙房遺跡では３基の竪穴式小石槨が調査されたが、石槨上面の舗石の状態の変化が観察された。即ち、整備された舗石面を持つものから省略されたものへと変化して行くことが確認された。

M－２号墳・M－30号墳共に主体部のみの調査であり、不明瞭な部分が残るが、M－２号墳については埋葬頭位（南北方向に近い主軸をとる）の点から、西田遺跡において検出された「横穴式古墳」と同類の遺構である可能性が考えられる。

本古墳群を営んだ人々の居住域については、周辺地域の土地改良事業等に伴って多くの発掘調査がなされ、「西堀遺跡」の報告で、和泉・鬼高期の調査例をまとめたものがある。小神明遺跡群は本遺跡に隣接するが、本遺跡の両側には浅い開析谷が在り、小地域の範囲は南北方向に延びるものと思われる。そのような観点からすると、古利根川の左岸段丘と本遺跡に挟まれた部分に居住地を想定するのが無難であると思われる。

◎埴輪について

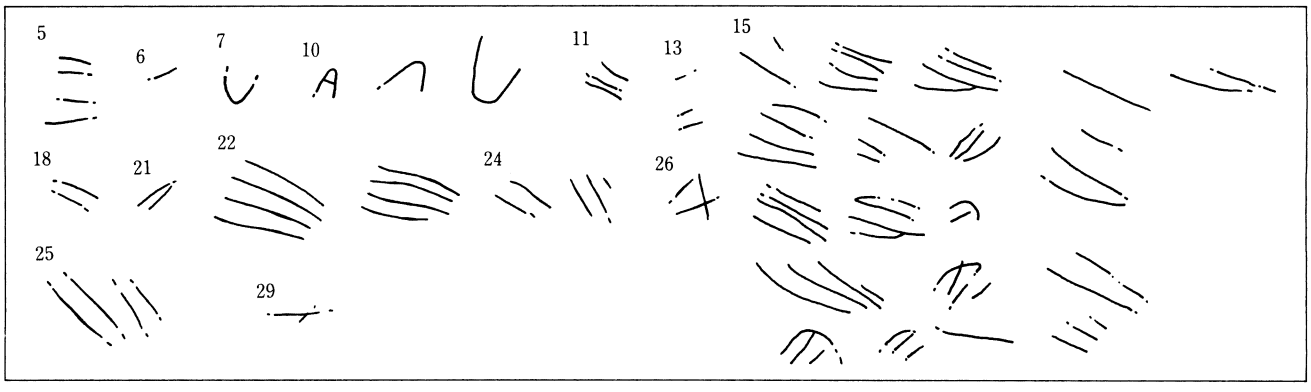
埴輪祭祀については、墳丘規模の相対的な大小と関連して埴輪樹立の有無によって古墳のランク強いては、造墓主体の社会的地位をも標榜していると考えられる。一方、一古墳に使用される円筒埴輪にもバラエティーが存在し、全ての埴輪が同時期に樹立されたものではないという指摘も早くからなされている。また、埴輪製作者に関する研究では、形象埴輪の形態的特徴や製作手法の比較検討からのアプローチがなされて来ているが、全体像解明までには至っていない。そこで、今回は円筒埴輪に記された「ヘラ記号」を手掛かりにして、埴輪製作の諸問題に迫ってみたいと思う。「ヘラ記号」自体の意味や位置付けについては様々な見解が提示されており、弥生時代の記号文や須恵器のヘラ記号との関連等多くの問題を含んでいるが、類似した記号については一応、「同一系譜にある工人集団によって記される」ものと理解しておきたい。そして、記号を書くという行為は埴輪の供給者即ち、埴輪製作者の側からの何らかの必要による発意によ

るものであると考えている。本遺跡では、種類のヘラ記号が確認されたが、ここでは6号墳の資料を中心に扱うこととし、全貌のはっきりとしないもの及び単純な構成のものをも含めた検討は、資料の増加を待って継続して行いたいと考えている。

境町・三筆古墳群では2基の古墳が調査されている。1号墳は径18.8mの円墳で、1.66m×0.44mの凝灰岩製の箱型石櫬を内部主体としており、直刀1・鉄鏃11が副葬され、周堀内からは土師器坏・高坏・壺、円筒埴輪・家型埴輪が出土している。円筒埴輪は、口径22.6cm・器高35.2cm・底型13.6cmの2条凸帯の3段構成であり、内外面に「×」のヘラ記号が認められる。2号墳は径20.8mの円墳で、1.62m×0.41mの凝灰岩製の箱型石櫬を内部主体としており、ガラス小玉14が副葬されていたが、周堀内からの遺物出土は無かった。(トレンチ調査のため、周堀内から遺物が出土する可能性を残す。)FAの堆積状況から推して、5世紀第4四半期に1号墳→2号墳の順に構築されたと考えられる。同じく境町の下渕名古墳群の調査成果で円筒埴輪の大きさと古墳の規模を比較して見ると以下のようになる。1号墳は径15～18mの円墳で器高39.0cm、3号墳は径21.5mの円墳で器高33.2～40.5cm、4号墳は径24mの円墳で器高32.0～35.6cm、6号墳は径21.5mの円墳で器高40.3cmの2条凸帯3段構成の埴輪が出土している。また、粕川村・白藤古墳群では、A1号墳は径14mの円墳で器高31.8～35.3cm、D3号墳は径23mの円墳で器高41.8cm、F1号墳は径18mの円墳で器高32.8～36.3cm、F2号墳は径22mの円墳で器高35.2～36.3cm、P1号墳は径22mの円墳で器高31.8～40.0cm、P6号墳は径22mの円墳で器高34.6～41.4cm、V2号墳は径19mの円墳で器高26.9～39.4cm、V4号墳は径21mの円墳で器高32.2～38.15cm、$Y_1$5号墳は径18mの円墳で器高44.0cmの円筒埴輪が出土している。V2号墳に3条凸帯4段構成のものが見られるが、他は2条凸帯3段構成である。本遺跡の場合は、墳丘規模では径10m前後のもの12基と径15m前後のもの14基に大別されるが、円筒埴輪については全貌のはっきりとしたものは少ない。M—6号墳の場合は径13mで器高32.6～38.2cmを測る。以上の諸例から推して、墳丘の規模と埴輪の大きさとが厳密な対応関係を有するとは断言できないが、墳形・墳丘規模を含めた古墳の規制はある程度の範囲で埴輪にも及ぶものであったと思われる。

本遺跡では、調査した32基の内、15基の古墳において以下のようなヘラ記号が認められた。

芳賀西部団地遺跡埴輪ヘラ記号図（数字は古墳を示す）



15基の古墳で認められた8種類のヘラ記号で、複数の古墳に共通して認められるものが3種類有る。1は5・10・15・18号墳の4基に共通し、21号墳の埴輪にも逆方向ではあるが2条線のヘラ記号が記されている。2は12・15・22・24・25・29号墳の6基に共通している。3は、11・24号墳の2基に共通している。それぞれの埴輪の、胎土・色調・焼成及び細部調整技法等の肉眼的な観察では個体差が有って、同一工人の製品であると断定はできないが、同一の集団に属する工人或は同一系譜にある工人の製品であると考えることはできるであろう。

15号墳で認められた櫛形のヘラ記号は、歯の数は異なる場合も有るが、赤堀村・五日牛18号墳、境町・下渕名4号墳、前橋市の七ツ石1号墳・今井神社古墳等で同一或は極めて良く類似した記号が認められている。赤堀村・五日牛18号墳は、径12.8mの円墳で、墳丘封土中に竪穴系の内部主体を持つ古墳であると考えられており、築造時期はFA降下前とされている。下渕名4号墳も、周堀内にFAが堆積している。七ツ石1号墳は、径12m程の円墳であり、主体部は未調査であるが、周堀内より出土した土師器甕から5世紀後半の築造と考えられる。埴輪は、2条凸帯3段構成で、如径24.7cm・器高37.4cm・底径15.4cmの規模を持つ。今井神社古墳は、全長約71mの前方後円墳であり、やはり5世紀中葉～後半の築造と考えられている。埴輪は、口径30～33cm・器高49cm・底径20～21cm前後の規模を有する。

以上のとおり、ほぼ同時期に存在した古墳において、同一或は類似のヘラ記号が認められたという事実は、それぞれの古墳に樹立された埴輪の製作者の間に有機的な関連が存在することを物語っているとすることができるであろう。即ち、①同一の工人或は工人集団が製作した埴輪がそれぞれの古墳に採用された、②同一系譜にある工人或は工人集団の手によって製作された墳輪を採用した。①の場合には、埴輪の製作が一箇所でなされた場合と複数の箇所でなされた場合の両方の可能性が考えられるが、胎土分析等の化学的な検討を行っていないのでいずれとも決し難い。

調査資料の制約はあるが、①現時点では赤城山南麓地域を中心とする群馬県中央部に分布する、②規模・形態は比較的類似する等の特徴が抽出できる。本県においては埴輪窯跡の発掘調査例は僅少であり、操業規模や流通圏等不明な部

分が多いが、赤城山南麓のいずれかの地において埴輪窯が発見される可能性は充分に考えられる。

本遺跡において確実に2条凸帯3段構成の埴輪を伴ったのはM—27号墳のみであり、全形を窺える接合資料は得られなかったが、埴輪棺には同類形の埴輪が使用されていた。

埴輪の凸帯数と大きさについて、轟俊二郎氏は、異なる凸帯数の埴輪が併存する場合には複数の埴輪工人集団が製作に従事したためとしているが、併存の理由までには言及していない。この問題に対して、若松良一氏は、自然崩壊により欠失した埴輪を捕ったために生じたとする所謂「埴輪植替論」を提唱したことがある。また、増田逸郎氏は「新首長の首長権継承儀礼の場にあって、旧首長が置かれていた社会的地位↔埴輪類形をそこに表現したものと見なすことができれば、当然新旧の差が存在した場合」には生じるものであると考えている。検出事例が少ない理由としては、「6世紀代の氏族、門閥制度の強固な社会にあって、その社会的地位変革の限界性」を挙げている。増田の説は非常に魅力的ではあるが、埴輪配列全体の中での検討ができるような調査例が少ないために未だ決着をみてはいない。

上記の各古墳において、今井神社古墳は中型の埴輪であるが、他はいずれも小型の埴輪である。同規模で凸帯数の異なる埴輪については、甚だ無謀で荒唐無稽のそしりを免れ得ないかも知れないが、埴輪列の中においてその配列に何らかの意図が感じられないのと同じレベルで、あくまでも偶然性に左右された現象であると考えることも可能なのではあるまいか。即ち、農業生産力の飛躍的な向上に伴い、家長層の有力化が初期群集墳の形成を促した結果、埴輪の需要も急激に増大し、新たなる埴輪生産体制が編まれた結果、大規模な生産拠点に付随する製品の集積場所から給供するになったため、大きさは尊重するが類形には執拗にこだわらなくなってしまった為、とは考えられないだろうか。同規模で凸帯数の異なる埴輪が同一の生産地に存在する理由についても、工人集団の中に系譜の異なる者が統合されて組織された結果とは考えられないだろうか。（飯塚）

ま と め

(1) 立地について

遺跡地は標高125m前後で、南へ向ってゆるく傾斜する幅400m弱の比較的細長い舌状台地上にある。発掘調査時点ではこの地は桑園を主とする畑地であった。舌状台地とはいえ、遺跡の北には水田が広がり、東西にある水田との比高も極めて小さい。遺跡から南には現集落が形成され、密集しているが、その両側にある水田との比高はかなり大きくなり、台地としての形状は明瞭になっている。すなわち、この遺跡は低い舌状台地のつけ根にあたる部分に位置している。この立地はこの遺跡の一つの特徴とみられる。

(2) 有舌尖頭器について

Ｊ２号住居跡から有舌尖頭器が出土している。縄文時代前期黒浜式前後の石器の中には各種の石匙があり、発掘調査時点では有舌尖頭器か黒浜期ころの石器の仲間か、それとも有舌尖頭器の再利用品かと迷っていた。この報告にあたり、これらに対し検討を加え、あわせて前橋市内出土の有舌尖頭器の集成を行うことができた。その成果は前述の通りである。

(3) 縄文土器と集落について

縄文時代の遺構は住居跡７、ピット６、配石遺構３が発見されたが、これらのうち住居跡は全て前期に属している。昭和50年の発掘調査時点では前期の住居跡が７軒も一遺跡で発掘された例は県内にはなく、貴重な資料であった。前期住居の変遷については前述のように芳賀東部団地遺跡の住居と比較しつつ、一つの規則性を持って変化していることが考察され、確認された。土器は関山から黒浜期に該当する時期がほとんどで、諸磯ａの古い時期が少しある。住居が共通性を持つのに対し、土器は芳賀東部団地遺跡と比較して、異質な土器が含まれている点は注目される。従来、赤城南面地域では芳賀東部団地遺跡出土土器の方が多く見られてきた。芳賀西部団地遺跡出土土器は一見して、繊維を含有する土器が目立ち、やや脆弱な感じがする。半截竹管によるコンパス文や連続する爪形文は関山式の特色であるが、くびれ部付近に無文帯を構成し、その上部に半截竹管による横線と山形文を描いている点に一つの特色がある。また、くびれのある土器とない土器とで多少異なるが、半截竹管による横線と山形あるいはＸ字形で構成する文様帯の幅が広く、地文に対し竹管文が薄い点も特色である。こうした特色の土器は前述のように有尾式として把握されてきているが、芳賀西部団地遺跡出土土器の中には大木２式との共通する文様要素もみられ、検討する余地があるように考えられる。いづれにしても芳賀東部団地遺跡出土土器とは異質な土器がみられる点は注目される。東部と西部の両団地遺跡は直接距離にして約２㎞の隔りである。住居の特色は共通した変遷がみられるのに対し、土器の相違は何によるのであろうか。時間差として考える一方、他の要素も考えてみる必要を感ずる。東部団地遺跡はかなり広大で、水田面との比高もあり、しっかりした台地である。西部は台地のつけ根にあたり立地は異なっている。同時期の遺跡としては近い距離の割には立地あるいは環境の差は大きいように見られる。この両遺跡の立地と土器の差はそこで生活する人々とどう係わったのであろうか。土器形式の細分化の中で、今後問題とされるべき点と考えられる。

(4) 古墳について

この遺跡では５世紀後半から６世紀初頭にかけて32基の古墳が初期群集墳として調査された。「群集墳」は古墳時代後期を特色づけるものとして、６世紀代以降、鉄製農具の普及による生産力の高まりを背景に形成されたとするのが一般的であった。しかし、次第に古い群集墳が発見され、４世紀代にはじまる古式群集墳も注目されてきた。また、群集墳内の古墳も必らずしも均一ではなく、中心的な古墳をもつ群集墳も発見されている。こうした発見にともない群集墳形成の理由も、政治的な意味も含めて共同体の変質と係わる点を中心に模索されている。

前述のように、この古墳群を営んだ人々の居住域について、あるいは埴輪供給体制についての考察が進められているが、これはまさに古墳群形成の理由追求へのアプローチである。この地域においてどのような経済的変革があり、あるいはどんな政治的な原因があって、人々は初期群集墳を形成することが可能であったのであろうか。居住域の推定と家長層の有力化は一つの問題提起である。

埋葬主体部の構築面と当時の地表面との関係についても考察されている。この古墳群は古墳上の土の堆積状態から見て、奈良時代以前に古墳は平夷され、他の生産関連の土地として利用されたとみられる。このような例として有名なのは平城宮造営のため神明野古墳が全面削平され、市庭古墳の前方部も削平されたことが知られている。また、土地利用という面から見れば、大仏鋳造の問題はあったとしても、なぜ東大寺は一部自然地形を結界線としなければならないような土地を選定したのであろうか。このように土地の所有権あるいは使用権の問題と関連して考えた時、この芳賀西部団地遺跡の初期群集墳はなぜ奈良時代以前に平夷されたのであろうか。この地は舌状台地のつけ根であり、住居あるいは墓地として、決して良い土地とも考えられないが、生産には適していたのであろうか。芳賀東部団地遺跡の土師器使用の集落の変遷をみても大きな盛衰がある。これらも生産力を基盤とする経済面に原因があるのか、あるいは政治的な力に関係するのだろうか。近年の大規模な発掘調査は従来とは異なり、かなり面的、あるいは地域的な考察を可能にしている。芳賀団地の調査も、この地域の各種調査と一体として考えた時、次第にこれらの問題に対する一つの手がかりが得られてゆくものと考えられる。

（相澤）

写　真　図　版

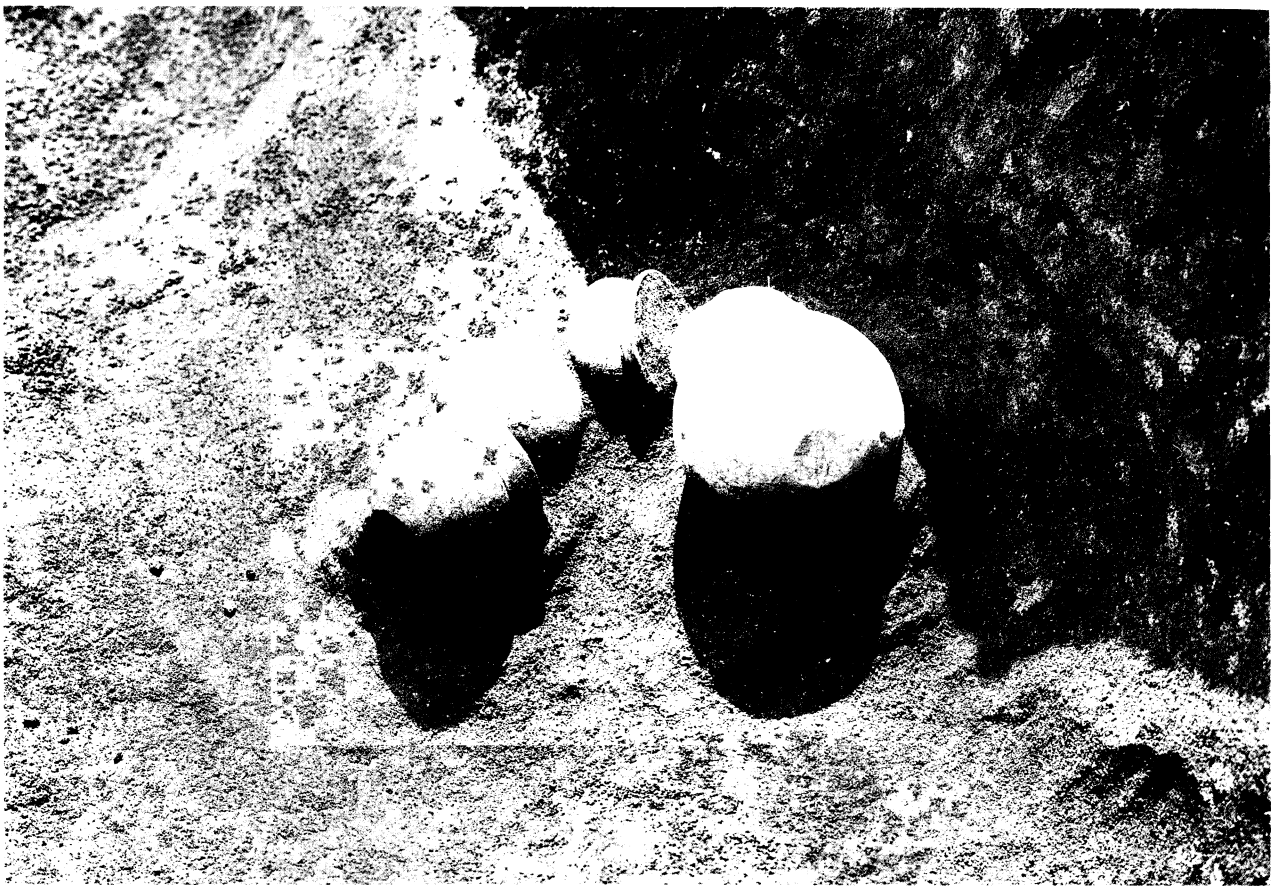
Ｍ１号古墳（南西より）

同（南西より）

図版２

Ｍ１号古墳(南西より)

同(土層断面)

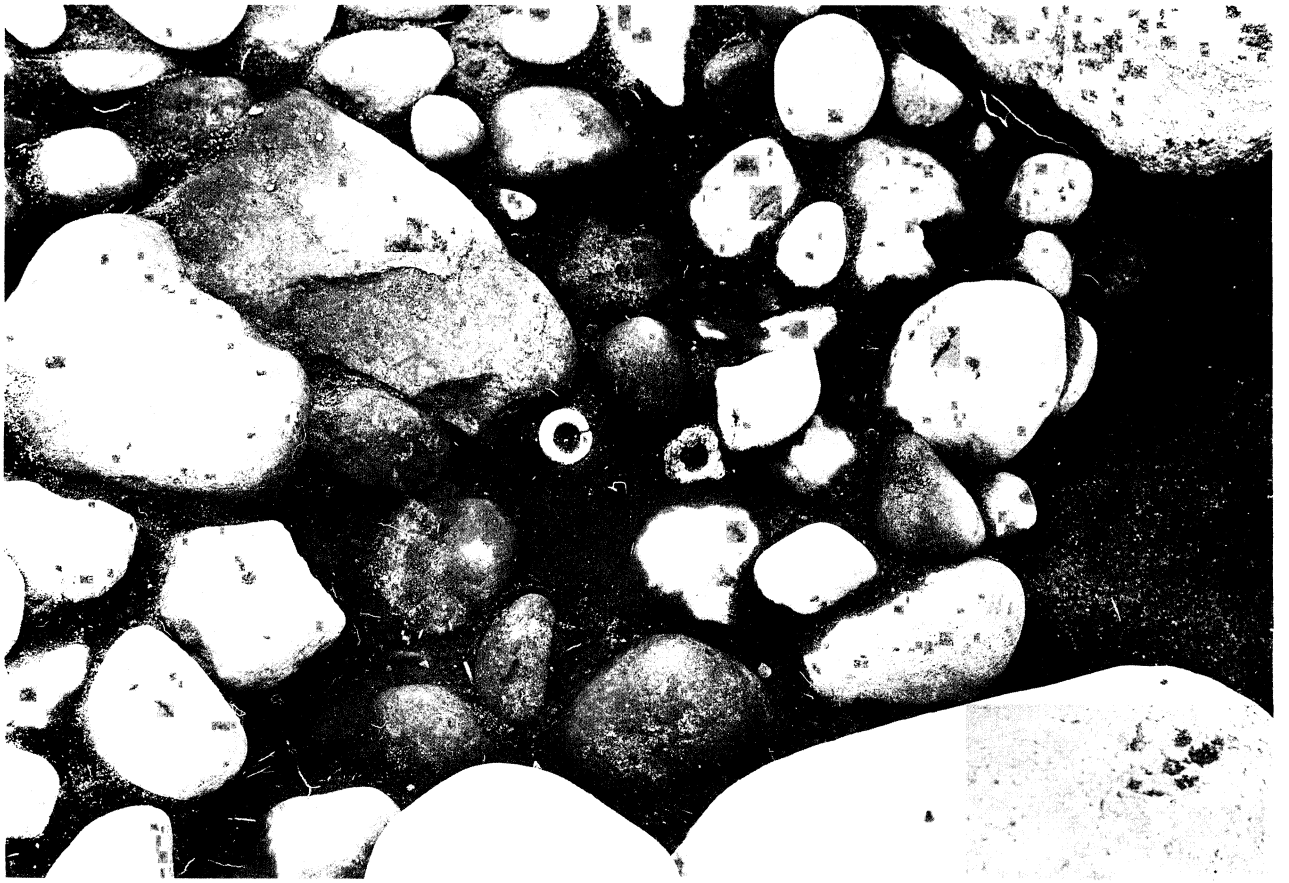


Ｍ１号古墳（遺物出土状態）

Ｍ２号古墳（石室・南東より）

図版 4

M 2 号古墳(石室・南西より)



同(遺物出土状態)

M3号古墳(北より)

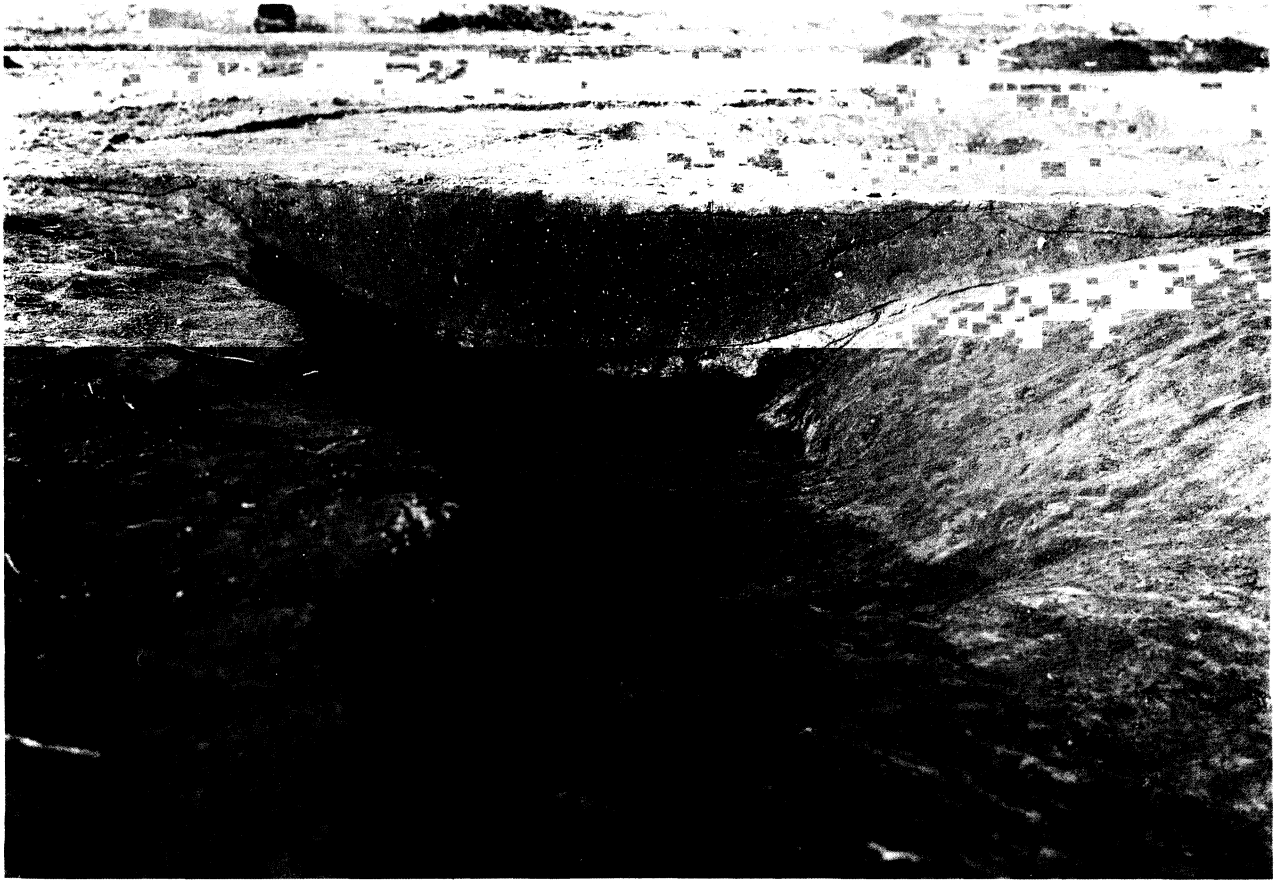
同(西より)

図版 6

M 3 号古墳(土層断面)

M 4 号古墳(南より)

M 4 号古墳(南より)

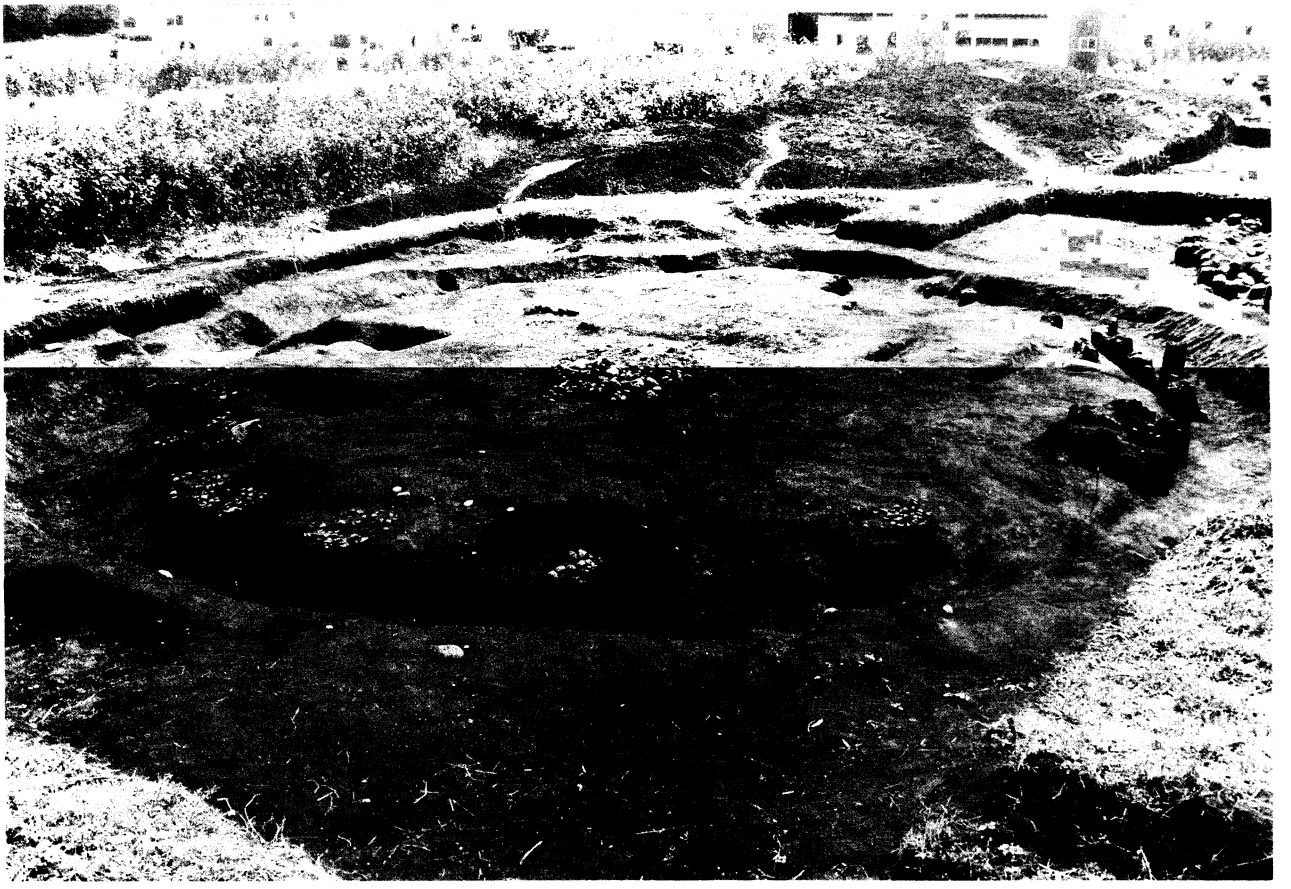


同(土層断面)

図版 8

M 4 号古墳(遺物出土状態)

M 6 号古墳(西より)



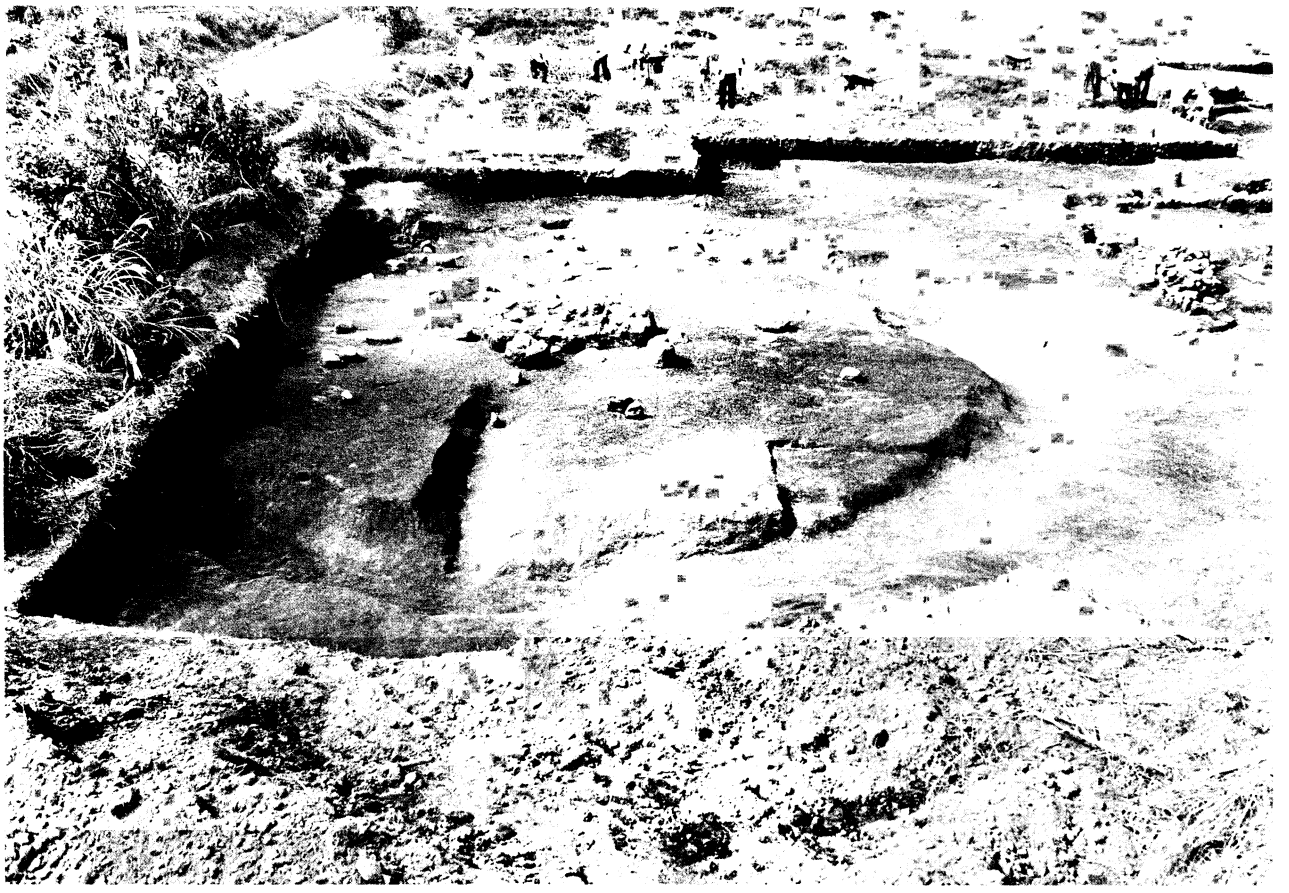
M 6 号古墳(西より)

同(石室)

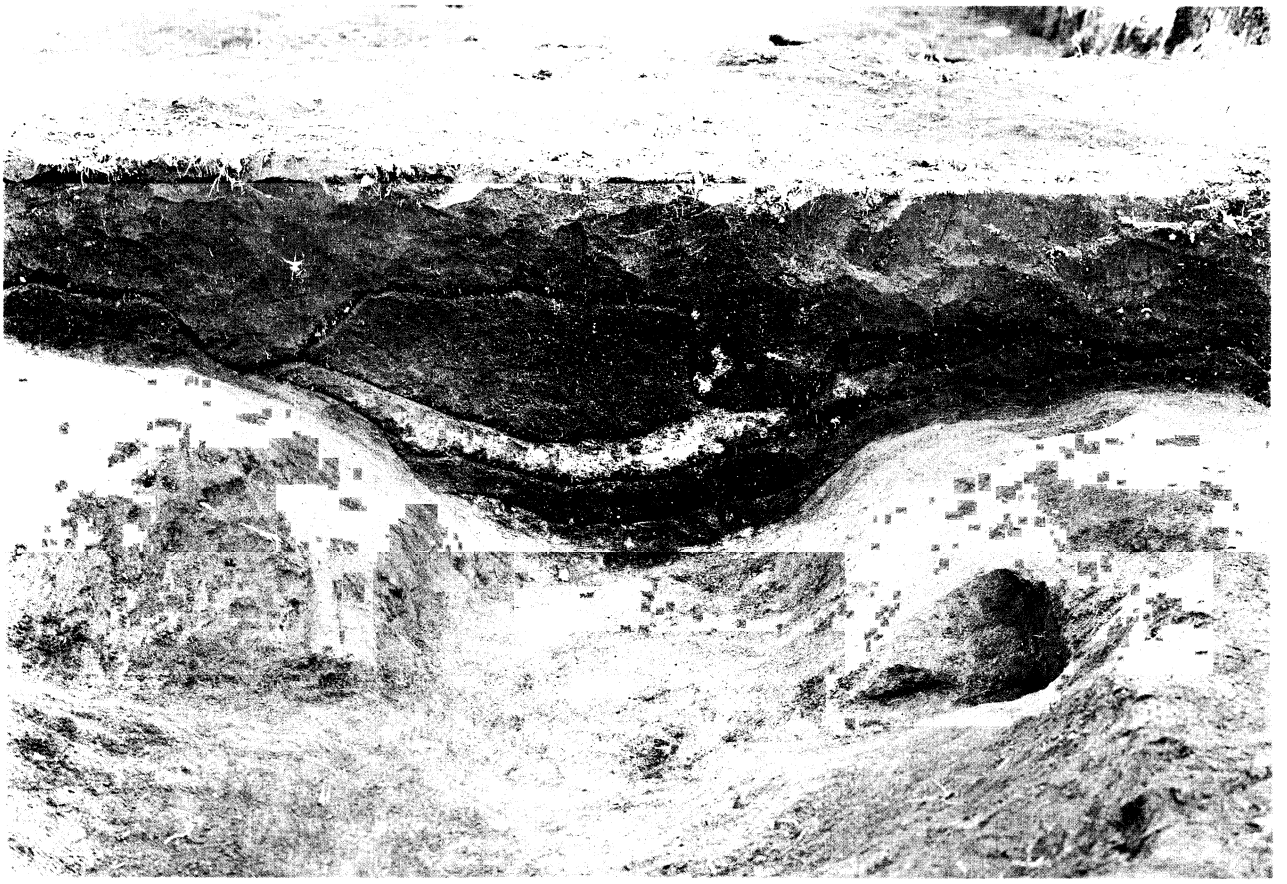
図版10

M７号古墳(東より)

同(石室)



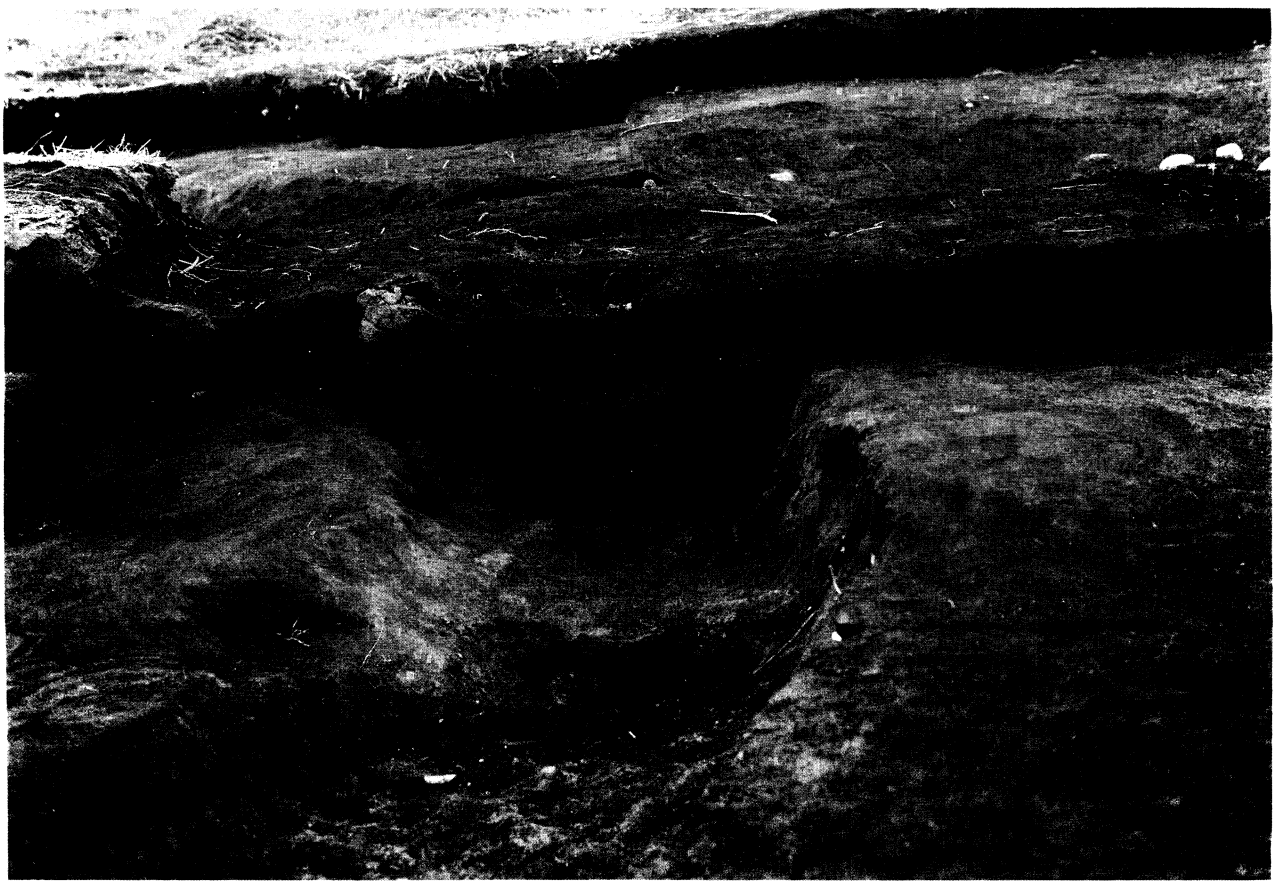
M８号古墳(東より)



同(土層断面)

図版12

M９号古墳(北東より)

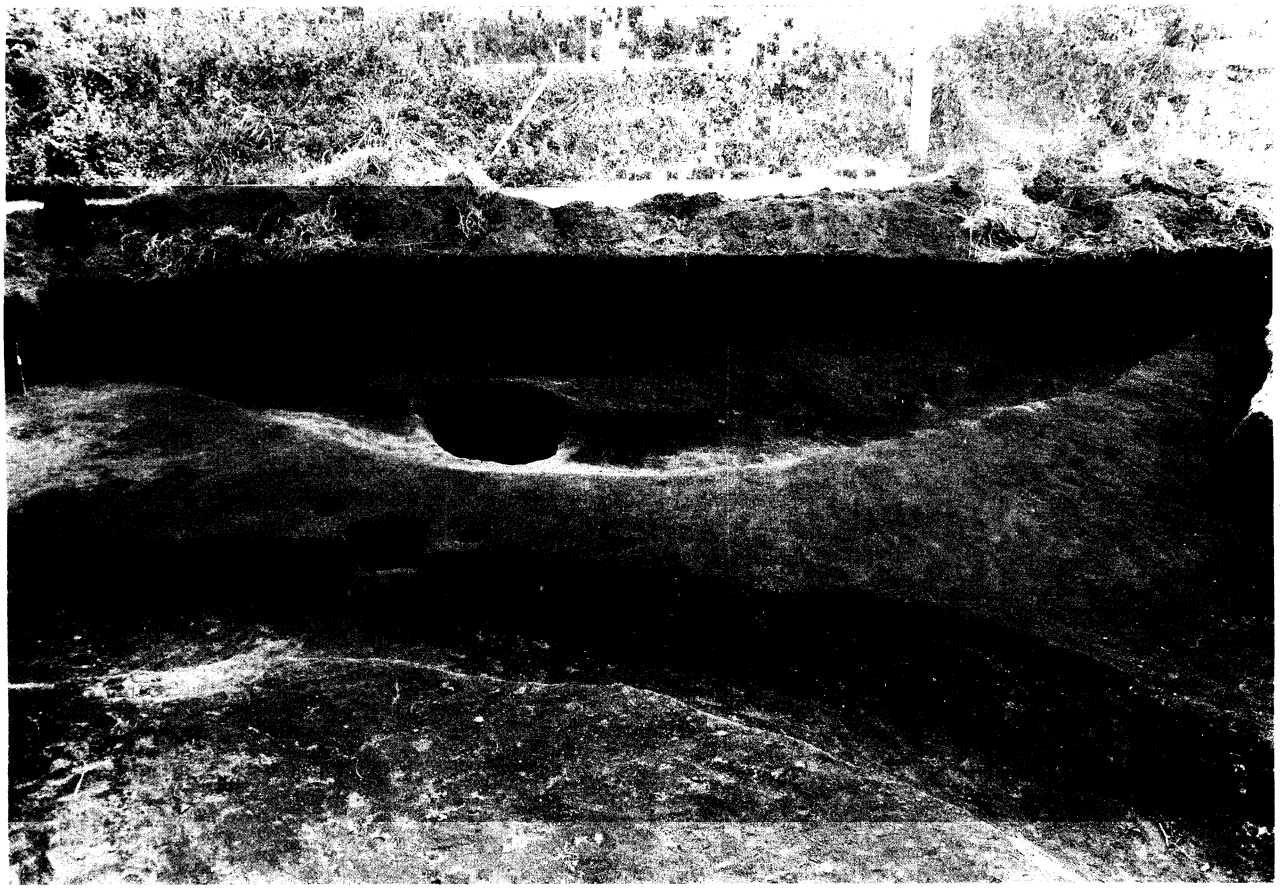


同(土層断面)

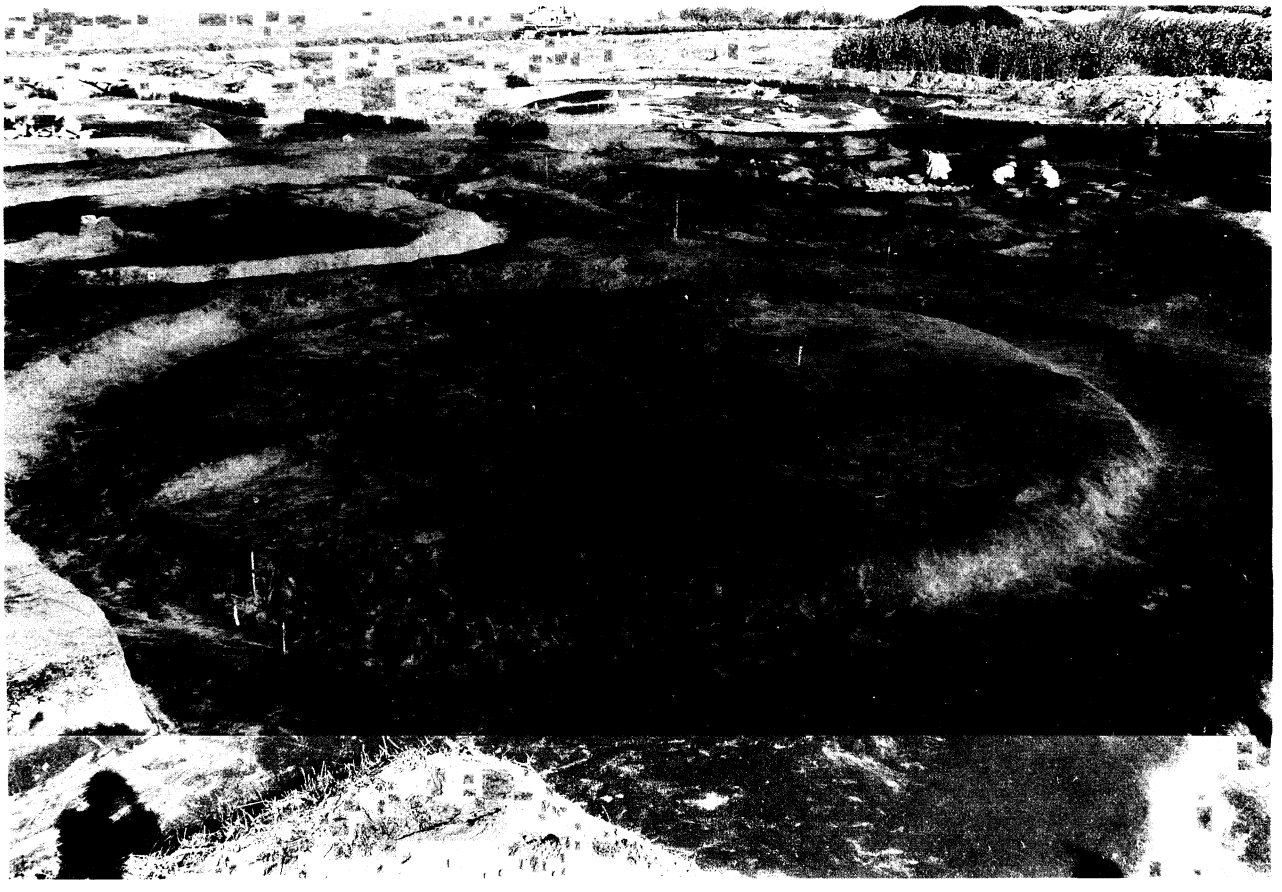
M９号・10号古墳(東より)

M10号古墳(東より)

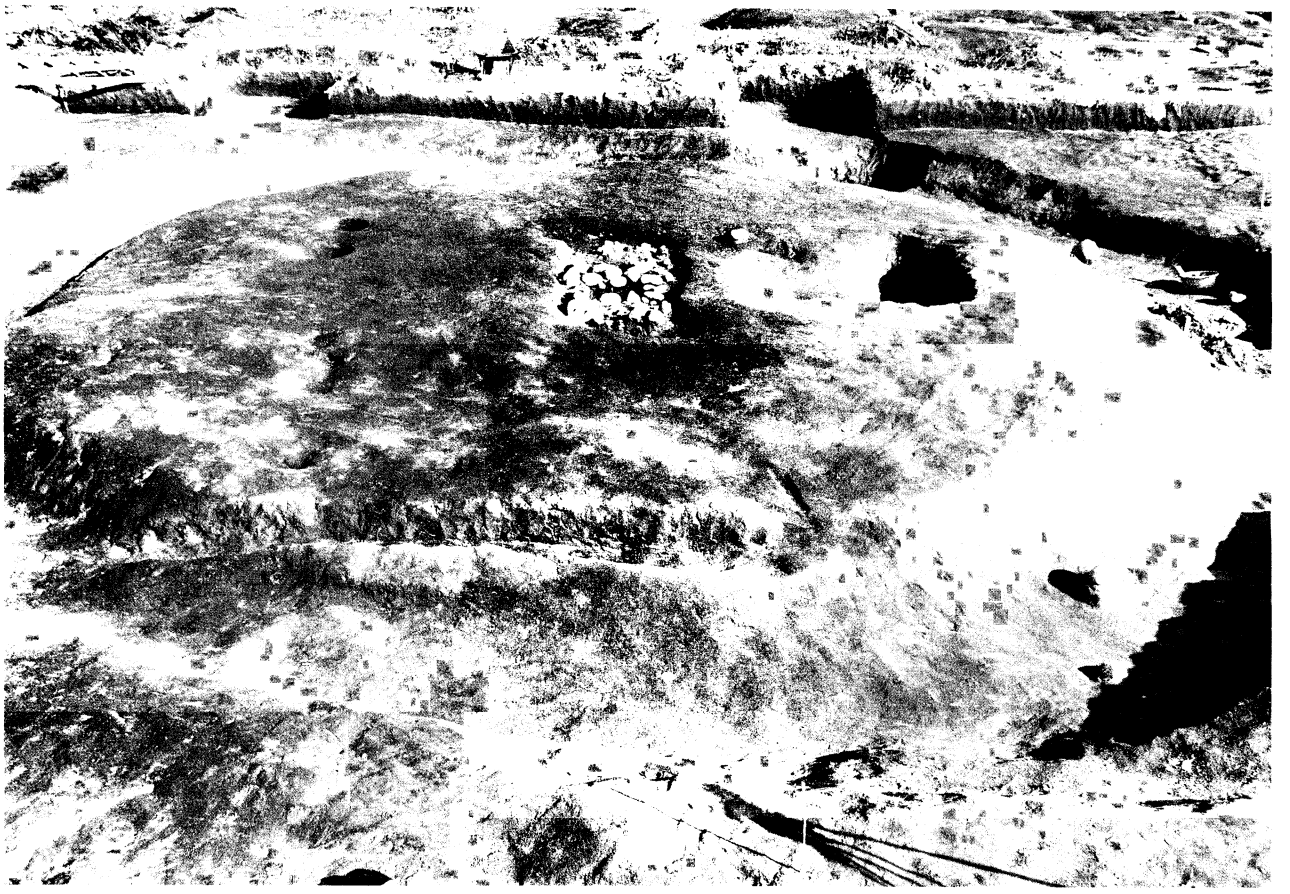
図版14



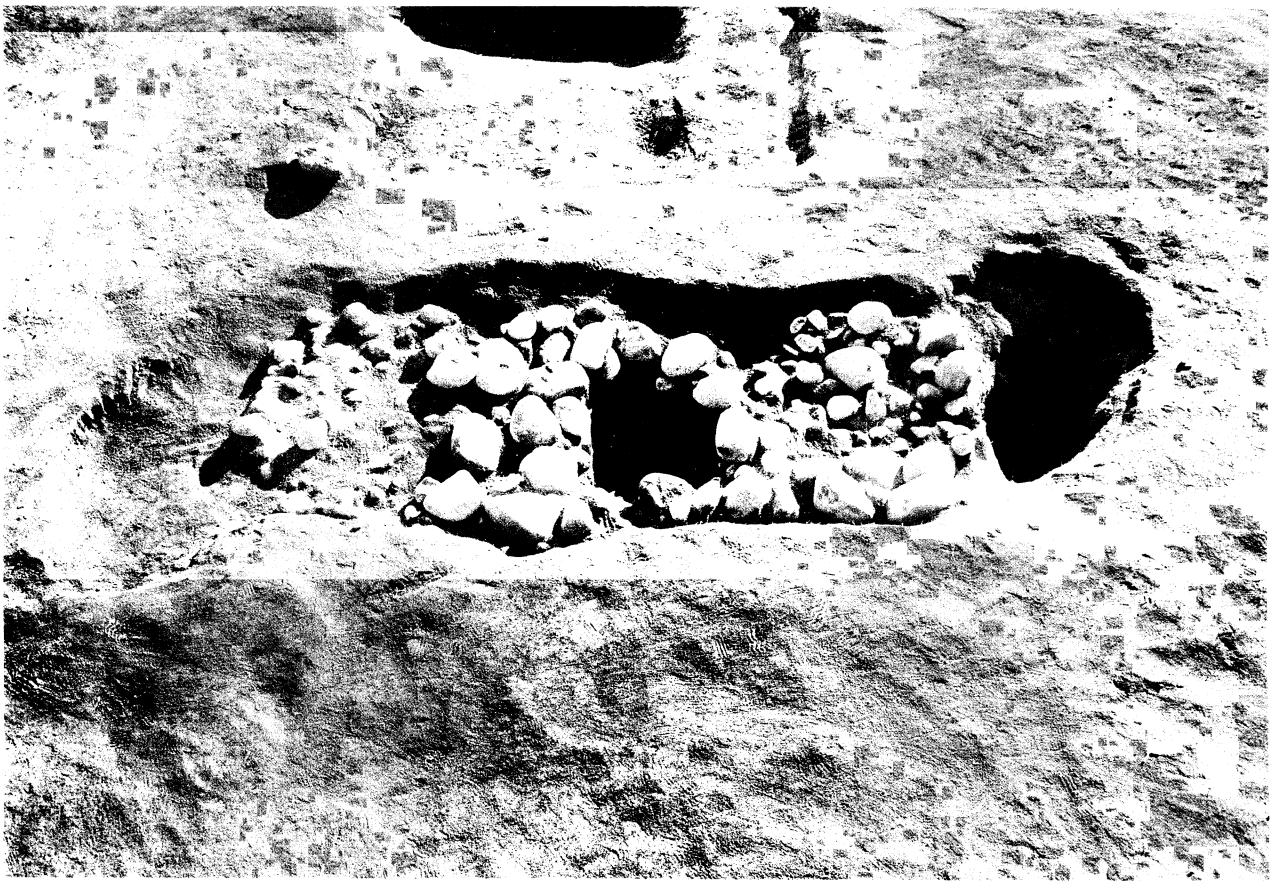
M11号古墳（Ｉ１号井戸跡　北より）



M12号古墳（南西より）



M13号古墳(西より)



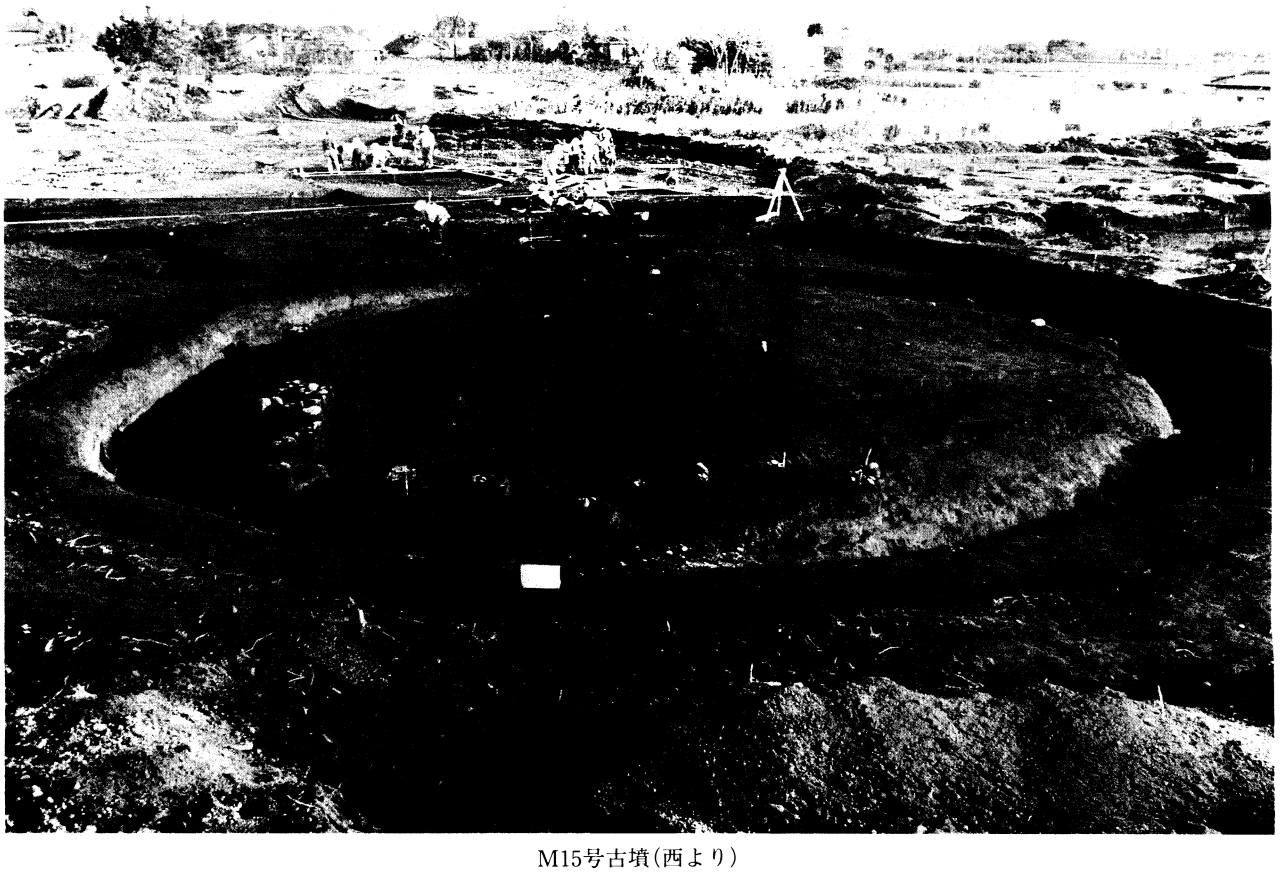
同(石室・北より)

図版16

M13・14・15号古墳(北西より)

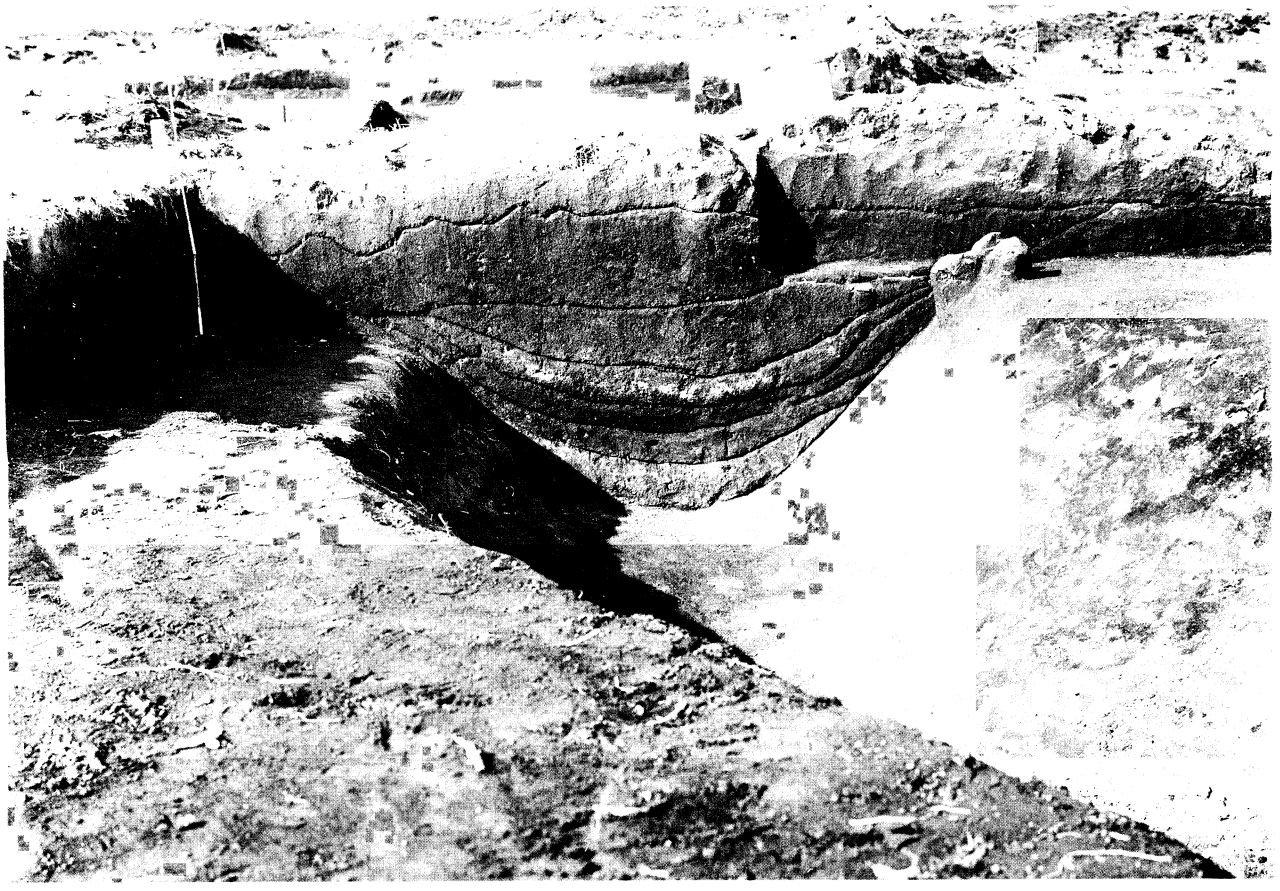
M15・16・17・18・19・20号古墳(西より)

M13・14号古墳(東より)



M15号古墳(西より)

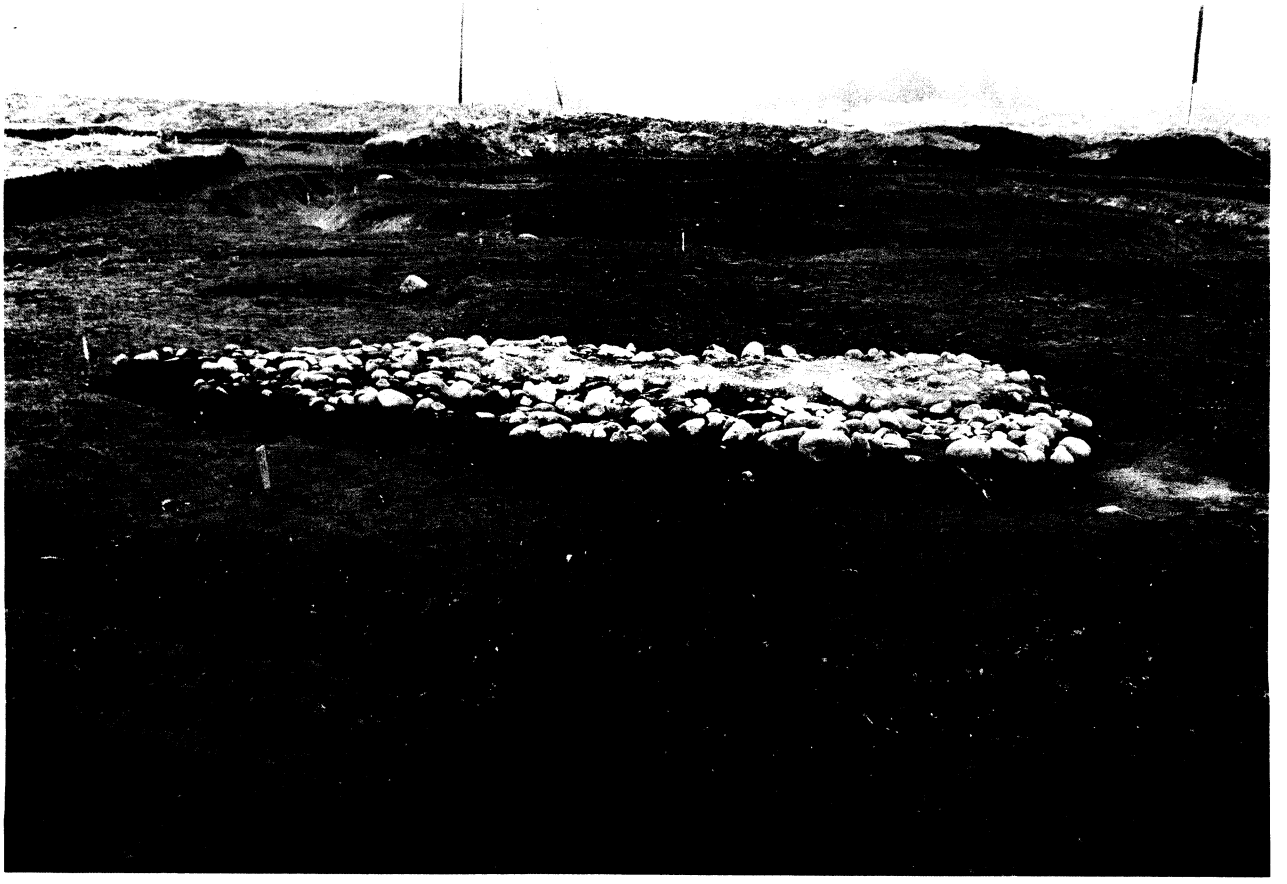
図版18



M15号古墳(土層断面)

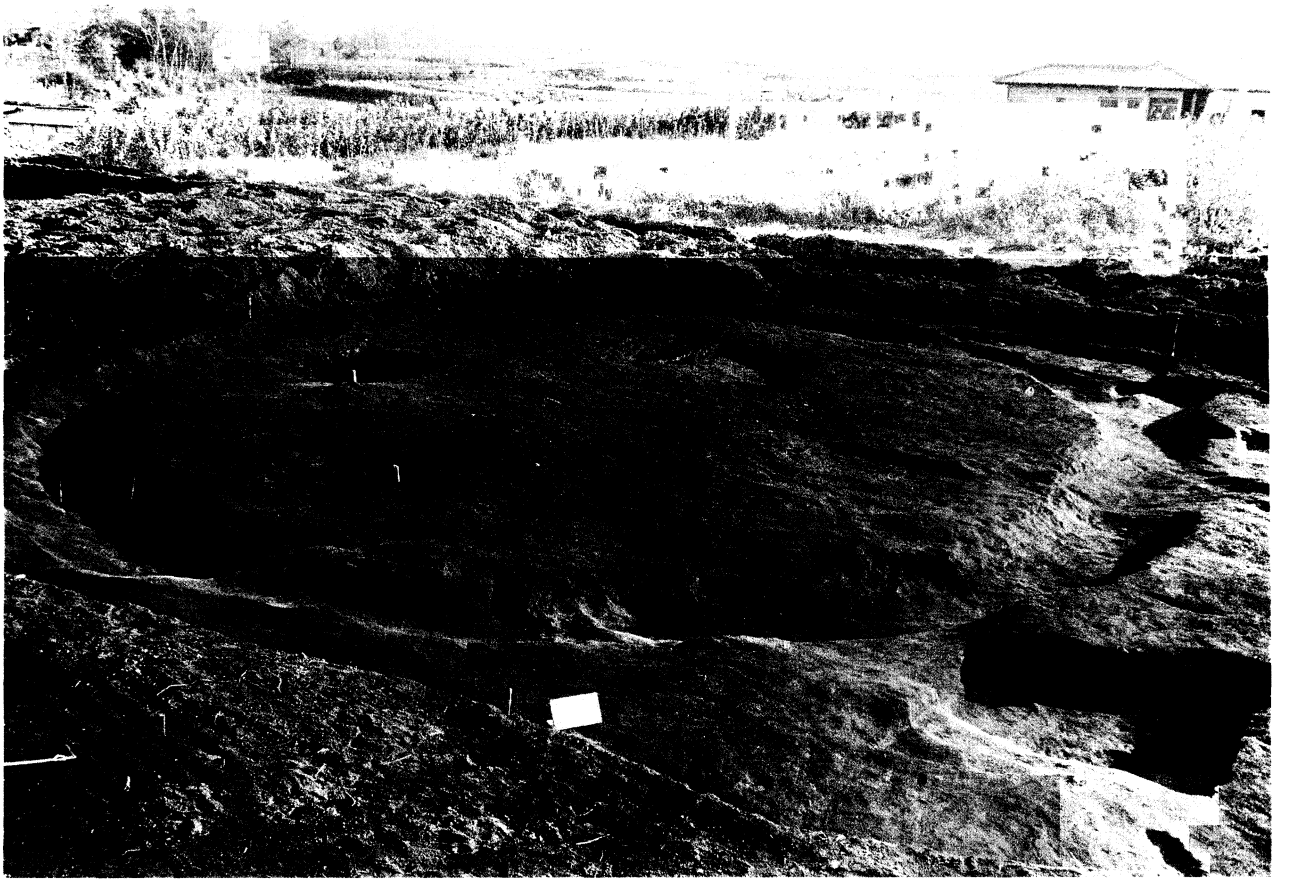
同(遺物出土状態)

M16号古墳(北より)



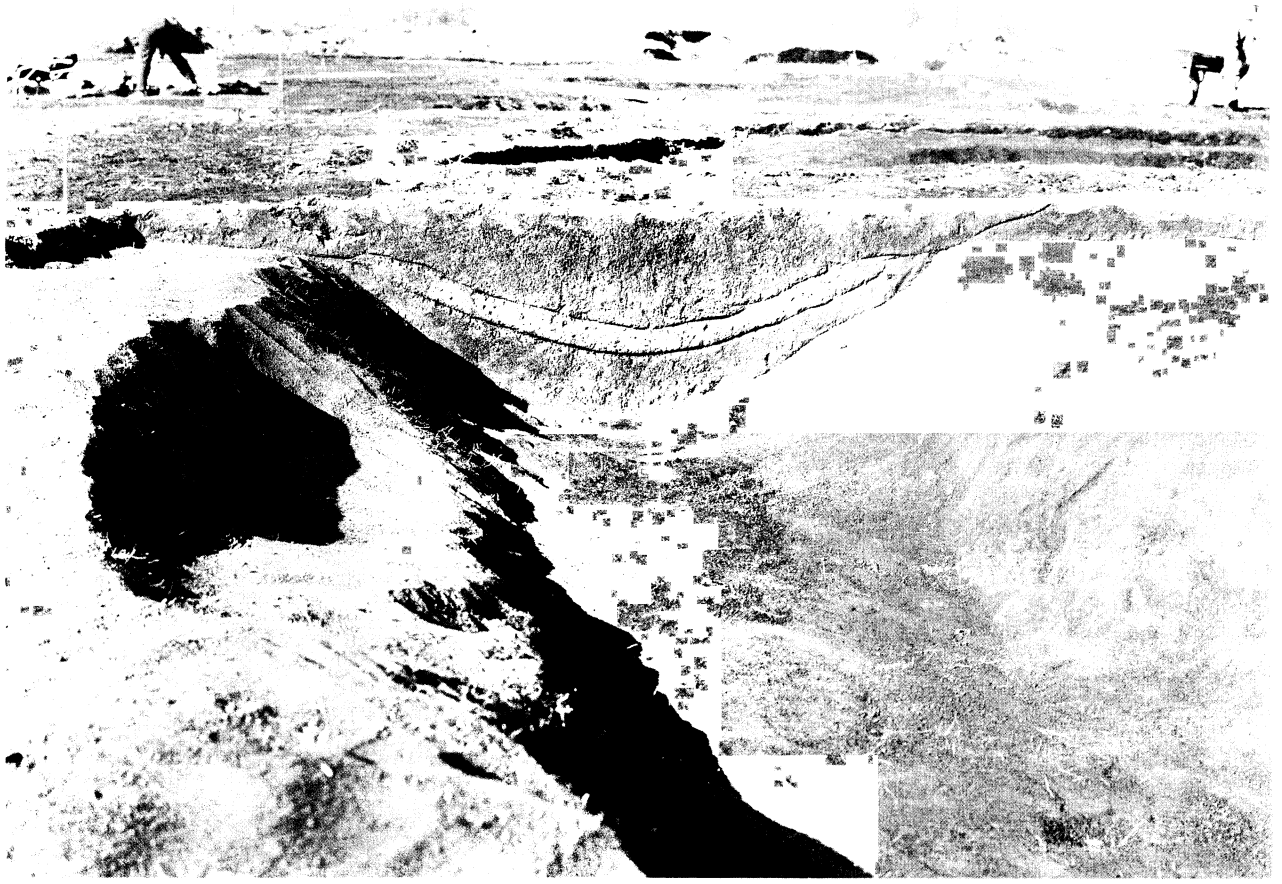
同(東より)

図版20



M17号古墳（北より）

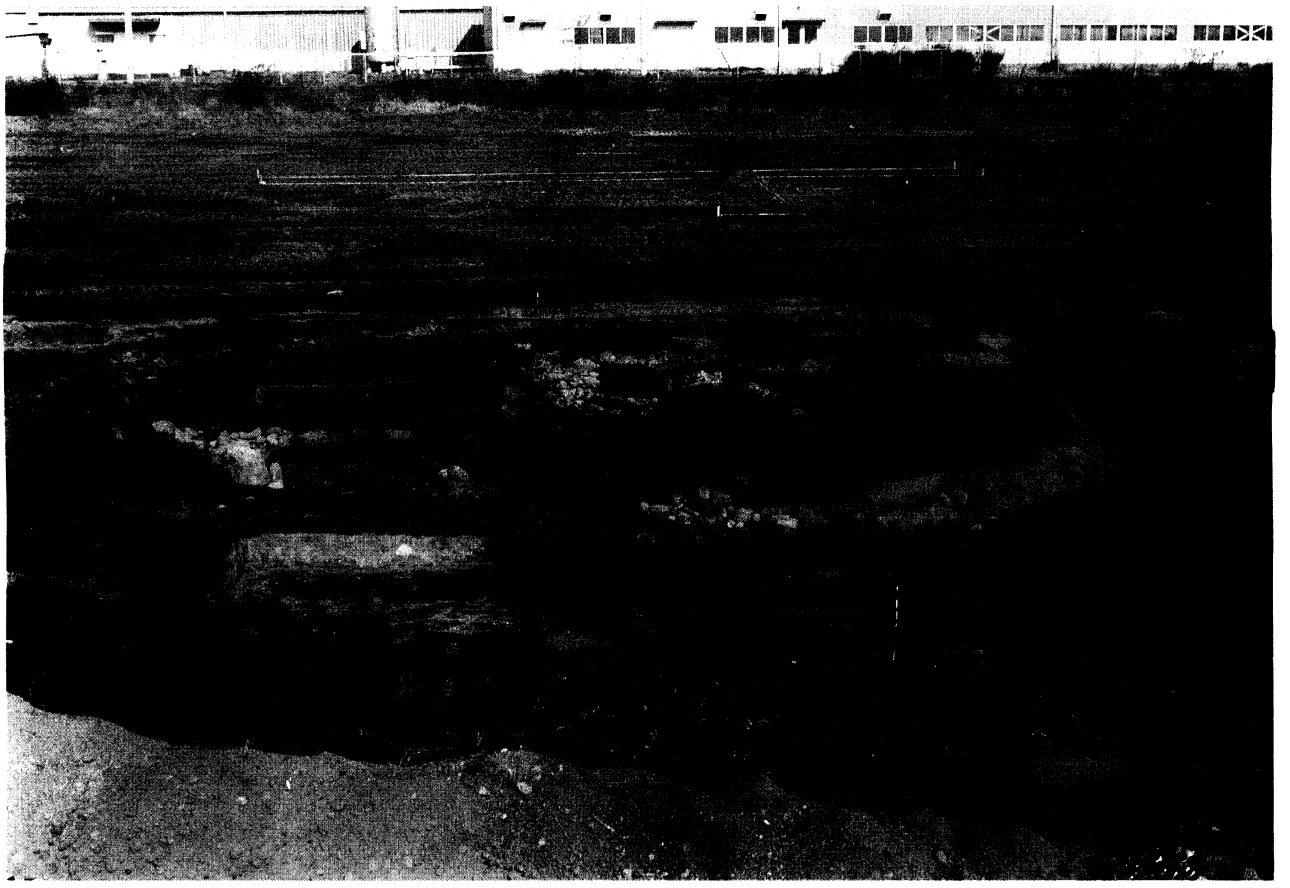
M18号古墳（南西より）



M18号古墳(土層断面)

同(遺物出土状態)

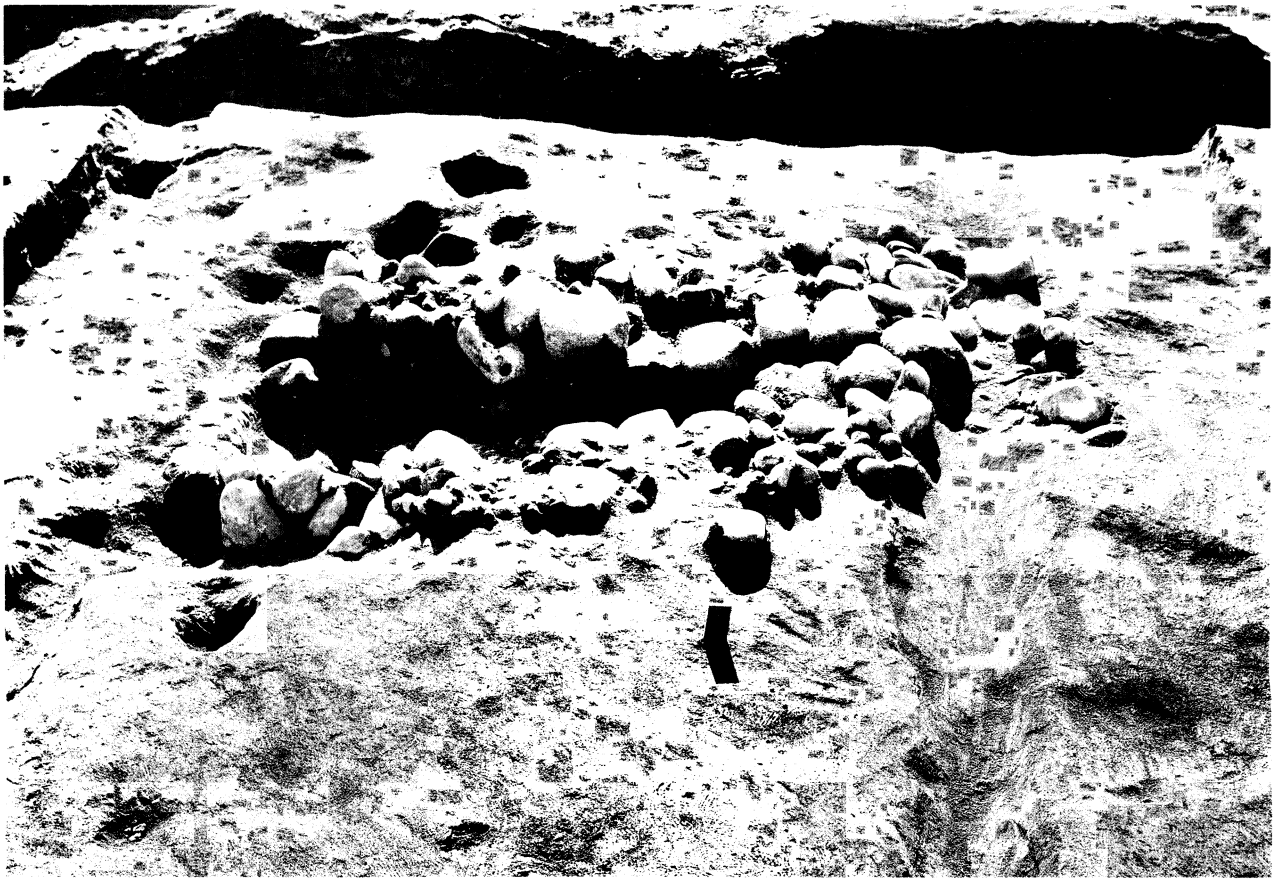
図版22



M19号古墳(南より)

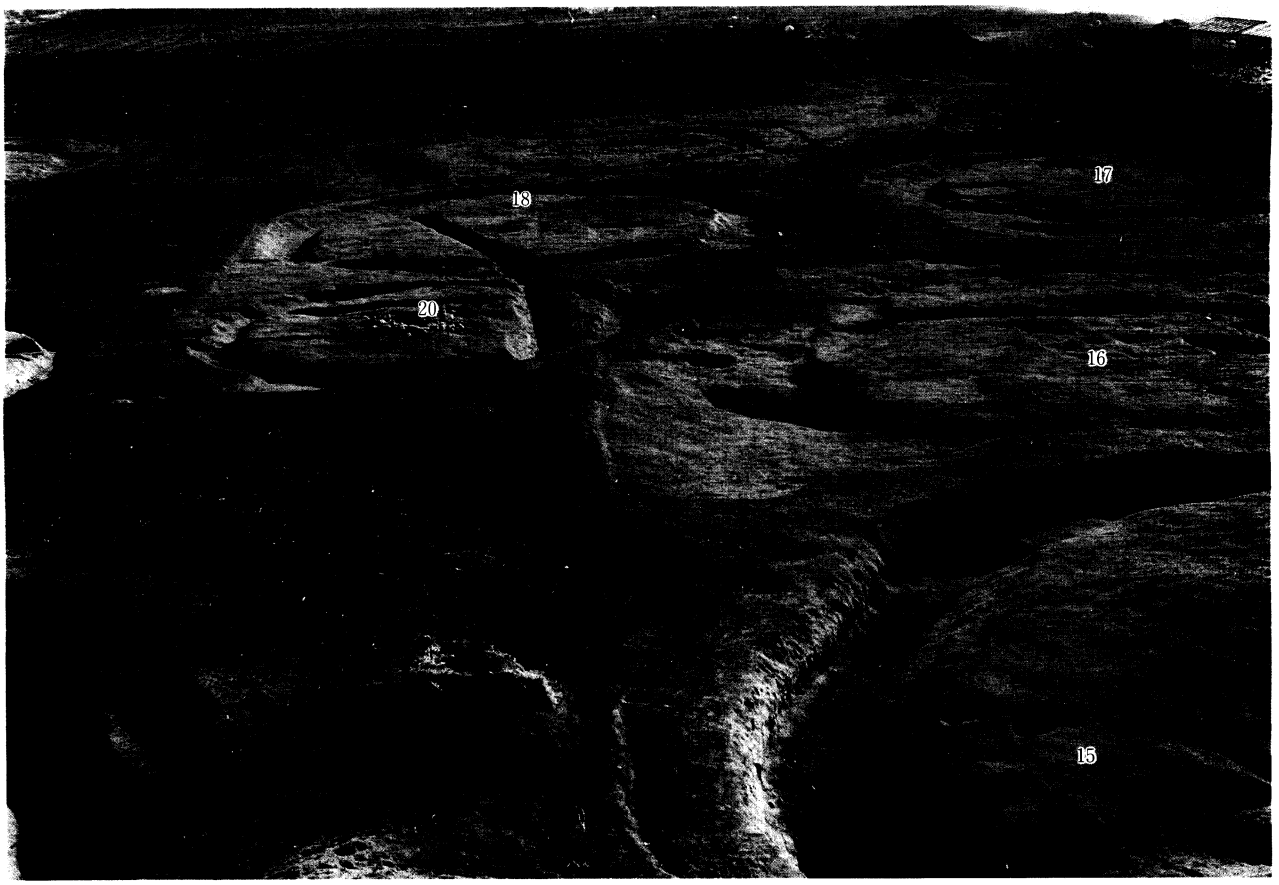
M18・20号古墳(W 3 号溝跡・西より)

M20号古墳(東より)

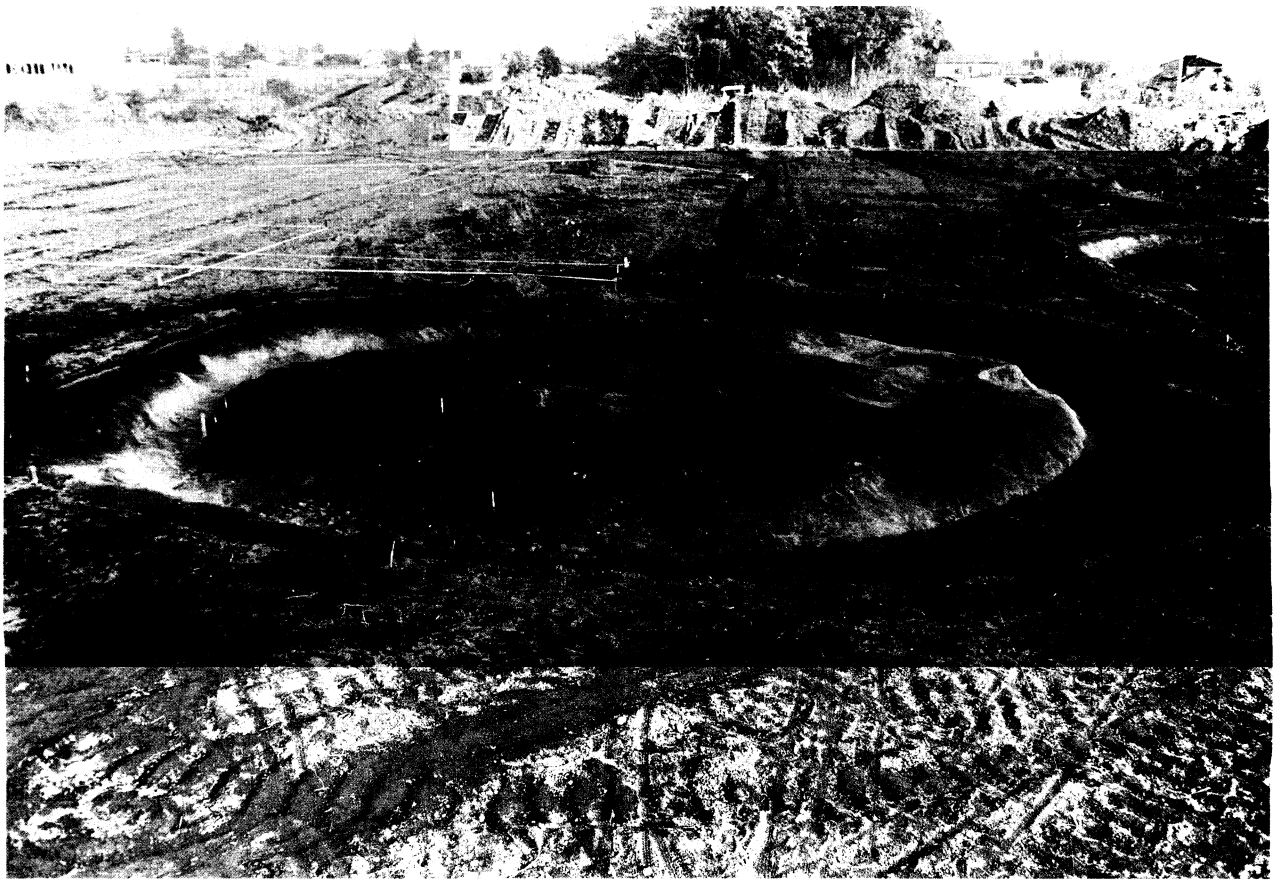


同(北より)

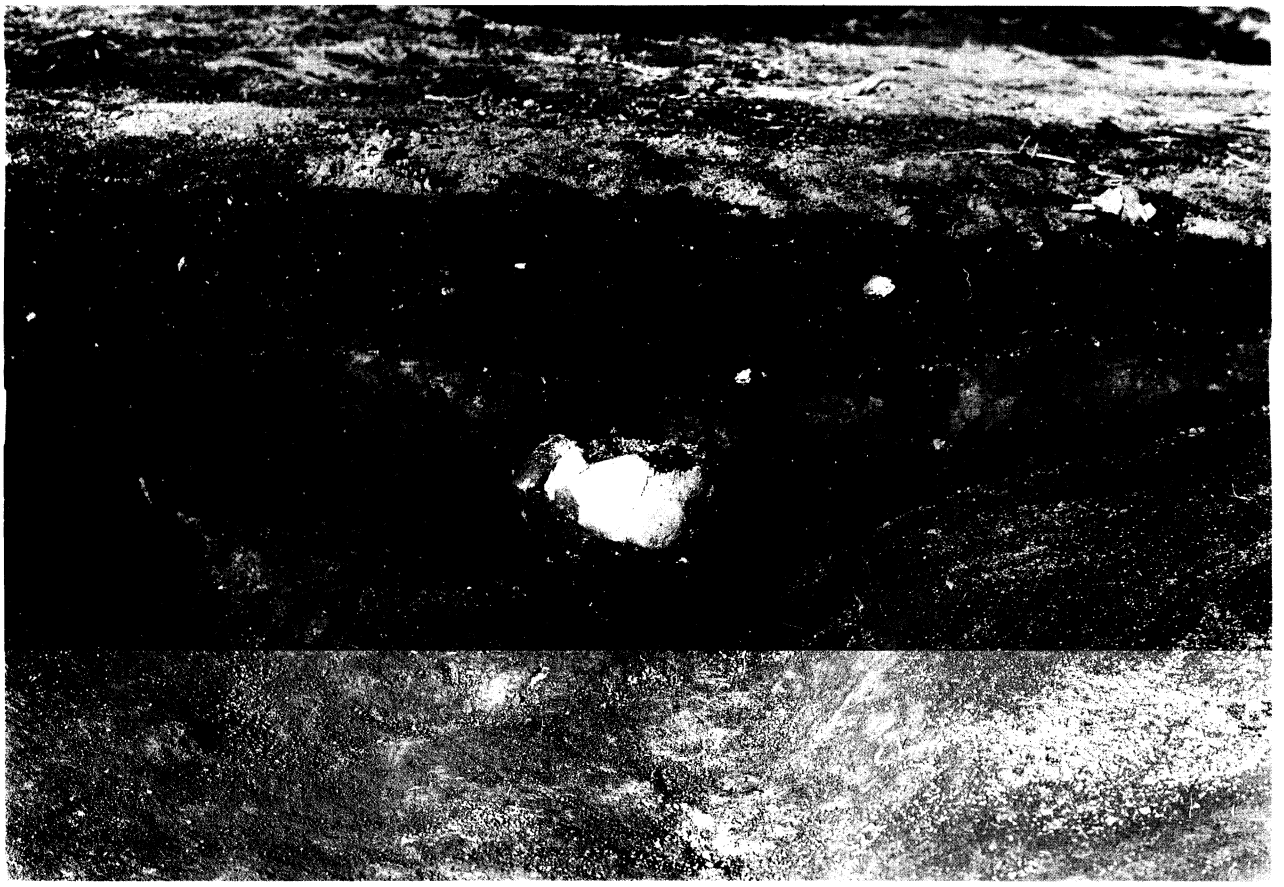
図版24



M18･20号古墳(西より)



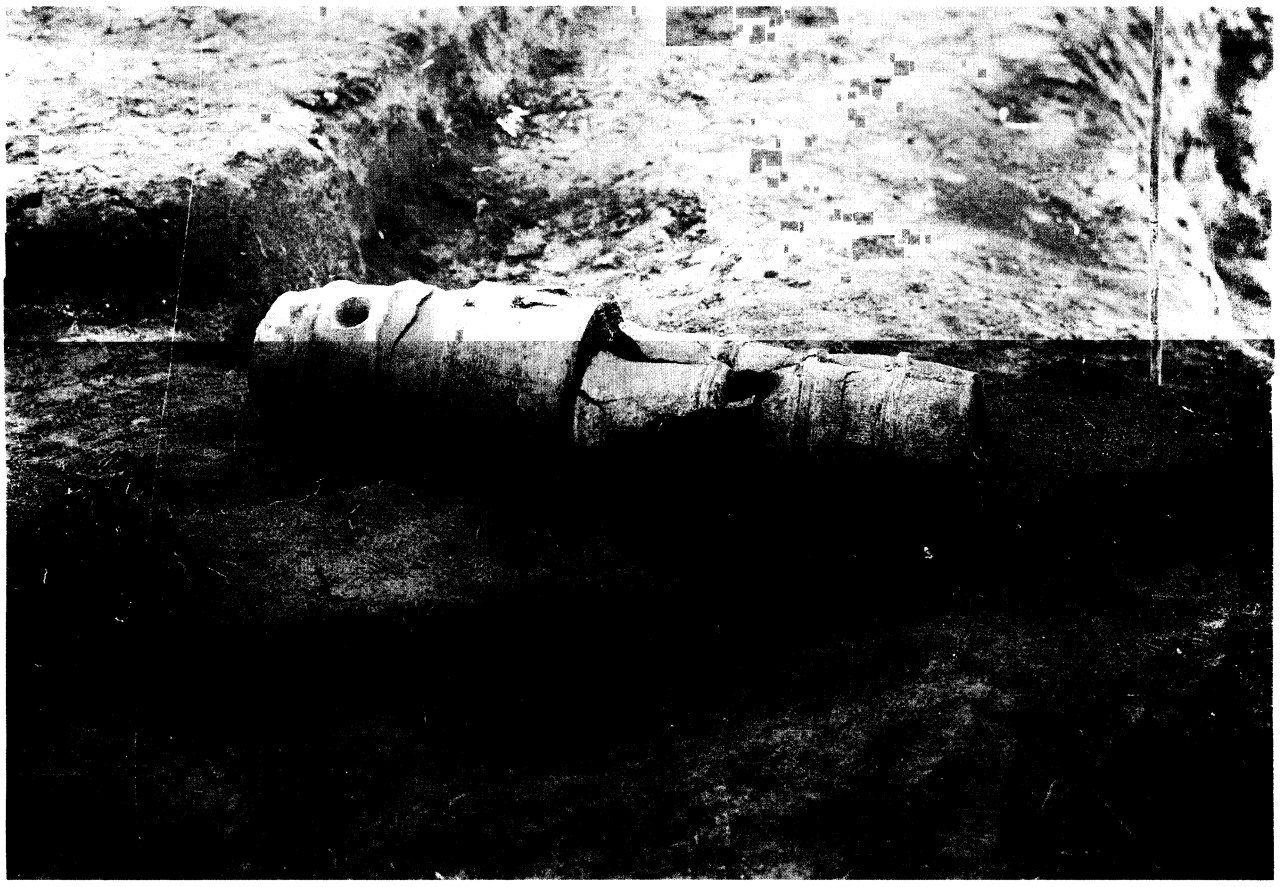
M21号古墳(西より)



M21号古墳(遺物出土状態)

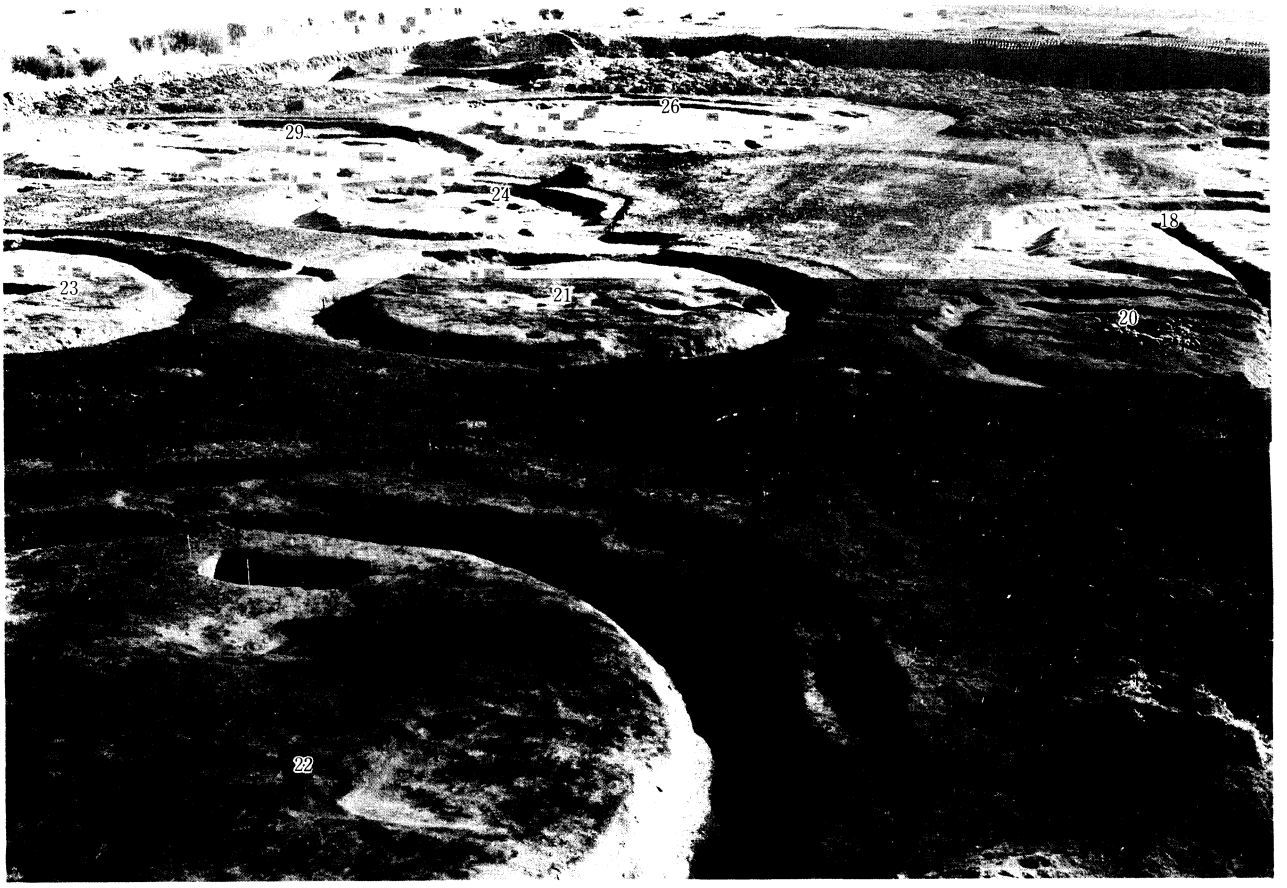
M22号古墳(西より)

図版26

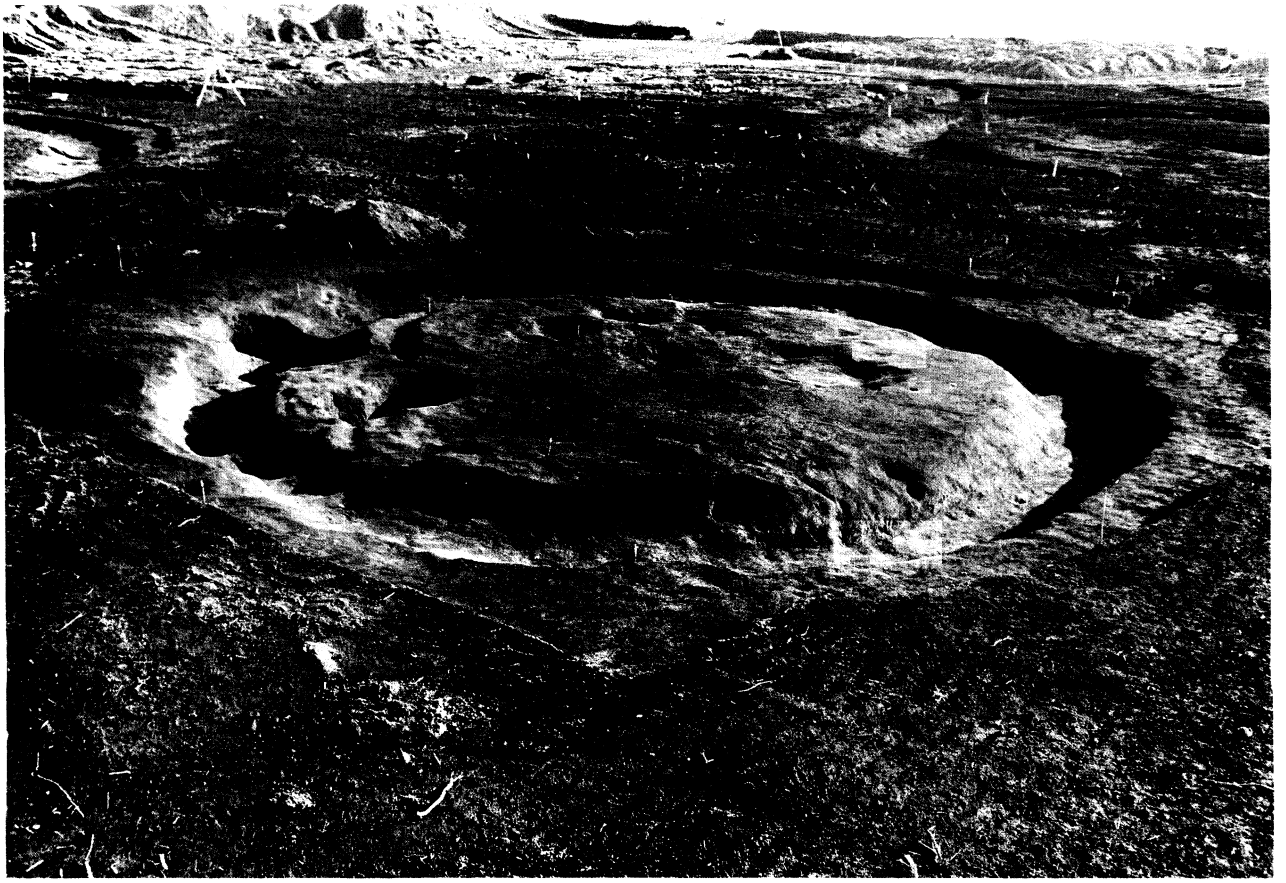


M22号古墳(遺物出土状態)

M23号古墳(西より)

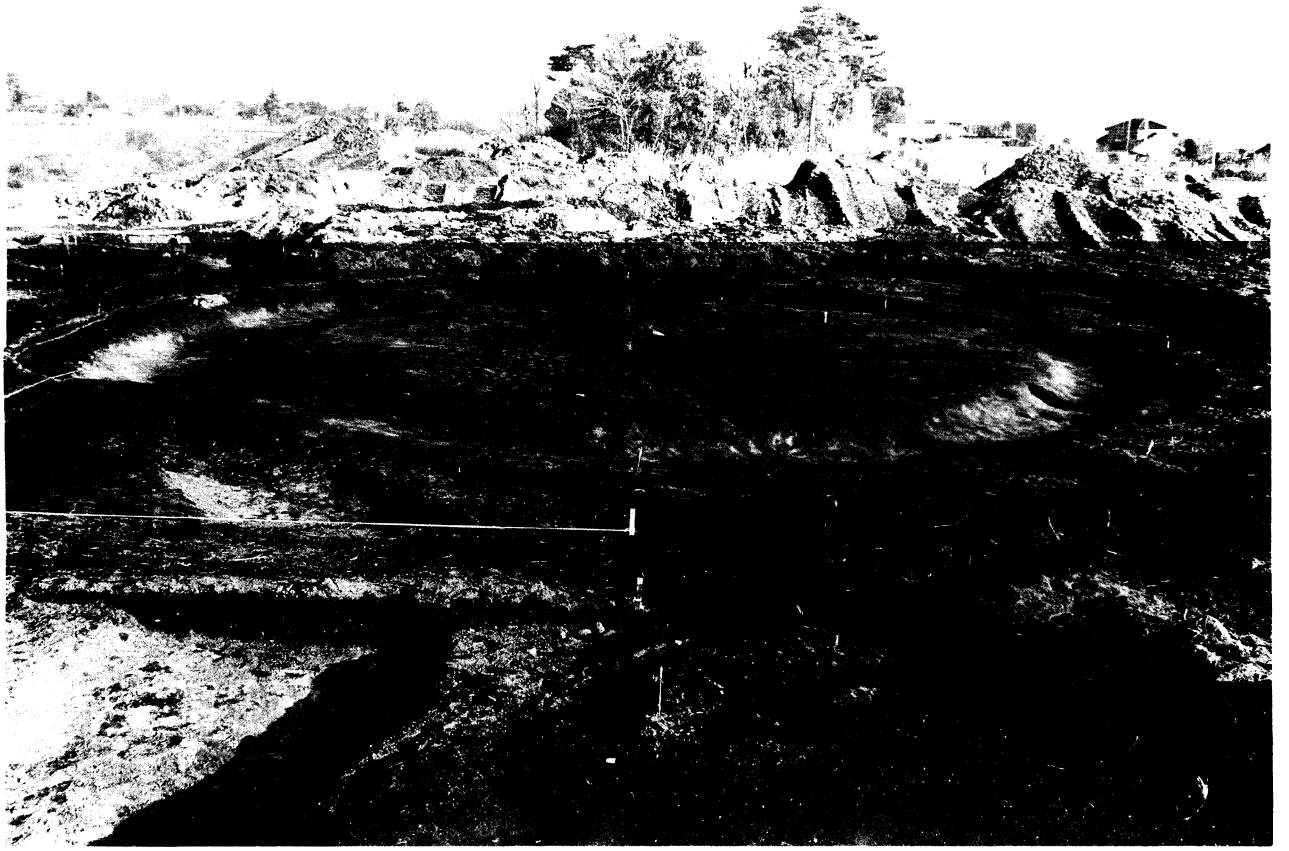


M21・24・26・29号古墳(西より)

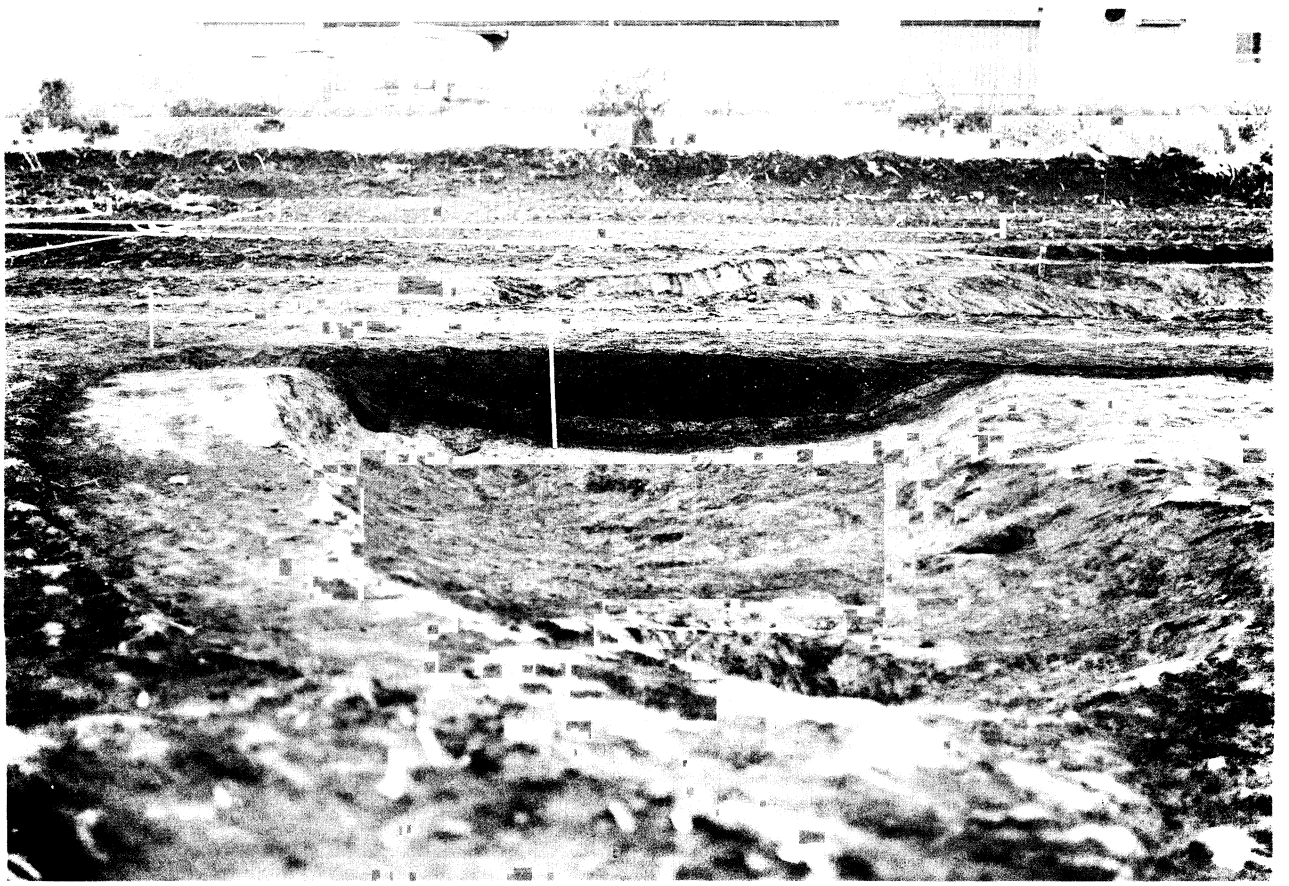


M24号古墳(西より)

図版28



M26号古墳(西より)

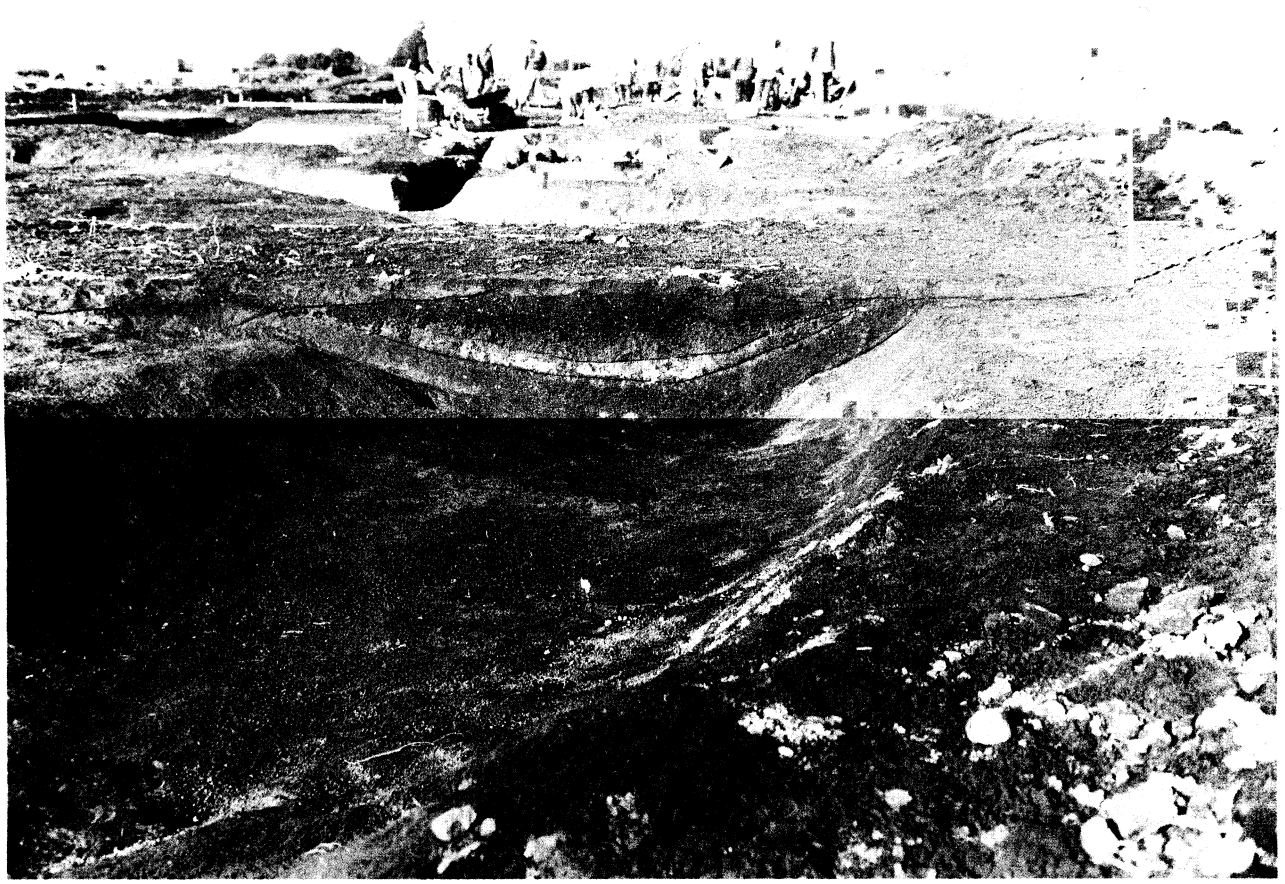


同(土層断面)

M27号古墳(南より)

同(西より)

図版30



M27号古墳(土層断面)

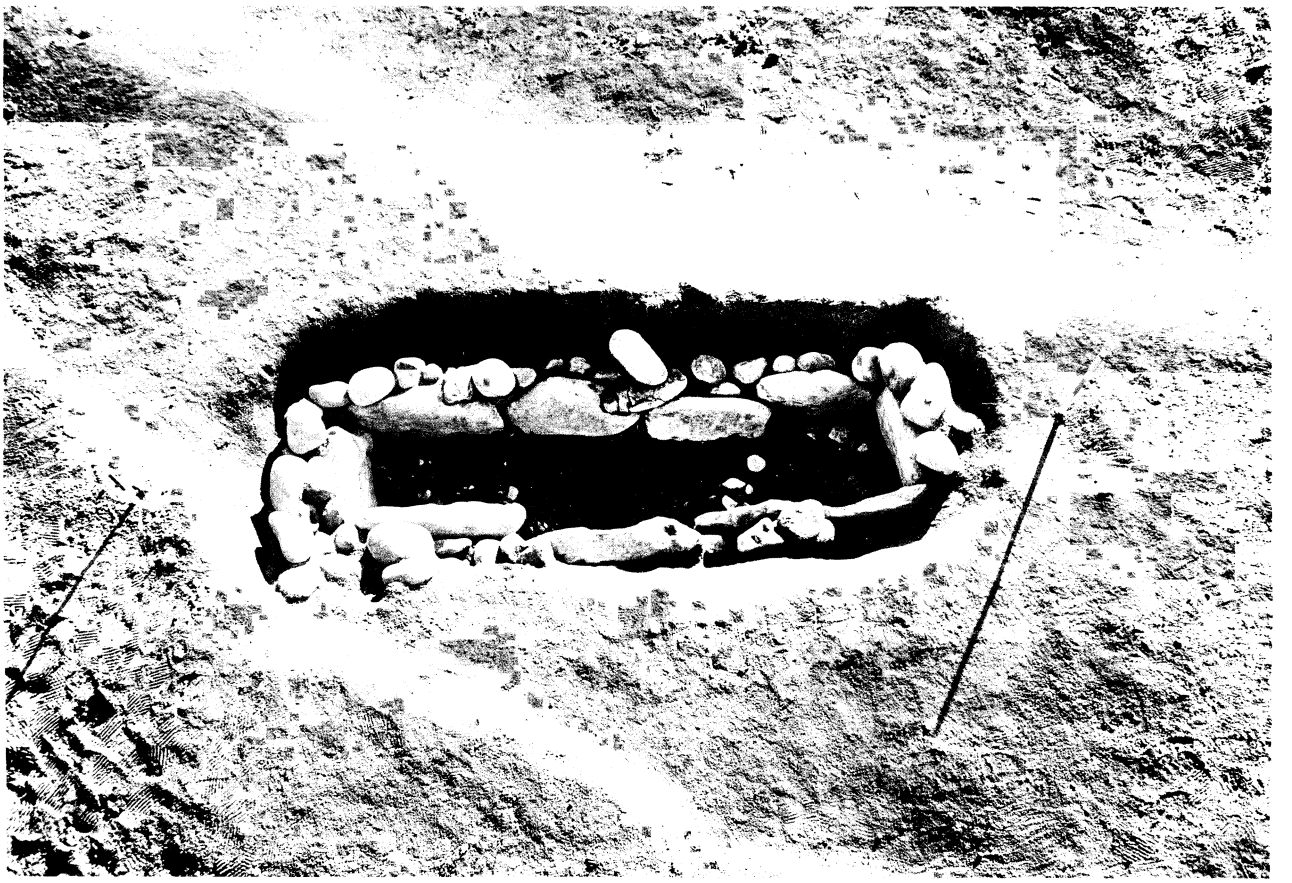
M23・25・27号古墳(西より)

M28号古墳(南より)

M29号古墳

図版32

M30号古墳(石室・南西より)

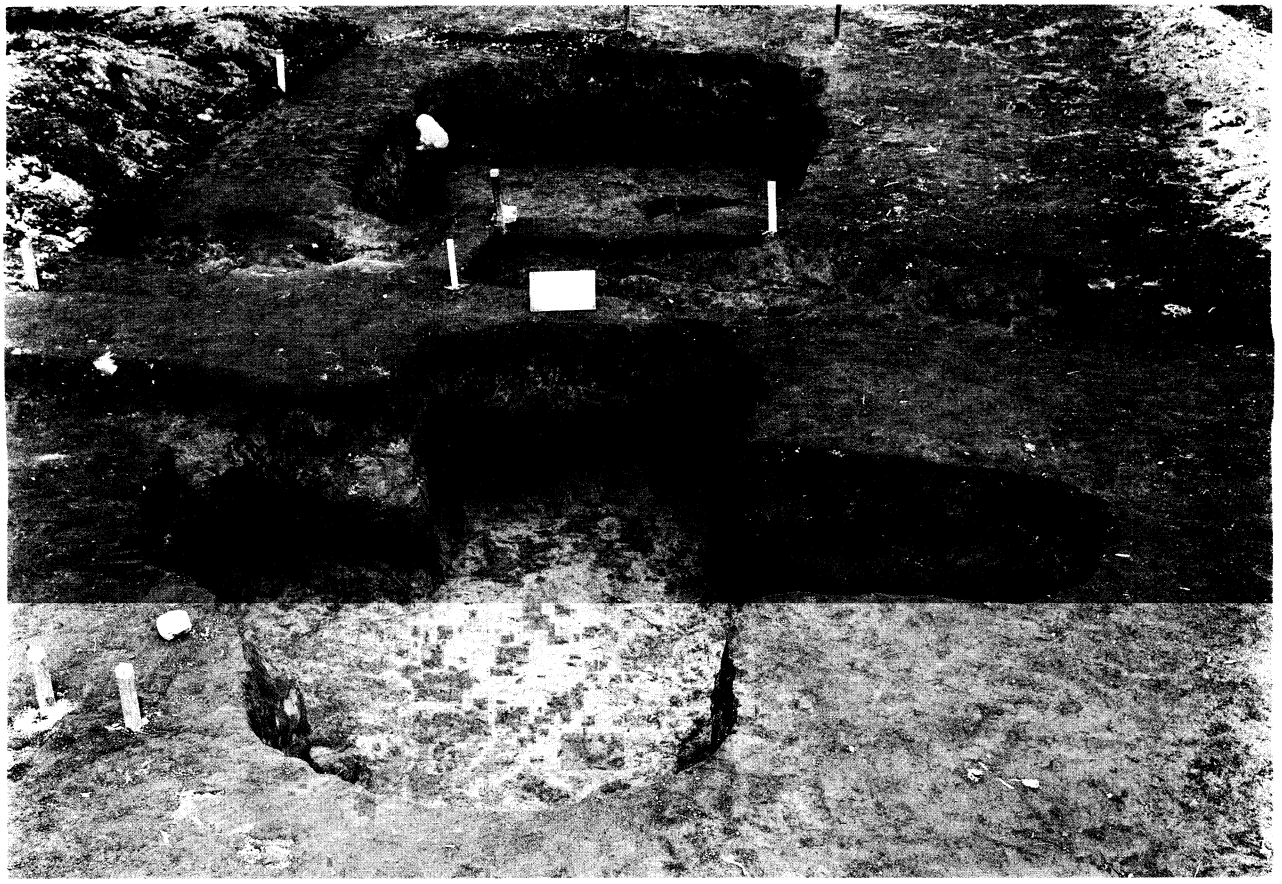


同(石室・根石列)(北より)

A 1 遺溝(南より)

A 2 遺溝(北より)

図版34



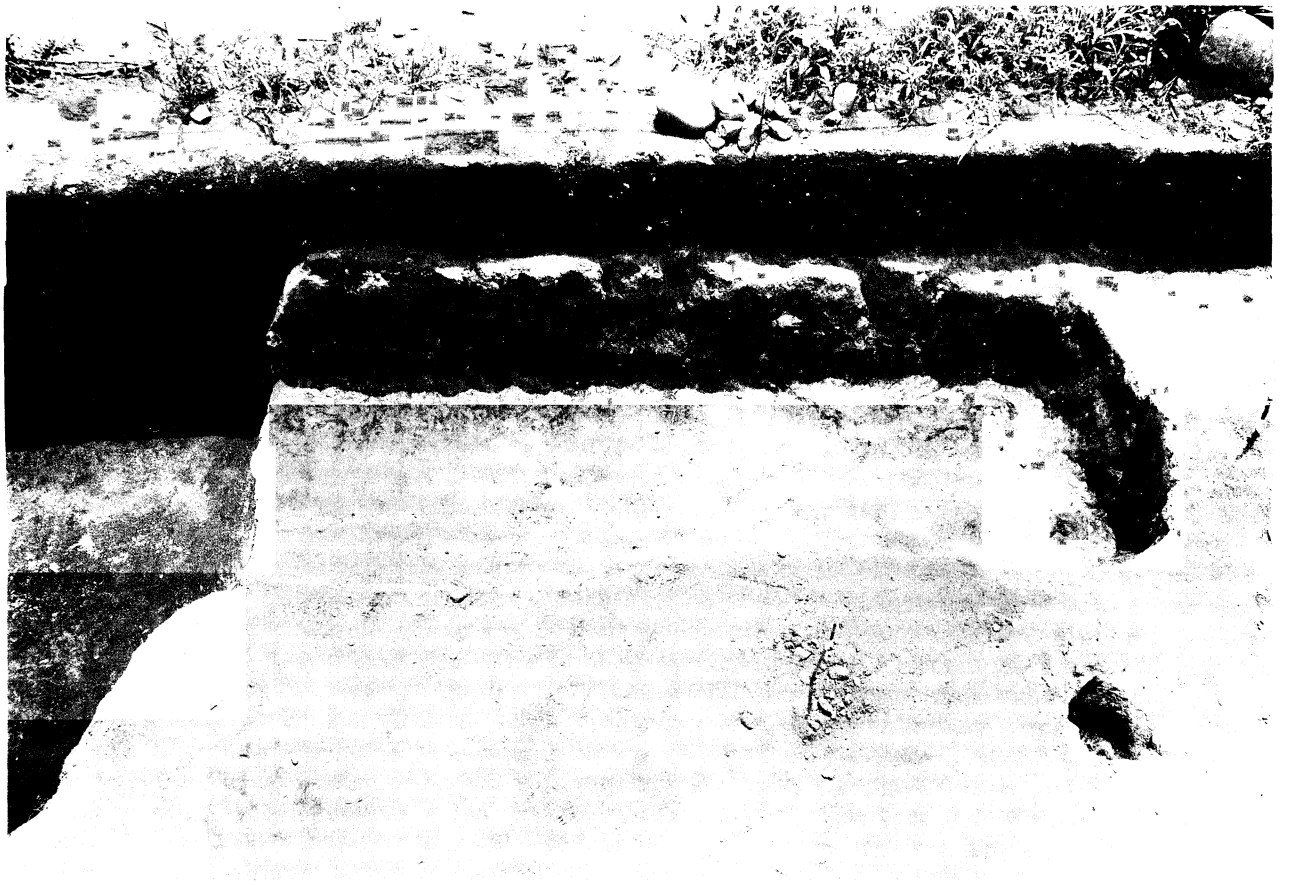
A 4・1 遺溝(西より)

A 4 遺溝(西より)

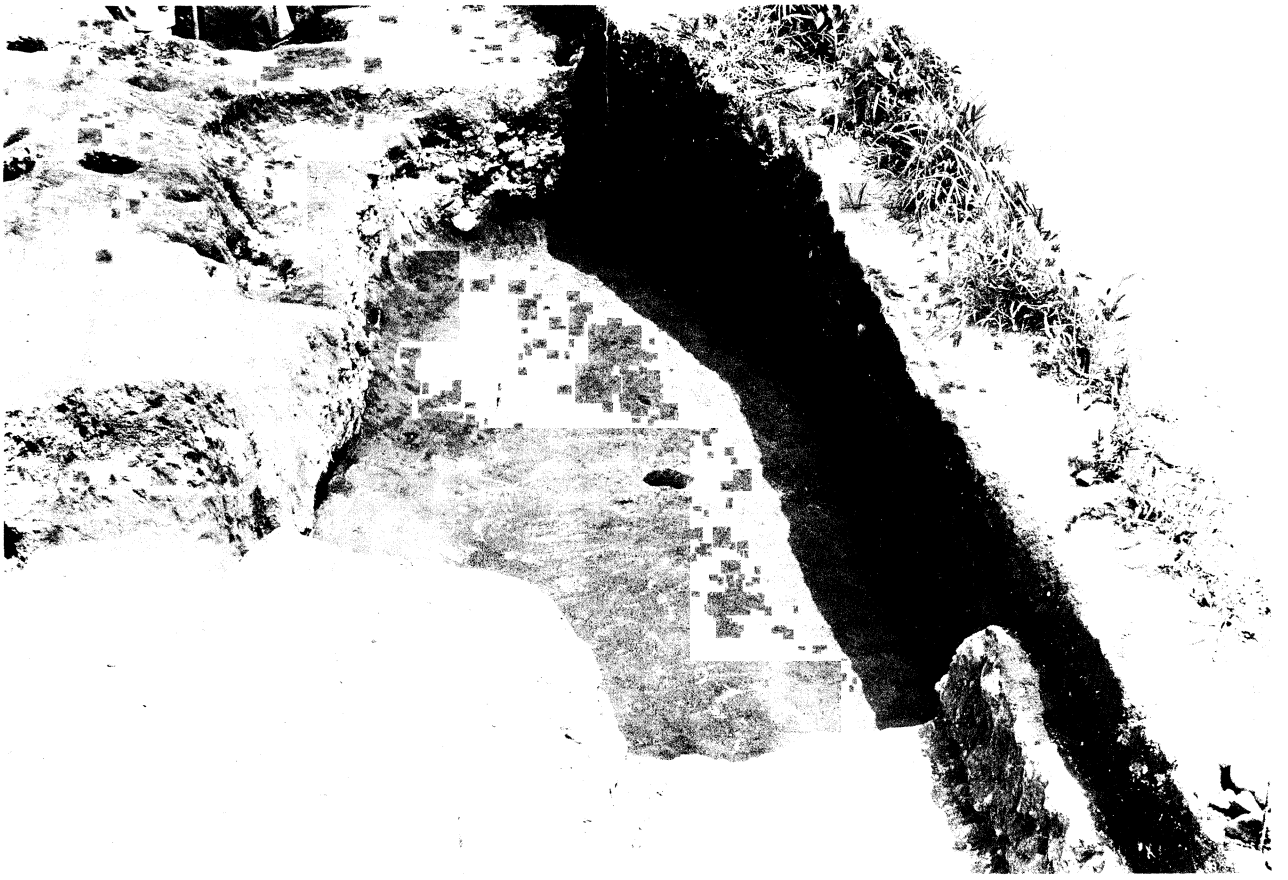
A５遺溝(南より)

A６・28遺溝(西より)

図版36



A 7 遺溝(西より)

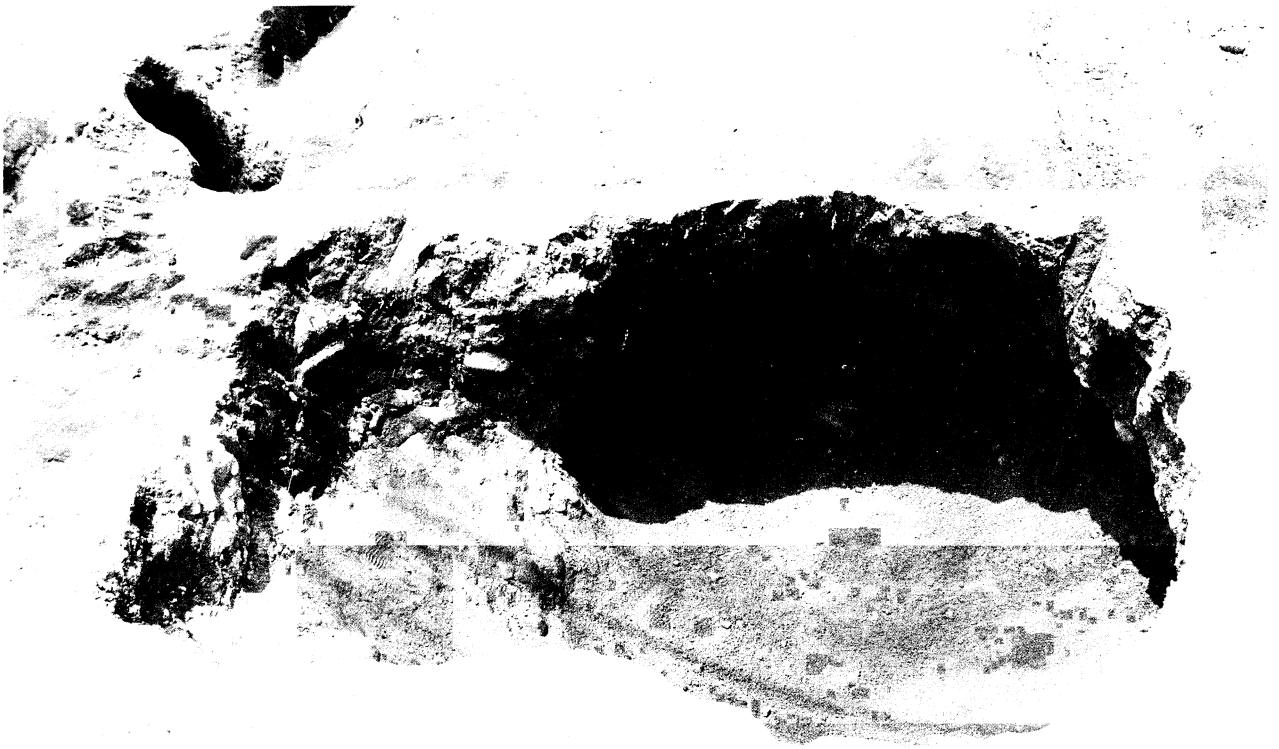


A 8 遺溝(南より)

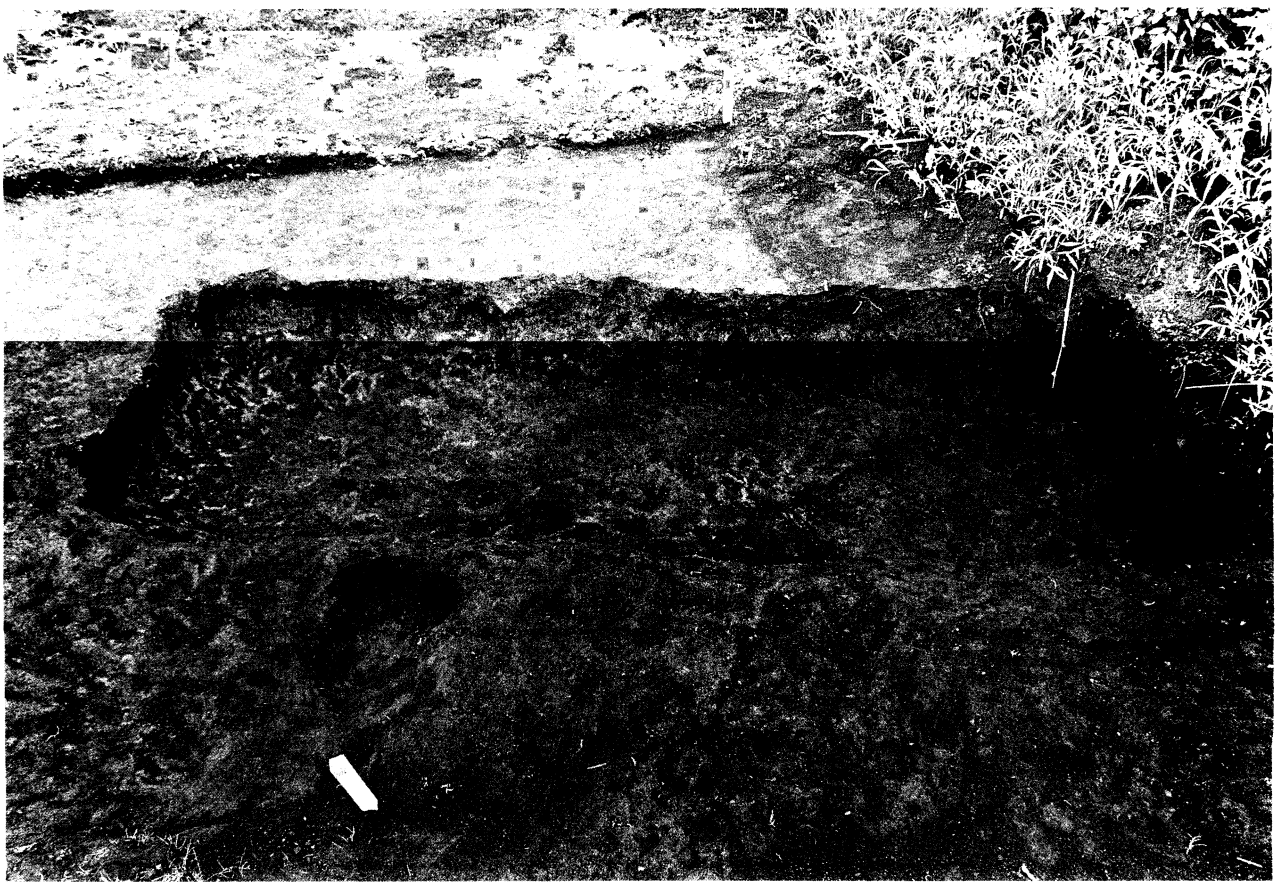
A９遺溝(西より)

A10遺溝(北西より)

図版38

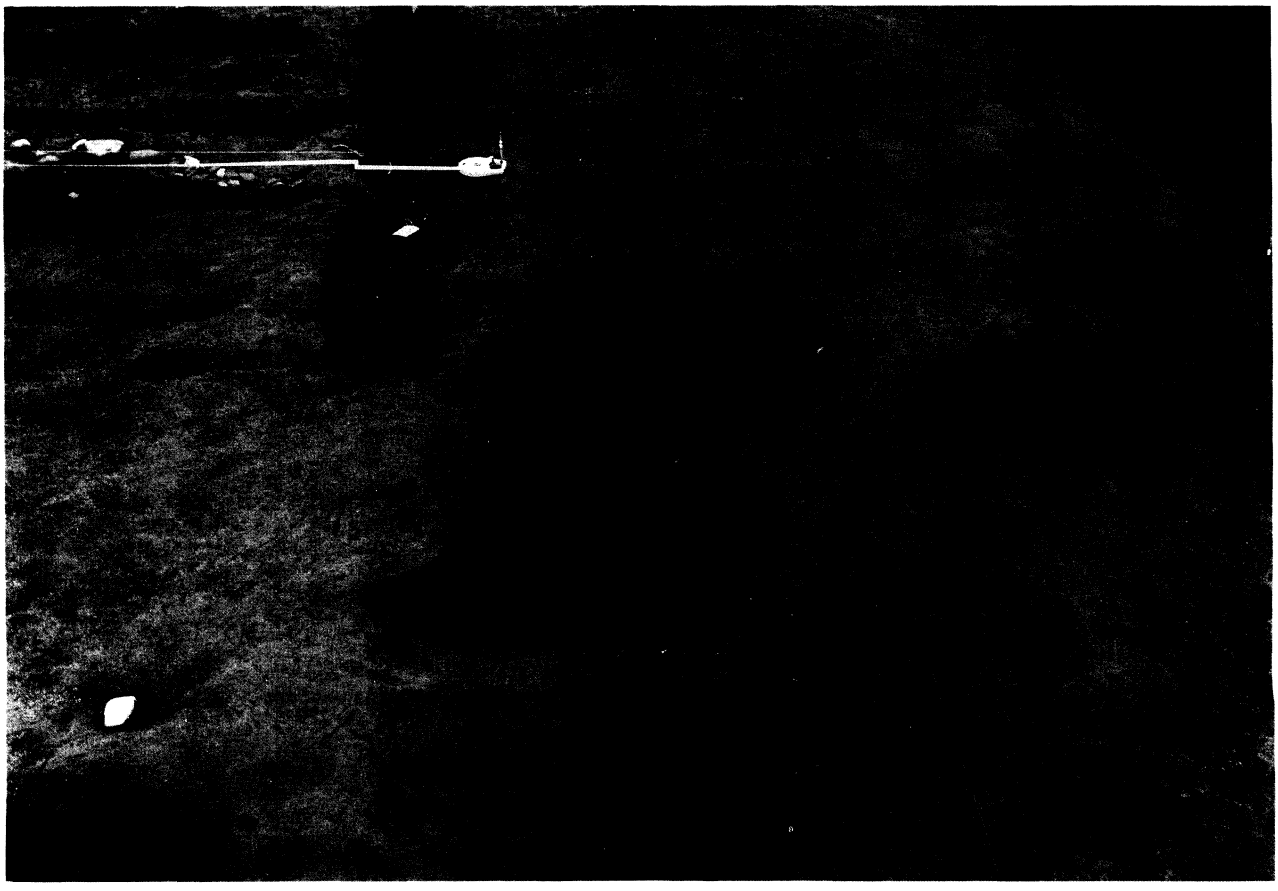


A12遺溝(東より)



A13遺溝(南より)

A14遺溝(南西より)

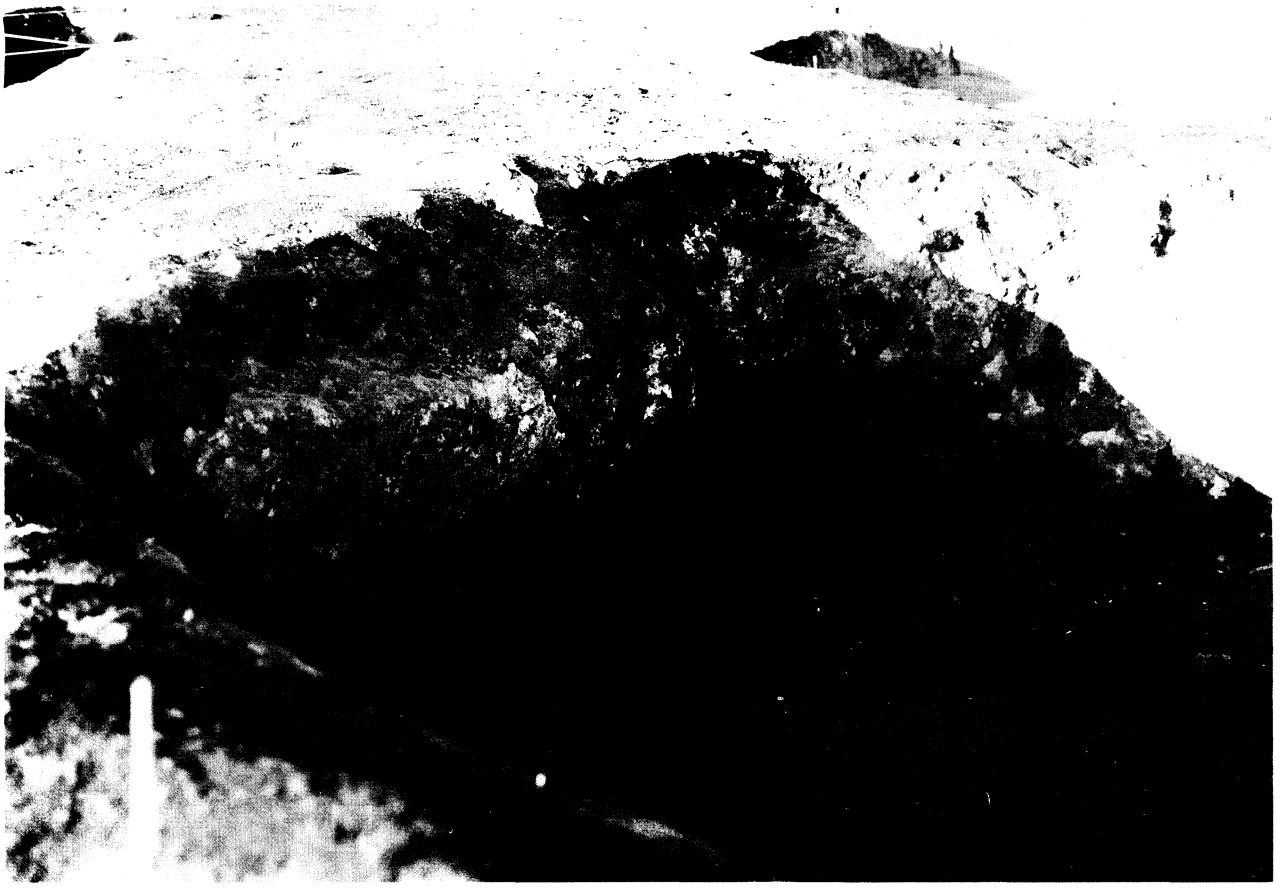


A15遺溝(東より)

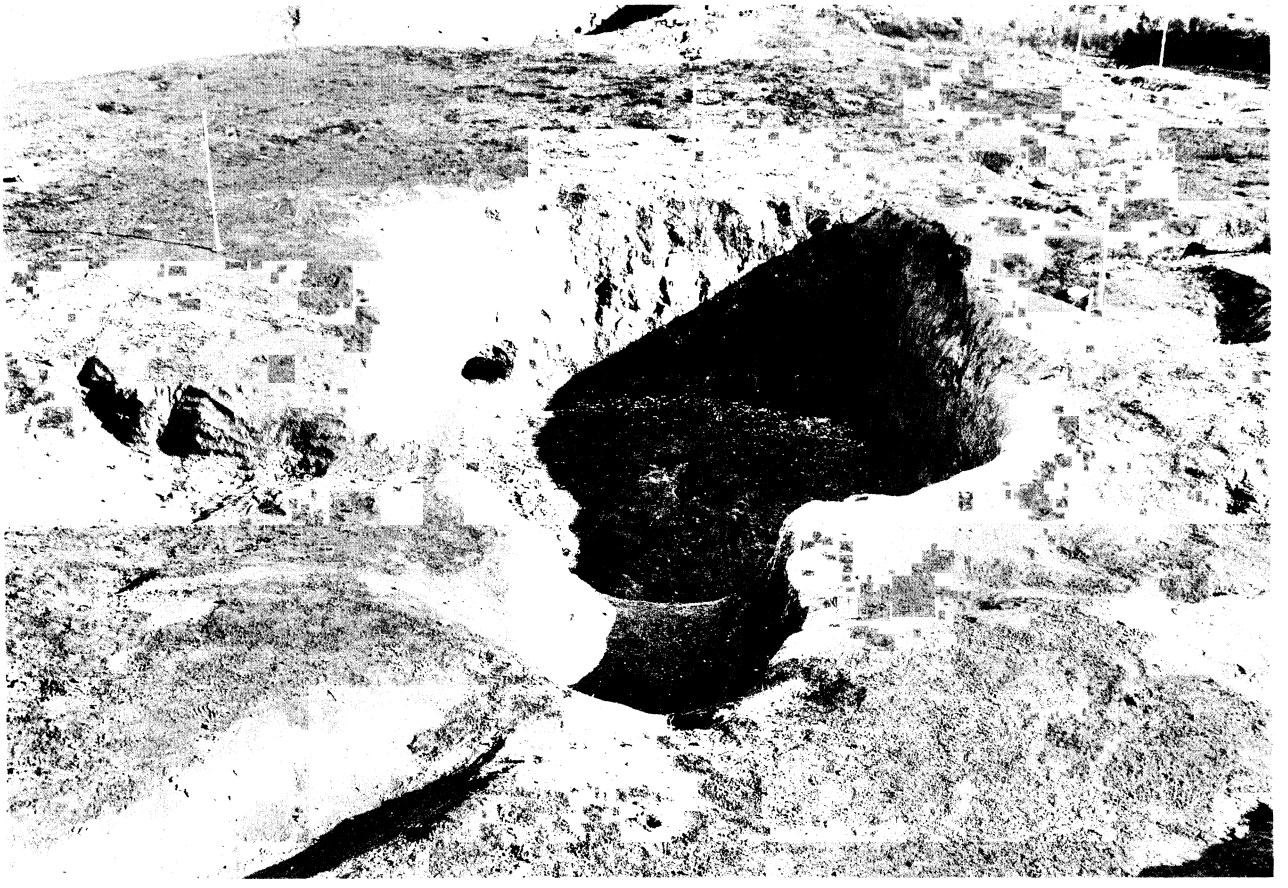
図版40

A16遺溝(東より)

A21・22遺溝(南より)



A22遺溝

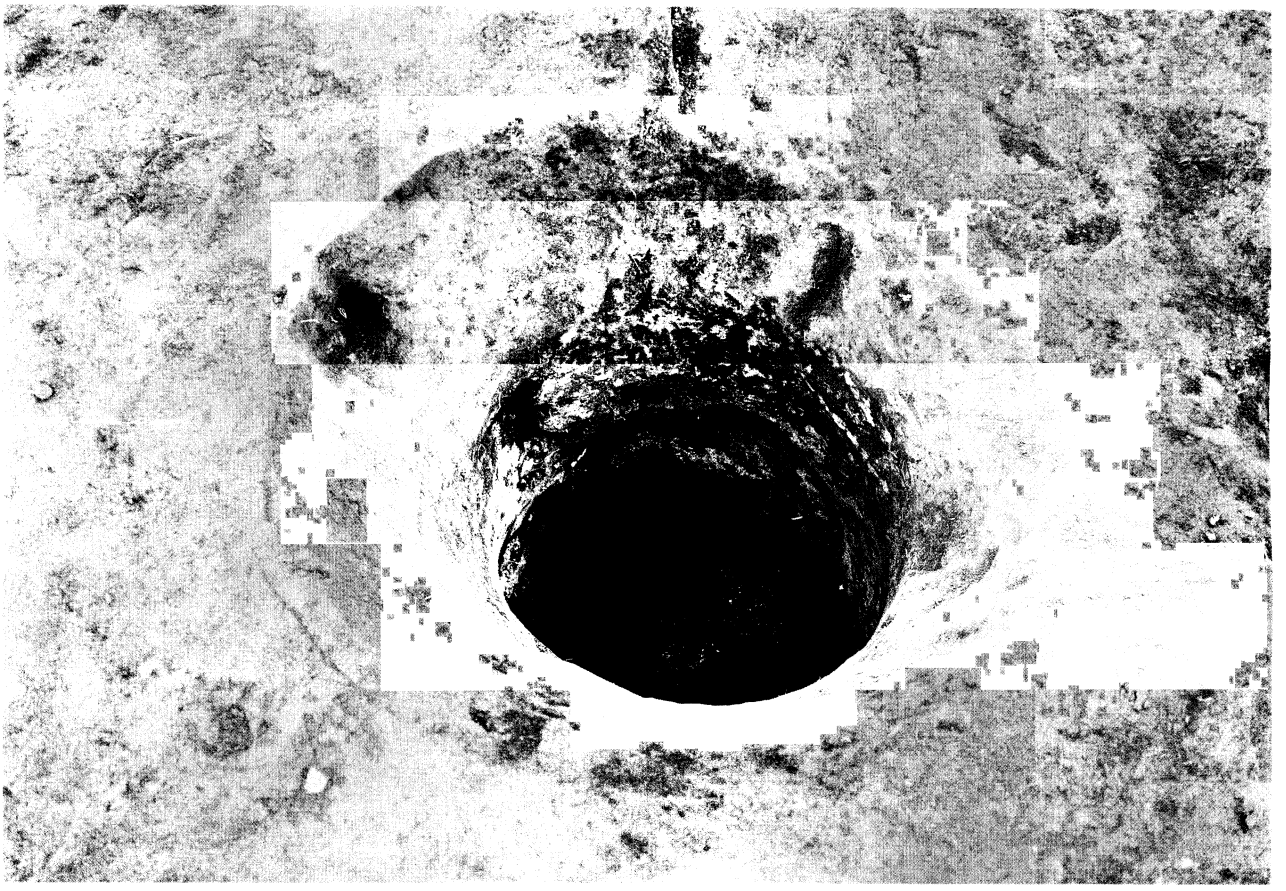


A23遺溝(南より)

図版42

A27遺溝(東より)

ＡＰ１土坑



Ｉ４号井戸跡

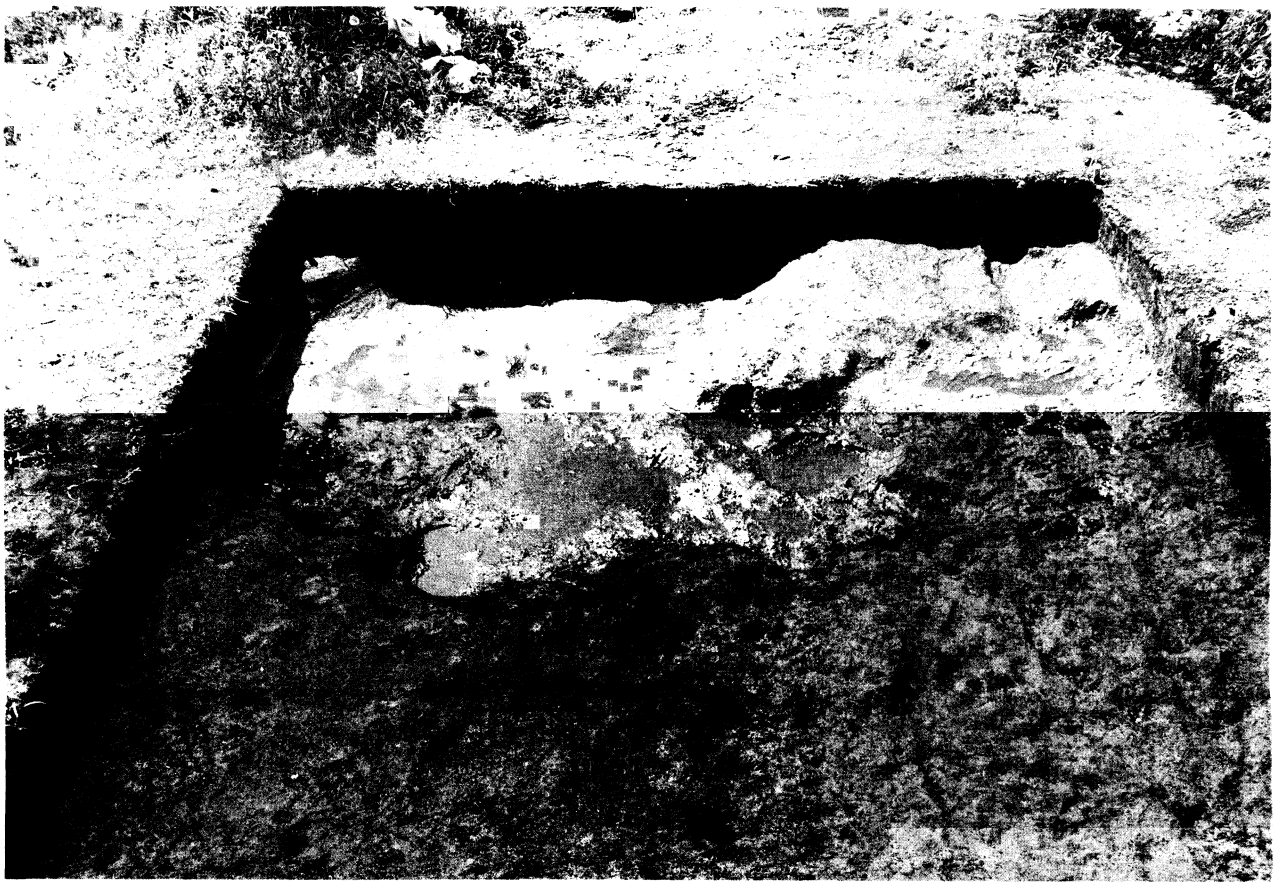
Ｊ１号住居跡(南東より)

図版44

Ｊ２号住居跡(南より)

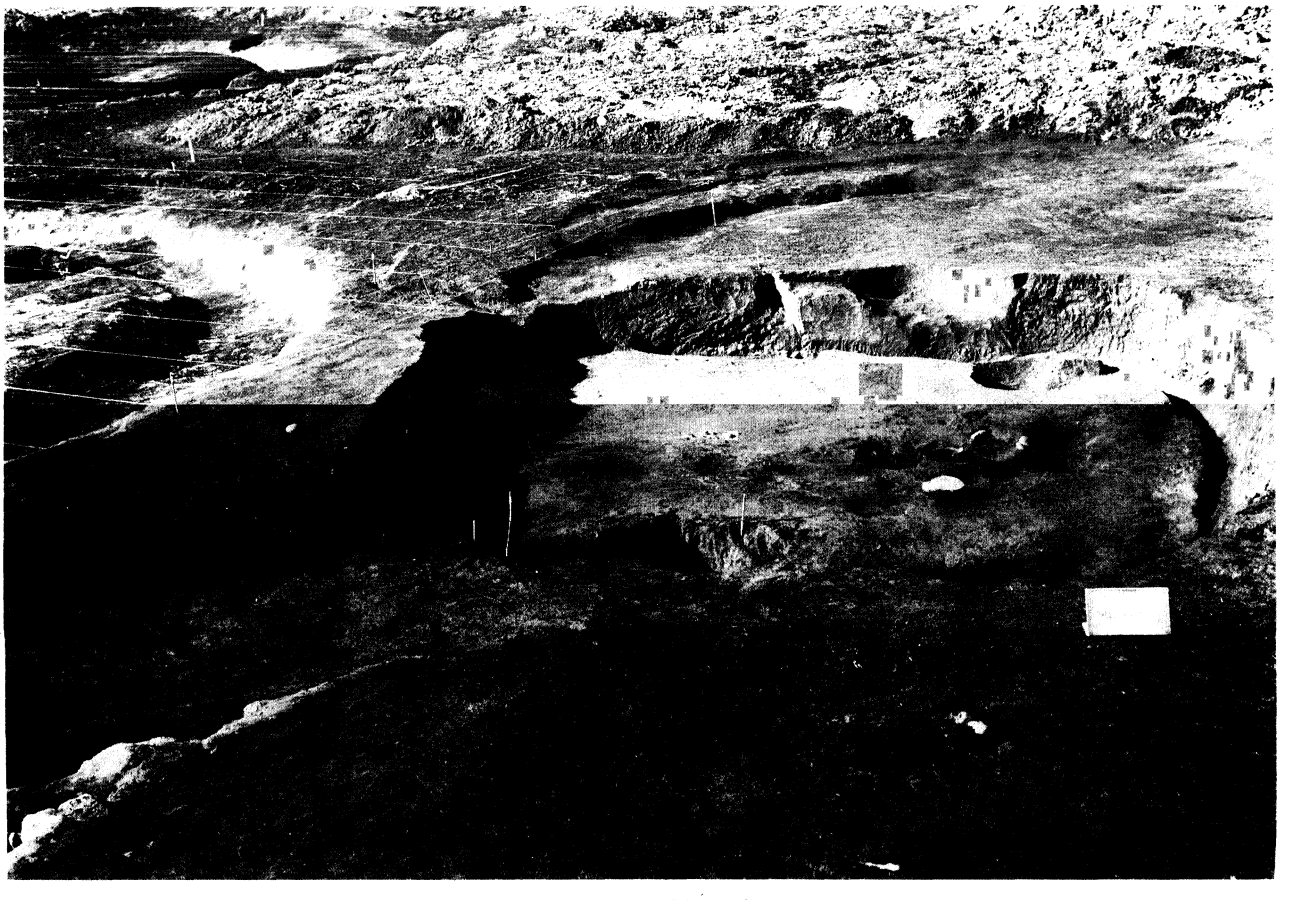
同(遺物出土状態 西より)

Ｊ３号住居跡(南より)

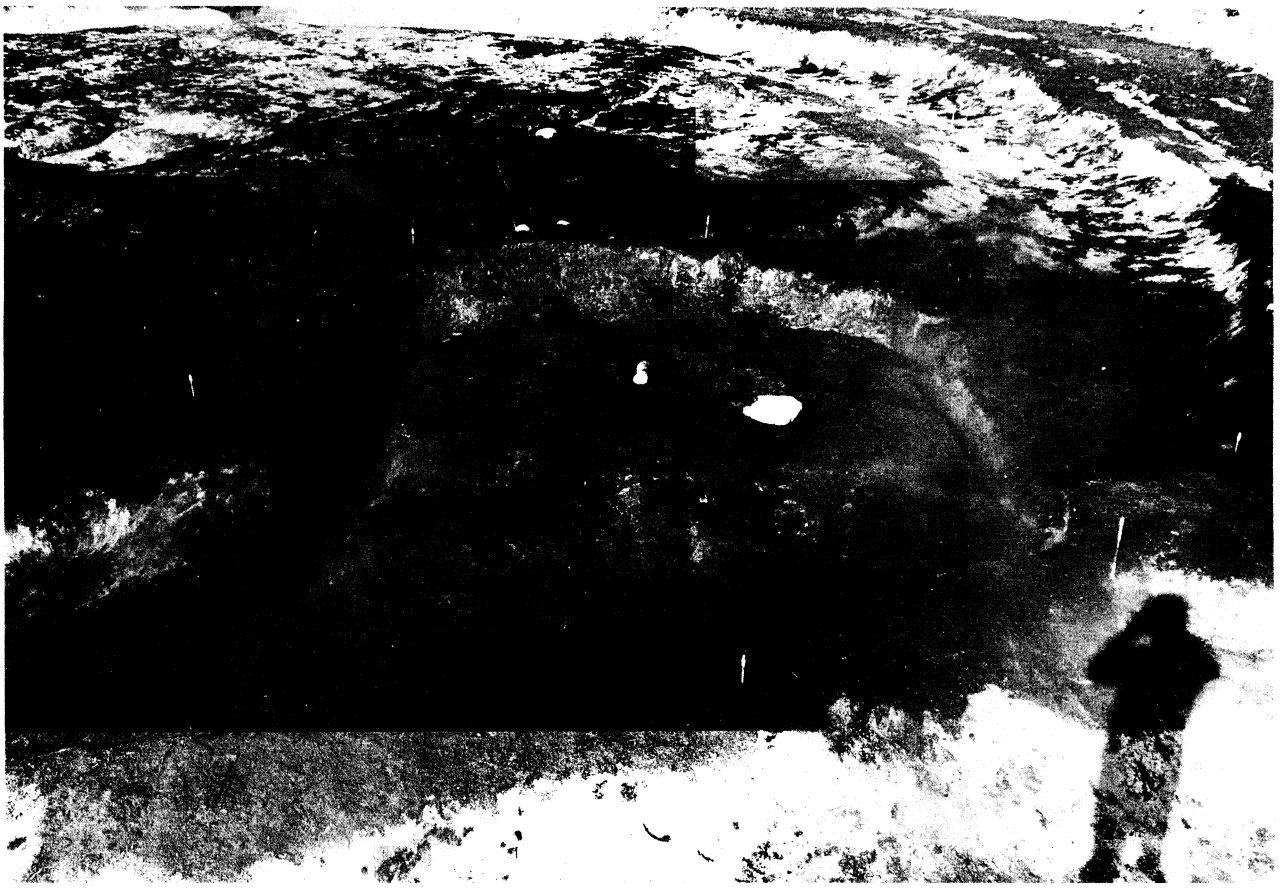


Ｊ４号住居跡(東より)

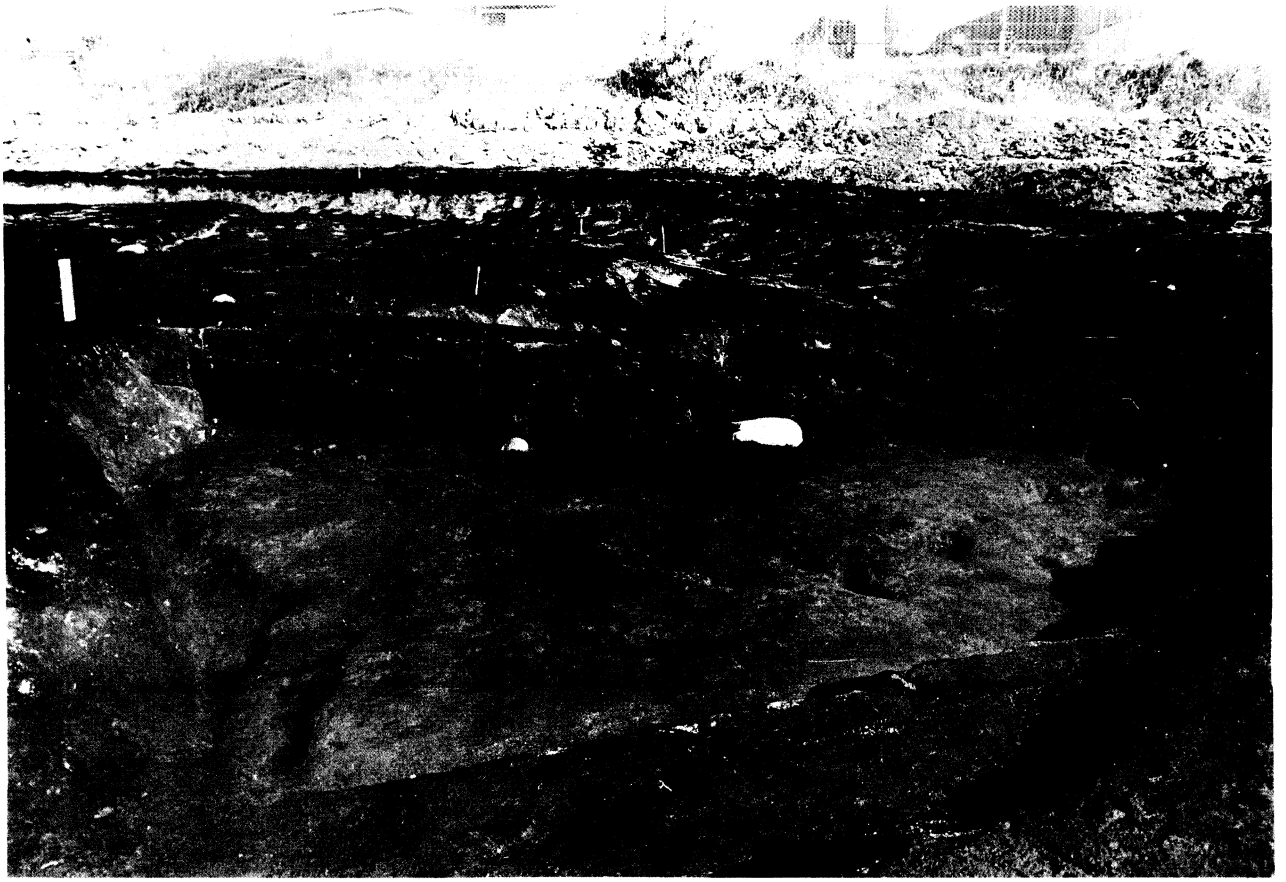
Ｊ５号住居跡(南より)



Ｊ６号住居跡(東より)



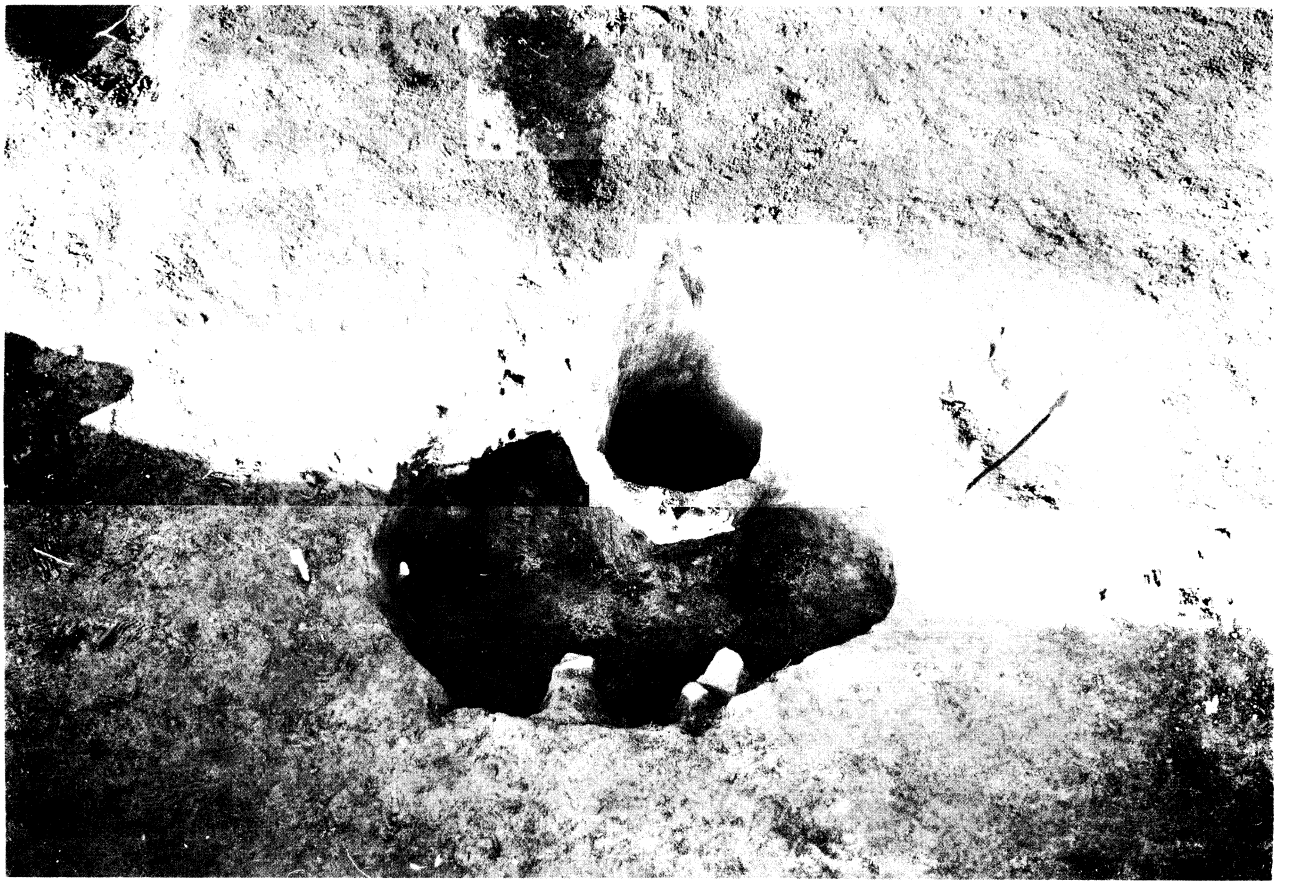
Ｊ７号住居跡(南東より)



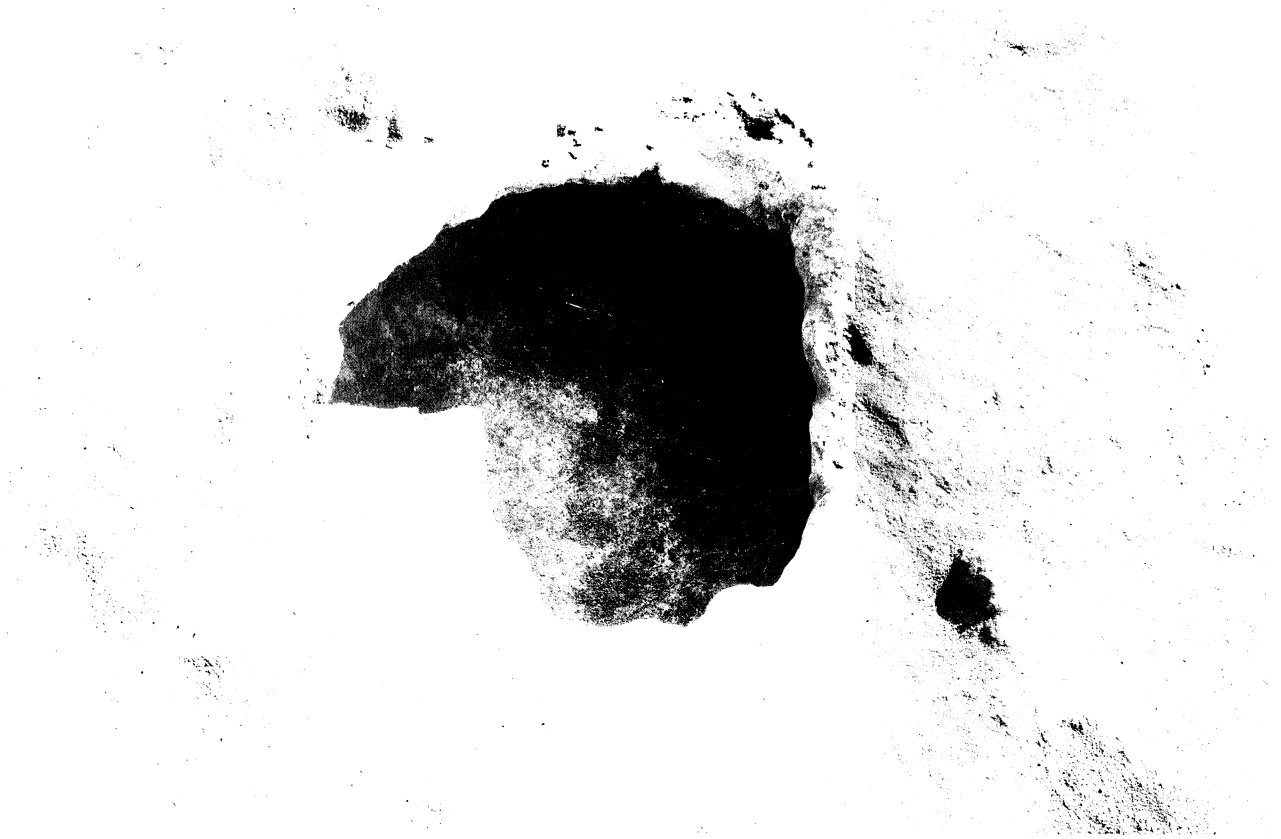
同(土層断面 東西より)

図版48

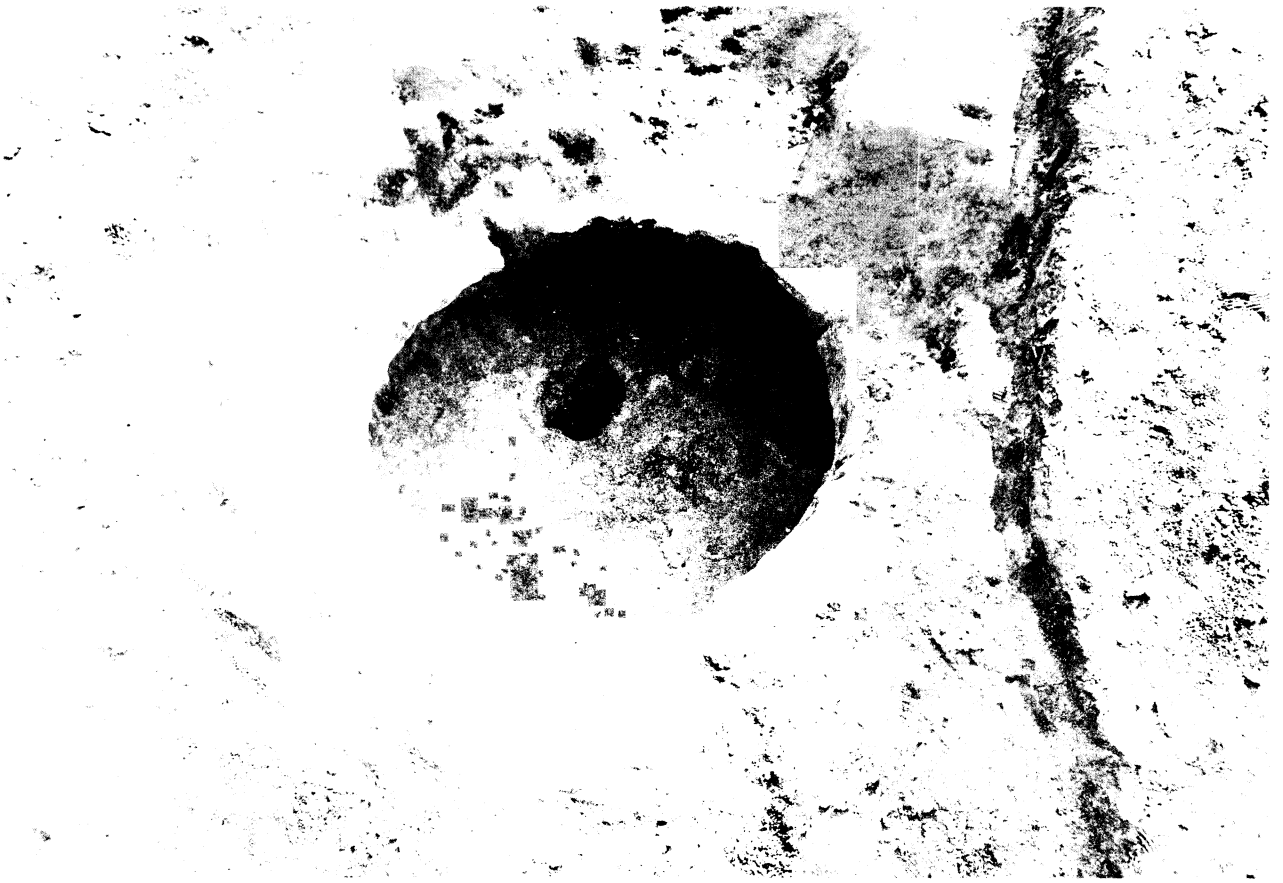
ＪＰ１号土坑



ＪＰ２号土坑

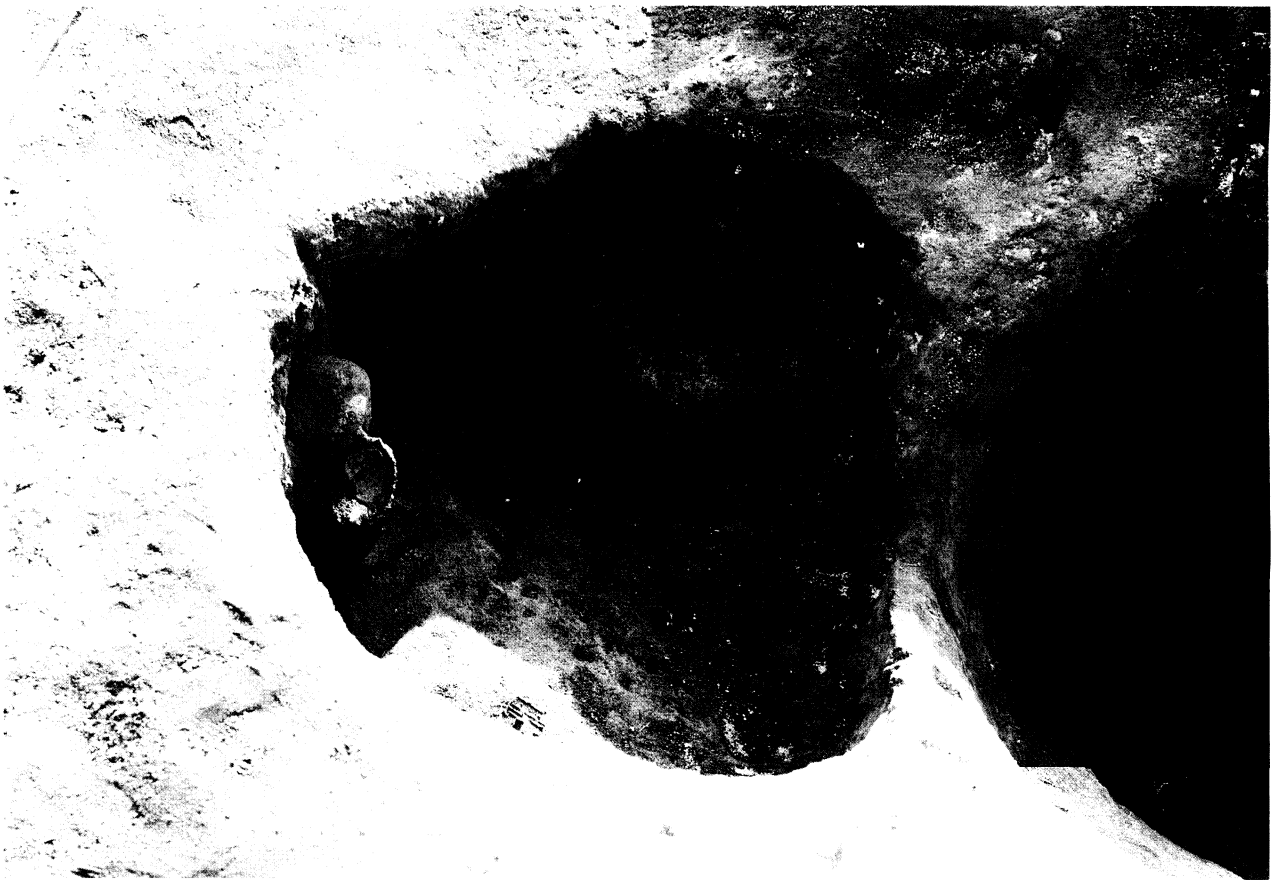


ＪＰ３号土坑

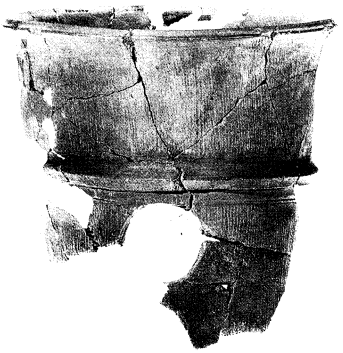


ＪＰ６号土坑

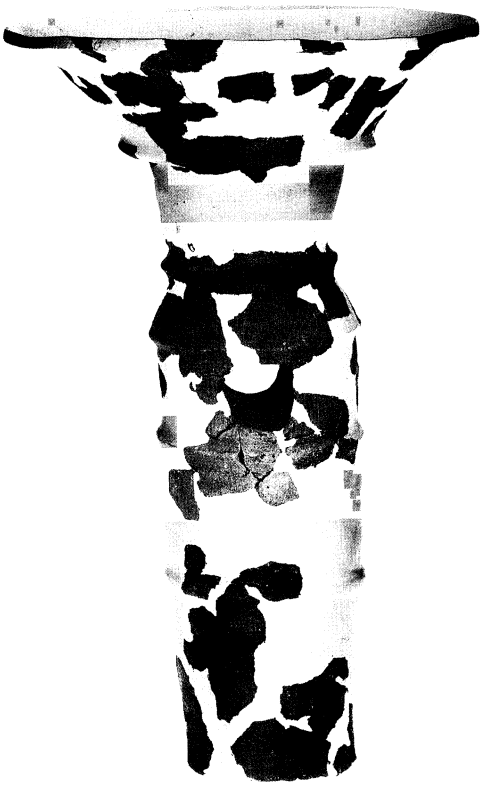
図版50



ＭＰ１号土坑(北より)

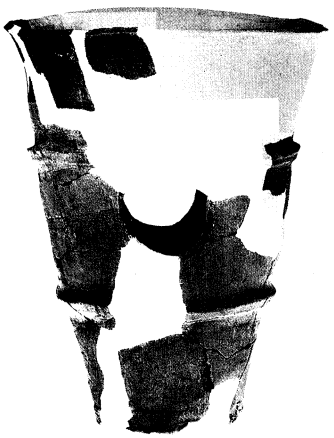


M4・1



M4・3

M4・2



M6・1

M6・2

M6・3

M4・6号古墳出土埴輪

図版52

M６・４

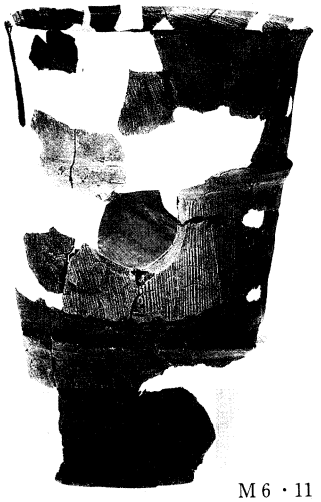
M６・５

M６・６

M６・７

M６・８

M６・９



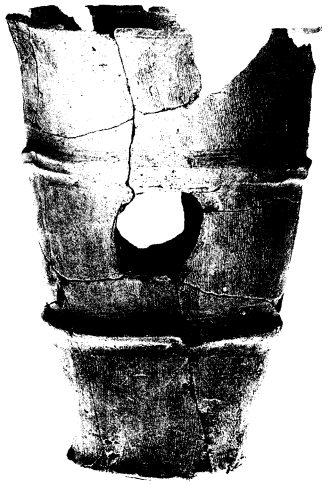
M６・11

M６・12

M６・13

M６号古墳出土埴輪

M６・14



M６・15

M６・16

M６・18

M10・１

M10・２

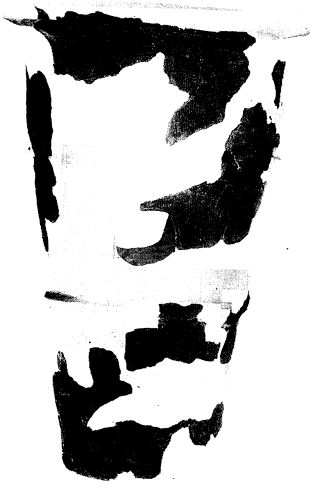
M10・３

M10・４

M10・６

M６・10号古墳出土埴輪

図版54



M10・8

M12・1

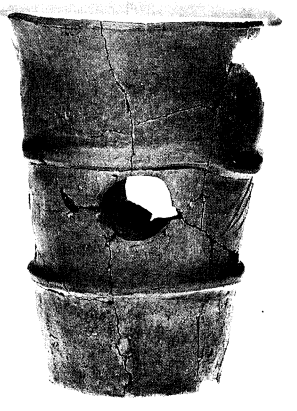
M12・2

M15・1

M15・2

M15・3

M15・4



M15・5

M15・6

M10・12・15号古墳出土埴輪

M15・8

M15・9

M15・11

M15・12

M15・22

M15・13

M15号古墳出土埴輪

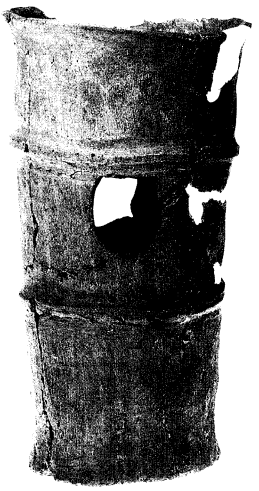
図版56

M15・14

M15・18

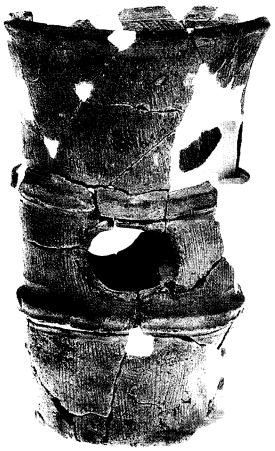
M15・19

M17・2



M18・1

M18・2



M21・1

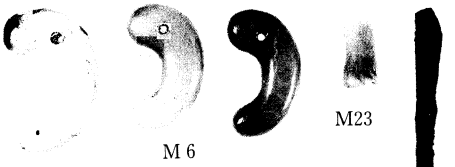
M22・1

M22・2

M15･17･18･21･22号古墳出土埴輪

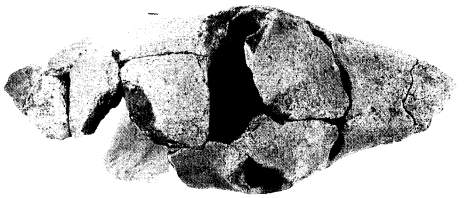
M 6

M 2

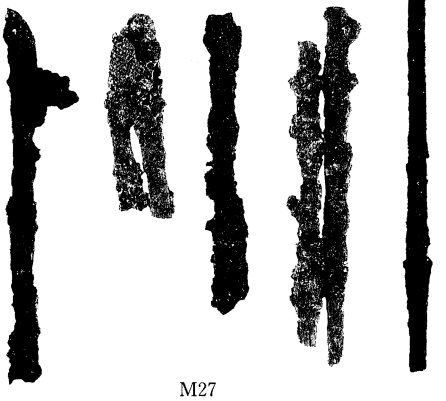


M23

M 6



M 6

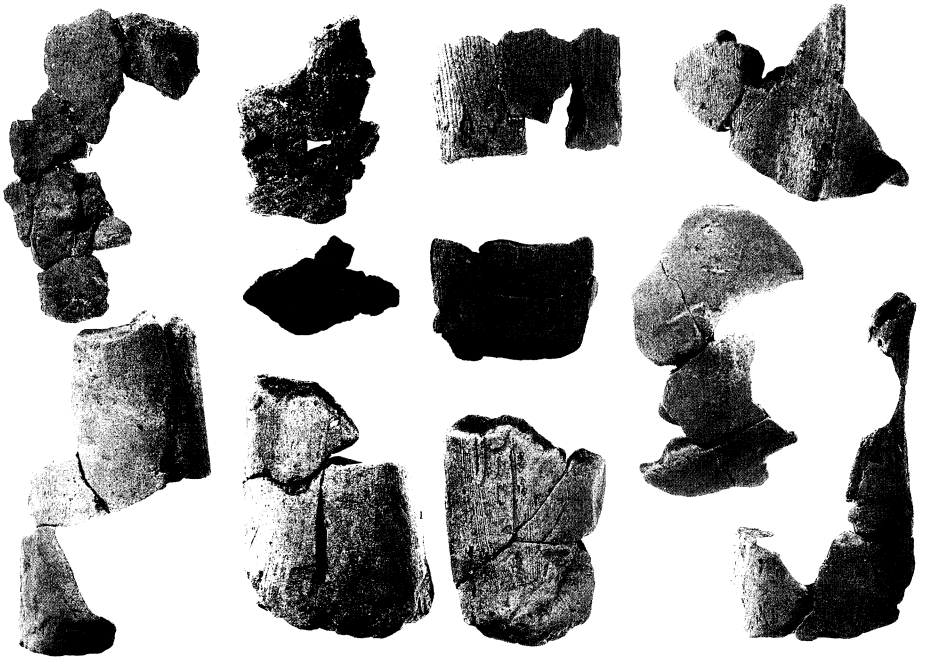


M27

金属・石製品

M 6

M23



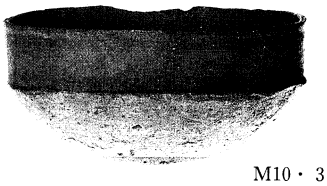
M23

M 6・23号古墳出土形象埴輪

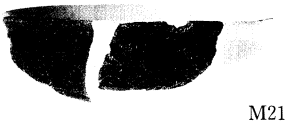
図版58

M１・１

M21・２


M10・３

M１・２

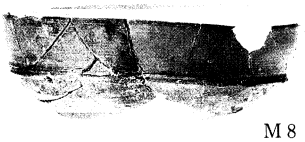

M21・３

M１・４

M１・３

M22・１

M１・５


M８・１

M22・２

M１・６

M８・２

M24・１

M１・７

M10・１

M24・２

M10・２

M25・１

M１・８

M10・４

M27・１

M１・９

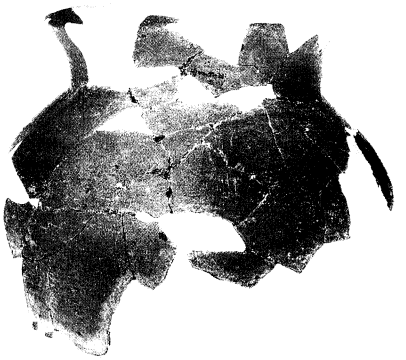
M17・１

M27・２

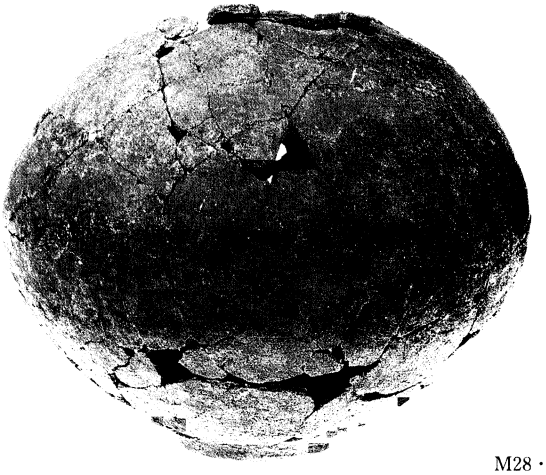
M1・8・10・17・21・22・24・25・27号古墳出土土器

M1・11

M1・10



M10・5



M28・1

M29・2

M15・5

M21・5

M1・10・15・21・28・29号古墳出土土器

図版60

M17・2

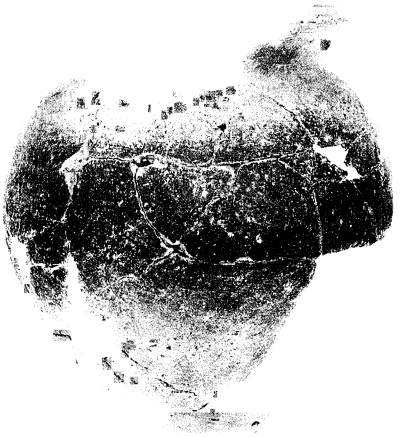
M21・6

M10・6

A14・13

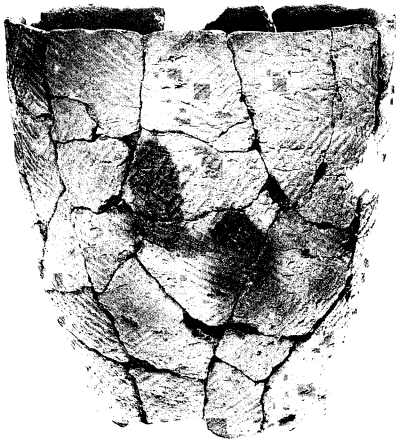
M4・1

M15・6



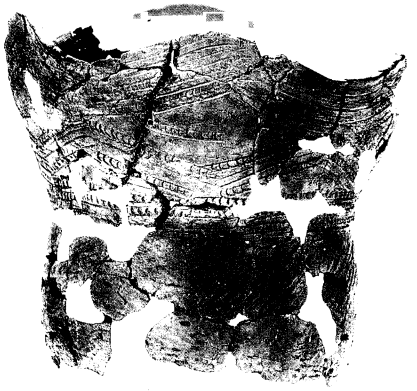
M27・3

M4・10・15・17・21・27古墳・A14遺溝出土土器

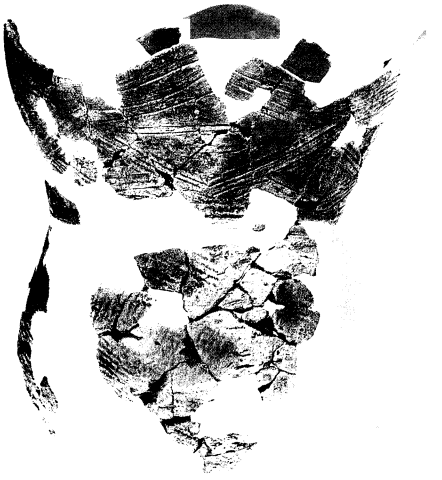


J 2・14

J 2・15

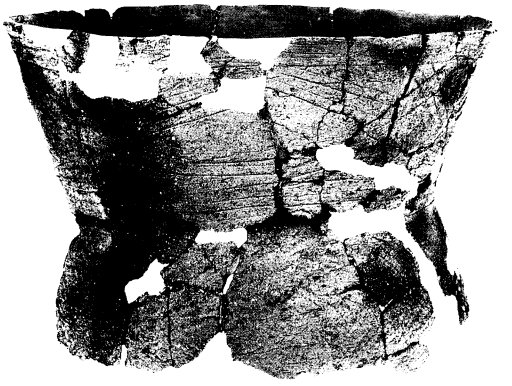


J 2・16



J 2・17

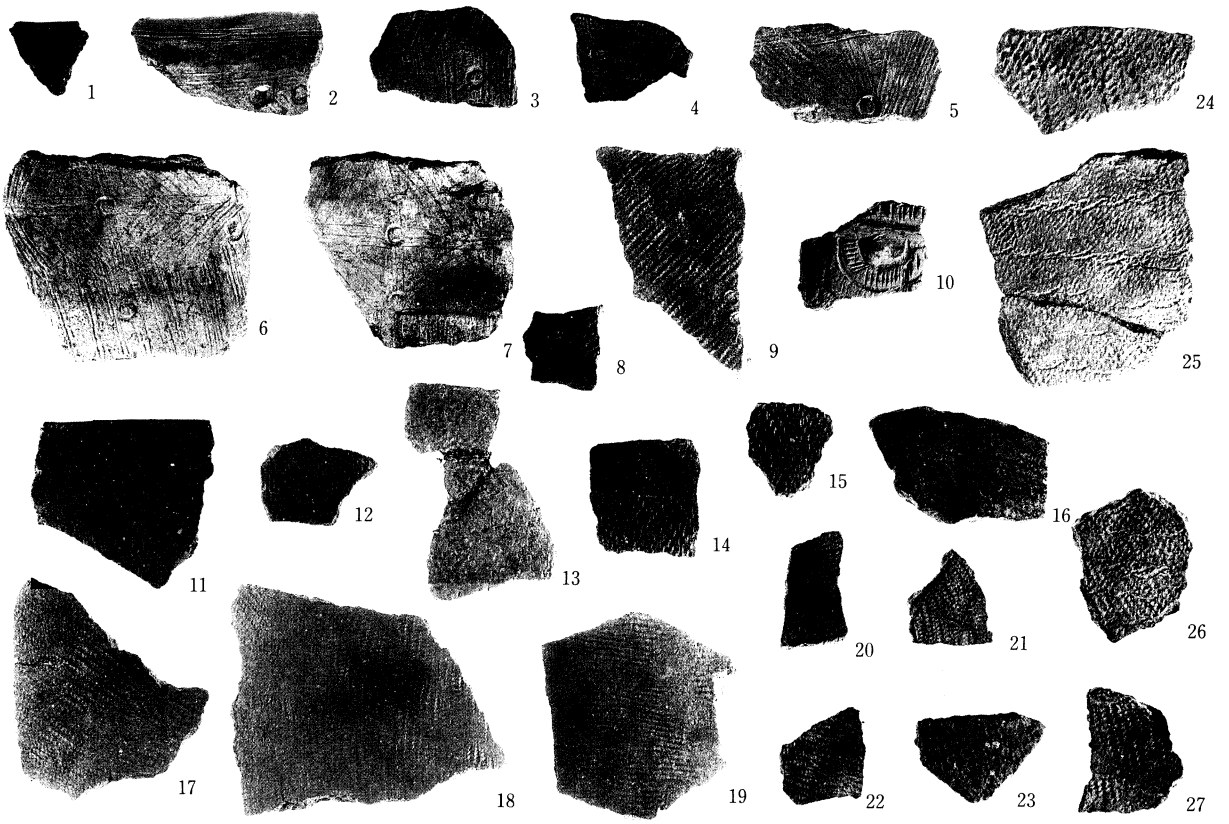
J 2・19



J 2・18

J 2 号住居跡出土土器

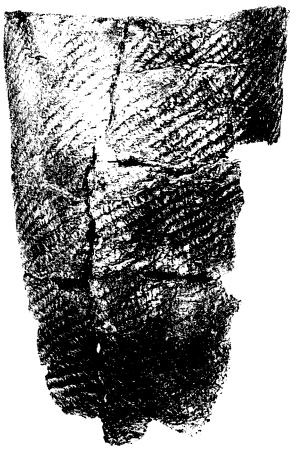
図版62



J 1 号住居跡出土土器

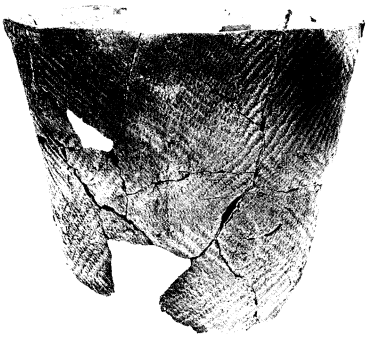
J 2 号住居跡出土土器

Ｊ２・１



Ｊ２・２

Ｊ２・３



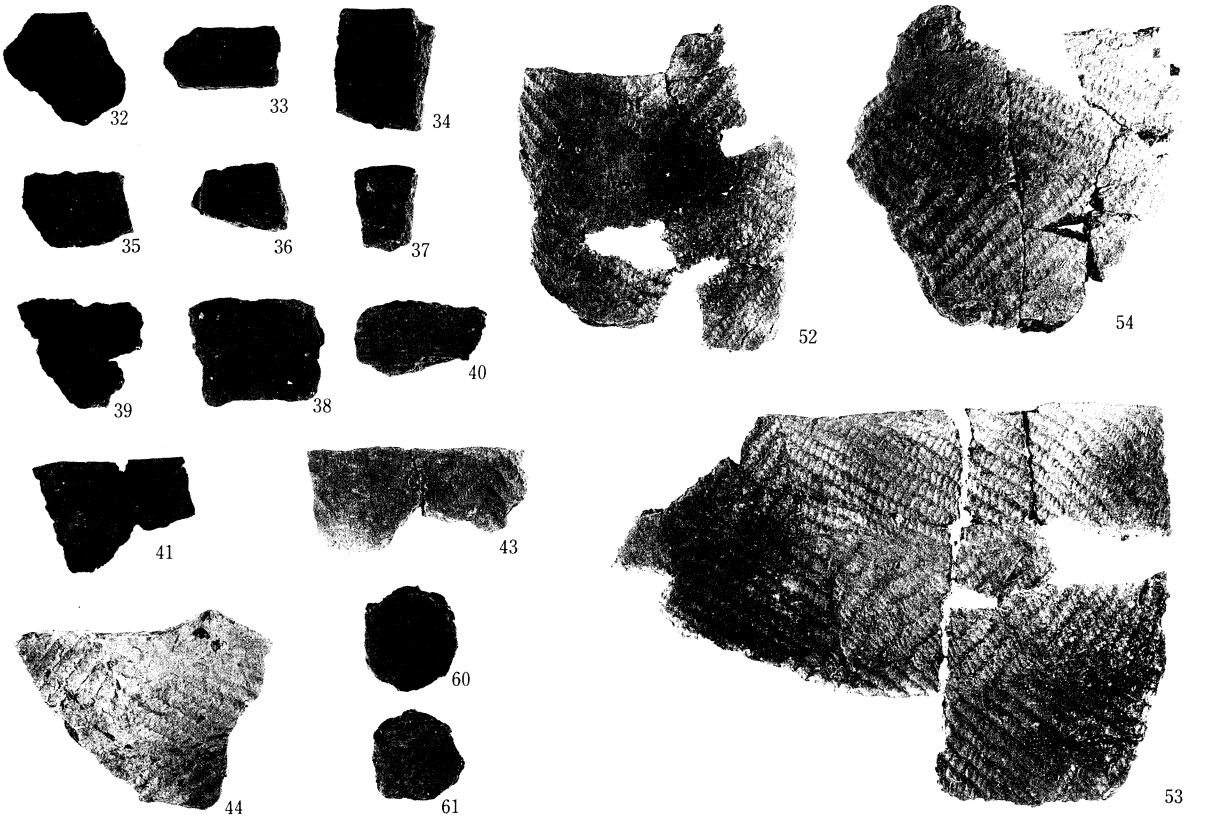
Ｊ２・４

Ｊ２・５

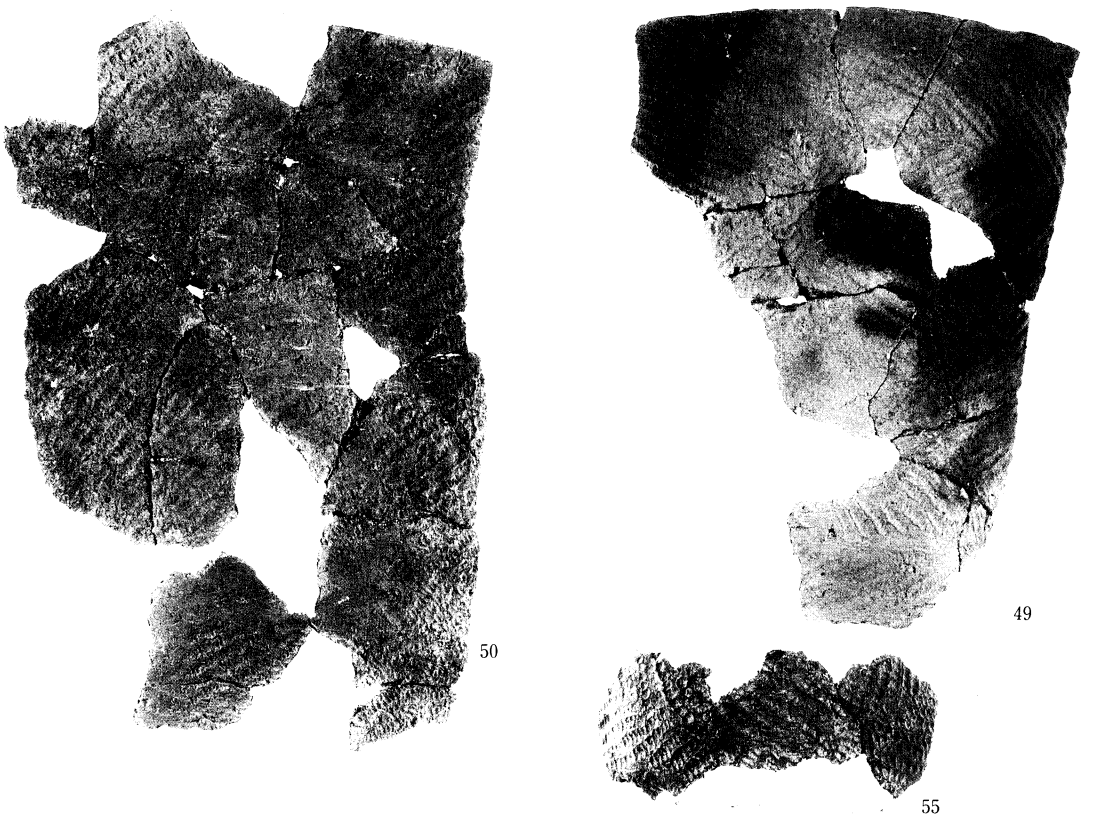
Ｊ２・６

Ｊ２号住居跡出土土器

図版64



J 2 号住居跡出土土器



J 2 号住居跡出土土器

J 2 ・ 7

J 2 ・ 10

J 2 ・ 11

J 2 ・ 13

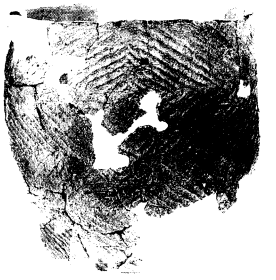
J 2 ・ 8

J 2 ・ 9

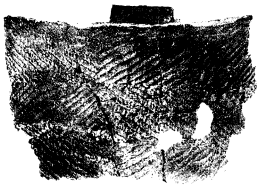
J 2 ・ 12

J 3 ・ 1

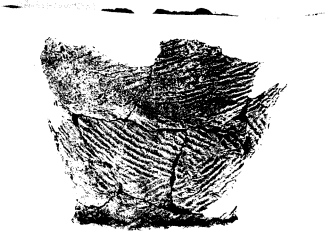
J 3 ・ 2



J 3 ・ 3



J 3 ・ 8



J 3 ・ 9

J 3 ・ 16

J 2 ・ 3 号住居跡出土土器

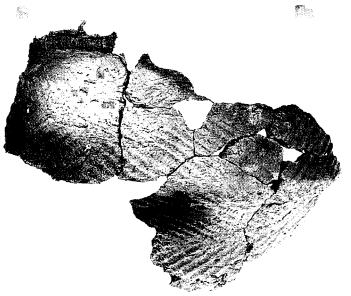
図版66

J 3・11

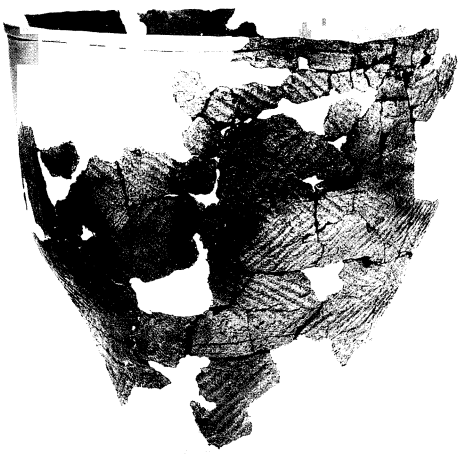
J 3・13

J 3・14

J 3・15



J 3・17



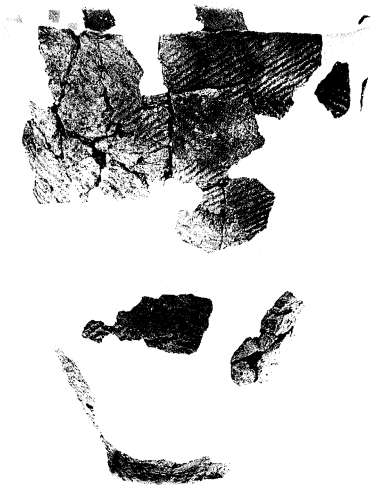
J 3・19

J 3・25

J 3号住居跡出土土器

J３・４

J３・18



J３・５

J３・６

J３・７

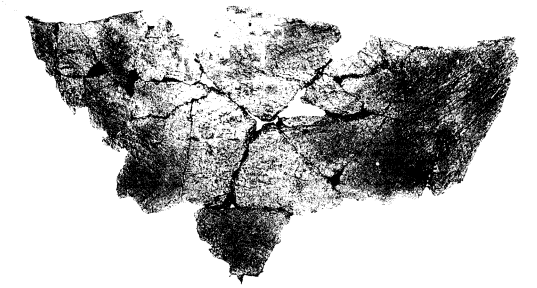
J３・10

J３・12

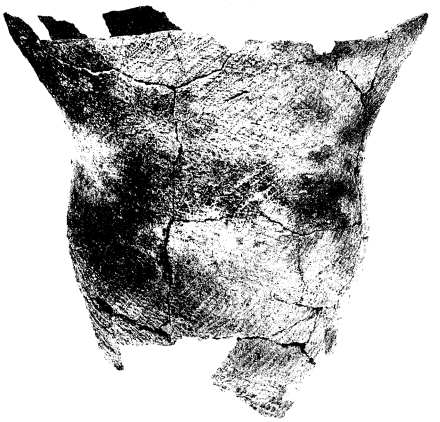
J３号住居跡出土土器

図版68

J 3 ・20



J 3 ・22



J 3 ・21

J 3 ・23

J 3 ・24

J 3 ・26

J 3 号住居跡出土土器

J 3 号住居跡出土土器

J 3 号住居跡出土土器

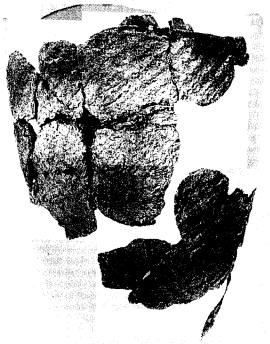
図版70

J４・１

J４・10

J４・２

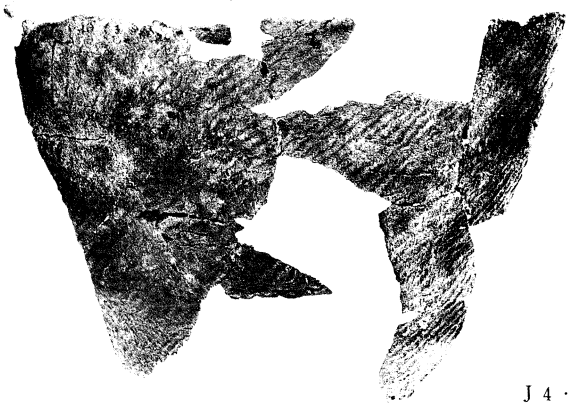
J４・６



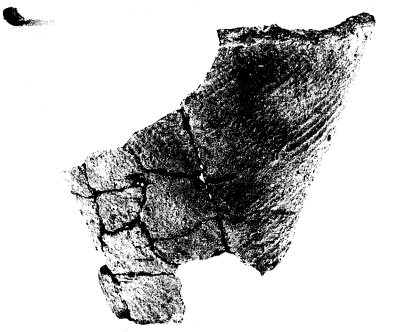
J４・８

J４・３

J４号住居跡出土土器



J 4 · 5



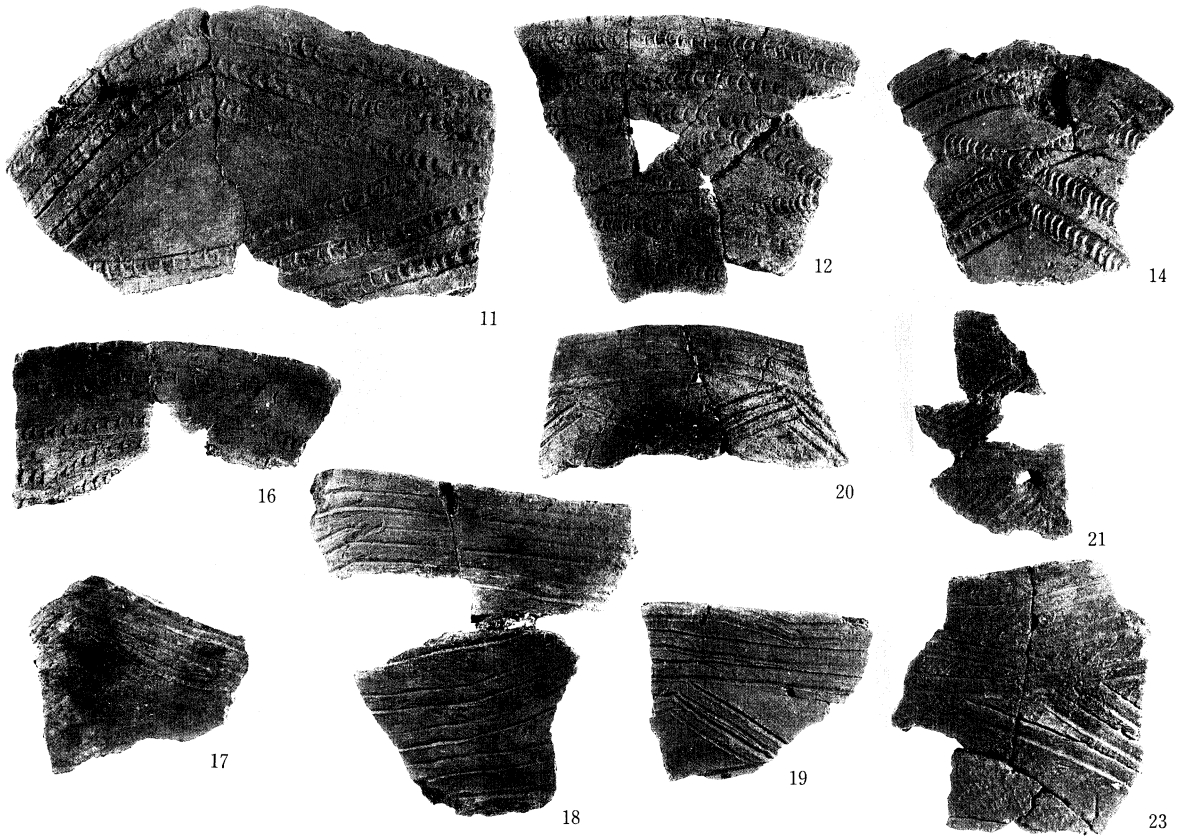
J 4 · 7

J 4 · 4

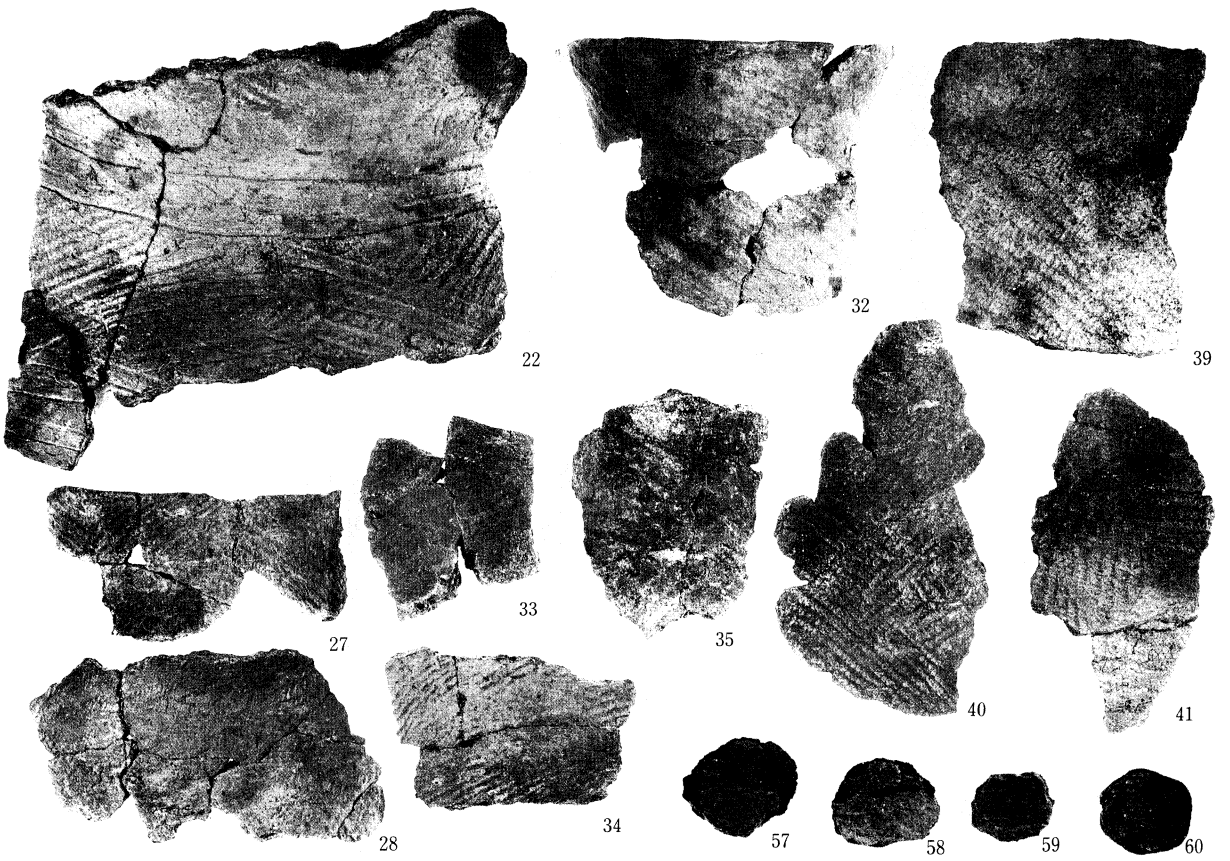
J 4 · 9

J 4 号住居跡出土土器

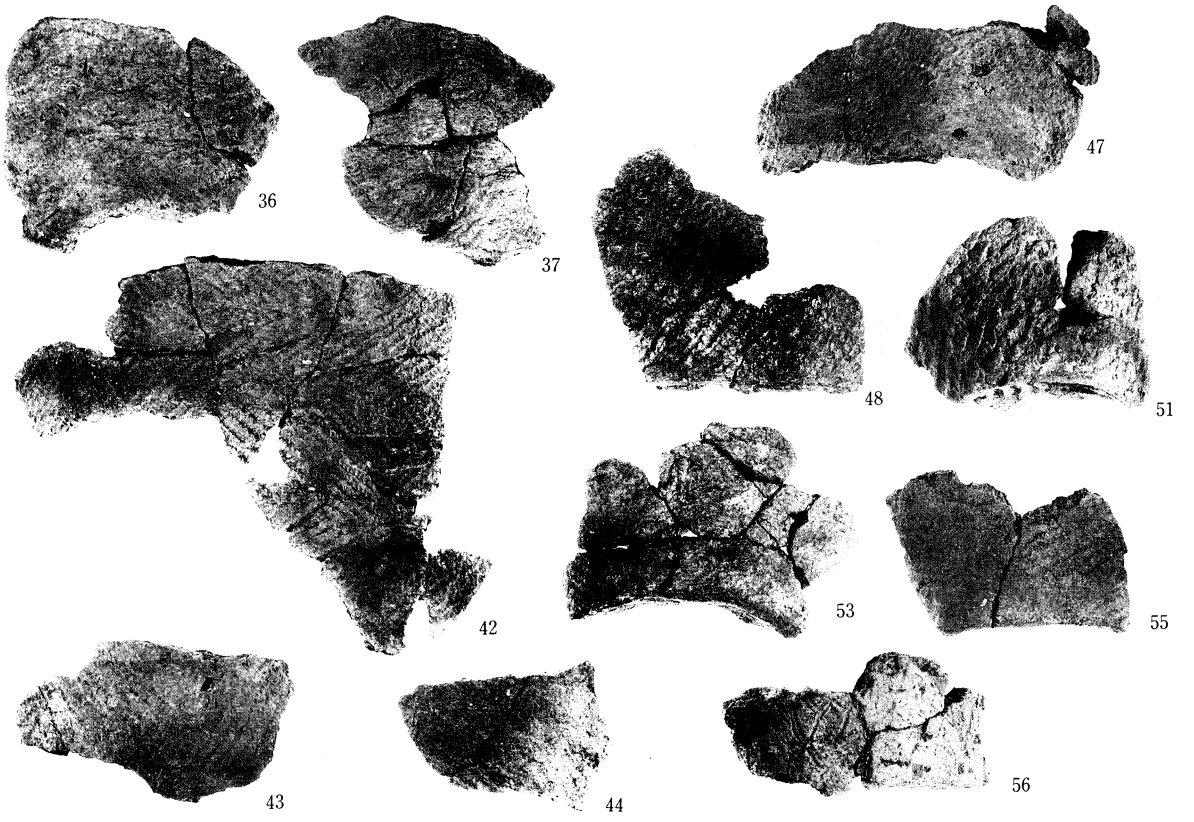
図版72



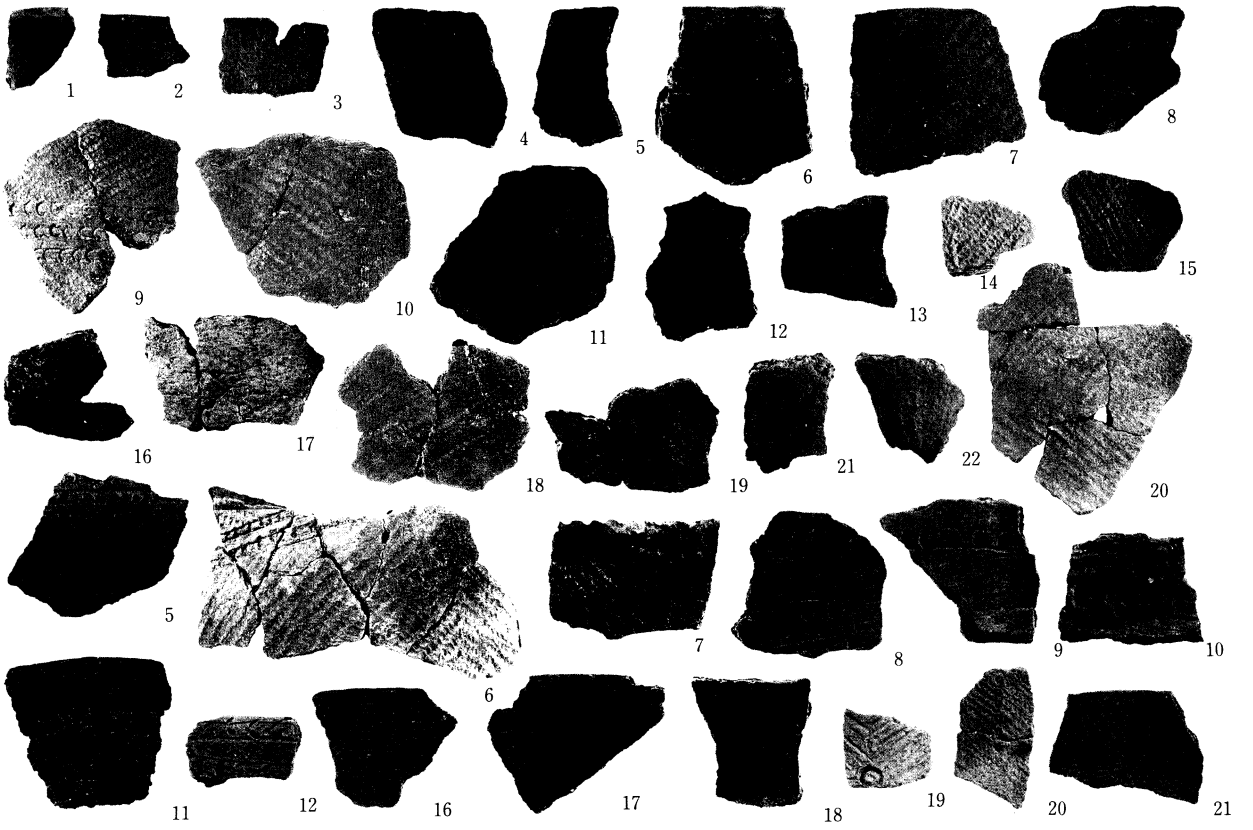
J 4 号住居跡出土土器



J 4 号住居跡出土土器

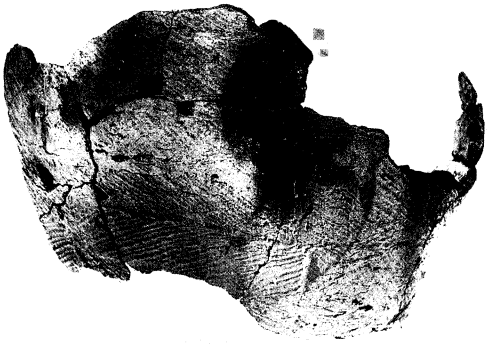


J 4号住居跡出土土器



J 5（上3列）・6号住居跡出土土器

図版74

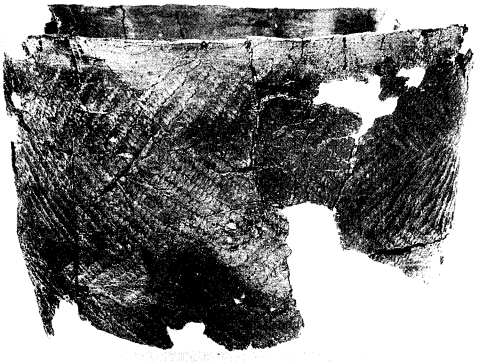


J 6 ・ 1

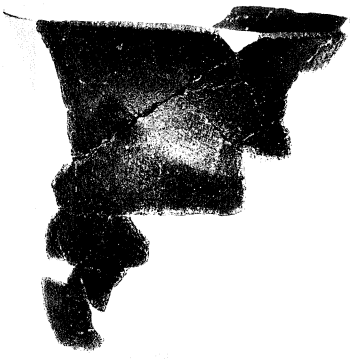
J 6 ・ 2

JP1 ・ 1

JP3 ・ 2

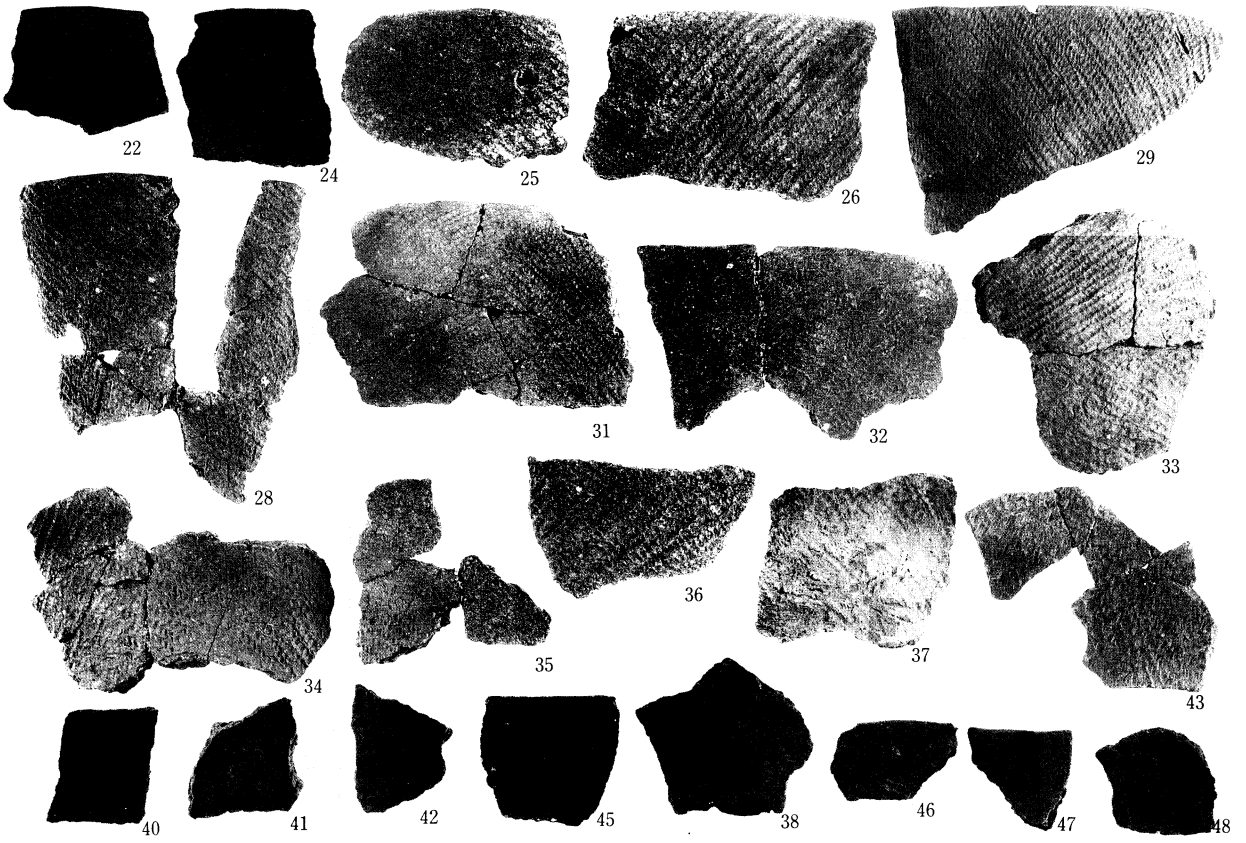


JP1 ・ 3

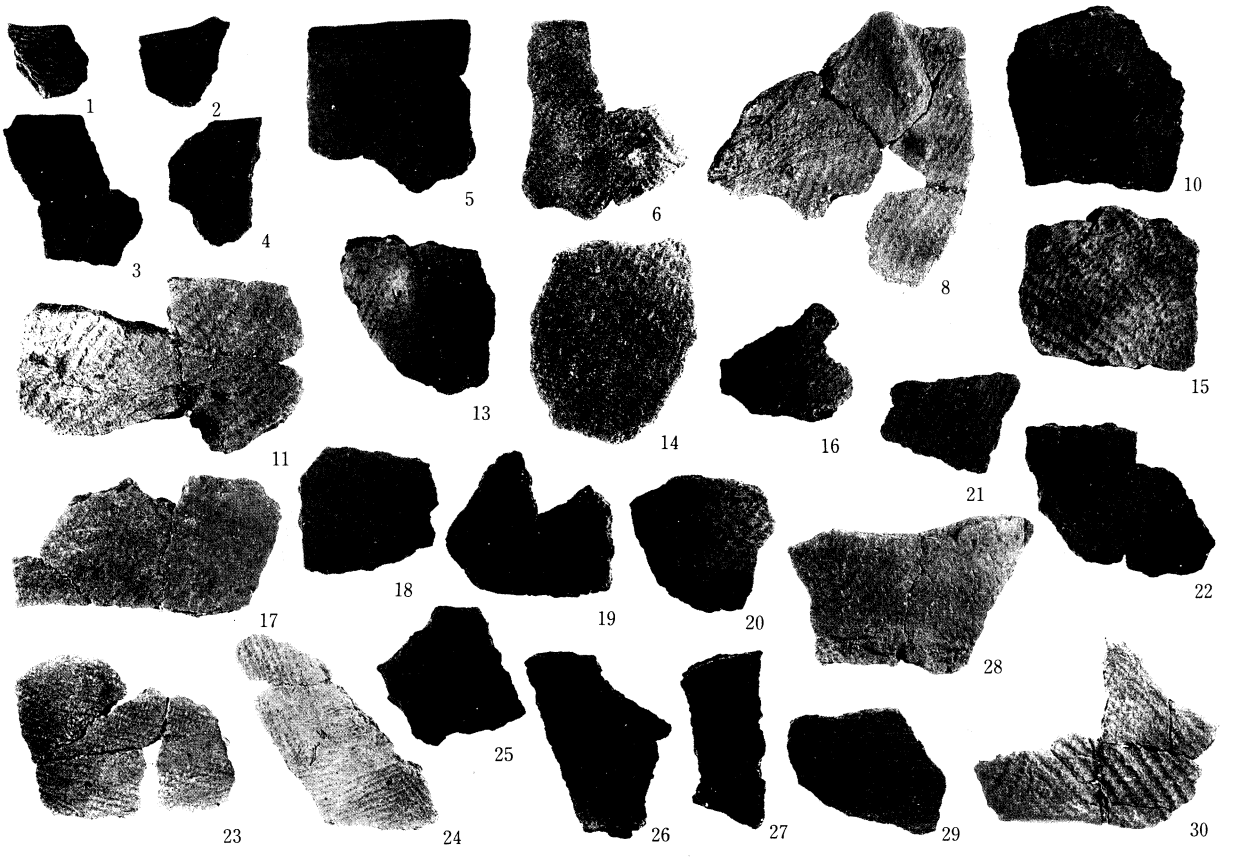


MP1・85

J 6住居跡JP1・3・MP1号土坑出土土器



J 6 号住居跡出土土器



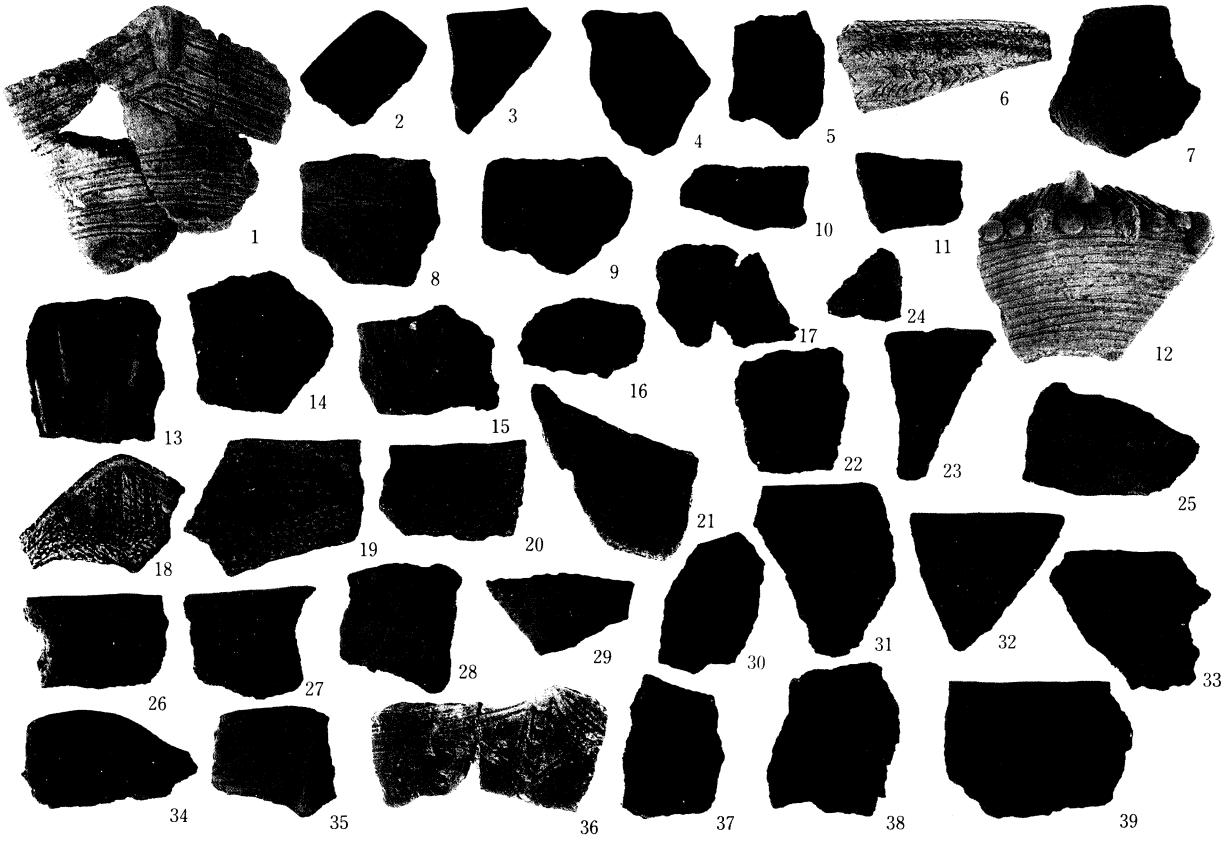
J 7 号住居跡出土土器

図版76

ＪＰ出土土器

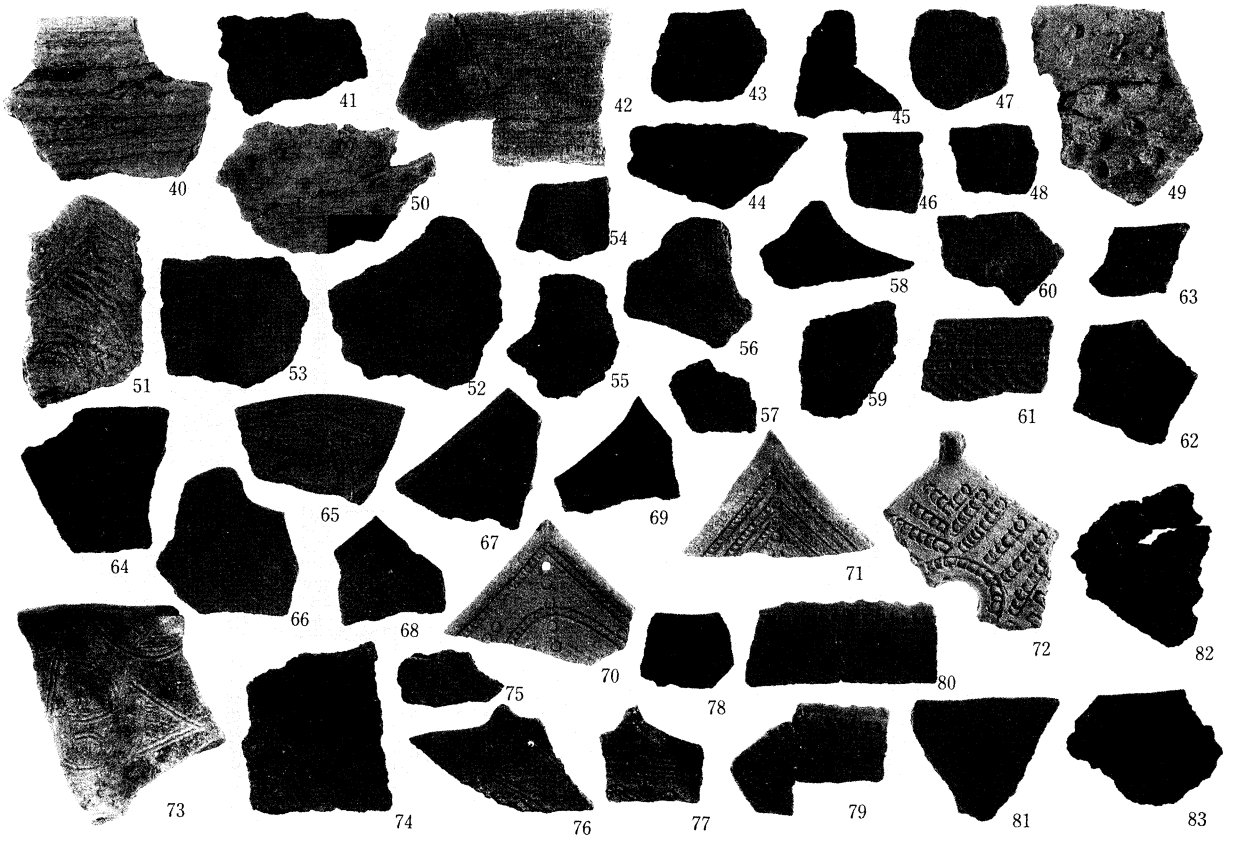
ＪＰ出土土器

ＪＰ出土土器

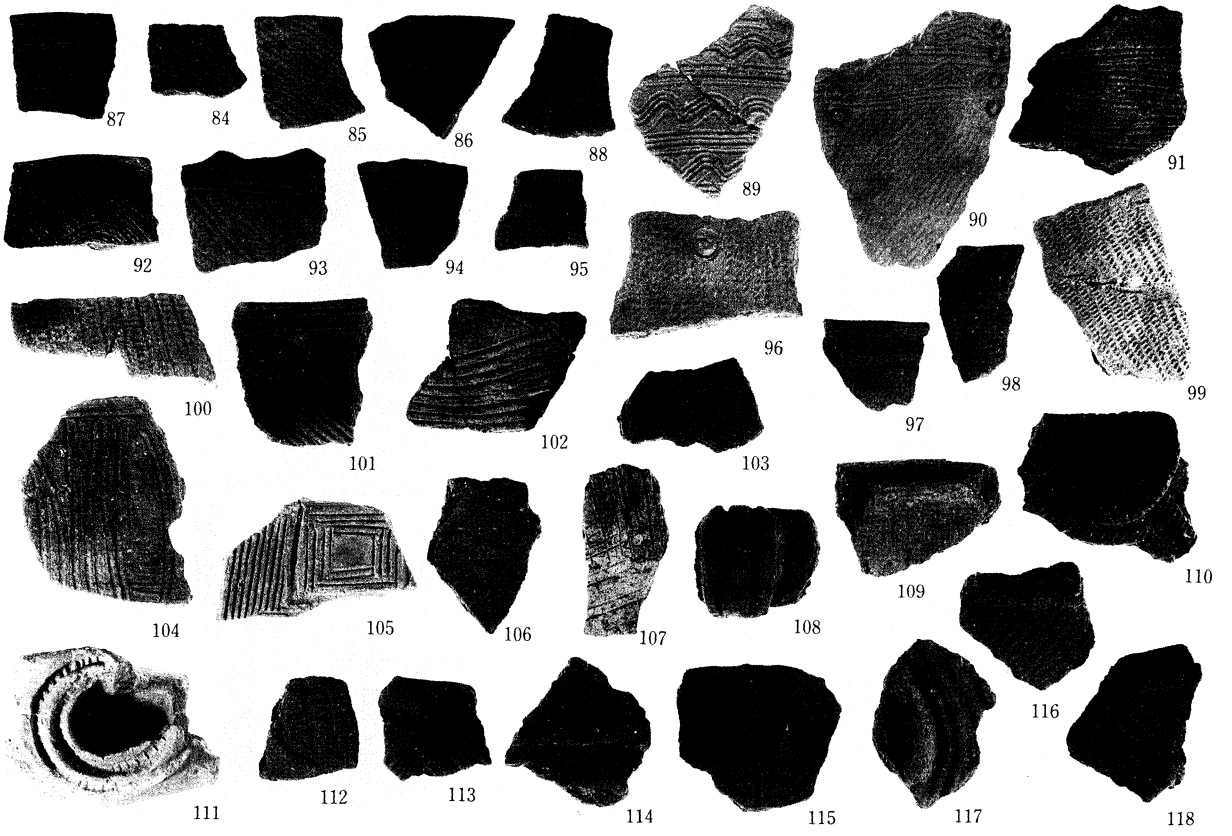


グリット出土土器

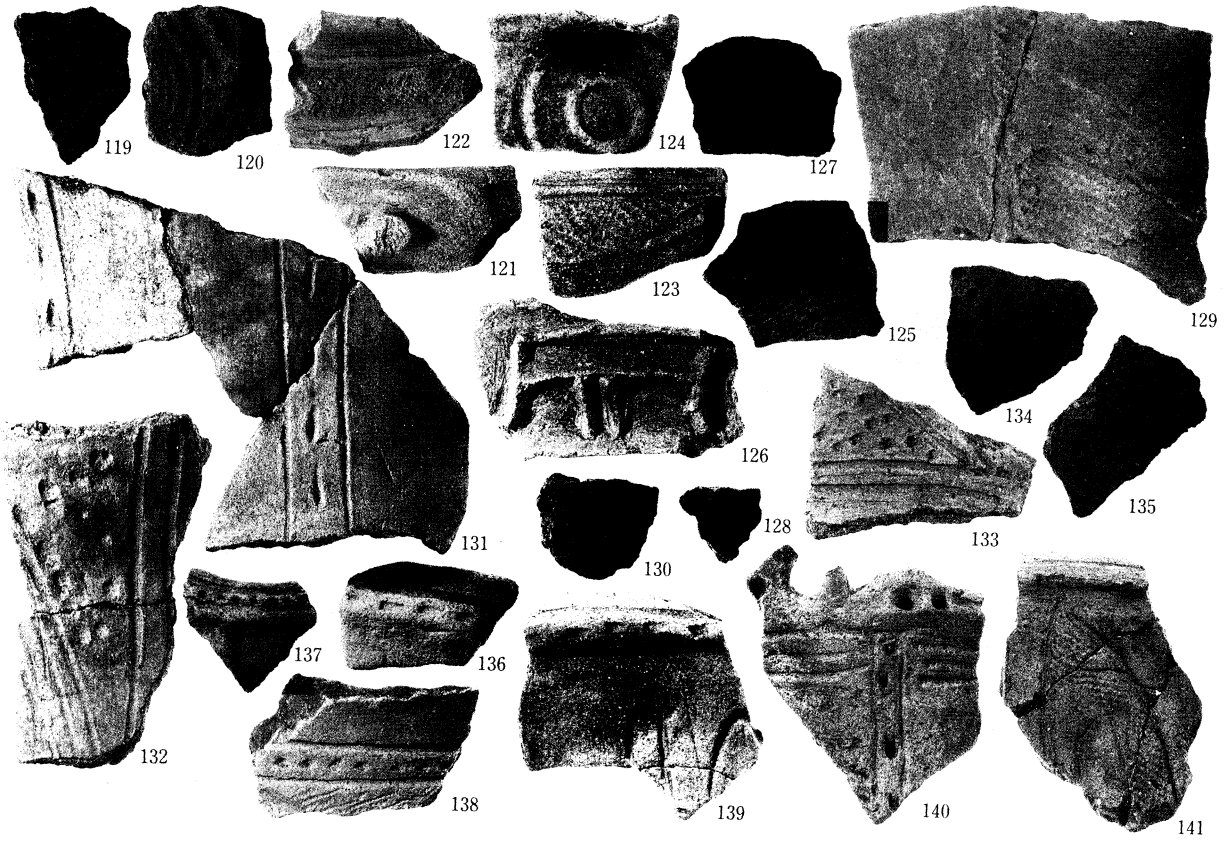
図版78



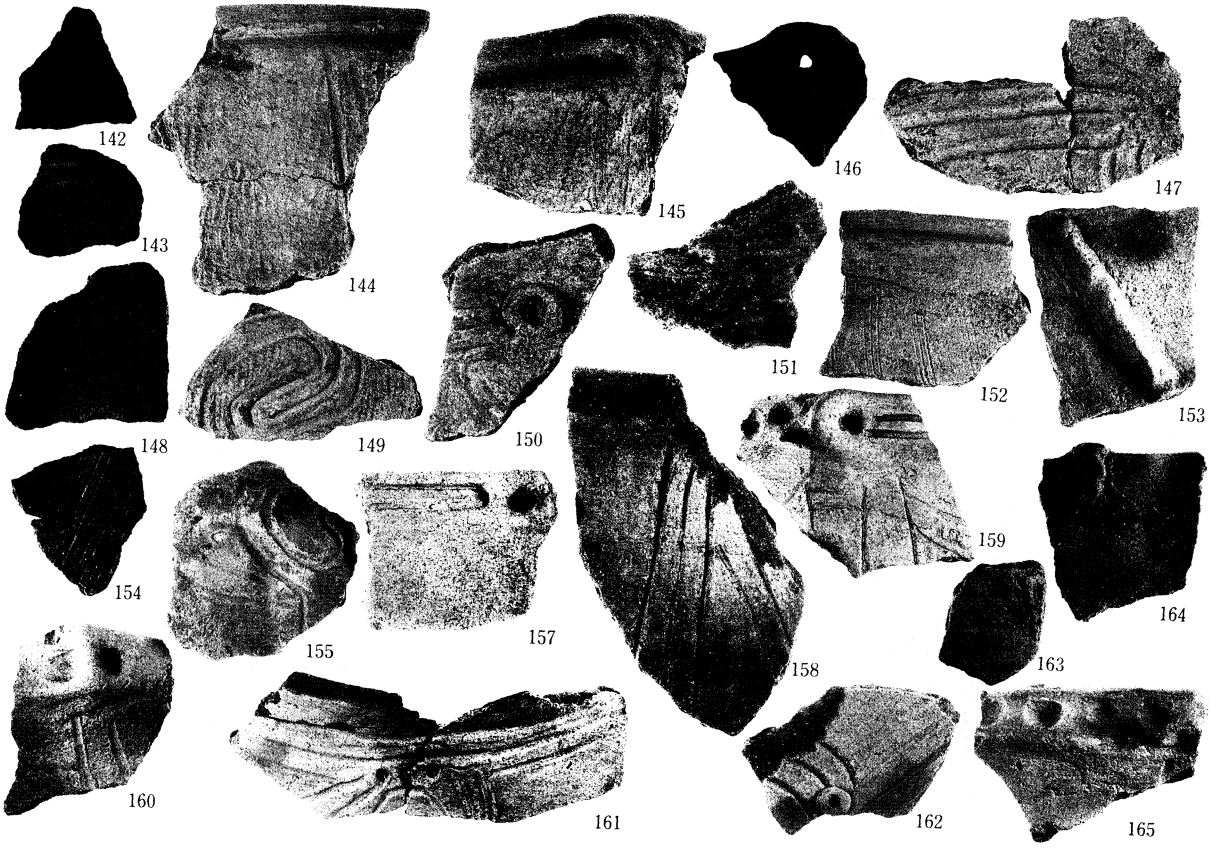
グリット出土土器



グリット出土土器

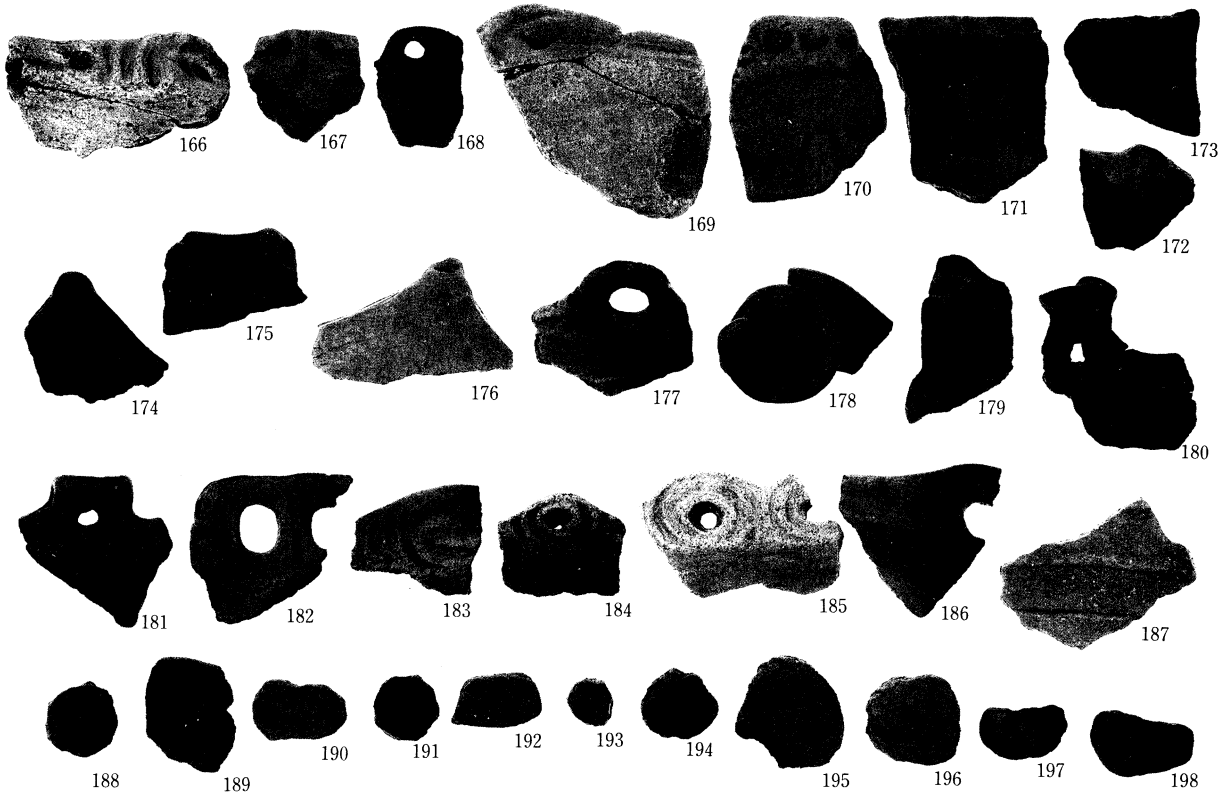


グリット出土土器

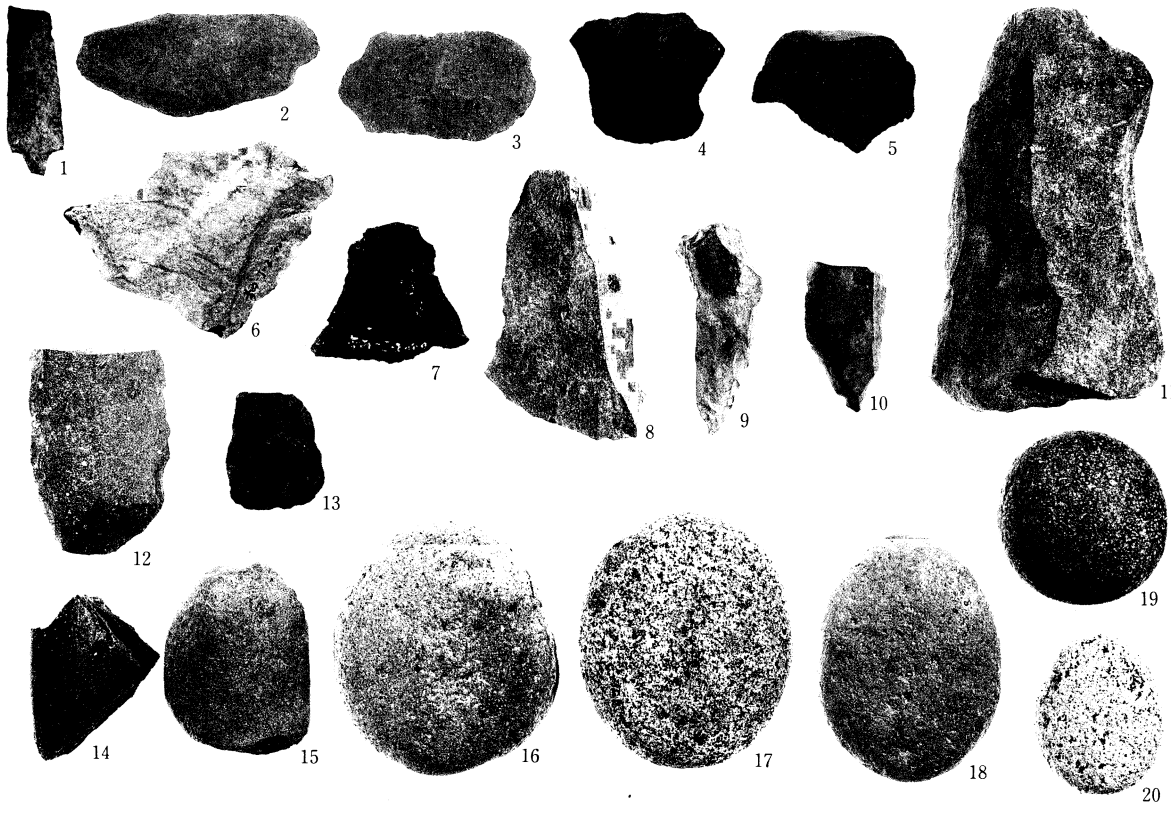


グリット出土土器

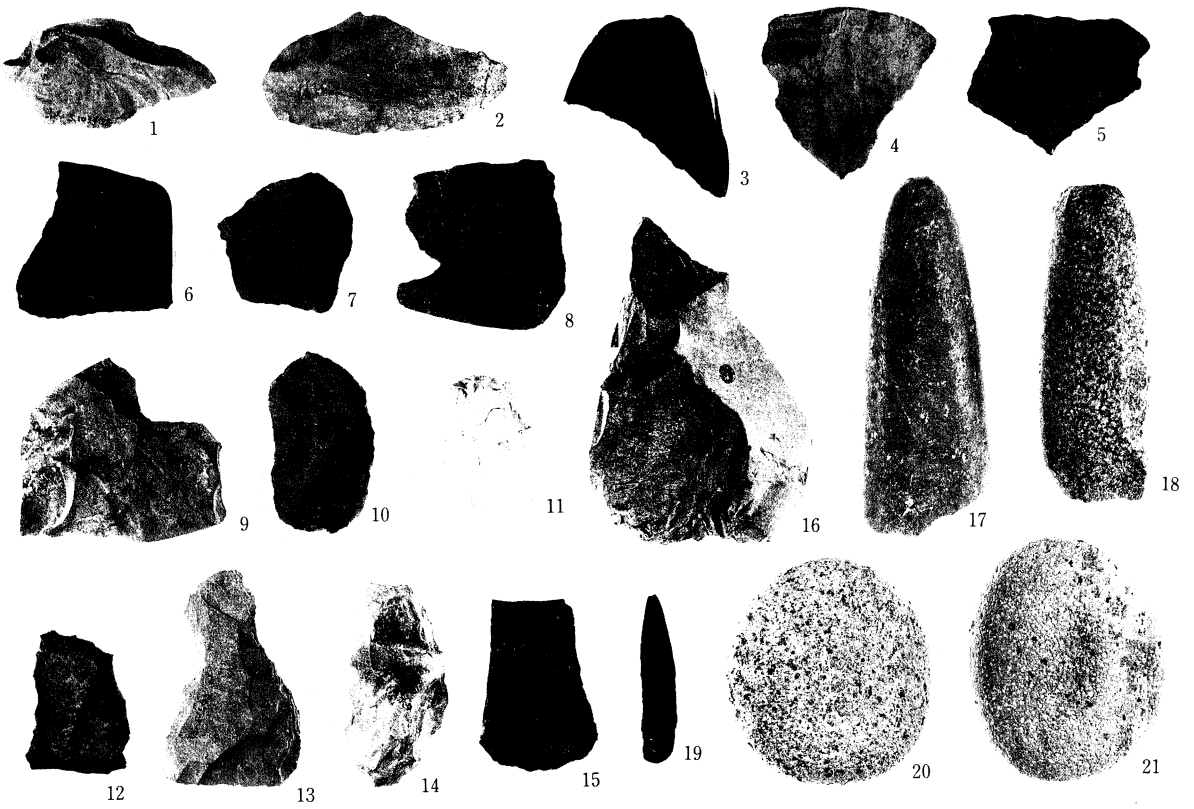
図版80



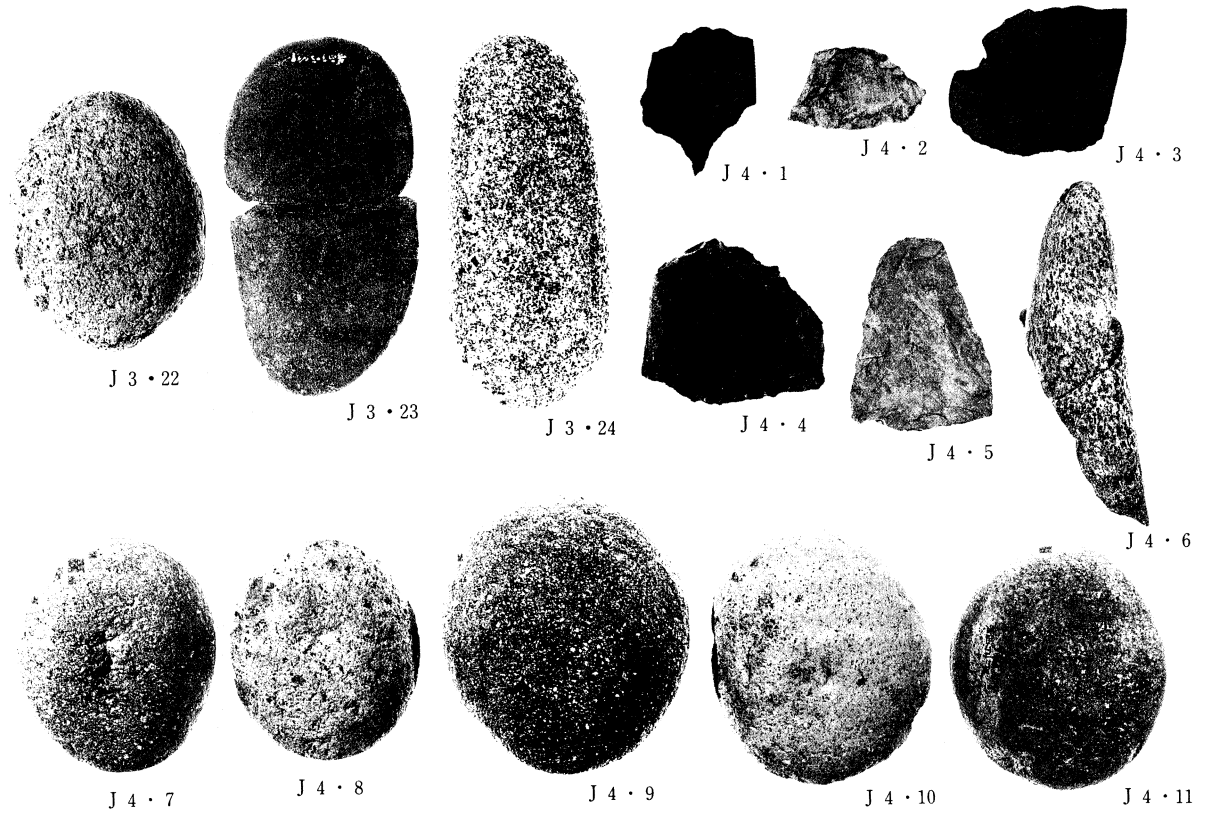
グリット出土土器



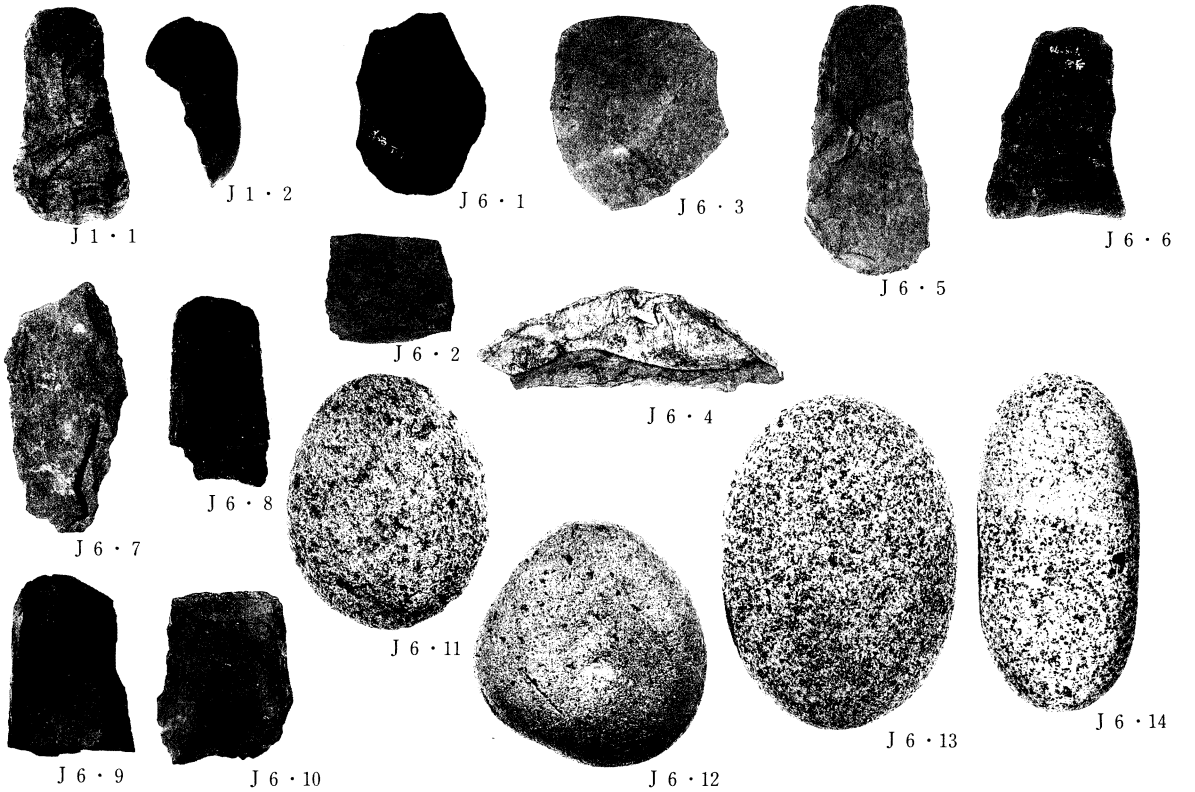
J 3号住居跡出土土器



J 3 号住居跡出土土器

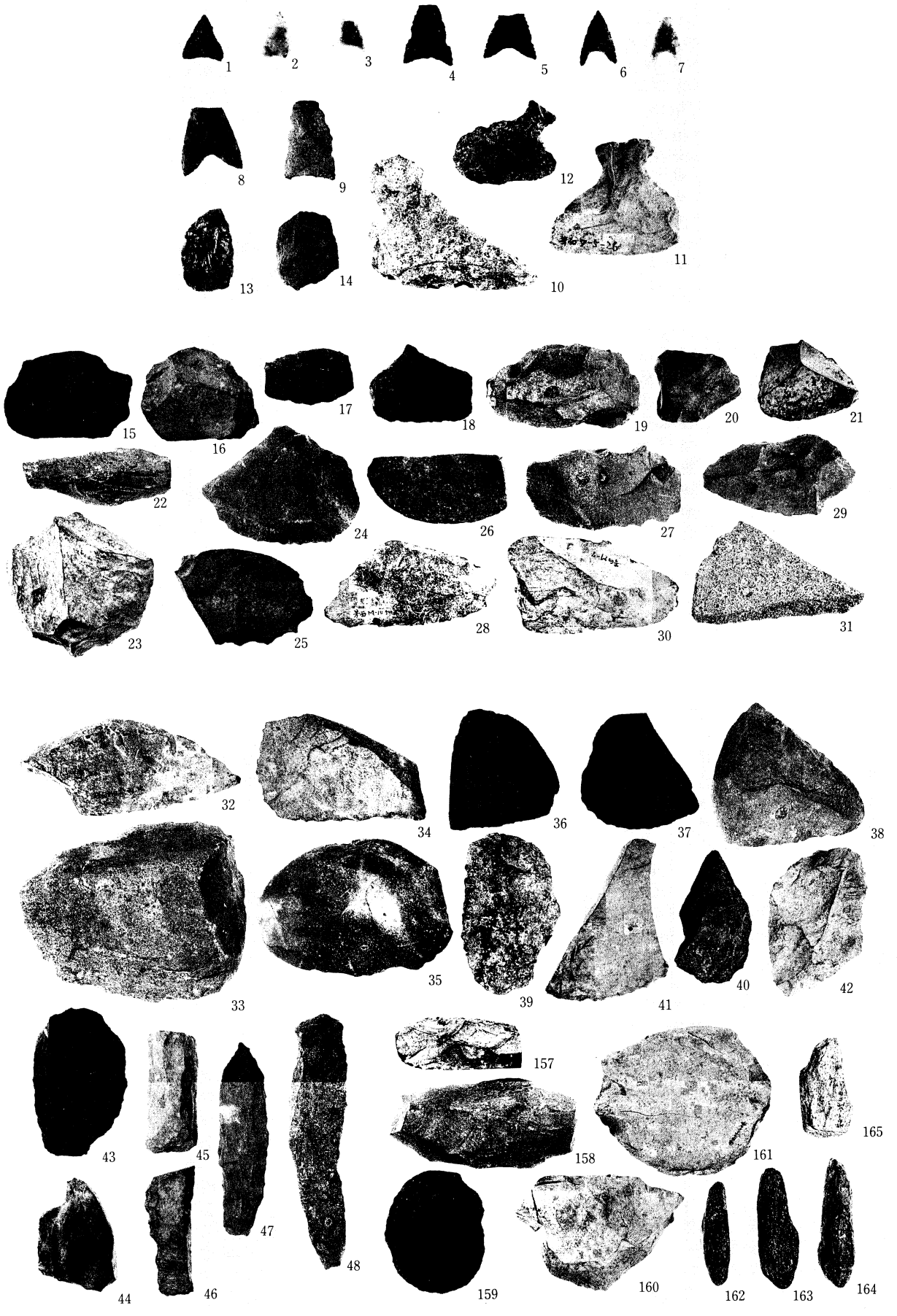


J 3・4 号住居跡出土石器



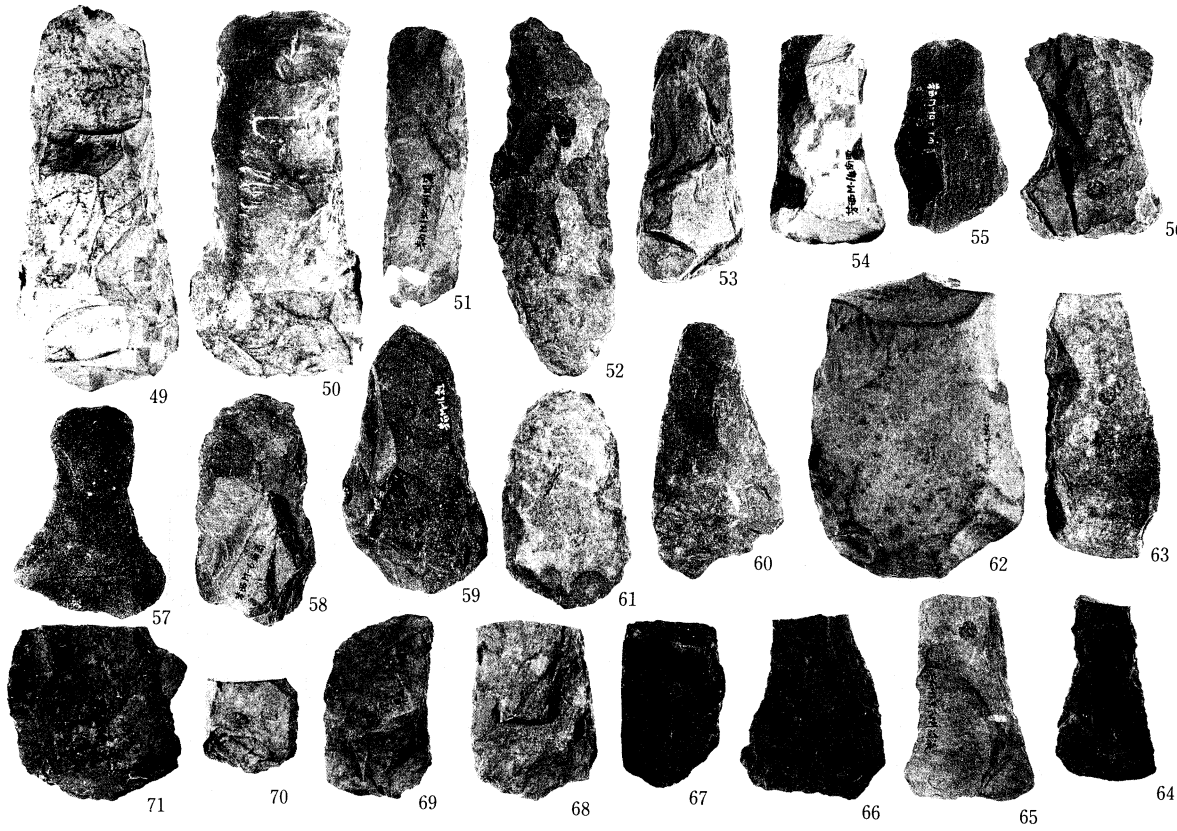
J 1・6 号住居跡出土石器

J 1・5・7 号住居跡出土石器

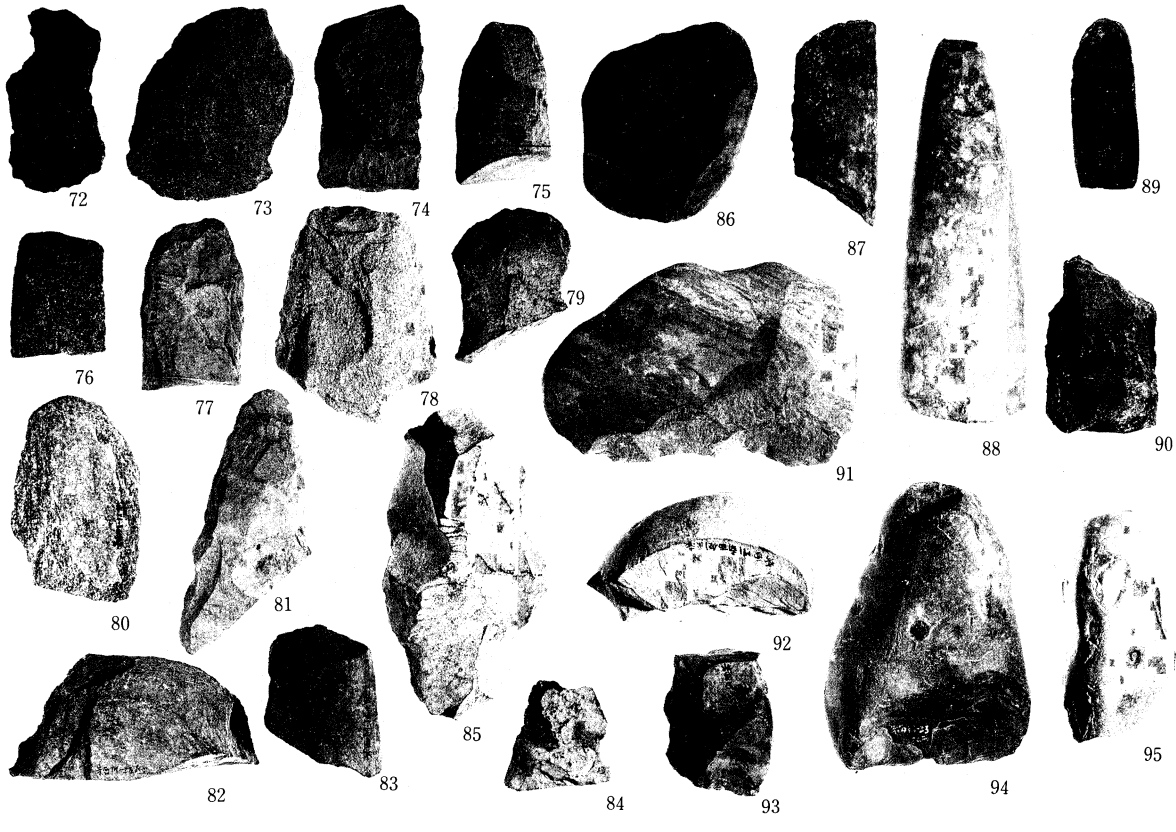

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
157
158
159
160
161
162
163
164
165

グリット出土土器

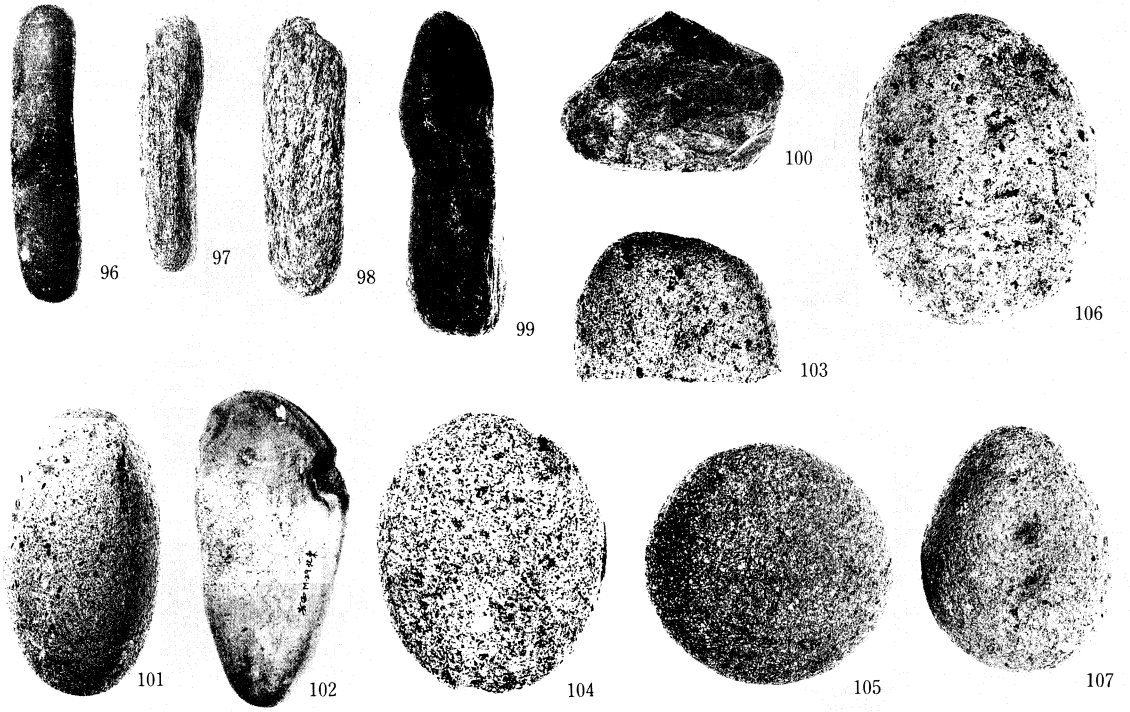
図版84



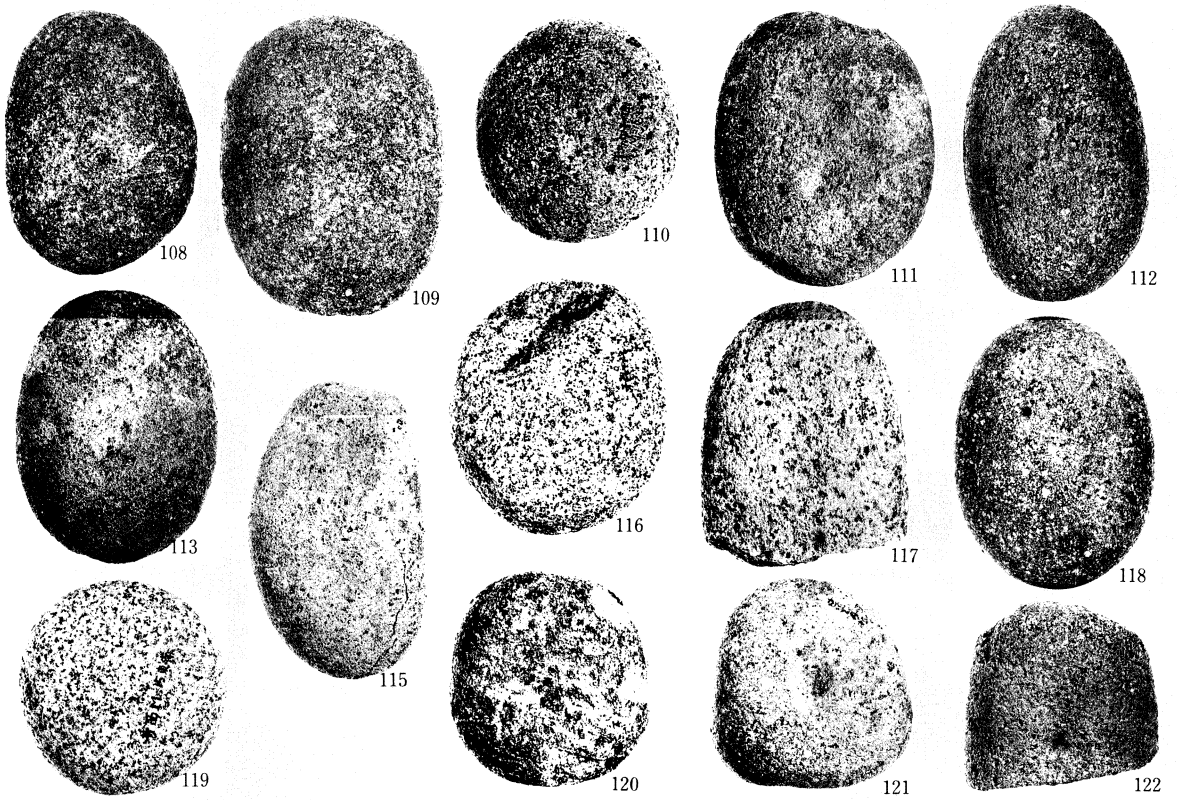
グリット出土土器



グリット出土土器

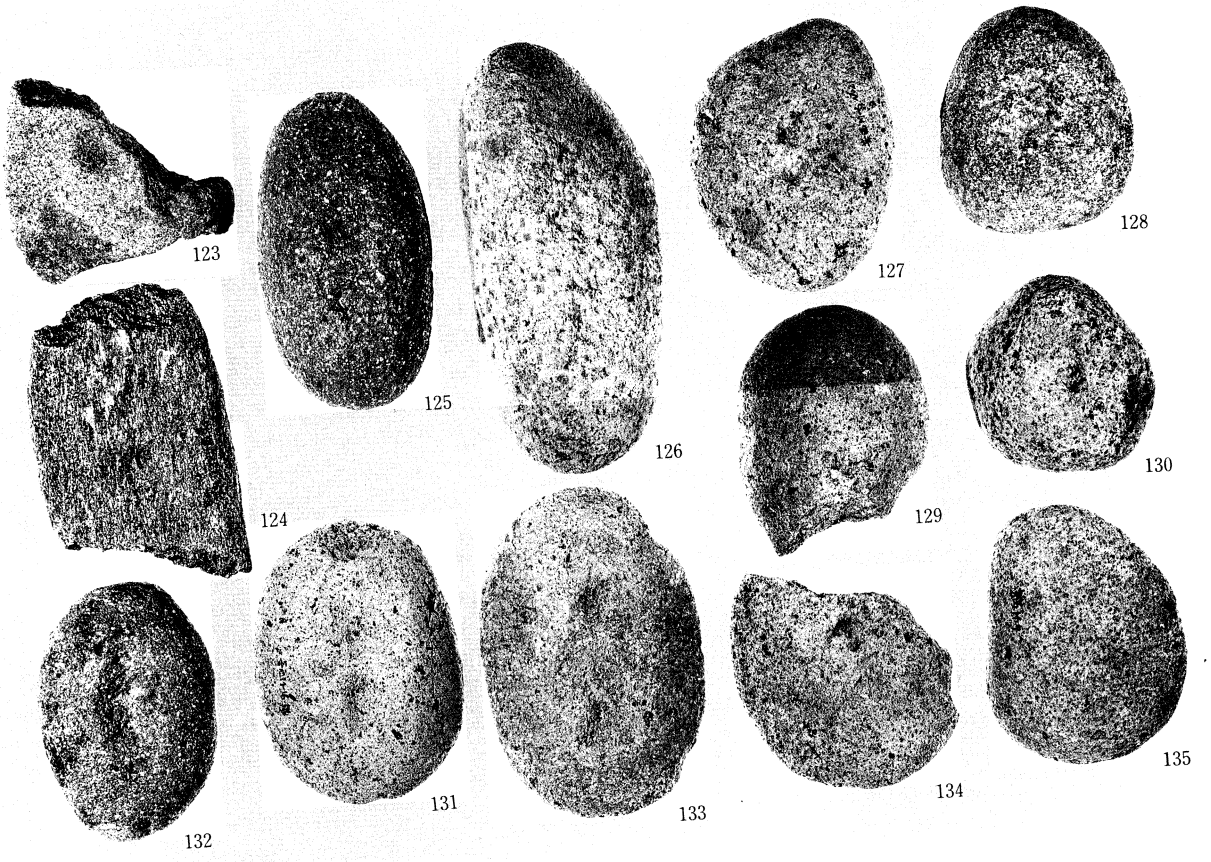


グリット出土土器

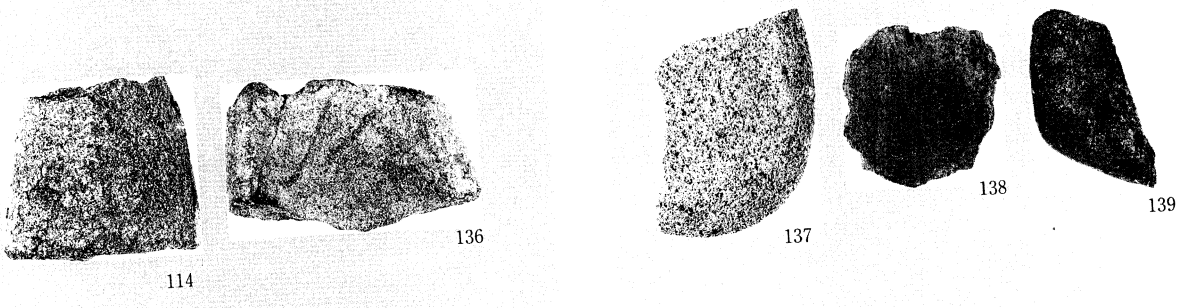


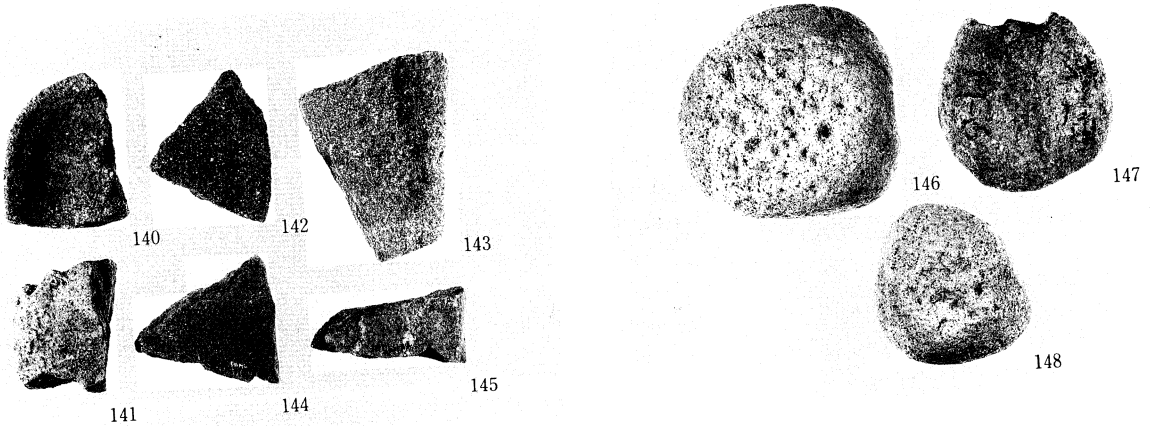
グリット出土土器

図版86

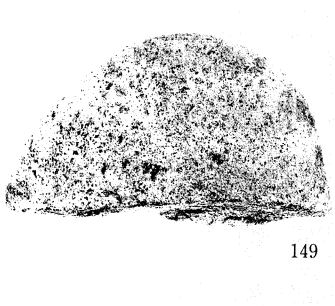


グリット出土土器



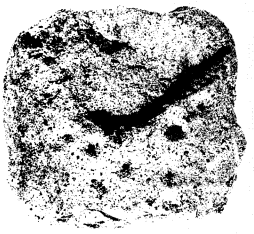


グリット出土土器

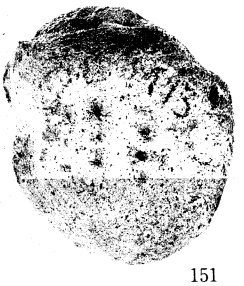


149

152

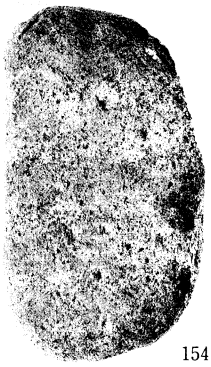


150

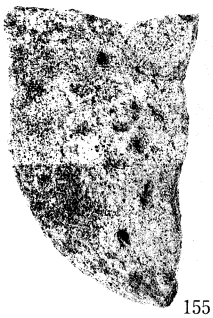


151

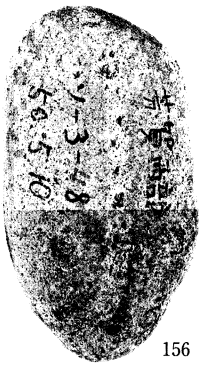
153



154



155



156

中近世遺物(陶器・板碑・煙管)

芳賀西部団地遺跡抄録

書　　名　芳賀団地遺跡群　第４巻　（ハガダンチイセキグン）
副 書 名　芳賀西部団地遺跡　（ハガセイブダンチイセキ）
編 集 者　芳賀団地遺跡調査報告書編集委員会
（松島栄治・松本浩一・相沢貞順・川合功・中村富夫・石川克博・浜田博一・富沢敏弘・飯塚誠・田口正美）
執 筆 者　相沢貞順・飯塚誠・田口正美・大西雅広・前原豊・井野誠一・綿貫綾子
事 務 局　福田紀雄・遠藤和夫・前原豊・新保一美・井野誠一（担当者）・綿貫綾子（調査員）
編集機関　前橋市教育委員会（芳賀団地調査報告書編集委員会）
所 在 地　前橋市上泉町664－４（前橋市教育委員会文化財保護課）
発 行 年　西暦1991年３月20日
所収遺跡　芳賀西部団地遺跡（ハガセイブダンチイセキ）
所 在 地　前橋市鳥取町171他、小神明町740他、五代町９他。
コ ー ド　10201
調査期間　19740508～19740731、19740908～19741224
調査面積　9.5ha
調査原因　工業団地造成
調査面積　20.2ha
調査担当者　芳賀西部工業団地遺跡発掘調査団（団長　尾崎喜左雄・担当者　尾崎喜左雄・相沢貞順・川合功・調査員　松島栄治・中村富夫・石川克博・江原清）
遺構及び遺物　縄文時代　竪穴住居（前期）７、ピット８、配石遺構２、古墳時代、古墳31（５世紀後半～６世紀初頭）、埴輪棺１、中近世、土坑27。
縄文時代　土器（有尾式）、石器
古墳時代　埴輪、土師器（鬼高式）
中・近世　陶磁器片

芳賀団地遺跡群第４巻

芳賀西部団地遺跡

印刷　平成３年３月26日
発行　平成３年３月31日

発　行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番１号

印　刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67